文部科学省検定済教科書
高等学校国語科用
117 明治 | 文国 707

精選 文学国語

明治書院



夏目漱石・森鷗外・樋口一葉・梶井基次郎・中島敦 参考図録

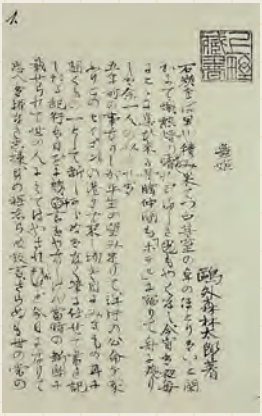
『舞姫』



『美奈和集』初版・表紙



『国民之友』初出・冒頭



『舞姫』原稿・冒頭

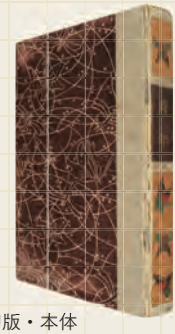
『みづの上日記』



一葉日記の数々



観潮楼の鷗外・幸田露伴・斎藤緑雨
（左から）　　明治 29（1896）年頃



『青年』初版・本体



『檸檬』初版・箱と本体

『檸檬（れもん）』



詩「秘（ひそ）やかな楽しみ」（『檸檬』の原型）
（大妻女子大学総合情報センター図書館所蔵）



『瀬山の話』原稿（「檸檬」の文字が見える）（実践女子大学所蔵）

『こころ』



『こゝろ』初版本・表紙（漱石自身の装丁）



『心』新聞連載第１回
（東京朝日新聞、
大正３（1914）年４月20日）



『心』原稿・冒頭



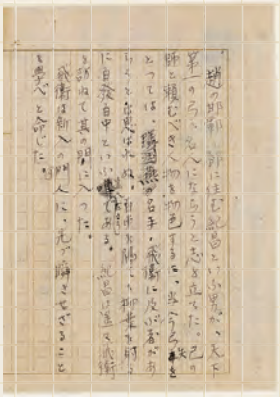
大正３（1914）年12月　自宅の書斎にて



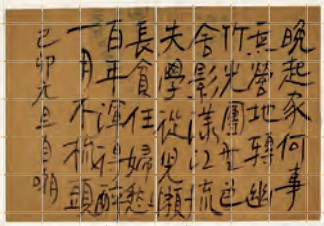
『山月記』



『弟子』原稿・冒頭



『名人伝』草稿・冒頭



自筆の書（杜甫（とほ）「屏跡（へいせき）」詩の一節）



押絵（の羽子板）
―『押絵と旅する男』―



凌雲閣（浅草十二階）―『押絵と旅する男』―
〈東京浅草凌雲閣真景（百五十分壱之図）・江戸東京博物館〉



ハルゲイサの市場（2009 年・高野秀行撮影）―『現場に来て初めてわかること』―

精選

文学国語

明治書院

目次

前編

1 小説入門

言葉によって（大江健三郎）……6
コラム 小説文の形式……11
悪童日記（アゴタ・クリストフ／堀茂樹訳）……12
山月記（中島敦）……20
文学の窓 小説とは何か（三島由紀夫）……32
◇単元の言語活動 1 ◆小説の方法を読む……35

2 詩歌入門

詩の自由を探る（藤井貞和）……36
秋の祈（高村光太郎）……40
雪（三好達治）……42
汚れつちまつた悲しみに……（中原中也）……43
崖（石垣りん）……45
文学の窓 詩的リズム——音数律に関するノート——（菅谷規矩雄）……47
◇単元の言語活動 2 ◆〈詩らしさ〉を探る……50

3 文学の境界を広げる

鞄（安部公房）……51
コラム 〈文学〉の領域を更新する……58
地球から来た男（星新一）……59
押絵と旅する男（江戸川乱歩）……69
マンガは哲学する（永井均）……90
文学の窓 映画の中の花（西川美和）……99
◇単元の言語活動 3 ◆さまざまなメディアに生息する〈文学〉を発見する……101

4 言葉の力

こころ（夏目漱石）……102
夏目漱石・芥川龍之介往復書簡……123
山東京伝（内田百閒）……129
「東京語」の表象の成立（イ・ヨンスク）……134
文学の窓 群れず集まる（田中和将）……141
◇単元の言語活動 4 ◆言葉には不思議な力があることを確かめる……144

5 伝統と革新

短歌の輪郭——現代にとって短歌とは何か——（小池光）……145
短歌十二首　釈迢空・山崎方代・塚本邦雄・馬場あき子
栗木京子・穂村弘……149
文学の窓『桐の花』の言葉（俵万智）……151
俳句十二句　村上鬼城・河東碧梧桐・尾崎放哉・原石鼎
杉田久女・芥川龍之介・高野素十・後藤夜半
川端茅舎・中村汀女・篠原鳳作・高屋窓秋……153
コラム 川柳の現在……155
◇単元の言語活動 5 ◆俳句を詠んでみる……156

6 戦争と記憶

現場に来て初めてわかること（高野秀行）……157
空缶（林京子）……166
野火（大岡昇平）……179
転移する記憶（岡真理）……186
◇単元の言語活動 6 ◆戦争という〈出来事〉を伝える……194

後編

1 都市と移動

本を読む（蜂飼耳）……195
コラム 本を読む楽しみ
檸檬（梶井基次郎）……199
文学の窓 陰翳礼讃（谷崎潤一郎）……200
下町（ダウン・タウン）（林芙美子）……210
歩道橋の魔術師（呉明益／天野健太郎訳）……214
都市は／を語る（石田英敬）……229
◇単元の言語活動 1 ◆暮らす、生きる、そしてそれを描く……244

2 自然を見る、自己を見る

流れる髪（永瀬清子）……251
羨望（伊東静雄）……252
独楽（高野喜久雄）……257
韜晦（多田智満子）……259
高度（小池昌代）……260

文学の窓 秋（ライナー・マリア・リルケ／茅野蕭々訳）……264
◇単元の言語活動 2 ◆自然と自己との関係を考える……265

3 文学と歴史
舞姫（森鷗外）……266
みづの上日記（樋口一葉）……291
文学の窓 日和下駄（永井荷風）……296
入れ札（菊池寛）……300
コラム 文学の歴史について再考する……313
物語と歴史のあいだ（野家啓一）……314
◇単元の言語活動 3 ◆なぜ名作は「名作」なのか……321

4 自他への配慮
巨人の接待（小川洋子）……322
はじめての沖縄（岸政彦）……339
アイデンティティ（藤野可織）……348
愛について（竹村和子）……359
コラム マイノリティと文学……364
◇単元の言語活動 4 ◆あなたはみんなと同じか、あなた自身と同じか……365

5 抒情の探究
短歌十四首 木下利玄・会津八一・岡井隆・河野裕子・福島泰樹・水原紫苑・斉藤斎藤……366
俳句の力学（岸本尚毅）……370
俳句十二句 高浜虚子・加藤楸邨・石田波郷・桂信子・森澄雄・飯田龍太・三橋敏雄・飯島晴子・高柳重信・池田澄子・正木ゆう子・田中裕明……374
文学の窓 底荷（上田三四二）……377
◇単元の言語活動 5 ◆自分で選んだアンソロジーを作る……379

6 近現代を問う
一瞬の共同性を生きる（星野智幸）……380
苦海浄土 ――もう一ぺん人間に――（石牟礼道子）……385
日本文化私観（坂口安吾）……397
現代日本の開化（夏目漱石）……405
◇単元の言語活動 6 ◆近現代の諸問題と対話する……415

付録
日本近・現代文学史年表……416
世界の文学はすばらしい―明日への読書のために―……428

この教科書で学習するに当たって

1 筆者名のないものは、編集委員が書き下ろしたものである。

2 漢字・仮名遣いの使用について

(1)漢字は、原則として「常用漢字表」及び「付表」による漢字を使用した。これによらない場合は、原則として教材ごとの初出の際に読み方を示した。

(2)仮名遣いは、文語文、および短歌・俳句については歴史的仮名遣いを原則としたが、これによらない場合は原典の表記によった。詩については原典の表記によった。

3 注の欄には、次の四種類を掲げた。

(1)注　本文に番号を付けて、主として固有名詞・外来語・難語句などについて解説した。

(2)読解上の注意点　本文読解上のポイントについて、本文に●印を付け、注欄に問を掲げて、注意を促すように配慮した。

(3)注意する語句　本文に＊印を付け、知っておきたい語句、慣用句・慣用表現などを掲げた。

(4)現代語訳　『舞姫』については、理解を助けるために、本文に❊を付けて、適宜、現代語訳を掲げた。

4 深い学びのために ◇**学習のポイント**「読むこと」の学習領域に関する問題を中心に、「書くこと」の学習領域に関する問題を随時加えた。◇**言葉と表現**　言葉の特徴や使い方に関する問題、語句や文法の知識の整理を中心とする問題、さまざまな表現の理解に関する問題などを掲げた。◇言語活動　各教材に関する実践的な活動を掲げた。

5 文学の窓 コラム　各教材で学習した内容の、より深い理解に役立つ文章や解説を掲げた。

6 ◇単元の言語活動　各教材を横断して、各単元のまとめとなる、実践的な活動を掲げた。

7 引用した箇所を示す場合、本文ページを漢数字で、行を算用数字で示した。(例)(一三・10)

1 小説入門

- 小説文の形式を知り、それを読み、書く意味を考える。
- 小説文を書いてみる。

言葉によって　大江健三郎
コラム　小説文の形式
悪童日記　アゴタ・クリストフ／堀茂樹訳
山月記　中島敦
文学の窓　小説とは何か（三島由紀夫）
単元の言語活動1

言葉によって

大江健三郎（おおえけんざぶろう）

初出　『言葉によって』昭和五十一（一九七六）年五月

作家は言葉によって人間を捉えようとします。人間という言葉を、なお三つにわけて考えましょう。一人の人間の存在、その行動、その想像力という三つの点において。そのときに言葉とは、これら三つを、ある人間の存在と行動と想像力の三つを一挙に照らし出す力を持つことが明瞭になるはずです。一つの言葉を発することによって、もしそれが本当に選びぬかれた言葉*であれば、われわれは自分の存在と行動と想像力をひとまとめに表現することができるので

す。作家は、まさにそのような言葉こそを求めている。そのような言葉によって、自分のつくり出した小説の人間の存在と行動と想像力そのものを現実化することを願って、言葉の仕事をしているのであります。もちろん作家の言葉も、個人的なものです。むしろ作家は自分という個人の中に深く潜り込むことによって初めて言葉を探し出しえます。しかも作家はその個人的な言葉が一個の人間の存在と行動と想像力をよく表現しえるとすれば、それはまた、彼の生きる時代の全体をも表現しうるかもしれない、という野望あるいは夢想を抱いて小説を書き続けているのであります。

ある言葉がその人間の存在と行動と想像力を十全*に表現しえたとき、その言葉は、あたかも一個の人間の肉体そのもののような重みを持ちます。例えばわれわれが自分の、そこにいない友人について、彼のことを知らぬ他人に向かって、どのようにして彼を実在させることができるか？　言葉によってしかありません。彼はこのような言葉を語ったと、あるいは自分が彼のために作り出す言葉はこのようなものだと言って、われわれは初めてそこにいない友人を他人に向けて実在させることができるのであります。

もちろん、個人の言葉が時代を予言すると考えることは危険な話です。ただ、個人によって発せられた言葉でありながら、しかもその時代全体を表現する言葉が、歴史を振り返ってみればしばしば見いだされるのです。これらの言葉は確かにあれらの時代の人々とその時代そのものを、また全ての時代を越えてその民族の文化そのものを表現していると感じさせる力を、潜

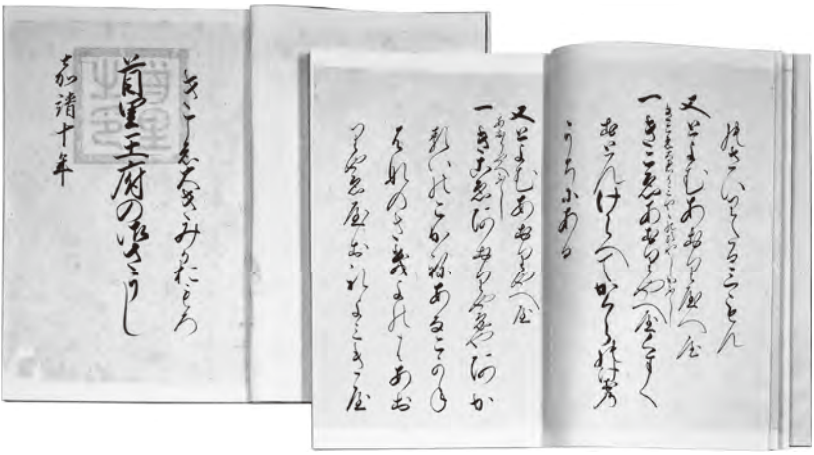
問「そのような言葉」とは、どのような言葉か。

問「危険な話」とあるが、なぜか。

＊明瞭　十全

めている言葉に出会います。

例えば『[1]おもろさうし』から発掘してきて、[2]外間守善氏がよく使われる言葉に「うりずん」があります。外間氏は「うりずん」という言葉を、まことにくっきりとよみがえらせられました。ものみなが枯れて乾いている冬の季節の終わりをつげて黒土が盛り上がってくる。その新しい季節の到来を表す言葉として、「うりずん」がある、と外間氏は言われ、自分にとって沖[3]縄戦というまことに激しい冬の季節の後、沖縄の若い人たちが反戦、平和の思想を抱くのは、それこそ「うりずん」の思想なのだと言われるのです。そのようにして「うりずん」という「おもろ」の時代の言葉を今日によみがえらせて、一挙に沖縄の人間の歴史を貫く存在を照らし出されているのであります。



『おもろさうし』

15　10　5

1『おもろさうし』　奄美・沖縄地方に伝わる古代歌謡「おもろ」を集大成したもの。

2外間守善　一九二四年～二〇一二年。言語学者・沖縄文化研究者。『おもろさうし』や琉歌など琉球文学・琉球文化研究の第一人者。

3沖縄戦　第二次世界大戦末期、沖縄本島およびその周辺で行われた日本軍とアメリカ軍の戦闘。昭和二十（一九四五）年四月のアメリカ軍の本島上陸から約三か月に渡る。激しい地上戦の中で、約十万人が犠牲となった。

私どもは自分の言葉をそのように民俗の古典の中から掘り起こすことができます。自分の個人の内部の暗がりから手探りして言葉を導き出しもします。われわれはそのようにして自分を歴史のうちに位置づけ、この現実世界に実現するのであります。それが言葉による表現です。言葉による表現と言っても、作家の仕事のみに限定されるのではありません。このように考えてみてください。自分にとって重要な存在だった人間が死んでしまった。その後、現実のさまざまな時点において、あの人間ならばこの状況に対してどういうだろうか、どういう言葉を発するだろうか、と考えてみざるをえなかった経験を思い起こしていただきたいのであります。

そのようにして、本当にその死んだ人間のものというべき言葉を、われわれが発見することができたとき、あの人間だったらこう言ったに違いないという言葉を発見しえたとき、われわれはこのように感じると思います。この言葉だと、あの人だったらこう言ったに違いない、あの人が生きていればこの言葉しかなかったと。そのときわれわれは、ほかならぬ彼の実在を感じとります。死んだ人間がよみがえってさえくるのを感じます。現に眼（め）の前の状況のうちに彼の存在と、行動と、想像力が生き生きとかかわってよみがえります。

われわれはその言葉の発見によって、その死者が言うであろう言葉の発見によって、その死者を、現実世界に向けてはっきり表現することができたのであります。それはまた、自分の一人に閉じた言葉によって生きているわれわれが、あの人ならばという形で、本当の他者を導入することができたということでもあるでしょう。

問「そのようにして」とは、どのようにすることか。



大江健三郎（おおえ けんざぶろう）　昭和十（一九三五）年～令和五（二〇二三）年。小説家。愛媛県の生まれ。大学在学中の昭和三十三（一九五八）年に『飼育』で芥川賞を受賞、平成六（一九九四）年にノーベル文学賞を受賞した。作品に『万延元年のフットボール』『同時代ゲーム』『燃えあがる緑の木』（小説）『ヒロシマ・ノート』（随筆）などがある。本文は『言葉によって』（昭和五十一（一九七六）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「作家は言葉によって人間を捉えようとします」（六・1）とは、具体的にどのようにすることか、本文に沿ってまとめてみよう。

2「われわれはそのようにして自分を歴史のうちに位置づけ、この現実世界に実現するのであります」（九・2～3）について、「うりずん」（八・3）を例にして、説明してみよう。

3「本当の他者を導入することができた」（九・16～17）とは、どういうことか、考えてみよう。

◇言葉と表現

1「想像力」（六・2）「現実化」（七・2）「個人的」（七・3）などの例に倣って、次の語が付く語を出し合ってみよう。

(1)□□力
(2)□□化
(3)□□的

2「…しえる」（七・5）「…しうる」（七・6）「…ざるをえなかった」（九・7）を使って、短文を作ってみよう。

3「この言葉しかなかった」（九・11）「ほかならぬ」（九・11）という表現がどのような効果を上げているか、考えてみよう。

◇言語活動

1「言葉によって」できることは何か、筆者の考えをもとにまとめてみよう。

2「言葉」と「文学」との関係や、「文学」を読むこと・書くことについて、どのようなイメージを持っているか、話し合ってみよう。

小説文の形式

小説文について、語り手がどのように語るのか、展開のつけ方はどうなっているのか、時間をどう進めているのか、要約的に書くのか詳細に書くのか、どのような視点から描くのか、内面を書くのか書かないのか、といった小説の「形」に着目すると、新たな発見があるだろう。

ストーリー・描写・説明

小説文には語り手がいて、何か特定の出来事を語る。出来事とは、時間的な展開があるものである。私たちは出来事を、因果関係の連鎖として意味づけしている。つまり、Aが起こったためにが起こり、Bが起こったためにCが起こるといったように、ストーリーを作り上げているのである。人物の行動を表す文や、「電話が鳴った」のような文では、物語世界内の時間が展開する。これらが、小説文の核を形成する。一方、状況や人物の描写・説明は大きく時間を展開させることはないが、主に、小説の雰囲気を形作る。

叙述の速度

出来事の叙述には速度がある。一年間の出来事を数行に要約して語ることもできるし、数分の出来事を詳細に何ページにもわたって描くこともできる。詳細に語られる場合は、人物のセリフや対話も多く表出され、臨場感をもって語られることが多い。

視点と内面

小説文は誰かの視点から語られる。例えば『悪童日記』では、「ぼくら」の視点から物語られている。

内面や感情が語られることも小説文の特徴である。誰の内的思考や感情を語るのか、あるいは語らないのかも重要である。『悪童日記』では、内面は描かず、外側から観察できることのみが語られている。

小説文は物語の一種であるが、物語は小説や映画だけでなく、歴史の叙述や報道、SNSなどにも遍在している。そうした文章においても、出来事が因果関係の連鎖として語られているし、特定の人物がどこかで一度きりの何かをし、せりふを話し、何らかの視点から叙述される。

私たちの現実認識の仕方は物語的であり、また物語を通じて現実を認識しているのである。

悪童日記

アゴタ・クリストフ
堀茂樹訳

おばあちゃんの家に到着する

ぼくらは、〈1大きな町〉からやって来た。一晩中、旅してきた。おかあさんは、眼を赤く腫れ上がらせている。おかあさんは大きなボール紙の箱を抱えている。ぼくら二人は、衣類を詰めた小さな旅行カバンを一個ずつ提げ、さらに、おとうさんの大きな辞典をかわるがわる抱えている。腕がだるくなると交替するのだ。

長い間、ぼくらは歩く。おばあちゃんの家は、駅から遠い。〈2小さな町〉の、駅と反対側の端にあるのだ。この町には、路面電車も、バスも、自動車もない。道を行き交っているのは、幾台かの軍用トラックだけだ。

人影がまばらで、町は静まりかえっている。ぼくらの足音が聞こえるほどだ。黙々と歩く。おかあさんを真ん中にして、ぼくら二人がその両脇を歩く。

おばあちゃんの家の庭木戸の前で、おかあさんが言う。

「ここで待っていなさいね」

ぼくらは少しの間、待つ。それから庭に入る。家のまわりをぐるっと回る。話し声の漏れてくる窓の下にしゃがむ。おかあさんの声が聞こえる。

「うちにはもう食べ物がないの。パンも、肉も、野菜も、ミルクもすっかり尽きてしまって、何一つないの。もう子供たちに食べさせてやれないんです」

別の声が聞こえる。

「なるほどそれで、わしのことを思い出したってわけかい。十年もの間、忘れていたくせに。訪ねても来なけりゃ、便り一つ寄こさなかったくせに」

おかあさんが言う。

「私が連絡しなかったわけは、よくご存じのはずだわ。おとうさんのこと、私は慕っていたのよ」

もう一人が言う。

「ふむ……で今になってやっと、おまえには母親もいたことを思い出したのかい。突然やって来て、助けてくれ、とは

呆れたもんだわ」

おかあさんが言う。

「私、自分のことは何もお願いしません。ただ、子供たちにはこの戦争[3]を越えて生き延びてほしいって、それだけを思うの。〈大きな町〉は昼も夜も爆撃を受けて、それでもう食糧がなくなってしまったわ。町の子供たちは、どんどん疎開させられているの。親戚のもとでも、見ず知らずの人のもとでも、もうどこでもいいからという調子なの」

「おまえも、子供はどこへでも、それこそ見ず知らずの連中のところへでもやればいいじゃないか」

「だって、おかあさんの孫なのよ」

「わしの孫だって？　会ったこともないよ、わしは……。で、何人いるんじゃ？」

「二人。男の子二人よ。双子なの」

もう一人が問う。

「おまえ、ほかの子はどうしたんだい？」

おかあさんが問い返す。

「ほかの子って、どういうこと？」

「牝犬は一度に四、五匹、産み落とすのが普通だよ。一、二匹は生かしてやって、残りは水に溺れさせるもんじゃ」

そう言って、甲高く笑う声が聞こえる。おかあさんは何も言わない。また、おかあさんに問いかける声がする。

「その子らに、少なくとも父親はいるんだろうね？　おまえ、わしの知る限りでは、結婚していないはずじゃな。おまえの結婚式に招かれた覚えはないからね」

「私、結婚したんです。子供たちの父親は前線に行っているの。便りが途絶えてもう六か月になるけれど」

「ふむ、そんならもう諦めたほうがいいよ」

そう言い放った声は、再び笑い声となる。おかあさんのほうは泣いている。ぼくらは、庭木戸の前に戻る。

1〈大きな町〉　訳者によると、著者の生まれた国であるハンガリーの中心地ブダペストを念頭において設定された町。

2〈小さな町〉　訳者が著者から直接聞いた話によれば、ハンガリーのオーストリア国境近くに実在するクーセグという田舎町がモデルとなっている。

3 この戦争　一九三九年、ドイツによるポーランド侵攻に始まる第二次世界大戦が想起される。

問「おとうさんの大きな辞典をかわるがわる抱えている」という描写から、「おとうさん」について、どのようなことがわかるか。

問「うちにはもう…」以下、「おかあさん」と「おばあちゃん」の会話から、十年前にどんなことがあったと想像されるか。

おかあさんが、ひとりのおばあさんといっしょに家から出てくる。

おかあさんが、ぼくらに言う。

「ほら、あなたたちのおばあちゃんよ。戦争が終わるまで、しばらくの間、二人ともおばあちゃんのお家で暮らすのよ」

おばあちゃんが言う。

「戦争は長引くかもしれないよ。それでも心配はいらん、わしはこの子たちに働いてもらうからね。ここでだって、食糧は無料というわけじゃないのさ」

「お金は私のほうから送ります。ほら、この二つのカバンの中に、この子たちの衣類が入っています。それから、この箱の中は敷布と毛布なんです。私のかわいいおちびさんたち、よい子でいなさいね。手紙を書きますからね」

おかあさんは、ぼくらを抱き寄せて接吻する。そして、泣き顔で去っていく。

おばあちゃんは高らかに笑い、ぼくらに言う。

「敷布に毛布じゃと！　真っ白いシャツに磨き上げた靴じゃと！　わしゃ、これからおまえたちに、生きるっていうのはどういうことか教えてやるわい！」

ぼくらはおばあちゃんに、べろを出して見せる。すると彼女は、自分の腿を叩いて、いっそう高らかに笑う。

ぼくらの学習

ぼくらの学習教材は、おとうさんの辞典と、このおばあちゃんの家の屋根裏部屋で見つけた聖書だ。

教科として、正書法、作文、読本、暗算、算数、記憶の練習がある。

辞典を使って、単語の綴りを覚えたり、意味を理解したりすることはもちろん、知らない単語や、同意語、反意語も学ぶ。

聖書は、朗読や、書き取りや、記憶の練習をするのに役立つ。そこでぼくらは、聖書のたくさんのページをそらんじることができるほどに憶えてしまう。

作文の演習は次の要領で行う。

ぼくらは下書き用紙と鉛筆と〈大きなノート〉[4]を用意し、台所のテーブルに向かって座っている。ぼくらのほかには、誰もいない。

ぼくらのうちの一人が言う。

「君は、『おばあちゃんの家に到着する』という題で作文したまえ」

もう一人が言う。

「君は、『ぼくらの労働』という題で作文したまえ」

ぼくらは書き始める。一つの主題を扱うのに、持ち時間は二時間で、用紙は二枚使える。

二時間後、ぼくらは用紙を交換し、辞典を参照して互いに相手の綴り字の誤りを正し、ページの下の余白に、「良」または「不可」と記す。「不可」ならその作文は火に投じ、次回の演習で再び同じ主題に挑戦する。「良」なら、その作文を〈大きなノート〉に清書する。

「良」か「不可」かを判定する基準として、ぼくらには、極めて単純なルールがある。作文の内容は真実でなければならない、というルールだ。ぼくらが記述するのは、あるがままの事物、ぼくらが見たこと、ぼくらが聞いたこと、ぼくらが実行したこと、でなければならない。

たとえば、「おばあちゃんは魔女に似ている。」と書くことは禁じられている。しかし、「人々はおばあちゃんを〈魔女〉と呼ぶ」と書くことは許されている。

「〈小さな町〉は美しい」と書くことは禁じられている。なぜなら、〈小さな町〉は、ぼくらの目に美しく映り、それでいてほかの誰かの目には醜く映るのかもしれないから。

同じように、もしぼくらが「従卒[5]は親切だ」と書けば、それは一個の真実ではない。というのは、もしかすると従卒に、ぼくらの知らない意地悪な面があるのかもしれないからだ。だから、ぼくらは単に、「従卒はぼくらに毛布をくれる」と書く。

ぼくらは、「ぼくらはクルミの実をたくさん食べる」とは書くだろうが、「ぼくらはクルミの実が好きだ」とは書くまい。「好き」という語は精確さと客観性に欠けていて、確かな語ではないからだ。「クルミの実が好きだ」という場合と、「おかあさんが好きだ」という場合では、「好き」の意味が異なる。前者の句では、口の中に広がるおいしさを「好き」と言っているのに対し、後者の句では、「好き」は、一つの感情を指している。

感情を定義する言葉は非常に漠然*としている。その種の言葉の使用は避け、物象や人間や自分自身の描写、つまり事実

4〈大きなノート〉『悪童日記』の原題は、フランス語で「大きなノート」の意味である“Le grand cahier”である。

5従卒　将校の身の回りの世話をする兵士。

問「お金は私のほうから…書きますからね」「敷布に毛布じゃと！…教えてやるわい！」から、「おかあさん」と「おばあちゃん」のどのような暮らしぶりが分かるか。

＊綴り　そらんじる　漠然

の忠実な描写だけにとどめたほうがよい。

おかあさん

その軍用ジープが家の前に急停車したとき、ぼくらは庭にいた。ジープから、ぼくらのおかあさんが降り、続いて、ひとりの外国人の将校[6]が降りる。彼らは、ほとんど走るようにして庭を横切る。おかあさんは胸に赤ん坊を抱いている。彼女がぼくらの姿を認め、叫ぶ。

「いらっしゃい！　急いでジープにお乗りなさい。ここを発(た)つのよ。急いでちょうだい。持ち物に構っていないで、すぐいらっしゃい！」

ぼくらは問う。

「誰の子なの、その赤ちゃん？」

彼女が言う。

「あなたたちの妹よ。早く来なさい！　一刻も無駄にできないのよ」

ぼくらは問う。

「どこへ行くの？」

「隣[7]の国よ。さあ、ぐずぐず質問していないで、すぐ来なさい！」

ぼくらは言う。

「ぼくら、行きたくないよ。ここに残りたい」

おかあさんが言う。

「おかあさんはね、どうしても行かなきゃならないの。だからあなたたちも、いっしょに来るのよ」

「嫌だ。ぼくら、ここに残る」

おばあちゃんが、家から出てくる。彼女が、おかあさんに声を掛ける。

「おまえ、そんな所で何をしているんだい？　そこに抱いているのは、何なんだい？」

おかあさんが言う。

「息子たちを連れに来たんです。あとでお金を送りますわ、おかあさん」

おばあちゃんが言う。

「おまえのお金なんか、欲しくないわい。その代わり、子供たちは返さないよ」

おかあさんが将校に、ぼくらを力ずくで連れて行くよう頼む。ぼくらはすばやく、ロープで屋根裏部屋によじ登る。将校がぼくらを捕まえようと追って来るが、ぼくらは、彼の顔を上からこっぴどく*足蹴(あしげ)にする。将校は悪態をつく。ぼくらは、垂れているロープを*引き上げてしまう。

おばあちゃんが嘲笑(あざわら)う。
「ほら見たことか、その子たち、おまえといっしょになんか行きたくないんだよ」
おかあさんが、声を張り上げる。
「おかあさんの命令よ、すぐに降りていらっしゃい！」
おばあちゃんが言う。
「その子たち、命令なんぞにゃ絶対に従わないよ」
おかあさんは泣き出す。
「いっしょに来てちょうだい、私の大切な子供たち。おかあさん、あなたたちを残しては出発できないわ」
おばあちゃんが言う。
「外人の私生児だけじゃ足りないのかい？」
ぼくらが言う。
「ぼくら、ここで気持ちよく暮らしているんだ、おかあさん。安心して出発して。ぼくら、おばあちゃんの家で、とても居心地よく暮らしているんだから」

大砲の音や機関銃の発射音が聞こえる。将校が、ぼくらのおかあさんの肩を抱き、彼女を車のほうへ促す。が、おかあさんは身を引き剝がす。
「私の子供たちなのよ。手放したくないわ！　愛しているんだもの！」
おばあちゃんが言う。
「その子たちがいてくれないと、こっちが困るんだよ。わしは年寄りじゃ。おまえなら、まだほかにも子供をつくれるじゃないか。おまえの抱いているその子が証拠じゃ！」
おかあさんが言う。
「お願いします、子供たちを引き留めないでください」
おばあちゃんが言う。
「わしゃ、引き留めちゃいないよ。それ、おまえたち、すぐに降りてきて、かあちゃんといっしょにお行き」
ぼくらは言う。
「ぼくら、よそへは行きたくない。おばあちゃんといっ

6 **将校**　陸海空軍の少尉以上の武官。
7 **隣の国**　第二次世界大戦当時のドイツの一地方であったオーストリアと考えられる。ドイツは第二次世界大戦でハンガリーをドイツと同じ枢軸国側に組み入れていた。

＊ 足蹴にする　悪態をつく

問 **「おかあさん」は「ぼくら」と別れた後、どうしていたのか。**

しょにここに残りたいんだ」

将校がぼくらのおかあさんを両腕で抱きかかえるが、しかし彼女は、彼を押しのける。将校はジープに乗り込んで席に着き、エンジンをかける。ちょうどこの瞬間、庭で爆発が起こった。その直後、おかあさんの地面に倒れている姿が、ぼくらの目に入った。将校が、彼女のほうに走り寄る。おばあちゃんは、ぼくらを遠ざけようとして、怒鳴(どな)る。

「見ちゃならん！　家の中にお入り！」

将校が罵声を発し、ジープに駆け込み、凄(すさ)まじい勢いで発進する。

ぼくらは、おかあさんをまじまじと見る。腸が、おなかから飛び出している。体中、真っ赤だ。赤ん坊も同じだ。おかあさんの頭が、砲弾の空けた穴の中に垂れ下がっている。彼女の両眼は開いたままで、まだ涙に潤んでいる。

おばあちゃんが言う。

「8鋤(すき)を取っておいで！」

ぼくらは、穴の奥に毛布を敷く。その上におかあさんを寝かせる。赤ん坊は、彼女の胸にくっついたままだ。もう一枚の毛布で、彼女たちをすっかり覆う。それから、穴を埋める。

従姉(いとこ)が町から帰ってきて、訊(たず)ねる。

「何かあったの？」

ぼくらは言う。

●「うん、砲弾が落ちてね、庭に穴が空いたんだ」

（全62章のうち1・12・51番目の章を収録した）

8 鋤　土地を掘り起こすときなどに用いる農具。普通は、幅の広い刃にまっすぐな柄を付けた形をしている。

問「うん、砲弾が落ちてね、庭に穴が空いたんだ」から、どのようなことが読み取れるか。



アゴタ・クリストフ　Agota Kristof　一九三五年～二〇一一年。小説家。ハンガリーの生まれ。一九五六年、ハンガリー動乱の際に亡命し、スイスに移住した。一九八六年、『悪童日記』でデビュー。母語ではないフランス語で執筆した。ほかに長編小説『ふたりの証拠』『昨日』などがある。本文は『悪童日記』（平成十三（二〇〇一）年刊）によった。（訳者）**堀　茂樹**（ほり　しげき）　昭和二十七（一九五二）年～。フランス文学者・翻訳家。訳書にクリストフ『ふたりの証拠』『第三の嘘』など。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「おばあちゃんの家に到着する」（一二・上4～一四・上21）から、「おかあさん」の描写を抜き出し、そこからどのようなことが読み取れるか、考えてみよう。

2「ぼくらの学習」（一四・下4～一六・上1）には、この小説文の特徴が示されている。それはどのようなものか、自分の言葉でまとめてみよう。

3「おかあさん」（一六・上5～一八・下11）では、どのような出来事が語られているか、要約してみよう。

4 この小説では感情が描かれていない。そのことはどのような効果を上げているか、考えてみよう。

◇言葉と表現

1 次の語の対義語を挙げてみよう。

(1) 主題（一五・上2）

(2) 客観性（一五・下10）

2「〈大きな町〉」（一二・上4）「〈小さな町〉」（一二・上11）のような、固有名を使用しない抽象的な表現の例を挙げてみよう。それは、どのような効果を上げているか、考えてみよう。

◇言語活動

1「おばあちゃんの家に到着する」（一二・上4～一四・上21）を読んで、ここから先、どのような展開が予想されるか、なぜそう思うのかをまとめてみよう。

山月記

中島敦

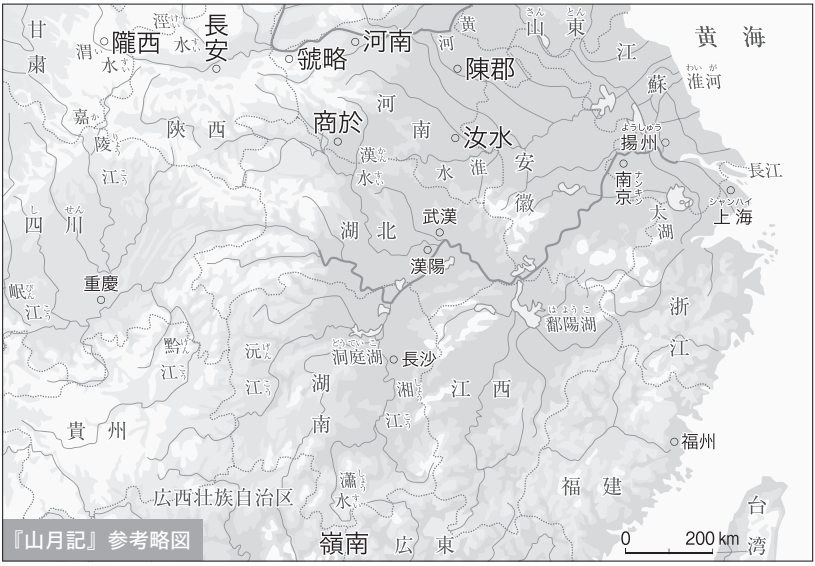
初出『文学界』昭和十七（一九四二）年二月

隴西の李徴は博学才穎、天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。いくばくもなく官を退いた後は、故山、虢略に帰臥し、人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。下吏となって長く膝を俗悪な大官の前に屈するよりは、詩家としての名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に揚がらず、生活は日を追うて苦しくなる。李徴はようやく焦燥に駆られてきた。この頃からその容貌も峭刻となり、肉落ち骨秀で、眼光のみいたずらに炯々として、かつて進士に登第した頃の豊頬の美少年の面影は、どこに求めようもない。数年の後、貧窮に堪えず、妻子の衣食のためについに節を屈して、再び東へ赴き、一地方官吏の職を奉ずることになった。一方、これは、己の詩業に半ば絶望したためでもある。かつての同輩はすでにはるか高位に進み、彼が昔、鈍物として歯牙にもかけなかったその連中の下命を拝さねばならぬことが、往年の俊才李徴の自尊心をいかに傷つけたかは、想像に難くない。彼は快々として楽

1 **隴西**　現在の中国の甘粛省隴西県。
2 **才穎**　才知が並外れて優れていること。
3 **天宝**　唐の玄宗皇帝の時代の年号（七四二年～七五六年）。
4 **虎榜**　科挙（官吏登用試験）に合格した者の姓名を掲示する木札。
5 **江南尉**　「江南」は、現在の長江以南の地域。「尉」は軍事や警察などをつかさどる官。
6 **狷介**　自分の考えに固執し、他人と協調しないこと。
7 **故山**　故郷。
8 **虢略**　現在の河南省霊宝市。
9 **峭刻**　厳しく、険しいこと。
10 **登第**　試験に合格すること。
11 **快々**　心が満ち足りないさま。

しまず、[12]狂悖の性はいよいよ抑え難くなった。一年の後、公用で旅に出、[13]汝水のほとりに宿ったとき、ついに発狂した。ある夜半、急に顔色を変えて寝床から起き上がると、何かわけの分からぬことを叫びつつそのまま下に飛び下りて、闇の中へ駆け出した。彼は二度と戻ってこなかった。付近の山野を捜索しても、何の手がかりもない。その後李徴がどうなったかを知る者は、誰もなかった。

翌年、監察御史、[14]陳郡の袁傪という者、勅命を奉じて[15]嶺南に使いし、[16]途に商於の地に宿った。次の朝まだ暗いうちに出発しようとしたところ、駅吏が言うことに、これから先の道に人食い虎が出るゆえ、旅人は白昼



『山月記』参考略図

15　10　5

12 **狂悖**　人並み外れて、わがままなこと。

13 **汝水**　河南省の老君山から発して南東に流れ、淮河に注ぐ川。

14 **監察御史**　地方を巡視し、官吏を取り締まる官。

15 **陳郡**　現在の河南省淮陽県。

16 **嶺南**　現在の広東省・広西壮族自治区一帯の地域。

17 **商於**　現在の河南省内郷県にある地名。

＊ 恃む　焦燥　いたずらに　炯々　歯牙にもかけない

でなければ、通れない。今はまだ朝が早いから、いま少し待たれたがよろしいでしょうと。袁傪は、しかし、供回りの多勢なのを恃み、駅吏の言葉を退けて、出発した。*残月の光を頼りに林中の草地を通っていったとき、果たして一匹の猛虎が叢(くさむら)の中から躍り出た。*虎は、あわや袁傪に躍りかかるかと見えたが、たちまち身を翻して、もとの叢に隠れた。叢の中から人間の声で「危ないところだった。」と繰り返しつぶやくのが聞こえた。その声に袁傪は聞き覚えがあった。驚懼(きょうく)のうちにも、彼はとっさに思い当たって、叫んだ。「その声は、わが友、李徴子[18]ではないか？」袁傪は李徴と同年に進士の第に登り、友人の少なかった李徴にとっては、最も親しい友であった。温和な袁傪の性格が、[19]峻峭(しゅんしょう)な李徴の性情と衝突しなかったためであろう。

叢の中からは、しばらく返事がなかった。忍び泣きかと思われるかすかな声が時々漏れるばかりである。ややあって、低い声が答えた。「いかにも自分は隴西の李徴である。」と。

袁傪は恐怖を忘れ、馬から下りて叢に近づき、懐かしげに*久闊(きゅうかつ)[20]を叙した。そして、なぜ叢から出てこないのかと問うた。李徴の声が答えて言う。自分は今や異類の身となっている。どうして、おめおめと故人(とも)の前にあさましい姿をさらせようか。かつまた、自分が姿を現せば、必ず君に*畏怖嫌厭(けんえん)の情を起こさせるに決まっているからだ。しかし、今、図らずも故人に会うことを得て、[21]愧赧(きたん)の念をも忘れるほどに懐かしい。どうか、ほんのしばらくでいいから、わが醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。

問「危ないところだった」とあるが、なぜか。

18 **子** 男子の名前に添えて、親しみや敬意を表す語。

19 **峻峭** 厳しく、きついこと。

20 **異類** 人間ではない生き物。

21 **愧赧** 恥ずかしさに赤面すること。

後で考えれば不思議だったが、そのとき、袁傪は、この超自然の怪異を、実に素直に受け入れて、少しも怪しもうとしなかった。彼は部下に命じて行列の進行をとどめ、自分は叢の傍らに立って、見えざる声と対談した。都のうわさ、旧友の消息、袁傪が現在の地位、それに対する李徴の祝辞。青年時代に親しかった者どうしの、あの隔てのない語調で、それらが語られた後、袁傪は、李徴がどうして今の身となるに至ったかを尋ねた。草中の声は次のように語った。

今から一年ほど前、自分が旅に出て汝水のほとりに泊まった夜のこと、一睡してから、ふと目を覚ますと、戸外で誰かがわが名を呼んでいる。声に応じて外へ出てみると、声は闇の中からしきりに自分を招く。*覚えず、自分は声を追うて走り出した。*無我夢中で駆けていくうちに、いつしか道は山林に入り、しかも、知らぬ間に自分は左右の手で地をつかんで走っていた。何か体中に力が満ち満ちたような感じで、軽々と岩石を跳び越えていった。気がつくと、手先や肘の辺りに毛を生じているらしい。少し明るくなってから、谷川に臨んで姿を映してみると、すでに虎となっていた。自分は初め目を信じなかった。次に、これは夢に違いないと考えた。夢の中で、これは夢だぞと知っているような夢を、自分はそれまでに見たことがあったから。どうしても夢でないと悟らねばならなかったとき、自分は茫然（ぼうぜん）とした。そうして懼（おそ）れた。全く、どんなことでも起こりうるのだと思うて、深く懼れた。しかし、なぜこんなことになったのだろう。分からぬ。全く何事もわれわれには分からぬ。理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って、理由も分からずに生きていくのが、われわれ生き物のさだめだ。自分

* 残月　果たして　あわや
久闊を叙す　おめおめと
畏怖嫌厭　覚えず　無我
夢中

はすぐに死を思うた。しかし、そのとき、目の前を一匹のうさぎが駆け過ぎるのを見たとたんに、自分の中の人間はたちまち姿を消した。再び自分の中の人間が目を覚ましたとき、自分の口はうさぎの血にまみれ、辺りにはうさぎの毛が散らばっていた。これが虎としての最初の経験であった。それ以来今までにどんな*所行をし続けてきたか、それは到底語るに忍びない。ただ、一日のうちに必ず数時間は、人間の心が還(かえ)ってくる。そういうときには、かつての日と同じく、人語も操れれば、複雑な思考にも堪えうるし、[22]経書の章句を誦(そら)んずることもできる。その人間の心で、虎としての己の*残虐な行いの跡を見、己の運命を振り返るときが、最も情けなく、恐ろしく、憤ろしい。しかし、その、人間に還る数時間も、日を経るに従って次第に短くなっていく。今までは、どうして虎などになったかと怪しんでいたのに、この間ひょいと気がついてみたら、俺はどうして以前、人間だったのかと考えていた。これは恐ろしいことだ。いま少したてば、俺の中の人間の心は、獣としての習慣の中にすっかり埋もれて消えてしまうだろう。ちょうど、古い宮殿の礎が次第に土砂に埋没するように。そうすれば、しまいに俺は自分の過去を忘れ果て、一匹の虎として狂い回り、今日のように道で君と出会っても故人と認めることなく、君を裂き食ろうて何の悔いも感じないだろう。いったい、獣でも人間でも、もとは何か他のものだったんだろう。初めはそれを覚えているが、次第に忘れてしまい、初めから今の形のものだったと思い込んでいるのではないか？　いや、そんなことはどうでもいい。俺の中の人間の心がすっかり消えてしまえば、恐らく、そのほうが、俺はしあわせになれるだろ

22 **経書**　儒教の最も基本的な教えを記した書物。

問 「俺」と「自分」とは、どのように使い分けられているか。

問 「俺はしあわせになれるだろう」とあるが、なぜか。

う。だのに、俺の中の人間は、そのことを、このうえなく恐ろしく感じているのだ。ああ、全く、どんなに、恐ろしく、悲しく、切なく思っているだろう！　俺が人間だった記憶のなくなることを。この気持ちは誰にも分からない。誰にも分からない。俺と同じ身の上になった者でなければ。ところで、そうだ。俺がすっかり人間でなくなってしまう前に、一つ頼んでおきたいことがある。

袁傪はじめ一行は、息をのんで、草中の声の語る不思議に聞き入っていた。声は続けて言う。

他でもない。自分は元来詩人として名を成すつもりでいた。しかも、業いまだ成らざるに、この運命に立ち至った。かつて作るところの詩数百編、*もとより、まだ世に行われておらぬ。遺稿の所在ももはや分からなくなっていよう。ところで、そのうち、今もなお記誦(きしょう)[23]せるものが数十ある。これをわがために伝録していただきたいのだ。なにも、これによって一人前の詩人面をしたいのではない。作の巧拙は知らず、とにかく、産を破り心を狂わせてまで自分が生涯それに執着したところのものを、*一部なりとも後代に伝えないでは、死んでも死に切れないのだ。

袁傪は部下に命じ、筆を執って草中の声に従って書き取らせた。李徴の声は叢の中から朗々と*響いた。長短およそ三十編、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁傪は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。*なるほど、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品と

23 記誦　記憶し、そらんじること。

＊
所行　残虐　もとより
巧拙　朗々　非凡

なるのには、どこか（非常に微妙な点において）欠けるところがあるのではないか、と。

旧詩を吐き終わった李徴の声は、突然調子を変え、自らを嘲るがごとくに言った。

恥ずかしいことだが、今でも、こんなあさましい身と成り果てた今でも、俺は、俺の詩集が長安[24]風流人士の机の上に置かれているさまを、夢に見ることがあるのだ。岩窟の中に横たわって見る夢にだよ。嗤ってくれ。詩人になり損なって虎になった哀れな男を。（袁傪は昔の青年李徴の自嘲癖を思い出しながら、悲しく聞いていた。）そうだ。お笑い草ついでに、今の思いを即席の詩に述べてみようか。この虎の中に、まだ、かつての李徴が生きているしるしに。

袁傪はまた下吏に命じてこれを書き取らせた。その詩に言う。

偶〻[25]因テ狂疾ニ成ル殊類ト
災患相仍ツテ不レ可カラル逃ルヽ
今日爪牙誰カ敢ヘテ敵センヤ
当時声跡ハ共ニ相高カリキ
我ハ為リテ異物ト蓬茅ノ下ニアレドモ
君已ニ乗リテ軺ニ気勢豪ナリ
此夕渓山シ対ス明月ニ
不レ成シテ長嘯ヲ[30]但ダ成スノミ嘆ヲ[31]

偶〻狂疾に因つて殊類と成る
災患相仍つて逃るべからず
今日は爪牙誰か敢へて敵せんや
当時は声跡共に相高かりき
我は異物と為りて蓬茅の下にあれども
君は已に軺に乗りて気勢豪なり
此の夕べ渓山明月に対し
長嘯を成さずして但だ嘆を成すのみ

24 **長安**　現在の陝西省西安市。漢代から唐代にかけて繁栄した。

25 **偶〻**　偶然。思いがけず。「〻」は、上の字の訓が同音の繰り返しになることを表す記号。

26 **狂疾**　精神障害。

27 **殊類**　「異類」と同じ。二二ページ注20参照。一三行目の「異物」も同じ意。

28 **蓬茅**　よもぎとちがや。ここでは、叢。

29 **軺**　小さくて軽い馬車。当時の官吏の乗り物。

30 **長嘯**　声を長く引き伸ばして、詩を吟じること。

31 **嘆**　ほえること。叫ぶこと。

時に、残月、光冷ややかに、白露は地にしげく、樹間を渡る冷風はすでに暁の近きを告げていた。人々はもはや、事の奇異を忘れ、*粛然として、この詩人の薄幸を嘆じた。李徴の声は再び続ける。

なぜこんな運命になったか分からぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、思い当たることが全然ないでもない。人間であったとき、俺は努めて人との交わりを避けた。人々は俺を倨傲(32きょごう)だ、*尊大だと言った。実は、それがほとんど*羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての*郷党の*鬼才と言われた自分に、自尊心がなかったとは言わない。しかし、それは臆病な自尊心とで



『李陵(りりょう)』草稿

32 倨傲　おごり高ぶること。

＊粛然　尊大　羞恥心　郷党　鬼才

も言うべきものであった。俺は詩によって名を成そうと思いながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、俺は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、わが臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである。己の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己の珠なるべきを半ば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。俺は次第に世と離れ、人と遠ざかり、[33]憤悶と[34]慙恚とによってますます己の内なる臆病な自尊心を飼いふとらせる結果になった。人間は誰でも猛獣使いであり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だと言う。俺の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが俺を損ない、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、俺の外形をかくのごとく、内心にふさわしいものに変えてしまったのだ。今思えば、全く、俺は、俺の持っていた僅かばかりの才能を空費してしまったわけだ。人生は何事をもなさぬにはあまりに長いが、何事かをなすにはあまりに短いなどと口先ばかりの警句を弄しながら、事実は、才能の不足を暴露するかもしれないとの卑怯な危惧と、刻苦をいとう怠惰とが俺の全てだったのだ。俺よりもはるかに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者がいくらでもいるのだ。虎と成り果てた今、俺はようやくそれに気がついた。それを思うと、俺は今も胸を焼かれるような悔いを感じる。俺にはもはや人間としての生活はできない。たとえ、今、俺が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしたところで、どういう手段で発表できよう。まして、俺の頭は日ごとに虎に近づい

33 憤悶　憤りもだえること。
34 慙恚　恥じ憤ること。
問「人間は誰でも…性情だ」とは、どのようなことか。

ていく。どうすればいいのだ。●俺の空費された過去は？　俺はたまらなくなる。そういうとき、俺は、向こうの山の頂の巌（いわお）に上り、空谷に向かってほえる。この胸を焼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。俺はゆうべも、あそこで月に向かってほえた。誰かにこの苦しみが分かってもらえないかと。しかし、獣どもは俺の声を聞いて、ただ、懼れ、ひれ伏すばかり。山も木も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮（たけ）っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人俺の気持ちを分かってくれる者はない。ちょうど、人間だった頃、俺の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。●俺の毛皮のぬれたのは、夜露のためばかりではない。

ようやく辺りの暗さが薄らいできた。木の間（こ）を伝って、どこからか、暁角[35]が悲しげに響き始めた。

もはや、別れを告げねばならぬ、酔わねばならぬときが、（虎に還らねばならぬときが）近づいたから、と、李徴の声が言った。だが、お別れする前にもう一つ頼みがある。それはわが妻子のことだ。彼らはいまだ虢略にいる。もとより、俺の運命については知るはずがない。君が南から帰ったら、俺はすでに死んだと彼らに告げてもらえないだろうか。決して今日のことだけは明かさないでほしい。厚かましいお願いだが、彼らの孤弱を哀れんで、今後とも道途に飢凍することのないように計らっていただけるならば、自分にとって、恩幸、これに過ぎたるはない。

言い終わって、草中から*慟哭（どうこく）の声が聞こえた。袁傪もまた涙を浮かべ、喜んで李徴の意に添*

問 **「俺の空費された過去」とは、どのような「過去」か。**

問 **「俺の毛皮…ばかりではない」のは、なぜか。**

35 **暁角**　夜明けを知らせる角笛。

*
切磋琢磨　潔しとしない
弄する　危惧　怠惰　慟哭　意に添う

いたい旨を答えた。李徴の声はしかしたちまちまた先刻の自嘲的な調子に戻って、言った。

本当は、まず、このことのほうを先にお願いすべきだったのだ、俺が人間だったなら。飢え凍えようとする妻子のことよりも、己の乏しい詩業のほうを気にかけているような男だから、こんな獣に身を落とすのだ。

そうして、付け加えて言うことに、袁傪が嶺南からの帰途には決してこの道を通らないでほしい、そのときには自分が酔っていて故人を認めずに襲いかかるかもしれないから。また、今別れてから、前方百歩の所にある、あの丘に上ったら、こっちを振り返って見てもらいたい。自分は今の姿をもう一度お目にかけよう。勇に誇ろうとしてではない。わが醜悪な姿を示して、もって、再びここを過ぎて自分に会おうとの気持ちを君に起こさせないためであると。

袁傪は叢に向かって、懇ろに別れの言葉を述べ、馬に上った。叢の中からは、また、堪えざるがごとき悲泣の声が漏れた。袁傪も幾度か叢を振り返りながら、涙のうちに出発した。

一行が丘の上に着いたとき、彼らは、言われたとおりに振り返って、先ほどの林間の草地を眺めた。たちまち、一匹の虎が草の茂みから道の上に躍り出たのを彼らは見た。虎は、すでに白く光を失った月を仰いで、二声三声咆哮したかと思うと、また、もとの叢に躍り入って、再びその姿を見なかった。

問「俺が人間だったなら」とあるが、ここでの「人間」とは、どのようなものか。

＊懇ろ　咆哮



中島　敦（なかじま あつし）　明治四十二（一九〇九）年～昭和十七（一九四二）年。小説家。東京都の生まれ。漢籍の教養が深く、知的で格調の高い文章によって、根源的状況における生のありようを追究し、自己の人間観を語った。作品に『文字禍』『光と風と夢』『名人伝』『李陵』『弟子』などがある。本文は『中島敦全集1』（平成十三（二〇〇一）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1「ついに発狂した」（二一・3～4）とあるが、ここに至るまでの「李徴」の心情をまとめてみよう。

2「理由も分からずに押しつけられたものをおとなしく受け取って…われわれ生き物のさだめだ」（二三・16～17）には、「李徴」のどのような考え方が表れているか、考えてみよう。

3「俺は詩によって名を成そうと思いながら…ともに、わが臆病な自尊心と、尊大な羞恥心とのせいである」（二八・1～4）とあるが、ここで語られている「李徴」の性格を分かりやすく説明してみよう。

4この小説では、「人間」が「虎」になるという虚構が用いられている。その意図や効果について話し合ってみよう。

5この小説を読んで考えたことを、八〇〇字程度でまとめてみよう。

❖言葉と表現

1傍点の付された言葉を抜き出し、その付された理由を考えてみよう。

2「詩人面」（二五・10～11）「自嘲癖」（二六・6）「お笑い草」（二六・6）などの例に倣って、次の語が付く慣用的な言葉を探してみよう。

(1)□□面　(2)□□癖　(3)□□草

3「いくばくもなく」（二〇・3）「かつまた」（二二・13）など、漢文的な表現を抜き出し、それらの言葉がどのような効果を上げているか、考えてみよう。

❖言語活動

1この小説は中国唐代の小説『人虎伝』を典拠としている。『人虎伝』の書き下しや現代語訳を読み、次の点に着目して、『山月記』と比較してみよう。

(1)李徴の性格

(2)李徴が虎になった理由

文学の窓

小説とは何か

三島由紀夫

現代小説に対しては程よいおつきあいはするけれども、本当のところ「三嘆これ久しゅうする。」というほどの感激を味わうことができなくなっているのは、こちらの感受性の摩滅にもよるのであろう。文学賞の審査を幾つもやりながら、なお小説を読むのが三度の飯より好き、などという人がいたら、その人は間違いなく怪物であろうと私には思われる。

では、私が小説が嫌いになったかと言えば、そうも言えない。依然私は「小説」を探しているからである。評論を読んでも歴史を読んでも私が小説を探していることに変わりはなく、その点は、法律の講義を聞きながら、その中に一生懸命「小説」を探していた学生時代の私と、今の私が別人になったわけではない。

新しい本を追いかけて読むよりも、昔感銘を受けた本を再読して、昔気づかなかった「小説」をそこに豊富に発見することがある。ただ「小説」と抽象的に言うだけでは、いつまでたっても曖昧であろうから、端的な実例をあげることにしよう。

私は最近、そういう自分の楽しみのためだけの読書として、柳田国男氏の名著『遠野物語』を再読した。これは明治四十三年に初版の出た本で、陸中上閉伊郡の山中の一集落遠野郷の民俗採訪の成果であるが、全文自由な文語体で書かれ、わけても序文は名文中の名文である。この序文については後で触れるとして、私のあげたいのは、第二十二節の次のような小話である。

「佐々木氏の曽祖母年寄りて死去せし時、棺に取り納め親族の者集まり来てその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪の間は火の気を絶やすことを忌むが所のふうなれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裏の両側に座り、母人は傍らに炭籠を置き、折々炭を継ぎてありしに、ふと裏口の方より足音して来る者あるを見れば、亡くなりし老女なり。平生腰かがみて着物の裾の引きずるを、三角に取り上げて前に縫ひつけてありしが、まざまざとそのとほりにて、しま目にも目覚えあり。あなやと思ふ間もなく、二人の女の座れる炉の脇を通り行くとて、裾にて炭取に触りしに、丸き炭取なればくるくると回りたり。母人は気丈の人なれば振り返り後を見送りたれば、親縁の人々の打ち伏したる座敷のほうへ近寄り行くと思ふほどに、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと叫びたり。その余の

人々はこの声に眠りを覚ましただ打ち驚くばかりなりしと言へり。」

この中で私が、「あ、ここに小説があった。」と三嘆これ久しゅうしたのは、「裾にて炭取に触りしに、丸き炭取なればくるくると回りたり。」というくだりである。

ここがこの短い怪異譚（たん）の焦点であり、日常性と怪異との疑いようのない接点である。この一行のおかげで、僅か一ページの物語が、百枚二百枚のえせ小説[9]よりも、はるかにみごとな小説になっており、人の心に永久に忘れ難い印象を残すのである。

こんな効果は分析し説明しても詮ないことであるが、一応現代的習慣に従って、分析を試みることにしよう。

通夜の晩現れた幽霊は、あくまで日常性を身につけており、ふだん腰がかがんで、引きずる裾を三角に縫いつけてあったまま、しま目も見覚えのある着物で出現するので、その同一性が直ちに確認せられる。ここまではよくある幽霊談である。人々は死の事実を知っているから、そのときすでに、ありうべからざることが起こったということは認識されている。すなわち棺内に動かぬ死体があるという事実と、裏口から同一人が入ってきたという事実とは、完全に矛盾するからである。二種の相いれぬ現実が併存するわけはないから、一方が現実であれば、他方は超現実あるいは非現実でなければならない。そのとき人々は、目前に見ているものが幽霊だという認識に戦慄しながら、同時に、超現実が現実を侵すわけはないという別の認識を保持している。これはわれわれの夢の体験と似ており、一つの超現実を受容するときに、逆に自己防衛の機能が働いて、こちら側の現実を確保しておきたいという欲求が高まるのである。目の前を行くのは確かに曽祖母の亡霊であった。認めたくないことだが、現れた以上はもうしかたがない。せめてはそれが幻であってくれればいい。幻覚は必ずしも、認識にとっての侮辱ではないからだ。われわれは酒を飲むことによって、好んでそれをおびき寄せさえするからだ。

しかし「裾にて炭取に触りしに、丸き炭取なればくるくると回りたり。」とくると、もういけない。この瞬間に、われわれの現実そのものが完全に震撼（しんかん）されたのである。

すなわち物語は、このとき第二段階に入る。亡霊の出現の段階では、現実と超現実は併存している。しかし炭取の回転によって、超現実が現実を侵し、幻覚と考える可能性は根絶され、ここに認識世界は逆転して、幽霊のほうが「現実」になってし

まったからである。幽霊がわれわれの現実世界の物理法則[10]に従い、単なる無機物にすぎぬ炭取に物理的力を及ぼしてしまったからには、全てが主観から生じたという気休めはもはや許されない。かくて幽霊の実在は証明されたのである。

その原因はあくまでも炭取の回転にある。炭取が「くるくる」と回らなければ、こんなことにはならなかったのだ。炭取はいわば現実の転位[11]の蝶番[12]のようなもので、この蝶番がなければ、われわれはせいぜい「現実と超現実の併存状態」までしか到達することができない。それから先へもう一歩進むには、（この一歩こそ本質的なものであるが、）どうしても炭取が回らなければならないのである。しかもこの効果が、一[13]にかかって「言葉」にある、とは、驚くべきことである。舞台の小道具の炭取では、たとえその仕掛けがいかに巧妙に仕組まれようとも、この小話における炭取のような確固たる日常性を持つことができない。短い叙述のうちにも浸透している日常性が、このつまらない什器[14]の回転を真に意味あらしめ、しかも『遠野物語』においては、「言葉」以外のいかなる質料も使われていないのだ。

私が「小説」と呼ぶのはこのようなものである。小説がもともと「まことらしさ」の要請に発したジャンルである以上、そこにはこのような、現実を震撼させることによって幽霊（すなわち言葉）を現実化するところの根源的な力が備わっていなければならない。しかもその力は、長たらしい叙述から生まれるものではなくて、こんな一行に圧縮されていれば十分なのである。

しかし凡百の小説では、小説と名が付いているばかりで、何百枚読み進んでも決して炭取の回らない作品がいかに多いことであろう。炭取が回らない限り、それを小説と呼ぶことは実はできない。小説の厳密な定義は、実にこの炭取が回るか回らぬかにあると言っても過言ではない。

1 三嘆これ久しゅうする　とても感心する。「三嘆」は、心から感心して何回も褒めること。
2 柳田国男　一八七五年～一九六二年。民俗学者。日本の民俗学の開拓者。
3 陸中上閉伊郡　現在の岩手県遠野市および上閉伊郡。
4 後で触れるとして　採録範囲の後に序文についての記述がある。
5 佐々木氏　『遠野物語』の語り手である佐々木喜善（民俗学者）のこと。
6 囲炉裏　部屋の床を大きく四角に切り、炭火などをおこすために設けられた一角。暖房や煮炊きに用いる。
7 炭籠　囲炉裏で燃やす炭を入れておく炭入れ。炭取り。
8 あなや　あっ。驚きを表す語。
9 えせ　似非。見かけはそれらしく見えるが、実はそうではないこと。
10 物理法則　観測や実験によって立証される規則性。

11 **転位**　位置が変わること。ここでは、現実と超現実が逆転すること。
12 **蝶番**　開き戸などに用いる金具。扉の開閉時に回転軸としての働きをする。ここでは、現実と超現実の転位をつなぐもの。
13 **一にかかって**　ほかのものではなく、純粋に。専ら。
14 **什器**　日常家庭で用いる家具や道具類。ここでは、炭取り。

三島由紀夫　大正十四（一九二五）年～昭和四十五（一九七〇）年。小説家・劇作家。東京都の生まれ。唯美主義と古典主義を統一し、逆説に富む知的で華麗な作風で創作活動を展開した。作品に『仮面の告白』『潮騒』（小説）、『近代能楽集』『鹿鳴館』（戯曲）などがある。初出『波』昭和四十三（一九六八）年五月～昭和四十五（一九七〇）年十一月。本文は『決定版 三島由紀夫全集34』（平成十五（二〇〇三）年刊）によった。

5

◇単元の言語活動 1

◆小説の方法を読む ――「形」に着目して書く――

「文学国語」では、この後も小説を扱っていくことになるが、小説とはいったいどのようなものなのだろうか。小説を読む意味について考えてみよう。そして、どのように書かれているのかに着目しつつ、実際に書いてみよう。

課題　小説文とはいったいどのようなものなのか、いかなる書き方がされているのか、その形式を分析してみよう。また、それを踏まえて、小説文を書いてみよう。

1 「小説文の形式」（一一ページ）を参考にして、『山月記』や『悪童日記』がどのように書かれているのか、比較してみよう。

2 『山月記』を李徴の視点から書き換えられる箇所を探してみよう。

3 本単元の『言葉によって』『小説とは何か』も参考にして、小説を読む意味について、話し合ってみよう。

4 「学習のポイント」を参考に、『悪童日記』のような書き方で短い小説文を創作してみよう。

2 詩歌入門

- 詩というジャンルの歴史性や特徴、また表現上の独特の効果について、具体的な作品分析を通して学ぶ。
- さまざまな詩作品に触れ、詩的表現が持っている力や可能性について考える。

詩の自由を探る　藤井貞和
秋の祈　高村光太郎
雪　三好達治
汚れつちまつた悲しみに……　中原中也
崖　石垣りん
文学の窓　詩的リズム——音数律に関するノート（菅谷規矩雄）
単元の言語活動2

詩の自由を探る

藤井貞和（ふじいさだかず）

初出　本書のための書き下ろし

《詩的》《詩のような》《詩を感じさせる》などの言い回しがよく行われる。こんな《詩的》《詩のような》《詩を感じさせる》という表現ならば、一般に親しまれており、しかもわかりやすい。言語に沿っての、美しさの快楽を感じとって、《詩らしさ》とでもいうほかはない、ある種の「らしさ」に思いをこめながら「詩」と称することが、私どもには少なくない。

歌謡・短歌・俳句が詩であり、漢詩はもとより詩で、近代詩も、現代詩も詩であるという広

がりには、そういう「らしさ」で眺めやる視界が開かれる。民謡にも琉歌[1]にも詩の世界が広がる。現代の若者文化を支える音楽の歌詞のたぐいに「し」という言い方が普通になってきているのには、字をあてるならば「詞」であるものの、「詩」との重なりがそこに確かに横たわる。

《詩的》《詩のような》《詩を感じさせる》という言い方は、行為や自然、花や鳥、地の奥深くからやってきた石の色、結晶の美、そして音楽や絵について、しばしば言われ、小説や物語についてもそう言われることがある。一方で、詩の書き手が苦心して書いたつもりなのに、「それは詩でない、詩になっていない、詩でなくて詩的散文だよ。」などと、つらい批評が飛んでくることもある。

詩を感じさせるとは、時に、「その人が無意識のうちに詩を作っている」または「過去の詩を心の中に再現している」のだと言われることもある。無意識のうちに詩を作ったり、過去の詩を心の中に再現したりするとは、それを感じるこちら側にある「詩」ということになる。

おおまかにはそのような説明で足りるかと思えるものの、《詩を感じさせる》と言ってみたいとき、その言い方には、なかなか発語で言い表せないという思いがつきまとうし、事実、感動的な行為や美しい自然、清らかな花や快い鳥の声、もの言わぬ石の地表への表れ方、心を震わせる音楽や絵を前にして、われわれは普通、ありきたり*の言葉しか出てこなくて、「言葉なんか要らない、ただ身をそこに浸して、じっとしていたい。」という思いがしてくる。

詩の最も原型には、うたがあると思う。イヨハイオチシ[2]のように、だれに聴かれなくとも

問 「らしさ」で眺めやる視界が開かれる」とは、どういうことか。

1 **琉歌** 沖縄諸島・奄美諸島に伝えられる短詩形の叙情歌。八・八・八・六の三十音を基本とする。

2 **イヨハイオチシ** アイヌの歌謡の一種で、恋人を思慕する情を謡うものが多い。

* ありきたり

「うたう」という衝動があった。うたはそこから始まって、他人に聴いてほしい、他人と共有したいという思いもごく自然にやってくるだろう。

うたが社会的に機能する場合に、よく知られる習俗として、歌垣[3]と言われる、掛け合い文化があった。村々が次代を創成してゆくにあたり、うたがかなめになる。つまり求婚習俗の一類で、歌垣はうたを通して相手を見つけ出すというのが本来だった。

日本社会では八世紀になると、ほぼ途絶えるものの、なお『万葉集』[4]の相聞[5]でのうたの贈答や、平安時代の歌合[6]などにおいて、うたが交わされ、行き来して成り立つという機能は、ずっと後までうた文化の基本であり続ける。

『万葉集』のうたは、実を言うと、ほぼ声に出してうたわれていない。「うたう」のでなく「詠む」[7]と言った。五七五七七という音数律の五句形式を持つ短歌にしても、五七に始まり、それを繰り返して七七で止める長歌にしても、絶対多数はうたわれない。柿本人麻呂[8]がうたった証拠はないし、大伴家持[9]にしても詠む歌人としてあった。「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの（＝人間たち）、いづれか歌を詠まざりける」（『古今集』[10]仮名序）と認識された。

おもしろいことに、漢詩も五言絶句や七言律詩のように五言や七言で、和歌の五音、七音と一致する。和歌は漢詩の影響のもとに、最初から書いたり、創作したりしたのかもしれない。うたわれなくなってからも、和歌なら和歌で見ると、例えば〝独詠〟という自己との対話と

3 **歌垣**　男女が一同に会して歌舞音曲を楽しみ、歌のやりとりを通して、求愛し合う古代習俗。

4 **万葉集**　奈良時代後期に大伴家持によって編纂されたと言われる現存する日本最古の歌集。

5 **相聞**　一対の私的な関係性において歌がとりかわされること。また、その形式。『万葉集』の三大部立ての一つで、ほとんどが恋歌。

6 **歌合**　貴族社会で流行した、和歌を用いた集団的な遊戯。歌人たちが左右に分かれた上、決められた歌題に基づいて詠んだ歌を一首ずつ組み合わせて優劣を競った。

7 **詠む**　ここでは和歌を書き記す意。

8 **柿本人麻呂**　生没年未詳。『万葉集』を代表する歌

なって、心の調べとも言うべき、高い精神性が支えられる。『源氏物語[11]』手習巻の女主人公、浮舟の君の手習い歌のように。それは古代での「現代詩」ではなかろうか。

近代詩や現代詩になると、書くことが基本になってくる。

一行目を何字で書こうと自由で、改行する。二行目も自由な字数で、また改行する。現代詩が自由詩であるとは、何よりもこの字数の自由にある。では改行とは何だろうか。字数の自由を保つために改行する。改行すると、縦組みの場合、その下が決して字を入れてはならない空白になる。書き起こす上のほうにも空白が広がる。

書くことによって現れたのだから、これらの空白は現代詩にとっての大事な特徴だ。広い空白のうちに浮かび上がる自由詩。うたを喪ったように見えて、大切な心の調べは韻きになってその空間に戻ってくるのではないか。

人。

9 大伴家持 七一八年頃～七八五年。『万葉集』を代表する歌人。

10 『古今集』仮名序 延喜五（九〇五）年に成立した最初の勅撰和歌集『古今和歌集』の序文の一つ。紀貫之によって仮名で書かれ、歌論の最初のものとして高く評価されている。

11 『源氏物語』 十一世紀初め頃に紫式部によって書かれた長編物語。

問 「これらの空白は現代詩にとっての大事な特徴だ」とあるが、なぜか。



藤井貞和（ふじい さだかず） 昭和十七（一九四二）年～。詩人・文学研究者。東京都の生まれ。神話や口承文芸の要素に満ちた豊饒な詩世界を展開するとともに、古代から現代までの詩歌の歴史と構造を探る著作も多い。詩集に『ことばのつえ、ことばのつえ』『神の子犬』『春楡の木』、他に『言葉と戦争』『日本語と時間』『〈うた〉起源考』などがある。本文は、本書のために書き下ろしたものである。

秋の祈（いのり）

高村光太郎（たかむらこうたろう）

秋は嘹喨（りやうりやう）[1]と空に鳴り
空は水色、鳥が飛び
魂いななき
清浄の水こころに流れ
こころ眼（め）をあけ
童子となる

多端紛雑の過去は眼の前に横（よこた）はり
血脈をわれに送る
秋の日を浴びてわれは静かにありとある此（これ）を見る
地中の営みをみづから祝福し
わが一生の道程を胸せまつて思ひながめ
奮然としていのる
いのる言葉を知らず

1 嘹喨　音の明るく澄んで響き渡るさま。

涙いでて
光にうたれ
木の葉の散りしくを見
獣(けだもの)の嘻嘻(きき)として奔(はし)るを見
飛ぶ雲と風に吹かれる庭前の草とを見
かくの如き因果歴歴の律を見て
こころは強い恩愛を感じ
又止(や)みがたい責(せめ)を思ひ
堪へがたく
よろこびとさびしさとおそろしさとに跪(ひざまづ)く
いのる言葉を知らず
ただわれは空を仰いでいのる
空は水色
秋は喨喨と空に鳴る

問「いのる言葉を知らず」とあるが、なぜか。



高村光太郎（たかむら こうたろう） 明治十六（一八八三）年～昭和三十一（一九五六）年。詩人・彫刻家・画家。東京都の生まれ。アメリカやヨーロッパの芸術・文化から大きな刺激を受け、第一詩集『道程』で清新な口語自由詩の可能性を切り開いた。その他の詩集に『智恵子抄(ちえこ)』『典型』などがある。本文は『高村光太郎全集 第一巻 増補版』（平成六（一九九四）年刊）によった。

雪

三好達治

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。
次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

問 「太郎を眠らせ…」「次郎を眠らせ…」とあるが、この二文の主語は何であると考えられるか。



三好達治（みよし たつじ） 明治三十三（一九〇〇）年～昭和三十九（一九六四）年。詩人。大阪府の生まれ。第一詩集『測量船』では実験性の高い新たな抒情詩で注目を集め、その後、文語調の伝統的な言語美の世界を展開した。その他の詩集に『春の岬』『南窗集』『艸千里』『駱駝の瘤にまたがつて』などがある。本文は『三好達治全集 第一巻』（昭和三十九（一九六四）年刊）によった。

汚れつちまつた悲しみに……

中原中也（なかはらちゅうや）

汚れつちまつた悲しみに
今日も小雪の降りかかる
汚れつちまつた悲しみに
今日も風さへ吹きすぎる

汚れつちまつた悲しみは
たとへば狐の革裘（きつねのかはごろも）[1]
汚れつちまつた悲しみは
小雪のかかつてちぢこまる

汚れつちまつた悲しみは
なにのぞむなくねがふなく
汚れつちまつた悲しみは

問「小雪」は、この詩において、どのようなことを表しているか。

1 革裘　毛皮で作った防寒用の衣。

倦怠[2]のうちに死を夢む

汚れつちまつた悲しみに
いたいたしくも怖気[3]づき
汚れつちまつた悲しみに
なすところもなく日は暮れる……

5

2 倦怠　「倦怠」（疲れてだるい状態の意）に、「懈怠」（精進せず、怠りなまけるの意）を重ねた表現。

3 怖気づき　怖がる気持ちが起こること。



中原中也（なかはら ちゅうや）　明治四十（一九〇七）年～昭和十二（一九三七）年。詩人。山口県の生まれ。早熟な詩才を示し、生の憂愁や孤独を独自の韻律に託して歌った。富永太郎・小林秀雄らとの交友からフランス象徴詩を学び、ランボー詩集の翻訳も高い評価を得た。詩集に『山羊の歌』『在りし日の歌』がある。本文は『新編中原中也全集 第一巻』（平成十二（二〇〇〇）年刊）によった。

崖

石垣りん

戦争の終り、
1サイパン島の崖の上から
次々に身を投げた女たち。

美徳やら義理やら体裁やら
何やら。
火だの男だのに追いつめられて。

とばなければならないからとびこんだ。
ゆき場のないゆき場所。
（崖はいつも女をまっさかさまにする）

それがねえ
まだ一人も海にとどかないのだ。
十五年もたつというのに

1 **サイパン島**　太平洋、マリアナ諸島の島。第二次世界大戦の激戦地。

問 「いつも」とあるのは、なぜか。

どうしたんだろう。
あの、
女。



石垣りん（いしがき りん）　大正九（一九二〇）年～平成十六年（二〇〇四）年。詩人。東京都の生まれ。十代から銀行員として働く中で詩作を続け、『私の前にある鍋とお釜と燃える火と』『表札など』で詩人としての地位を確立した。日常生活に根差しながらも、社会や世相を鋭く批評する詩を多く残した。本文は『現代詩文庫46　石垣りん』（昭和四十六（一九七一）刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 藤井貞和『詩の自由を探る』における、「詩でなくて詩的散文だよ」（三七・7）という批評は、具体的にどういうことを言っていると考えられるか、話し合ってみよう。

2 高村光太郎『秋の祈』において、作者の「奮然」とした感情が詩の文体にどのように表れているかを考え、表現の特徴についてまとめてみよう。

3 三好達治『雪』では、「眠らせ」という使役形が使われているが、それがどのような効果をもたらしているか、考えてみよう。

4 中原中也『汚れつちまつた悲しみに……』では、同じ詩句が反復的に繰り返されているが、その形式と詩の内容とがどのように関わっているか、まとめてみよう。

5 石垣りん『崖』において、なぜ「女」は「まだ一人も海にとどかない」（四五・11）と言われているのか。作者の生きた時代や作品の背景を参考にして、この詩が何を伝えようとしているのか、考えてみよう。

◇言葉と表現

1「律」（四一・6）について、詩の中で使われているのと同じ意味で用いられている熟語を探してみよう。

2「おそろしさ」（四一・10）にはどのような種類の意味があるか、調べてみよう。

3「やら」（四五・4、5）「だの」（四五・6）という並列の助詞について、どのような種類があり、どのように使い分けられるか、調べて例文を作ってみよう。

文学の窓

詩的リズム——音数律に関するノート——

菅谷規矩雄

江藤淳[1]の《小林秀雄[2]》には、小林[3]の批評文——中原中也[4]の『山羊[5]の歌』——が引かれているが、それによると小林は中原の詩の一節を次のように書き写している。

汚れちまつた悲しみに
今日も小雪がふりかかる
汚れちまつた悲しみに
今日も風さへ吹すぎる

この箇所を読みかけてふと私は納得しないものを感じ、やはり同じ詩の引用されている小林の《中原中也の思い出》[6]を当たってみずにはいられなかった。その結果、何より私自身にいつの間にかしみこんでいた錯覚に驚いたのだった。

事柄は単純明瞭である——言うまでもないだろうが、右の引用では、汚れつちまつた……と二つ重なる原詩の促音の、初めの一つが抜け落ちている（ほかにも字句の違いがある）。なぜそうなったかについて、文献考証の立場からすれば、確認すべきいくつもの問題が派生してくるが、そうした手続きはこの際全て省く。

肝心なことは、私自身が実は、この詩の印刷された文字面の、僅かな食い違いに違和を感じるほどの視覚的な印象を持ち続けていながら、他方では、何年間もリフレイン[7]を記憶の中で復唱している間に、音声的には完全に促音を一つ脱落させて、汚れちまつた悲しみに……と覚え込んでいたのである。江藤淳の著書がきっかけで、この視覚と音声との記憶の乖離に気づいたとき、われながら一つの驚きであったし、また発見でもあった。これまで十何年も、私は中原中也の詩のリズムを、少しも本当

に感じとってはいなかったのか、と悔いのような自問が始まるのである。そこから中原中也は、私にとってまるで未知の詩人を初めて読むような、新たな姿を現す。

結論から先に記す――汚れつちまつた悲しみに……は三拍子的である。汚れちまつた悲しみに……であれば四拍子的である。差異を決定するモメント[8]は促音である。そこには近代詩の韻律にとって最も本質的な条件の所在が示唆されている。

言うまでもなくこれは、初めの一行で全てが書かれているような作品である。そしてそれは、

●よご－れッち－まッた－かなしみに●……とことさら繰り返された促音――日常的な口語では普通考えられない強調のしかたによって見事に仮構された[10]スケルツァンドな三拍子リズムと、自分の心が汚れてしまったことが悲しいというのではなくして、〈悲しみ〉が汚れてしまったという像的な構成との両面に、残りなく表現されている。

私は今、普通の日常的な口語と言った――これはおおよそ東京およびその近辺での言葉を念頭に入れてのことである。自分の経験からして、汚れちまった……ということはあっても、汚れっちまった……としゃべることは、私には全くありえないことである。つまりここで中原中也が書いた、その言葉遣いに、東京弁に対する彼の違和感の深さを、まず見てとるべきなのだと思う。

中原中也の文学的な交友をたどると、富永太郎[11]・小林秀雄・河上徹太郎[12]・大岡昇平[13]……というようにほとんど東京育ちの人々の名が連なる。恐らく小林秀雄は、中原の詩の口語的な表出を、自分の生まれ育った言語風土に適合させて読んだまでであって、そこで中原がどれほどの違和感を込めてべらんめえ口調を仮構したかと推測してみたことはない。極端に言えば、小林たちにとっては当たり前の口調が、中原にとっては音楽性や造型性に対する最大の関心、〈言葉に関する知的構成の技術〉を尽くした労苦の結果だと、考えてみる視点がないのだ。

もし私たちが中原がこの詩に刻み込んだ促音へのこだわりに注意を向けるなら、ほとんど痛撃の予感に等しい波紋が拡大してゆくのを目の当たりにできるはずである。

中原中也が立ち尽くした詩の危機の実体をひと言で要約するなら、それは近代七五調[14]の局限を解体するラディカルなシンコペーション[15]の連続という特性を帯びて現れる。

あゝ、秋が来た

胸に舞踏の終らぬうちに
もうまた秋が、おぢやつたおぢやつた。

――《秋の愁嘆》[16]において中原は、あらゆる影響を突き抜けて[17]その向こう側へ出る方法をつかみ取ったのだと思える。ダダイズムの影響も、あるいは富永太郎の影響も、突き抜けたのである。もうまた秋が……の単調な二拍子は、おぢやつたおじやつた……で不意に（ジャズのアフター・ビートにも比すべきリズムへと）転換し跳躍する。この瞬間[18]が中原の全ての詩のモメントとなってゆくのだ。

根本のところ中原中也の詩法は生涯を通じて一つのものに還元できると思う――七五調に乗ってあたう限り加速的に書き進むこと。するとその加速と圧縮の局限で、何ものかが七五調（の二拍子）を突き崩すようにふき出すのである。

1 **江藤淳**　一九三二年～一九九九年。文芸批評家。戦後日本の歴史と文学の関係を論じた。
2 **《小林秀雄》**　江藤淳による評論。昭和三十六（一九六一）年刊。
3 **小林**　小林秀雄。一九〇二年～一九八三年。文芸批評家。近代批評を確立。中原中也と親しい友人関係にあった。
4 **中原中也**　四四ページ参照。
5 **『山羊の歌』**　中原中也の第一詩集。昭和九（一九三四）年十一月刊。「汚れつちまつた悲しみに……」が収録されている。
6 **《中原中也の思い出》**　小林秀雄によるエッセイ。昭和二十四（一九四九）年八月、『文芸』に発表された。
7 **リフレイン**　refrain（英語）。繰り返し。
8 **モメント**　moment（英語）。契機、きっかけ。
9 **●**　筆者が「無音の拍」と呼ぶもの。間を示す。
10 **スケルツァンド**　Scherzando（イタリア語）。諧謔（かいぎゃく）的に、おどけての意。
11 **富永太郎**　一九〇一年～一九二五年。詩人。小林秀雄らと同人雑誌『山繭』を創刊した。
12 **河上徹太郎**　一九〇二年～一九八〇年。評論家。小林秀雄や中原中也らと交友があり、小林とともに近代批評の確立に貢献した。
13 **大岡昇平**　一八五ページ参照。
14 **ラディカル**　radical（英語）。根本的、急進的。
15 **シンコペーション**　syncopation（英語）。音楽用語で、強拍と弱拍を意図的にずらすことで独自のリズムを作り出すこと。また、その手法。
16 **《秋の愁嘆》**　中原中也の初期の詩。大正十四（一九二五）年十月に書かれた。ここでは、詩編本文の三行目から五行目が引用されている。
17 **ダダイズム**　Dadaism（英語）。第一次世界大戦後に起こった芸術運動で、既成秩序への激しい反抗精神を特徴とする。中原も初期にはダダイズムに傾倒していた。
18 **アフター・ビート**　afterbeat（英語）。音楽用語で、強拍の後にくる弱拍に当たる部分を強調してリズムを作ること。また、その手法。裏打ち。

菅谷規矩雄　昭和十一（一九三六）～平成元（一九八九）年。詩人・ドイツ文学者。東京都の生まれ。日本語の詩におけるリズムの問題に取り組み、理論的に考究した。初出『ユリイカ』昭和四十九（一九七四）年九月。本文は『詩的リズム―音数律に関するノート』（昭和五十（一九七五）年刊）によった。

◆〈詩らしさ〉を探る
――言葉はどのようなとき詩になるのか――

冒頭の評論『詩の自由を探る』（藤井貞和）では、古代における歌謡としての〈うた〉、習俗としての〈うた〉が徐々に失われ、「書く」「読む（詠む）」行為の内側に潜められてゆく過程が説明されている。現代の私たちは、古代のように衝動的に〈うた〉うことがなくなっても、「書く」「読む（詠む）」ことを通して〈うた〉を求めたり、再現しようとしたりする。そして、そのような作品に〈詩らしさ〉を感じる。この単元に掲載されている四編の詩の〈詩らしさ〉がどこからくるのか、読み解いてみよう。また、作者や作品の背景を調べるなどしながら、それぞれの表現の特徴についてまとめてみよう。

課題 詩句の反復による効果と、「書く」「読む」行為の関係性について探究してみよう。

1 高村光太郎『秋の祈』、三好達治『雪』、中原中也『汚れつちまつた悲しみに……』は、それぞれ別の仕方ではあるが、いずれも決まった詩句を反復して詩的効果を上げている。
① それぞれの詩編の反復法の特徴を書き出し、比較してみよう。
② ①に基づいて、声に出して朗読したときに効果の大きいものと、文字として書き記したときに効果の大きいものとの違いを話し合ってみよう。

2 石垣りん『崖』は、四編のうち唯一、詩句の反復という要素のない詩編であるが、語り手の視点や場面設定などに関する工夫によって詩的効果を上げている。1－②の作業も思い起こしながら、この詩の表現上の特徴を考えてみよう。

3 文学の境界を広げる

- 心理描写やリアリズム以外のさまざまな表現形式を持つ小説への理解を深め、多様な読みを発見する。
- 展開や構造の特徴、寓意（ぐうい）や象徴などに着目し、作品を読み味わう。

鞄 安部公房

コラム〈文学〉の領域を更新する

地球から来た男 星新一

押絵と旅する男 江戸川乱歩

マンガは哲学する 永井均

文学の窓 映画の中の花（西川美和）

単元の言語活動3

鞄（かばん）

安部公房（あべこうぼう）

初出 『笑う月』昭和五十（一九七五）年十一月

雨の中をぬれてきて、そのままずっと乾くまで歩き続けた、といった感じのくたびれた服装で、しかし目元が明るく、けっこう正直そうな印象を与える青年が、私の事務所に現れた。新聞の求人広告[1]を見たというのである。

なるほど、求人広告を出したのは事実である。しかし、その広告というのが、なにぶん半年以上も前のことなのだ。今ごろになって、ぬけぬけと応募してくるというのは、いくらなんで

1 **求人広告** 働き手を求める広告。

＊ くたびれた　ぬけぬけと

も非常識過ぎる。まるで採用されないために、今日まで応募を引き延ばしたと言わんばかりではないか。

あきれて物も言えないでいる私をしり目に、*

「やはり、駄目でしたか。」

と、むしろほっと肩の荷を下ろした感じで、来たときと同じ唐突さで引き返しかけるのだ。はぐらかされた私は、つい慌てて引き留めにかかっていた。*

「まあ、待ちなさい。私だってこだわるのが当然だろう。なぜ半年も前の求人広告に、今更応募する気になったのかな。そこのところを、納得できるように説明してもらいたいね。納得できさえすれば、それでけっこう。ちょうど欠員ができて、新規に補充も考えていたやさきだし、考慮の余地はあるんだよ。いったい、どういうことだったのかな。」

「さんざん迷ったあげく、一種の消去法[2]と言いますか、結局ここ



ニューヨーク 1（安部公房撮影）

問「私」が「青年」を「引き留め」たのは、なぜか。

2 消去法　選択肢の中から可能性の低いものを消去し、残ったものを選ぶ方法。

しかないことが分かったわけです。」

言い方によっては、かなり思わせぶりになりかねない口上を、青年はさりげなく言ってのけ、私も妙に素直な気持ちになっていた。

「具体的に言ってごらんよ。」

「この鞄のせいでしょうね。」と、相手は足元に置いた、職探しに持ち歩くにはいささか不似合いな——赤ん坊の死体なら、無理をすれば三つくらいは押し込めそうな——大き過ぎる鞄に視線を落とし、「僕の体力とバランスがとれ過ぎているんです。ただ歩いている分には、楽に運べるのですが、ちょっとでも急な坂だとか階段のある道に差し掛かると、もう駄目なんです。おかげで、選ぶことのできる道が、おのずから制約されてしまうわけですね。鞄の重さが、僕の行く先を決めてしまうのです。」

私はいささか気勢をそがれ、

「すると、鞄を持たずにいれば、必ずしもうちの社でなくてもよかったわけか。」

「鞄を手放すなんて、そんな、ありえない仮説を立ててみても始まらないでしょう。」

「手から離したからって、べつに爆発するわけじゃないんだろう。」

「もちろんです。ほら、今だってちゃんと手から離して床に置いている。」

「分からないね。なぜそんな無理してまで、鞄を持ち歩く必要があるのか……。」

「無理なんかしていません。あくまでも自発的にやっていることです。やめようと思えば、

* しり目　唐突　思わせぶり　口上　気勢をそぐ　仮説

いつだってやめられるからこそ、やめないのです。強制されてこんなばかなことができるものですか。」

「うちで採用してあげられなかったら、どうするつもり。」

「振り出しに戻ってから、また改めてお願いに上がることになるでしょうね。地形に変化でも起きない限り……。」

「しかし、君の体力に変化が起きるとか、鞄の重さに変化が起きて、ぜんぜん歩けなくなるとか、宅地造成[3]で新しい道を選べるようになるとかすれば……。」

「そんなに僕を雇いたくないんですか。」

「可能性を論じているだけさ。君だって、もっと自由な立場で職選びができれば、それに越したことはないだろう。」

「この鞄のことは、だれよりも僕がいちばんよく知っています。」

「なんなら、しばらく、預かってみてあげようか。」

「まさか、そんなあつかましいこと……。」

「中身は何なの。」

「大したものじゃありません。」

「口外をはばかられるようなものかな。」*

「つまらないものばかりです。」

問「振り出しに……起きない限り……」とあるが、「青年」がこのように言ったのは、なぜか。

3 宅地造成　住宅用の土地に作り上げること。

「金額にしたら、いくらぐらいになるの。」
「別に貴重品だから、肌身離さずってわけじゃありません。」
「しかし、知らない人間が見たら、どう思うかな。君はそう、腕っ節の強いほうでもなさそうだし、ひったくりや強盗に目を付けられたら、お手上げだろう。」
青年は小さく笑った。私の額に開いた穴を通して、どこか遠くの風景でも見ているような、年寄りじみた笑いだった。笑っただけで、別に返事はしなかった。
「ま、いいだろう。」私も負けずに、声を立てて笑い、額に手をあてがって相手の視線を押し戻し、「別に言い負かされたわけじゃないが、君の立場も、なんとなく分かるような気がするな。いちおう、働いてもらうことにしよう。それにしても、その鞄は大き過ぎる。君を雇っても、鞄を雇うわけじゃないんだから、事務所への持ち込みだけは遠慮してもらいたい。その条件でよかったら、今日からでも仕事を始めてもらいたいんだが、どうだろう。」
「けっこうです。」
「勤務中、鞄はどこに置いておくつもり。」
「下宿が決まったら、下宿に置いておきます。」
「大丈夫かい。」
「どういう意味ですか。」
「下宿から、ここまで、鞄なしでたどり着けるかな。身軽になり過ぎて、途中で脱線したり

問「私の額に開いた穴を通して…年寄りじみた笑い」とは、どういう笑いか。

＊はばかられる　肌身離さず

するんじゃないのかい。」

「下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ。」

青年はやっと、表情にふさわしいさわやかな笑い声を立て、私もほっと肩の荷を下ろした思いだった。知り合いの周旋屋[4]に電話で紹介してやると、彼はさっそく下見に出向いていった。ごく自然に、当然の成り行きとして、後に例の鞄が残された。

なんということもなしに、鞄を持ち上げてみた。ずっしりと腕にこたえた。こたえたが、持てないほどではなかった。試しに、二、三歩、歩いてみた。もっと歩けそうだった。

しばらく歩き続けると、さすがに肩にこたえ始めた。それでもまだ、我慢できないほどではなかった。ところが、急に腰骨の間に背骨がめり込む音がして、そうなるともう一歩も進めない。気が付くと、いつの間にやら私は事務所を出て、急な上り坂に差し掛かっているのだった。方向転換すると、また歩け始めた。そのまま事務所に引き返すつもりだったが、どうもうまくいかない。いくら道順を思い浮かべてみても、ふだんはまるで意識しなかった、坂や石段に遮られ、ずたずたに寸断されて使いものにならないのだ。やむをえず、とにかく歩ける方向に歩いてみるしかなかった。そのうち、どこを歩いているのか、よく分からなくなってしまった。

別に不安は感じなかった。ちゃんと鞄が私を導いてくれている。私は、ためらうことなく、どこまでもただ歩き続けていればよかった。選ぶ道がなければ、迷うこともない。私は嫌になるほど自由だった。

4 **周旋屋**　不動産などの売買、賃貸の仲介を行う業者。

問 **「また歩け始めた」という表現は、どのようなことを意味しているか。**

＊ 周旋



安部公房（あべ こうぼう） 大正十三（一九二四）年～平成五（一九九三）年。小説家・劇作家。本名は公房（きみふさ）。東京都の生まれ。寓意（ぐうい）と風刺によって社会や人間を描く作品が多く、国際的な評価も高い。小説に『赤い繭』『壁―S・カルマ氏の犯罪』『砂の女』『榎本武揚（えのもとたけあき）』など、戯曲に『幽霊はここにいる』などがある。本文は『笑う月』（昭和五十九（一九八四）年刊）によった。

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

❖学習のポイント

1 全体を四つの段落に分けて、それぞれのあらすじをまとめてみよう。

2 登場人物・場所・時などについて整理してみよう。また、この小説の特徴について話し合ってみよう。

3 「鞄を手放す」ことが「ありえない仮説」（五三・13）だというのはどうしてか、作品全体からその理由をまとめてみよう。

4 次の表現に着目して、本文で使われている「道」がどのような意味で使われているか、考えてみよう。

「下宿と勤め先の間なんて、道のうちには入りませんよ」（五六・2）

「選ぶ道がなければ、迷うこともない」（五六・16）

5 「私は嫌になるほど自由だった」（五六・16～17）とあるが、それはどのようなことを言っているのか、考えてみよう。

6 「鞄」について本文で述べられていることをまとめた上で、「鞄」が何を象徴しているのか、話し合ってみよう。

❖言葉と表現

1 「肩の荷を下ろす」（五二・5）など「肩」が使われている慣用句を集めてみよう。

2 「しり目」（五二・3）「肌身離さず」（五五・2）という語句を用いて短文を作ってみよう。また体の一部を使った慣用句とその使い方を調べてみよう。

❖言語活動

1 「鞄」の中身は何か、作品全体を踏まえて話し合ってみよう。

2 寓意的な小説には、ほかにどのようなものがあるか調べ、その内容をまとめて発表してみよう。

〈文学〉の領域を更新する

私たちが〈文学〉に抱くイメージとはどのようなものか。まずは夏目漱石や樋口一葉、あるいはシェイクスピアやカフカ、また、マスメディアや書店では現代作家の活躍が目に入ることだろう。半年に一度はニュースを賑わす、純文学の登龍門とされる芥川龍之介賞や、エンターテイメントの功労賞と言える直木三十五賞の存在は大きい。ある辞書は、〈文学（literature）〉とは「想像の力を借り、言語によって外界および内界を表現する芸術作品」であると定義する。人間の想像力は、絶え間なく作品を、さらに新たな芸術ジャンルをも生み続けてきた。そして他の領域と交流することで、〈文学〉は自らを更新してきたのである。

十九世紀アメリカの文学者エドガー・アラン・ポーは、理知による美と驚きを重視して史上初の推理小説を発表し、同時にSF（サイエンス・フィクション）の礎を築いたとされる。ドストエフスキー『罪と罰』もポーの影響を受けたし、日本ではその名にあやかった江戸川乱歩が、谷崎潤一郎の耽美を享受しつつ、ミステリーというジャンルを定着させるために多方面で活躍した。安部公房は、ポーから得た「仮説の文学」という想像力優位の着想によって黎明期の日本SFに伴走し、星新一は、乱歩がデビューを後押ししてショートショートの名手となり、SFというジャンルを人口に膾炙させた。文芸諸ジャンルは、複雑に絡み合いながら読者を増やしてきた。

現在、いわゆる純文学とエンターテイメントは相互浸透している。詩歌・小説・戯曲に限らず、二十世紀に隆盛を極めた映画やテレビドラマ、漫画やアニメーション、コンピューターゲームの中に、古来より〈文学〉が担ってきた要素が多様に受け継がれている。コンテンツという概念も流通し、文学作品の映画化やコミカライズといった脚色（アダプテーション）はますます盛んで、作家イメージもゲームなどのキャラクターに活用される。行き過ぎた商品化には弊害もあるが、他の領域に移植し再解釈することは、従来の文学観を揺さぶり、再創造をもたらす可能性を秘める。

私たちは、作品を介して〈この世界〉や〈この私〉を把握し理解していくために、〈文学〉同様に〈哲学〉も更新していく必要があるだろう。想像力を持つ人間にとって、手を動かすことと頭を働かせることは切り離せない。新しい作品や芸術ジャンルやメディア環境が登場するたびに、〈文学〉の境界は揺らぎ、〈文学〉の捉え方や考え方は変容していく。

地球から来た男

星 新一（ほし しんいち）

気がつくと、おれは野原に横たわっていた。砂漠でなく草がはえているだけ、まだましかもしれないと思った。いや、こうして呼吸していられることに、第一に感謝すべきだろう。

からだを起こし、あたりを見まわす。小さな丘が並んで、まわりを取りかこんでいる。おれのいるのは、くぼ地というべき場所だった。どこにも人影はない。当たり前のことだ。丘の上にあがり、むこうを眺めようかとも思ったが、その気にはならなかった。どうせ、ろくなものはないにきまっている。怪獣のたぐいに対面して悲鳴をあげるのは、少しでもおそいほうがいいというものだ。なにしろ、ここは他の惑星なのだから。

おれはまた寝そべり、空を見あげた。明るい薄曇りの空。かりに曇っていなくて夜だったとしても、おれには星座の知識など、まるでない。地球がどっちの方角なのか、見当のつけようがない。どっちをむいて望郷の念をいだけばいいのか、それすらわからないというわけだ。いたたまれない気分。さびしい。なんという残酷なことだ。おれをこんな目にあわせやがって。郷愁を持てあましながら、ここでいつまでもすごさなければならないとは。

いっそのこと、おれの過去の記憶をみんな消し、その上でこうしてくれたほうが、まだ人間的なあつかいといえる。まったく、ひどい話だ。おれはなにもかも思い出せるのだ。

おれは小さな調査会社につとめていた。商品についての消費者の感想とか、新製品の購買層とか、地区別の好みの差異とか、経営状態とか、さまざまな依頼を引き受け、調査するのが仕事だった。

ある日、[1]上役に呼ばれた。

初出『野性時代』昭和四十九（一九七四）年五月

1 上役　職場での地位が自分より上の人。上司。

問「郷愁を持てあま」すとは、どういうことか。

「出張してくれないか」
「いいですよ」
おれが承知すると、上役はある大企業の名をささやいてから言った。
「つぎつぎと新製品を出している会社だよ。そこの研究所でどんなものを開発中なのか、調べてくれ。競争相手の会社からの依頼なのだ」
「ははあ、産業スパイをやれと……」
「早くいえば、そういうことだ。成功したら謝礼をはずむという。たのむよ」
「まあ、なんとかやってみましょう」
おれはその研究所の所在地に出かけた。ホテルに腰をおちつけ、あちこち聞きまわったが、さすがに機密保持の管理がゆきとどいていて、情報はさっぱり入手できない。こうなったら、潜入して調べる以外にない。おれは町で知りあった所員のひとりに酒をすすめ、酔いつぶし、身分証明証とバッジとを手に入れ……。
うまいぐあいに研究所の門を入れたというものの、内部の警戒もこれまた厳重。たちまちパトロールの守衛にとっつかまってしまった。建物の一室に連行された。保安部門の責任者らしいのが、おれに言った。
「おまえ、産業スパイだな」
「まあ、そんなところで。ちがうと弁解しても、聞いてはくれないでしょう」
「犯行をみとめたな。重罪だ。処罰する」
「処罰ですって。ぶんなぐるかどうかするんですか。暴力はいけませんよ。そもそも、そんなことをする権限はないはずだ。警察へ突き出すというのなら、話はわかります。しかし、まだなんの情報も盗んでいない。微罪釈放になるにきまっている」
「甘く考えるな。企業には自己の機密を防衛する権利があるんだ」
「いったい、わたしをどうしようと……」
「追放の刑に処す」
「なあんだ、大げさな表現ですが、つまりは追いかえすということですね」
「ほっとするな。追いかえしても、またやってくるだろう。それでは困るのだ。二度と来られないようにする。文句を言いに戻れないところへ追放するのだ」
「そんなところがありますか」
「あるとも、地球外へ追放する」
「まさか……」

笑いかけるおれに、相手は言った。

「かなり前に、この研究所でテレポーテーション装置を開発した。画期的な発明にはちがいないが、重大な欠点があった。この地球上で使えればいいのだが、どう改良しても、近距離ではうまくいかないのだ。ほかの星に送る役にしか立たない。そのため、この研究は中止になった。しかし、こういう時の役に立つ」

「なんです、そのテレポとかいうのは」

「物質を電波に変え、到着地で再構成させることだ。あっというまに、ものを遠くに移してしまう。まあ、そんな原理の説明は、この際どうでもいい。つまり、それを使っておまえをほかの星に追放してしまうというわけだ。どんなところか知らないが、そこがいい星であるよう祈ってやるよ」

事態が少しのみこめ、おれは青くなった。

「そんな無茶な。ひどすぎる。わたしには妻子もある。別れの言葉もかわさせないなんて」

「同情はするよ。しかし、それを許してみろ。たちまち警察ざたになるし、ここの企業の秘密も守れない。あきらめてくれ」

「いやだ、助けてくれ……」

「じたばたしてもむだだ。テレポーテーション装置にかける前に、まず注射をする。うまく電波に変わりやすくするためにな」

「やめてくれ……」

必死にあばれたが、おれは押さえつけられ、注射をされた。恐怖と不安のなかで、しだいに気が遠くなってゆく。まさか、こんな目にあわされるとは。おれは電気的なショックを感じた……。

そして、われにかえったら、この野原に横たわっていたというわけなのだ。

そんなことを、おれはくりかえし回想しつづけた。といって、いつまでも寝そべったままでもいられない。腹もすいてきたし、のどもかわいてきた。なんとかここで生きてゆく手段を見つけなければならない。いずれ死ぬにせよ、この未知の惑星をこの目で見きわめておきたい。

立ちあがり、歩き、丘をのぼる。どうせ、ろくな光景は展開していないにきまっている。しかし、丘の上にたどりつくと、その思いはいい方に裏切られた。地球と大差ない眺めだったのだ。畑があり、そのあいだには道もあった。

ということは、ここにも住民がいるとの証明になる。どんなやつらだろう。善良であればいいが。しばらくたたずんで

いると、人影が見えた。道を歩いてくる。おれは思わず丘をかけおり、そいつに近づいた。地球人的な服をつけた男だった。しかし、そこで気がつく。どう話しかけたものかと。言葉の通じるわけがない。

相手はおれの顔をふしぎそうに見ていたが、やがて口を開いた。

「道に迷ったのですか」

「あ、言葉が通じる……」

「妙なことをおっしゃる」

「もしかしたら、あなたもテレポ装置で送られてきた……」

「なんのことやら、わかりませんな」

しかし、いずれにせよ、ありがたかった。ここの住民はテレパシー能力を持っていて、おれの内心を読み、その言語で話しかけてきたのだろうか。相手は言った。

「どこからいらっしゃったのですか」

「驚かないで下さい。決して、驚いたり笑ったりしないで下さいよ。信じられないかもしれませんが、これは重大なことなのです。わたしは遠くから来たのです。とてつもなく遠くから。どこからだと思いますか。わからないでしょうね。言いましょう。地球という星からですよ」

相手はいくらか緊張しかけたが、おれが結論を言うと、もとの表情に戻った。

「あ、そうですか」

「あっけない返事ですね。少しは驚いてくれるかと思っていたのに。宇宙人という、奇異な目で見られなくてすみ、ありがたいと感じるべきなのだろうか。それにしても、わたしはいま、どこにいるのだろう。いったい、ここはなんという星です。答えてもらっても、どうしようもないことかもしれないが、ぜひ知りたい。ここはなんという星です」

「地球ですよ」

「地球……」

おれはその言葉を、口のなかで何回かつぶやいてみた。どういうことなのだ、これは。そして、つまらない質問をしたものだと気がついた。地球とは〝自分たちの住むこの星〟という意味ではないか。ほかに表現のしようがない。相手は言った。

「お疲れのようですね。駅まで連れていってあげましょう」

「ありがとう。案内して下さい」

進むにつれ、人家が見えてきた。そのへんに書いてある文字も読める。ここは地球と同じといっていい程度の文明を持つ星のようだ。駅のそばに来た時、おれは聞いてみた。

「あのレストランで食事をしたいのだが」

「なにかお困りのことでも……」
「こんな紙幣しかないんだが……」
おれがポケットから出した紙入れをのぞいて、相手はうなずいた。
「それだけあれば大丈夫ですよ」
「それは助かった……」
宇宙には無数の星がある。そのなかには、地球とそっくりの星もある。そんな話を、おれは何度も聞かされたし、本で読みもしたものだった。どうやら、そこへ来てしまったらしい。まさに幸運というべきだろう。
食事はおれの口に合った。また値段もほどほどだった。レストランを出て、おれは駅に入る。壁にはってある地図をながめる。なんと、それは見なれたものだった。おれは驚くと同時に、それでいいのだという気にもなった。ここは地球そっくりの星なのだ。
おれは自分の住んでいた都市と同じ名の駅をみつけ、そこまでの切符を買い、乗車した。窓のそとを流れる景色は、これまた親しい感じのものだった。
これでいいのだと思うものの、一方、異様な気分も押さえきれなかった。なにしろ、こんなにまで地球そっくりの星。街を歩いていて、自分そのものに出あったようなものだ。心のなかが、むずむずする。
都市に着く。おれの住んでいた地球のそれと、まったく同じ。地球にいるのだという錯覚におちいりさえする。大ぜいの人びと。しかし、そのなかに、おれの知り合いはひとりもいないのだ。そう考えると、浮きあがったとでも形容すべきか、仲間はずれの悲しい気持ちになる。
しらずしらずのうちに、足は自分の家の方角に進んでいる。そこでは、自分そっくりの人物が、妻子とともに暮らしているはずだ。訪れたら、そいつはさぞ驚くことだろう。悪いような気もするが、会って見たいという好奇心は押さえられない。夕ぐれの時刻になっていた。
そこは、ある団地の二階。おれはドアの前に立ち、ブザーを押す。なかで女の声がした。
「どなた……」
「ご主人はおいでですか」

問「その思いは…裏切られた」（六一・下18）とあるが、なぜ、そのように思ったのか。
問「それでいいのだという気にもなった」のは、なぜか。
問「地球とは…意味ではないか」と思ったのは、なぜか。
問この「好奇心は押さえられない」のは、なぜか。

「いま出張中ですが……」
あ、そうかと、おれは思った。ここは鏡のむこうの世界のように、地球そっくりの星なのだ。すると、この家の主人は、おれと同じように出張にでかけ、そこでへまをしてとっつかまり……。
「お気の毒なことですが……」
「え、主人の身になにか……」
ドアが開き、緊張した顔の女があらわれたが、すぐに笑い声となった。
「……なんだ、あなただったのね。おかえりなさい。たちの悪いいたずらは、なさらないでよ。びっくりしたわ」
「それが、その……」
おれは同情した。この女、自分の亭主がこの星から追放されたことを、知らずにいる。そして、地球から追放されてきたおれを、自分の夫と思いこんでいるのだ。
「そんなとこに立ったままでいないで、なかへお入りなさいよ」
「ああ……」
おれはそうした。事実を話して相手を悲しませるのも悪い。それに、信じてくれるかどうかも、うたがわしい。また、この星で生活してゆくのに、ここの亭主になりすますのが最も容易な方法なのだ。
夕食となる。三歳になるむすこ。おれを父親と思いこんでいる。テレビ。そのへんにある雑誌。それらを見ているうちに、おれは地球に残してきた妻子のことを思い出した。いまごろ、どうしているだろう。
「どうなさったの、涙ぐんだりして」
「いや、その、なんでもないよ」
「きっと出張で疲れたのよ。きょうは早くおやすみになったら」
「そうしよう」
しかし、その夜、おれはなかなか眠れなかった。他の星での第一夜だ。すぐ安らかに眠れるわけがない。
朝になる。
「あなた、起きなさいよ。会社におくれるわよ」
「そうだな……」
はるか遠い星へ着いてそうそう、つぎの日から働くことになるとはな。しかし、それをする以外に、おれの生きてゆける道は思い浮かばなかった。ここは地球と同じすぎる。いくらかでもちがっていてくれれば、おれは地球についてくわしく話し、宇宙からの来訪者としての特別な待遇を受けられるのだろうが。

会社がどこにあるのか、おれはよく知っている。そして、上役や同僚がどんなやつかも。上役がおれを見て言った。

「どうだった、成果は……」

「だめでした。とてもむりです。警戒厳重、たちまちとっつかまり、ひどい目に……」

それは遠い星、地球でのできごとだ。しかし、ひどい目にあったことは事実。そう答える以外になかった。

「ごくろうだった。まあ、いいさ。気にするな。いずれかわりの者を派遣しよう」

「それはやめたほうが……」

おれのような目にあうかもしれない。

「なぜだね」

「それは……」

おれは答えに困った。地球にいるような気分で、第二の犠牲者が出ることを心配してしまったのだ。この星でなら、そうはならないですむかもしれない。

「気にするなよ」

と上役はくりかえした。おれは仕事に戻る。すべて手なれた仕事だった。地球でのそれと、なにかちがった点があるかと気をつけて調べたが、まったくなかった。変化のない毎日がはじまり、つづいてゆく。

しかし、それはあくまで外見だけのこと。内心は孤独だった。だれもがおれを普通にあつかってくれる。しかし、だれひとり、おれが地球から来た者だと気づかないでいる。すまない気分。だから、親しくされればされるほど、気が重い。理解されない悲しさ。

同僚が言った。

「いつかの出張以来、なんだか沈んでいるようだぜ」

「ああ……」

「どこか悪いんじゃないのか。医者にみてもらえよ」

おれはそれに従った。

「どうなさいました」

医者に聞かれ、おれは言った。

「わたしは孤独なのです」

「だれでもそう感じていますよ。もっと具体的に、くわし

問「この女、…思いこんでいるのだ」と思ったのは、なぜか。

問「すまない気分」になるのは、なぜか。

問この「孤独」とは、どのようなものか。

くお話し下さい」

「じつは……」

おれは、ありのままを話した。医者はもっともらしい表情でうなずいてくれた。しかし、内心では信じていないことが、おれにはよくわかった。医者は言う。

「なるほど、なるほど。で、この星に来られてから、生活上なにか不便なことでも……」

「べつに。しかし、わたしの言いたいのは、そんな点じゃないんですよ。故郷の地球が恋しくてならないのです。理屈じゃないんです。わかって下さいよ」

「わかりますよ。しかし、こう考えたらどうでしょう。ここが、すなわち、あなたの故郷の地球だと。テレポなんとかのことは夢だったと。努力すれば、できるはずです」

「先生、それは無理ですよ。ちがう惑星へ送られ、そこを故郷と思えだなんて」

「困りましたな。いま、あなたは、ちがう惑星とおっしゃった。どこがどうちがうのか、その指摘をして下さい。そうなれば、もっとご相談に乗ってあげます」

「はあ……」

おれは引きあげた。ちがいが発見できるかもしれないと思いながら。しかし、それは、そう簡単ではなかった。この星は、なにからなにまで、地球そっくりなのだ。にくらしいほど、巧妙にできている。いらいらし、腹が立ちさえする。おれの手におえないのだ。医者へ行って話す材料もない。

おれは思いつき、旅に出た。あの大企業の研究所のある場所へだ。それは、そこにあった。おれは面会を求め、保安部門の責任者に言った。



月から見た地球

「先日はお手数をおかけしました」
「さあ、なんのことやら、よくわかりませんな」
「この建物のなかに、テレポーテーション装置とかがあるはずだ」
「聞いたこともない名ですな」
「企業の秘密なんだろうが、あるはずだ。それでおれを、もとの地球という星へ送りかえしてくれ」
「ここは地球ですよ」
「おれの故郷の地球へだ。たのみます。なんとかお願いします」
「できることなら、ご希望をかなえてあげたい。しかし、あなたはその、テレポ装置とかを、ごらんになったのですか」
「いや……」
「お気の毒ですが……」
とりつくしまがなかった。帰る方法はないのだ。といって、この異境に順応もできない。おれは心を持てあましている。あれから何年ぐらいたったろう。おれはまだ、地球に帰れずにいる。故郷の妻子はどうしているだろう。そう思うたびに、どこからともなく声が聞こえてくる。
「住みごこちはどうだい」
見まわすが、だれもいない。幻聴というのかもしれない。ここの住みごこち、必ずしも悪くない。しかし、地球はおれの故郷の星なのだ。
こんなおれにも、少しだけ心の休まる時がある。仲間ができたのだ。いつだったか、どこかのバーで知りあったやつだ。地球で税務署員だったそうだ。あの大企業の研究所へ調べに行った時、おれと同様にとっつかまり、むりやりここへ追放されてしまったという。彼はここでも同じ職についている。
おれたちは〈地球人の会〉というのをこしらえ、時どき会っている。そのうち、この仲間もふえるのではないだろうか。
会といっても、いっしょに酒を飲むだけのことだ。そして、遠くにある故郷、地球のことの思い出を話しあう。そんな夜は、おれたちの心のなかで、なつかしさがとめどなく波をうちつづける。

問 医者が「もっとご相談に乗ってあげます」と言ったのは、なぜか。
問 「できることなら、…ごらんになったのですか」というせりふには、どのような効果があるか。
問 「心を持てあま」すとは、どういうことか。
問 なぜ、「少しだけ」なのか。



星　新一（ほし しんいち）　大正十五（一九二六）年～平成九（一九九七）年。小説家。東京都の生まれ。日本におけるSFジャンルのパイオニアとして掌編小説を次々に発表、昭和五十八年には一〇〇一編を越え、「ショートショートの神様」と呼ばれ多くの読者に恵まれた。作品にショートショート集『ボッコちゃん』『妄想銀行』『未来いそっぷ』などのほか、時代小説やエッセイ、父の星一（はじめ）を描いたノンフィクション『人民は弱し　官吏は強し』もある。本文は『地球から来た男』（昭和五十八（一九八三）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1「おれ」の推論がどのように変化していくのかをまとめ、そこにはどのような効果があるか、考えてみよう。

2 地球そっくりの星が地球を含めて二個の場合と、三個の場合、そして百個の場合では、仮にそれぞれの「おれ」が故郷の地球に帰れたとして、どのような違いが生じるだろうか、考えてみよう。

3「〈地球人の会〉」（六七・下12）の会員数がどんどん増えたとしても、根本的に「おれ」が安らぐことができない理由を考えてみよう。

4「小さな調査会社」（五九・下10）や「ある大企業」（六〇・上3）など、固有名詞を用いず、文章全体でも簡潔な表現ばかりを用いているが、そのことにはどのような効果があるか、考えてみよう。

◆言葉と表現

1「いっそのこと」（五九・下6）「いずれにせよ」（六二・上12）を効果的に用いて、短文を作ってみよう。

◆言語活動

1「おれ」と同じように、地球そっくりの星にやってきた（と確信する）キャラクターが登場するストーリーを考える場合、どのような設定や状況だと興味深いものになると思うか、その理由や根拠、ストーリーのテーマなども示しながら話し合ってみよう。

押絵と旅する男

江戸川乱歩

この話が私の夢か私の一時的狂気の幻でなかったならば、あの押絵[1]と旅をしていた男こそ狂人であったに相違ない。だが、夢が時として、どこかこの世界と食い違った別の世界を、チラリとのぞかせてくれるように、また狂人が、我々の全く感じえぬ物事を見たり聞いたりすると同じに、これは私が、不可思議な大気のレンズ仕掛けを通して、一*刹那、この世の視野の外にある、別の世界の一隅を、ふと隙見したのであったかもしれない。

いつともしれぬ、ある暖かい薄曇った日のことである。そのとき、私はわざわざ魚津[2]へ蜃気楼[3]を見に出掛けた帰り道であった。私がこの話をすると、時々、お前は魚津なんかへ行ったことはないじゃないかと、親しい友達に突っ込まれることがある。そう言われてみると、私はいつの何日に魚津へ行ったのだと、ハッキリ証拠を示すことができぬ。それではやっぱり夢であったのか。だが私はかつて、あのように濃厚な色彩を持った夢を見たことがない。夢の中の景色は、映画と同じに、全く色彩を伴わぬものであるのに、あの折の汽車の中の景色だけは、それもあの毒々しい押絵の画面が中心になって、紫と臙脂[4]の勝った色彩で、まるで蛇の眼の瞳孔のように、生々しく私の記憶に焼きついている。着色映画の夢というものがあるのであろうか。

私はそのとき、生まれて初めて蜃気楼というものを見た。

初出『新青年』昭和四（一九二九）年六月

1 **押絵** 布細工の一種。人物・花などの絵柄の下絵に綿を含ませ、布で包む、レリーフ状の細工。
2 **魚津** 富山県東部にある地名。富山湾に臨む町。春に蜃気楼が見られることで有名。
3 **蜃気楼** 大気の下層の温度差により、地上の物体が浮き上がって見えたり、逆さまに見えたり、遠くの物体が近くに見えたりする現象。
4 **臙脂** 黒みを帯びた濃い赤色。

＊ 刹那

蛤の息の中に美しい竜宮城の浮かんでいる、あの古風な絵を想像していた私は、本物の蜃気楼を見て、膏汗のにじむような、恐怖に近い驚きに撃たれた。

魚津の浜の松並木に豆粒のような人間がウジャウジャと集まって、息を殺して、眼界一杯の大空と海面とを眺めていた。私はあんな静かな、[5]唖のようにだまっている海を見たことがない。日本海は荒海と思い込んでいた私には、それもひどく意外であった。その海は、灰色で、全く小波一つなく、無限の彼方にまで打ち続く沼かと思われた。そして、太平洋の海のように、水平線はなくて、海と空とは、同じ灰色に溶け合い、厚さのしれぬ靄に覆いつくされた感じであった。空だとばかり思っていた、上部の靄の中を、案外にもそこが海面であって、フワフワと幽霊のような、大きな白帆が滑っていったりした。

蜃気楼とは、乳色のフィルムの表面に墨汁をたらして、それが自然にジワジワとにじんでいくのを、途方もなく巨大な映画にして、大空に映し出したようなものであった。

遥かな能登半島の森林が、食い違った大気の変形レンズを通して、すぐ目の前の大空に、焦点のよく合わぬ顕微鏡の下の黒い虫みたいに、曖昧に、しかもばかばかしく拡大されて、見る者の頭上におしかぶさってくるのであった。それは、妙な形の黒雲と似ていたけれど、黒雲なればその所在がハッキリ分かっているに反し、蜃気楼は、不思議にも、それと見る者との距離が非常に曖昧なのだ。遠くの海上に漂う大入道のようでもあり、ともすれば、眼前[6]一尺に迫る異形の靄かと見え、はては、見る者の角膜の表面に、ポッツリと浮かんだ、一点の曇りのようにさえ感じられた。この距離の曖昧さが、蜃気楼に、想像以上の不気味な気違いめいた感じを与えるのだ。

曖昧な形の、真っ黒な巨大な三角形が、塔のように積み重なっていったり、またたく間にくずれたり、横に延びて長い汽車のように走ったり、それがいくつかにくずれ、立ち並ぶ檜の梢と見えたり、じっと動かぬようでいながら、いつとはなく、全く違った形に化けていった。

蜃気楼の魔力が、人間を気違いにするものであったなら、恐らく私は、少なくとも帰り道の汽車の中までは、その魔力を逃れることができなかったのであろう。二時間の余も立ち尽くして、大空の妖異を眺めていた私は、その夕方魚津を立って、汽車の中に一夜を過ごすまで、全く日常と異なった気持ちでいたことは確かである。もしかしたら、それは[7]通り魔のように、人間の心をかすめ冒すところの、一時的狂気の類いででもあったであろうか。

魚津の駅から上野への汽車に乗ったのは、夕方の六時頃であった。不思議な偶然であろうか、あの辺の汽車はいつでもそうなのか、私の乗った二等車は、教会堂のようにガランとしていて、私の外にたった一人の先客が、向こうの隅のクッションにうずくまっているばかりであった。

汽車は淋(さび)しい海岸の、けわしい崖(がけ)や砂浜の上を、単調な機械の音を響かせて、はてしもなく走っている。沼のような海上の、靄の奥深く、黒血の色の夕焼けが、ボンヤリと感じられた。異様に大きく見える白帆が、その中を、夢のように滑っていた。少しも風のない、むしむしする日であったから、ところどころ開かれた汽車の窓から、進行につれて忍び込むそよ風も、幽霊のように尻切れとんぼであった。たくさんの短いトンネルと雪除(よ)けの柱*の列が、広漠たる灰色の空と海とを、縞目(しまめ)に区切って通り過ぎた。

8親不知(おやしらず)の断崖を通過する頃、車内の電灯と空の明るさとが同じに感じられたほど、夕闇が迫ってきた。ちょうどその時分向こうの隅のたった一人の同乗者が、突然立ち上がって、クッションの上に大きな9黒繻子(くろじゅす)の風呂敷を広げ、窓に立てかけてあった、二尺に三尺ほどの、扁平(へんぺい)な荷物を、その中へ包み始めた。それが私に何とやら奇妙*な感じを与えたのである。

その扁平なものは、たぶん額に相違ないのだが、それの表側のほうを、何か特別の意味でもあるらしく、窓ガラスに向けて立てかけてあった。一度風呂敷に包んであったものを、わざわざ取り出して、そんなふうに外に向けて立てかけたものとしか考えられなかった。それに、彼が再び包むときにチラと見たところによると、額の表面に描かれた極彩色の絵が、妙に生々しく、何となく世の常ならず見えたことであった。

私はあらためて、この変てこな荷物の持ち主を観察した。そして、持ち主その人が、荷物の異様さにもまして、一段と異様であったことに驚かされた。

5 唖　口をきくことができない人。差別的な表現として、現在では使われない。
6 一尺　「尺」は長さの単位。一尺は約三〇・三センチメートル。ここでは間近であることの比喩。
7 通り魔　一瞬の間に通り過ぎて、出会った人に災厄を与えるという魔物。
8 親不知　新潟県南西部、糸魚川(いといがわ)市の北西にある日本海に臨む断層海岸。
9 黒繻子　「繻子」は、滑らかで、光沢のある織物。サテン。
＊ 眼前　尻切れとんぼ　扁平

問「恐怖に近い驚きに撃たれた」のは、なぜか。
問「奇妙な感じを与えた」のは、なぜか。

彼は非常に古風な、我々の父親の若い時分の色あせた写真でしか見ることのできないような、襟の狭い、肩のすぼけた、黒の背広服を着ていたが、しかしそれが、背が高くて、足の長い彼に、妙にシックリと合って、甚だ意気にさえ見えたのである。顔は細面で、両眼が少しギラギラし過ぎていたほかは、いったいによく整っていて、スマートな感じであった。そして、綺麗に分けた頭髪が、豊かに黒々と光っているので、一見四十前後であったが、よく注意して見ると、顔中に夥しい皺があって、一飛びに六十くらいにも見えぬことはなかった。この黒々とした頭髪と、色白の顔面を縦横にきざんだ皺との対照が、初めてそれに気づいたとき、私をハッとさせたほども、非常に不気味な感じを与えた。

彼は丁寧に荷物を包み終わると、ひょいと私のほうに顔を向けたが、ちょうど私のほうでも熱心に相手の動作を眺めていたときであったから、二人の視線がガッチリとぶつかってしまった。すると、彼は何か恥ずかしそうに唇の隅を曲げて、かすかに笑って見せるのであった。私も思わず首を動かして挨拶を返した。

それから、小駅を二、三通過する間、私たちはお互いの隅に座ったまま、遠くから、時々視線をまじえては、気まずくそっぽを向くことを、繰り返していた。外は全く暗闇になっていた。窓ガラスに顔を押しつけてのぞいてみても、時たま沖の漁船の舷灯が遠く遠くポッツリと浮かんでいるほかには、全く何の光もなかった。はてしのない暗闇の中に、私たちの細長い車室だけが、たった一つの世界のように、いつまでもいつまでも、ガタンガタンと動いていった。そのほの暗い車室の中に、私たち二人だけを取り残して、全世界が、あらゆる生き物が、跡方もなく消えうせてしまった感じであった。

私たちの二等車には[10]、どの駅からも一人の乗客もなかったし、列車ボーイや車掌も一度も姿を見せなかった。そういうことも今になって考えてみると、甚だ奇怪に感じられるのである。

私は、四十歳にも六十歳にも見える、西洋の魔術師のような風采のその男が、だんだん怖くなってきた。怖さというものは、ほかにまぎれる事柄のない場合には、無限に大きく、身体中いっぱいに広がっていくものである。私はついには、産毛の先までも怖さが満ちて、たまらなくなって、突然立ち上がると、向こうの隅のその男のほうへツカツカと歩いていった。その男がいとわしく、恐ろしければこそ、私はその男に近づいていったのであった。

私は彼と向き合ったクッションへ、そっと腰をおろし、近寄ればいっそう異様に見える彼の皺だらけの白い顔を、私自

身が妖怪ででもあるような、一種不可思議な、顚倒（てんとう）した気持ちで、目を細く息を殺してじっとのぞき込んだものである。

男は、私が自分の席を立ったときから、ずっと目で私を迎えるようにしていたが、そうして私が彼の顔をのぞき込むと、待ち受けていたように、顎で傍らの例の扁平な荷物を指し示し、何の前置きもなく、さもそれが当然の挨拶ででもあるように、

「これでございますか」

と言った。その口調が、あまり当たり前であったので、私はかえって、ギョッとしたほどであった。

「これがご覧になりたいのでございましょう」

私が黙っているので、彼はもう一度同じことを繰り返した。

「見せてくださいますか」

私は相手の調子に引き込まれて、つい変なことを言ってしまった。私は決してその荷物を見たいために席を立ったわけではなかったのだけれど。

「喜んでお見せ致しますよ。わたくしは、さっきから考えていたのでございますよ。あなたはきっとこれを見においでなさるだろうとね」

男は——むしろ老人と言ったほうがふさわしいのだが——そう言いながら、長い指で、器用に大風呂敷をほどいて、その額みたいなものを、今度は表を向けて、窓の所へ立てかけたのである。

私は一目チラッと、その表面を見ると、思わず目をとじた。なぜであったか、その理由は今でも分からないのだが、何となくそうしなければならぬ感じがして、数秒の間目をふさいでいた。再び目を開（あ）いたとき、私の前に、かつて見たことのないような、奇妙なものがあった。と言って、私はその「奇妙」な点をハッキリと説明する言葉を持たぬのだが。

額には歌舞伎芝居の御殿の背景みたいに、幾つもの部屋を打ち抜いて、極度の遠近法で、青畳と格子天井が遥か向こうのほうまで続いているような光景が、藍を主とした泥絵[11]の具で毒々しく塗りつけてあった。左手の前方には、墨黒々と不細工な書院ふうの窓が描かれ、同じ色の文机（ふづくえ）が、そのそばに角度を無視した描き方で、据えてあった。それらの背景は、あの絵馬札の絵の独特な画風に似ていたと言えば、一番よく

10 列車ボーイ　一・二等車の乗客の身の回りの世話などを仕事とした少年。

問「奇妙なもの」とは、何か。

11 泥絵の具　粉末状の安価な絵の具。水に溶いて泥状にして用いる。

分かるであろうか。

その背景の中に、一尺くらいの丈の二人の人物が浮き出していた。浮き出していたと言うのは、その人物だけが、押絵細工でできていたからである。[12]黒天鵞絨の古風な洋服を着た白髪の老人が、窮屈そうに座っていると、(不思議なことには、その容貌が、髪の色を除くと、額の持ち主の老人にそのままなばかりか、着ている洋服の仕立て方までそっくりであった)[13]緋鹿の子の振り袖に、黒繻子の帯の映りのよい十七、八の、水のたれるような[14]結綿の美少女が、何とも言えぬ嬌羞を含んで、その老人の洋服の膝にしなだれかかっている、謂わば芝居の濡れ場に類する画面であった。

洋服の老人と色娘の対照と、甚だ異様であったことは言うまでもないが、だが私が「奇妙」に感じたというのはそのことではない。

背景の粗雑に引きかえて、押絵の細工の精巧なことは驚くばかりであった。顔の部分は、白絹は凹凸を作って、細い皺まで一つ一つ現してあったし、娘の髪は、本当の毛髪を一本一本植えつけて、人間の髪を結うように結ってあり、老人の頭は、これもたぶん本物の白髪を、丹念に植えたものに相違なかった。洋服には正しい縫い目があり、適当な場所に粟粒ほどの釦までつけてあるし、娘の乳のふくらみと言い、腿のあたりの艶めいた曲線と言い、こぼれた[15]緋縮緬、チラと見える肌の色、指には貝殻のような爪が生えていた。虫眼鏡でのぞいて見たら、毛穴や産毛まで、ちゃんと拵えてあるのではないかと思われたほどである。

私は押絵と言えば、羽子板の役者の似顔の細工しか見たことがなかったが、そして、羽子板の細工にも、随分精巧なものもあるのだけれど、この押絵は、そんなものとは、まるで比較にもならぬほど、巧緻を極めていたのである。恐らくその道の名人の手に成ったものであろうか。だが、それが私のいわゆる「奇妙」な点ではなかった。

額全体がよほど古いものらしく、背景の泥絵の具はところどころはげ落ちていたし、娘の緋鹿の子も、老人の天鵞絨も、見る影もなく色あせていたけれど、はげ落ち色あせたなりに、名状し難き毒々しさを保ち、ギラギラと、見る者の眼底に焼きつくような生気を持っていたことも、不思議と言えば不思議であった。だが、私の「奇妙」という意味はそれでもない。

それは、もし強いて言うならば、押絵の人物が二つとも、生きていたことである。

[16]文楽の人形芝居で、一日の演技のうちに、たった一度か二度、それもほんの一瞬間、名人の使っている人形が、ふと神の息吹をかけられでもしたように、本当に生きていることが

あるものだが、この押絵の人物は、その生きた瞬間の人形を、命の逃げ出す隙を与えず、とっさの間に、そのまま板にはりつけたという感じで、永遠に生きながらえているかと見えたのである。

私の表情に驚きの色を見て取ったからか、老人は、いとたのもしげな口調で、ほとんど叫ぶように、

「アア、あなたは分かってくださるかもしれません」

と言いながら、肩から下げていた、黒革のケースを、丁寧に鍵で開いて、その中から、いとも古風な双眼鏡を取り出してそれを私のほうへ差し出すのであった。

「コレ、この遠眼鏡で一度ご覧くださいませ。イエ、そこからでは近すぎます。失礼ですが、もう少しあちらのほうから。さようちょうどその辺がようございましょう」

まことに異様な頼みではあったけれど、私は限りなき好奇心のとりことなって、老人の言うがままに、席を立って額から五、六歩遠ざかった。老人は私の見やすいように、両手で額を持って、電灯にかざしてくれた。今から思うと、実に変てこな、気違いめいた光景であったに相違ないのである。

遠眼鏡というのは、恐らく二、三十年も以前の舶来品であろうか、私たちが子供の時分、よく眼鏡屋の看板で見かけたような、異様な形のプリズム双眼鏡であったが、それが手摺れのために、黒い覆い皮がはげて、ところどころ真鍮の生地が現れているという、持ち主の洋服と同様に、いかにも古風な、もの懐かしい品物であった。

私は珍しさに、しばらくその双眼鏡をひねくり廻していたが、やがて、それをのぞくために、両手で眼の前に持っていったときである。突然、実に突然、老人が悲鳴に近い叫び声を立てたので、私は、危うく眼鏡を取り落とすところであった。

「いけません。いけません。それはさかさですよ。さかさにのぞいてはいけません。いけません」

老人は、真っ青になって、目をまんまるに見開いて、しきりと手を振っていた。双眼鏡を逆にのぞくことが、なぜそれほど大変なのか、私は老人の異様な挙動を理解することがで

12 **黒天鵞絨**　「天鵞絨」は、滑らかで光沢のある織物。ベルベット。
13 **緋鹿の子**　「鹿の子」は、鹿の背のまだらに似た絞り染め。緋色はオレンジがかった鮮やかな赤い色。
14 **結綿**　若い女性が結う髪型。
15 **緋縮緬**　「縮緬」は、表面に細かい不規則なシワ模様のある絹織物。注13参照。
16 **文楽**　人形浄瑠璃の通称。

きなかった。

「なるほど、なるほど、さかさでしたっけ」

私は双眼鏡をのぞくことに気を取られていたので、この老人の不審な表情を、さして気にもとめず、眼鏡を正しい方向に持ち直すと、急いでそれを目に当てて押絵の人物をのぞいたのである。

焦点が合っていくにしたがって、二つの円形の視野が、徐々に一つに重なり、ボンヤリとした虹のようなものが、だんだんハッキリしてくると、びっくりするほど大きな娘の胸から上が、それが全世界でもあるように、私の眼界いっぱいに広がった。

あんなふうな物の現れ方を、私はあとにも先にも見たことがないので、読む人に分からせるのが難儀なのだが、それに近い感じを思い出してみると、例えば、舟の上から、海にもぐった蜑(あま)[17]の、ある瞬間の姿に似ていたとでも形容すべきであろうか。蜑の裸身(はだかみ)が、底のほうにあるときは、青い水の層の複雑な動揺のために、その身体が、まるで海草のように、不自然にクネクネと曲がり、輪郭もぼやけて、白っぽいお化けみたいに見えているが、それが、つうッと浮き上がってくるにしたがって、水の層の青さがだんだん薄くなり、形がハッキリしてきて、ポッカリと水上に首を出すと、その瞬間、ハッと目が覚めたように、水中の白いお化けが、たちまち人間の正体を現すのである。ちょうどそれと同じ感じで、押絵の娘は、双眼鏡の中で、私の前に姿を現し、実物大の、一人の生きた娘として、蠢(うごめ)き始めたのである。

十九世紀の古風なプリズム双眼鏡の玉の向こう側には、全く私たちの思いも及ばぬ別世界があって、そこに結綿の色娘と、古風な洋服の白髪男とが、奇怪な生活を営んでいる。のぞいては悪いものを、私は今魔法使いにのぞかされているのだ。といったような形容のできない変てこな気持ちで、しかし私は憑(つ)かれたようにその不可思議な世界に見入ってしまった。

娘は動いていたわけではないが、その全身の感じが、肉眼で見たときとは、ガラリと変わって、生気に満ち、青白い顔がやや桃色に上気し、胸は脈打ち（実際私は心臓の鼓動をさえ聞いた）肉体からは縮緬(ちりめん)の衣裳を通して、むしむしと、若い女の生気が蒸発しているように思われた。

私はひと渡り、女の全身を、双眼鏡の先で、嘗(な)め廻してから、その娘がしなだれかかっている、仕合わせな白髪男のほうへ眼鏡を転じた。

老人も、双眼鏡の世界で、生きていたことは同じであったが、見たところ四十ほども年の違う、若い女の肩に手を回し

て、さも幸福そうな形でありながら、妙なことには、レンズ一杯の大きさに写った、彼の皺の多い顔が、その何百本の皺の底で、いぶかしく苦悶の相を現しているのである。それは、老人の顔がレンズのために眼前一尺の近さに、異様に大きく迫っていたからでもあったであろうが、見つめていればいるほど、ゾッと怖くなるような、悲痛と恐怖との混じり合った一種異様の表情であった。

それを見ると、私はうなされたような気分になって、双眼鏡をのぞいていることが、耐え難く感じられたので、思わず、目を離して、キョロキョロとあたりを見廻した。すると、それはやっぱり淋しい夜の汽車の中であって、押絵の額も、それをささげた老人の姿も、元のままで、窓の外は真っ暗だし、単調な車輪の響きも、変わりなく聞こえていた。悪夢から醒めた気持ちであった。

「あなた様は、不思議そうな顔をしておいでなさいますね」

老人は額を、元の窓のところへ立てかけて、席につくと、私にもその向こう側へ座るように、手真似をしながら、私の顔を見つめて、こんなことを言った。

「私の頭が、どうかしているようです。いやに蒸しますね」

私はてれ隠しみたいな挨拶をした。すると老人は、猫背になって、顔をぐっと私のほうへ近寄せ、膝の上で細長い指を合図でもするように、ヘラヘラと動かしながら、低い低い囁き声になって、

「あれらは、生きておりましたろう」

と言った。そして、さも一大事を打ち開けるといった調子で、いっそう猫背になって、ギラギラした目をまん丸に見開いて、私の顔を穴のあくほど見つめながら、こんなことをささやくのであった。

「あなたは、あれらの、本当の身の上話を聞きたいとはおぼしめしませんかね」

私は汽車の動揺と、車輪の響きのために、老人の低い、呟くような声を、聞き間違えたのではないかと思った。

「身の上話とおっしゃいましたか」

「身の上話でございますよ」。老人はやっぱり低い声で答えた。「殊に、一方の、白髪の老人の身の上話をでございますよ」

17 蜑　海に潜って貝類や海藻をとることを職業とする女性。海女。

問 「てれ隠しみたいな挨拶をした」のは、なぜか。

「若い時分からのですか」

私も、その晩は、何故か妙に調子はずれな物の言い方をした。

「ハイ、あれが二十五歳のときのお話でございますよ」

「是非うかがいたいものですね」

私は、普通の生きた人間の身の上話をでも催促するように、ごく何でもないことのように、老人をうながしたのである。すると、老人は顔の皺を、さも嬉しそうにゆがめて、「アア、あなたは、やっぱり聞いてくださいますね」と言いながら、さて、次のような世にも不思議な物語を始めたのであった。

「それはもう、一生涯の大事件ですから、よく記憶しておりますが、明治二十八年の四月の、兄があんなに（と言って彼は押絵の老人を指さした）なりましたのが、二十七日の夕方のことでございました。当時、私も兄も、まだ部屋[18]住みで、住居は日本橋通[19]三丁目でして、親爺が呉服商を営んでおりましたがね。何でも浅草の十二階[20]ができて、間もなくのことでございましたよ。だもんですから、兄なんぞは、毎日のようにあの凌雲閣[21]へ昇って喜んでいたものです。と申しますのが、兄は妙に異国物が好きで、新しがり屋でございましたからね。この遠眼鏡にしろ、やっぱりそれで、兄が外国船の船長の持ち物だったというやつを、横浜の支那人町の、変てこな道具屋の店先で、めっけてきましてね。当時にしちゃあ、随分高いお金を払ったと申しておりましたっけ」



のぞきからくり

老人は「兄が」と言うたびに、まるでそこにその人が座ってでもいるように、押絵の老人のほうに目をやったり、指さしたりした。老人は彼の記憶にある本当の兄と、その押絵の白髪の老人とを、混同して、押絵が生きて彼の話を聞いてでもいるような、すぐそばに第三者を意識したような話し方を

した。だが、不思議なことに、私はそれを少しもおかしいとは感じなかった。私たちはその瞬間、自然の法則を超越した、我々の世界とどこかで喰い違っているところの、別の世界に住んでいたらしいのである。

「あなたは、十二階へお昇りなすったことがおありですか。アア、おありなさらない。それは残念ですね。あれはいったいどこの魔法使いが建てましたものか、実に途方もない、変[22]てこれんな代物でございましたよ。表面は伊太利[23]（イタリー）の技師のバルトンと申すものが設計したことになっていましたがね。まあ考えてご覧なさい。その頃の浅草公園と言えば、名物がま[24]ず蜘蛛男（くもおとこ）の見世物（みせもの）、娘[25]剣舞に、玉乗り[26]、源水[27]の独楽廻（こままわ）しに、のぞきからくり[28]などで、せいぜい変わったところが、お富士[29]（ふじ）さまの作り物に、メーズ[30]と言って、八陣隠れ杉の見世物くらいでございましたからね。そこへあなた、ニョキニョキと、まあとんでもない高い煉瓦（れんが）造（づく）りの塔ができちまったんですから、驚くじゃございませんか。高さが四十六間[31]と申しますから、

18 **部屋住み**　成人でありながら、まだ親や兄弟のもとにいて、一家を構えていないこと。

19 **日本橋通**　東京都中央区（当時は日本橋区）の地名。

20 **浅草の十二階**　凌雲閣。通称「十二階」。高さ約六十七メートル、レンガ造りの塔。明治二十三（一八九〇）年に完成。日本初のエレベーターを備えた浅草のランドマークであった。関東大震災で瓦解した。浅草は、現在の東京都台東区にある地名。

21 **支那人町**　「支那」は中国の古称。「支那人」は、中国人に対して、かつて日本人が用いた呼称。中華街。

22 **変てこれん**　「へんてこりん」と同じ。

23 **伊太利の技師のバルトン**　実在のバルトンは、イギリス出身の衛生技師・写真研究家。

24 **蜘蛛男の見世物**　蜘蛛を連想させる肉体を持った人間を見せ物にする商売。

25 **娘剣舞**　詩吟に合わせて剣を振るい舞う剣舞を、若い女性が演じた。

26 **玉乗り**　大きな玉に人が乗り、その上で曲芸や踊りをする見せ物。

27 **源水の独楽廻し**　松井源水（生没年未詳）が、歯磨きを売るため、人集めに曲独楽回しをして見せた。

28 **のぞきからくり**　正面に絵看板を掲げた小さな屋台の眼鏡内部をのぞくと、両側に立つ男女が独特の節回しで語る物語に合わせて、画面が変わる仕組み。

29 **お富士さまの作り物**　明治二十（一八八七）年に建てられた人工の富士山。

30 **メーズ・八陣隠れ杉**　「メーズ」は、迷路状の遊戯施設。中央に植えられた高木を目指して迷宮状の狭路を進んでいく。「八陣隠れ杉」は、その名称。

31 **四十六間**　「間」は長さの単位。一間は約一・八メートル。

問 「私」が「ごく何でもないことのように、老人をうながした」のは、なぜか。

問 「私はそれを少しもおかしいとは感じなかった」という表現には、どのような効果があるか。

半丁[32]の余で、八角型の頂上が、唐人[33]の帽子みたいに、とんがっていて、ちょっと高台へ昇りさえすれば、東京中どこからでも、その赤いお化けが見られたものです。

今も申すとおり、明治二十八年の春、兄がこの遠眼鏡を手に入れて間もない頃でした。兄の身に妙なことが起こってまいりました。親爺なんぞ、兄め気でも違うのじゃないかって、ひどく心配しておりましたが、私もね、お察しでしょうが、ばかに兄思いでしてね、兄の変てこれんなそぶりが、心配でたまらなかったものです。どんなふうかと申しますと、兄はご飯もろくろく食べないで、家内の者とも口を利かず、家(うち)にいるときは一間にとじ籠もって考え事ばかりしている。身体は痩せてしまい、顔は肺病やみのように土気色で、目ばかりギョロギョロさせている。もっとも平常(ふだん)から顔色のいいほうじゃあござんせんでしたがね。それが一倍青ざめて、沈んでいるのですから、本当に気の毒なようでした。そのくせね、そんなでいて、毎日欠かさず、まるで勤めにでも出るように、おひるッから、日暮れ時分まで、フラフラとどっかへ出掛けるんです。どこへ行くのかって、聞いてみても、ちっとも言いません。母親が心配して、兄のふさいでいるわけを、手を変え品を変え尋ねても、少しも打ち明けません。そんなことが一月ほども続いたのですよ。

あんまり心配だものだから、私はある日、兄がいったいどこへ出掛けるのかと、ソッとあとをつけました。そうするように、母親が私に頼むもんですからね。兄はその日も、ちょうど今日のようなどんよりとした、いやな日でござんしたが、おひる過ぎから、その頃兄の工夫で仕立てさせた、当時としては飛び切りハイカラ[34]な、黒天鵞絨の洋服を着ましてね、この遠眼鏡を肩から下げ、ヒョロヒョロと、日本橋通りの、馬[35]車鉄道のほうへ歩いていくのです。私は兄に気どられぬように、ついていったわけですよ。よござんすか。しますとね、兄は上野行きの馬車鉄道を待ち合わせて、ひょいとそれに乗り込んでしまったのです。当今の電車と違って、次の車に乗ってあとをつけるというわけにはいきません。何しろ車台が少(すく)のござんすからね。私は仕方がないので母親にもらったお小遣いを奮発して、人力[36]車に乗りました。人力車だって、少し威勢のいい挽子(ひきこ)[37]なれば馬車鉄道を見失わないように、あとをつけるなんぞ、わけなかったものでございますよ。

兄が馬車鉄道を降りると、私も人力車を降りて、またテクテクとあとをつける。そうして、行きついた所が、なんと浅[38]草の観音様じゃございませんか。兄は仲店(なかみせ)[39]から、お堂の前を素通りして、お堂裏の見世物小屋の間を、人波をかき分けるようにしてさっき申し上げた十二階の前まで来ますと、石の

*

門を入って、お金を払って「凌雲閣」という額の上がった入口から、塔の中へ姿を消したじゃあございませんか。まさか兄がこんな所へ、毎日毎日通っていようとは、夢にも存じませんので、私はあきれてしまいましたよ。子供心にね、私はそのときまだ二十にもなってませんでしたので、兄はこの十二階の化け物に魅入られたんじゃないかなんて、変なことを考えたものですよ。

　私は十二階へは、父親につれられて、一度昇ったきりで、その後行ったことがありませんので、何だか気味が悪いように思いましたが、兄が昇っていくものですから、仕方がないので、私も、一階くらいおくれて、あの薄暗い石の段々を昇っていきました。窓も大きくございませんし、煉瓦の壁が厚うございますので、穴蔵のように冷々と致しましてね。それに日清戦争の当時ですから、その頃は珍しかった、戦争の油絵が、一方の壁にずっと懸け並べてあります。まるで狼みたいな、おっそろしい顔をして、吠えながら、突貫している日本兵や、剣つき鉄砲に脇腹をえぐられ、ふき出す血のりを両手で押さえて、顔や唇を紫色にしてもがいている支那兵や、ちょんぎられた弁髪の頭が、風船玉のように空高く飛び上がっているところや、何とも言えない毒々しい、血みどろの油絵が、窓からの薄暗い光線で、テラテラと光っているのでございますよ。その間を、陰気な石の段々が、蝸牛の殻みたいに、上へ上へと際限もなく続いております。本当に変てこれんな気持ちでしたよ。

　頂上は八角形の欄干だけで、壁のない、見晴らしの廊下になっていましてね、そこへたどりつくと、にわかにパッと明るくなって、今までの薄暗い道中が長うございましただけに、びっくりしてしまいます。雲が手の届きそうな低い所にあって、見渡すと、東京中の屋根がごみみたいに、ゴチャゴチャしていて、品川の御台場が、盆石のように見えております。

32 半丁　「丁」は「町」に同じで、距離の単位。一丁は六十間で、約一〇九メートル。　33 唐人　中国人のこと。　＊ 手を変え品を変え
34 ハイカラ　high collar（英語）。丈の高いカラー（襟）の意から転じて、西洋風を気取り、新しがって得意になること。
35 馬車鉄道　レールの上を走る馬車。「鉄道馬車」が一般名称。　36 人力車　人間が引く二輪の乗り物。　37 挽子　人力車を引く人。車夫ともいう。
38 浅草の観音様　浅草寺のこと。　39 仲店　浅草寺参道の商店街。　40 日清戦争　日本と清国との間で戦われた戦争（一八九四年～一八九五年）。
41 弁髪　男子の頭髪を編んで長く垂らしたもの。清朝時代の中国で強制された。　42 御台場　江戸幕府が海防に備えて築いた東京湾品川沖の砲台。

目まいがしそうなのを我慢して、下をのぞきますと、観音様の御堂だってずっと低い所にありますし、小屋掛けの見世物が、おもちゃのようで、歩いている人間が、頭と足ばかりに見えるのです。

頂上には、十人余りの見物が一かたまりになっておっかなそうな顔をして、ボソボソ小声で囁きながら、品川の海のほうを眺めておりましたが、兄はと見ると、それとは離れた場所に、一人ぼっちで、遠眼鏡を目に当てて、しきりと浅草の境内を眺め廻しておりました。それをうしろから見ますと、白っぽくどんよりとした雲ばかりの中に、兄の天鵞絨の洋服姿が、クッキリと浮き上がって、下のほうのゴチャゴチャしたものが何も見えぬものですから、兄だということは分かっていましても、何だか西洋の油絵の中の人物みたいな気持ちがして、神々しいようで、言葉を掛けるのもはばかられたほどでございましたっけ。

でも、母の言いつけを思い出しますと、そうもしていられませんので、私は兄の後ろに近づいて『兄さん何を見ていらっしゃいます』と声をかけたのでございます。兄はビクッとして、振り向きましたが、気まずい顔をして何も言いません。私は『兄さんのこのごろのご様子には、お父さんもお母さんも大変心配していらっしゃいます。毎日毎日どこへお出掛けなさるのかと不思議に思っておりましたら、兄さんはこんな所へ来ていらしったのでございますね。どうかそのわけを言ってくださいまし。日頃仲よしの私にだけでも打ち明けてくださいまし』と、近くに人のいないのを幸いに、その塔の上で、兄をかき口説いたものですよ。

なかなか打ち明けませんでしたが、私が繰り返し繰り返し頼むものですから、兄も根負けをしたと見えまして、とうとう一か月来の胸の秘密を私に話してくれました。ところが、その兄の煩悶（はんもん）*の原因と申すものが、これがまた、まことに変てこれんな事柄だったのでございますよ。兄が申しますには、一月ばかり前に、十二階へ昇りまして、この遠眼鏡で観音様の境内を眺めておりましたとき、人込みの間に、チラッと、一人の娘の顔を見たのだそうでございます。その娘が、それはもう何とも言えない、この世のものとも思えない、美しい人で、日頃女には一向冷淡であった兄も、その遠眼鏡の中の娘だけには、ゾッと寒気がしたほども、すっかり心を乱されてしまったと申しますよ。

そのとき兄は、一目見ただけで、びっくりして、遠眼鏡をはずしてしまったものですから、もう一度見ようと思って、同じ見当を夢中になって探したそうですが、眼鏡の先が、どうしてもその娘の顔にぶっつかりません。遠眼鏡では近くに

見えても実際は遠方のことですし、たくさんの人混みの中ですから、一度見えたからと言って、二度目に探し出せると決まったものではございませんからね。

それからと申すもの、兄はこの眼鏡の中の美しい娘が忘れられず、ごくごく内気な人でしたから、古風な恋わずらいをわずらい始めたのでございます。今のお人はお笑いなさるかもしれませんが、その頃の人間は、まことにおっとりしたものでして、行きずりに一目見た女を恋して、わずらいついた男なども多かった時代でございますからね。言うまでもなく、兄はそんなご飯もろくろく食べられないような、衰えた身体を引きずって、またその娘が観音様の境内を通りかかることもあろうかと悲しい空頼みから、毎日毎日、勤めのように、十二階に昇っては、眼鏡をのぞいていたわけでございます。恋というものは、不思議なものでございますね。

兄は私に打ち明けてしまうと、また熱病やみのように眼鏡をのぞき始めましたっけが、私は兄の気持ちにすっかり同情致しましてね、千に一つも望みのない、無駄な探し物ですけれど、およしなさいと止めだてする気も起こらず、あまりのことに涙ぐんで、兄のうしろ姿をじっと眺めていたものですよ。するとそのとき……ア、私はあの怪しくも美しかった光景を、忘れることができません。三十年以上も昔のことですけれど、こうして眼をふさぎますと、その夢のような色どりが、まざまざと浮かんでくるほどでございます。

さっきも申しましたとおり、兄のうしろに立っていますと、見えるものは、空ばかりで、モヤモヤとした、むら雲の中に、兄のほっそりとした洋服姿が、絵のように浮き上がって、むら雲のほうで動いているのを、兄の身体が宙に漂うかと見誤るばかりでございました。がそこへ、突然、花火でも打ち上げたように、白っぽい大空の中を、赤や青や紫の無数の玉が、先を争って、フワリフワリと昇っていったのでございます。お話したのでは分かりますまいが、本当に絵のようで、また何かの前兆のようで、私は何とも言えない怪しい気持ちになったものでした。何であろうと、急いで下をのぞいてみますと、どうかしたはずみで、風船屋が粗相をして、ゴム風船を、一度に空へ飛ばしたものと分かりましたが、その時分は、ゴム風船そのものが、今よりはずっと珍しゅうございましたか

43 **盆石**（八一・下15）　盆に自然石や砂を配して風景を模したもの。

問「怪しくも美しかった光景」とは、どのようなものか。

＊煩悶

ら正体が分かっても、私はまだ妙な気持ちがしておりましたものですよ。

妙なもので、それがきっかけになったというわけでもありますまいが、ちょうどそのとき、兄は非常に興奮した様子で、青白い顔をぽっと赤らめ息をはずませて、私のほうへやってまいり、いきなり私の手をとって『さあ行こう。早く行かぬと間に合わぬ』と申して、グングン私を引っ張るのでございます。引っ張られて、塔の石段をかけ降りながら、わけを尋ねますと、いつかの娘さんが見つかったらしいので、青畳を敷いた広い座敷に座っていたから、これから行っても大丈夫、元の所にいると申すのでございます。

兄が見当をつけた場所というのは、観音堂の裏手の、大きな松の木が目印で、そこに広い座敷があったと申すのですが、さて、二人でそこへ行って、探してみましても、松の木はちゃんとありますけれど、その近所には、家らしい家もなく、まるで*狐につままれたようなあんばいなのですよ。兄の気の迷いだとは思いましたが、しおれ返っている様子[44]が、あまり気の毒だものですから、気休めに、その辺の掛け茶屋などを尋ね廻ってみましたけれども、そんな娘さんの影も形もありません。

探している間に、兄と別れ別れになってしまいましたが、掛け茶屋を一巡して、しばらくたって元の松の木の下へ戻ってまいりますとね、そこにはいろいろな露店に並んで、一軒ののぞきからくり屋が、ピシャンピシャンと鞭の音を立てて、商売をしておりましたが、見ますと、そののぞきの眼鏡を、兄が中腰になって、一生懸命のぞいていたじゃございませんか。『兄さん何をしていらっしゃる』と言って、肩を叩きますと、ビックリして振り向きましたが、そのときの兄の顔を、私はいまだに忘れることができませんよ。何と申せばよろしいか、夢を見ているようなとでも申しますか、顔の筋がたるんでしまって、遠い所を見ている目つきになって、私に話す声さえも、変にうつろに聞こえたのでございます。そして、『お前、私たちが*探していた娘さんはこの中にいるよ』と申すのです。

そう言われたものですから、私は急いでお[45]あしを払って、のぞきの眼鏡をのぞいてみますと、それは八百屋お七ののぞきからくりでした。ちょうど吉祥寺の書院で、お七が吉三にしなだれかかっている絵が出ておりました。忘れもしません。からくり屋の夫婦者は、しわがれ声を合わせて、鞭で拍子を取りながら、『膝でつっらついて、目で知らせ』と申す文句を歌っているところでした。アア、あの『膝でつっらついて、目で知らせ』という変な節廻しが、耳についているよ

うでございます。

のぞき絵の人物は押絵になっておりましたが、その道の名人の作であったのでしょうね。お七の顔の生き生きとして綺麗であったこと。私の目にさえ本当に生きているように見えたのですから、兄があんなことを申したのも、全く無理はありません。兄が申しますには『たといこの娘さんが、拵えものの押絵だと分かっても、私はどうもあきらめられない。悲しいことだがあきらめられない。たった一度でいい、私もあの吉三のような、押絵の中の男になって、この娘さんと話がしてみたい』と言って、ぼんやりと、そこに突っ立ったまま、動こうともしないのでございます。考えてみますとそののぞきからくりの絵が、光線を取るために上のほうが開けてあるので、それが斜めに十二階の頂上からも見えたものに違いありません。

その時分には、もう日が暮れかけて、人足（ひとあし）もまばらになり、のぞきの前にも、二、三人のおかっぱの子供が、未練らしく立ち去りかねて、うろうろしているばかりでした。昼間からどんよりと曇っていたのが、日暮れには、今にも一雨来そうに、雲が下がってきて、いっそう押さえつけられるような、気でも狂うのじゃないかと思うような、いやな天候になっておりました。そして、耳の底にドロドロと太鼓の鳴っているような音が聞こえているのですよ。その中で、兄は、じっと遠くのほうを見据えて、いつまでもいつまでも、立ちつくしておりました。その間が、たっぷり一時間はあったように思われます。

もうすっかり暮れ切って、遠くの玉乗りの花瓦斯（はなガス）[48]が、チロチロと美しく輝き出した時分に、兄はハッと目が醒めたように、突然私の腕をつかんで『アア、いいことを思いついた。お前、お頼みだから、この遠眼鏡をさかさにして、大きなガラス玉のほうを目に当てて、そこから私を見ておくれでないか』と、変なことを言い出しました。『なぜです』って尋ねても、『まあいいから、そうしておくれな』と申して聞かないのでございます。いったい私は生まれつき眼鏡類を、あまり好みませんので、遠眼鏡にしろ、顕微鏡にしろ、遠い所の

44 **掛け茶屋**　茶を飲ませる店。

45 **おあし**　お金のこと。

46 **八百屋お七**　江戸本郷駒込（こまごめ）の八百屋の娘。寺小姓の吉三郎（きちさぶろう）（吉三）への恋慕から放火。火刑に処された。井原西鶴の『好色五人女』ほか、浄瑠璃・歌舞伎などに脚色された。『好色五人女』では、吉三は吉祥寺の寺小姓とされている。

47 **つっらついて**　つついて。＊狐につままれる　うつろ

48 **花瓦斯**　装飾と広告を兼ねたガス灯。

物が、目の前へ飛びついてきたり、小さな虫けらが、けだものみたいに大きくなる、お化けじみた作用が薄気味悪いのですよ。で、兄の*秘蔵の遠眼鏡も、あまりのぞいたことがなく、のぞいたことが少ないだけに、よけいそれが魔性の器械に思われたものです。しかも、日が暮れて人顔もさだかに見えぬ、うすら淋しい観音堂の裏で、遠眼鏡をさかさにして、兄をのぞくなんて、気違いじみてもいますれば、薄気味悪くもありましたが、兄がたって頼むものですから、仕方なく言われたとおりにしてのぞいたのですよ。さかさにのぞくのですから、二、三間向こうに立っている兄の姿が、二尺くらいに小さくなって、小さいだけに、ハッキリと、闇の中に浮き出して見えるのです。ほかの景色は何も映らないで、小さくなった兄の洋服姿だけが、眼鏡の真ん中に、チンと立っているのです。それが、たぶん兄があとじさりに歩いていったのでしょう。見る見る小さくなって、とうとう一尺くらいの、人形みたいなかわいらしい姿になってしまいました。そして、その姿が、ツーッと宙に浮いたかと見ると、アッと思う間に、闇の中へ溶け込んでしまったのでございます。

　私は怖くなって、（こんなことを申すと、年がいもないとおぼしめしましょうが、そのときは、本当にゾッと、怖さが身にしみたものですよ）いきなり眼鏡を離して、「兄さん」と呼んで、兄の見えなくなったほうへ走り出しました。ですが、どうしたわけか、いくら探しても探しても兄の姿が見えません。時間から申しても、遠くへ行ったはずはないのに、どこを尋ねても分かりません。なんと、あなた、こうして私の兄は、それっきり、この世から姿を消してしまったのでございますよ……それ以来というもの、私はいっそう遠眼鏡という魔性の器械を恐れるようになりました。殊にも、このどこの国の船長とも分からぬ、異人の持ち物であった遠眼鏡が、特別いやでして、ほかの眼鏡は知らず、この眼鏡だけは、どんなことがあっても、さかさに見てはならぬ。さかさにのぞけば凶事が起こると、固く信じているのでございます。あなたがさっき、これをさかさにお持ちなすったとき、私が慌ててお止め申したわけがお分かりでございましょう。

　ところが、長い間探し疲れて、元ののぞき屋の前へ戻ってまいったときでした。私はハタとあることに気がついたのです。と申すのは、兄は押絵の娘に恋こがれたあまり、魔性の遠眼鏡の力を借りて、自分の身体を押絵の娘と同じくらいの大きさに縮めて、ソッと押絵の世界へ忍び込んだのではあるまいかということでした。そこで、私はまだ店をかたづけないでいたのぞき屋に頼みまして、吉祥寺の場を見せてもらいましたが、なんとあなた、案の定、兄は押絵になって、カン[49]

テラの光りの中で、吉三の代わりに、嬉しそうな顔をして、お七を抱きしめていたではありませんか。

でもね、私は悲しいとは思いませんで、そうして本望を達した、兄の仕合わせが、涙の出るほど嬉しかったものですよ。私はその絵をどんなに高くてもよいから、必ず私に譲ってくれと、のぞき屋に固い約束をして（妙なことに、小姓[50]の吉三の代わりに洋服姿の兄が座っているのを、のぞき屋は少しも気がつかない様子でした）、家へ飛んで帰って、一部始終を母に告げましたところ、父も母も、何を言うのだ。お前は気でも違ったのじゃないかと申して、何と言っても取り上げてくれません。おかしいじゃありませんか。ハハハハハハ」。老人は、そこで、さもさも滑稽だと言わぬばかりに笑い出した。そして、変なことには、私もまた、老人に同感して、一緒になって、ゲラゲラと笑ったのである。

「あの人たちは、人間は押絵なんぞになるものじゃないと思い込んでいたのですよ。でも押絵になった証拠には、そのうち兄の姿が、ふっつりと、この世から見えなくなってしまったじゃありませんか。それをも、あの人たちは、家出したのだなんぞと、まるで見当違いな当て推量をしているのですよ。おかしいですね。結局、私は何と言われても構わず、母にお金をねだって、とうとうそののぞき絵を手に入れ、それを持って、箱根から鎌倉のほうへ旅をしました。それはね、兄に新婚旅行がさせてやりたかったからですよ。こうして汽車に乗っておりますと、そのときのことを思い出してなりません。やっぱり、今日のように、この絵を窓に立てかけて、兄や兄の恋人に、外の景色を見せてやったのですからね。兄はどんなにか仕合わせでございましたろう。娘のほうでも、兄のこれほどの真心を、どうしていやに思いましょう。二人は本当の新婚者のように、恥ずかしそうに顔を赤らめながら、お互いの肌と肌とを触れ合って、さもむつまじく、尽きぬ睦言を語り合ったものでございますよ。

その後、父は東京の商売をたたみ、富山近くの故郷へ引っ込みましたので、それにつれて、私もずっとそこに住んでおりますが、あれからもう三十年の余になりますので、久々で

49 カンテラ　kandelaar（オランダ語）。坑夫が携帯する石油ランプとして普及した。

50 小姓の吉三　注44参照。

51 睦言　うちとけた会話。特に、愛し合っている者同士の親密な語り合い。

＊ 秘蔵　当て推量

問 「一緒になって、ゲラゲラと笑った」のは、なぜか。

兄にも変わった東京が見せてやりたいと思いましてね、こうして兄と一緒に旅をしているわけでございますよ。

ところが、あなた、悲しいことには、娘のほうは、いくら生きているとは言え、元々人の拵えたものですから、年をとるということがありませんけれど、兄のほうは、押絵になっても、それは無理やりに形を変えたまでで、根が寿命のある人間のことですから、私たちと同じように年をとってまいります。ご覧くださいまし、二十五歳の美少年であった兄が、もうあのように白髪になって、顔には醜い皺が寄ってしまいました。兄の身にとっては、どんなにか悲しいことでございましょう。相手の娘はいつまでも若くて美しいのに、自分ばかりが汚く老け込んでいくのですもの。恐ろしいことです。兄は悲しげな顔をしております。数年以前から、いつもあんな苦しそうな顔をしております。それを思うと、私は兄が気の毒でしようがないのでございますよ」

老人は暗然として押絵の中の老人を見やっていたが、やがて、ふと気がついたように、

「アア、とんだ長話を致しました。しかし、あなたは分かってくださいましたでしょうね。ほかの人たちのように、私を気違いだとはおっしゃいませんでしょうね。アア、それで私も話しがいがあったと申すものですよ。どれ、兄さんたちもくたびれたでしょう。それに、あなた方を前に置いて、あんな話をしましたので、さぞかし恥ずかしがっておいでしょう。では、今やすませてあげますよ」

と言いながら、押絵の額を、ソッと黒い風呂敷に包むのであった。その刹那、私の気のせいであったのか、押絵の人形たちの顔が、少しくずれて、ちょっと恥ずかしそうに、唇の隅で、私に挨拶の微笑を送ったように見えたのである。老人はそれきり黙り込んでしまった。私も黙っていた。汽車は相も変わらず、ゴトンゴトンと鈍い音を立てて、闇の中を走っていた。

十分ばかりそうしていると、車輪の音がのろくなって、窓の外にチラチラと、二つ三つの灯火（あかり）が見え、汽車は、どことも知れぬ山間の小駅に停車した。駅員がたった一人、ぽっつりと、プラットフォームに立っているのが見えた。

「ではお先へ、私は一晩ここの親戚へ泊まりますので」

老人は額の包みを抱えてヒョイと立ち上がり、そんな挨拶を残して、車の外へ出ていったが、窓から見ていると、細長い老人の後ろ姿は（それが何と押絵の老人そのままの姿であったか）簡略な柵の所で、駅員に切符を渡したかと見ると、そのまま、背後の闇の中へ溶け込むように消えていったのである。



江戸川乱歩（えどがわ らんぽ）　明治二十七（一八九四）年～昭和四十（一九六五）年。小説家・推理作家。本名は平井太郎。三重県の生まれ。作者名はアメリカの詩人・小説家のエドガー・アラン・ポーに由来する。日本における探偵小説・ミステリーの祖と言われる。著書に『二銭銅貨』『怪人二十面相』『D坂の殺人事件』などがある。本文は『江戸川乱歩全集5　押絵と旅する男』（平成十七（二〇〇五）年刊）によった。

◆◆◆ 深い学びのために ◆◆◆

❖学習のポイント

1 作中で提示される謎や不思議なことと、その謎解きや理由を、それぞれまとめてみよう。

2 「蜃気楼」（六九・上10）の描写が「男」の話の前に語られる意味や効果について、考えてみよう。

3 「老人の後ろ姿」が「押絵の老人そのままの姿であった」（八八・下18～19）という一節には、どのような効果があるか、考えてみよう。

4 冒頭に「この話が私の夢か私の一時的狂気の幻でなかったならば、あの押絵と旅をしていた男こそ狂人であったに相違ない」（六九・上1～2）とあるが、「私」の語る出来事と、「男」の語る出来事は現実なのかどうか、話し合ってみよう。

❖言葉と表現

1 「夢」や「幻」のような、不思議な雰囲気を高める効果のある言葉を探してみよう。

2 「チラッと」（七三・下6）や「ハッキリ」（七三・下11）などの語句の品詞は何か、また、それらの語句が片仮名で表記されている効果を考えてみよう。

❖言語活動

1 「蜃気楼」「浅草十二階」「八百屋お七」を調べ、この作品の中での意味や、それを用いることの効果について話し合ってみよう。

2 この作品の中の謎を一つ取り上げ、本文を根拠に、その謎に対する結論を出し、発表してみよう。

マンガは哲学する

永井（ながい）　均（ひとし）

初出『マンガは哲学する』平成十二（二〇〇〇）年二月

私はまじめな話が嫌いである。この世の規範や約束事を越えた、途方もないくらいまじめな話ならいい。少なくともニーチェ[1]のような水準のまじめさなら、まあ許せる。中途半端にまじめな話はだめだ。ところが、世の中はそうした中途半端にまじめな話で満ちあふれている。

私だってまともな大人だから、それが必要であることは、もちろん百も承知だ。それでもやはり、この世の中で通用している通念や規範を最終根拠とするご立派な主張を耳にしたり（ときには口にしたり）すると、ばかばかしさが込み上げてくるのをどうすることもできない。そうした全てをぶち壊すような真実の声を聞きたい、そうでなければやりきれないではないか！

マンガに、ときにそれが聞き取れることを、私は以前から感じていた。その点で、つまり発想の破天荒という点で、マンガは小説などの他のジャンルをはるかに凌駕（りょうが）*しているように私には思われたのである。

二十世紀後半の日本のマンガは、世界史的に見て、新しい芸術表現を生み出しているのではないだろうか。世の中の内部で公認された問題とは違う、世の中の成り立ちそのものに潜む問題が、きわめて鋭い感覚で提起されているように思われる。誰もが自明と思い、その自明性の

1 ニーチェ　Friedrich Wilhelm Nietzsche　一八四四年〜一九〇〇年。ドイツの哲学者。

うえに通常の世の中的な対立が形作られているような、もとのもとの部分がそこで問題化されている。哲学という形で私が言いたかったこと、言いたいことの多くが、*萌芽的な形態において、マンガ作品のうちに存在している。

いや、それどころか、ひょっとすると、マンガという形でしか表現できない哲学的問題があるのではないか、と私は感じている。私はその理由を解明していない。現在のところは、表現形式の問題もさることながら、ジャンルの世の中での位置のようなものが影響しているのではないかと思っている。マンガは子供が読むものだという通念が、大人が読むマンガの中にまで波及していて、大人の常識に惑わされない問題提起を許しているように思われる。例えば[2]アンデルセンなどの童話が、[3]トルストイや[4]ドストエフスキー、[5]夏目漱石や[6]森鷗外などよりもはるかに深く、そして単純な意味で哲学的であるのと似ているだろう。

私がマンガに求めるもの、それはある種の狂気である。現実を支配している約束事を全く無視しているのに、内部にリアリティと整合性を保ち、それゆえこの現実を包み込んで、むしろその狂気こそがほんとうの現実ではないかと思わせる力があるような大狂気。そういう大狂気がなくては、私は生きていけない。その狂気がそのままその作者の現実なのだと感じたとき、私は魂の交流を感じる。それゆえ、私がマンガに求めているものは、哲学なのである。

さほどメジャーとは言えないが、私が個人的に最も愛するマンガ家といえば、なんと言って

2 アンデルセン Hans Christian Andersen 一八〇五年～一八七五年。デンマークの童話作家・詩人。

3 トルストイ Lev N. Tolstoi 一八二八年～一九一〇年。ロシアの文学者。

4 ドストエフスキー Fyodor M. Dostoevskii 一八二一年～一八八一年。ロシアの小説家。

5 夏目漱石 一二一ページ参照。

6 森鷗外 二八九ページ参照。

問 **「ある種の狂気」とは、どのようなことか。**

＊ 破天荒　萌芽



佐々木淳子「赤い壁」（『Who!』）

も佐々木淳子（ささきじゅんこ）7である。

「赤い壁」では、主人公のちさとは夢の中で見知らぬ土地に迷い込んでしまう。「きみはもう夢の端まできている。それ以上は行っちゃいけない。」という男の子の声を振り切って、渡し舟に乗って、ついに夢の端である赤い壁にたどり着く。それを乗り越えて向こう側の世界へ出てみると、向こう側からクラスメートの育代ちゃんがやってくるではないか。*何のことはない、そこは家の近所にすぎなかったのだ。ここでは世界の二種のリアリティがマンガ特有の表現方法で描き出されている。

5

7 佐々木淳子 一九五五年～。漫画家。異世界を舞台とするSFジャンルの作品が得意で、夢・時間をテーマとした作品が多い。

問 **「世界の二種のリアリティ」とは、どういうことか。**

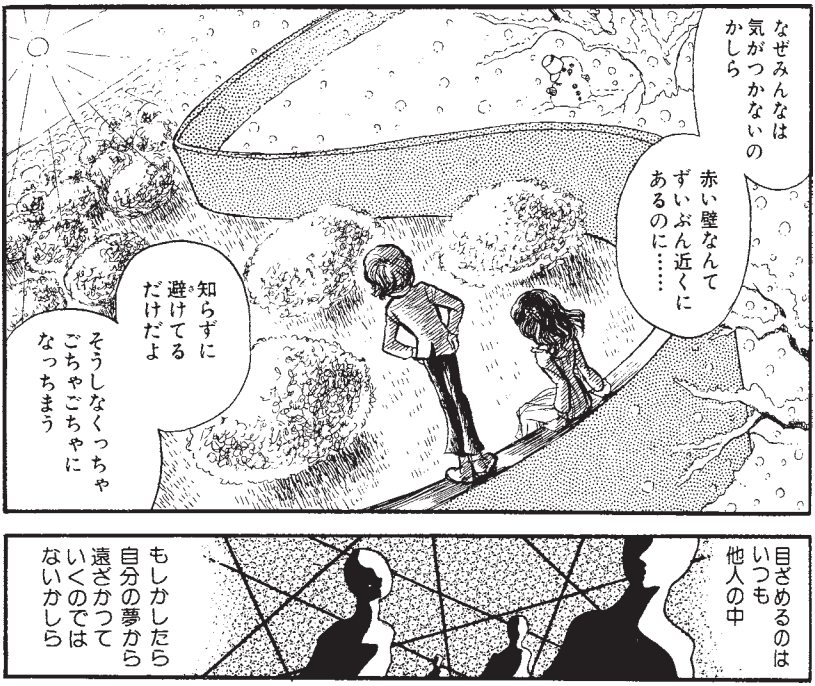
ところが、その朝、ちさとは育代ちゃんの家で、育代ちゃんのお母さんに起こされる。ちさとは、自分が育代ちゃんの体の中に入ってしまっていることに気づくのだ。だが、入っているのは、ちさとである自分の記憶と、育代ちゃんの感覚器官から知覚される世界をその記憶と統合する現在の自己意識だけである。育代ちゃんの体を動かしているのは、あくまでも育代ちゃん自身なのである。ちさとには育代ちゃんの身体の制御能力がなく、したがって自分の意思を表明する手段がない。《私》がこのように身体の制御機能（つまり行為）と独立に存在しうることは注目に値する。

育代ちゃんは友達であるちさとを誘っていっしょに登校しようとして、ちさとの家に行き、眠っているちさとの寝顔を見る。もちろん、そのとき同時に、育代ちゃんの中にいるちさとは自分の寝顔を見ることになる。それは、もちろん普通の意味で自分の寝顔である。だが、それが自分の寝顔であるということには、もう一つの深い意味がある。それは、ある意味では、そういう全てのことが起こっているその世界全体が、いま目の前で寝ているちさとが見ている夢の世界だ、ということである。

これは、夢であろうか、現実であろうか。答えはこうだ。たとえそれが育代ちゃんの現実であったとしても、ちさとの現実であることはできない。育代ちゃんの現実は、そのまま同時に、ちさとの夢なのである。

学校で育代ちゃんが居眠りを始めると、ちさとは、育代ちゃんの現実と融合していない、本

*何のことはない



佐々木淳子「赤い壁」（『Who!』）

来の夢の世界に戻ることができる。しかし、そこはもう、ちさとの夢の世界でなく、ちさとは、他人の夢の世界にしか帰れなくなってしまう。ちさとは、夢の世界で迷子になってしまったのだ。ちさとは、何とかして自分の夢の世界に戻り、そこを通じて自分の現実に戻ろうとする。

　この作品の世界が興味深いのは、ちさとという別人が、部分的にではあれ、育代ちゃんに中心化された現実に、夢の世界を通じて、入り込むことができる、と

いう世界理解にある。障害は夢の中の赤い壁であり、それは越えようと思えば越えることができるのだ。

私が作者なら、育代ちゃんの世界に長くとどまっていると、ちさとはしだいに自分の記憶まで失い始める、ということにしたい。ちさとが、自分が誰であるか分からないまま、それでも育代ちゃんから自立した自己意識として、育代ちゃんの身体の中で苦悶（くもん）するさまを、描きたい。そうすれば、自分に固有の夢を通じて初めて自分の現実に戻ることができる、という思想は、もっと強いリアリティを獲得するだろう。私は、固有の夢こそがその人の現実の基盤だという思想に、深いリアリティを感じる。

『Who!』[8]の表題作である「Who!」は、わずか四ページである。

自転車から転げ落ちて気を失っていた主人公の少年が気がつくと、周囲には誰もいない。どこまで行っても誰もいない。「知らないうちに人々は何かにおびえて避難したんだろうか……」。一昼夜たって、ようやく女性の人影を見かける。その人に声をかけると「お人違いでしょう」。「ひと違いだって!? こんなときに何言ってるんですか。みんなどこへ行っちゃったんです!? なぜ平然としているんだい、だれもいなくなっちまったのに」。そこで、その女性が「ああ、映像物感触回路の故障ね」と言って、どこかのスイッチをカチリと入れる。すると、突如として人物にあふれた町並みが現れる。これだけの話である。

問 筆者が、「私が作者なら」「ちさと」は「自分の記憶までも失い始める」という設定にしたいと考えたのは、なぜか。

8『Who!』佐々木淳子の初期短編集。昭和五十六（一九八一）年刊。



佐々木淳子「Who!」(『Who!』)

要するに、この作品は、私たちが現実と呼んでいるものが実は映像である可能性を示しているのである。

しかし、そんな可能性が本当にあるだろうか。世界が全部作られた映像であったり、夢であったり、幻想であったりすることは、ありうることなのだろうか。それとも、ありえないことなのだろうか。まともな人は、そんなことはない、と言う。少し哲学的な人は、

いやひょっとしたらそうなのかもしれないではないか、と言う。もっと哲学的な人は、そんなことはありえない、と言う。

まともな人の考えと、もっと哲学的な人の考えは、字面のうえでは似ているが、実は違っている。まともな人は「(そういう事態はありうるかもしれないが) 現実はそうではない」と信じている。もっと哲学的な人のほうは「(現実がそうでないだけではなく) そういう事態はそもそもありえない」と考えている。なぜなら、映像とか夢とか幻想といった概念[9]は、この現実の内部で起こる事柄を区別するために作られた概念だから、この現実そのものに、その概念を適用することはできないからだ。それゆえ、この現実そのものは、定義[10]上、夢でも映像でもありえない、というわけである。

だが、もっともっと哲学的な人は、その概念が現実そのものに拡大適用できる場合があるのではないか、と疑うだろう。例えば、このマンガのような状況がそうだ。もしこのようなことが実際に起こったら、「現実は映像だった」と言っていいのではあるまいか。それは正しい言葉遣いなのではあるまいか。

だが、もっともっともっと哲学的な人なら、こう言いたくなるだろう。それなら、一人だけ残っていたその女性は何者なのだ、その人だけはこの現実の外部にいるなどということがありえようか。だが、その人もまた映像でありうるのだとすれば、映像という概念は今度こそ宙に浮くのではないか。映像とそうでないものを、別の仕方で定義する必要がありはしないか。*

9 **概念** 物事の概括的な意味内容。

10 **定義** 概念の内容や語の意味を他と区別できるように明確に限定すること。また、その限定された内容や意味。

* 宙に浮く

もちろん、もっともっともっともっと哲学的な人が、どこまでもいるだろう。哲学とは、要するに、なぜだか最初から少し哲学的だった人が、本来のまともな人のいる場所へ——哲学をすることによって——帰ろうとする運動なのだが、小さな隔たりを埋めようとするその運動こそが、往々にして*深淵を作り出してしまうのである。

問「深淵」とは、どのようなものか。

* 往々にして



永井　均（ながい　ひとし）　昭和二十六（一九五一）年〜。哲学者。東京都の生まれ。幼少の頃に抱いた「なぜこの私が私なのか」という問いを端緒に、様々な根源的問いを追究し続けている。著書に『〈私〉のメタフィジックス』『〈子ども〉のための哲学』『なぜ意識は実在しないのか』『哲おじさんと学くん』などがある。本文は『マンガは哲学する』（平成二十一（二〇〇九）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1「この世の中で通用している通念や規範を最終根拠とするご立派な主張」（九〇・5）を、具体的に列挙してみよう。

2「赤い壁」と「Who!」では、「現実」や「夢」はどのように捉えられているか、それぞれまとめてみよう。

3「哲学」の意味を辞書で調べてみよう。また、筆者は「哲学」をどのようなことだと考えているか、本文中の言葉を使ってまとめてみよう。

◆言葉と表現

1「もっと哲学的な人」（九七・1、3、5）「もっともっと哲学的な人」（九七・10）「もっともっともっと哲学的な人」（九七・14）と、「もっと」という語句を重ねて使うことには、どのような効果があるか、考えてみよう。

◆言語活動

1 自分なりに「哲学」を定義してみよう。

2 身のまわりのマンガや小説などから哲学的な問題が描かれているものを探し、紹介し合ってみよう。

文学の窓

映画の中の花

西川美和（にしかわみわ）

花の美しさを映画で捉えることは、きわめて難しいと私は思う。言わずもがなのその美しさが、落とし穴である。目で見て美しく感じるものを、撮ればそのまま物語になるかというと、実はそうではない。

映画は時間を縦軸にして、物事の「運動」を捉えて物事を語る。「好きだ」という概念一つとっても、ただ思い巡らせるのではなく、声にして発語するとか、目くばせするとか赤面するとかという何らかの運動を伴わなければ、観客にその「好きだ」は伝わらない。どんなに奥深いテーマだろうと、主人公に机の上で腕組みして沈思黙考されていたのではいつまでたっても映画にはならないのである。運動は、「動き」と「音」とで表現されるが、花にはその「動き」と「音」がない。美しさが、あまりにも静的なのだ。

演じ手の中にも、「花」に似た人がいる。容姿端麗で肉眼や写真で見ればまばゆいばかりなのに、映像で捉えてみると、どこか血の通わない無生物のような映り方をする。きれいな映像は撮れても、「映画」が生まれるとは限らない。しかしそれでも映画を撮る者たちは花に引きつけられ、風を待ち、花びらを散らし、カメラを動かし、懸命に花に運動をもたらそうとする。黒澤明[1]も小川におびただしい数の椿の花を流して『椿三十郎』の演出をした。

私にとって映画の中にある花は、死の匂いを放つものの印象が強い。野に咲く花で思い出すヴィットリオ・デ・シーカ監督[2]の『ひまわり』は、第二次世界大戦末期に極寒のソ連戦線で行き倒れた兵士たちの死肉の上に広がった見渡す限りのひまわり畑が、底抜けに明るい陽の光を受けている。元来大輪のひまわりさながらのタフな美貌のソフィア・ローレン[3]が、消えた夫を求めて色あせた亡霊のようにその大地を歩く。ほかにも『3－4X10月』（北野武[4]監督）で観た、極楽鳥花[5]の花畑。乱暴に引き抜いたその花束の中に、沖縄ヤクザに扮するビートたけしが基地の米兵から入手した機関銃を仕込んで無数の銃弾を撃ち放ち、ほどなく自らも復讐の血にまみれて息絶える。極楽鳥花のどぎついまでの生命力が、かえってはっきりと人の虚無や死に欲を濃い沈黙のまま物語る。切り花で思い出すのは漱石[6]の『それから』（森田芳光[7]監督）の中の真っ白い百合の花。確か一つの濡れ場も出てこない映画だったが、暗い雨の夕方、三千代が持ってきた百合の花に、一つ傘の下で代助がそっと鼻先を近づ

けるシーンには、許されない男女の死出の道行きのような重苦しさに、むせ返るほどの欲動が充満している。創造力たくましき中学生だった私は、百合の花弁をそっと握る[8]松田優作の大きな手を見ながら「うむむ」と興奮したものだった。

花は美しさだけではなくて、いやおうもない生命の巡りを予感させる怖さを秘めてもいる。可憐（かれん）に咲いたかと思えば、物も言わず散り、くたくたに醜く枯れて腐臭を漂わせることも恐れない。役者としては静的すぎるのかもしれないが、一方で全ての物や人間が絶えず動き回る活劇の中において、その静謐（せいひつ）さがときに時間を止め、生命の危うさや時の移ろいをフィルムに焼き付けている気もする。何もせず、何一つ余計なことを言わないで「ただそこにいる」ことが、実は俳優にとって最も難しい演技であり、最も座をさらう術（すべ）であるとも聞く。花たちを中身空っぽのお人形として撮るも、無為のままに森羅万象を語らせるも、とどのつまり演出家の腕次第ということなのか。今後の宿題として心に留めておきたいと思う。

1 黒澤明　一九一〇年～一九九八年。映画監督。国際的にも評価が高い。代表作は『羅生門』『七人の侍』ほか多数。『椿三十郎』は昭和三十七（一九六二）年の作品。

2 ヴィットリオ・デ・シーカ　Vittorio De Sica　一九〇一年～一九七四年。イタリアの映画監督・俳優。『ひまわり』は一九七〇年の作品。

3 ソフィア・ローレン　Sophia Loren　一九三四年～。欧州を代表するイタリアの女優。

4 北野武　一九四七年～。映画監督・お笑いタレント。芸名は、ビートたけし。『3-4X10月』は平成二（一九九〇）年の作品。

5 極楽鳥花　バショウ科の多年草。

6 漱石　夏目漱石。一二一ページ参照。

7 森田芳光　一九五〇年～二〇一一年。映画監督。『それから』は昭和六十（一九八五）年の作品。

8 松田優作　一九四九年～一九八九年。俳優。『それから』では、長井代助役を演じた。



極楽鳥花

西川美和　昭和四十九（一九七四）年～。映画監督・脚本家・小説家。広島県の生まれ。是枝裕和（これえだひろかず）監督『ワンダフルライフ』の現場に参加し、頭角を現す。夢から着想を得た『ゆれる』はカンヌ映画祭に出品され、国内で数々の賞を総なめにした。自らの小説『永い言い訳』を映画化、ほかに『ディア・ドクター』『すばらしき世界』などの作品がある。初出『草月』平成二十七（二〇一五）年十二月。本文は『映画にまつわるXについて2』（令和二（二〇二〇）年刊）によった。

◇単元の言語活動 3

◆さまざまなメディアに生息する〈文学〉を発見する
――文学の分布図を広げよう――

この単元で読んだものは、いわゆる〈文学〉と言われて想像するものとは、やや毛色の異なる作品群であったかもしれない。コラム「〈文学〉の領域を更新する」でも触れたように、〈文学〉という概念や捉え方は常に変容するものである。実際にさまざまな作品について調べ、文学観を広げてみよう。

課題 〈文学〉にはどのようなジャンルがあるか、その特性・特徴を考えてみよう。また、身の回りのさまざまな作品を取り上げて、読解したり、深く考えたりしてみよう。

1 近年の芥川賞と直木賞の受賞作品や候補作品を調べて、それぞれの賞の特性・特徴を考えてみよう。

2 星新一の多くの作品は「ショートショート」や「SF」と呼ばれ、安部公房の『鞄』は「寓話」として読むこともできる。このように文学作品にはいくつものジャンルが存在する。

① 具体的な作品と合わせて、どのようなジャンルがあるか調べてみよう。

② あるジャンルの特性・特徴・パターンなどを調べてみよう。

3 ある文学作品を、他のメディアで表現したり、その過程で演出や脚色が加えられたりすること（漫画化・アニメ化・実写化・舞台化など）をアダプテーションという。

① 具体的な作品を取り上げて、元の作品とアダプテーション作品とを比較してみよう。

② この単元で読んだ作品を他のメディアで表現するとしたら、どのようなメディアや表現方法がよいか考えてみよう。

4 身の回りにある身近な作品（漫画や映画・ポピュラー音楽の歌詞・インターネット上の作品など）から、文学的だと思うものを持ち寄り、その理由と合わせて紹介し合ってみよう。

4 言葉の力

- 近代日本文学の代表的な作品、特色のある作品を通して、言葉の芸術としての小説の力を学ぶ。
- 手紙を書くという身近な営みの中に見える言葉の姿を確かめる。
- 言葉が社会の中で、どういう意味を持つのかを考える。

こころ　夏目漱石
夏目漱石・芥川龍之介往復書簡
山東京伝　内田百閒
「東京語」の表象の成立　イ・ヨンスク
文学の窓　群れず集まる（田中和将）
単元の言語活動4

こころ

夏目漱石（なつめそうせき）

「こころ」は、「上　先生と私（わたくし）」「中　両親と私」「下　先生と遺書」の三編から成る。このうち本書に採られているのは、「下　先生と遺書」の一部である。

上　先生と私

学生の「私（わたくし）」は海水浴場で偶然ある人物と知り合い、ごく自然にその人を「先生」と呼んで、親しくその家に出入りするようになる。「私」は自分でも理由の分からないままに「先生」に惹（ひ）かれていく。「先生」との交際は人間らしい温かいものであった。し

かし、「先生」には、時として暗い影がさすことがあった。「先生」には近づき難い不思議があるように思われ、「私」は、どうしても「先生」に近づかなければいられないような心持ちになるのであった。世間を避けるように奥さんと二人だけでひっそりと暮らし、毎月友人の墓参りを欠かさない「先生」の口から、「私は寂しい人間です」「恋は罪悪ですよ」「人間全体を信用しないんです」「私は私自身さえ信用していないのです」「金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ」といった言葉が漏らされることがあった。「私」の卒業が近づいた頃、とうとう「私」は「先生」の過去を知りたいと迫る。「真面目に人生から教訓を受けたいのです」という「私」の言葉に、「先生」は、適当な時機が来れば自分の過去を話すと約束する。

中　両親と私

大学を卒業した「私」はすぐには職に就かないまま故郷に帰っていた。両親は卒業を喜んでくれたが、以前から伏せりがちだった父親の病気は日に日に重くなっていった。「私」は父親に勧められるまま、「先生」に仕事の周旋を依頼する手紙を書いたが、返事は来なかった。明治天皇の崩御、[1]乃木大将の殉死が伝えられる中、父親の容体は予断を許さないところまで来ていた。そのとき*「先生」から分厚い手紙が届いた。それは「先生」の遺書であった。「私」は重体の父親に心を残しながら、東京に向かう汽車に飛び乗り、列車の中で「先生」の手紙の全文に目を通した。

下　先生と遺書

「先生」の遺書には、「先生」の過去と自殺を決意するまでの心境がつづられていた。以下、文章中の「私」は「先生」自身のことを指す。

初出『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』大正三（一九一四）年四月二十日〜八月十一日、初出題『心　先生の遺書』

1 **乃木大将**　乃木希典。一八四九年〜一九一二年。陸軍大将。明治天皇の大葬当日、妻静子と共に殉死した。

* 予断

両親を相次いで病気で失った後、私は叔父に遺産の管理を任せて上京し、高等学校（旧制）に学んでいたが、帰郷したときの叔父の謎めいた言動から、叔父に遺産をごまかされていたことを知る。叔父の裏切りは私の人間に対する信頼を崩壊させた。残った遺産を整理し、故郷と絶縁して東京に戻った私は、軍人の未亡人とお嬢さんの二人暮らしの家に下宿して、大学に通い始めた。日清戦争（明治二十七年～二十八年）直後の頃のことである。人間不信のかたくなな心はこの母と娘の温かい心遣いによって癒やされていき、私はお嬢さんに愛を感じるようになる。

私には、同じ大学に通う、少年時代からの友人のKがいた。Kは寺の家に生まれ、医者の家の養子になっていたが、養家の意向に背いて医学を捨て、独断で進路を変更していた。それが知られ、養家、実家双方から絶縁されても、Kはその強情な性格から*志を変えず、独力で苦境を乗り切ろうとしていた。しかし、心身の過労のために神経衰弱に陥ってしまう。Kの苦境に同情した私は、自分の人間不信が癒やされた経緯から、Kを自分の下宿に同居させて、その心を開こうとする。この試みは次第に*功を奏してくるが、Kとお嬢さんとの親しさが増すにつれ、私は嫉妬の感情に苦しめられるようになる。*

夏休みにKと旅行をした折、私は自分のお嬢さんへの気持ちをKに打ち明けようとするが、具体的に何も話せないまま、逆にKに「精神的に向上心のない者はばかだ」とやり込められる。旅行から帰ってからも、Kとお嬢さんとの関係が私に不安と嫉妬を感じさせる場面が続いた。そんなある日、突然Kからお嬢さんに対する恋の告白を聞かされ、私は衝撃を受けて激しく動揺する。

ある日私は久しぶりに学校の図書館に入りました。私は広い机の片隅で窓からさす光線を半身に受けながら、新着の外国雑誌を、あちらこちらとひっくり返して見ていました。私は担任教師から専攻の学科に関して、次の週までにある事項を調べてこいと命ぜられたのです。しかし私に必要な事柄がなかなか見つからないので、私は二度も三度も雑誌を借りかえなければなりませんでした。最後に私はやっと自分に必要な論文を探し出して、一心にそれを読み出しました。すると突然幅の広い机の向こう側から小さな声で私の名を呼ぶ者があります。私はふと目を上げてそこに立っているKを見ました。Kはその上半身を机の上に折り曲げるようにして、彼の顔を私に近づけました。ご承知のとおり図書館では他の人の

邪魔になるような大きな声で話をするわけにゆかないのですから、Kのこの所作は誰でもやる普通のことなのですが、私はそのときに限って、一種変な心持ちがしました。*

Kは低い声で勉強かと聞きました。私はちょっと調べものがあるのだと答えました。それでもKはまだその顔を私から放しません。同じ低い調子でいっしょに散歩をしないかと言うのです。私は少し待っていればしてもいいと答えました。彼は待っていると言ったまま、すぐ私の前の空席に腰を下ろしました。すると私は気が散って急に雑誌が読めなくなりました。何だかKの胸に一物(いちもつ)があって、談判でもしに来られたように思われてしかたがないのです。*私はやむをえず読みかけた雑誌を伏せて、立ち上がろうとしました。Kは落ち着き払ってもう済んだのかと聞きます。私はどうでもいいのだと答えて、雑誌を返すとともに、Kと図書館を出ました。

二人は別に行く所もなかったので、竜岡町[2]から池(いけ)の端(はた)[3]へ出て、上野の公園の中へ入りました。そのとき彼は例[4]の事件について、突然向こうから口を切りました。*前後の様子を総合して考えると、Kはそのために私をわざわざ散歩に引っ張り出したらしいのです。けれども彼の態度はまだ実際的の方面へ向かってちっとも進んでいませんでした。彼は私に向かって、ただ漠然と、どう思うと言うのです。どう思うというのは、そうした恋愛のふちに陥った彼を、どんな目で私が眺めるかという質問なのです。一言(いちごん)で言うと、彼は現在の自分について、私の批判を求めたいようなのです。そこに私は彼の平生と異なる点を確かに認めることができたと思いました。*たびたび繰り返すようですが、彼の天性は他(ひと)の思わくをはばかるほど弱く出来上がってはいなかったのです。こうと信じ*たら独りでどんどん進んでいくだけの度胸もあり勇気もある男なのです。養家事件[5]でその特色を強く胸の内に彫りつけられた私が、これは様子が違うと明らかに意識したのは当然の

＊意向　功を奏する　嫉妬　所作　談判　口を切る　平生　はばかる

2 **竜岡町**　現在の東京都文京区にあった地名。　3 **池の端**　ここでは、東京都台東区上野公園内にある不忍池(しのばずのいけ)のほとり一帯。

4 **例の事件**　「K」が「私」に「お嬢さん」に対する恋の告白をしたこと。　5 **養家事件**　「K」が養家の意向に背いて進路を変更し、絶縁されたこと。

問 **「実際的の方面」とは、どのようなことを表しているか。**

結果なのです。

私がKに向かって、この際なんで私の批評が必要なのかと尋ねたとき、彼はいつもにも似ない*悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいと言いました。そうして迷っているから自分で自分が分からなくなってしまったので、私に公平な批評を求めるより外にしかたがないと言いました。私はすかさず迷うという意味を聞きただしました。彼は進んでいいか退いていいか、それに迷うのだと説明しました。私はすぐ一歩先へ出ました。そうして退こうと思えば退けるのかと彼に聞きました。すると彼の言葉がそこで不意に行き詰まりました。彼はただ苦しいと言っただけでした。実際彼の表情には苦しそうなところがありありと見えていました。もし相手がお嬢さんでなかったならば、私はどんなに彼に都合のいい返事を、その渇き切った顔の上に*慈雨のごとく注いでやったか分かりません。私はそのくらいの*美しい同情を持って生まれてきた人間と自分ながら信じています。しかしそのときの私は違っていました。

◆

私はちょうど他流試合でもする人のようにKを注意して見ていたのです。私は、私の目、私の心、私の体、全て私とい



本郷周辺略図（明治 30 年頃）

う名のつくものを五分[6]の隙間もないように用意して、Kに向かったのです。罪のないKは穴だらけというよりむしろ開け放しと評するのが適当なくらいに無用心でした。私は彼自身の手から、●彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の目の前でゆっくりそれを眺めることができたも同じでした。

Kが理想と現実の間に彷徨(ほうこう)*してふらふらしているのを発見した私は、ただ一打ちで彼を倒すことができるだろうという点にばかり目をつけました。そうしてすぐ彼の虚につけ込んだのです。私は彼に向かって急に厳粛な改まった態度を示し出しました。無論策略からですが、その態度に相応するくらいな緊張した気分*もあったのですから、自分に滑稽だの羞恥だのを感ずる余裕はありませんでした。私はまず「精神的に向上心のない者はばかだ。」と言い放ちました。これは二人で房州[7]を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使ったとおりを、彼と同じような口調で、再び彼に投げ返したのです。しかし決して復讐(ふくしゅう)ではありません。私は復讐以上に残酷な意味を持っていたということを自白します。私はその一言でKの前に横たわる恋の行く手を塞ごうとしたのです。

Kは真宗寺[8](しんしゅうでら)に生まれた男でした。しかし彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近いものではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんなことを言う資格に乏しいのは承知していますが、私はただ男女(なんにょ)に関係した点についてのみ、そう認めていたのです。Kは昔から精進*という言葉が好きでした。私はその言葉の中に、禁欲*という意味も籠もっているのだろうと解釈していました。しかし後で実際を聞いてみると、それよりもまだ厳重な意味が含まれているので、私は驚きました。道のためには全てを犠牲にすべきものだというのが彼の第一信条なのですから、節欲や禁欲は無論、たとい欲を離れた恋そのものでも道の妨げになるのです。Kが自活生活をしている時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃からお嬢さんを思っていた私は、

6 **五分の隙間もない** ごく僅かな隙間もないこと。「分」は長さの単位。一分は約〇・三センチメートル。

7 **房州** 安房(あわ)の国。現在の千葉県南部。

8 **真宗寺** 「真宗」は浄土真宗のこと。開祖は鎌倉時代の僧、親鸞(しんらん)。浄土真宗の僧は、妻帯が許される。

＊ 悄然　慈雨　彷徨　策略　精進

問 **「彼の保管している…それを眺めることができたも同じでした」とは、どのようなことか。**

いきおいどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対すると、彼はいつでも気の毒そうな顔をしました。そこには同情よりも侮蔑のほうが余計に現れていました。

こういう過去を二人の間に通り抜けてきているのですから、精神的に向上心のない者はばかだという言葉は、Kにとって痛いに違いなかったのです。しかし前にも言ったとおり、私はこの一言で、彼がせっかく積み上げた過去を蹴散らしたつもりではありません。かえってそれを今までどおり積み重ねてゆかせようとしたのです。それが道に達しようが、天に届こうが、私はかまいません。私はただKが急に生活の方向を転換して、私の利害と衝突するのを恐れたのです。要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

「精神的に向上心のない者は、ばかだ。」

私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを見つめていました。

「ばかだ。」とやがてKが答えました。「僕はばかだ。」

Kはぴたりとそこへ立ち止まったまま動きません。彼は地面の上を見つめています。私は思わずぎょっとしました。私にはKがその刹那に居直り強盗のごとく感ぜられたのです。しかしそれにしては彼の声がいかにも力に乏しいということに気がつきました。私は彼の目遣いを参考にしたかったのですが、彼は最後まで私の顔を見ないのです。そうして、そろそろとまた歩き出しました。

◆

私（わたくし）はKと並んで足を運ばせながら、彼の口を出る次の言葉を腹の中で暗に待ち受けました。あるいは待ち伏せと言ったほうがまだ適当かもしれません。そのときの私はたといKをだまし討ちにしてもかまわないくらいに思っていたのです。しかし私にも教育相当の良心はありますから、もし誰か私のそばへ来て、おまえは卑怯（ひきょう）だと一言ささやいてくれる者があったなら、私はその瞬間に、はっとわれに立ち返ったかもしれません。もしKがその人であったなら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私をたしなめるにはあまりに正直でした。あまりに単純でした。あまりに人格が善良だったのです。目のくらんだ私は、そこに敬意を払うことを忘れて、かえってそこにつけ込んだのです。そこを利用して彼を打ち倒そうとしたのです。

Kはしばらくして、私の名を呼んで私のほうを見ました。今度は私のほうで自然と足を止めました。するとKも止まりました。私はそのときやっとKの目を真向きに見ることがで

きたのです。Kは私より背の高い男でしたから、私はいきおい彼の顔を見上げるようにしなければなりません。私はそうした態度で、狼のごとき心を罪のない羊に向けたのです。

「もうその話はやめよう。」と彼が言いました。彼の目にも彼の言葉にも変に悲痛なところがありました。私はちょっと挨拶ができなかったのです。するとKは、「やめてくれ。」と今度は頼むように言い直しました。私はそのとき彼に向かって残酷な答えを与えたのです。狼が隙を見て羊の喉笛へ食らいつくように。

「やめてくれって、僕が言い出したことじゃない、もともと君のほうから持ち出した話じゃないか。しかし君がやめたければ、やめてもいいが、ただ口の先でやめたってしかたがあるまい。君の心でそれをやめるだけの覚悟がなければ。いったい君は君の平生の主張をどうするつもりなのか。」

私がこう言ったとき、背の高い彼は自然と私の前に*萎縮して小さくなるような感じがしました。彼はいつも話すとおりすこぶる強情な男でしたけれども、一方ではまた人一倍の正直者でしたから、自分の矛盾などをひどく非難される場合には、決して平気でいられないたちだったのです。私は彼の様子を見てようやく安心しました。すると彼は*卒然「覚悟？」と聞きました。そうして私がまだ何とも答えない先に「覚悟、——覚悟ならないこともない。」と付け加えました。彼の調子は独り言のようでした。また夢の中の言葉のようでした。

二人はそれぎり話を切り上げて、[9]小石川の宿のほうに足を向けました。割合に風のない暖かな日でしたけれども、なにしろ冬のことですから、公園の中は寂しいものでした。殊に霜に打たれて青みを失った杉の木立の茶褐色が、薄黒い空の中に、梢を並べてそびえているのを振り返って見たときは、寒さが背中へかじりついたような心持ちがしました。われわれは夕暮れの[10]本郷台を急ぎ足でどしどし通り抜けて、また向

9 小石川　東京都文京区にある地名。　10 本郷台　西は東京都文京区小石川、東は東京都台東区上野・谷中に接する一帯の台地。

問「せっかく積み上げた過去」とは、どのようなものか。　問「居直り強盗のごとく感ぜられた」とは、どのようなことか。

問そのとき「私」は、「覚悟」をどのようなものと理解したか。

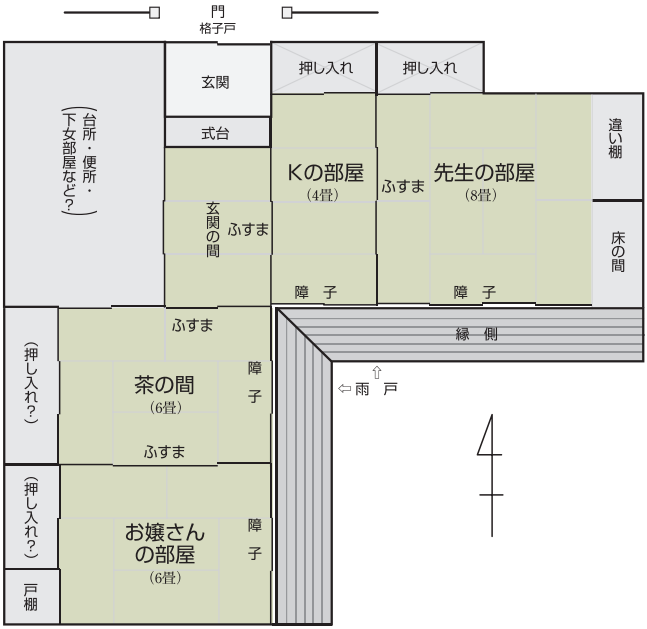
＊侮蔑　発現　萎縮　卒然

こうの丘へ上るべく小石川の谷へ下りたのです。私はその頃になって、ようやく外套の下に体の温かみを感じ出したくらいです。

急いだためでもありましょうが、われわれは帰り道にはほとんど口を利きませんでした。うちへ帰って食卓に向かったとき、奥さんはどうして遅くなったのかと尋ねました。私はKに誘われて上野へ行ったと答えました。奥さんはこの寒いのにと言って驚いた様子を見せました。お嬢さんは上野に何があったのかと聞きたがります。私は何もないが、ただ散歩したのだという返事だけしておきました。平生から無口なKは、いつもよりなお黙っていました。奥さんが話しかけても、お嬢さんが笑っても、ろくな挨拶はしませんでした。それから飯を飲み込むようにかき込んで、私がまだ席を立たないうちに、自分の部屋へ引き取りました。

◆

その頃は覚醒*とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。しかしKが古い自分をさらりと投げ出して、一意に新しい方角へ走り出さなかったのは、現代人の考えが彼に欠けていたからではないのです。彼には投げ出すことのできないほど尊い過去があったからです。彼はそのために今日まで



推定される下宿の間取り

生きてきたと言ってもいいくらいなのです。だからKが一直線に愛の目的物に向かって猛進しないといって、決してその愛の生ぬるいことを証拠立てるわけにはゆきません。いくら熾烈（しれつ）*な感情が燃えていても、彼はむやみに動けないのです。前後を忘れるほどの衝動が起こる機会を彼に与えない以上、Kはどうしてもちょっと踏みとどまって自分の過去を振り返らなければならなかったのです。そうすると過去が指し示す道を今までどおり歩かなければならなくなるのです。そのうえ彼には現代人の持たない強情と我慢がありました。私（わたくし）はこの双方の点においてよく彼の心を見抜いていたつもりなのです。

　上野から帰った晩は、私にとって比較的安静な夜でした。私はKが部屋へ引き上げた後を追いかけて、彼の机のそばに座り込みました。そうして取りとめもない世間話をわざと彼に仕向けました。彼は迷惑そうでした。私の目には勝利の色が多少輝いていたでしょう、私の声には確かに得意の響きがあったのです。私はしばらくKと一つ火鉢に手をかざした後、自分の部屋に帰りました。外のことにかけては何をしても彼に及ばなかった私も、そのときだけは恐るるに足りないという自覚を彼に対して持っていたのです。

　私は程なく穏やかな眠りに落ちました。しかし突然私の名を呼ぶ声で目を覚ましました。見ると、間のふすまが二尺ばかり開いて、そこにKの黒い影が立っています。そうして彼の部屋には宵のとおりまだ明かりがついているのです。急に世界の変わった私は、少しの間口を利くこともできずに、ぼうっとして、その光景を眺めていました。

　そのときKはもう寝たのかと聞きました。Kはいつでも遅くまで起きている男でした。私は黒い影法師のようなKに向かって、何か用かと聞き返しました。Kは大した用でもない、ただもう寝たか、まだ起きているかと思って、便所へ行ったついでに聞いてみただけだと答えました。Kはランプの灯を背中に受けているので、彼の顔色や目つきは、全く私には分かりませんでした。けれども彼の声はふだんよりもかえって落ち着いていたくらいでした。

　Kはやがて開けたふすまをぴたりと立て切りました。私の部屋はすぐもとの暗闇に返りました。私はその暗闇より静か

11 二尺　七一ページ注6参照。

＊ 覚醒　熾烈

な夢を見るべくまた目を閉じました。私はそれぎり何も知りません。しかし翌朝になって、ゆうべのことを考えてみると、何だか不思議でした。私はことによると、全てが夢ではないかと思いました。それで飯を食うとき、Kに聞きました。Kは確かにふすまを開けて私の名を呼んだと言います。なぜそんなことをしたのかと尋ねると、別にはっきりした返事もしません。調子の抜けた頃になって、近頃は熟睡ができるのかとかえって向こうから私に問うのです。私は何だか変に感じました。

その日はちょうど同じ時間に講義の始まる時間割りになっていたので、二人はやがていっしょにうちを出ました。今朝からゆうべのことが気にかかっている私は、途中でまたKを追及しました。けれどもKはやはり私を満足させるような答えをしません。私はあの事件について何か話すつもりではなかったのかと念を押してみました。Kはそうではないと強い調子で言い切りました。昨日上野で「その話はもうやめよう。」と言ったではないかと注意するごとくにも聞こえました。Kはそういう点にかけて鋭い自尊心を持った男なのです。ふとそこに気のついた私は突然彼の用いた「覚悟」という言葉を連想し出しました。すると今までまるで気にならなかったその二字が妙な力で私の頭を抑え始めたのです。

◆

Kの果断に富んだ性格は私(わたくし)によく知れていました。彼のこの事件についてのみ優柔なわけも私にはちゃんとのみ込めていたのです。つまり私は*一般を心得た上で、●例外の場合をしっかり攫(つら)まえたつもりで得意だったのです。ところが「覚悟」という彼の言葉を、頭の中で何べんも*咀嚼(そしゃく)しているうちに、私の得意はだんだん色を失って、しまいには*ぐらぐら動き始めるようになりました。私はこの場合もあるいは彼にとって例外でないのかもしれないと思い出したのです。全ての疑惑、*煩悶(はんもん)、*懊悩(おうのう)、を一度に解決する最後の手段を、彼は胸の中に*畳み込んでいるのではなかろうかとうたぐり始めたのです。●そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた私は、はっと驚きました。そのときの私がもしこの驚きをもって、もういっぺん彼の口にした覚悟の内容を公平に見回したらば、まだよかったかもしれません。私はただKがお嬢さんに対して進んでいくという意味にその言葉を解釈しました。果断に富んだ彼の性格が、恋の方面に発揮されるのがすなわち彼の覚悟だろうといちずに思い込んでしまったのです。

私は私にも最後の決断が必要だという声を心の耳で聞きま

した。私はすぐその声に応じて勇気を振り起こしました。私はKより先に、しかもKの知らない間に、事を運ばなくてはならないと覚悟を決めました。私は黙って機会を狙っていました。しかし二日たっても三日たっても、私はそれを捕まえることができません。私はKのいないとき、またお嬢さんの留守な折を待って、奥さんに談判を開こうと考えたのです。しかし片方がいなければ、片方が邪魔をするといったふうの日ばかり続いて、どうしても「今だ。」と思う好都合が出てきてくれないのです。私はいらいらしました。

一週間の後私はとうとう堪え切れなくなって仮病を使いました。奥さんからもお嬢さんからも、K自身からも、起きろという催促を受けた私は、生返事をしただけで、十時頃まで布団をかぶって寝ていました。私はKもお嬢さんもいなくなって、家の中がひっそり静まった頃を見計らって寝床を出ました。私の顔を見た奥さんは、すぐどこが悪いかと尋ねました。食べ物は枕元へ運んでやるから、もっと寝ていたらよかろうと忠告してもくれました。体に異状のない私は、とても寝る気にはなれません。顔を洗っていつものとおり茶の間で飯を食いました。そのとき奥さんは長火鉢の向こう側から給仕をしてくれたのです。私は朝飯とも昼飯とも片づかない茶椀を手に持ったまま、どんなふうに問題を切り出したものだろうかと、そればかりに屈託していたから、外観からは実際気分のよくない病人らしく見えただろうと思います。*

私は飯をしまってたばこを吹かし出しました。私が立たないので奥さんも火鉢のそばを離れるわけにゆきません。下女を呼んで膳を下げさせたうえ、鉄瓶に水をさしたり、火鉢の縁を拭いたりして、私に調子を合わせています。私は奥さんに特別な用事でもあるのかと問いました。奥さんはいいえと答えましたが、今度は向こうでなぜですと聞き返してきました。私は実は少し話したいことがあるのだと言いました。奥さんは何ですかと言って、私の顔を見ました。奥さんの調子はまるで私の気分に入り込めないような軽いものでしたから、私は次に出すべき文句も少し渋りました。

私はしかたなしに言葉の上で、いいかげんにうろつき回っ

＊優柔　咀嚼　煩悶　懊悩　屈託

問「一般」「例外」とは、それぞれ具体的にはどのようなことを表しているか。

問「そうした新しい光で覚悟の二字を眺め返してみた」とは、どのようなことか。

た末、Kが近頃何か言いはしなかったかと奥さんに聞いてみました。奥さんは思いもよらないというふうをして、「何を？」とまた反問してきました。そうして私の答える前に、「あなたには何かおっしゃったんですか。」とかえって向こうで聞くのです。

◆

Kから聞かされた打ち明け話を、奥さんに伝える気のなかった私は、「いいえ。」と言ってしまった後で、すぐ自分のうそを快からず感じました。しかたがないから、別段何も頼まれた覚えはないのだから、Kに関する用件ではないのだと言い直しました。奥さんは「そうですか。」と言って、後を待っています。私はどうしても切り出さなければならなくなりました。私は突然「奥さん、お嬢さんを私にください。」と言いました。奥さんは私の予期してかかったほど驚いた様子も見せませんでしたが、それでもしばらく返事ができなかったものと見えて、黙って私の顔を眺めていました。一度言い出した私は、いくら顔を見られても、それに頓着などはしていられません。「ください、ぜひください。」と言いました。「私の妻としてぜひください。」と言いました。奥さんは年を取っているだけに、私よりもずっと落ち着いていました。「あげてもいいが、あんまり急じゃありませんか。」と聞くのです。私が「急にもらいたいのだ。」とすぐ答えたら笑い出しました。そうして「よく考えたのですか。」と念を押すのです。私は言い出したのは突然でも、考えたのは突然でないというわけを強い言葉で説明しました。

それからまだ二つ三つの問答がありましたが、私はそれを忘れてしまいました。男のようにはきはきしたところのある奥さんは、普通の女と違ってこんな場合にはたいへん心持ちよく話のできる人でした。「よござんす、差し上げましょう。」と言いました。「差し上げるなんて威張った口の利ける境遇ではありません。どうぞもらってください。ご存じのとおり父親のない哀れな子です。」と後では向こうから頼みました。

話は簡単でかつ明瞭に片づいてしまいました。最初からしまいまでに恐らく十五分とはかからなかったでしょう。奥さんは何の条件も持ち出さなかったのです。親類に相談する必要もない、後から断ればそれでたくさんだと言いました。本人の意向さえ確かめるに及ばないと明言しました。そんな点になると、学問をした私のほうが、かえって形式に拘泥するくらいに思われたのです。親類はとにかく、当人にはあらかじめ話して承諾を得るのが順序らしいと私が注意したとき、

奥さんは「大丈夫です。本人が不承知のところへ、私があの子をやるはずがありませんから。」と言いました。

自分の部屋へ帰った私は、事のあまりにわけもなく進行したのを考えて、かえって変な気持ちになりました。果たして大丈夫なのだろうかという疑念さえ、どこからか頭の底にはい込んできたくらいです。けれども大体のうえにおいて、私の未来の運命は、これで定められたのだという観念が私の全てを新たにしました。

私は昼頃また茶の間へ出かけていって、奥さんに、今朝の話をお嬢さんにいつ通じてくれるつもりかと尋ねました。奥さんは、自分さえ承知していれば、いつ話してもかまわなかろうというようなことを言うのです。こうなると何だか私よりも相手のほうが男みたようなので、私はそれぎり引き込もうとしました。すると奥さんが私を引き止めて、もし早いほうが希望ならば、今日でもいい、稽古から帰ってきたら、すぐ話そうと言うのです。私はそうしてもらうほうが都合がいいと答えてまた自分の部屋に帰りました。しかし黙って自分の机の前に座って、二人のこそこそ話を遠くから聞いている私を想像してみると、何だか落ち着いていられないような気もするのです。私はとうとう帽子をかぶって表へ出ました。そうしてまた坂の下でお嬢さんに行き合いました。何にも知らないお嬢さんは私を見て驚いたらしかったのです。私が帽子をとって「今お帰り。」と尋ねると、向こうではもう病気は治ったのかと不思議そうに聞くのです。私は「ええ治りました、治りました。」と答えて、ずんずん水道橋[12]のほうへ曲がってしまいました。

◆

私は猿楽町[13]から神保町の通りへ出て、小川町のほうへ曲がりました。私がこの界隈を歩くのは、いつも古本屋を冷やかすのが目的でしたが、*その日は手擦れのした書物などを眺める気が、どうしても起こらないのです。*私は歩きながら絶えずうちのことを考えていました。私にはさっきの奥さんの記憶がありました。それからお嬢さんがうちへ帰ってからの想像がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられて

12 水道橋　東京都文京区と千代田区との境を流れる神田川に架かる橋。ここでは、その付近一帯。
13 猿楽町　「猿楽町」「神保町」「小川町」は、いずれも千代田区にある地名。

＊ 頓着　拘泥　界隈　手擦れ

いたようなものです。そのうえ私は時々往来の真ん中でわれ知らずふと立ち止まりました。そうして今頃は奥さんがお嬢さんにもうあの話をしている時分だろうなどと考えました。またあるときは、もうあの話が済んだ頃だとも思いました。

私はとうとう万世橋[14]を渡って、明神[15]の坂を上がって、本郷台へ来て、それからまた菊坂[16]を下りて、しまいに小石川の谷へ下りたのです。私の歩いた距離はこの三区[17]にまたがって、いびつな円を描いたとも言われるでしょうが、私はこの長い散歩の間ほとんどKのことを考えなかったのです。今そのときの私を回顧して、なぜだと自分に聞いてみてもいっこう分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘れうるくらい、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心がまたそれを許すべきはずはなかったのですから。

Kに対する私の良心が復活したのは、私がうちの格子を開けて、玄関から座敷へ通るとき、すなわち例のごとく彼の部屋を抜けようとした瞬間でした。彼はいつものとおり机に向かって書見をしていました。彼はいつものとおり書物から目を離して、私を見ました。しかし彼はいつものとおり今帰ったのかとは言いませんでした。彼は「病気はもういいのか、医者へでも行ったのか。」と聞きました。私はその刹那に、彼の前に手をついて、謝りたくなったのです。しかも私の受けたそのときの衝動は決して弱いものではなかったのです。もしKと私がたった二人曠野[18]の真ん中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。しかし奥には人がいます。私の自然はすぐそこで食い止められてしまったのです。そうして悲しいことに永久に復活しなかったのです。

夕飯のときKと私はまた顔を合わせました。何にも知らないKはただ沈んでいただけで、少しも疑い深い目を私に向けません。何にも知らない奥さんはいつもよりうれしそうでした。私だけが全てを知っていたのです。私は鉛のような飯を食いました。そのときお嬢さんはいつものようにみんなと同じ食卓に並びませんでした。奥さんが催促すると、次の部屋でただ今と答えるだけでした。それをKは不思議そうに聞いていました。しまいにどうしたのかと奥さんに尋ねました。奥さんはおおかたきまりが悪いのだろうと言って、ちょっと私の顔を見ました。Kはなお不思議そうに、何できまりが悪いのかと追及しにかかりました。奥さんは微笑しながらまた私の顔を見るのです。

私は食卓に着いた初めから、奥さんの顔つきで、事の成り

行きをほぼ推察していました。しかしKに説明を与えるために、私のいる前で、それをことごとく話されてはたまらないと考えました。奥さんはまたそのくらいのことを平気でする女なのですから、私は冷や冷やしたのです。幸いにKはまたもとの沈黙に返りました。平生より多少機嫌のよかった奥さんも、とうとう私の恐れを抱いている点までは話を進めずにしまいました。私はほっと一息して部屋へ帰りました。しかし私がこれから先Kに対して取るべき態度は、どうしたものだろうか、私はそれを考えずにはいられませんでした。私はいろいろの弁護を自分の胸でこしらえてみました。けれどもどの弁護もKに対して面と向かうには足りませんでした。卑怯な私はついに自分で自分をKに説明するのが嫌になったのです。

◆

私（わたくし）はそのまま二、三日過ごしました。その二、三日の間Kに対する絶えざる不安が私の胸を重くしていたのは言うまでもありません。私はただでさえ何とかしなければ、彼にすまないと思ったのです。そのうえ奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私をつっつくように刺激するのですから、私はなおつらかったのです。どこか男らしい気性を備えた奥さんは、いつ私のことを食卓でKにすっぱ抜かないとも限りません。それ以来殊に目立つように思えた私に対するお嬢さんの挙止動作*も、Kの心を曇らす不審*の種とならないとは断言できません。私は何とかして、私とこの家族との間に成り立った新しい関係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。しかし倫理的に弱点を持っていると、自分で自分を認めている私には、それがまた至難*のことのように感ぜられたのです。

私はしかたがないから、奥さんに頼んでKにあらためてそう言ってもらおうかと考えました。無論私のいないときにです。しかしありのままを告げられては、直接と間接の区別があるだけで、面目*のないのに変わりはありません。といって、

14 **万世橋**　千代田区にあり、神田川に架かる橋。
15 **明神**　神田明神。千代田区外神田にある神社。
16 **菊坂**　文京区にある坂。
17 **三区**　旧区制による小石川・本郷・神田の三区。現在の文京区と千代田区の一部。
＊挙止動作　不審　至難　面目

問 **「私の自然」とは、どのようなことを表しているか。**
問 **「何にも知らない」ことの内容は、「K」と「奥さん」とでは、どのように異なるか。**

こしらえ事を話してもらおうとすれば、奥さんからその理由を詰問されるに決まっています。もし奥さんに全ての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱点を自分の愛人とその母親の前にさらけ出さなければなりません。真面目な私には、それが私の未来の信用に関するとしか思われなかったのです。結婚する前から恋人の信用を失うのは、たとい一分一厘でも、私には堪え切れない不幸のように見えました。

　要するに私は正直な道を歩くつもりで、つい足を滑らしたばか者でした。もしくは狡猾な男でした。そうしてそこに気のついているものは、今のところただ天と私の心だけだったのです。しかし立ち直って、もう一歩前へ踏み出そうとするには、今滑ったことをぜひとも周囲の人に知られなければならない窮境に陥ったのです。私はあくまで滑ったことを隠したがりました。同時に、どうしても前へ出ずにはいられなかったのです。私はこの間に挟まってまた立ちすくみました。

　五、六日たった後、奥さんは突然私に向かって、Kにあのことを話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答えました。するとなぜ話さないのかと、奥さんが私をなじるのです。私はこの問いの前に固くなりました。そのとき奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覚えています。

「道理で私が話したら変な顔をしていましたよ。あなたもよくないじゃありませんか、平生あんなに親しくしている間柄だのに、黙って知らん顔をしているのは。」

　私はKがそのとき何か言いはしなかったかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも言わないと答えました。しかし私は進んでもっと細かいことを尋ねずにはいられませんでした。奥さんはもとより何も隠すわけがありません。大した話もないがと言いながら、いちいちKの様子を語って聞かせてくれました。

　奥さんの言うところを総合して考えてみると、Kはこの最後の打撃を、最も落ち着いた驚きをもって迎えたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい関係について、最初はそうですかとただ一口言っただけだったそうです。しかし奥さんが、「あなたも喜んでください。」と述べたとき、彼は初めて奥さんの顔を見て微笑を漏らしながら、「おめでとうございます。」と言ったまま席を立ったそうです。そうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返って、「結婚はいつですか。」と聞いたそうです。それから「何かお祝いをあげたいが、私は金がないからあげることができませ

ん。」と言ったそうです。奥さんの前に座っていた私は、その話を聞いて胸がふさがるような苦しさを覚えました。

◆

*勘定してみると奥さんがKに話をしてからもう二日余りになります。その間Kは私に対して少しも以前と異なった様子を見せなかったので、私は全くそれに気がつかずにいたのです。彼の超然とした態度はたとい外観だけにもせよ、敬服に*値すべきだと私は考えました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼のほうがはるかに立派に見えました。「俺は策略で勝っても人間としては負けたのだ。」という感じが私の胸に渦巻いて起こりました。私はそのときさぞKが軽蔑していることだろうと思って、独りで顔を赤らめました。しかし今さらKの前に出て、恥をかかせられるのは、私の自尊心にとって大いな苦痛でした。

私が進もうかよそうかと考えて、ともかくも明くる日まで待とうと決心したのは土曜の晩でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。私は今でもその光景を思い出すとぞっとします。いつも東枕で寝る私が、その晩に限って、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かもしれません。私は枕元から吹き込む寒い風でふと目を覚ましたのです。見ると、いつも立て切ってあるKと私の部屋との仕切りのふすまが、この間の晩と同じくらい開いています。けれどもこの間のように、Kの黒い姿はそこには立っていません。私は暗示を受けた人のように、床の上に肘をついて起き上がりながら、きっとKの部屋をのぞきました。ランプが暗くともっているのです。それで床も敷いてあるのです。しかし掛け布団は跳ね返されたように裾のほうに重なり合っているのです。そうしてK自身は向こうむきに突っ伏しているのです。

私はおいと言って声をかけました。しかし何の答えもありません。おいどうかしたのかと私はまたKを呼びました。それでもKの体はちっとも動きません。私はすぐ起き上がって、敷居際まで行きました。そこから彼の部屋の様子を、暗いランプの光で見回してみました。

そのとき私の受けた第一の感じは、Kから突然恋の自白を

問「正直な道を歩くつもりで、つい足を滑らした」とは、具体的にはどのようなことか。

問「進もうかよそうか」とは、具体的にどのようなことか。

＊詰問　狡猾　窮境　勘定　超然

聞かされたときのそれとほぼ同じでした。私の目は彼の部屋の中を一目見るやいなや、あたかもガラスで作った義眼のように、動く能力を失いました。私は棒立ちに立ちすくみました。それが疾風のごとく私を通過した後で、私はまたああしまったと思いました。もう取り返しがつかないという黒い光が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる全生涯をものすごく照らしました。そうして私はがたがた震え出したのです。

それでも私はついに私を忘れることができませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に目をつけました。それは予期どおり私の名宛てになっていました。私は夢中で封を切りました。しかし中には私の予期したようなことは何にも書いてありませんでした。私は私にとってどんなにつらい文句がその中に書き連ねてあるだろうと予期したのです。そうして、もしそれが奥さんやお嬢さんの目に触れたら、どんなに軽蔑されるかもしれないという恐怖があったのです。私はちょっと目を通しただけで、まず助かったと思いました。（もとより世間体の上だけで助かったのですが、その世間体がこの場合、私にとっては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡単でした。そうしてむしろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行く先の望みがないから、自殺するというだけなのです。それから今まで私に世話になった礼が、ごくあっさりした文句でその後に付け加えてありました。世話ついでに死後の片づけ方も頼みたいという言葉もありました。奥さんに迷惑をかけてすまんからよろしくわびをしてくれという句もありました。国元へは私から知らせてもらいたいという依頼もありました。必要なことはみんな一口ずつ書いてある中にお嬢さんの名前だけはどこにも見えません。私はしまいまで読んで、すぐKがわざと回避したのだということに気がつきました。しかし私の最も痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたらしく見える、もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろうという意味の文句でした。

私は震える手で、手紙を巻き収めて、再び封の中へ入れました。私はわざとそれをみんなの目につくように、もとのとおり机の上に置きました。そうして振り返って、ふすまにほとばしっている血潮を初めて見たのです。

その後のあらすじ

Kは頸動脈を切って死んだ。私はKの父と兄の了解を得て、[18]「雑司ケ谷」の墓地にKを葬り、毎月の墓参りを欠かさなかった。大学を卒業し、お嬢さんと結婚した私の心から、黒い影が消えることはなかった。「自分もあの叔父と同じ人間だ」と意識し、自分に愛想を尽かした私は、世間的に職を求めることもしなかった。書物も酒も救いにはならなかった。妻の理解を得ることも諦めた私の胸を、「私もKの歩いた道を、Kと同じようにたどっているのだ」という予感がよぎるようになる。私は「人間の罪」を深く感じ、死んだつもりで生きていこうと決心した。苦しい心の闘いの中で、私の前には、死の道だけが不思議な力によって開かれていた。明治天皇の崩御があり、乃木大将の殉死が報ぜられた。私は「明治の精神に殉死するつもり」でついに自殺を決意し、自分の過去をこの手紙に書き残すことにしたのであった。

18 **雑司ケ谷**　東京都豊島区にある地名。

問 **「私を忘れることができませんでした」とは、どのようなことか。**

問 **「みんなの目につくように」置いたのは、なぜか。**

＊ 世間体　回避



夏目漱石（なつめ そうせき）　慶応三（一八六七）年～大正五（一九一六）年。小説家・英文学者。本名は夏目金之助。東京都の生まれ。明治三十八（一九〇五）年に発表した『吾輩は猫である』が好評を得、さらに『坊つちやん』『草枕』などにより作家としての地位を確立。作品に『虞美人草』『三四郎』『それから』『門』『彼岸過迄』『行人』『道草』『明暗』などがある。本文は『漱石全集　第六巻』（昭和五十（一九七五）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「K」の告白以後、「私」の「K」に対する心情はどのように変化していき、それが「私」にどのような態度を取らせることになったか、その経過をまとめてみよう。

2「私」の「精神的に向上心のない者はばかだ」（一〇七・上12～上13）という言葉の真意はどこにあったのか、まとめてみよう。

3「俺は策略で勝っても人間としては負けたのだ」（一一九・上9～上10）という言葉には、「私」のどのような心情が込められているか、考えてみよう。

4「もっと早く死ぬべきだのになぜ今まで生きていたのだろう」（一二〇・下12～下13）という言葉に込められた「K」の心情を考え、「K」の自殺の理由について話し合ってみよう。

◇言葉と表現

1「一つ火鉢」（一一一・上17）「生返事」（一一三・上12）の意味を調べ、この例に倣って、次の語が付く言葉を探してみよう。

(1)一つ□□　(2)生□□

2 次の言葉を含む四字の熟語を調べてみよう。

(1)一心（一〇四・下15）　(2)一意（一一〇・上17）　(3)優柔（一一二・下4）

3「理想と現実」（一〇七・上6）のように、次の熟語と対になる意味の熟語をあげてみよう。

(1)総合（一〇五・下2）　(2)緊張（一〇七・上11）　(3)精神（一〇七・上12）

(4)侮蔑（一〇八・上3）　(5)過去（一〇八・上4）　(6)単純（一〇八・下14）

(7)自然（一〇八・下19）　(8)勝利（一一一・上15）　(9)得意（一一一・上16）

(10)一般（一一二・下5）　(11)永久（一一六・下7）　(12)直接（一一七・下15）

◇言語活動

1『こころ』が書かれ、夏目漱石が生きた「明治」とは、どのような時代だったかを調べ、レポートにまとめてみよう。

2 奥さんへ申し込みをした後の「私」の行動、特に下宿を出てから東京の町を歩く行程を、地図を通して確かめてみよう。

3 遺書を読んだ印象を踏まえ、「先生」に向かって手紙で語りかけるスタイルで、自分の思いをまとめてみよう。

夏目漱石・芥川龍之介往復書簡

漱石から久米正雄・芥川龍之介へ

（大正五年八月二十一日）

あなたがたから[1]端書がきたから奮発してこの手紙を上げます。僕は相変わらず「明暗」を午前中書いています。心持ちは苦痛、快楽、器械的、この三つをかねています。存外涼しいのが何より仕合わせです。それでも毎日百回近くもあんなことを書いていると大いに俗了された心持ちになりますので三四日前から午後の日課として漢詩を作ります。日に一つくらいです。そうして七言律です。なかなかできません。厭になればすぐやめるのだから幾つできるか分かりません。あなた方の手紙を見たら石印云々とあったので一つ作りたくなってそれを七言絶句にまとめましたからそれを披露します。久米君はまるで興味がないかもしれませんが芥川君は詩を作るという話だからここへ書きます。

尋仙未向碧山行。住在人間足道情。明暗双双三万字。撫摩石印自由成。

（句読をつけたのは字くばりがまずかったからです。「明暗双々」というのは禅家で用いる熟字であります。三万字はいい加減です。原稿紙で勘定すると新聞一回分が一千八百字くらいあります。だから百回に見積もると十八万字になります。しかし明暗双双十八万字では字が多くって平仄が差し支えるので致し方がありませんゆえ三万字で御免を蒙りました。結

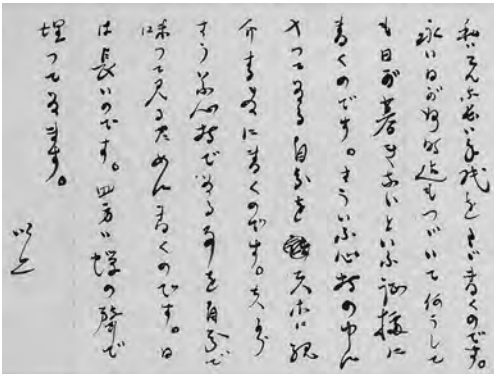
1 **端書**　大学卒業後、千葉県の一の宮海岸に滞在していた芥川龍之介と久米正雄（一八九一年〜一九五二年）から出され　＊ **奮発**　**存外**　**俗了**　**披露**
たはがき。実物は未確認で、どういうことが書かれていたかは不明。　2 **「明暗」**　この年の五月二十六日から連載を始めた漱石最後の長編。一八八回で中絶。
3 **石印**　石に彫った印。　4 **詩**　ここでは漢詩のこと。　5 **尋仙…**　仙界を尋ねる気はあるが、まだ奥深い山に入らない。人間世界に住んでも、脱俗の気
は十分である。明暗こもごもの世界を描いて三万字になる。石印をなでながら作品は自然と生まれていく。　6 **平仄**　漢詩における、漢字配列の決まり。

句に「自由成」とあるは少々手前味噌(みそ)めきますが、これも自然の成り行き上やむを得ないと思ってください）

*

一[7]の宮という所に志田[8]という博士がいます。山を安く買ってそこに住んでいます。景色のよい所ですが、どうせ隠遁(いんとん)するならあのくらいじゃ不充分です。もっと景色がよくなけりゃ田舎へ引っ込むかいはありません。

勉強をしますか。何か書きますか。君方は新時代の作家になるつもりでしょう。僕もそのつもりであなた方の将来を見ています。どうぞ偉くなってください。しかしむやみにあせってはいけません。ただ牛のようにずうずうしく進んで行くのが大事です。文壇にもっと心持ちのよい愉快な空気を輸入したいと思います。それからむやみにカ[9]タカナに平伏する癖をやめさせてやりたいと思います。これは両君ともご同感だろうと思います。



今日からつくつく法師が鳴き出しました。もう秋が近づいて来たのでしょう。

私はこんな長い手紙をただ書くのです。永い日がいつまでも続いてどうしても日が暮れないという証拠に書くのです。そういう心持ちの中に入っている自分を君らに紹介するために書くのです。それからそういう心持ちでいることを自分で味わって見るために書くのです。日は長いのです。四方は蟬(せみ)の声で埋まっています。以上

八月二十一日　　夏目金之助

久米正雄様
芥川龍之介様

芥川龍之介から夏目漱石へ（八月二十八日）

先生。[10]また手紙を書きます。さぞこの頃の暑さにわれわれの長い手紙をお読みになるのは、ご迷惑だろうと思いますが、これもわれわれのような門下生を持った因果とおあきらめください。そのかわりご返事のご心配には及びません。先生へ手紙を書くということがそれ自身われわれの満足なのですから。

今日はわれわれのボヘミアンライフ[11]を少しご紹介致します。今いる所はこの家で別荘と称する十畳と六畳と二間続きのかけ離れた一棟ですが、女中はじめわれわれ以外の人間は、飯のときと夜、床を取るときとのほかはやってきません。これがまずわれわれの生活を自由ならしめる第一の条件です。われわれはこの別荘の天地に、寝巻き[12]も起き巻きも一つでごろごろしています。来るときに二人とも時計を忘れたので何時に起きて何時に寝るのだか、われわれにはさっぱり分かりません。何しろ太陽の高さでほぼ見当*をつけるんですから。非常に「帳裏日月長[13]」という気がします。それから、甚だ尾籠*ですが、われわれはめったに後架[14]へ入りません。大抵は前の庭のような所へ、してしまうのです。砂地ですぐしみこんでしまいますから、宿の者に発見されるおそれなどは万々ありません。第一、非常に手軽でしかも爽快です。そういう始末ですから部屋の中は原稿用紙や本や絵*の具や枕やはがきで、われながらだらしがないと思うほど、雑然紛然としています。私は本来久米などよりよほどきれい好きなのですが、この頃はすっかり悪風に感染してしまいました。夜はその雑物を隅のほうへ積み重ねて女中に床を取ってもらいます。布団や掻[15]い巻きはかなり清潔ですが、蚊帳[16]は穴があるようです。ようですというのはいつでも中に蚊が入っているからで、実際穴があるかどうか面倒くさいから、調べてみたことはありません。そのかわり、獅噛火鉢[17]を一つ蚊帳の中へ入れてその中で盛んに蚊やり線香をいぶしました。久米の説によると、いぶしすぎた晩は、あくる日頭が痛いそうです。ではよそうかと訊きますと蚊に食われるよりは頭痛のするほうがまだいいと

＊手前味噌　見当　尾籠　爽快

7 一の宮　愛知県北西部の市。　**8 志田**　商法学者の志田鉀太郎（一八六八年～一九五一年）のこと。　**9 カタカナ**　西洋の文化を指す。何でも西洋のものが上だとする主体性のない態度を批判している。　**10 また**　二十一日付けの漱石の手紙に芥川と久米は返事を書き、漱石の二十四日付けの返事に、再度、芥川と久米は返事を出している。　**11 ボヘミアンライフ**　自由で気ままな生活。　**12 寝巻きも…**　寝たときも起きたときも同じものを着る、けじめのない姿を言ったもの。「寝巻き起き巻き」とつなげて言ったりする。　**13 帳裏日月長**　白居易「長恨歌」の字句を組み合わせて使った表現。　**14 後架**　便所。　**15 掻い巻き**　綿入れの夜着。　**16 蚊帳**　蚊を防ぐために、つり下げて使用する寝具。目の粗い麻・木綿などで作る。　**17 獅噛火鉢**　獅噛み（獅子の顔を模様にしたもの）を足や取っ手などに取り付けた金属製の丸火鉢。

問「勉強をしますか。…」という語りかけは、この手紙にどのような効果を与えているか。

問「ご紹介致します」とあるが、自分たちの日常をどのように相手に伝えているか。

いいます。そこでやはり毎晩十本くらいずつ燃やすことに決めました。頭痛はしないまでも、いぶしすぎると翌日鼻の穴が少しいぶり臭いようです。線香さえなくなればもういいかげんにやめてもいいのですが、こてこて買ってきたのでなかなかなくなりそうもありません。この頃はそれが少し苦になりだしました。

　海へは雨さえふっていなければ何事をおいても入ります。ここは波の静かなときでもほかよりはよほど大きなのが来ますから、少し風が吹くと文字どおりに波濤[18]洶湧します。一昨日われわれが入っていたときでした。私が少し泳いでそれから背の立つ所へ来てみると、どうしたのだかいるはずの久米の姿が見えません。たぶん先へ上がったのだろうと思って砂浜の方へ来てみますと、果たしてそこに寝転んでいました。が、いやな顔色をして両手で面を押さえながら、うんうん言っているのです。久米は心臓の悪い男ですから、どうかしたのかと思って心配しながら訊いてみますと、実は無理に遠くまで泳いでいったためにくたびれて帰れなくなったところへ何度も頭から波をかぶったので、大変苦しんだのだそうです。そうしてあまりからい水を飲んだので、もうこれは駄目かなと思ったのだそうです。ではまたなぜそんなに遠くへ行ったのだといいますと、女でさえ泳いでいるのに男が泳げなくちゃ外聞が悪いと思って奮発*したのだということでした。つまらない見えをしたものです。ことによるとこの女なるものが尋常一様の女ではなくって、久米のほれている女だったかもしれません。女と言えば、きれいな女は一人もいませんが、黒の海水着に赤や緑の頭巾をかぶった女の子が水に漬かっているのはきれいです。彼らは全身が歓喜のように躍ったり跳ねたりしています。そうして蟹が一つ這っていてもおもしろそうに転がって笑います。浜菊の咲いている砂丘と海とを背景にして、彼らの一人をワットマンへ画こうという計画があるんですが、まだ着手しません。画は、新思潮社同人中で久米が一番早く始めました。何でも大下藤次郎氏か三宅克己氏の弟子か何かになったのかも



しれません。とにかく、セザンヌ[21]の孫弟子くらいにはかけるそうです。同人の中にはまだ松岡[22]も画をかきます。しかし、彼の画は倒にして見ても横にして見ても差し支えないという特色があるくらいですから、まあ私と五十歩百歩でしょう。それでも二人ともピカソ[23]くらいには行っているという自信があります。

いよいよ九月[24]の一日が近づくのであんまりいい気はしません。先生に謝っていただくよりは、お礼を言うようになることを祈っています。今日チェホフ[25]の新しく英訳された短編を読んだのですが、あれは容易に軽蔑できません。あのくらいになるのも一生の仕事なんでしょう。ゾログーブ[26]を私が大いに軽蔑したように久米は書きましたが、そんなに軽蔑はしていません。ずいぶん頭の下がるようなパッセージもたくさんあります。ただ、ウェルス[27]の短編だけは軽蔑しました。あんな俗小説家が声名があるのなら、英国の文壇よりも日本の文壇のほうが進歩していそうな気がします。われわれは海岸で運動をして盛んに飯を食っているんですから健康の心配はいりませんが、先生は東京で暑いのに小説をかいておいでになるんですからそうはゆきません。どうかお体をお大事にしてすってください。修善寺[28]のご病気以来、実際われわれは先生が寝ておいでになるというとひやひやします。先生は少なくともわれわれライジングジェネレーションのために、いつもお丈夫でなければいけません。これでやめます。

廿八日　　芥川龍之介

夏目金之助様　梧下[29]

---

18 **洶湧**　勢いのよいさま。　＊外聞

19 **ワットマン**　水彩画を描くのに適した上質な画用紙。すぐ後に名の見える大下藤次郎と三宅克己は、明治の水彩画普及を推進した画家。　20 **新思潮**　文芸雑誌。明治四十（一九〇七）年に小山内薫が創刊。この当時は、久米・芥川・菊池寛らが創刊した第四次。　21 **セザンヌ**　Paul Cézanne　一八三九年～一九〇六年。フランスの画家。　22 **松岡**　『新思潮』同人の松岡譲。　23 **ピカソ**　Pablo Picasso　一八八一年～一九七三年。スペインの画家。　24 **九月の一日**　『新小説』九月号に芥川の『芋粥』が掲載された。　25 **チェホフ**　Anton Chekhov　一八六〇年～一九〇四年。ロシアの作家。　26 **ゾログーブ**　Fyodor Sologub　一八六三年～一九二七年。ロシアの作家。　27 **ウェルス**　Herbert George Wells　一八六六年～一九四六年。イギリスの作家。　28 **修善寺のご病気**　明治四十三（一九一〇）年夏に修善寺で静養していた漱石が大吐血をした出来事。「修善寺の大患」と呼ばれる。　29 **梧下**　手紙で宛て名の左下に書き添えて敬意を表す語。



夏目漱石（なつめ そうせき）　一二一ページ参照。本文は『定本漱石全集 第二十四巻』（令和元（二〇一九）年刊）によった。

↑芥川龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）　明治二十五（一八九二）年～昭和二（一九二七）年。小説家。東京都の生まれ。『羅生門』に続き、第四次の『新思潮』に発表した『鼻』が夏目漱石に激賞された。現実を理知と叙情で再構成する短編を多く発表した。作品に『戯作三昧』『地獄変』『舞踏会』『トロッコ』『河童』『歯車』などがある。本文は『芥川龍之介書簡集』（平成二十一（二〇〇九）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「牛のように」（一二四・上18）という表現に込められた漱石の心情を説明してみよう。できれば、直後に出された二十四日の手紙も読んでみよう。

2「ただ書くのです」（一二四・下4）以下の部分に、漱石のどのような思いが示されているか考え、一文一文味わって読んでみよう。

3 漱石と芥川の年齢差を調べてみよう。そのうえで、漱石の健康を気遣う芥川の心情をよく伝える表現を指摘してみよう。

◇言葉と表現

1「僕は」という一人称で手紙を書いた漱石の気持ちを話し合ってみよう。

2「ライジングジェネレーション」（一二七・下9）のような、「…ジェネレーション」という表現を探してみよう。

◇言語活動

1 ①年長者の立場から若い人へ、②若い者の立場から年長者へ、それぞれの設定で、自分自身の日常を伝える手紙を書いてみよう。

2 相手の立場を思いやる気持ちをどういう表現に込めたらよいのか、実例を探しながら、話し合ってみよう。

山東京伝

内田百閒（うちだひゃっけん）

初出『新小説』大正十（一九二一）年一月

私は山東京伝[1]の書生[2]に入った。役目は玄関番である。私は、世の中に、妻子も、親も、兄弟もなく、一人ぼっちでいたようである。私は山東京伝だけを頼りにし、また崇拝して書生になった。

私は玄関の障子の陰に机を置いて、その前に座っていた。別に私の部屋は与えてくれない。けれども、私は不平に思うようなことはなかった。ともかくも、こうして山東京伝の傍（そば）にいられるのが、うれしいと思った。

私は、その机の上で、丸薬を揉（も）んだ。一度に、五つも六つも机の上に置いて、手の平でころがしているうちに、箸のような薬の棒を切ったままの、角（かど）のあるきれが、ころころと丸薬になった。私は、一生懸命に揉んで、机のまわりに、ざらざらするほど、丸薬をためた。その間に、いろいろの人が、玄関を訪れて来たようだけれども、みんな、はっきり覚えられない。

そのうちに、御飯の時が来た。御飯を食うところは、何でも非常に奥の方の、白けたような座敷であった。私がそこへ入って行くと、山東京伝は、もう、ちゃんと、上座に座って、食事をしていた。私は、敷居の上に手をついて、丁寧に御辞儀（おじぎ）をした。しばらくして頭を上げて見

1 山東京伝　一七六一年～一八一六年。江戸時代後期の戯作者（げさくしゃ）・浮世絵師。江戸深川木場（現在の東京都江東区）の質屋の家の出で、洒落本（しゃれぼん）や黄表紙に名作を残した。

2 書生　その家の用事を手伝いながら、学ぶ者。

ると、山東京伝は、知らん顔をして、椀の中に箸をつけていた。それで私は猶のこと、山東京伝を尊敬したくなった。

私は、白けた座敷の中に入って、私の膳についた。辺りに、自分の影が散るような心持ちがして、気になって仕方がない。それに、広い座敷の中に、私と山東京伝のほか、誰もいない。私は、気が詰まるようで、黙っていられなくなった。また黙っていては悪かろうという心配もあった。けれども、つまらぬことや、気に触るようなことをみだりに言って、怒られても困ると思った。私は、しきりにもじもじしていた。山東京伝は知らん顔をして汁を吸うていた。私はいよいよ、山東京伝を畏敬する心が募った。

私は早く飯が食いたくて堪らない。けれども、山東京伝は、食えとも何とも言ってくれない。食えとか、何とか言うのが、厭なのかもしれない。そうだと、むやみに遠慮しているのは、かえって悪いかもしれないから、食おうかと思った。けれども、そうでないのかもわからない。今ちょうど食えと言おうとしているところかもしれない。すると私が無遠慮に箸をつけるのも、またよくない。私はどうしようかと思って、膳を前に置いて、もじもじ迷っていた。

そのとき、玄関へ、だれか来たような気がした。私は、すぐに玄関へ行き、途々ほうとため息をついた。玄関には何人もいない。だれか来て帰った後のような気がする。その為に、あたりが非常に淋しくて、そこに立っていられない。私はすぐに奥の座敷へ戻った。そうして、山東京伝の顔を見た。山東京伝は大きな顔で、髯も何もない。睫がみんな抜けてしまって、眶の

問「猶のこと」という表現には、「私」のどういう気持ちが込められているのか。

赤くなった目茶々[3]である。私は、その顔を見て、俄に心の底が暖かくなった。

「誰もまいったのではありません」と私が言った。

山東京伝は返辞をしなかった。私は怒ったのだろうかと思った。じきに立って、神主が歩くようなふうに、しずしずと座敷を出て行った。私は蒲鉾をそえて御飯を食い、それから鼻の穴に水の抜けるほど、茶をのんだ。そうして、玄関の脇で、丸薬を揉んでいた。

しばらくすると、不意に小さい人が訪ねて来て、玄関の式台[4]から、両手をついて上がって来だした。

私は、山東京伝のところへ、そのことを言いに行った。山東京伝は、何だか縁のような所に、ぼんやり立っていた。私がこう言った。

「ただいま、まことに小さな方が、玄関から上がってまいりました」

「何ッ」と山東京伝が非常に愕いた変な声を出した。聞いてる方がびっくりして、飛び上がるような声であった。私はまた同じことを言った。

「ただいま、まことに小さな方が、玄関から上がってまいりました。式台に、こう両手をついて……」

「そらッ」と山東京伝が、いきなり、馳け出した。私も後をついて走って、玄関に出た。山東京伝が、玄関の敷居に立って、目を据えて、式台の方を眺めている。私はその後ろにじっと立っていた。

3 目茶々　目のふちが赤くただれていること。

4 式台　玄関先の低くなった板の部分。

＊箸をつける　気が詰まる　気に触る

すると、山東京伝が、急に後ろを向いた。その顔が鬼のように恐ろしい。

「気をつけろ。こんな人間がどこにある」そう言って山東京伝は、*にじりよって、私を睨(にら)んだ。「こりゃ、5山蟻(やまあり)じゃないか」

私は、尻餅をつくほどびっくりして、その方を見た。なるほど、頭から背が、黒い漆をぬったように光沢のいい山蟻であった。

私は山東京伝に謝りを言った。山東京伝はきいてくれなかった。

「士農工商、言ったって駄目だ。君のように頼みがいのない人はない」

私はうろたえて「まことに申しわけございません」と言った。

「いや、あやまってすむことでない」と山東京伝が言った。

私は、山東京伝がこんなことを言うのを心外に思った。*けれども、自分が誘ったようなもんだから仕方がないと諦めた。

「出て行け」と言ったきり、山東京伝は黙ってしまった。もうなんにも言わない。私は、とうとう、山東京伝のところを追い出された。

私は、道の真ん中に追い出されて、当惑しているごたごたした心持ちを、どこへ持っていって、片づけることもできない、涙をいっぱいに流して、泣いていると、わかった。蟻は丸薬をぬすみにきたのである。それだから、山東京伝が、あんなにうろたえて、怒ったのだろう。けれども、山東京伝が、どうしてそんなに丸薬を気にするんだか、それはわからない。●

5 山蟻　体長八ミリほどの、脚の長い大型の蟻。山地に生息するものが多い。

問 夢の世界で「わからない」とするのは、どういうことか。

＊
にじりよる　心外



内田百閒（うちだ ひゃっけん） 明治二十二（一八八九）年～昭和四十六（一九七一）年。小説家・随筆家。岡山県の生まれ。本名栄造。漱石の門下生として文学活動を開始、夢や幻想的世界を短編小説に描き出し、ユーモアある随筆にも力量を示した。短編集に『冥途』や『旅順入城式』、随筆に『百鬼園随筆』『ノラや』などがある。本文は『新輯 内田百閒全集 第一巻』（昭和六十一（一九八六）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 内田百閒の短編小説の多くは、夢の世界を描いたものである。「私」が山東京伝の書生になるという設定もそうだが、作品世界が夢であることをうかがわせる表現を抜き出してみよう。

2 何かが起こりそうだという感覚が、作品の進行とどうつながっているか、考えてみよう。

3 「猶のこと」（一三〇・1）「いよいよ」（一三〇・8）という表現の効果に注意し、「私」の心情の変化を説明してみよう。

4 追い出された「私」の「ごたごたした心持ち」（一三一・14）を説明してみよう。

❖言葉と表現

1 作中で使われている「崇拝」（一二九・2）「尊敬」（一三〇・2）「畏敬」（一三〇・8）の三語の意味を確認し、注意深く使い分けられている効果を考えてみよう。

2 印象的な擬態語をとり出し、その効果を説明してみよう。

❖言語活動

1 夢の世界を描いた作品の面白さを、自分なりにまとめて、意見を出し合ってみよう。

2 「わかる」「わからない」とはどういうことなのか、身近な話題を通して考えてみよう。

「東京語」の表象の成立

イ・ヨンスク

初出『月刊言語』平成十（一九九八）年一月

「言語の混合」としての「東京語」

東京語自体が混質的で統一のない言葉であるという認識は、明治時代からあった。「くにぐにのなまりことばにつきて」（明治十七年）の中で、三宅米吉[1]は、東京語が標準語にはふさわしくないと主張する者の論拠を引いている。それは次のようなものである。

東京はいかに首都とは言っても、多くの者が各地から集まってくる中で、どうして「きまりたることば」が存在しえるだろうか。古くから住む江戸っ子はおおむね下層の者が多く、中流より上の者は皆「くにぐによりのぼりきにけるもの」である。そうであるなら、「えどつこのべらんめえ」を採るならいざしらず、それより上の言葉を採用しようとするなら、そもそもどのような人を基準にすればいいのだろうか。東京は日本を小さく縮めた雛形*であって、日本国内に言葉の変異がある限り、東京にも「さだまりたることば」は存在しえないはずである。つまり、「みやこのことばとひとくちにいうぞあさきかんがえ」なのである、と。

つまり、東京語とは各地の方言要素が集まってできた雑然とした集合体であり、そこには均質的な言語状態は認められないというのである。しかし、この事実を認めつつ、むしろそれだ*

1 三宅米吉　一八六〇年〜一九二九年。歴史学者・教育者。

問「あさきかんがえ」とあるが、なぜか。

からこそ東京語が標準語の地位を占める言葉であると主張する者もいた。それが『言文一致論概略』（明治二十一年）における山田美妙[2]である。

言文一致に対する最も有力な反対論は、言文一致が実行されれば書き言葉は各地で話される方言ごとに分裂することになりはしないかという意見だった。それに対して美妙は、言文一致と言ってもどの土地の言葉でもいいわけではなく、あくまで国内にあまねく通じる「普通語法」を言文一致の基礎とするべきだという。そして、「今東京語の性質を精密に吟味して見ると実に此言葉ばかりが前の注文に合ふ様」だという。なぜなら、「東京語が通ぜぬ度は薩州[3]語や奥州[4]語が通ぜぬ度より軽い」からであり、また、「何処でも此東京語が不十分ながらも通用せぬ所は殆ど無い」からである。

さらに美妙はその理由を歴史的にこう説明する。江戸時代に江戸に中央政府ができ、江戸に各地の武士や商人が入り込むことによって、「独り江戸ばかりで言語の混合が出来」た。そして、「東京語」はこの「江戸語」の利点を受け継いでいるのだという。つまり、美妙は東京語が「言語の混合」であるからこそ、「標準語」としての資格を持つのだというのである。

けれども、現実に「東京語」の響きに接することのできた人間は、ごく僅かであった。明治になって「東京語」を広めるのに力があったのは、明治になって発達したジャーナリズムと、後には言文一致小説であった。つまり、まず読者階層の中に文字を通じて東京語は浸透*していったのである。

2 **山田美妙**　一八六八年〜一九一〇年。小説家・詩人・評論家。言文一致体の先駆者の一人。

3 **薩州**　薩摩国（現在の鹿児島県）の別称。

4 **奥州**　陸奥国の別称。現在の福島・宮城・岩手・青森の四県と秋田県の一部にあたる。

問 **なぜ、美妙は東京語が「標準語」としての資格を持つ」と考えるのか。**

＊ 雛形　均質的　浸透

その点から見て、自由党[5]の民衆向け機関誌『自由燈』に掲載された「東京語の通用」と題する論説（明治十八年）は注目すべきである。その筆者は「日常通用の日本語のうちにて何れの地方の言葉が広く通用するであろうと申さば愚坊は即ち東京語なりと答えます」と論を始める。明治になって中央との交流が密接になると、地方の人々も「国訛りの片言葉」ではなく「何日の間にか東京言葉を使ふ様」になった。かつては人情本などで東京言葉を覚えたものであったが、「今は傍訓新聞にて読み覚ゆる十分の便利があるから生意気な諸生[6]［＝書生］は未だ東京へ足踏みをしない時よりして自から東京言葉を使ふ者がある位」（ルビ原文）だという。

ここで興味深いのは、まず「生意気な書生」が先頭に立って、東京に行ったこともないのにことさら東京語を使い始めたという指摘である。しかし、ひとたび東京に来たときには、いくら「生意気な書生」でも東京語がすらすらと口をついて出てきたわけではない。そうした情景を生き生きと描き出した場面が、森鷗外[7]の小説『青年』[8]の中にある。小説の主人公小泉純一は、上京してすぐに紹介状を携えて作家大石狷太郎の下宿を訪ねるが、「女中」に誰のところに来たのかと尋ねられて、こう答える。

「大石さんにお目に掛りたいのだが。」

田舎から出て来た純一は、小説で読み覚えた東京詞を使ふのである。丁度不慣な外国語を使ふやうに、一語一語考へて見て口に出すのである。そして此返事の無難に出来たのが、

5 自由党　明治十四（一八八一）年、板垣退助らが結成した日本最初の近代政党。自由民権運動を推進した。

6 諸生・書生　学生。明治・大正期の表現。

問「興味深い」のは、なぜか。

7 森鷗外　二八九ページ参照。

8『青年』　明治四十三（一九一〇）年から翌年にかけて発表された。主人公が苦悩を通して成長してゆく様を描いた作品。

心中で嬉(うれ)しかつた。

つまり、地方から野心に燃えて上京してきた多くの若者にとって、東京語とは「不慣な外国語」同然であり、「一語一語考へて」みなければ話すことのできない言葉だったのである。このような言葉が「標準語」の地位につくためには、まだいくつかの障害を突破しなければならなかった。

標準語政策と東京語

このように、明治時代の中頃までは、東京語は威信の面でも言語使用の面でも、決して優越した地位を占めてはいなかった。その東京語が日本の言語的中心の独占的な担い手となったのは、言うまでもなく明治後半からの標準語教育の過程においてである。そこにおいて最も大きな役割を果たしたのは、[9]上田万年(かずとし)であった。

近代日本の国語学の基礎を打ち立てた上田万年は、よく知られているように言語政策の方面でも精力的な活動を繰り広げた。上田は、ヨーロッパ留学から帰国した翌年の一八九五（明治二十八）年に「標準語に就きて」と題した講演を行い、初めて「標準語」という概念を日本に紹介した。上田によれば、標準語とは「全国内到(いた)る所、凡(すべ)ての場所に通じて大抵の人々に理解されるべき効力を有する」「一国内に模範として用ゐらるる言語」のことである。そして、上

問 なぜ、「言うまでもなく」なのか。

9 上田万年　一八六七年〜一九三七年。国語学者・言語学者。

＊威信



『尋常小学読本 二』（明治三十九〈1906〉年）より

田は今のところ日本に「標準語」と呼ぶべき言葉は存在しないが、「一大帝国の首府の言語」である「東京語」こそが将来標準語となる資格があるという。

そして、上田は意識的に「江戸語」と「東京語」との連続性を断ち切ろうとする。つまり、「標準語」の基礎となるべき「東京語」は「ベランメー」言葉ではなく、「教育ある東京人の話すことば」でなければならない、というのである。しかしその一方、東京語にはいくつかの欠点があるので、今すぐ標準語にはなりえない。そこにさまざまな「人工的彫琢（ちょうたく）」を施す必要があると上田は考えて*いた。この時点では、東京語が真の標準語へと昇格するのは未来のことであった。

ところが、それから五年後の一九〇〇（明治三十三）年に書かれた論説「内地雑居後に於（お）ける語学問題」では、突然論調が変わった。上田は何かにせかされているかのように、標準語の実現に向けて性急に主張を繰り広げ始める。

内地雑居とは、[10]領事裁判権の撤廃に伴って、日本国内で外国人の自由な活動を認めるための

10 領事裁判権 外国人が自分の在留する国で、本国の領事による裁判を受ける権利。

一連の方策を指していた。上田は、外国人の内地雑居が日本語にどのような影響を及ぼすかを憂慮していた。上田は「我日本帝国の国民は、聊も国語上の準備なくして、内地雑居の暁にまで至りたり」と嘆いた。なぜなら、日本にはいまだ「厳格なる意味にていふ国語」が存在しないからであると。

上田の言う「厳格なる意味にていふ国語」とは、話し聞くときも、読み書くときも、常に「同一の性質」を持ち、談話にも文章にも等しく使用することのできる言語、つまり「言文一途の精神を維持し居る国語」のことであった。ところが、上田によれば、現状の日本語は惨憺たる状態である。書き言葉はもちろん、話し言葉においても、「日本の標準的談話語」は定まりがない。東京語はいまだそのような権威を持っておらず、公的な場所で方言を話しても、何の「制裁」を受けることがない。こうした現状を前にして上田は、国民自身が自発的に「国語の統一」も達成することはとてもできないと考えた。そこで上田が引き出してきたのは、次のような結論であった。

> 一日も早く東京語を標準語とし、此言語を厳格なる意味にていふ国語とし、これが文法を作り、これが普通辞書を編み、広く全国到る処の小学校にて使用せしめ、之を以て同時に読み・書き・話し・聞き・する際の唯一機関たらしめよ。〔……〕而して一度之を模範語として後に、保護せよ、彫琢せよ、国民はこれをして国民の思ふままに発達せしむべき

* 彫琢　憂慮

なり。

先の論文「標準語に就きて」では、東京語は文化的「彫琢」を施した後に標準語の地位に昇るはずであったが、今や「一度之を模範語として後に、保護せよ、彫琢せよ」と順序が逆転する。そして、上田の「国語」の思想の中で、標準語制定と言文一致が初めて原理的・有機的に結びつくようになった。そして、その際に要の位置を占めるものこそが「東京語」であった。

ここにおいて初めて、東京語が単に東京で話される言葉という規定を越えて、日本語を統括しうる規範的な価値を帯びるようになった。というよりも、標準語政策こそが「東京語」という架空の表象を作り上げることができたのである。「東京語」とは、近代日本が「国語」の理念を確立する際にどうしても必要であった表象であった。実際には誰も話していないが、「国語」の理念的な空間の中で象徴的に存在する言葉、それこそが「東京語」であったのではなかろうか。

問「どうしても必要であった」のは、なぜか。

＊有機的



イ・ヨンスク（李妍淑／이연숙）社会言語学者。韓国・全羅南道の生まれ。近代日本の「国語」の成立を中心に、言語とナショナリズムの関連について研究を進め、ポストコロニアリズムの視点から言語文化を捉え直している。著書に『「国語」という思想―近代日本の言語認識』『異邦の記憶―故郷・国家・自由』などがある。本文は『「ことば」という幻影―近代日本の言語イデオロギー』（平成二十一（二〇〇九）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 『青年』の主人公小泉純一が「心中で嬉しかつた」（一三七・1）のはなぜか、考えてみよう。

2 上田万年が理想とする「標準語」とはどのようなものか、まとめてみよう。

3 上田は、2の「標準語」の浸透により、国語がどのようになっていくと予想していたのか、考えてみよう。

◇言葉と表現

1 本文では「国語」「東京語」「標準語」などに「　」が付されているが、どのような意図や効果があるか、考えてみよう。

◇言語活動

1 明治期の「言文一致小説」（一三五・16）とはどのようなものか、調べてみよう。

2 日常生活の中で、地域の方言はどのように扱われているか、標準語・共通語と言われるものと比較してみよう。

文学の窓

群れず集まる

田中和将（たなかかずまさ）

令和二年四月、今年の春はいやに肌寒く感じていたが、ようやくこの季節らしい日差しが降り注ぐようになった。伸び放題になってきた木をそろそろ手入れしなければと思っていたある朝に雨戸を開けると、ほんの二尺[1]ほどの近さで鳥と目が合った。猫の額ほどの庭、よく見るとオリーブの木に鳩（はと）が巣を拵（こしら）えている。ちょうど掃き出し窓に立った私の目の高さである。これは困った。たくさん集まってきて糞（ふん）を落とされたりしてはたまったものではない。そうなると近隣にも迷惑がかかるであろうし、追い出すべきか否（いな）かと悩んでいたが、すでに卵を温めている様子である。もはや追い出しにくいではないか。

調べてみたところ、そこらの公園などで群れているドバト[2]ではなく、キジバト[3]のようである。確かに公園のものより少し細身で色柄も違う。きりっとしていてどことなく野鳥の趣である。キジバトは群れず、単独、あるいはつがいで行動するとあり、なるほど昼と夜で雄と雌（私には雌雄の区別はつかない）が交

代して巣を温めている。糞も巣の外にはほとんど落とさないようであるし、これなら問題はないと胸を撫で下ろしていると二羽の雛が孵った。予想に反して薄汚い雛であるが、かわいくないこともない。末の息子といっしょに観察日記をつけて見守ることにした。

さて、何故にこんな隠居老人さながら鳥を眺めて暮らしているのか。仕事がないからである。

音楽に目覚めて以来、バンドがやりたくてしようがなかった。もちろん創作も好きではあるが、それ以上にバンドをやることが喜びであった。やがてその願いはかなえられ、幸いにも周囲の人々やお客さんに支えられながら二十年以上も活動を続けて来られたのであるが、ここへ来てぴたりと止まってしまったのだ。

一人でも創作という行為は可能である。それはこれまでと変わりはないが、思えば私の場合、それをバンドで演奏するという目的の後押しがあってのことであった。独りで作ったものを一人でどうすることもできないのである。

音楽の聴かれ方、使われ方が時代とともに変わってゆくのは必然であり、インターネットによって発信の仕方も享受の仕方も変わってきた。わざわざバンドを組まなくてもバンドみたいなものを一人で作り、一人で発信することもいくらでもできるのである。そういった方法に無頓着であり、どちらかと言えば避けてきた私のような者は途方に暮れるばかりである。

長けた者はすでにSNS[4]などを利用して音楽の新たな在り方を模索している。それは前向きな行為であり、私などもこの先、遅まきながら学ばざるを得ないのかもしれないが、どうにも苦手な風潮も渦巻いている。こういう非常時には必ず多くのアーティストやアスリートらが「勇気を与えたい」「聴いた（観た）人を元気にさせたい」と一様に口をそろえて発信するのだ。

幼少期の私の家庭事情は複雑で、かなりの社会的弱者と言ってよい環境で育った。物心がつき、少しは人並みに暮らせるようになった少年期に音楽に出逢ったが、前述のような「勇気を与えたい」という作為を少しでも感じさせるもの、ましてやそれを口に出してまで主張するものには全く心が動かなかった。音楽は、いや音楽に限らず全ての作品やパフォーマンスは、受け取る側が自らの解釈で咀嚼して初めて「勇気」や「元気」に変換されるものだと考えている。その意味では私も音楽に救われた人間の一人であるが、「勇気を与えたい」「聴いた（観た）人を元気にさせたい」という、おこがましく傲慢な動機でものを作ることを今も自分に禁じている。

しかしこれがまあ理解されない。多くのミュージシャンやクリエイターはやはり自我が強く、こういった業界全体として常に「与える」「伝える」側のつもりであり、受け取る側は「分かりやすくそう示してくれるもの」を求める、という関係性でパッケージが出来上がっている。そこに弱者は含まれていない。排斥された者が蚊帳[5]の外から見る光景は、さながらこの社会の縮図であろう。臭い物には蓋をされ、同じような層の間で同じような需要と供給が回るだけならば、私はいったいどんな層で何をしているのか。自ら望んでこの業界に来たはずなのに、道理で居心地の悪さと居たたまれなさを感じ続けていたわけである。向いていないなと幾度となく思いながら現在に至る。

私は自分の作るものが芸術だとも娯楽だとも、人の役に立つとも思っていない。あるとすれば、私以外の手が入って、バンドの何かが作用して、聴き手の何かが作用して、やっと有意義なものが産まれるかもしれないという期待である。私と似たような者の居場所が生まれるかもしれないと。

群れずに生きるキジバトをどこか羨ましく思いながら、集まらずには生きられないバンドをやるという、そんな皮肉な矛盾も今は止まったままである。

幸運を呼び込むと言われるキジバトの二羽の雛はあっという間に成長し、羽には美しい模様が現れた。巣立ちの日が近づいている。

1 **二尺**　七一ページ注6参照。

2 **ドバト**　カワラバトともいう。寺社や公園などで一般的に見かけられるハト。

3 **キジバト**　ヤマバトともいう。ドバトよりも小さめの野生のハトで、キジに似た模様がある。

4 **SNS**　social networking service（英語）の略称。社会的ネットワークを構築するメディアやそのサービスを指す。

5 **蚊帳**　一二五ページ注16参照。「蚊帳の外」は、部外者的立場の意で用いられる。

田中和将　昭和四十九（一九七四）年〜。ロックミュージシャン。兵庫県の生まれ。平成九（一九九七）年にデビューしたロックバンド GRAPEVINE のメンバーとして、ボーカルとギターの演奏を担当し、楽曲の作詞や作曲も行う。初出『文学界』令和二（二〇二〇）年七月。

◆言葉には不思議な力があることを確かめる
――人と人をつなぎ、人と人とを引き離すもの――

この単元では、長編小説の一節、短編小説、手紙、言葉をめぐる考察など、さまざまな文章から「言葉」の持つ不思議な姿を学んできた。時には言葉が凶器にもなる姿を見て驚くが、人と人を奥深いところでつなぐものが言葉であるという発見もある。そして、「言葉」の世界を媒介に、個人と社会との関係についても考えたい。

課題 言葉は単なる伝達の手段ではない。言葉の使い方一つでどのような新しい世界が開けるのかを、例を挙げながら確かめてみよう。

1 次のようないくつかの場面を念頭に置いて、言葉にすることの方法や意味を考えてみよう。

① 自分の思いを目の前の相手に述べる（会話）、②思いを手紙やメールで相手に書く（通信）、③思いを自分のために文章に綴る（手記）、④思いを平明な文章にまとめてみる（エッセイ）、⑤思いを凝縮された言葉や形式に造形する（詩歌）

2 言葉がどういう時に力を発揮するかを、『こころ』の表現を通して考えてみよう。

① 言葉が凶器として作用する場合
② 言葉が人間と人間をつなげる働きをする場合

3 想像力を働かすために、言葉をどう駆使し、言葉の広がりを生み出すかを、『山東京伝』を材料にしてまとめてみよう。

4 『こころ』の「先生」と「K」は、『青年』の「小泉純一」同様、地方出身者である。二人の会話部分を、「東京語」の表象の成立」で述べられている「言文一致」という観点から読み直し、気づいたことを話し合ってみよう。

5 「言葉との出会い」に関する、自分の忘れられない思い出を、手紙・手記・エッセイ、いずれかの形式で表現してみよう。

5 伝統と革新

- 近・現代の短歌と俳句を理解し、俳句の実作と相互批評に取り組む。
- 五音と七音による定型表現が時代を越えて親しみやすさを持つことを理解する。

短歌の輪郭 ― 小池光
短歌十二首
文学の窓 『桐の花』の言葉（俵万智）
俳句十二句
コラム 川柳の現在
単元の言語活動5

短歌の輪郭 ――現代にとって短歌とは何か――

小池光（こいけひかる）

本歌取りというととかく古臭い王朝和歌時代の修辞[2]法のように思われるが、確かにその用語は〈個〉のオリジナリティを価値の前提とする近・現代短歌にあっては大手を振って流通はしなくなったが、その構造は決して消滅してはいない。*

ふるさとの訛（なまり）なつかし／停車場（ていしゃば）[3]の人ごみの中に／そを聴きにゆく

石川啄木（たくぼく）[4]

初出『現代にとって短歌とは何か 短歌と日本人Ⅰ』平成十（一九九八）年十二月

1 **本歌取り** 有名な歌の表現や内容の一部を取り入れて、新しい歌を作る技法。

2 **修辞法** 言葉を効果的に用いる方法。

＊ 大手を振る

ふるさとの訛りなくせし友といてモカ珈琲はかくまでにがし　　寺山修司

本歌取りというよりパロディと言ったほうがいいだろうが、寺山修司の後首が啄木を受けているのは一目瞭然である。啄木歌を想起しなくともむろん読むことはできるが、想起したほうがはるかにおもしろく、いや、両首を重ねることで初めてそのアイロニーに微苦笑できるというものである。

これなどは誰の目にも関連は明らかだが、

みぞれ降る／石狩の野の汽車に読みし／ツルゲエネフの物語かな　　石川啄木
吊るされて玉葱芽ぐむ納屋ふかくツルゲエネフをはじめて読みき　　寺山修司

のようなセットの場合はそれではどうか。ツルゲエネフの一語が共有されているからといって本歌取りとはいかにも言い難い。しかしここにも啄木作を受けて、それに返す呼吸を感じ取ることは十分に可能なのであって、そうすることにより戦後派の野放図な明るさの中に逆転された歴史の継承が浮かび上がり、いわばこの玉葱をつるした納屋の闇はそれだけ陰影を濃くするのである。寺山修司のとりわけ初期の短歌に俳句作品からだけでなくどれだけ『一握の砂』からの〈引用〉があるかはすでにさまざまな指摘がある。啄木が吹雪の列車で読んだツルゲエネ

3 **停車場**　ここでは、上野駅を指す。当時、東北方面への列車が発着した。
4 **石川啄木**　一八八六年～一九一二年。岩手県の生まれ。歌集に『一握の砂』『悲しき玩具』など。
5 **モカ珈琲**　コーヒーの種類。
6 **寺山修司**　一九三五年～一九八三年。青森県の生まれ。歌集に『空には本』など。
7 **パロディ**　parody（英語）。風刺・滑稽・諧謔を目的とした表現。
8 **アイロニー**　irony（英語）。皮肉。
9 **石狩の野**　石狩平野。北海道西部に位置する。
10 **ツルゲエネフ**　Ivan S. Turgenev 一八一八年～一八八三年。ロシアの小説家。日本の近代文学にも広く影響を与えた。
11 **『一握の砂』**　石川啄木の

フを、納屋の藁屑にまみれて今「はじめて」青年は読む。ツルゲエネフはただの偶然の一致ではない。

短歌固有の修辞には、また歌枕[12]というものがあるがこれも本歌取りと構造は本質的に同じである。

特定の地名がそれぞれにまつわる伝説、伝承また物語と結び付き、地理的記号であることから離れて比喩のコード[13]となったものが歌枕である。その地名を詠み込むことは歌枕としての地名に対する知識なくしてはありえず、また読み鑑賞する側にとっても知識なしではありえない。こういういわば地名を隠れ蓑にした比喩の体系が緻密に確立されたがゆえに、たった三十一音の小詩型が身の丈に数倍する表現力を持ちえた。そういうこともできるのである。

子規[14]以来の近代短歌にあっては、その科学主義により、歌枕のような果てしなく拡散するコトバのありようは表層的には否定された。にもかかわらず歌枕は濃厚な記憶の残滓として今日に生きており、短歌形式を支える有力な支柱となっていることは疑いえない。

淡海の海夕浪千鳥汝が鳴けば心もしぬにいにしへ思ほゆ　柿本人麻呂[15]（万葉集・巻三）

たつぷりと真水を抱きてしづもれる昏き器を近江と言へり　河野裕子[16]（『桜森』）

例えば河野裕子の代表作、右の近江はただの地名ではなく、人麻呂の夕浪千鳥をはじめとす

第一歌集。明治四十三（一九一〇）年刊行。

12 **歌枕**　歌の題材とされた日本の名所旧跡のこと。

13 **コード**　code（英語）。ここでは記号の意。

14 **子規**　正岡子規。一八六七年～一九〇二年。愛媛県の生まれ。歌集に『竹の里歌』、句集に『寒山落木』など。短歌・俳句の革新運動に尽力した。

15 **柿本人麻呂**　三八ページ注7参照。

16 **河野裕子**　三六八ページ参照。

＊
一目瞭然　野放図　納屋
隠れ蓑　身の丈　残滓

る歌枕近江の無数の集積を背負っている。ゆえに「昏き器」にかりそめでないリアリティが揺曳*するのであり、それは水を容れる自然の器であるとともに、また時間を歴史を容れる思いの器でもあるのである。こういう作例は現代短歌においても数限りなく存在し、短歌固有の読み方、鑑賞の仕方を暗黙*のうちに指定している。

そうであれば「本歌取り」の呼称になぞらえるとき、歌枕とはすなわち「地名取り」とも言えよう。そのとき「取る」とは心を受け取ることにほかならず、受け取りつつわが心を「返す」ニュアンスの中に、新たな作品が生まれてくる。

ところで、歌枕とはそもそも地名だけを指すものではなかった。名所を語る地名に限定されたのは時代が下がってからで、そもそもは「蛍」「蟬」「かげろふ」「紅葉」などという今日でいう普通名詞と地名が混在し、文字どおり和歌のマクラに、一首のキーワードになるものが歌枕というもののそもそもの姿であった。このように歌枕をイコール歌語として本来の姿に返すとき、短歌の光景はいよいよ歌枕との親密性*を増すように思われる。近代短歌はまた近代短歌のキーワードを作り出し、近代短歌の歌枕を作り出し、そこに表現の支柱を見いだしていったのである。

*揺曳　暗黙　親密性



小池　光（こいけ　ひかる）　昭和二十二（一九四七）年〜。歌人。宮城県の生まれ。何気ない事物を詠みつつ、存在の深淵をのぞかせ、豊かで繊細な感性が際立つ。模型飛行機を作るために軽いバルサ材を買って帰ろうとする少年を詠んだ「バルサの木ゆふべに抱きて帰らむに見知らぬ色の空におびゆる」（『バルサの翼』所収）が代表的な一首である。本文は『現代にとって短歌とは何か　短歌と日本人Ⅰ』（平成十（一九九八）年刊）によった。

短歌十二首

釈迢空（しゃくちょうくう）

葛[1]の花　踏みしだかれて、色あたらし。この山道を行きし人あり

たたかひに果てにし子ゆゑ、身に沁（し）みて　ことしの桜　あはれ　散りゆく

山崎方代（やまざきほうだい）

こんなところに釘（くぎ）が一本打たれいていじればほとりと落ちてしもうた

こんなにも湯呑茶碗（ゆのみぢゃわん）はあたたかくしどろもどろに吾（われ）はおるなり

塚本邦雄（つかもとくにお）

日本脱出したし　皇帝ペンギン[2]も皇帝ペンギン飼育係りも

馬を洗はば馬のたましひ迄（さ）ゆるまで人恋はば人あやむ[3]るこころ

5

釈迢空　一八八七年～一九五三年。大阪府の生まれ。本名、折口信夫（おりくちしのぶ）。国文学者・民俗学者としても知られる。歌集に『海やまのあひだ』など。

1 葛の花　マメ科の多年草。山野に自生し、初秋に紫紅色の花を付ける。

山崎方代　一九一四年～一九八五年。山梨県の生まれ。歌集に『右左口（うばぐち）』など。

塚本邦雄　一九二〇年～二〇〇五年。滋賀県の生まれ。歌集に『日本人霊歌』など。

2 皇帝ペンギン　ペンギン科の中で最も大型のペンギン。南極大陸の冷環境に適応している。エンペラーペンギンともいう。

3 あやむる　「殺（あや）める」の文語「あやむ」の連体形。

馬場あき子

4楽章の絶えし刹那の明かるさよふるさとは春の雪解なるべし
さくら花幾春かけて老いゆかん身に水流の音ひびくなり

栗木京子

観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生

5

鶏卵を割りて五月の陽のもとへ死をひとつづつ流し出したり

穂村弘

終バスにふたりは眠る紫の〈降りますランプ〉に取り囲まれて
校庭の地ならし用のローラーに座れば世界中が夕焼け

馬場あき子　一九二八年～。東京都の生まれ。歌集に『地下にともる灯』など。

4楽章　ソナタ・交響曲などで、楽曲を構成する一定の独立性を備えたまとまり。

栗木京子　一九五四年～。愛知県の生まれ。歌集に『水惑星』など。

穂村弘　一九六二年～。北海道の生まれ。歌集に『シンジケート』など。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 小池光『短歌の輪郭』では、「本歌取り」と「歌枕」の類似点についてどのように述べているか、まとめてみよう。

2 釈迢空の歌にある「踏みしだかれて」（一四九・2）とは、どのような状況を表しているか、考えてみよう。

3 山崎方代の歌にある「ほとりと」（一四九・5）とは、どのようなイメージなのか、考えてみよう。

4 塚本邦雄の歌で「日本脱出したし」（一四九・8）と思っているのはだれなのか、考えてみよう。

5 馬場あき子の歌にある「雪解なるべし」（一五〇・2）を口語に言い換えてみよう。

6 栗木京子の歌にある「想ひ出」（一五〇・5）という表現には、どのような心情が託されているか、考えてみよう。

7 穂村弘の歌で〈　　〉（一五〇・8）が使われている効果について考えてみよう。

8 短歌の表現方法や歌われている視点などから、興味や関心を抱いた歌を指摘してみよう。

◇言葉と表現

1 句切れを意識しながら音読してみよう。そのうえで、字余りなど破調の歌を指摘してみよう。

2 歌で使われている句読点やスペースの効果について考えてみよう。

◇言語活動

1 俵万智の『『桐の花』の言葉』（一五一～一五二ページ）を参考にしながら、教科書掲載の短歌の中から、特に心に残った短歌を一首選び出し、それについて二〇〇字程度の鑑賞文を書いてみよう。

文学の窓

『桐の花』の言葉

俵（たわら）　万智（まち）

言葉に寂しくなると、『桐（きり）の花』を開く。白秋自身の表現を借りるならば、「一寸触（ちょっと）つても指に付いてくる六月の棕梠（しゅろ）の花粉のやうに」言葉の花粉がこぼれ落ちてくる。

春の鳥な鳴きそ鳴きそあかあかと外（と）の面（も）の草に日の入る夕（ゆふべ）

巻頭のこの一首は、白秋の歌に対する思いを、象徴しているかのようだ。〈春の鳥よ、お前は鳴かなくていい。いや、むしろ鳴くことなかれ。私はお前の鳴き声ではなく、お前を包み、

鳴かせようとする夕暮れのその気配をこそ歌にしたいのだ。〉

そんな短歌観を宣言しているように思われる。「桐の花とカステラ」の中の「私には鳴いてる小鳥のしらべよりもその小鳥をそそのかして鳴かしめるまでにいたる周囲のなんとなき空気の捉へがたい色やにほひがなつかしいのだ」という言葉とそれは響き合う。

昔、理科の時間に、空気の動きを観察する実験があった。どうやってその流れを追うかというと、透明な箱の中に煙を入れて、その煙の動きを空気の動きとして観察するのである。煙とは物理的に言うと固体で、細かい粒であるらしい。それを、気体である空気にくっつける。

白秋の歌の言葉も、その煙の粒のようなものではないだろうかと思う。目に見えない空気に、たくさんたくさん言葉の粒をくっつけて、その流れを表現する。そしてその言葉自身も、煙のように淡い言葉。三十一文字という箱の中で、時にはむせ返り、せきこんでしまうほどの煙が渦巻いている。それが私の『桐の花』に持つ印象である。

薄あかき爪のうるみにひとしづく落ちしミルクもなつかしと見ぬ

実際にミルクが爪にこぼれたのではない、と思う。薄あかき爪もひとしずくのミルクも、何か懐かしいようなそのときの空気、あなたの雰囲気にくっつけられた煙の粒なのだ。

（中略）

骨太な思想の幹があって、そこに言葉の枝葉がついているというのではない。言の葉の一枚一枚が、空気を指標する粒の一つとして、ひらひらと美しく舞い乱れているのである。

だから、言葉に寂しくなると『桐の花』を開く。「銀笛哀慕調」[2]「初夏晩春」……歌を読むことは、言葉を読むこと。『桐の花』を読むことは、白秋の言葉まみれになる喜びである。

1『桐の花』　北原白秋の第一歌集。大正二（一九一三）年刊。

2「銀笛哀慕調」「初夏晩春」　『桐の花』の中で、冒頭近くに位置する章。

俵　万智　昭和三十七（一九六二）年～。歌人。大阪府の生まれ。口語や会話体を大胆に駆使した歌の魅力が多くの読者に訴えかけ、その存在は現代短歌の画期となった。歌集に『サラダ記念日』などがある。初出『白秋全集　第三十八巻』（昭和六十三（一九八八）年刊）月報。

俳句十二句

冬蜂の死にどころなく歩きけり

曳(ひ)かれる牛が辻(つじ)でずつと見廻(まは)した秋空だ

咳(せき)をしても一人

秋風や模様のちがふ皿二つ

花衣ぬぐやまつはる紐(ひも)いろいろ[1]

村上鬼城(むらかみきじょう)

河東碧梧桐(かわひがしへきごとう)

尾崎放哉(おざきほうさい)

原石鼎(はらせきてい)

杉田久女(すぎたひさじょ)[5]

村上鬼城　一八六五年～一九三八年。東京都の生まれ。句集に『鬼城句集』など。

河東碧梧桐　一八七三年～一九三七年。愛媛県の生まれ。句集に『新傾向句集』など。

尾崎放哉　一八八五年～一九二六年。鳥取県の生まれ。句集に『大空』など。

原石鼎　一八八六年～一九五一年。島根県の生まれ。句集に『花影』など。

杉田久女　一八九〇年～一九四六年。鹿児島県の生まれ。句集に『杉田久女句集』など。

1 まつはる　まとわりつくこと。

青蛙(あをがへる)おのれもペンキぬりたてか

芥川龍之介(あくたがわりゅうのすけ)

大楷(おほほだ)をかへせば裏は一面火

高野素十(たかのすじゅう)

滝の上に水現れて落ちにけり

後藤夜半(ごとうやはん)

金剛[2]の露ひとつぶや石の上

川端茅舎(かわばたぼうしゃ)

外(と)にも出よ触るるばかりに春の月

中村汀女(なかむらていじょ)

5

しんしんと肺碧(あを)きまで海のたび

篠原鳳作(しのはらほうさく)

頭の中で白い夏野となつてゐる

高屋窓秋(たかやそうしゅう)

芥川龍之介　一二八ページ参照。句集に『澄江堂句集』。

問「ペンキぬりたて」とはどのような様子のことか。

高野素十　一八九三年～一九七六年。茨城県の生まれ。句集に『初鴉(はつがらす)』など。

後藤夜半　一八九五年～一九七六年。大阪府の生まれ。句集に『翠黛(すいたい)』など。

川端茅舎　一八九七年～一九四一年。東京都の生まれ。句集に『華厳』など。

2 金剛　ダイヤモンドのこと。

中村汀女　一九〇〇年～一九八八年。熊本県の生まれ。句集に『春雪』など。

篠原鳳作　一九〇五年～一九三六年。鹿児島県の生まれ。著作に『篠原鳳作全句文集』など。

問「肺碧きまで」とは、どのような様子を表現したものか。

高屋窓秋　一九一〇年～一九九九年。愛知県の生まれ。句集に『白い夏野』など。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 それぞれの句の持つリズムや、間の取り方を確認しながら朗読してみよう。

2 季語のある句について、その季節や季語の意味を調べてみよう。

3 季語のない句や破調の句について、どのような効果をねらっているのか、考えてみよう。

4 それぞれの句が、風景を描写しているのか、作者の心情を対象に託して表現しているのか、考えてみよう。

◇言葉と表現

1 作品中の切れ字「や」「けり」の働きについて調べてみよう。

◇言語活動

1 好きな句を一つ選び、自分が読み取ったその句の情景を短い文章にまとめてみよう。

川柳の現在

俳句と同様に五七五で詠まれるジャンルに川柳がある。毎年企業が募集するサラリーマン川柳がニュースとして流れているので、そのイメージがある人もいるだろう。それらは江戸時代の「これ小判たつた一晩ゐてくれろ」（『誹風柳多留』）や、「屁をひつておかしくもない一人者」（同）のような、暗に社会を風刺するものや、庶民の風俗・人情を風刺して笑いに転換するような、古川柳の詠み方に通じる伝統的なスタイルと言える。一方で、現代川柳の作家の中には、この古いスタイルから離れ、独自の詩性の展開を見せる作家もいる。例えば、「哲学は桃の缶詰開けるとき」（樋口由紀子）は、哲学と桃の缶詰めという意外な取り合わせによって作家の観念を結晶化する。また、アメリカ同時多発テロ事件を題材にした「ビル、がく、ずれて、ゆくな、ん、てきれ、いき、れ」（なかはられいこ）は、読点の多用と句末の途絶によって切られた個々の語の意味を前景化するとともに、詩型そのものを不安定に可視化することで、事件の衝撃を受け止める自己の内面までを含めた高度な表現を目指している川柳と言えよう。

◆俳句を詠んでみる
――自分の思いが伝わるように表現してみよう――

俳句は五七五の音数律を持つ十七文字の短詩型であり、多くの場合、季語を一つ詠み込む。一般に、俳句の詠み方には、大きく二つがある。一つが「一物仕立て」、もう一つが「取り合わせ」である。一物仕立ては一句が一つの章（内容）で出来上がっているものを言う。例えば、「冬蜂の死にどころなく歩きけり」は、すべて「冬蜂」の様子を描写している。取り合わせは一句の中に二つの章があるものを言う。例えば、「秋風や模様のちがふ皿二つ」は、「秋風や」と「模様のちがふ皿二つ」という、全く無関係の二つの内容を持つパートを取り合わせて一つの作品世界を作っている。一物仕立ての注意点は、テーマは描写によって表現し、説明しない、ということである。説明してしまうと、理屈の目立つ表現となり、俳句としては魅力のないものになってしまう。取り合わせの注意点は、二つの意味内容の結びつきが近いと陳腐でつまらない句になり、あまり飛躍しすぎると、何を言っているのかが分からない作品になってしまうことである。

課題 ①一物仕立てで俳句を詠んでみよう。
②取り合わせで俳句を詠んでみよう。

1 一つの季語をテーマに選び、十七音で一物仕立ての句を詠んでみよう。

2 どちらかに季語が一つ入った五音と十二音、あるいは十二音と五音の言葉のまとまりを作り、それを組み合わせて取り合わせの俳句を詠んでみよう。五音、あるいは七音をグループで共通にするのでもよい。

3 1 と 2 で詠んだ句について、グループで批評会や句会をしてみよう。

4 一物仕立てと取り合わせの作りやすさや作りにくさなど、気がついた長所と短所について、話し合ってみよう。

6 戦争と記憶

- それぞれの戦争をめぐる記録や文学作品を、視点や語り方に注意して多角的に読み、戦争という事象の複雑さについて理解する。
- 他者の記憶を語り継ぐ困難と意義に触れ、戦争と自分との関係性を見つめ直す。

現場に来て初めてわかること　高野秀行
空缶　林京子
野火　大岡昇平
転移する記憶　岡真理
単元の言語活動6

現場に来て初めてわかること

高野秀行（たかのひでゆき）

私の泊まっているホテルには、外国人の客がほとんどいなかった。二、三回、白人を見かけただけで、あとは皆[1]ソマリ人である。ビジネスマンもいれば、政治家もいる。*暫定政府の大臣や議員も大勢いた。海外に拠点を持っていて時々ここに帰ってくる人もいれば、自宅は市内にあるが危険なので[2]セキュリティがしっかりしているホテルに住んでいるという人もいる。

そんなソマリワールドの中、ばったり日本人に出会った。[3]瀧野恵太さんというフリーのカメラ

初出　平成二十五（二〇一三）年

1 **ソマリ人**　北東アフリカのソマリア・エチオピア・ケニア東北部に住む人々。

2 **セキュリティ**　security（英語）。安全性。

3 **瀧野恵太**　一九八一年～。カメラマン。ソマリアなどの紛争地帯で撮影を行っている。

＊暫定

マンである。瀧野さんは戦場カメラマンとして活躍していたが、最近では写真を発表できるような媒体（雑誌）が次々と廃刊になり、今はもう写真で食うことは諦め、中古カメラの売買で生計を立てている。で、お金を貯め、時々このようにソマリア[4]などに来て、あくまで自分の興味として写真を撮影しているという。

すでに莫大（ばくだい）な赤字を抱え、もはやソマリ取材が仕事というより生きがいみたいになっている私が言うのもなんだが、「趣味でソマリアまでよく来るよな。」と感心した。*

瀧野さんは二年前にもモガディショ[5]に来て、このホテルに泊まっていたが、宿のすぐ裏でガンガン戦闘が行われていて、あまりに危険でほとんど外に出られなかったという。

「アル・シャバーブ[6]が撤退したおかげで今回はいろんなところを回れましたよ。」と言い、パソコンに取り込んだ写真を快く見せてくれた。

難民（国内避難民を含む）の写真が多い。一とおり見ながら私は、「やっぱりな……。」と思った。

みんな、笑顔だ。●

今回、「六十年に一度の大飢饉（だいききん）」という触れ込みに引き寄せられ、私はケニア[7]の難民キャンプも回ったし、ここモガディショ市内の各地に設けられたキャンプも訪れていた。

そして、幾つか共通点に気づいたのだが、その最たるものは、「別に悲惨ではない」ということだった。

よくアフリカの飢餓や難民というと、痩せこけて蝿（はえ）がたかった子供、赤ん坊を抱いた目がうつろな母親、ぼろぼろの服を着て足を引きずっている老人などが思い浮かぶ。そういう写真ばかり見*

4 ソマリア　アフリカ大陸の東側にあるソマリア連邦共和国。

5 モガディショ　ソマリアの首都。

6 アル・シャバーブ　ソマリアを拠点とするイスラム武装勢力。

問「みんな、笑顔だ」とあるが、なぜか。

7 ケニア　アフリカ大陸の東部、赤道直下に位置する共和国。首都はナイロビ。

せられているせいである。ところが、実際には、ぱっと見で「難民」とわかる人はめったにいない。水浴びやトイレ、洗濯などには苦労しているだろうが、不思議にこざっぱりしている。キャンプに蝿が多いというのは確かだが、蝿なんて食べ物があるところ、動物がいるところにはどこでも普通にいる。空港だってホテルだっている。私もよくたかられている。

「上半身裸で痩せこけた子供」というのも別に悲惨ではない。暑いところだし、上半身裸の子供は珍しくない。日本みたいにお菓子をバクバク食べたりしてないから、そんなに太ってもいない。何よりイメージと違うのは、笑顔の人が多いということだ。

ソマリ人は男ですら写真に撮られることが嫌いだ。ましてや、女性は写真を拒否する人が多い。ムスリム[8]の女性は見知らぬ男に写真に撮られるのをよくないとしているから、なおさらである。時には撮らせてくれる人もいるが、だいたいカメラの前で顔がこわばる。まあ、私たち日本人だって、外国人にいきなり「写真撮らせて。」と来られたら緊張して固くなるから当然と言えば当然だ。プロのカメラマンならまだしも、私など素人なのでいったんこわばった人の表情をほぐすなどできない。

だから、ソマリ・エリアでは笑顔の女性を撮るのがとても難しいのだが、難民キャンプでは話が別である。カメラを向けると、みんな嫌がる様子もなく、にこにことほほえむ。

ケニアでもそうだし、ここでもそうだ。

おかげで、今回私が撮った中で、笑顔の女性が映っているのは九割方難民の写真ということになってしまった。

8 ムスリム　イスラム教徒。

＊

莫大　うつろ

でも、笑顔の難民なんてマスコミやNGO[9]などのレポートで見たことがない。もしかしたら、たまたま私の出会う難民の人たちがそろいもそろってフレンドリー[10]な人だったのかも……というかすかな疑念も消えずにいたのだが、瀧野さんの写真もやはり満面の笑みが並んでいた。

難民だけではない。病院に担ぎ込まれた患者やその家族にもそういう女性がいた。

いちばん強烈だったのは、背中一面が真っ赤に焼けただれた子供を抱いた若い母親がうれしそうにほほえんでいる写真だった。

「この子は近くで爆弾が炸裂(さくれつ)して、大やけどを負ったらしいんです。ぼくが見ても『これ、ちょっとヤバいんとちゃう?』って思ったんだけど、にこにこしてるんですよねえ。」と瀧野さんは言った。

そう言われて思い出したが、昔、タイ[11]・ミャンマー[12]の国境地帯に行ったとき、「ミャンマー政府軍に村を焼かれて逃げてきた」という少数民族の人たちに出会った。彼らの村では男性が二人殺され、女性も数人が暴行されたというが、そう話しながらも、カメラを向けるとにこっとほほえんだものだ。

なぜ、難民や重傷者の家族が笑顔を見せるのか。

それはきっとホッとしているのだと思う。彼らは戦乱や飢饉から必死の思いで逃れてきた。難民キャンプにしても病院にしても、やっとたどりついた「安全地帯」なのだ。そして、私たちのようにカメラを構える外国人は「自分たちを助けてくれる人」と無意識的に認識するのだろう。だから、警戒心もなく、むしろ仲良くしたいという意思表示でほほえむのだろう。

9 **NGO** nongovermental organization（英語）の略。非政府組織の民間活動団体。

10 **フレンドリー** friendly（英語）。友好的。

11 **タイ** インドシナ半島中央部に位置する王国。首都はバンコク。

12 **ミャンマー** インドシナ半島北西部の連邦共和国。首都はヤンゴン。旧称ビルマ。

これが現場のリアリティである。

ところがこんな写真や映像は日本では（そしておそらく欧米諸国でも）見ることができない。いつも見せられるのは、悲惨でかわいそうな人たちばかりだ。

理由は簡単で、そういうイメージを出さないと同情が集まらず、寄付金も集まらないからだろう。[13]国連やNGOがそういう写真や映像を出す場合、純然たる「[14]プロパガンダ」と考えてよい。

一方、新聞・テレビ・ネットなどでもそういう写真・映像ばかりだが、こちらはこちらで、事情があるのだろう。変に笑顔の写真・映像などを載せると、ストーリーが難しくなってしまうと想像できる。記者としても、「かわいそうな難民」で話を作れば簡単なのだ。一瞬で仕事が終わる。それに被取材者が楽しそうにしていると、取材者も苦労していないように見える。

ソマリアは危険。難民は悲惨。――そういう[15]スタンスで報道すれば、それを報道している記者もすごいと読者（視聴者）や上司に思ってもらえる。

だからこそ、悲惨に見える被写体をせっせと探して撮影する。そしてその中でも笑顔のない写真（例えば、たまたま下を向いているとか、考えごとをして目がうつろになっているように見えるとか）を載せるのだろう。

大やけどで死ぬかもしれない子供を抱いてほほえむ母親の写真のほうがずっと現地の困難さをリアルに伝えていると思うのだが……。

そんなことを瀧野さん相手に力説した私だったが、実は私も大いに勘違いしていることが発覚

5 10 15

13 国連　国際連合の略。第二次世界大戦後に、国際平和と安全の維持、経済・文化等における国際協力を目的として設立された。本部はニューヨークにある。

14 プロパガンダ　propaganda（英語）。宣伝。主に政治的な主義や思想の宣伝を言う。

15 スタンス　stance（英語）。姿勢・心構え。

問 何を「勘違い」していたのか。

した。

犬である。

私は犬好きで、外国へ行くとリードもつけずに路上をうろうろしている犬の写真を撮るのが趣味なのだが、イスラム圏ではそれが非常に厳しい。

イスラムでは犬は「不浄の動物」とされていて、人々から忌み嫌われている。いっぽう、猫は愛されていて、実に不公平である。

私はこれを「たまたま予言者ムハンマド[16]が猫派だったから」と解釈していた。ムハンマドは猫好きで知られている。テーブルの上だか椅子の肘掛けだか忘れたが、自分の飼っている猫がムハンマドの袖に体を預けて眠ってしまった。椅子から立とうとしたムハンマドだったが、猫を起こすのが忍びなくて、袖をハサミでそっと切ってしまったという。

全く猫好きもいいところだが、おかげで犬は大変な割を食うことになってしまった。

ソマリ人エリア[17]でもそうだ。例えば、ハルゲイサ*でも、犬は徹底的に虐待されている。数自体少ないし、たまに見かけて写真を撮ろうとすると、近くにいる人たちが片っ端から犬に石を投げるのだ。まさか不浄な犬を撮影しようとしているとは夢にも思わないらしい。私への親切心で風景を乱す犬を追っぱらってくれるのだ。かわいそうに、犬はギャンギャン悲鳴をあげて逃げていき、私がいくら「やめろ！」「違うんだ！」と説明しても全然わかってもらえない。

モガディショではもう少しこちらの意図をわかってもらえた。ハムディ[18]たちは私が犬が好きなのを面白がり、犬を見かけるたびに教えてくれたり、運転手も車をわざわざ徐行させてくれる。

16 **ムハンマド** Muhammad 五七〇年頃～六三二年。イスラム教の創始者。

17 **ハルゲイサ** ソマリア北西部の都市。

18 **ハムディ** 筆者を現地で案内したケーブルテレビの女性支局長。

それでも市内を毎日ぐるぐる回って、発見した個体はたった五匹。そのうち、三匹は「いつ通ってもそこにいる」という定番の犬だった。

ところが、四日目（瀧野さんと会う二日前）に犬がたくさんいる場所を見つけたのだ。旧アル・シャバーブ支配区のバカラ[19]市場跡である。バカラ市場はソマリアどころかアフリカ最大の市場と言う人もいるのだが、びっくりするほど広大だった。ただし、屋台街は徹底的に破壊され、食堂や店だった建物も銃弾、砲弾の跡だらけで、ここが市場だったかどうかもわからない。

かつてアイディード義経[20]（よしつね）の民兵が殺した米兵を裸にして引きずり回した場所もここだとハムディたちに教えられたが、「ふーん」としか答えようがなかった。

前日に訪れた地区と同様、ここもゴースト[21]タウンだった。ロバの荷車に家財道具を積んで帰ってきた人たちをぽつりぽつりと見かけたが、全体としてはまだ住民はほとんど戻ってきていない。そして、犬だけがたくさんいたのだ。中には妊娠している犬、生まれたばかりの子犬もいる。一か所だけ、なぜかそこだけ猫が二十匹ほどたむろしている「猫コロニー[22]」もあったが、それ以外は全て犬の世界。

「おお、犬天国じゃないか！」感激した私はバシャバシャ写真を撮った。なぜ、ここにこれほど犬がいるのかわからないが、おそらく、虐待する人間がいなくなったので、集まってきたのだろうと推測した。同時に心配もした。こんなところにいても、食べ物がないだろう。一体何を食って暮らしているのか。生まれたての子犬もいるというのに。何か餌を差し入れたいほどの気持ちだった。

5 10 15

19 **バカラ市場** モガディショにある大きな市場。

20 **アイディード義経** Mohamed Farrah Aidid 一九三四年～一九九六年。ソマリアの軍人・政治家。筆者はこの人物を源（みなもとの）義経に例えている。三一五ページ注8参照。

21 **ゴーストタウン** ghost town（英語）。住民がいなくなり、荒れ果てた町。

22 **コロニー** colony（英語）。ここでは、集団居住地の意。

＊割を食う

だが、瀧野さんの話を聞いて愕然(がくぜん)*とした。

瀧野さんは私が訪れた翌日、同じ場所に行った（彼は私のように警察の部隊と一緒ではないので、護衛の兵士を十名も雇っていた）。

すると、同行していた兵士の一人が、瀧野さんに「あれを見ろ。」と教えてくれた。すごい異臭がして、何かと思えば、人間の死体だった。といっても、肉はほとんどなく、ほぼ骨だけになっていた。近くには軍服も落ちていた。

「アル・シャバーブの兵士の死体だ。犬に食われた。」兵士は言ったという。

瀧野さんはその写真を見せてくれた。軍服と背骨のような骨が並べて撮影されていた。

犬天国。それは死体の上に成り立っている世界だったのだ。

イスラムでは犬を「不浄の動物」とする理由がようやく少し飲み込めた。もちろん、イスラム圏に限らず、古代から世界のどこでも犬は戦場の死体を食ってきたことだろう。でも、最後の審判を待つため、決して遺体を焼いたり損傷したりする行為を許さないイスラム、もともと猫派のイスラムにとっては、印象が悪すぎる。

「すごいですね……。」とつぶやくのがせいぜいだった。

「やっぱり現場に来ないとわからないことって多いですよね。」と瀧野さんは朗らかに言った。

「自腹を切って来るだけのかいはあります。」

そう。現場に来なければわからないことは多い。そして、自分の希望に沿わない現実をほろ苦く味わうときもある。

* 愕然



高野秀行（たかの ひでゆき）　昭和四十一（一九六六）年〜。ノンフィクション作家。東京都の生まれ。辺境地域を独自の角度から取材する作品を多数発表している。代表作に『謎の独立国家ソマリランド　そして海賊国家プントランドと戦国南部ソマリア』『アヘン王国潜入記』『西南シルクロードは密森に消える』『謎のアジア納豆』などがある。本文は『謎の独立国家ソマリランド　そして海賊国家プントランドと戦国南部ソマリア』（平成二十九（二〇一七）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1「難民（国内避難民を含む）の写真が多い。一とおり見ながら私は、「やっぱりな……。」と思った」（一五八・11）とあるが、一般的なイメージと、現場でわかったことの違いは何か、まとめてみよう。

2「ソマリアは危険。難民は悲惨。――そういうスタンスで報道すれば、…思ってもらえる」（一六一・10〜11）とあるが、そうすることの問題点は何か、考えてみよう。

❖言葉と表現

1 この文章では、「私が言うのもなんだが、…と感心した」（一五八・5〜6）のようなユーモラスな表現をしばしば用いている。ほかに、そのような表現をしている箇所を指摘してみよう。

❖言語活動

1「大やけどで死ぬかもしれない子供を抱いてほほえむ母親の写真のほうがずっと現地の困難さをリアルに伝えていると思うのだが……」（一六一・15〜16）とあるが、そう考える理由を話し合ってみよう。

2 歴史上、「プロパガンダ」（一六一・5）にはどのようなものがあったか、調べてみよう。

空缶（あきかん）

林　京子（はやし　きょうこ）

校舎は、コの字形のコンクリート四階建てである。私たち五人は、その校舎に囲まれた中庭の、ほぼ中央に立っていた。時間は午後一時半をすぎている。太陽は西にまわりはじめて、中庭には校舎の影が写っている。五人が立っている場所も、既に陰になっている。

しかし、まだ、西向きの講堂には、陽（ひ）が一杯にさしていた。

「洗面所の使用法について、一言」。腰に両手をあてて、大木が四人に向かって言った。それは誰？　その口調は、と西田が、大木を指して考える表情をする。あれはだれだったか。洗面所の使い方ばかりを注意する先生が、確かにいた。かめ[1]のこだわし、突然思い浮かんだ恩師の仇名（あだな）を、私は大声で叫んだ。いやあ、と長崎弁特有の、柔らかい注意のしかたで、原が、私のオーバーコートの袖を引いた。そして、職員室に聞こえるよ、と言った。三十年も前の教師たちが、いま、職員室にいるはずがなかった。三十年前の教師たちばかりではない。職員室には、もう誰もいない。

かつての私たちの母校は、来年一杯で廃校になってしまう。生徒たちも、長崎市街を見おろせる台地に建った、新校舎に移転してしまっている。さっき、校門を入る時に見かけたのだが、玄関の車[2]まわしに植えてあったフェニックス[3]は掘り起こされて、根を、あら筵[4]（むしろ）で包んであった。私たちが女学生の頃にも、車まわしにフェニックスが植えてあった。枝ぶりからみて、多分おなじ木なのだろう。根元から三本に分かれたフェニックスは、三十年の歳月の間に、七、八メートルの大木になっている。この木も、新校舎の方に植えかえられるのだろうか。

校舎の内には、私たち以外には、誰もいない。城壁のようにつっ立った校舎は、コンクリートの壁面に音を吸いとってしまって、物音一つたてずに静まっている。

緊急通達事項が起きると、私たちは、よくこの中庭に集合させられた。大木が口真似（まね）をしている教師は理科の男教師で、緊急通達が終わると、ええ、と生徒に向かって話しかけながら、せかせか歩いて朝礼台に登る。そして大木の口真似どおり「洗面所の使用法について」と話を切り出す。生理用具の

処理のしかた、水の流し方、使用上の注意を事こまかに説明して、特に冬になると便所の管が凍って水が外部に溢れ出てしまう、そのために校舎の外壁に白い水もれの跡がついて、はなはだしく校舎の美観を損なう、と流れの跡を指して私たちに注意する。終戦直後の殺伐とした時代ではあったが、やはり少女である私たちは恥ずかしかった。中庭に立って、まっ先に大木が想い出したのも、恥ずかしい思いが印象に深かったからだろう。その白い、水の流れの跡は巾を広げて、いまも残っている。

一階、二階と、壁面で階を追いながら、私は目を空に移していった。コの字に区切られた快晴の空が、顔の上にあった。初冬には珍しい、暑さを感じさせる太陽の光が、コンクリートの直線に沿って輝いている。更に私は、目を四階、三階と下ろしていった。校舎の窓は、全部が閉めてあった。無人の校舎にしては、ガラスはよく磨いてある。そして、各階の窓のことごとくに、ガラスがきれいに入っている。そのことが私には奇妙に見えた。

昭和二十年の八月九日の、原爆投下後から卒業するまでの二年間、この校舎には窓ガラスが一枚もなかった。爆風で弓なりに反った窓枠の隅に、サメの歯のように尖ったガラス片がところどころ、残っている程度だった。

更衣室や洗面所の、目かくしが要る場所には、板切れが打ちつけてあった。それも鉄の窓枠が、正常な箇所だけである。

反った窓枠の一つ一つを、どのようにして矯正したのか。あの当時のままの、縦横に仕切りの多い窓枠は、まっ直に伸びて、透明ガラスがはめこまれている。気をつけて見ると講堂側の窓に五、六ヵ所、流行のアルミサッシュの枠がある。上、下二段に分かれた窓は、そこの窓枠だけが銀色に光って、西陽に輝いている。矯正がきかない、破損のひどい窓のかわりに取りかえられたのだろうが、白い水の跡や、パテ[5]が目立つ赤さびた鉄枠の窓の中で、取ってつけた新しさが浮きあがっていた。

初出『群像』昭和五十二（一九七七）年三月

＊ 殺伐

1 かめのこだわし　棕櫚の繊維などを束ねて作る楕円形のたわし。
2 車まわし　玄関の前に車をつけるために設けられた庭。
3 フェニックス　ヤシ科の植物。暖地で庭木や街路樹として植えられる。
4 あら筵　わらなどで編んだ目の粗い筵。
5 パテ　putty（英語）。板ガラスを窓枠に取り付けるための接合剤。

問「奇妙に見えた」のは、なぜか。

「この庭、こんなに狭かった？」と西田が中庭を見まわして言った。

「うちもいま、同じことを考えとったとよ」と原が言って、西田と並んで、中庭を見まわす。なかに入ってみん？　と和服を着ている野田が言った。

「へえ、入ってみよう、講堂ばみておきたか」と大木が言った。取り壊される前に、私も、あと一度、講堂を見ておきたい、と思った。

私たちは、生徒専用の通用口に向かって、歩いていった。通用口には、鉄の錠前が掛けてあった。私たちは中庭を抜けて、フェニックスを掘り起こした土で汚れている玄関から、校舎に入った。

講堂の入口に立った瞬間、私たち五人は雑談を止めた。それぞれが、その場に釘づけになって、立ちすくんだ。講堂には何もない。式や行事の日に、私たち生徒が座った木の長椅子も、細長い机もない。ただ一脚、背もたれが折れて、使いものにならない長椅子が、講堂の真ん中に置いてある。

舞台の幕も取りはずされて、白い胡粉の壁が、あらわに見えている。ピアノも、式次第を書きしるす黒板も、道具類は、運び出されてしまって、艶のない、ささくれた床に、乾いた



旧長崎高等女学校（昭和 20〈1945〉年撮影。校舎が迷彩色に塗られている）

雑巾が一つ、捨ててあった。私は天井を見あげた。細い板を張った天井には、淡い緑のペンキが塗ってある。色あいも、十センチ幅の板目も、三十年前そのままの様子で、目の前にある。そして、乳色の球状をしたシャンデリアも、当時のままである。

講堂は、明るく、ひっそりしていた。悲しゅうなる、と原がつぶやいた。追悼会——と私もつぶやいた。大木と野田が、無言でうなずいた。幕をはぎとられて裸になってしまっている舞台に向かって、私は黙禱をした。

卒業以来、私ははじめて講堂を見る。入口に立った時に私を釘づけにした思いは、音楽会でも卒業式でもない。終戦の年の十月に行われた、原爆で死亡した生徒や先生たちの、追悼会である。私が無言の祈りを捧げたのは、その日の、友人たちの霊に対してである。大木たちも、同じ思いだったろう。特に原と大木には、[7]浦上の兵器工場で被爆した重態の体を、この講堂の床に横たえた想い出がある。原も大木も傷は癒えて、生き残ったが、何十人かの女学生たちは、先生や仲間たちにみとられて、この床の上で死んでいった。生徒数千三、四百人のうち、三百名近い死者が、八月九日から十月の追悼会までに数えられていた。浦上方面の[8]軍需工場に[9]動員されていて即死した者、自宅で白骨化した者、さまざまである。和紙に、毛筆で書かれた生徒たちの氏名は、胡粉の壁の端から端まで、四、五段に分けて貼ってあった。

クラス毎に、担任教師が生徒たちの名前を読みあげた。担任教師が被爆死しているクラスは、同じ学年の教師が、教え子たちの名を代わって呼んだ。読みあげられる一人一人の名前に、生き残った生徒たちの間から、どよめきが起こる。そのうち、●どよめきは静まって、私たちは気ぬけした者のように肩を落として、長椅子に座っていた。三方の壁ぎわには、死亡した生徒たちの父母が座っていた。父母たちは、追悼会がはじまる前から涙ぐんでいた。涙は*おえつに変わって、生徒が座っている中央に向かって寄せてくる。悲しゅうなる、とつぶやいた原の言葉は、各人の胸によみがえった、あの日

6 **胡粉**　貝殻を焼いて砕いて作る白色の顔料。　7 **浦上**　長崎市北部の地名。爆心地。キリシタンの地で、浦上天主堂がある。　8 **軍需工場**　軍事上必要な物資を、開発・製造・修理するための施設。　9 **動員**　学徒勤労動員のこと。戦時下、深刻な労働力不足を補うため、中等学校以上の生徒・学生が軍需工場などに動員された。

問 **「どよめき」が静まったのは、なぜか。**

* おえつ

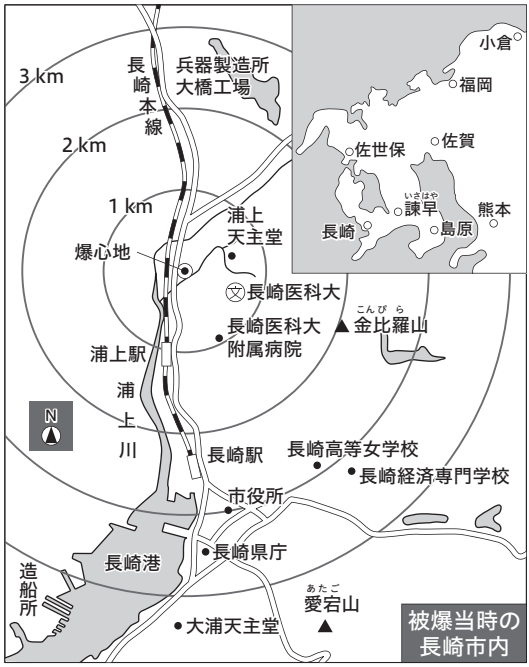
の想いを、率直に言い表していた。私は講堂に入った。そして中庭に面した窓辺に歩いていった。西陽がさす窓を背にして、改めて講堂を眺めた。西田と大木が、寄ってきた。

西田は腰の低い窓に寄りかかりながら、「原爆の話になると、弱いのよ」と言った。追悼会、の一言で、私たちが何を考えているのか、もちろん西田にもわかっていた。西田は、被爆者ではない。私と同じように転校生である。小学校から入学試験を受けて、選ばれて入学した、はえぬきのN高女の生徒ではない。N高女の生徒たちは、入学試験で選抜された、という評価に対して誇りを持っている。だから、彼女らの転校生に対する評価は、同じN高女生であっても低い。しかし同じ転校生でも西田と私とでは、また微妙な差があった。

私は昭和二十年の三月に、N高女に転入している。そして八月九日、動員中に被爆した。西田が転校してきたのは、終戦の年の十月、追悼会の日からである。被爆したか、しないかの差は、そのまま、はえぬきの大木たちとの結びつきにまで、かかわってきていた。

西田が、弱い、というのは結びつき方で、弱さの原因は被爆したかしないかにある、と西田は言った。大木が、そんげん事のあるもんね、被爆は、せん方がよかに決まっとるやかね、と笑って言った。西田は、そうじゃないのよ、いい、わるいじゃなくって、心情的にそうありたい、と思うのよ、と言った。更に、「例えばね、あなたもわたしも転校生だから長崎弁をうまく使えない、無理に使えばギクシャクとぎこちない、そのぎこちなさよ」わかるでしょう、と私に言った。

いまだってそうよ、と西田が、言葉を続けた。「あなたたち四人は、講堂の入口に立った瞬間、泣き出しそうな顔をした、あの時、あなたたちが考えたことは、追悼会のことで



しょう。わたしは、そうじゃないもの」西田の脳裏に浮かんだ情景は、転校早々に行われた全校生徒の弁論大会だ、と言った。

覚えている？　と西田が私に聞いた。その頃、私は原爆症[11]で発熱が続いており、正規の授業がない日には、なるべく休むようにしていた。多分、弁論大会の当日も休んでいたのだろう。記憶になかった。大木が、うわあ恥ずかしかあ、と少女のように、両手で顔をかくした。

原と野田が近寄ってきて、なん？　と聞いた。

弁論大会は、生徒全員に各人の主張を書かせ、クラスから一名、優秀な作品を選んだ。その選ばれた者が、クラス代表として講堂の舞台で、意見を発表したらしい。西田も大木もおのおのクラス代表に選出され、優勝を競った仲らしかった。

テーマは西田が「婦人参政権について」、大木が「婦人と職業」。大木が恥ずかしい、と言ったのは、女性を、産む作業から解放しよう、といった調子の、威勢のいい婦人と職業論だったからしい。言いあてて、いまだに産む作業を知らず、と大木はおどけて言った。東京の女子大を卒業した大木は、長崎に帰ってきて、中学校の教師を職業として選んだ。それから今日まで、何となく、独身生活を続けている。いつか結婚しよう、と待ちながら、とうとう、四十歳を過ぎてしまった、と大木は言った。

「だけど、女が一人で生きていくには、公務員が最高じゃないの」と西田が言った。

「そう、老後の恩給[12]もつくし、よかでしたい」と野田も言い、うちは、ご亭主が死ねば、その場でアウトさ、と首をくくる真似をした。大木が表情を曇らせて、そうでもなかよ、と言った。

最近、長崎県では離島の教育問題が注目されてきている。離島を多く持つ長崎県では、常に懸案になっている問題点だが、大木にかかわりが出てくるのは、最も個人的な、離島赴任の問題である。そして、その可能性が、大木の場合には大きいという。独身であるのも赴任の条件の一つになるが、二十年を越える教師生活の中で、まだ長崎市内から外部に出た

＊はえぬき　ぎこちない

10 **高女**　旧制の高等女学校のこと。　11 **原爆症**　原子爆弾の放射能による健康障害の総称。
12 **恩給**　退職した公務員、旧軍人またはその遺族に給付される年金。

問 **「原爆の話になると、弱いのよ」とあるが、なぜか。**

ことがない。現在まで、転任は市内の中学校に限られてきた。これは、離島の多い長崎県の教師にとっては珍しいことだ。しかし、来春の異動には、確実に離島赴任が命じられるだろう。大木は、赴任を嫌っているのではない。大木が気がかりなのは、原爆症の再発である。

被爆直後、生徒死亡者名が校門に張り出された時、五十音順の真っ先に、大木の姓名が書いてあった。私たちは追悼会の日まで、大木は被爆死したものだ、と思っていた。背中や腕にガラス片がささった大木は、出血がひどく、講堂で看護を受けながら、意識がなくなることがあった。引き取りに来た両親に抱かれて、大木は帰宅したが、その姿から、死亡説が出たらしかった。現在は、一応健康にみえるが、不発弾を抱いているようなものである。もうこの年だし、死んでもよかばってん、いざとなれば、やっぱり怖ろしかっさ、と大木が言った。島にも医師はいるが、原爆症が出た場合、大木は、私もだが、長崎市にある原爆病院に入院したい、という希望がある。原爆症にかかわらず、何らかの病気にかかったら、原爆症を考慮しながら治療が受けられる、原爆病院に入院したい、と思っている。できるならば、原爆病院に近い市か、町で生活をしていたい、とも思っている。大木の不安は、原爆病院から海をへだてて離れることにある。しかし、被爆の前歴は、赴任拒否の理由にはならない。仮に受け入れられるならば、長崎県の教師たちは、それぞれが、原爆に関連を持っているだろう。

離島に行く教師は、いなくなるだろう。が、大木が躊躇する気持ちは、同じ被爆者である私には理解できた。

だけど、と西田が言った。

「むごいことを言うようだけれど、予定が組まれたら進まなきゃならない、それが生きるってことじゃない、たとえ病気であってもよ」

同じ場所に踏みとどまっている訳にはいかないのだ、立っている現在が、常に出発点なのだ、と西田が言った。

西田は半年前に夫を亡くしている。二、三日床についただけで、一言の遺言もなく死んだ。さいわい、西田は服飾デザイナーとして、名を成している。夫の死によって、野田のように首をくくる心配はない。仕事ぶりにも定評があって、確実な足場を持っているように思える。それでも進むしかないのよ、いつ足をすくおうかって、虎視眈眈なのよ、と西田は言った。それから西田は、「失礼だけど、あなたご主人は？」と原に尋ねた。原は首を振って、大木さんと同じよ、と答えた。太った大木に比べて、原はいかにも病弱にみえる。

手や足も細く、日本人形のように整った顔は、青く肌が沈

んでいる。被爆以後、悪性貧血に悩まされて、結婚生活に耐えられる肉体ではないようにみえる。大木の両親は、数年前に相次いで死亡しているが、原の両親は健在で、両親の庇護*を受けて生活をしていた。

「ご主人がいるのは、野田さんだけね」と私が言った。おうちは？　と野田が私に聞いた。

一人よ、とだけ私は答えた。

五人いる、かつての少女たちの中で、平穏な結婚生活を続けているのは、野田一人だった。死別、離婚、そして独身で今日まできている大木と原。陽だまりの窓辺で、私たちは暫く無言でいた。

「生き残って三十年、ただ生きてきただけのごたる気のする」と原が言った。うちたちは原爆にこだわりすぎるとやろうか、と大木がひっそりと言った。

「きぬ子は、今日は来ならんと？」と野田が話題をかえた。ああ、忘れとった、と大木が頓狂*な声をあげた。朝、島原に[13]住んでいるきぬ子から、大木に電話があった、という。西田と私が、一週間の予定で東京から帰郷しているのを知っているきぬ子は、今日の母校訪問に参加する予定でいた。それが急に、出席できなくなったのだ。

「申し込んどったベッドの空いてさ、原爆病院にあした、入院しなっとげなさ」。大木の言葉に、原爆症ね？　と原が眉を寄せた。大木は、ううん、と首を振って、背中のガラスば抜きなっとさ、と言った。

きぬ子は、島原で小学校の教師をしている。二年生を受け持っているが、ガラス片の痛みを知ったのは、体育の授業中である。活発なきぬ子は、四十歳を過ぎていながら、子供たちに前転をしてみせていた。丸めた背中が、マットの上に落ちた時である。明滅する[14]イルミネーションのような、軽やかな痛みが、背中に起きた。年のせいかな、ときぬ子は思いながら、あと一度、前転を、生徒の前でしてみせた。今度は、尖った痛みがした。放課後、きぬ子は病院に寄って、診てもらった。医師は指先で、背中のところどころを押して、原爆

13 島原　長崎県南部の地名。　14 イルミネーション　illumination（英語）。色とりどりの電灯を用いた装飾。

＊名を成す　虎視眈眈　庇護　頓狂

問「不発弾を抱いているようなもの」とは、どういうことか。

問「ただ生きてきた」とは、どういうことか。

問「原爆にこだわりすぎる」とは、どういうことか。

におうとれば、その時ささったガラスじゃなかろうかあ、ときぬ子に聞いた。レントゲンを撮って、一週間後に一ヵ所切開してみると、医師の言葉どおり、ガラスが出てきた。その部分の肌は固くこりこりしていて、それが幾つかある。レントゲンには影になって写るらしいが、切開してガラスを取り出すために、あした、きぬ子は入院するのだ、と大木が説明した。

「きぬ子さんって、よく覚えていないけれど弁論大会に、一緒に出た人じゃない」と西田が聞いた。へえ、出なったね、と野田が答えた。そして、あんなんはあん時は、坊主頭やったね、と言った。被爆後、きぬ子は髪の毛が脱けてしまって坊主頭になっていた、という。丸坊主で演壇に立ったきぬ子も、在学中のきぬ子も私は覚えていないし、知らない。

「命について、話しなったね」と原が覚えていて、言った。おとうさんも、おかあさんも即死しなったけんねえ、と大木が言った。独りっ子だったの？　と私が聞いた。うちとおんなじ、天涯孤独の教師さ、と大木は、私たちを見て、笑ってみせた。*

女学生時代のきぬ子を知らない私が、きぬ子とつき合うようになったのは、同窓会か同年会で同席して、それから、つき合いがはじまったようである。そして昨年、十年ぶりに私はきぬ子に逢った。

私たちの恩師に、T先生という女先生がいた。当時二十四、五歳で、長崎市内の上町にあるK寺のお嬢さんだった。N高女の先輩で、金色の産毛が頬から耳たぶにかけて光る、色の白い、美しい先生だった。目の玉が、青みがかった灰色をしており、髪の毛も細く、産毛よりやや濃い、栗色をしていた。長崎には混血児に見間違えそうな男女が多いが、T先生も混血児にみえた。T先生は、兵器工場に動員された生徒について出向していたが、八月九日、きぬ子と同じ職場の精密機械工場で即死した。

昨年十月、T先生の墓が、生家であるK寺にあるのを知った私は、きぬ子を誘って、三十年ぶりに墓参りをした。

墓参りを終えた私たちは、K寺の、町を見おろせる[15]樫の木の根元に座って、T先生の想い出話をしていた。きぬ子は、T先生の即死の現場を見ている。遺体を確かめたわけではないが、閃光に額をうたれて、光の中に溶けて見えなくなった瞬時を、目撃している。その時T先生は、きぬ子に向かって、大きな口をあけて何事かを叫んだ。言葉は、もちろん聞きとれなかった。単なる叫び、だったかもしれないが、きぬ子はT先生の最後の言葉を、何とか理解してあげたい、と思い続けた。開いた唇の形を脳裏に繰り返し描いて考えているうちに、いつの間にか、T先生はきぬ子の頭の中に貼り絵のよう

に、貼りついてしまった。

聞きとれなかった言葉は、きぬ子の心の負担になって、この頃では、あの情景が事実だったのか、T先生は本当に死んだのだろうか、と、それさえも疑うようになっているのだ、と言った。K寺に墓参りに来たのも、曖昧になりつつある過去を確かめる意味と、はっきりT先生の死に決着をつけるためだ、と言い、この樫の木の根元で、T先生を焼きなったって、住職夫人はいいなったね、と私に住職夫人の言葉を確認させた。

本当よ、ここで焼いたって住職夫人は話したわ、と私は答えて、樫の木の、瘤になった根を叩いた。骨も拾うたって、言いなったね、もう、死になった人のことは忘れてしもうてもよかよねえ、きぬ子は私を真似て、樫の木の瘤を叩いて言った。その時きぬ子は、痛い、と小さい叫びをあげて、手のひらを撫でた。手のひらには、傷口も、出血もなかった。とげをさしたの？　不思議に思って私は聞いた。

「ガラスさ」ときぬ子は、それだけ答えた。その時の、●抑揚のないきぬ子の言葉を、私は想い出していた。

●「人間の体は、よう出来とるね」と大木が言った。四、五年前に大木の背中からも一個、ガラスが出てきた。医師に、切開をして出してもらうと、真綿のような脂肪の固まりが出てきた。四、五ミリメートルの、小さいガラス片は脂肪の核になって、まるく、真珠のように包み込まれていた、という。

私たちは講堂を出た。講堂を出ると、階段の踊り場を中心に、右と左に廊下が分かれている。右側が特別教室になっている。私たちが終戦直後に使用していた教室は、その左側である。私たちは、「何組だった？」とめいめいの担任と級を確かめあいながら、廊下を歩いていった。私たちが歩いている廊下は、コの字形の校舎の、背の部分になっている。コの字の角に当たる教室は、出入り口が一つしかない。

他の教室は、前後に一つずつ、出入り口がついていた。角の教室は非常の場合を考えて、隣の教室との境の壁に、ドアが一つ、取りつけてあった。私は、その角の部屋のドアに記憶があった。ここが私の教室ね、と私は西田に言った。西田は、どれ？　と言いながら、廊下の窓から教室の内部をのぞき込んだ。女学生の頃によくのぞき込んだ姿勢で、西田は手

15 樫　ブナ科コナラ属の常緑高木の総称で、幹が非常に堅い。果実は「どんぐり」。

問「抑揚のない」のは、なぜか。　問「人間の体は、よう出来とるね」とは、どういうことか。

＊天涯孤独

摺に両ひじをかけて、上半身を教室に折り込む格好で、室内を見まわした。そして、これはわたしのクラスよ、と言った。西田も、壁のドアのノブに記憶がある、という。二人がもっているノブの記憶は、二人ともが正しいのかもしれなかった。ただ、出入り口が一つしかない角の教室なのか、それとも角の教室に壁を接した、共通のドアを持った教室なのか。いずれにしても西田と私の教室は、隣りあっていた事は確かなようだった。

西田と私は、転校生の心細さから親しくなったが、卒業までに同じクラスになったことはない。二人が同じ教室の想い出を持っているのは、おかしなことだった。

大木が、西田の横から教室をのぞいた。

「きぬ子は、この教室やったよ、同じクラスやったと」と大木は、私たち二人に聞いた。私は、違う、と答えた。西田も、きぬ子と一緒のクラスになった覚えはない、と答えた。「この壁に、大穴のあいとったね」話しながら大木は、教室に入っていく。大木は些細な部分まで、記憶していた。大木に続いて、私たちも教室に入った。陽がかげった教室には、講堂と同じように椅子も机もない。白墨の粉が浮いた黒板が、廊下側の壁にかかっている。

教室の横の壁にかかったこの黒板は、生徒用の掲示板である。黒板の右後ろに、問題のドアがついていた。大木が説明した壁の大穴は、黒板とドアの間の壁にあいていた。穴は、教室のやや後ろ寄りになる。女学生二人が並んで通れる大きさで、そこから、隣の教室の授業風景が見えた。授業にあきると、私は振り返って、穴から見える範囲の、隣の教室の友達に目くばせを送った。穴はすぐに補修されたが、記憶をたどっていけば、角の教室は、やはり私のクラスのように思えた。背丈が低かった私は、教室の前に座っていた。

前の座席から振り返って、隣の教室が壁の穴から見えるのは、この角の教室しかない。

「覚えとる?」と大木が聞いた。きぬ子の空缶? と重ねて聞く。空缶を、どうかしなったと、と野田が聞いた。

「ほら、空缶におとうさんと、おかあさんの骨ば入れて、毎日持ってきとんなったでしたい」と大木が言った。ああ、と私は叫んだ。あの少女が、きぬ子だったのか。それならばきぬ子と私は、クラスメートになる。両親の骨を手さげカバンに入れて、登校してきていた少女を、私は覚えている。少女は、赤く、炎でただれた蓋のない空缶に、骨を入れていた。骨がこぼれ落ちないように、口に新聞紙をかけて、赤い糸で結わえてあった。少女は席に着くと、手さげカバンの中から、教科書を出す。それから両手で抱きあげるように、空缶を取り出す。そして、それを机の右端に置く。授業が終わると、

手さげカバンの底に、両手でしまい、帰っていく。初め、私たちは空缶の中身が何であるか、誰も知らなかった。少女も話そうとしない。被爆後、私たちはあからさまに話さない事が多くなっていたので、気にかかりながら、誰も尋ねなかった。少女の、空缶を取り扱う指先が、いかにも愛しそうに見えて、いっそう聞くのをはばかった。

書道の時間だった。復員[16]して帰ってきた若い書道の教師が、ある日、机の上の空缶に気がついた。半紙と硯と教科書で、机の上は一杯になっている。

「その缶は何だ、机の中にしまえ」と教壇から教師が言った。少女はうつむいて、空缶をモンペ[17]のひざに抱いた。そして、泣き出した。教師が理由を聞いた。

「とうさんと、かあさんの骨です」と少女が答えた。書道の教師は、少女の手から、空缶を取った。それを教壇の机の中央に置いた。ご両親の冥福をお祈りして、黙禱を捧げよう、と教師は目を閉じた。ながい沈黙の後で、教師は、空缶を少女の机に返して、「明日からは、家に置いてきなさい、ご両親は、君の帰りを家で待ってて下さるよ、その方がいい」と言った。

あの時の少女が、きぬ子だったのだ。空缶事件は、私の少女時代に錐を刺し込んだような、心の痛みになって残っていた。空缶の持ち主が誰だったか、ということよりも、事件そのものの方が、印象に深くあった。焼けた家の跡に立って、白い灰の底から父と母の骨を拾う、幼いきぬ子の、うつむいた姿が、薄暗い教室の中に浮かびあがった。あの空缶は、いま何処にあるのだろう。

きぬ子は、まだ、赤さびた空缶に両親の骨を入れて、独り住まいの部屋の机に、置いているのだろうか。

昨年、K寺で逢った時にも、きぬ子は両親の話には触れなかった。現在の生活も、過去の生活も、いっさいを口にしなかった。あの頃、背中のガラスは、既に痛みはじめていたのかもしれない。

きぬ子は、あした入院するという。きぬ子の背中から、三十年前のガラス片は、何個でてくるだろう。光の中に取り出された白い脂肪のぬめった珠は、どんな光を放つのだろうか。

16 **復員**　軍隊に召集された人が任務を解かれて帰郷すること。　17 **モンペ**　女性の労働用の衣服。

＊ あからさま　はばかる



林京子（はやし きょうこ）　昭和五（一九三〇）年～平成二十九（二〇一七）年。小説家・著述家。長崎県の生まれ。上海（シャンハイ）で十四歳まで過ごし、帰国半年後に長崎で被爆。原爆投下から三十年を経て『祭りの場』を発表、出来事の風化に抗し、核をめぐる諸問題や日本側の加害性も取り上げ続けた。作品に『上海』『三界の家』『長い時間をかけた人間の経験』などがある。本文は『祭りの場・ギヤマン　ビードロ』（昭和六十三（一九八八）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1「私」・大木・西田・原・野田・きぬ子の昭和二十（一九四五）年の出来事と、その後三十年の人生について、それぞれまとめてみよう。

2 (1)大木と西田、(2)西田と「私」のそれぞれの共通点と相違点を整理し、作品における西田の役割について考えてみよう。

3「私」が三十年後に初めて「あの少女が、きぬ子だったのか」（一七六・下14）と気づいた理由について、「私」の立場ときぬ子の立場の両面から、T先生のエピソードも踏まえながら考えてみよう。

4「光の中に取り出された白い脂肪のぬめった珠は、どんな光を放つのだろうか」（一七七・下16～17）という結びの言葉に込められた「私」の想いについて、大木の背中にあった「ガラス片」（一七二・上9）も踏まえながら、まとめてみよう。

◆言葉と表現

1 本文中の会話（間接話法を含む）で、長崎の方言と共通語が使い分けられていることによって、どのような効果が生じているか、考えてみよう。

2 次の語句を使って、短文を作ってみよう。

(1)ぎこちない（一七〇・下17）
(2)名を成す（一七二・下14）
(3)はばかる（一七七・上6）

◆言語活動

1 原爆投下から三十年を経て本作が発表されたことには、どのようなメッセージが込められていると考えられるか。さらに本作の発表からは数十年が経過しているが、本作を読み継ぐことは、現代の社会においてどのような広がりを生むのか、話し合ってみよう。

野火

大岡昇平（おおおかしょうへい）

アジア太平洋戦争末期、激戦地であったフィリピンのレイテ島（一八〇ページ参照。険しい山地で東西に二分される）で、「私」（田村一等兵）は肺を病み部隊から見捨てられた。野戦病院も壊滅し、独りで熱帯雨林をさまよい、丘陵に小屋と芋畠（いもばたけ）を発見して飢えをしのいだ。そこから見えた海に近い集落の十字架が気になり、少年時にキリスト教に魅せられていた「私」は、危険を省みず丘を降りる。犬ばかりの集落では住民に殺されたらしい日本兵の屍体（したい）が散乱するなか、「私」は教会に忍び込んで長椅子に横になった。

塩

いつか私は眠っていた。長い苦しい眠りであった。眼（め）をさますと、海に向いた窓が、あかあかと夕日に照らされていた。その衰えた赤が悲しかった。依然として内火艇[1]の音が、高く低く海に響いていた。私はこうして長く敵中にとどまる危険を反省したが、すべては物倦（ものう）かった。私はまた眠ったらしい。

歌が聞こえてきた。それはスペインの旋律から肉感を奪って哀愁だけを残した、あの聞きなれた比島[2]の歌であって、若い女声であった。私は身をもたげた。夢ではなく、声は光線のようにはっきりと、海に向いた窓から入ってきた。

夜はもう遅いらしく、月が出ていた。弱い斜めの光が、海

初出『文体』昭和二十三（一九四八）年十二月、昭和二十四（一九四九）年七月

1 **内火艇**　燃料を機関内で爆発燃焼させた動力によって走る、小型の砲艦。

2 **比島**　フィリピン諸島のこと。七千以上の島からなる。一八〇ページ参照。

面を銀に光らせていた。一隻のバンカー[3]が光の上に黒く動いていた。二人の人間が乗っていた。

男が舳に座り、女が櫂を持って、漕ぎながら歌っていた。歌声は平らな海面に柔らげられ、優しくうるんで耳に届いた。時々女は笑った。私は歯ぎしりした。

舟はやがて渚に着き、男がまず飛び上がって舟を曳いた。女は男の手にすがって岸に立つと、二人は手を取り合ったまま、笑いながら駈けてきた。

私はなぜか彼らがこの家に来るに違いないと確信した。頭を窓の下に隠し、耳を澄ませた。砂を踏む足音と笑い声が近づき、裏の戸が開いた。やがて灯が間の扉の隙間を充たした。

彼らは相変わらず笑っていた。私の第一の直感は人目を忍ぶ恋人たちが、この死の村を逢引き[4]の場所に選んだということであった。しかし彼らは随分台所に用があるらしかった。せわしくいつまでも音を立てていた。あるいは召し使いかもしれなかった。

彼らがやがて私のいる室へも入ってくる可能性があった。事実一人は扉に近づき、隙間から差す光が中断された。

私は音を立てた。話し声がとまった。私は立ち上がり、銃で扉を排して、彼らの前に出た。

二人は並んで立ち、大きく見開かれた眼が、椰子油の灯を映していた。



「パイゲ・コ・ポスポロ（燐寸をくれ）」と私はいった。

女は叫んだ。こういう叫び声を日本語は「悲鳴」と概称しているが、あまり正確ではない。それはおよそ「悲」などという人間的感情とは縁のない、獣の声であった。人類は立ち上がって[5]胸腔を自由に保たないならば、こういう声は出せないであろう。

女の顔はゆがみ、なおもきれぎれに叫びながら、眼は私の顔から離れなかった。私の衝動は怒りであった。

私は射った。弾は女の胸にあたったらしい。空色の薄紗(6)の着物に血斑が急に拡がり、女は胸に右手をあて、奇妙な回転をして、前に倒れた。

男が何かわめいた。片手を前に挙げて、のろのろと後ずさりするその姿勢の、ドストエフスキー(7)の描いたリーザ(8)との著しい類似が、さらに私を駆った。また射った。弾は出なかった。私は装塡(9)するのを忘れたのに気がつき、慌ただしく遊底(10)を動かした。手許が狂って、うまくはまらなかった。

男はこのとき進んで銃身(11)を握るべきであった。が、彼の取った行動は全く反対のものであった。バタンと音がし、眼を挙げると、彼の姿は外に消えていた。私も続いて出た。

男はすでに浜に降り、月に照らされた砂の上を、私の狙いを避けるためであろう、S字を描いて駈けていた。舟を押し出し、飛び乗って、忙しく漕いで行った。私は砂に折り敷き、いい加減に発射した。

銃声は海面を渡り、岬に反射して、長く余韻を引いて、消えていった。男はいっそう慌ただしく櫂を動かした。私は笑って、引き返した。

女の体はすでに屍体の外観を現し始めていた。息が沼から上る瓦斯のように、ぶつぶつ口から洩れていた。私は耳を近づけて、その音のやむまで聞いた。

私をこの行為に導いた運命が誤っているにせよ、私の心が誤っているにせよ、事実において、私が一個の暴兵にすぎないのを、私は納得しなければならなかった。神ばかりではない、人とも交わることができない体である。私はまた私の山に帰らねばならぬ。(12)

3 **バンカー** bunker（英語）。ここでは、アウトリガーと呼ばれる転覆を避けるための浮きを両側面に付けた漁師船のこと。
4 **あいびき** 愛し合っている者同士がひそかに会うこと。 5 **胸腔** 胸膜で覆われた胸の内部。 6 **薄紗** 薄く軽い織物。「はくさ」とも。
7 **ドストエフスキー** 九一ページ注4参照。 8 **リーザ** ドストエフスキーの小説『罪と罰』に登場する女性。 9 **装塡** 銃に弾薬を詰めること。
10 **遊底** 銃の後方にある部位。弾薬の装塡や発火などを行う。 11 **銃身** 発射された弾丸が通る、鋼鉄製の円筒部分。

問 なぜ、「歯ぎしりした」のか。 問 どのような「怒り」か。
問 「男はこのとき…握るべきであった」とあるが、この描写から何を読み取ることができるか。 問 なぜ、「私は笑って」いるのか。

私は私の犠牲者がここまで来た理由に好奇心を起こし、室[13]に彼らの行為の跡を探した。床板があげられ、下に一つのドンゴロスの袋が口を開けていた。中に薄黒く光る粗い結晶は、彼ら人類の生存にとっても、私の生存にとっても、甚だ貴重なものであった。塩であった。

銃

男が遁(のが)れ去った以上、私は村にとどまることはできなかった。[14]雑嚢(ざつのう)に塩を詰められるだけ詰めて、私はその家を出た。

月が村に照っていた。犬の声が起こり、寄り合い、重なり合って、私が歩むにつれ、家々の不明の裏手から裏手を伝って、移動した。声だけ村を外れても、林の中まで、追ってきた。

靄(もや)が野を蔽(おお)い、幕のように光っていた。動くものはなかった。遠く、固い月空の下に、私の帰っていくべき丘の群れが、薄化粧した女のように、白くかすんで、静まり返っていた。

悲しみが私の心を領していた。私が殺した女の屍体の形、見開かれた眼、とがった鼻、快楽に失心したように床に投げ出された腕、などの姿態の詳細が私の頭を離れなかった。

後悔はなかった。戦場では殺人は日常茶飯事にすぎない。私が殺人者となったのは偶然である。私が潜んでいた家へ、彼女が男と共に入ってきた、という偶然のため、彼女は死んだのである。

なぜ私は射ったか。女が叫んだからである。しかしこれも私に引き金を引かす動機ではあっても、その原因ではなかった。弾丸が彼女の胸の致命的な部分に当たったのも、偶然であった。私はほとんど狙わなかった。これは事故であった。しかし事故ならなぜ私はこんなに悲しいのか。

野を斜めに横切った川の橋へ来た。橋板を軍靴で踏む音が、ごとんごとんと耳に響いた。私はその低い欄(てすり)に腰を下ろし、流れる水に見入った。

水は月光を映して、燻銀(いぶしぎん)に光り、橋の下で、小さな渦をいくつも作っていた。渦は流水の*気紛(きまぐ)れに従って形を変え、消えては現れ、渦巻きながら流れていき、また引き戻されるように、*遡行してきた。

私はその規則あり気な、繰り返す運動を眺め続けた。一人になってから、こういう繰り返しが、いつも私の関心の中心であったのを思い出した。それは自然の中にあるように、人生の中にもあるべきであった。

[15]昨夜からの私の行為は、この循環の中にはなかった。しかし結果は、一人の比島の女を殺すことで終わった。あれは事

故であったが、しかしもし事故が起こったのが、私がその循環からはずれたためだったとすると、やはり私の責任である。

私は立ち上がり、昨日この橋を逆に渡ったときのように、銃を斜めに構えた。女を射ったときと同じく、16床尾を腰に当ててみた。

銃は月光に濡れて黒く光った。それは軍事教練のため学校へ払い下げたのを回収した17三八銃で、遊底蓋に菊花の紋が、バッテンで消してあった。私は嘔気を感じた。

すべてはこの銃にかかっていたのを、私は突然了解した。いくら女が*不要心で、私が理由なく山を降りたにしても、もしあのとき私の手に銃がなかったら、彼女はただ驚いて逃げ去るだけですんだであろう。

銃は国家が私に持つことを強いたものである。こうして私は国家に有用であると同じ程度に、敵にとっては危険な人物になったが、私が孤独な敗兵として、国家にとって無意味な存在となった後も、それを持ち続けたということに、あの19無辜の人が死んだ原因がある。

私はそのまま銃を水に投げた。ごぼっと音がして、銃はたちまち見えなくなった。孤独な兵士の唯一の武器を棄てるという行為をばかにしたように、あっけなく沈んだ。あとに水

12 **私はまた私の山に帰らねばならぬ。**(一八一・下13〜14) フィリピン戦線で結核に冒された「私」は軍隊を追い出された後、同様に隊を追い出されたが入院を許可されなかった他の兵士とともに軍の病院近くに座り込んでいたが、付近をアメリカ軍に砲撃されたことをきっかけに兵士たちと別れ、一人で山中をさまよい歩いた果てにこの村にたどり着いている。 13 **ドンゴロスの袋** 麻袋のこと。 14 **雑嚢** 雑多なものを入れるための布製のかばん。肩から掛ける。

15 **昨夜からの私の行為** 山中をさまよい歩いていた「私」が山林の向こうに教会の十字架を目撃した後、敵に殺される可能性が高いと知りながら人里に降りることを決意し、「死に向かっていく今の私は、繰り返していない」という「確信」を胸に抱きながら十字架の見える方向へ歩みを進め、村にたどり着いたという行為を指す。 16 **床尾** 銃の射撃をするときに肩に当てる部分。

17 **三八銃** 旧日本陸軍の主要小銃である三八式歩兵銃のこと。明治三十八(一九〇五)年に採用された。

18 **菊花の紋** 菊花をかたどった皇室の紋章。 19 **無辜** 罪のないこと。

問 **「中に薄黒く…貴重なものであった」から、「私」のどのような認識が分かるか。**

問 **ここでの「動機」と「原因」とは、何か。**

問 **なぜ、「こんなに悲しい」のか。**

問 **「私の責任である」とは、どういうことか。**

問 **どのようなことを「了解」したのか。**

＊気紛れ　遡行　不要心

は依然として燻銀に光り、同じ小さな渦を繰り返していた。

私を取り巻く野が、不意に姿を変えた。月光の行き渡った美しい夜景が、腰の剣一つを頼りに越えていかねばならぬ広さと映った。遠方から敵を斃しうる武器を失った私に、空間は拡がった。剣をもって行動しうる半径の無限の堆積として、迫ってくるように思われた。

私は後悔したが、諦めていた。一度川底の泥に埋まった銃を、再び使用可能の状態に戻す困難は別にしても、拾えばまた棄てるほかはないのを、私は知っていた。

私は歩き出した。月光の行き渡った野と靄の間を、前かがみに、せかせか歩いていった。林に入った。道に月光が散り敷き、木々のあわい*は、不規則な光と影に充たされていた。昨夜のように、山鳩(やまばと)がベートーヴェン[20]の交響曲の主題を二小節鳴いた。

私は孤独であった。恐ろしいほど、孤独であった。この孤独を抱いて、なぜ私は帰らなければならないのか。

この道は昨夜は二度と帰ることはあるまいと思っていた道であった。その道を逆に通ることは、通らないことより、いっそう奇怪であった。

山の畠(はたけ)[21]の何本かの芋に限られた私の生は、果たして生きるに値するだろうか。しかし死もまた死ぬに値しないとすれば、私はやはり生きねばならぬ。少なくともあの芋のあるところまで、私が歩くのを止めるものはこの世にはない。私には私自身の足取りがよく見えた。

さらにいくつか月に照らされた原を過ぎ、林をくぐり、流れを渡って、私は次第に私の丘に近づいた。最初の上りにかかるところの林は、よく繁(しげ)り暗かったが、次の林はまばらで明るかった。昨日の朝のように、木の幹の斑紋がよく見えた。再び黎明(れいめい)*の光であった。私は何者かに操られているように思った。

（「同胞」に続く）

＊あわい　黎明

20 ベートーヴェン　Ludwig van Beethoven 一七七〇年～一八二七年。ドイツの作曲家。

21 山の畠の何本かの芋に限られた私の生　山中でフィリピン人の畑に植えられた芋を発見した「私」は、それを雑嚢に入れている。

問「私を取り巻く…姿を変えた」とあるが、なぜか。

問「私自身の足取りがよく見えた」とは、どういうことか。

問「何者かに操られている」とは、どういうことか。



大岡昇平（おおおか しょうへい） 明治四十二（一九〇九）年～昭和六十三（一九八八）年。作家・評論家・フランス文学研究者。東京都の生まれ。戦争末期に招集され、フィリピンで捕虜となり敗戦を迎えた。『俘虜記』を発表後、広汎な教養や知的好奇心で恋愛・歴史・推理小説や評論・翻訳など旺盛な執筆活動を展開し、生涯を通じてアジア太平洋戦争に向き合い続けた。『武蔵野夫人』『花影』『レイテ戦記』『中原中也』など。本文は『野火・ハムレット日記』（昭和六十三（一九八八）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1「私」は現地の女性を殺してしまったことを、どのように受け止めようとしているか、まとめてみよう。

2「私」が緊迫した場面で「ドストエフスキー」（一八一・上7）を思い出したり、彷徨している場面で「ベートーヴェン」（一八四・上13）を思い出したりするのはなぜか、考えてみよう。

3「私」の「孤独」とは、どのようなものか。本文中での語例を抜き出し、「国家」と対比しながら考えてみよう。

❖言葉と表現

1「戦場では殺人は日常茶飯事にすぎない」（一八二・上21）のような、「私」から離れた一文が差し挟まれることには、どのような効果があるか、考えてみよう。

❖言語活動

1 レイテ島の歴史やレイテ島での戦いについて、調べてみよう。

2 殺される女性と、逃げていく男性のそれぞれの視点から、この小説で描かれた世界を語り直してみよう。

転移する記憶

岡　真理（おか　まり）

初出『〈思考のフロンティア〉記憶／物語』平成十二（二〇〇〇）年二月

〈出来事〉の記憶は、他者によって、すなわち〈出来事〉の外部にある者たちによって分有されなければならない、何としても。集団的記憶、歴史の言説を構成するのは、〈出来事〉を体験することなく生き残った者たち、他者たちであるのだから。これらの者たちにその記憶が分有されなければ、〈出来事〉はなかったことにされてしまう。起こらなかったことにされてしまう。その〈出来事〉を生きた者たちの存在は、他者の記憶の彼方（かなた）、「世界」の外部に抛擲（ほうてき）[1]され、歴史から忘却される。

〈出来事〉の記憶が――〈出来事〉の記憶に媒介されて〈出来事〉それ自身が――他者に分有されねばならないとしたら、それは何としても、語られねばならない。〈出来事〉の外部に生きる他者たちへ至る道筋、回路を私たちはつくり出さなくてはならない。それは、今ある世界とは別の世界を私たちが創り、生きるためだ。

だが、私が論じてきたのは、〈出来事〉の表象不可能性[2]という問題、すなわち〈出来事〉は言語化できないということであったはずだ。〈出来事〉が言葉で再現されるなら、必ずや、再現された「現実」の外部にこぼれ落ちる〈出来事〉の余剰があること、〈出来事〉とは常にそ

1 **抛擲**　投げ捨てること。

問 **「別の世界」とは、どのような世界か。**

2 **表象**　知覚により意識に現れる外的対象の像。

のような、ある過剰さをはらみ持っており、その過剰さこそが〈出来事〉を〈出来事〉たらしめている、ということではなかっただろうか。そして、〈出来事〉の暴力を現在形で生きる者たちは、そうであるがゆえに、それについて語る言葉を持ちえなかったのではなかっただろうか。

しかし、それでもなお——あるいは、そうであるからこそ——語りえない〈出来事〉は、語られねばならない。〈出来事〉の記憶が他者と分有されるために。そして、そのためには、〈出来事〉の記憶は、他者によって語られねばならない。自らは語りえない、その者たちに代わって。

他者による表象の暴力ということが言われる。〈出来事〉の記憶が他者に分有されることなく、〈出来事〉の記憶とそれを生きる者たちの存在が「世界」の外部に打ち捨てられてきたことそれ自体が、言ってみれば、それらの〈出来事〉が他者によって一方的に位置づけられ、語られてきたということ、つまり、この他者による一方的な表象という暴力の結果でもある。だが、他者による表象の暴力というものを私たちが深く認識するということは、私たちが〈他者〉について語ることを自らに対して徹底的に禁欲し、当事者にそれを語らせる、ということとは違うのではないか。当事者が語る必要はない、と言いたいのではない。そうではなく、当事者が語るということが、もし、当事者にその〈出来事〉について自ら語る場や機会を与え、当事者自身の言葉によって、私たちには窺い知れぬ、当事者しか知らない〈出来事〉の〈真実〉が開

＊分有　言説　媒介　余剰

示されるのを私たちがこちら側で拝聴するということだとしたら、それは、〈出来事〉の記憶の分有ということとは違うのではないか、と思うのだ。

〈出来事〉を体験し、その〈出来事〉の内部にいたがゆえに、〈出来事〉の暴力を現在なお生き続けているがゆえに、それについて語りえない者たちがいる。あるいは、虐殺という〈出来事〉のように、その暴力をその身で十全に体験した者、すなわち死者は、死者であるがゆえにもはや、自らが被ったその暴力、その〈出来事〉について証言することはできない。だからこそ、他者が語らねばならないのではないか。他者が――〈出来事〉の外部にあった第三者が――証言しなくてはならないのではないか。だが、それは、語りえない者たちに代わって、その〈出来事〉をいかようにも表象してよい、ということでは断じて、ない。言葉では語りえないはずのその〈出来事〉について語ろうとする私たちが、「語りうる者」として振る舞うとしたら、その瞬間に私たちは〈出来事〉を裏切ることになるだろう。表象不可能な〈出来事〉を表象すること、語りえない〈出来事〉について語ること、それは何よりもまず、〈出来事〉のその語りえなさこそを証すものでなくてはならないのではないか。

だが、そのような語りとは、いかにしたら可能だろうか。

他者による〈出来事〉の分有を狂おしく欲する者たち、〈出来事〉の内部に生きる者たち――〈出来事〉の暴力を現在形でなお生きる者たちのことであり、また、死者たちのことでも

問「違う」とあるが、なぜか。

問「裏切ることになる」のは、なぜか。

3『死者たちの声』　一九九五年、放送。

4 大岡昇平　一八五ページ参照。

5『レイテ戦記』　太平洋戦争に関する戦記文学の記念碑的大作。レイテ島における日米両軍の死闘を膨大な資料や取材により再構築したもの。昭和四十六（一九七一）年刊。

6 フィリピン　一七九ページ注2参照。

ある――彼らが〈出来事〉を領有することはできない。むしろ、〈出来事〉が彼らを領有している。あるいは、言葉では語りえない*〈出来事〉とはそもそもそのようなもの、人が〈出来事〉を領有するのではなく、〈出来事〉が人を領有する、そうしたものなのではないだろうか。だとすれば、そのような〈出来事〉を表象する物語とは、人が〈出来事〉を領有するのではなく、〈出来事〉が人を領有するというまさにそのことを、他者と分有しうるようなものでなくてはならないことになるだろう。

『死者たちの声』[3]と題するテレビのドキュメンタリー番組を見たことがある。作家大岡昇平[4]の『レイテ戦記』[5]を題材に、フィリピン、[6]レイテ島[7]における戦場の記憶を描いた作品である。『レイテ戦記』における大岡の叙述を縦糸[8]に、レイテ戦を生き残った日米の元兵士たちの証言、そして島の住民たちの証言を横糸[9]に織り込みながら番組は構成されている。

レイテ島リモン峠[10]の決戦――あるアメリカ人元軍曹[11]の回想によれば、彼の兵歴の中で最も過酷を極めた戦闘であったというその闘いについて、別の、八十歳になるアメリカ人元大尉[12]は、日本から訪れた日本人の取材班に、壕(ごう)[13]に降り注ぐ雨をよけるために日本兵の死体を引きずってきて自分の壕に渡し、屋根にして夜を明かした記憶を語る。

物量にものを言わす米軍に対し、弾薬も底をついた日本兵は、敵軍を驚かすために英語で叫び声を上げながら突撃した。元大尉は語る。突撃してきた日本兵たちの一人がこう叫んだのだ

7 レイテ島　一七九・一八〇ページ参照。

8 縦糸　ここでは主要な筋書きを指す。

9 横糸　ここでは主要な筋書きに付け加えることで作品に厚みを持たせるような部分を指す。

10 リモン峠の決戦　昭和十九年十二月、レイテ島西部からきた日本軍とレイテ湾側から西進した米軍が一か月に及ぶ激戦を繰り広げた。

11 軍曹　旧日本陸軍の下士官の一つ。

12 大尉　軍隊における将校の階級の一つ。

13 壕　空堀。身を隠す障壁のない平地で通路状に掘った穴。

＊領有

という。「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース！」(Hell with Babe Ruth[14]「ベイブ・ルースといっしょに地獄に落ちやがれ」)と。ベイブ・ルースとはもちろん、アメリカのあの有名な野球選手のことだ。だが、どうしてベイブ・ルースなのだろう、とその老年の元大尉はいぶかしがる。「ヘル・ウィズ・ルーズベルト」[15]なら分かるのだが、と言って。

戦場の、頂点を迎えた戦闘のただ中で、彼が唐突に出くわした自国の野球選手の名。死に向かって突入してくる日本兵の口から発せられたその言葉。彼はその出来事に、何とか合理的な理由をつけようとする。恐らく日本人にとっては、合衆国の人間の中でベイブ・ルースが最も有名なアメリカ人だったのだろう、そう彼は説明する。だが、彼自身が、自分のその説明に納得していないのではないか。納得していたなら、なぜ、そのような説明をあえてする必要があるだろう。

戦後五十年たって、あの出来事の記憶を分有するために彼の前に現れた日本人に向かって、そのアメリカ人の元大尉が、日本兵が叫んだその言葉を語り伝える。まるで、その言葉が、その日本兵があの戦場にわれ知らず残していった、アメリカ人の元大尉がそれを自分のものとして記憶の中に領有してしまうことをためらわせる何かであるかのように。そして、その何かを、まるで形見分けするかのように日本の取材班に手渡す。

突撃に際して日本兵が次々に英語を叫んだのは、それが「突撃」であることを敵兵に理解させ、物量に勝るアメリカ兵に少しでも動揺をもたらそうとしたためであったという説明が、そ

14 ベイブ・ルース Babe Ruth 本名 George Herman Ruth 一八九五年～一九四八年。アメリカのプロ野球選手。通算七一四本の本塁打記録を残した。

のあと元日本兵の証言によって紹介される。「突撃」であることを理解させるために、今生起している出来事のその「意味」を伝えるために、あえて、他者の言語で語られたその言葉。ルーズベルトなら分かるのだがと、元大尉は言う。そう、確かにそうだろう。そして、日本兵があのとき発した言葉がもし、ルーズベルトであったなら、元大尉は五十年後、果たしてその言葉を記憶していただろうか。それがルーズベルトであったなら、その言葉は、そのとき起きていた出来事の意味をこのうえなく明確に説明するものとして、彼はその意味を理解していただろう。言葉は透明なものとなって、出来事とその意味を無媒介的に媒介する。だが、透明であるがゆえにその言葉は、記憶の中に何の痕跡も残さなかったのではないか。

「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」……出来事の意味を考えようとすると突然、その言葉が、言葉というものの物質性、その不透明さをあらわにして、思考をつまずかせずにはおかない。その出来事の意味を理解すること、その出来事を完結した物語として、彼が領有するのをその言葉は拒む。

なぜ、ベイブ・ルースなのか。「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」――合理的な説明のつかないその言葉が、戦後五十年間、日常のふとした折々に、彼の脳裡（のうり）によみがえっていたのかどうか、それは分からない。ただ、一つだけ確かなことは、半世紀後、その戦闘について問われたとき、あのとき聴いた日本兵のその声が彼に回帰*したということだ。「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」……日本兵のその言葉を、彼は繰り返す。彼が決して領有することのできない言

15 ルーズベルト　Franklin Delano Roosevelt 一八八二年～一九四五年。アメリカ合衆国第三十二代大統領。一九四一年、第二次世界大戦参戦。

問「ヘル・ウィズ・ルーズベルト」なら分かる」のは、なぜか。

問「透明なもの」とは、どういうものか。

＊回帰

葉。自分のものにはなしえない言葉。しかし、自分にとりついて自分を放さないその言葉。記憶の中に落ち着く先を持たない〈出来事〉。

「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」……死に向かって突撃したその瞬間、なぜ、そんな言葉が口からこぼれ出たのか、当の日本兵自身にも分かってはいなかったかもしれない。なぜ、ベイブ・ルースなのか。だが、ベイブ・ルースというその名とともに、その峠でそのとき、一人の日本兵が、その不条理な死を今まさに死のうとしていた、その〈出来事〉の記憶が——そのとき彼が何を考え何を感じ、何を思っていたか、それは依然として説明のつかない〈出来事〉の暗い闇の中に残したまま——私たちに回帰する。〈出来事〉というもののまさにその余剰部分、「物語」にぽっかりと空いた真っ暗な、底知れぬ開口部の在りかを指し示しているかのように。

「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」——それはいったい誰の声なのだろうか。「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」と、何かにとりつかれたように私が今、繰り返し書くとき、語っているのは誰なのか。私、なのだろうか？　それとも、私の記憶の中のあの元大尉なのか？　それとも、あの日本兵だろうか？　それとも、あの日本兵の中の彼自身も知らない何事か、もしかしたら〈出来事〉それ自身なのではないか？「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース」というその言葉は、〈出来事〉の過剰としての表象不能な〈出来事〉の存在を指し示しながら、〈出来事〉の記憶を他者へと転移させていく。

問「落ち着く先を持たない」とは、どういうことか。

問「〈出来事〉それ自身」とは、どのようなことか。



岡真理（おか まり） 昭和三十五（一九六〇）年～。アラブ文学者。東京都の生まれ。パレスチナ問題に深い関心を持ち、「難民」を近代の思想の問題として捉え直すなど、自身の取り組みを「思想としてのパレスチナ」と呼び、文学的表象を通じてパレスチナ問題を研究している。著書に『彼女の「正しい」名前とは何か』『アラブ、祈りとしての文学』『ガザに地下鉄が走る日』などがある。本文は『記憶／物語』（平成十二（二〇〇〇）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 冒頭で「〈出来事〉の外部にある者」（一八六・1）によって「集団的記憶、歴史の言説を構成する」（一八六・2）必要性が説かれているが、具体的にどのような方法が紹介され、また、試みられているか、考えてみよう。

2 ベイブ・ルースについて調べ、日本兵が突撃しながら「ヘル・ウィズ・ベイブ・ルース！」（一九〇・1）と叫んだ〈出来事〉について、それぞれ矛盾するような複数の理由を想像してみよう。

3 本文で紹介されたドキュメンタリーの概要から、表象不可能な〈出来事〉についてどのような広がりを想像することができるか。大岡昇平『レイテ戦記』を調べたうえで考えてみよう。

❖言葉と表現

1 本文は、最初に抽象的な語句で問題提起し、続いて印象深い具体例を示す構成となっているが、どのような効果を期待していると考えられるか、話し合ってみよう。

❖言語活動

1 表象不可能な〈出来事〉として考えられることを、身近なことから近年のニュース、歴史的な問題まで含めて調べ、お互いに例示し、話し合ってみよう。

◆戦争という〈出来事〉を伝える
――どのような視点から語り継ぐのか――

この単元では、現場での見聞によるノンフィクションや、時期・場所・視点・語り方が異なる二つの小説を通して、戦争という事象を捉える方法について視野を広げた。また、そうした〈出来事〉を再現することの難しさや、記憶の分有に関わることの重要性を学んできた。

課題 当事者の証言や取材記事、戦争を扱った作品の視点や語り方について、一つ一つ事実確認をしながら考察し、私たち自身が戦争という〈出来事〉を考え伝えていく際に有効な方法を実践してみよう。

1 ソマリア紛争、ミャンマーの少数民族の迫害、原爆症や被爆をめぐる問題について、それぞれの経緯と現状を調べてみよう。その上で、そうした紛争や戦争由来の状況をノンフィクションや小説を通して表現することには、それぞれどのような効果があるか考えてみよう。

2 『空缶』『野火』は一人称の小説であるが、視点や語り方について具体的に比較し、それぞれどのような効果に結び付いているのか、考えてみよう。

3 戦争にまつわる記事や作品で特に印象に残ったものをそれぞれ持ち寄り、その理由について、以下を参考にしながら話し合ってみよう。

① 登場人物と、その戦争が起きた時期からの距離
② 語り手の立場と、その戦争による現代への影響
③ その戦争における暴力の語り方や描き方
④ 私たちと、その戦争との関係性

4 戦争についての意見を伝えるためには、どのような視点で語ることが必要であるか。岡真理の〈出来事〉についての考え方を参考にしながら、不特定多数を読者に想定した記事やコラムを書いてみよう。その際、事実を重視する資料に基づく段落と、小説や映画などの作品に基づく段落を効果的に組み合わせること。

1 都市と移動

◇作品に表れている登場人物のものの見方や感じ方を、地理的特色や時代背景を踏まえて解釈する。
◇さまざまな小説に関連のある「場所」について調べ、その「場所」が作品にどのような影響を与えているか考える。

本を読む　蜂飼耳
コラム　本を読む楽しみ　梶井基次郎
檸檬
文学の窓　陰翳礼讃（谷崎潤一郎）
下町　林芙美子
歩道橋の魔術師　呉明益／天野健太郎訳
都市は／を語る　石田英敬
単元の言語活動1

本を読む

蜂飼耳

二十一世紀に残したい五冊は、というアンケートがあったとき、迷いなく取り上げた一冊に、長谷川時雨[1]の『旧聞日本橋』[2]がある。昭和初期、例えば林芙美子[3]、平林たい子[4]、中条百合子[5]、山川菊栄[6]、矢田津世子[7]などに発表の機会を与えた雑誌『女人芸術』[8]だが、その主宰者でもあり戯曲作家でもあった長谷川時雨の回想録だ。『女人芸術』の埋め草[9]として書き始められた。

東京・日本橋で長谷川時雨が産声を上げたのは明治十二年。つまりその少女期、周りには

初出『図書新聞』平成十五（二〇〇三）年十月

1 **長谷川時雨**　一八七九年～一九四一年。劇作家・小説家。女性の地位向上の運動を率いた。

2 **『旧聞日本橋』**　明治初年の日本橋界隈の風俗・世態人情を写した自伝的回想。昭和十（一九三五）年刊。

3 **林芙美子**　二二七ページ参照。

江戸の空気がまだまだ残っていた。江戸生まれの人たちが息をしていた。その頃の生活や、さまざまな出来事を思い出し、鮮やかに描いた作品が『旧聞日本橋』だ。子供の目だけれど、子供の目でない。小さな大人の目、と言えばよいかもしれない。長じてなお忘れることのない生活の細部、音や匂いや、人々の顔つきや仕草など、深い思いを込めて描かれる。風俗の記録という視点から価値をみる読者もいると思うけれど、私にとってはまず、楽しそうに書いてあるから楽しく読める一冊、なのだ。

九歳の時雨は、二弦琴[10]のお師匠さんのところへ通う。お師匠さんのうちには「万年青[11]の芽分けが幾鉢も窓に並べてあって、鉢には鰻の串を刺し、赤い絹糸で万年青が行儀悪く育たないように輪を廻らしてあった」。お師匠さんは、色の浅黒い大きな顔で、鼻がすっと高く、剃った[12]眉毛は真っ青、大きな赤い口につやつやした茄子色の歯。そんなふうな女性のもとへ、少女の時雨は夏の日、日盛りを稽古に出かけていくが、いつもすぐ始まるとは限らない。時には待てども待てども、稽古は始まらない。

〈おしょさんが寝ていても、お客様があっても、髪結いさんが来ていても、お湯にいってき



『女人芸術』創刊当時の編集室風景
（左から２人目が長谷川時雨）

4 **平林たい子**　一九〇五年～一九七二年。小説家。
5 **中条百合子**　宮本百合子。一八九九年～一九五一年。小説家。中条は旧姓。
6 **山川菊栄**　一八九〇年～一九八〇年。婦人運動家・評論家。日本初の社会主義婦人団体「赤瀾会」を結成。
7 **矢田津世子**　一九〇七年～一九四四年。小説家・随筆家。
8 **『女人芸術』**　文芸同人誌。昭和三（一九二八）年創刊。多くの女性作家を育成した。
9 **埋め草**　雑誌などで空白を埋めるための短い文章。
問 **「江戸の空気がまだまだ残っていた」とは、どのようなことか。**
10 **二弦琴**　江戸時代後期に創作された二弦の琴。
11 **万年青**　ユリ科の多年草。常緑で鉢植えに適する。

てからでもお化粧が済んで、さあ始めましょうよと言われるまで、幾時間でも、待てば待つほどおとなしく喜んでいた。〉

●なぜそんなに待つことができたのか。その理由は「本」だった。「くさ双紙[13]の合巻[14]ものが、本箱に幾つあったかしれない」。それも、どこにでもあるようなのではなくて、手垢（てあか）のついていないきれいなもの、初版摺（ず）りばかり。今で言うとマンガに近い感覚だろうか、そんな絵入りの読み物がお師匠さんの家にはいくらでもあって、待たされるのは大歓迎だったのだ。時雨が大事に丁寧に見るので、感心したお師匠さんは秘蔵本を出してくれることもあるのだった。

鳥が枝にとまるように、本にとまったまま、動かない少女。書物を愛する少女。●その熱意の角度は誰かを思い起こさせる。例えば十一世紀半ばに書かれた『更級日記』[15]の作者、菅原孝標女（すがわらのたかすえのむすめ）[16]。「紫のゆかり」[17]（『源氏物語』）に触れて、その続きが読みたい読みたい読みたい、となる。上総（かずさ）[18]の田舎から京へ上ったばかりで、周囲の人たちはまだ都に慣れていない。なので、続きを見つけてくることができない。それでも何とか、と思い「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せ給（たま）へ」（日本古典文学大系）と「心の内に祈る」のだ。結局「をばなる人」（おばさん）が、かわいらしく育った姪（めい）のために、『源氏物語』をひとそろい用意した。

〈人もまじらず、木ちやう[19]の内にうち臥（ふ）してひき出でつつ見る心地、后（きさき）のくらひも何にかはせむ〉

誰にも邪魔されない読書の愉楽を語る『更級日記』。本があるから待たされても平気、とい

12 **剃った眉毛は真っ青…** 「茄子色の歯」は、お歯黒（歯を黒く染める化粧）を施した歯。江戸時代、眉を剃り、お歯黒にするのは既婚女性の証し。

問 **「おとなしく喜んでいた」とあるが、なぜか。**

13 **くさ双紙** 江戸時代の通俗的な絵入りの読み物。

14 **合巻もの** 文化年間（一八〇四年～一八一八年）以後に流行した草双紙の一種。

問 **「その熱意の角度」とは、何のことか。**

15 **『更級日記』** 平安時代の日記文学。

16 **菅原孝標女** 一〇〇八年～没年未詳。

17 **「紫のゆかり」** 『源氏物語』若紫（わかむらさきのまき）巻などを指す。

18 **上総** 旧国名。現在の千葉県の中央部。

19 **木ちやう** 几帳。

う『旧聞日本橋』。読むことの好きな人はどの時代にもいる。そういう人が、読むことが好きだ、好きだった、と書き残す。はっきりと書き残す。そのほかのこととともに書き残す。だから、読むときは一人、書くときも一人だが、それはいつの間にか見知らぬ誰かの前に広げられる出来事となるのだ。世の中の情報や通信の速度が変わっても、人がものを読む速さは、そんなに変わるものではない。それは心臓の拍子と同じように、コトコトコト、と続いていく。

5

問 「それ」とは、何を指すか。



蜂飼　耳（はちかい みみ）　昭和四十九（一九七四）年〜。詩人・小説家。神奈川県の生まれ。詩・小説・エッセイ・児童文学など幅広い分野で活躍。詩集『いまにもうるおっていく陣地』で第五回中原中也（なかはらちゅうや）賞を受賞。作品に『食うものは食われる夜』『顔をあらう水』（詩集）『空席日誌』『おいしそうな草』（エッセイ）『紅水晶』（小説）『のろのろひつじとせかせかひつじ』（絵本）などがある。本文は『孔雀（くじゃく）の羽の目がみてる』（平成十六（二〇〇四）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「子供の目だけれど、子供の目でない」（一九六・3〜4）とあるが、なぜそのようなことが言えるのか、考えてみよう。

2「鳥が枝にとまるように」（一九七・8）とは、誰のどのような状態を表しているか、考えてみよう。

3「読むときは一人、書くときも一人だが、それはいつの間にか見知らぬ誰かの前に広げられる出来事となる」（一九八・3〜4）とはどのようなことか、説明してみよう。

◇言葉と表現

1「埋め草」のように「草」で終わるが、植物を表していない語を探してみよう。

◇言語活動

1 今までに読んだ小説の中で印象深かったものについて発表し合い、質疑応答や意見交換をすることで、新しい小説の魅力に出会ってみよう。また、発表を聞いて読みたくなった本を読んでみよう。

本を読む楽しみ

読書が好きな人のエッセイを読むと、そのすばらしい体験に自分も参加したく思うものだが、実は、読むことは楽しいばかりの行為ではない。

文学を読むことは、そもそも時間がかかる。過去は人間が乗り越えて来たものだから、現在までに達成したことはまとめて基礎知識とし、その先を試行錯誤するなら進歩の実感は得られる。だが文学については、文学史の年表だけを覚えるだけでは知ったことにならない。では作品を一つ一つ読むとして、過去にこんなことが、こんな書き方があったと知っても、進歩の実感は得られない。なぜ読むのだろうか？

過去の文学作品に必ず共感できるとは限らない。だがそれこそ、現在の常識を相対化するきっかけとなる。何回読んでも別様の解釈を誘う名作というものはあるだろう。テーマの深い考察だけでなく、言葉の組み合わせの技術によるものである。しかし一方で、すでに書かれた膨大な文学作品の中にはあまり読み返されないものがある。それらが忘れられたのは、書かれた当時の歴史的・社会的文脈が変わり、問題がすでに解決されたからなのかと問うてみよう。もしかすると、問題含みの記録や文学を見ずに、つまりは特定のものが存在しないかのように過ごしていただけなのかもしれないからである。だとしたら、自らが意識せずに排除や差別を繰り返していることにもなる。ここから振り返れば、名作と言われるものについても、疑いなしに読み継ぐだけなら、過去にそれが評価されたときの、現在からすれば不適切な価値観をも継承している場合があると気づく。

文学を通じて自分が何かを見ないふりをしてきたかもしれないと考えることは、痛みを伴うだろう。だがそうあってこそ、新たに入手した価値観と共に過去の作品が発掘され、自己の変革によって過去は現在を形成する。中には、作中人物が道徳的には不適切なふるまいをしていると思える場合もある。だが、半ばは虚構とは言え、そのようなことが起きうる社会の構造を考え、巻き込まれてきた人間の心の痛みや、だからこそ生き延びるために逸脱としてしか表現されなかった想像力の質を楽しもう。もしも現在の常識が苦しいなら、そこから抜け出すヒントになるかもしれない。

読むことは、それ自体が試行錯誤であり、過去の時間を生き直すように時間がかかる。だが、後ろ向きに見えて前に進む行為である。読むことが好きな人は恐らく、こうした困難な思索に向き合うことも含めて、読むことを楽しんでいる。

檸檬（れもん）

梶井基次郎（かじいもとじろう）

初出『青空』大正十四（一九二五）年一月

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終抑えつけていた。焦燥と言おうか、嫌悪と言おうか——酒を飲んだ後に宿酔（ふつかよい）があるように、酒を毎日飲んでいると宿酔に相当した時期がやってくる。それが来たのだ。これはちょっといけなかった。結果した肺尖（はいせん）[1]カタルや神経衰弱がいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその不吉な塊だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節も辛抱がならなくなった。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけていっても、最初の二、三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私を居たたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街を浮浪し続けていた。

なぜだかその頃私はみすぼらしくて美しいものに強く引きつけられたのを覚えている。風景にしても壊（くず）れかかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋がのぞいていたりする裏通りが好きであった。雨や風がむしばんでやがて土に帰ってしまう、といったような趣のある街で、土塀が崩れていたり家並みが傾きかかっていたり——勢いのいいのは植物だ

問 「えたいの知れない不吉な塊」が生じる原因は、何だと考えられるか。

1 肺尖カタル　肺尖（肺の上部の尖（とが）った部分）の炎症。また、肺結核の初期をいう。

けで時とするとびっくりさせるような向日葵があったりカンナが咲いていたりする。

時々私はそんな道を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分が来ているのだ——という錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行ってしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な布団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。願わくはここがいつの間にかその市になっているのだったら。——錯覚がようやく成功し始めると私はそれからそれへ想像の絵の具を塗りつけてゆく。何のことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになった。花火そのものは第二段として、あの安っぽい絵の具で赤や紫や黄や青や、さまざまのしま模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱に詰めてある。そんなものが変に私の心をそそった。

それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打ち出してあるおはじきが好きになったし、南京玉が好きになった。またそれをなめてみるのが私にとって何とも言えない享楽だったのだ。あのびいどろの味ほどかすかな涼しい味があるものか。私は幼いときよくそれを口に入れては父母に叱られたものだが、その幼時の甘い記憶が大きくなって落ちぶれた私によみがえってく

2 **カンナ**　カンナ科の多年草。高さ一～二メートル。夏、紅色や黄色の花を付ける。

3 **何百里**　「里」は距離の単位。一里は約四キロメートル。

問 **「花火」とあるが、「私」は「花火」の何に惹きつけられたのか。**

4 **中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき**　いずれも花火の種類の名称。

5 **南京玉**　陶製やガラス製の穴の開いた小さな玉。糸を通しつなげて飾りにする。

＊ **享楽**

るせいだろうか、全くあの味にはかすかな爽やかな何となく詩美といったような味覚が漂っている。

察しはつくだろうが私にはまるで金がなかった。とはいえそんなものを見て少しでも心の動きかけたときの私自身を慰めるためにはぜいたくということが必要であった。二銭や三銭のもの——といってぜいたくなもの。美しいもの——といって●無気力な私の触角にむしろこびてくる*もの。——そういったものが自然私を慰めるのだ。

生活がまだむしばまれていなかった以前私の好きであった所は、例えば丸善[6]であった。赤や黄のオードコロン[7]やオードキニン[8]。洒落(しゃれ)た切子(きりこ)細工[9]や典雅なロココ[10]趣味の浮き模様を持った琥珀(こはく)色や翡翠(ひすい)色の香水瓶。煙管(きせる)[11]、小刀、石鹸(せっけん)、煙草(たばこ)。私はそんなものを見るのに小一時間も費やすことがあった。そして結局一等いい鉛筆を一本買うくらいのぜいたくをするのだった。しかしここももうその頃の私にとっては重苦しい場所にすぎなかった。書籍、学生、勘定台、これらは皆借金取りの亡霊のように私には見えるのだった。

ある朝——その頃私は甲の友達から乙の友達へというふうに友達の下宿を転々として暮らしていたのだが——友達が学校へ出てしまったあとの空虚な空気の中にぼつねんと一人取り残された。私はまたそこからさまよい出なければならなかった。何かが私を追い立てる。そして街から街へ、



切子細工

問 **「無気力な私の触角にむしろこびてくる」とは、どのようなことか。**

6 丸善 洋書・輸入雑貨を扱っていた店。

7 オードコロン eau de Cologne（フランス語）。香水の一種。オーデコロン。

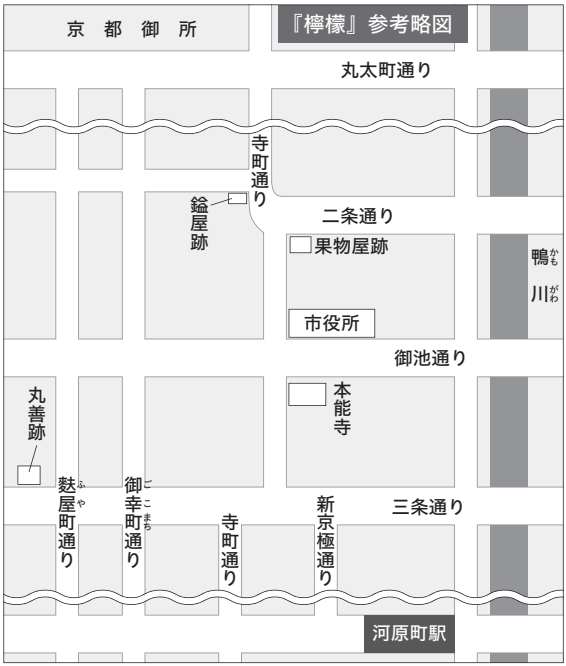
8 オードキニン eau de quinine（フランス語）。養毛剤の一種。

9 切子細工 ここでは、切り込み細工をしたガラス器。

10 ロココ rococo（フランス語）。十八世紀、フランスのルイ十五世時代に流行した装飾様式をいう。

11 煙管 刻みたばこを吸う道具。

先に言ったような裏通りを歩いたり、駄菓子屋の前で立ち止まったり、乾物屋の干しえびや棒鱈[12]や湯葉[13]を眺めたり、とうとう私は二条のほうへ寺町[14]を下がり、そこの果物屋で足を止めた。ここでちょっとその果物屋を紹介したいのだが、その果物屋は私の知っていた範囲で最も好きな店であった。そこは決して立派な店ではなかったのだが、果物屋固有の美しさが最も露骨に感ぜられた。果物はかなり勾配の急な台の上に並べてあって、その台というのも古びた黒い漆塗りの板だったように思える。何か華やかな美しい音楽の快速調[15]の流れが、見る人を石に化したというゴルゴン[16]の鬼面——的なものを差しつけられて、あんな色彩やあんなボリュウム[17]に凝り固まったというふうに果物は並んでいる。青物もやはり奥へゆけばゆくほどうずたかく積まれている。——実際あそこのにんじん葉の美しさなどはすばらしかった。それから水に漬けて



12 **棒鱈**　真ダラを三枚におろし、よく洗って日光で乾燥させた食品。

13 **湯葉**　豆乳を煮て表面に出来た皮膜をすくい取ったもの。ここでは、乾燥させた干し湯葉。

14 **寺町を下がり**　寺町通りを（二条通りのほうへ）南下する、という意。

15 **快速調**　allegro（イタリア語）。アレグロ。楽曲の速度用語の一つ。明るく軽快に速く奏せよ、という意。

16 **ゴルゴン**　Gorgōn（ギリシャ語）。ギリシャの神話に出てくる三人姉妹の怪物の総称。

17 **ボリュウム**　volume（英語）。量。量感。ボリューム。

＊ こびる　うずたかい

ある豆だとかくわいだとか。[18]

またそこの家の美しいのは夜だった。寺町通りはいったいににぎやかな通りで——といって感じは東京や大阪よりはずっと澄んでいるが——飾り窓の光がおびただしく街路へ流れ出ている。それがどうしたわけかその店頭の周囲だけが妙に暗いのだ。もともと片方は暗い二条通りに接している街角になっているので、暗いのは当然であったが、その隣家が寺町通りにある家にもかかわらず暗かったのがはっきりしない。しかしその家が暗くなかったらあんなにも私を誘惑するには至らなかったと思う。もう一つはその家の打ち出した廂なのだが、その廂が目深にかむった帽子の廂のように——これは形容というよりも、「おや、あそこの店は帽子の廂をやけに下げているぞ。」と思わせるほどなので、廂の上はこれも真っ暗なのだ。そう、周囲が真っ暗なため、店頭につけられた幾つもの電灯が*驟雨のように浴びせかける*絢爛は、周囲の何者にも奪われることなく、ほしいままにも美しい眺めが照らし出されているのだ。裸の電灯が細長い螺旋棒をきりきり目の中へ刺し込んでくる往来に立って、また近所にある[19]鎰屋の二階の硝子窓を透かして眺めたこの果物店の眺めほど、その時々の私を興がらせたものは寺町の中でもまれだった。

その日私はいつになくその店で買い物をした。というのはその店には珍しい檸檬が出ていたのだ。檸檬などごくありふれている。がその店というのもみすぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋にすぎなかったので、それまであまり見かけたことはなかった。いったい私は

18 **くわい**　オモダカ科の多年草。水辺に自生し、地中の球茎を食用にする。

19 **鎰屋**　二条寺町の南西の角にあった和洋菓子店。二階は喫茶室になっていた。

あの檸檬が好きだ。[20]レモンエロウの絵の具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰まった紡錘形の格好も。——結局私はそれを一つだけ買うことにした。それからの私はどこへどう歩いたのだろう。私は長い間街を歩いていた。始終私の心を抑えつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか緩んできたとみえて、私は街の上で非常に幸福であった。あんなにしつこかった憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる——あるいは不審なことが、逆説的な本当であった。それにしても心というやつは何という不可思議なやつだろう。

その檸檬の冷たさは例えようもなくよかった。その頃私は肺尖を悪くしていていつも身体に熱が出た。事実友達の誰彼に私の熱を見せびらかすために手の握り合いなどをしてみるのだが、私の手のひらが誰のよりも熱かった。その熱いせいだったのだろう、握っている手のひらから身内にしみとおってゆくようなその冷たさは快いものだった。

私は何度も何度もその果実を鼻に持っていっては嗅いでみた。それの産地だというカリフォルニア[21]が想像に上ってくる。漢文で習った『売柑者之言』[22]の中に書いてあった「鼻を撲つ」という言葉が切れ切れに浮かんでくる。そして深々と胸いっぱいに匂やかな空気を吸い込めば、ついぞ胸いっぱいに呼吸したことのなかった私の身体や顔には温かい血のほとぼりが昇ってきて何だか身内に元気が目覚めてきたのだった。……

実際あんな単純な冷覚や触覚や嗅覚や視覚が、ずっと昔からこればかり探していたのだと言

問 「あるいは不審なことが、逆説的な本当であった」とは、どのようなことか。

20 **レモンエロウ** lemon yellow（英語）。レモン・イエロー。

21 **カリフォルニア** アメリカ合衆国太平洋岸の州。

22 **『売柑者之言』** 明代初めの劉基作の文章。「鼻を撲つ」は文章中に「剖レ之、如ニ有レ煙撲ニ口鼻一」とあるのによる。

＊ 驟雨 絢爛 ほとぼり

いたくなったほど私にしっくりしたなんて私は不思議に思える――それがあの頃のことなんだから。

私はもう往来を軽やかな興奮に弾んで、一種誇りかな気持ちさえ感じながら、美的装束をして街を闊歩(かっぽ)*した詩人のことなど思い浮かべては歩いていた。汚れた手拭いの上へ載せてみたりマントの上へあてがってみたりして色の反映を量ったり、またこんなことを思ったり、

――つまりはこの重さなんだな。――

その重さこそ常々私が尋ねあぐんでいたもので、疑いもなくこの重さは全ての善いもの全ての美しいものを重量に換算してきた重さであるとか、思い上がった諧謔(かいぎゃく)*心からそんなばかげたことを考えてみたり――何がさて私は幸福だったのだ。

どこをどう歩いたのだろう。私が最後に立ったのは丸善の前だった。平常あんなに避けていた丸善がそのときの私にはやすやすと入れるように思えた。



大正初期頃の京都丸善

「今日は一つ入ってみてやろう。」そして私はずかずか入っていった。

しかしどうしたことだろう、私の心を満たしていた幸福な感情はだんだん逃げていった。香水の瓶にも煙管にも私の心はのしかかってはゆかなかった。憂鬱が立て込めてくる、私は歩き回った疲労が出てきたのだと思った。●私は画本の棚の前へ行ってみた。画集の重たいのを取り出すのさえ常に増して力がいるな！　と思った。しかし私は一冊ずつ抜き出しては見る、そして開けては見るのだが、*克明にはぐってゆく気持ちはさらに湧いてこない。しかも呪われたことにはまた次の一冊を引き出してくる。それも同じことだ。それでいて一度バラバラとやってみなくては気が済まないのだ。それ以上はたまらなくなってそこへ置いてしまう。以前の位置へ戻すことさえできない。私は幾度もそれを繰り返した。とうとうおしまいには日頃から大好きだった[23]アングルの橙色の重い本までなおいっそうの堪え難さのために置いてしまった。——何という呪われたことだ。手の筋肉に疲労が残っている。私は憂鬱になってしまって、自分が抜いたまま積み重ねた本の群を眺めていた。

以前にはあんなに私を引きつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に目をさらし終わって後、さてあまりに尋常な周囲を見回すときのあの変にそぐわない気持ちを、私は以前には好んで味わっていたものであった。……

「あ、そうだそうだ。」そのとき私は袂の中の檸檬を思い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積み上げて、●一度この檸檬で試してみたら。「そうだ。」

問「私は画本の棚の前へ行ってみた」とあるが、「私」はなぜ画本の前に行ってみたのか。

23 アングル　Jean Auguste Dominique Ingres　一七八〇年～一八六七年。フランスの画家。

問「一度この檸檬で試してみたら」とあるが、「私」は何を試そうとしているのか。

＊闊歩　諧謔心　克明

私にまた先ほどの軽やかな興奮が帰ってきた。私は手当たりしだいに積み上げ、また、慌ただしく崩し、また慌ただしく築き上げた。新しく引き抜いて付け加えたり、取り去ったりした。奇怪な幻想的な城が、そのたびに赤くなったり青くなったりした。

やっとそれは出来上がった。そして軽く躍り上がる心を制しながら、その城壁の頂に恐る恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見渡すと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の階調をひっそりと紡錘形の身体の中へ吸収してしまって、カーンと冴えかえっていた。私にはほこりっぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

不意に第二のアイディアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎょっとさせた。

――それをそのままにしておいて私は、何食わぬ顔をして外へ出る。――

私は変にくすぐったい気持ちがした。「出ていこうかなあ。そうだ出ていこう。」そして私はすたすた出ていった。

変にくすぐったい気持ちが街の上の私をほほえませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだったらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を熱心に追求した。「そうしたらあの気詰まりな丸善も木っ端みじんだろう。」

そして私は活動写真[24]の看板画が奇体な趣で街を彩っている京極[25]を下っていった。

24 **活動写真**　映画の旧称。
25 **京極**　京都市の地名。新京極の通称。



梶井基次郎（かじい もとじろう）　明治三十四年（一九〇一）年～昭和七（一九三二年）。小説家。大阪府の生まれ。旧制の第三高等学校在学中に肺疾にかかり、若くして没した。鋭い感受性で自他を凝視し、詩的な言語で表現した作品は、死後、高い評価を得ている。作品に『城のある町にて』『冬の蠅』『闇の絵巻』などがある。本文は『梶井基次郎全集 第一巻』（昭和四十一（一九六六）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1「時々私はそんな道を歩きながら、…という錯覚を起こそうと努める」（二〇一・2～3）とあるが、「私」は、なぜ仙台や長崎という土地への錯覚を求めているのか、考えてみよう。

2「つまりはこの重さなんだな」（二〇六・11）とあるが、「幸福な感情」に浸っている「私」は、檸檬の「重さ」から何を感じ取ったのか、考えてみよう。

3「黄金色に輝く恐ろしい爆弾」（二〇八・13～14）とあるが、檸檬を爆弾に見立てることができるのは、「私」が檸檬をどのようなものと考えているからか、考えてみよう。

❖言葉と表現

1「錯覚がようやく成功し始めると私はそれからそれへ想像の絵の具を塗りつけてゆく」（二〇一・7～8）では、どのような表現技法が用いられているか、考えてみよう。

2本文中にある「――」はどのような意味を持っているか、考えてみよう。

❖言語活動

1当時の「私」を「慰めたもの」と「かつて慰めたのにもう慰めないもの」をそれぞれ探し、どのような違いがあるのか、話し合ってみよう。

陰翳礼讃

谷崎潤一郎

京都に「W」という有名な料理屋があって、ここの家では近頃まで客間に電灯をともさず、古風な燭台[1]を使うのが名物になっていたが、今年の春、久しぶりで行ってみると、いつの間にか行灯[2]式の電灯を使うようになっている。いつからこうしたのかと聞くと、去年からこれにいたしました、蠟燭の灯ではあまり暗すぎるとおっしゃるお客様が多いものでございますから、よんどころなくこういうふうにいたしましたが、やはり昔のままのほうがよいとおっしゃるお方には、燭台を持ってまいりますと言う。で、せっかくそれを楽しみにして来たのであるから、燭台に替えてもらったが、そのとき私が感じたのは、日本の漆器の美しさは、そういうぼんやりした薄明かりの中に置いてこそ、初めて本当に発揮されるということであった。「W」の座敷というのは四畳半ぐらいのこぢんまりした茶席[3]であって、床柱や天井なども黒光りに光っているから、行灯式の電灯でももちろん暗い感じがする。が、それをいっそう暗い燭台に改めて、その穂のゆらゆらとまたたく陰にある膳や椀を見つめていると、それらの塗り物の沼のような深さと厚みとを持ったつやが、全く今までとは違った魅力を帯び出してくるのを発見する。そしてわれわれの祖先が漆という塗料を見いだし、それを塗った器物の色沢に愛着を覚えたことの偶然でないのを知るのである。友人サバルワル君[4]の話に、インドでは現在でも食器に陶器を使うことを卑しみ、多くは塗り物を用いるという。われわれはその反対に、茶事とか、儀式とかの場合でなければ、膳と吸い物椀のほかはほとんど陶器ばかりを用い、漆器というと、やぼくさい、雅味のないものにされてしまっているが、それは一つには、採光や照明の設備がもたらした「明るさ」のせいではないであろうか。事実、「闇」を条件に入れなければ漆器の美しさは考えられないと言っていい。今日では白漆[5]というようなものもできたけれども、昔からある漆器の肌は、黒か、茶か、赤であって、それは幾重もの「闇」が堆積した色であり、周囲を包む暗黒の中から必然的に生まれ出たもののように思える。派手な蒔絵[6]などを施したピカピカ光る蠟塗り[7]の手箱[8]とか、文台[9]とか、棚とかを見ると、いかにもケバケバしくて落ち着きがなく、俗悪にさえ思えることがあるけれども、もしそれらの器物を取り囲む空白を真っ黒な闇で塗りつぶし、太陽や電灯の光線に代えるに一点の灯明か蠟燭の明かりにしてみたまえ、たちまちそのケバケバしいものが底深く沈んで、渋い、重々しいものになる

であろう。いにしえの工芸家がそれらの器に漆を塗り、蒔絵を画くときは、必ずそういう暗い部屋を頭に置き、乏しい光の中における効果をねらったのに違いなく、金色を贅沢に使ったりしたのも、それが闇に浮かび出る具合や、灯火を反射する加減を考慮したものと察せられる。つまり金蒔絵は明るい所で一度にぱっとその全体を見るものではなく、暗い所でいろいろの部分がときどき少しずつ底光りするのを見るようにできているのであって、豪華絢爛な模様の大半を闇に隠してしまっているのが、言い知れぬ余情を催すのである。そして、あのピカピカ光る肌のつやも、暗い所に置いてみると、それがともし火の穂のゆらめきを映し、静かな部屋にも折々風の訪れのあることを教えて、そぞろに人を瞑想に誘い込む。もしあの陰鬱な室内に漆器というものがなかったなら、蠟燭や灯明の醸し出す怪しい光の夢の世界が、その灯のはためきが打っている夜の脈搏が、どんなに魅力を減殺されることであろう。まことにそれは、畳の上に幾すじもの小川が流れ、池水がたたえられているごとく、一つの灯影をここかしこに捉えて、細く、かそけく、ちらちらと伝えながら、夜そのものに蒔絵をしたような綾を織り出す。けだし食器としては陶器も悪くないけれども、陶器には漆器のような陰翳がなく、深みがない。陶器は手に触れると重く冷たく、しかも熱を伝えることが早いので熱い物を盛るのに不便であり、その上カチカチという音がするが、漆器は手ざわりが軽



京都の路地裏

く、柔らかで、耳につくほどの音を立てない。私は、吸い物椀を手に持ったときの、手のひらが受ける汁の重みの感覚と、生温かいぬくみとを何よりも好む。それは生まれたての赤ん坊のぷよぷよした肉体を支えたような感じでもある。吸い物椀に今も塗り物が用いられるのは全く理由のあることであって、陶器の入れ物ではあはいかない。第一、蓋を取ったときに、陶器では中にある汁の身や色合いが皆見えてしまう。漆器の椀のいいことは、まずその蓋を取って、口に持っていくまでの間、暗い奥深い底のほうに、容器の色とほとんど違わない液体が音もなくよどんでいるのを眺めた瞬間の気持ちである。人は、その椀の中の闇に何があるかを見分けることはできないが、汁がゆるやかに動揺するのを手の上に感じ、椀の縁がほんのり汗をかいているので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶ匂いによって口に含む前にぼんやり味わいを予覚する。その瞬間の心持ち、スープを浅い白ちゃけた皿に入れて出す西洋流に比べてなんという相違か。それは一種の神秘であり、禅味[10]であるとも言えなくはない。

　私は、吸い物椀を前にして、椀がかすかに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のような音を聴きつつこれから食べる物の味わいに思いをひそめるとき、いつも自分が三昧境[11]に引き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎる音に尾[12]上の松風を連想しながら無我の境に入るというのも、恐らくそれに似た心持ちなのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと言われるが、こういう場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると言おう。そうしてそれは、闇にまたたく蠟燭の灯と漆の器とが合奏する無言の音楽の作用なのである。かつて漱石[13]先生は『草枕』の中で羊羹の色を賛美しておられたことがあったが、そう言えばあの色などはやはり瞑想的ではないか。玉のように半透明に曇った肌が、奥のほうまで日の光を吸い取って夢みるごときほの明るさを含んでいる感じ、あの色合いの深さ、複雑さは、西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどはあれに比べるとなんという浅はかさ、単純さであろう。だがその羊羹の色合いも、あれを塗り物の菓子器に入れて、肌の色がかろうじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中に含むとき、あたかも室内の暗黒が一個の甘い塊になって舌の先でとけるのを感じ、ほんとうはそううまくない羊羹でも、味に異様な深みが添わるように思う。けだし料理の色合いはどこの国でも食器の色や壁の色と調和するように工夫されているので

あろうが、日本料理は明るい所で白っちゃけた器で食べては確かに食欲が半減する。たとえばわれわれが毎朝食べる赤味噌の汁なども、あの色を考えると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることが分かる。私はある茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあったが、いつもは何でもなく食べていたあのどろどろの赤土色をした汁が、おぼつかない蠟燭の明かりの下で、黒漆の椀によどんでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであった。そのほか醤油などにしても、上方では刺し身や漬け物やおひたしには濃い口の「たまり」を使うが、あのねっとりとしたつやのある汁がいかに陰翳に富み、闇と調和することか。また白味噌や、豆腐や、蒲鉾や、とろろ汁や、白身の刺し身や、ああいう白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第一飯にしてからが、ぴかぴか光る黒塗りの飯櫃に入れられて、暗い所に置かれているほうが、見ても美しく、食欲をも刺激する。あの、炊きたての真っ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から温かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がって、一粒一粒真珠のようにかがやいているのを見るとき、日本人なら誰しも米の飯のありがたさを感じるであろう。かく考えてくると、われわれの料理が常に陰翳を基調とし、闇というものと切っても切れない関係にあることを知るのである。

1 燭台　ロウソクを立てて明かりをともす台。
2 行灯　木や竹の枠に和紙を張り、内に油皿を置いて火をともす照明具。
3 茶席　炉が切ってあり、茶会を催すためのしつらいになっている座敷。
4 サバルワル君　インドの独立運動に携わり、大正四（一九一五）年に来日、佐藤春夫や井伏鱒二とも親交があった。
5 白漆　透明な漆に白い顔料を混ぜたもの。
6 蒔絵　漆器の表面に、金粉や銀粉、螺鈿などで絵模様を描く工芸。
7 蠟塗り　漆を塗った表面を鏡面のように磨く技法。
8 手箱　手回りの小道具などを入れる箱。
9 文台　書籍や短冊などを載せる小型の低い机。
10 禅味　世俗をはなれた枯淡な趣。
11 三昧境　ものごとに没頭している忘我の境地。
12 尾上　現在の兵庫県加古川市にある地名。謡曲「高砂」に出てくる尾上神社境内の松で知られる。
13 漱石先生　夏目漱石。一二一ページ参照。『草枕』は明治三十九（一九〇六）年発表。

谷崎潤一郎　明治十九（一八八六）年～昭和四十（一九六五）年。小説家。東京都の生まれ。語りを巧みに使いわけ、耽美的なものからミステリーまで幅広い作品を残した。『春琴抄』『細雪』など。『源氏物語』の現代語訳もある。初出『経済往来』昭和八（一九三三）年十二月・昭和九（一九三四）年一月。本文は『谷崎潤一郎全集 第二十巻』（昭和四十三（一九六八）年刊）によった。

下町（ダウン・タウン）

林芙美子（はやしふみこ）

風が冷たいので、りよは陽（ひ）の当たる側を選んで歩いた。なるべく小さい家を目的にして歩く。昼頃だったので、一杯の茶にありつける家を探した。軒づたいに、工事場のような板塀を曲がって、錆（さ）びた鉄材の積み重ねてある奥をのぞくと、硝子戸（ガラスど）の中で、ぱちぱちと火の弾（は）ぜている小舎（こや）があった。後から自転車で来た男が、片足を地へつけて「葛飾（かつしか）の区役所はどこだね？」と訊（き）いた。りよは知らなかったので、「私も、通りすがりのもので知りませんね」と言うと、自転車の男は小舎の方へ行って、大きい声で区役所はどこだろうと聞いている。硝子戸（ガラス）を開けて、鉢巻（はちまき）をした職人風な男が顔を出した。「四ツ木の通りへ出て、新道をまっすぐ駅の方へ行けば判（わか）るよ」と教えた。りよは、鉢巻の男の様子が、人柄のいい人物のように思えたので、自転車をやりすごしてから、おそるおそるそばへ行って、「静岡のお茶はいりませんでしょうか……」と小さい声で聞いてみた。暗い土間では、七[3]輪に薪（まき）を燃やして、鉄棒の渡しをかけた上に大きいやかんが乗っかっていた。「お茶？」「はい、静岡のお茶なンですけどねえ……」りよは、微笑しながら、さっさとリュックを降ろしかけた。鉢巻の男は何も言わないで、土[4]間の腰掛けに行った。りよは、勢いよく燃える火に、ほんのしばらくでもあたらせて貰（もら）いたかったので、「随分、歩いたンですけど、とっても寒くて……少し、あたらせて下さいませんでしょうか？」とおずおずと言ってみた。「ああいいとも、そこンとこ閉めて、あたって行きな」男は股の中へ小さい腰掛けをはさみかけていたが、その腰掛をりよの方へやって、自分はぐらぐらする荷箱の方へ腰をかけた。

りよはリュックを土間の片隅に降ろして、遠慮そうに蹲踞（しゃがん）で、火のそばへ手をかざすと、「その腰掛へかけなよ」男は顎でしゃくるように言って、炎の向こうにほてっているりよを見た。なりふりかまわないかっこうではあったが、案外色白い器量のいい女であったので、「お前さん、行[5]商に歩いているのかい？」と訊いた。

やかんの湯がちいんと鳴り出した。

煤（すす）けた天井に、いやに大きい神棚がとりつけてあって、

青々としたさかき[6]が供えてある。窓の下には黒板がぶらさげてあり、穴だらけのゴム長[7]が一足、壁ぎわに置いてある。「この辺がいいって聞いたものですから、今朝早く来たンですけどね、一軒きりしか商売がなくて、もう、帰ろうかと思ったンですけど、どこかで弁当でもつかわせて貰って、と思いましてね、そンなところを探して歩いていたンです……」「弁当はここでつかって行けばいいさ……商売ってものは、その日の運不運でね、もう少し、家のこんでるところでもまわれば、案外、またいい商売もあるかもしンねえよ」男は、歪んだ本箱のような棚から、黄いろくべとついた新聞包みを出して鮭の切り身を出すと、やかんをおろして鉄棒の渡しへ乗せた。香ばしい匂いがした。「さア、その腰掛けへかけて、ゆっくり弁当をつかったらどうだね……」りよは立って、リュックから弁当箱の風呂敷包みを出して、腰をかけた。「何の商売も楽じゃアねえな、静岡の茶っていうのは、百匁[8]いくらくらいするンだい？」男は手で鮭をひっくり返した。「売りは百二三十円ってとこなンですけど、屑も出ますし、高くしちゃアなかなか売れませンしね……」「そうさなア、年寄りでもいる家なら買うだろうが、若いもンの家じゃあ、なかなか骨だろう」りよは弁当を開いた。まっくろい麦飯に、頬[9]差しの焼いたのが二尾と、味噌漬けがはいっている。「何かえ、お前さんの家はどこだえ？」「下谷の稲荷町[10]なンですけどね、まだ東京へ来ましたばかりで、西も東も判らないンです」「ほう、間借りでもしてるンかい？」「いいえ、一寸、身をよせてるところなンです……」男は汚れた毛糸の袋から、大きいアルマイト[11]の弁当箱を出して蓋をとった。薯飯[12]がぎしっと押

初出『別冊小説新潮』昭和二十四（一九四九）年四月

1 **葛飾**　葛飾区。東京都の二十三区の一つ。北東端に位置し、千葉、埼玉の両県に接している。
2 **四ツ木**　東京都葛飾区の地名。
3 **七輪**　七厘ともいう。木炭を燃料にして煮炊きをするための土製のこんろ。
4 **土間**　家の中で床板の張っていない、地面のままにしてある場所。
5 **行商**　店舗を持たないで商品を持って売り歩くこと。あるいはそれを行う人。
6 **さかき**　神木として枝葉を供えるツバキ科の常緑樹。
7 **ゴム長**　ゴム製の長靴。
8 **百匁**　匁は重さの単位。一匁は三・七五グラム。
9 **頬差し**　藁や竹串などをえらに刺して鰯を連ね、干物にしたもの。
10 **下谷の稲荷町**　東京都台東区にあった上野の東側の地名。
11 **アルマイト**　アルミニウム製品の表面を、腐食しないように酸化アルミニウムの皮膜で覆ったもの。
12 **薯飯**　サトイモやジャガイモ、サツマイモを混ぜて炊いた飯。

＊ なりふりかまわない　骨

しつぶれる程詰めこんであった。蓋の上に、焼けた鮭を手でつかんで入れると、またやかんをかけて、小さい木裂[13]を七輪につっこんだ。りよは、弁当の食べさしを腰掛けに置いて、リュックから商売物の茶袋を引き出して、鼻紙に少し取りわけると、「これやかんに入れてかまいませんか？」と尋ねた。男は恐縮したように手を振って、「高いものをいいのかね」と、にこっと笑った。大きい皎い歯が若々しく見えた。りよはやかんの蓋をつまみあげて、茶をさっと湯気の中へ放った。

ぐらぐらと茶は煮えたってきた。男は棚から湯呑みと、汚れたコップを出して壁ぎわの新しい荷箱の上に置いた。「お前さん、旦那は何してるンだい？」男はそう言って、鮭を半分手でむしって、りよの飯の上に差し出した。りよはとまどいしながら、有り難く鮭を貰った。「主人はシベリア[14]にいるんですけど、まだ、戻って来ませんので、こンな事でもしなくちゃ食べてゆけないンですわ」男は吃驚したように顔を挙げて、「ほう、旦那はシベリア[15]のどこにいるンだね？」と訊いた。

バイカルのスウチンというところから、音信があって、秋がすぎ、また今年の冬をやっと越した。りよは、毎朝眼が覚めて気が滅入ることも習慣になってしまっている。あまりに距離がありすぎるために、何の実感もないのだけれども、もう、その実感のないということにもいまでは慣れてきていた。「異国の丘[16]」という歌が流行しているというので、留吉に歌って貰ったが、その歌を聴いているうちに、りよは侘しくなってくるのだ。自分の周囲にだけは、まだ、戦争気分が残っているように思えた。遠ざかっていく記憶のもやの中に、自分のところだけが、平和な色あいから取り残されているようなのだ。神様なンてあるものじゃないわ。りよは口癖のように言っていた。暑い季節には、毎日が焦々と待ちこがれてやりきれなくなり、少しずつその暑熱の気候があせてゆくと、冬の来るのが責められるように淋しかった。人間の辛抱強さにも限度があるとりよは独りで怒っていた。シベリアで四度も冬を迎える隆次のおもかげが、まるで幽霊のように段々痩せ細って考えられてくる。

六年間というもの、隆次が出征[17]してからは、りよは飛び立つ思いの幸福は一度もなかった。歳月の速度は、りよの生活の外側で、何の感興もなく流れているのだ。いまでは、誰も戦争の事は言わなくなり、たまに、良人[18]はシベリアですと人に言うと、その人は、まるで、使いに行ったものが戻らないような気軽な同情しかよせてはくれない。シベリアというところが、どんなところかは判らないけれども、りよには広い

雪の砂漠のようなところにしか空想できないのだ。

「バイカルのそばのスウチンというところだそうですけど、まだ戻れないンです……」「自分もシベリアからの引き揚げでね、黒龍江[19]に近いムルチで、二年ほどばっさいをやらされたンだがね。――人間、何でも運不運でね、旦那もそりゃア大変だが、待ってるお前さんも大変なことだなア……」鉢巻きを取って、その男は、鉢巻の手拭(てぬぐい)で湯呑みとコップを拭いて煮えたぎる茶をついだ。「まア！　貴方も復員[20]のかたなンですか？　でも、よく丈夫で、戻って来られましたンですね？」「どうやら死にもセンで、日本へ戻れたというもンさ……」りよは弁当箱をしまいながら、つくづくと男の顔を見た。平凡な男のように感じられるだけに、りよは気安く話ができ、居心地がよかった。「子供さんあるのかね？」「ええ、八ツになる男の子がありますけれど、いま、転入とか、学校のことでごたついておりますンですよ。配給の手続きが遅れているものですから、その手続きからしなくちゃならないし、子供は学校へも上がれない始末で、全く、商売で忙しいところへ、毎日手続きのことで区役所へまわってへとへとなンです」

男はコップを取って、熱い茶をふうふう吹きながら飲んでいる。「うまい茶だね」「あら、そうですか？　もっといい茶があるンですけど、これは二番茶で、原価は一[21]貫で八百円くらいなンです。――でも、案外うまいってお客様はおっしゃいますわ」りよも湯呑みを両の手に取って熱い茶を吹きなが

13 **木裂**　木のくず・切れ端。
14 **シベリア**　ユーラシア大陸北部、ウラル山脈から太平洋沿岸にかけたロシア連邦領の総称。敗戦後、日本軍捕虜が労働力として長期に渡って留め置かれた。
15 **バイカルのスウチン**　ロシア中南部の東部シベリアにある淡水湖がある地域。
16 **「異国の丘」**　シベリアに抑留されていた兵士の間で歌われた日本の歌謡曲。昭和二十三（一九四八）年にレコードで発売された。
17 **出征**　軍隊に加わって戦地へ行くこと。　18 **良人**　ここでは夫、亭主のこと。
19 **黒龍江**　ロシア連邦と中華人民共和国の東北部との国境を流れるアムール川の中国名。
20 **復員**　一七七ページ注16参照。　21 **一貫**　「貫」は重さの単位。一貫は一〇〇〇匁で、三・七五キログラム。注8参照。

問 **「段々痩せ細って考えられてくる」から、りよのどのような様子が読み取れるか。**
問 **「使いに行ったものが戻らないような気軽な同情」という表現から、周囲のどのような状況が読み取れるか。**

ら飲んだ。

いつか風向きが変わって、西風が強く吹きつけて、トタン屋根をびよびよ鳴らしていた。りよは外へ出るのが心細い気がして、少しでも火のそばにいたい気がした。「二百匁ほど買っとくかな……」男はそう言って、仕事着のポケットから三百円出した。「あら、お買いにならなくても、私、二百匁くらいなら差しあげますわ」りよは、急いで百匁袋を二本出して、荷箱の上へ乗せた。「なアに、商売は商売だね。ただ貰うってわけにゃゆかないよ。——また、このあたりに来たら寄っていきなさい」「ええ、もう、そりゃア寄らせていただきますとも……ここにお住まいなンじゃございませンのでしょう？」りよは狭い小舎の中を見まわした。男は弁当箱をしまうと、木裂の細かくささけたところをはがして、それを妻楊枝にしながら、「ここに住んでるンだよ。ここの鉄材の番人兼運送係りって仕事で、飯だけ近所の姉のところから運んで貰ってるンさ……」そう言って、男は神棚の下の扉を開けた。[22]押入れのようなところにベッドができていて、板壁に山田五十鈴のエハガキが鋲でとめてあった。「まア！　便利にできていますのね？　気楽でしょうね……」りよは、この男はいくつくらいだろうと思った。

その日からりよは、四ツ木へ商売に来るようになり、この鉄材置き場の小舎へ寄ることになった。男は鶴石芳雄と言う名前だということも知った。鶴石は、りよの来訪をよろこび、甘いものを買ったりして待っていることもあった。鶴石のところへ寄れる愉しみができたと同時に、少しずつ茶を買ってくれるなじみもできて、このあたりを歩く商売も楽になった。りよは、五日目には留吉を連れて四ツ木の鶴石の小舎へ出掛けていった。鶴石は留吉を見ると、とてもよろこんで、[23]留吉を連れてどこかへ出掛けていったが、暫くしてまだ熱いカルメ焼きの大きいのを二つ留吉が持って戻ってきた。「これ、坊やがふくらかしたンだな……」鶴石はそう言って、留吉の頭をなでながら腰掛けにかけさせた。りよは、鶴石に細[24]君があるのかどうかと思うようになっていた。それは別に大した思いかたではなかったけれども、留吉も可愛がってくれる鶴石を見て、ふっと、りよはそう思ったのである。りよは良人のこと以外は三十歳になる今日まで考えたこともなかったけれども、鶴石ののんびりした気心を知るようになると、鶴石への自分の感情が、少しずつ妙な風に変わってきているようにも感じられた。りよはこの頃、なりふりも少しずつかまうようになり、商売にも身を入れて歩くようになった。茶のほかに、静岡の親類から鯖や鰯のけずり節も送って貰って、それも一緒に売ってみたが、むしろ、茶の方より、けずり節の

方が案外よくさばけていくときもあった。

りよが鶴石のところへ行き出して、七、八日たった頃であったろうか。まだ浅草[25]を見たことがないと言う、りよと留吉を案内して、鶴石が一日休みがあるので、二人を連れて行ってやろうと言い出した。桜には、まだ早かったが、時間があったら上野公園[26]も歩いてみようと言うので、約束の日に、りよは鶴石に教えられた通り、上野駅[27]の中の旅行案内所の前に留吉と立って待っていた。半晴半曇のどんよりした日であったが、雨さえなければかえっておだやかな日である。十分くらいもして、鶴石がゆき[28]たけのつまった灰色の古ぼけた背広姿でやって来た。

りよは青い波模様の、着物地でつくったワンピースに、これも綿入りの薄茶の背広の上着を着て、何となくおめかしをして留吉の手を引いていた。不断より若く見えたし、ひどく脊の高い鶴石と並ぶと、りよは洋服のせいか女学生のように脊がひくく見えた。

「雨が降らなきゃいいがなあア……」鶴石は人ごみの中を、気軽に留吉を抱きあげて歩いた。りよは大きな買物袋をさげて、それにパンや、のり巻きや、夏みかんを入れてさげていた。地下鉄で浅草の終点まで行き、松屋[29]の横から二天門[30]の方へ歩いて、仲店[31]の中へはいっていった。

りよは、浅草というところは、案外なきたいはずれな気がした。朱塗りの小さい御堂が、あの有名な浅草[32]の観音様なのかとがっかりしている。昔は見上げるように巨きい[33]がらん

22 **山田五十鈴**　本名は山田美津。日本の女優。一九一七年〜二〇一二年。大阪府生まれ。

23 **カルメ焼き**　砂糖に卵白や重曹を入れ煮詰めて冷やし固めた菓子。ポルトガル語を語源としており、室町時代末期に日本に伝えられた。

24 **細君**　他人の妻を指す語。また、他人に自分の妻を言う語。

25 **浅草**　東京都台東区にある地名。浅草寺の門前町として栄えた繁華街。

26 **上野公園**　正式には東京都上野恩賜公園。東京都台東区にある都立公園。

27 **上野駅**　現在のＪＲ上野駅。明治十六（一八八三）年九月、開業。

28 **ゆきたけのつまった**　袖や丈の短いさま。

29 **松屋**　銀座、浅草に店舗を構える百貨店・デパート。明治二（一八六九）年に横浜で呉服店として創業された。

30 **二天門**　左右一対の仁王像、あるいは四天王中の二天の像を安置した寺院の門。

31 **仲店**　八一ページ注39参照。

32 **浅草の観音様**　八一ページ注38参照。

33 **がらん**　伽藍。寺の建物の総称。

＊ 半晴

問 「なアに、商売は商売だね」から、男のどのような性格が読み取れるか。

だったのだと、鶴石が説明してくれたけれども、少しも巨きかったという実感が浮いてこない。ただ、ぞろぞろと人の波である。この小さい朱塗りの御堂を囲んで人々がひしめきあっている。トランペットやサキソホオン[34]の物哀しい誘うような音色が遠くでしていた。公園の広場の焼け跡の樹木は、芽をはらんだ梢を風に鳴らして、ざわざわと荒い風にあえいでいる。

古着市場のアーチを抜けると、食物屋のバラック[35]が池のぐるりにぎっしり建っていた。油のこげつく匂いや、関東煮[36]の大鍋の湯気が四囲にこもっていた。留吉は箸の先に盛りあげた黄いろい綿菓子を鶴石に露店で買って貰って、しゃぶりながら歩いている。——かりそめのめぐりあいとはいえ、りよは十年も一緒に鶴石といるような気がして力丈夫だった。少しも疲れなかった。映画館やレヴィュー小舎[37]が軒をつらねている。アメリカ風な絵看板が、みんな唸って迫ってくるような大きい建物の谷間を、三人はぶらぶら歩いた。「雨が降ってきたね」鶴石が片手をあげたので、りよも空へ顔をむけた。大粒の雨が降ってきた。せっかくの遊山も台なしだと思いながら、りよたちは「メリー」と硝子行灯*の出ている小さい喫茶店にはいっていった。思いがけなく桜の造花が天井からさがっているのが案外寒々しく見えた。紅茶を取って、りよはのり巻きやパンを出して鶴石や留吉に食べさせてやった。鶴石は煙草を吸わなかったので食事も案外早く済んだが、雨は本格的になり、雨宿りの客もいつの間にかいっぱいたてこんできた。

「どうしましょう？　随分な雨になりましたね……なかなかあがりそうもないわ」「ちょっと待って小降りになったら送ってあげるよ」送ってあげるというのは、稲荷町のりよの家のことであろうかと思った。りよの家へは送って貰ったところで、鶴石を家へあげるわけにもゆかないのである。同郷の知りあいへ、部屋がみつかるまで腰かけにおいて貰っているのだった。寝るときは玄関の二畳にやすむので、自分の部屋というものがない。りよは稲荷町よりも、四ツ木の鶴石のところへ行きたかったのだけれども、鶴石の小舎には、満足に腰掛けもないのでしみじみと落ちつくというわけにもゆかない。

りよは鶴石に見られないように、買い物袋の中の財布をしらべてみた。七百円ばかりの金があったので、これで、どこか雨宿りさせてくれる宿屋のようなところはないものかと思った。「どこか宿屋みたいなところはないでしょうか？」宿屋はないかと言われて、鶴石は妙な顔をしていた。りよは遠慮しないで、自分の家のことを正直に話した。「だから、私、

このままで帰りたくないンですの。映画も見て、小さい旅館でもあったら、そこで、休んで、おそばでも取って貰って、愉しくさよならしたいンですけど……ぜいたくかしらね」鶴石も同じようなことを考えていたと見えて、自分の上着をぬぐと、それを留吉の頭からかぶせて、りよと雨の中へ出て行き、近くの映画館の軒下へ走り込んだ。——映画は椅子もなく立って見なければならなかったので、人いきれ[38]と立っているのでへとへとになり、留吉はいつか鶴石の背中でぐっすり眠ってしまっていた。早く旅館へ行った方がいいというので、一時間くらいして、映画館を出ると篠[39]つく雨の中を旅館を探して歩いた。芭蕉[40]の葉を叩くような音で、雨は四囲に激しく鳴っている。やっと、田原町[41]の近くに小さい旅館を見つけた。

節穴だらけのぎしぎしとなる廊下の突きあたりに狭い部屋があり、そこへりよたちは通された。べとついた柔らかい畳が、気持ちが悪かった。

りよは濡れたソックスをぬいだ。留吉は床の間の前にごろりと寝ころがしておいた。鶴石が汚れた座蒲団を留吉の枕にしてやっている。樋もないのか、膨脹した水の音が、ばしゃばしゃと軒にあふれて滝になっていた。鶴石は黄いろくなっているハンカチを出して、りよの髪の毛を拭いてやった。自然なしぐさだったので、りよも何気なくその好意に甘えた。雨音のなかに*眇めるような幸福な思いがりよの胸に走ってくる。なぜ愉しいのだろう……。長い間の閉じこめられた人間の孤独が、笛のようにひゅうと鳴るような気がしてくる。「こんなところで、食べ物を取ってくれるかな?」「そうね、私、訊いてくるわ」りよは廊下へ出て茶を持ってきた洋服姿の女中に尋ねてみた。中華そばならとれるというので、それを二つ頼んだ。

茶を飲みながら、二人は火のない箱火鉢[42]を真中にして暫く向きあっていた。鶴石は足を投げ出して留吉のそばに横に

34 **サキソホオン**　サキソホン。木管楽器の一つで、アルフレッド＝サックスによって発明された。
35 **バラック**　barrack（英語）。ありあわせの建材を用いて作った粗末な仮小屋。
36 **関東煮**　関東炊きともいう。関西地方で関東地方の煮込みおでんを指す。
37 **レヴィユー小舎**　大衆娯楽演芸を行う劇場。
38 **人いきれ**　人が大勢集まって熱気やにおいが立ち込めること。
39 **篠つく雨**　激しく降る雨。
40 **芭蕉**　バショウ科の多年草。バナナ状の実がなる。
41 **田原町**　東京都台東区にあった地名。浅草への入口でもあった。
42 **箱火鉢**　箱の形をした木製の火鉢。
問 **「鶴石は妙な顔をしていた」から、彼のどのような感情が読み取れるか。**
＊ 遊山　眇める

なった。りよは少しずつ昏くなりかけている雨空を窓硝子越しに見ていた。「おりよさんはいくつだね？」突然鶴石がこんなことを聞いた。りよは顔を鶴石の方へ向けてくすりと笑った。「女の年は判らないよ。二十六、七かね？」「もう、お婆さんですよ。三十です」「ほう、自分より一つ上だ……」「まア！　若いのねえ、私鶴石さんは三十越してンだと思ったわ」りよは珍しそうに鶴石の顔をみつめた。鶴石は眉の濃い人のいい眼もとをちらと染めるように輝かせて、投げ出した自分の汚れ足をみていた。鶴石も靴下をぬいでいる。

雨は夜になってもやまなかった。

遅くなって、冷えた中華そばが二つ来たので、りよは留吉をゆり起こして、眠がる留吉に汁を吸わせたりした。——二人は泊まっていくことに話をきめた。鶴石が帳場[43]へ行って、泊まり賃を払ってきてくれた様子で、案外こざっぱりした夜具が三枚運ばれてきた。りよが蒲団を敷いた。部屋の中が蒲団でいっぱいになるような感じである。留吉のジャケツ[44]だけをぬがせて、厠へ用をたしに連れてゆき、蒲団の真ん中に寝かせた。「夫婦者だと思ってるね」「そうね。お気の毒さまですね……」りよは蒲団を見たせいか、何となく胸さわぎがして、良人に済まないような気がしている。さきのことは判らないけれども、雨が降るから、仕方なくこんな風になったと思いたかったし、心で、そンな言いわけをしていた。

夜中になって、りよがいい気持にうとうとしていると、「おりよさんおりよさん」と、鶴石の呼ぶ声がした。りよがはっと枕から顔を挙げると、「おりよさん、そっちに行ってもいいかい？」と鶴石がささやくように言った。雨脚が少し弱まって、軒の水音もたえだえにきこえる。「いけないわ……」「やっぱり、いけないかね？」「ええ、困るわ……」鶴石は深い溜息をついた。「ねえ、鶴石さんは、私、聞かなかったけど、奥さんはどうなすって？」「いまいないよ」「前はあったの？」「ああ」「その方、どうなすって……」「兵隊から戻ったら、別の男と一緒に暮らしていたよ」「貴方、怒ったでしょう？」「うん、まアね、やっぱり怒ったね。——だけど、行っちまったものは仕方がないね……」「そうね、でも、よくあきらめられたわね……」鶴石はまた暫く黙っていた。「何か話しましょうか？」「うん、別に話をすることもないよ。……あの、中華そばはまずかったなア……」「ええ、本当ね、一杯百円だなンて……」「君たちも、部屋があるといいねえ……」「ええ、鶴石さんの近くにないかしら……私、鶴石さんのそばに引っ越したいわ……」「まず、ないね。そりゃア、あったらすぐ話してやるさ。——おりよさんは偉いなア」「あら、どうして？」「偉いよ。女はみンなだらしがないってわ

けでもねえンだな」りよが黙った。一緒に抱きあってみたい気がした。そして……。りよは鶴石に知れないように、少しずつ、ちぎって捨てるような苦しい溜息をついた。腋の下が熱くなって来た。家をゆすぶるようにトラックが往来を走っていく。「戦争って奴は、人間を虫けらみたいにしちまったね。大真面目で狂人みたいなことをやってたンだからなア。自分は二等兵[45]で終わったが、よく殴られたもンだよ。もう、二度なンか厭だなア……」「鶴石さん、お父さんやお母さんは……」「田舎にいるよ」「田舎は、どこ？」「福岡だよ」「お姉さんは何してるの？」「おりよさんみてえに独りで、子供二人そだてる。ミシン一台持って洋裁やってるよ。亭主は華[46]中で早く戦死したンだ……」鶴石は、少しばかり気が持ちなおったのか、話し声もおだやかになった。

りよはこうした夜の明けてゆくのがおしまれてならない。鶴石があきらめてくれたのだと思うと気の毒な気がした。まんざら始めから知らない人間なら、こうしたことも何でもないのかもしれない。鶴石は、りよの良人については一言も訊いてくれようとはしなかった。

「ああ、何だか眼がさえちゃって、寝られねえなア……どうも、馴れねえことはするもンじゃねえよ……」「あら、鶴石さん、貴方、遊びに行ったことはないの？」「そりゃア、男だもの、あるさ。玄人ばかりが相手だ」「男は、いいわねえ……」りよは、男はいいわねと、つい口に出したが、そう言うか言わないうちに、鶴石がさっと起きてきて、りよのそばへ重くのしかかってきた。蒲団の上からであったので、りよは男の力いっぱいで押される情熱に任せていた。りよは黙ったまま暗闇の中に眼をみはっている、鶴石の黒い頭がりよの頬の上に痛かった。ぱあっと、瞼の裏に虹が開くような光が射した。りよの小鼻のあたりに鶴石の不器用な熱い唇が触れる。

43 **帳場**　商店や旅館などで帳簿をつけたり、会計をしたりする場所。
44 **ジャケツ**　jacket（英語）。ジャケット。上着。
45 **二等兵**　旧大日本帝国陸軍の兵の階級の一つで、最も下の階級。
46 **華中**　中国中東部の長江中・下流域の総称。

問 **「暫く黙っていた」から、鶴石のどのような感情が読み取れるか。**

問 **「思いたかったし」「言いわけをしていた」とは、どのような感情か。**

問 **「りよの良人については一言も訊いてくれようとはしなかった」には、鶴石のどのような感情が示唆されているか。**

「駄目か……」りよは蒲団の中で脚をつっぱっていた。ひどい耳鳴りがした。「いけないわ……私シベリアのことを考えるのよ」りよは思いもかけない、悪いことを言ったような気がした。鶴石は変なかっこうで蒲団の上に重くのしかかったままじいっとしてしまった。頭を垂れて、神に平伏しているような森閑としたかっこうだった。りよは一瞬、済まないような気がした。暫くして力いっぱいで鶴石の熱い首を抱いてやった。

二日ほどして、りよは、留吉を連れていそいそと四ツ木の鶴石のところへ出掛けていった。何時もその時刻には、小舎の硝子戸のところに、鉢巻きをして立っていてくれる鶴石が今日は見えなかった。りよは不思議な気がして、留吉をさきに走らせてみた。「知らない人がいるよッ」留吉がそう言って走って戻った。りよは胸さわぎがした。入口のところへ行って小舎の中をのぞくと、若い男が二人で、押入れの鶴石のベッドを片づけているところである。「何だい、おばさん……」眼の小さい男が振り返って尋ねた。「鶴石さんはいらっしゃいますか?」「鶴さん、昨夜、死んじゃったよッ」「まア!」りよは、まア! と言ったきり声も出なかった。煤ぼけた神棚にお光りがあがっているのも妙だと思ったけれども、まさか鶴石が死んだためとは思わなかった。

鶴石が、鉄材をのっけたトラックに乗って、大宮からの帰り、何とかという橋の上から、トラックが河へまっさかさまに落ちて、運転手もろとも死んでしまったのだと教えてくれた。今日、会社のものや、鶴石の姉が大宮で鶴石の死骸をだびにふして、明日の朝は戻ってくるというのである。りよは呆然としてしまった。呆んやりして、二人の男の片づけ事を見ていると、棚の上にりよが初めの日に買って貰った茶袋が二本並んでいた。一本は半分ほどのところで袋が折り曲げてあった。「おばさん、鶴さんとは知り合いかい?」「ええ、ちょっと知ってるもンですから……」「いい人間だったがなア……何も大宮まで行くことはなかったンだよ。つい、誘われて昼過ぎから出掛けちゃったンだ。わざわざ復員してきて、馬鹿みちまったというもンだなア……」肥えた方が、山田五十鈴のエハガキをはずして、ぷっとエハガキの埃を口で吹いた。りよは呆んやりしてしまった。七輪もやかんも長靴もそのままで、四囲は少しも変わってはいない。黒板に眼がいくと、赤いチョークで、リヨどの、二時まで待った。と下手な字で書いてあった。りよは留吉の手を取って、重いリュックをゆすぶりあげながら、板塀を曲がったが急にじいんと鼻の奥がしびれる程熱い涙があふれてきた。「おじさん死んじゃったの?」「うん……」「どこで死んだンだろう……」「河へはまっ

ちゃったンだとさ」りよは歩きながら泣いた。涙が噴いて眼が痛くなるほど泣いた。

りよと留吉が浅草へ出たのは二時頃であった。駒形[49]の橋の見える方へ出て、河添いに白髭[50]の方へ歩いた。ここが隅田川と言うのだろうと、りよは青黒い海のような水を見て歩いた。あの朝別れるときに、鶴石はりよに、毎月二千円ずつくらいは、自分にもめんどうをみさせてくれと言った。鉛筆をなめながら、小さい帳面にりよの稲荷町の住所を書きとめていた。別れしなに、鶴石は田原町の洋品屋で留吉にネーム入りの野球帽子を買ってくれたりした。雨のあがったぬかるみの電車通りを、やっとミルクホール[51]を探しあてて三人で一本ずつ牛乳を註文して飲んだ。

りよは河風に吹かれながらぶらぶら河ぶちを歩きながら思い出しているのだ。白髪のあたりに水鳥が淡く群れ立っていた。青黒い流れの上を、様々な荷船が往来していた。りよはシベリアの良人のおもかげよりも、色濃く鶴石のおもかげの方が、はっきりと浮かんでくる。「お母ちゃん、漫画買ってくれよ」「あとで買ってやるよ」「さっき、いっぱい本のある店の前通ったね……」「そうかい」「見なかった？」りよはまた後へ引きかえした。どこを歩いていいのかわけが判らない。二度とああした男にめぐりあう事はあるまいと思えた。「お母ちゃん、何か食べようよ」りよは次から次とねだってくる留吉が急に癪[*]にさわってくる。白い野球帽子の赤いネームがかわいかった。どこへ行くあてもなかった。りよは、河ぶちのしもたや[52]風なバラックの家々を眺めて、家のある人たちが羨ましかった。二階に蒲団を干してあるのが眼について、りよはその家の格子を開けた。「静岡のお茶でございますけど、香りのいいお茶、如何でございますか？」と、愛嬌のいい声で呼んだ。返事がないので、もう一度りよが呼ぶと、正面の梯子段の上から、「いらないよッ」とつっけんどんな若い女の声がした。りよはまたその隣りの家の硝子戸を開ける。「静岡のお茶でございますが……」「はい、いりませんよオ」玄

47 **大宮**　埼玉県東南部の旧市名。浦和市・与野市と合併してさいたま市となり、大宮区となった。

48 **だび**　火葬。

49 **駒形の橋**　駒形橋。東京都台東区中東部で、隅田川を臨む地区にある。

50 **白髪**　東京都墨田区東向島の白髪神社。

51 **ミルクホール**　牛乳および、パンやケーキ菓子類を出す簡易な飲食店。

52 **しもたや**　商売をやめた家。普通の家。

＊ **森閑**　別れしな　癪にさわる

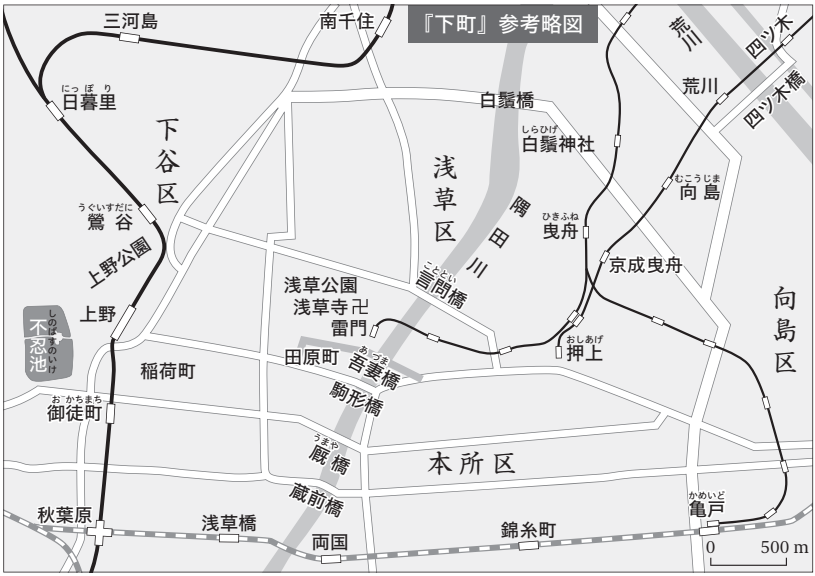
問 **「悪いことを言ったような気がした」のは、なぜか。**

問 **「一本は半分ほどのところで袋が折り曲げてあった」から、どのようなことが分かるか。**

関わきの部屋から男の声で断られた。りよは一軒一軒根気よく玄関に立ったが、一軒もりよに荷をおろせという家はなかった。留吉はぐずりながらりよの後から歩いてくる。淋しみをまぎらすために、りよは誰も買ってくれなくても、一軒ずつ戸口に立つのが面白かった。乞食よりはましだと思った。二貫目あまりのリュックは相当肩にしびれてくる。りよはリュックのベルトのあたる肩のところへ、手拭を一筋ずつあてていた。

翌る日、りよは、留吉を家に置いて、一人で四ツ木へ出掛けた。子供を連れていないせいかしみじみと独りで鶴石のことを思う自由があった。板塀を曲がると、思いがけなく小舎の中で火が弾ぜている。りよは、最初の日のことがなつかしくリュックをずりあげながら硝子戸に近よっていった。はっぴを着た年を取った男が七輪に薪を燃やしていた。いぶった煙がもうもうと小さい窓から噴いていた。「何だね？」その男が、煙にむせながらこっちをむいた。

「お茶を売りに来てたもンです……」「ああお茶はまだ上等なのがたくさんあるからいらねえよ……」りよは硝子戸へ手をかけていたのをやめて、すっと小舎から離れた。あの小舎の中へ這入ってみたところでどうにもなるものではないのだ。あの老人に聞いて、鶴石の姉の家を尋ねて、せめて線香の一



本でもそなえてきたいとも考えないではなかったのだけれども、りよはそれもあきらめてしまった。どうなるものでもないのだ。いまは、何も彼(か)ももものうい気がした。シベリアから何時かは良人は戻って来てくれるだろうけれども、もしものことがあったら死ぬより仕方がないようにも考えられてくる。——だが、珍しく四囲は明るい陽射しで、河底の乾いた堤の両側には、燃えるような青草が眼に沁(し)みた。りよの良心は案外傷つかなかった。鶴石を知ったことを悪いといった気は少しもなかった。

行商をしてみて、茶が売れなかったら清水[53]へ帰るつもりで、上京して来たのだけれども、りよは、商売があっても、なくても東京がいいと思ったし、のたれ死にしても東京の方がいまはいいのだ。

りよは堤の青草の上に腰を降ろした。眼の下の、コンクリートのかけらのそばに、仔猫(こねこ)の死骸が向こうむきに捨ててあった。りよはすぐ立って肩の荷をゆすぶりあげて駅の方へ歩いた。ふっと横路地をはいると、玄関の硝子格子に、板の打ちつけてある貧しげな家へ声をかけた。「静岡のお茶はいりませんでしょうか？」「そうね、いくら？　高いのでしょう？」りよが格子を開けると、足袋の芯縫いを内職にしているらしく、二、三人の女がこっちを向いた。「ちょっと待って下さいな。いま空罐(あきかん)探してみますからね」と、次の間へ小柄な女が消えていった。自分と同じような女たちがせっせと足袋底を縫っている。時々針が光った。

53 清水　静岡県の旧清水市。静岡市の政令指定都市移行に伴い、静岡市の行政区の一つとなった。



林芙美子（はやし ふみこ）　明治三十六（一九〇三）年～昭和二十六（一九五一）年。詩人・小説家。詩人を目指して、東京で単純労働や接客業などを転々とした体験を描いた『放浪記』で世に認められた。のち小説家に転じる。日中戦争時には作家が従軍して戦況などを報告するペン部隊に参加した。厳しい状況の中でしぶとく生きる人間を、特異な比喩表現を交えて描写した。代表作に『風琴と魚の町』『浮雲(うきぐも)』『めし』など。本文は、『東京百年物語3―一九四一～一九六七』（平成三十（二〇一八）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「鶴石」はどのような人柄か、本文に即して整理してみよう。

2「りよ」と「鶴石」の気持ちの接近と逡巡（しゅんじゅん）は、どのような理由によるものか、互いの境遇を比較しながら整理してみよう。

3 本文中の隅田川は、どのようなイメージで描かれているか、「りよ」と「鶴石」のいきさつとかかわらせて考えてみよう。

4「自分と同じような女たち」（二二七・下11）とは、どのような女たちなのか考えてみよう。また、この結末は、どのような印象を与えるか、話し合ってみよう。

◇言葉と表現

1 次の表現を使って、短文を作ってみよう。

(1)「……さえなければかえって……である」（二二九・上9）

(2)「……とはいえ、……だった」（二二〇・上12～13）

◇言語活動

1 戦災直後の人々の衣食住の状況を、本文から抜き出してまとめた上で、歴史的資料を調べてみよう。

2 浅草はどのような街か、本文から分かることをまとめてみよう。りよが浅草を期待外れだと思ったのはどのような状況だったからか。他に出てくる地名も合わせて、戦災直後の東京の状況を調べてみよう。

3 この作品の映画化について調べ、脚本の工夫点を批評する文章を書いてみよう。

歩道橋の魔術師

呉　明益
天野健太郎訳

母さんはよく、「稼いでくる子供ってのは、なかなかいねえなぁ。」と、ぼくに言った。つまり暗にぼくを非難していたのであり、さらにいくばくかの嘆きが含まれていた。もっとも、この嘆きを聞くようになったのは十歳を過ぎてからで、それまでぼくはなかなか商売がうまかったらしい。

うちは靴屋だった。ただ、小うるさいガキがお客さんに向かって、「お似合いですよ。」とか、「お安くしますよ。」とか、「それじゃあ、うち儲けが出ないんで。」とか言ったところで、どうにも遊んでるみたいで説得力に欠ける。あるとき、母さんはやっといいアイデアが浮かんだらしく、ぼくにこう言った。お前、歩道橋で靴ひもと中敷きを売っておいで。子供が売ってりゃ、みんな買うだろう。なるほど、子供の無邪気な顔は、我々が人生を生き抜くために与えられた最初の武器だ。もっともそんなことに気づいたのは、ずっとあとの話だけれど。

中華商場は全部で八棟あり、それぞれ「忠」「孝」「仁」「愛」「信」「義」「和」「平」と名づけられていた。ぼくのうちは「愛」棟にあった。「愛」と「信」のあいだには歩道橋がかかっていて、「愛」と「仁」のあいだにもかかっていた。どちらかと言えば、ぼくは「愛」と「信」のあいだの歩道橋が好きだった。なぜってそっちのほうが長かったし、西門町（戦前より栄える[2]台北市西部の繁華街）にもつながっていたからだ。歩道橋の上には物売りがたくさんいた。アイスクリームや包みパイ（焼餅）、子供服や女性の肌着、あとは金魚、亀、すっぽん……それに「海和尚」っていう真っ青なカニを売ってるのを見たこともあった。ときどき警察が来て物売りを追っ払うのだが、歩道橋は四方八方につながっているから、物売りた

1「忠」「孝」「仁」「愛」「信」「義」「和」「平」　孫文が唱えた八つの徳。二四一ページ注15参照。

2 台北市　台湾の北部にある政治・経済の中心都市。



ちはひょいと風呂敷で売り物をくるんで、警察と別の方向へ逃げ、ついでにお手洗いを済ませて帰ってくる。そもそも警察だって、ちんたら歩いて取り締まるのだから、物売りのことをみな、痛[3]風持ちだと思っていたに違いない。

最初の日、姉貴が朝、歩道橋までぼくを連れてきて、昼ごはんのおにぎり（飯糰（ファントアン））を置いて帰っていった。ぼくはまず靴ひもを一足分ずつ歩道橋の欄[4]干に結んだ。風が吹いて、靴ひもがひらひらと揺れた。それから腰掛けに座って、一足一足、靴の中敷きを左右対称に並べていく。ぼくは「響皮（シャンピー）」を一番手前に置いた。それが一番高いからだ。一足三〇元（約一〇〇円）もする。母さんの話では、響皮は豚の皮で作った強烈な香りがする中敷きで、何枚か重ねてこすり合わせれば、キューキューって音が鳴る。だから響皮と言うのだ。豚は死んでも、まだ鳴き続けなきゃならないってわけだ。

わぁ、歩道橋で商売するのが、楽しみになってきた。

ぼくの真向かいで、ひとりの男が商売の準備を始めた。男はべたついた髪の毛に、襟を立てたジャケットと灰色の長ズボンといういでたちで、ジッパーも靴ひももない[5]ジャンプブーツを履いていた。ジャンプブーツとは靴ひもの穴がたくさんある、世界一ひもを結ぶのが面倒な靴だった。その後、靴ひもの代わりにジッパーが発明されたおかげで、全国の兵隊さんの朝の支度がぐんと楽になったそうだ。うちの店でも、少なくとも一日十人以上の兵隊さんが付け替え用のジッパーを買いに来た。ここでも売れば、いい商売になるだろう。母さんに言って明日から置こう。ぼくはそう考えた。

男は歩道橋の地面にチョークで円を描いた。そして黒い風呂敷を解くと、売り物をひとつひとつ置いていく。ぼくは最初、男が何を売っているのか、よくわからなかった。トランプ、鉄のリング、変なノート……姉貴はぼくに言った。あの人はマジックで使う道具を売っているの。すげえ！　マジッ

クの道具を売る人なんだ！　ぼくはマジックの道具を売る人の目の前で商売するんだ！

「違うよ。わたしは魔術師なんだ。」男はぼくにそう宣言した。またある日、商品をどこから仕入れているのか訊くと、男は答えた。「このマジックは全部本当なんだ。」男はトカゲみたいに左右に離れた、二つの場所を同時に見ているような目でぼくを見た。ぼくの体はブルッと震えた。

魔術師は、テレビのマジックショーで見るような[6]燕尾服を着ているわけでもなく、シルクハットも被ってなかった。毎日、立ち襟ジャケットと灰色のズボンを身にまとい、汚いジャンプブーツを履いていた。今度「ワンタッチ靴磨きクリーム」を売りつけてやろう、とぼくは思った。あっという間にツヤが出るやつだ。魔術師は四角いような長いような顔をしていた。背は低くもなく高くもなく、なんだか笑いというものを忘れてしまった人に見えた。外見は平凡すぎて、人ごみに紛れ込めば、そこに魔術師がいるなんて誰も気づかないだろう。もちろんあの目とジッパーのないジャンプブーツは別だけど。

魔術師は、だいたい一時間に一度マジックをした。なんてラッキーなんだ！　ぼくは魔術師の目の前で靴の中敷きを売ってるんだ！　彼がよく披露したマジックは[7]ダイス、トランプ、[8]リンキング・リングの類いで、今思えばごくありきたりの、魔術師と名乗るのはちょっとおこがましいような演目だった。でも、あのころのぼくからしたら、奇跡を目の当たりにしたも同然だった。きっと、のちに[9]ビビアン・リーを初めて見たときと同じくらいの衝撃だったはずだ。おかげで、マジックの道具がたまらなく欲しくなった。そう、ずっと心

3 **痛風**　関節炎などを引き起こす病気のこと。　4 **欄干**　橋などの縁に通してある柵。　5 **ジャンプブーツ**　落下傘部隊の兵隊が使用するブーツ。
6 **燕尾服**　男性用の礼服。上着の後ろの裾がツバメの尾のように割れている。　7 **ダイス**　dice（英語）。さいころ。賽。
8 **リンキング・リング**　本来、つながらないものをつなげたり外したりするマジック。
9 **ビビアン・リー**　Vivien Leigh　一九一三年～一九六七年。イギリスの女優。映画『風と共に去りぬ』の主演女優として有名。

問 **「ときどき警察が…」（二二九・下13）とあるが、警察と物売りの関係は、どのようなものか。**

問 **「ぼくの体はブルッと震えた」とあるが、「ぼく」は魔術師をどのように感じているのか。**

に抱いていた、スズメが飼いたいという気持ちと同じくらい強烈に。

あるとき、魔術師は六つのダイスを使ったマジックをした。たくさんの見物人に囲まれるなか、さもなんでもないふうに、ダイスを小さな箱にひとつひとつ収めていく。そして緑色のふたを閉じて振ったあと、マジックのときにだけ見せる笑みを浮かべ、ふたを開けた——6、6、6、6、6、6。

魔術師はダイスが出す数字を自由に操っているようだった。たとえば、冷やかしの客になにげなく誕生日を尋ね、それから別の話題で盛り上げているうちにダイスを振れば、さっきの誕生日の数字が現れる。時には一回振ってふたを開け、また時には何度も何度も、見ているこっちが眩暈するくらい振ってからふたを開け、どちらにしたって、ダイスの数字が間違うことはなかった。

魔術師の目はマジックのとき、ギラリと光った。相変わらず立ち襟ジャケットと灰色のズボン、汚いジャンプブーツといういでたちだったが、そのときだけは全身が輝いて見えた。まるでブラックホールのように空気を吸い込み、さらに光と重力のすべてを集め、チョークの円のうちに凝縮させているように。彼はマジックを演じながら、その道具を売った。ある日、ぼくはついに誘惑に勝てず、中敷きの売り上げで道具をひとつ買った。ぼくが初めて買ったのは「不思議なダイス」だった。

魔術師は、道具を買ったぼくをぐっと引き寄せ、一枚の白い紙をくれた。彼は言った。「帰ってから水に一度浸けて、乾かすんだ。そうすればマジックの秘密がわかる。」夜中、ぼくは家族にバレないように紙を水に浸け、母さんのドライヤーで乾かした。その後も、夜中にこっそり練習した。紙には文字だけでなく、絵も書いてあった。魔術師が一枚一枚手書きしたものらしい。そういうことか！　紙に書いてある手書きの文字を読んで、「そういうことか。」と言いたくなった。ぼくはこのとき、マジックのすべてを知ってしまったんだと思った。十一歳になって同級生に片思いしたとき、自分は愛のすべてを知ってしまったんだと思ったのとまるで同じように。

ぼくは内緒で練習を続けた。そして、兄貴の前で初めて披露したときはもう、吐き気がするほど緊張していた。ダイスを何度も落として、結局、箱に入れる前に仕掛けを見破られた。兄貴はぼくを小馬鹿にするような目で、言った。

「出す目をあらかじめ自分のほうで揃えてるだろう？」

「う、うん」ぼくは落ち込んだ。兄貴の言うことは当たっていた。マジックが途中でバレることほどつらいものはない。

大人になる前に、その後の人生をすべて予告されてしまったようなものだ。ぼくは占い師とマジックを見破る人が大嫌いだ。不思議なダイスの秘密は、ダイスではなくその箱にあった。特殊な形状をした箱のおかげで、出したい数字を自分の側で揃えておけば、持ち手の加減でダイスの向きを九〇度変えることができるのだ。こちらに出ていた目が、上に出る。それだけのことだ。

「売り上げから抜いたんだろう？　母さんに言うからな。」と、兄貴が言った。そう、ぼくは靴の中敷きの売り上げからいくらか「融通」していたのだ。しょうがない。ぼくは口止め料のつもりで、兄貴に不思議なダイスを渡した。

チクショー！　この秘密は高くつきすぎた！　六〇元（約二二〇円）をタダでくれてやるなんて……この一週間、どれほど苦労して母さんの目をごまかしたか！

マジックはただのマジック、本当の魔法は入ってないって思い知ったのに、おかしなもので、拍手喝采を浴びる魔術師を見ていると、なぜかあの、騙されたと知ったときの心のもやもやが消えてしまうのだ。そうやってまんまと魔術師の手口にはまり、ぼくは、子供にとってはかなり高価なマジックの道具を、ひとつまたひとつと買ってしまう。たとえば、一瞬で空っぽから満杯になるマッチ箱、ページをめくると白黒からカラーに変わる絵本、虹と同じ色が出るボールペン、ぐにゃりと曲げられる不思議なコイン……どんなマジックだろうが、魔術師が披露した途端、ぼくもやりたい！　という欲望が抑えきれなくなってしまう。でも実際に買って持ち帰り、水に浸けて字を浮かび上がらせれば、マジックは神秘的でもなんでもなく、ただの嘘に変わる。ずいぶん経ってやっと、どれもこれも同じからくりであることに気づいた。それに、ちゃんと練習しなければ、マジックの道具はトラブルのもとになるだけだった。ぼくのマジックはいつも、家族やご近所の笑いものになって終わった。

「この出来損ない！　店の金使いやがって！」売り上げを抜いてマジックの道具を買っていたことがバレて、ぼくは母さんにぶたれた。

なにがやってられないって、古本屋の舌足らずや工務店の

問「一枚の白い紙をくれた」とあるが、魔術師はなぜ、このような方法で種を明かすのか。

ホラいち、ワンタン屋のカイも、みんなひととおり道具を持っていることだ。マジックが嘘だったのは怒ってない。きっとぼくの練習が足らないんだろう。でもあの秘密の紙を、あいつらが全員持っているかと思うと、なんだかやりきれなくなった。魔術師に文句を言ってやろうって何度も思ったけど、結局、母さんにかんしゃくをぶつけただけだった。母さんもよほどぼくに腹を立てたと見えて、振り返るなりビンタをくれた。

「店の金であんなゴミばっかり買いやがって、どの口が言うか！」

魔術師の商売が流行(はや)らなくなってきた。そりゃそうだ。道行く人には物珍しいだろうが、近所の子供たちはマジックの道具をあらかた買ってしまっている。先に買った子供たちは、あれ、全部嘘だぜ、と近所の仲間や同級生に触れてまわるのだが、でもやっぱり、みんな買ってしまうのだ。だってほら、みんな騙されてるのに、自分だけ騙されてないなんて、なんだか悔しいじゃないか。

魔術師もそれに気づき、子供向けの新しい話題を作らなければならなくなった。ある日の仕事始めに、魔術師は四角いアタッシュケース[10]から本を一冊取り出した。本を開くと、真っ黒な紙が挟まっている。それは大人の小指くらいに切り取られた、紙の小人だった。

彼は黒い小人を地面に置いた。そして黄色いチョークを取り出すと、マジックのステージである白の大きな円の内側にうちわくらいの小さな円を描いた。目を閉じて、彼はぶつぶつと呪文を唱えた。すると、黒い小人はふるふると震え出し、まるで今起きたとでもいうように、ふらふら立ち上がった。先を急ぐ通行人たちも、無言の黒い小人に呼び止められたように振り返り、地面の小人を見つけて、思わず足を止めた。

まったく、歩道橋で商売するのは楽しくてたまんないな！黒い小人は、ぎこちないダンスを踊り始めた。魔術師の歌か呪文かわからないぶつぶつに合わせて、西へ東へパタパタ駆け回る。動きがもたもたしているところがまた、たまらずかわいかった。きっと力を入れすぎたら破れてしまうことを自分でも知っているんだろう。紙だから、そりゃ激しい動きには向いてないはずだ。ぼくは黒い小人のことが心配になってきた。体育の授業に出たりしたら、かなり危ないんじゃないだろうか？

小人が動きまわるのは、黄色い円のなかだけということに、ぼくはだんだん気づいてきた。小人はこの円のなかにしかいられないのだ。誰かが小人に触れようとすると、魔術師は大

声で叱りつけた。彼らの手を止め、そして脅しつけるように言った。「その小人に触れたら不幸になる。でも、ダンスを見たら幸運が舞い込んでくる。」それに黒い小人自身、どうやら人に触られるのが嫌らしかった。誰かが近づくと、彼はトントントンッと跳ねるように魔術師の足元へ逃げた。

みんなが黒い小人に夢中になったころ、魔術師はマジックを始めた。道具はいつもと同じだ。不思議なダイス、不思議なマッチ箱、めくればカラーになる絵本、一筆で虹が書けるボールペン、指でぐにゃりと曲がるコイン……どうしてだろう、このあいだまでさっぱり売れなかった商品が、一瞬にして、みんなが奪い合うような人気商品に生まれ変わった。見物客は魔術師のマジック道具が、また欲しくなったのだ。彼は道具を買ったひとりひとりをそばに呼んで、なにも書いていない真っ白な紙を渡した。ぼくはその紙を全部見た。書いてあることも全部覚えた。でもバカみたいに、ぼくはまた不思議なダイスを買ってしまうのだ。

こんなとき、黒い小人はいつも行儀よく黄色い円のなかにいた。目がないから、小人は目が見えないんだろうって、ぼくは考えた。目の見えない黒い小人が、小さな黄色の円のなかでゆっくりと足踏みしている。ぼくには、彼になにか悩み事でもあるように思えた。

黒い小人は歩道橋のスターになった。商場の子供たちだけでなく、ぼくらが通う小学校の生徒まで、みんな小人を見に来た。重慶南路（総統府前を南北に走る通り）のサラリーマンや西門町[12]の物売り、はては商場の向かいにある台北憲兵隊[11]の憲兵や、風俗店[12]の女性までやってきて、歩道橋の魔術師が操る黒い小人を見物した。小人はやっぱりちょっと恥ずかしそうに、そしてぶきっちょに彼のダンスを踊るのだ。小人は紙でできた腰*を折り、見物人にお辞儀をした。紙でできた手を振り、見物人にあいさつした。ぼくは小人に夢中だった。ぼくは毎日、黒い小人のダンスを心待ちにして、靴ひもと中敷きのことなんてすっかり忘れた。靴ひもは鉄の欄干に結ばれたまま、風に吹かれてひらひらと揺れた。今思い出しても、

10 **アタッシュケース**　attaché case（フランス語）。書類を入れる角型の手提げ鞄。

11 **憲兵**　軍隊内において警察の役割をする兵のこと。

12 **風俗店**　遊興・飲食などを提供する店。

問 **「このあいだまで…生まれ変わった」とあるが、なぜか。**

＊ 腰を折る

それはとても美しい光景だった。

マジックの道具を全部買ったあと、ぼくは少しずつ魔術師と仲良くなった。彼は焼き餃子（鍋貼）を買うとぼくに何個か分けてくれたし、ぼくのほうも、母さんが大甲（今の台中市にある媽祖宮で有名な町）の実家で貰ってきたバターパイ（奶油酥餅）をお裾分けしたりした。なにか食べているとき、魔術師の目はくるっと、左右異なる方向を見ることがあった。まるで世界の動向をひとつでも見逃すまいとしているようだった。

あるとき、魔術師がトイレに行くとき、ぼくに売り物を見ててくれと頼んだ。「なくならなければそれでいいんだ。売らなくていい。いいか、売っちゃだめだ。それから、小人には絶対触るなよ。」

ぼくは喜んで引き受けた。そんなの*朝飯前だ。魔術師の椅子に座ると、まるで自分が魔術師になったように思えた。これでやっと、黒い小人に少し近づけた。ぼくは魔術師の手拍子と、唸るような変な歌と、言葉がどうかもわからない呪文を真似た。すると黒い小人はふるふると立ち上がり、まるでどこかからの呼びかけを耳にしたように、チョークの円のなかでダンスを始めた。

——なんてことはもちろんなく、黒い小人は黙ったまま、不思議なマッチ箱に腰掛けていた。

不思議なマッチ箱は、黒い小人が腰掛けるのにぴったりの大きさで、まるで彼専用に作られた椅子だった。小人にダンスさせないとき、魔術師は小人の脚をもう一方の脚にひっかけさせ、脚を組む大人みたいにマッチ箱に座らせた。ときには風のせいか、少し前屈みになり、なにか考え事をしているように見えた。黒い小人は普段なにを考えているんだろう？彼には、彼にしかわからない悩みがあるんだろうか？　この世界には、黒い小人の学校があるんだろうか？　その学校はなにを教えてるんだろう？　黒い小人も九九を暗記するんだろうか？　音楽の授業はあるんだろうか？（なかったら踊れないじゃないか！）黒い小人はあんな薄い体で、ドッジボールはどうやってやるんだろう？　そんなふうにぼくは、陰ながら黒い小人の人生を案じていた。そう、母さんがいつもぼくのことを心配しているのとまるで同じように。

魔術師に頼まれて店番しているときも、その真向かいで自分の商売をしているときも、ぼくはずっと黒い小人を見ていた。そうやって考えれば考えるほど、ぼくは小人にのめり込んでいった。

別の日、魔術師がトイレに立ち、きっと大きいほうだったんだろう、ずいぶん長いこと戻ってこなかった。椅子に座って、ぼくは退屈していた。黒い小人は地べたに座って、ぼくと同じく退屈そうにしていた。その日、ぼくはちょっと疲れていた。天気も肌寒い曇り空で、歩道橋を歩く人は少なかった。だからぼくはつい居眠りしてしまった。ほんの短い時間だったはずだけど、ぼくは雨に打たれて目を覚ました。顔を上げると、灰色の空から雨が容赦なく降り注いでいた。自分の売り物をしまうより先に、魔術師の傘を差そうとした。差して椅子の柄に括りつけたかったのだけど、傘が大きすぎて、ぼくの短い腕では開くことができなかった。そうこうしているうちに、土砂降りの雨は歩道橋の路面に小さな川を作り、排水口へ注いでいく。この日、黒い小人はマッチ箱の上に座ってなかったから、今にもその流れに呑まれそうだった。そして、気づいたときにはもう、小人は捨てられた紙くずのように路面にペタリと貼りつき、絶望を訴えるように両手、両足を広げていた。自分が濡れるのも構わず、ぼくは傘を放って、黒い小人を助けようとした。でも紙が路面のコンクリートにくっついて、剝がそうとしたら小人の腕がちぎれてしまった。ぼくは泣き出した。涙をボロボロ流して、ぼくは叫んだ。「小人の腕がちぎれた！　小人が死んじゃった！　小人の腕がちぎれた！」

ぼくの隣で子供服を売るフェン姉さんが（今思えば中学生くらいだったろうけど、ぼくにはすごく「姉さん」に思えた）、すばやく傘を差して自分の売り物の上に立てかけると、走ってぼくのところに来た。そして、ぼくの代わりに傘を差したあと、いたたまれないような表情でただ、コンクリートに貼りついた黒い小人を見ていた。ぼくは泣きじゃくった。泣いて、泣いて、ひきつけを起こすまで泣いたころ、やっと魔術師が帰ってきた。彼は二つの目を見開き、二つの方向を見ながら、品物を片づけ始めた。そしてぼくにこう言った。

「自分の売り物が放ったらかしじゃないか！　中敷きが雨に濡れちまって、おっかさんに叱られるぞ！」魔術師が小人のことで怒っていたかどうかはわからない。ぼくはもう喉がつかえて、まともに話すことができなかった。

問「自分の売り物をしまう…差そうとした」とあるが、なぜ、そうしたのか。

問「「自分の売り物が…叱られるぞ！」…できなかった」とあるが、この場面での「ぼく」と「魔術師」の心情はどのようなものか。

＊朝飯前

黒い小人は死んだ。ぼくのせいで死んだ。ぼくの心にぽっかり穴が空いた。きっとぼくの心も、紙で作られていたんだろう。

翌日、母さんにどれだけ急かされても、魔術師の前で商売をする気にはなれなかった。ぼくはみじめな気持ちでいっぱいだった。でもそれと同じくらい、黒い小人がどうなったか知りたかった。もしかしたら腕が取れただけで、死んでないかもしれない。腕がなくたって、小人はまだ踊れるし、学校にも行けるかもしれない。

その日、歩道橋でぼくは、ずっと頭を上げることができないでいた。魔術師はぼくがやってきたとき、「小僧、元気か？」と、いつもの挨拶をしてくれず、ただ自分の椅子に座って黙っていた。ぼくは、自分がすごくダメなやつに思えた。歩道橋の下を車が行き交う。橋の上のホコリは、すべてぼく目がけて降り注ぐ。道行く人は誰しも、ぼくより楽しそうだった。

昼、魔術師は焼き餃子を買ってきた（今日はぼくに分けてくれなかった）。食べ終わって口元をきれいに拭うと、いつものアタッシュケースを開き、前と同じ本を取り出した。本には黒い紙とハサミが挟んであった。魔術師は紙を手に、ハサミを動かし始めた。すると、みるみるうちに紙から黒い小人が切り取られた。ぼくは横目でこっそり、魔術師を観察した。ぼくの鼓動は、ぜんまいを巻き直した時計のように、ドドドッと速くなった。

魔術師は新しい小人を地面に置くと、また黄色いチョークで円を描いた。手拍子をして、歌を口ずさみ、掛け声をかける。すると新しい小人が踊り出した。前の小人と同じダンスだ。おまけに派手な動作が加わって、くるくるっとターンまで披露した！　うれしくなってぼくは大声で叫んだ。「死んでない！　小人、死んでないよ！」口に出すと、なんだかおかしな感じがした。この黒い小人は、昨日雨に濡れて地面にくっつき、ぼくに腕をもがれてしまったあの小人じゃないんだろうか？　もしこれが新しい小人なら、腕が取れた黒い小人はどこに行ってしまったんだろう？

魔術師は右目でぼくを見た。口元に笑っていないような笑みを浮かべ、左目はあさってのほうを見ていた。そして手を振って、ぼくを呼んだ。

「さあ、この黒い小人は、昨日の小人とどこが違うだろう？」

ぼくは首を振り、少し迷ってから言った。「そっくりに見えるよ。だよねぇ、あの黒い小人は死んでないよね？」

魔術師は二つの目で違う方向を見ながら言った。「それはわたしにもわからないな。小僧、いいか。世界にはずっと誰にも知られないままのことだってあるんだ。人の目が見たものが絶対とは限らない。」

「どうして?」とぼくは訊いた。

魔術師は少し考えてから、しゃがれた声で答えた。「ときに、死ぬまで覚えていることは、目で見たことじゃないからだよ。」

正直、ぼくには彼の言っていることがわからなかった。でもこれは、魔術師がぼくに初めて話してくれた言葉だった。ぼくは自分が大人として扱われたような気がした。ぼくのなにかが認められたような気がした。家に帰ってぼくは、兄貴に黒い小人のことと、魔術師がぼくに言ったことを話した。兄貴はなんだか腹を立てているようだった。どうして兄貴が怒り出したのか、ぼくにはわからなかった。兄貴は、母さんに頼んでお前を商売に行かせないようにする。でないと魔術師にさらわれるかもしれないと言った。その晩、ぼくは黒い小人の夢を見た。小人はぼくを森のなかへ連れていった（といっても、ぼくは森というものがどういうものか知らなかった。ぼくは新公園（現・二二八和平紀念公園。台北駅の南にある）より遠いところには行ったことがなかった）。小人といっしょに歌を歌ったあと、かくれんぼをした。ぼくは森の奥に、明るい光を見つけた。小人は、そっちに行っちゃいけないとぼくに言った。どうして？　あそこはすごく深いから。でもすごく明るいよ！　小人は言った。明るく見える場所は、とっても深い場所なんだ……

ぼくは魔術師にさらわれなかった。兄貴も母さんに、小人のことを話さなかったらしい。毎日は、同じように過ぎていった。

魔術師とますます仲良くなったので、誰もいないときを見計らって、ぼくは黒い小人の秘密を教えてくれと何度もせがんだ。魔術師は小人のときだけは厳しく言った。

「小僧、いいか。わたしのマジックはどれも嘘だ。でも、この黒い小人だけは本当だ。本当だから、言えない。本当だから、ほかのマジックと違って、秘密なんてないんだ。」

問「ときに、死ぬまで…ないからだよ」とは、どのような意味か。

ぼくは信じなかった。魔術師はきっと本当のことを隠してるんだ。目を見ればわかる。ぼくが嘘をついたとき、母さんがいつもぼくの目を見て見破るのと同じことだ。

「嘘つくなよ！」ぼくは言った。「子供だからって嘘つくなよ！」

新学期（台湾は夏休みを終えた九月から新しい学年が始まる。旧正月休みを挟んだ、二学期制）が、日に日に近づいてきた。学校が始まったら、もう商売はしなくていいと母さんに言われ、ぼくは悲しくなった。日曜日だけでもいい、なんとかして新学期以降も歩道橋で商売が続けられるよう掛け合ったけど、母さんは首を縦に振らなかった。きっと兄貴が告げ口したんだろう。ぼくは魔術師にこのことを告げた。そして悲しみにくれるようにこう言った。「まだ黒い小人の秘密を教えてくれないの？　もう時間がないよ。新学期が始まっちゃう。教えなかったら後悔するよ。もしおじさんがぽっくり死んだら、黒い小人のマジックをできる人はいなくなっちゃうじゃないか！」いつの間にぼくは、こんな駆け引きめいた話し方を覚えたんだろう？　まるで母さんが言う「稼ぐ子供」になったみたいだ。

魔術師はただ笑って、ひとつの目で遠くのほうを見て、も



台北市街略図

うひとつの目で、ぼくの心のなかを見た。

夜八時、歩道橋は店じまいの時間だった。黒い小人とマジック道具を片づけ終わった魔術師が、ぼくに手招きした。ぼくは迷わずあとをついていった。心臓がドキドキしてきた。魔術師はずんずん前へ進んでいく。歩道橋を過ぎて、商場の建物の一番奥にあるドアまで来た。それは商場の屋上に続くドアだと、ぼくは知っていた。大人たちは上に行ってはいけないと言っていた。魔術師は鍵を回すとドアを開け、上がってこいと手招きした。

初めて商場の屋上に登ったぼくは、そこから見える風景に心を奪われた。

あのころの台北は、今と全然違って建物はずっと低かった。歩道橋からでも[14]淡水河から打ち上がる双十国慶節（十月十日、中華民国国慶節。[15]辛亥革命が起こった日）の花火を見ることができたし、天気がいいときは陽明山（台北市北部の山、景勝地）がくっきり見えた。あのころの台北は本当に洗面器みたいで、底の低いところからでも、洗面器のなかのものとその縁までがすべて見えた。このとき、魔術師といっしょに屋上に立てば、キラキラ輝く西門町の夜景と、その逆方向にある総統府（大統領府。戦前は台湾総督府）の灯りが見えた。魔術師は、屋上に立つネオン塔の足元のくぼみを指さした。

「ここで眠ってるんだ」彼は言った。「でも、またいずれ、ここを出ていく。」魔術師がねぐらにしているくぼみは機械室の軒先で、ネオンの光がちょうど遮られていた。覗き込むと、ぐちゃぐちゃになった寝袋とビニール袋があり、それから意外なことにたくさんの本が積まれていた。

「どこに行っちゃうの？」

「さあ。どこでもいいさ」

「ぼくも魔術師になりたい」

「小僧、お前には無理だ。魔術師は秘密が多い。秘密がたくさんある人間は、楽しく生きられない。」

「どうして？」

「そんなに訊くな。お前にはわかりっこない。それに、魔術師は同じ場所にずっと住めない。小僧、黒い小人のマジックを習いたいって言ってたな？」

「うん！」ぼくは必死にうなずいた。まさか、今教えてく

13 **旧正月**　太陰暦（旧暦）での正月。　14 **淡水河**　台湾の北部を流れる川。
15 **辛亥革命**　一九一一年に清国で起こった民主主義革命。清朝皇帝は廃され、翌年には、孫文を臨時大総統とする中華民国が成立した。

れるんだろうか？　ぼくの心臓はドキドキ高鳴って、喉から跳び出てきそうだった。

「それは無理だ。黒い小人は本当だ。本当だから、教えることはできない。」またこれだ。

「じゃあ小人をぼくにくれよ！　いいだろ？　もしマジックなら教えてよ！　もし本当なら黒い小人をぼくにくれよ！　いいだろ？」

「子供のころ、チョウを捕まえて標本にすれば、チョウが自分のものになると考えていた。長い時間かけてやっと、チョウの標本はチョウではないってことに気づいた。わたしはそれを見抜いたから、黒い小人のような本当のマジックが使えるようになったんだ。頭のなかで想像したものを、お前たちが見えるものに変えるだけだ。わたしはただ、お前たちの見ている世界を、ちょっと揺らしているだけなんだ。映画を撮る人間がすることと何も変わらない。」

　ぼくは首を傾げたまま、炭酸飲料の巨大なネオンサインが発する、ジジジという音を聞いていた。魔術師が言っていることは、ぼくには難しすぎた。青のネオンが彼の一方の目を青く光らせ、緑のネオンがもう一方の目を緑色に光らせた。ぼくは、魔術師が言ったことを考えていた。彼の言う「本当」のマジックに、ぼくは心底戸惑っていた。

「じゃあどうしたらあんなことができるの？　小人にダンスさせるようなことが。」

「小僧、それを教えることはできない。でもだ。お前とはなかなか馬が合う。だからあるものをあげよう。それをどう使うかは、自分で決めるんだ。」

　魔術師はそう言い終わると右手を差し出した。まるでその上に乗ったなにかを見せつけるように、ぼくの目の前で手のひらを止めた。だいたい三〇秒くらいあっただろうか。そのあいだぼくは、魔術師の手のひらにあるマメを見た。手のひらにある入りくんだ掌紋を見た。そして魔術師はゆっくりと、人差し指、中指、親指を曲げ、すっと自分の左目へと挿しこんだ。それを見てぼくは、自分の眼球にかすかな痛みを感じた。魔術師の眼窩はとても柔らかいらしく、指はあっという間になかへ滑り込んだ。魔術師はわずかに指を回すと、自分の左目を取り出し、手のひらを広げてみせた。取り出された眼球は血もついてなければ、傷さえもなかった。完璧な丸さの、まるで今、誕生したばかりの乳白色の星のようだった。

16 **掌紋**　手のひらにある皮膚の隆起線。指紋と同様に個体固有のものである。

17 **眼窩**　眼球が入っている頭蓋骨のくぼんだ部分。

＊ 馬が合う

問 **「チョウを捕まえて…気づいた」とあるが、どういうことか。**



呉　明益（ごめいえき）　一九七一年～。小説家・エッセイスト。台湾・台北生まれ。二十一歳まで中華商場で過ごした。代表作に連作短編『歩道橋の魔術師』、長編小説『自転車泥棒』などがある。本文は『歩道橋の魔術師』（平成二十七（二〇一五）年刊）によった。

〔訳者〕**天野健太郎（あまの　けんたろう）**　昭和四十六（一九七一）年～平成三十（二〇一八）年。翻訳家。訳書に呉明益『自転車泥棒』など。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 子供の頃の「ぼく」の感性がよく表れている箇所を指摘してみよう。

2 この小説では、ノスタルジー（郷愁）を感じるが、それはなぜか、考えてみよう。

3 「「本当」のマジック」（二四二・上20～下1）とあるが、それはどのようなものか、考えてみよう。

4 魔術師の「目」についての描写を抜き出してみよう。

5 4 を踏まえて、最後の段落（二四二・下8～下19）が意味していることについて考えてみよう。

❖言葉と表現

1 中華商場の八棟につけられている名前「忠」「孝」「仁」「愛」「信」「義」「和」「平」について、それぞれが具体的にどのようなことを表しているか、調べてみよう。

2 伝統的な儒教の徳目について調べ、1 と比較してみよう。

❖言語活動

1 作品中に出てくる台北の街や食べ物について調べてみよう。

2 子供の頃の不思議な体験や、子供の頃ならではの感覚を思い出して、話し合ってみよう。

都市は／を語る

石田英敬（いしだひでたか）

まずバルト[1]が都市論と記号論[3]との結び付けを試みている文章を少し読んでみましょう。

都市は一個の言説[4]（ディスクール）であり、その言説は、まさしく一個の言語活動なのです。都市はその住民に話しかけ、私たちは自分の都市を語る。*ただ住んだり、動き回ったり、眺めたりしているだけにしても、私たちは、自分が現にそこにいる都市を語っているのです。

「都市は一個の言説（ディスクール）である」という表現は分かりにくいかもしれませんが、「言説（ディスクール）」とは実際の意味活動が生み出したもの――記号の現働態[5]――ということですから、都市を意味活動の現働態として考えてみることができると述べたものです。そして、都市の言説は「一個の言語活動」だというのは、都市の記号の現働態を言語活動のように考えてみることができるという意味です。都市を記号活動の実践系として理解することが、都市の意味論[6]の手がかりになるということなのです。

初出『記号の知／メディアの知―日常生活批判のためのレッスン』平成十五（二〇〇三）年

1 バルト Roland Barths 一九一五年～一九八〇年。フランスの哲学者・批評家。

2 都市論 都市の構造や機能などについて研究する学問の総称。記号学や社会学など多様なアプローチがなされている。

3 記号論 人間が意味づけをしたり、意味を読み取る行為である記号現象について、その仕組みや意義を研究する学問。

4 言説（ディスクール） discours（フランス語）。言語学の用語。一つのメッセージを形成する言語表現の総体。

「都市の言語活動について語るとき、喩え［＝都市と言語活動との喩え］から分析に移行するにはどうすればよいのでしょうか」とバルトは自問するのですが、その基本となる考え方について次のように述べています。

都市の意味論的研究にとっての最良のモデルは、少なくとも最初のうちは、ディスクールの中の文によって提供されると思います。そして私たちは、ここでまた、[7]ヴィクトル・ユーゴーの昔の直観に出会います。すなわち、都市は、一個の書かれた物（[8]エクリチュール）なのです。都市の中を移動する者、つまり都市のユーザー（私たちは皆そうです）は、何をしなければならないか、どのように移動するかに応じて、同じ[9]言表（エノンセ）のさまざまな断片を取り上げ、それをひそかに現働化する一種の読者なのです。都市の中を動き回るとき、私たちは皆、[10]クノーの詩集『[11]百兆の詩』の読者と同じ立場に立っています。そこでは、ただ一行の詩句を変えるだけで異なった詩（ポエム）を見いだすことができるのです。都市の中にいるとき、私たちは自分でも知らぬ間に、いわばこうした[12]前衛的な読者になっているのです。

「ヴィクトル・ユーゴーの直観」というのは、『[13]ノートルダム・ド・パリ』の記述のことです。言語学的に言えば、言説（discourse/discours）の最小の単位は文（sentence/phrase）で

5 現働態 現実態とも。潜在的に持っている能力・性質が現実に現れて活動状態にあること。

6 意味論 記号論の一分野。記号とその指示物またはそれが引き起こす反応との関係を研究する。

7 ヴィクトル・ユーゴー Victor Marie Hugo 一八〇二年～一八八五年。フランスの詩人・小説家。

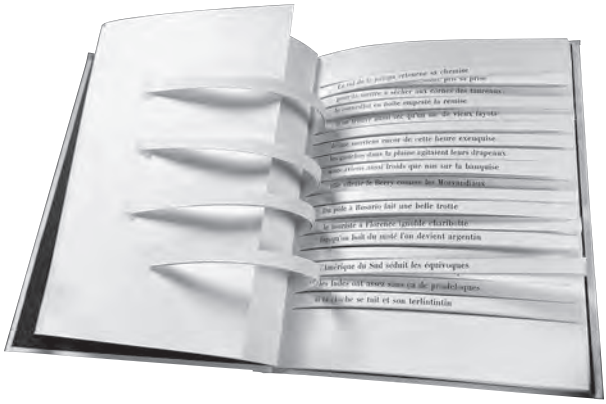
8 エクリチュール écriture（フランス語）。話し言葉に対立して用いられる哲学用語の一つ。「書くこと」「書かれたもの」。

9 言表（エノンセ） énoncé（フランス語）。言語によってなされた個々の表現。ディスクールはエノンセの総体とされる。

＊まさしく

すが、文を生み出す言語活動のように、私たちが都市を生きることによって刻々と生み出している意味活動を考えてみようというのです。都市は「書かれた物（エクリチュール）」なのだというのは、都市は住民の記号活動が生み出した痕跡の総体であるということを述べたものですし、「言表（エノンセ）」という用語もここでは、記号活動の出来事が生み出したものぐらいの意味で使われている――「テクスト」[14]という言葉で呼んでもよいかもしれません――と理解しましょう。

文章中で参照されているクノーの『百兆の詩』（一九六一年）は図のように各ページのソネット[15]（十四行詩）を一行ずつに切り、十ページに渡ってそれぞれの詩行を選び取ることができるように工夫を凝らした「コンビナトーリア（組み合わせ）」[16]に基づく作品です。この仕掛けによって読者は十の十四乗通りの「詩」を作りながら読むことができるのです。つまりバルトの見方では、都市を構成する無数の通りや区画や目印などのそれぞれの要素は、都市という巨大なテクストの集合を形作っている記号要素の



クノー『百兆の詩』

10クノー　Raymond Queneau 一九〇三年～一九七六年。フランスの詩人・小説家。『地下鉄のザジ』など実験的な作風で知られる。

11『百兆の詩』　Cent mille milliards de poémes 一九六一年刊。

12前衛的　先駆的な。

問「前衛的な読者」とは、どのような読者か。

13『ノートルダム・ド・パリ』　Notre Dame de Paris ヴィクトル・ユーゴーの小説。一八三一年刊。

14テクスト　文学批評の対象になるもの。バルトは「作品」を作者に関連付けられたものとし、より中立的な意味で「テクスト」の用語を用いた。

15ソネット　sonnet（イタリア語）。十四行からな

ように考えることができて、都市の中を移動する者は、それらの要素のいくつかを取り上げて、そのつど意味を生み出していく「読者」のようなものだというのです。詩のテクストの断片を拾い上げて読んでいく読者がそれらのテクストを読むことでテクストの意味を活性化する、つまり読者がそのテクストの言葉を語ると同時に、それを通してそのテクストが語り始めるように、都市を歩くとき私たちは都市を語ると同時に、私たちの日常の交通を通して都市は私たちに語りかけている、というわけなのです。

例えば、私たちが街を歩いているとき、ある場所から別の場所へと移動しているとき、私たちは無数の読み方のできる巨大な書物のある一ページを開いてその何行かを拾い読みし、続いて別のページの別の行へと移っていくようにして都市の意味空間を現働化しているのだ、と考えられるわけです。

それでは、都市の記号作用はどのような要素から成り立っているのか、どのような意味作用の単位を考えてみることができるのか、ということが次に問題となります。言語の意味作用であれば、その構成要素を音素[17]から形態素[18]、構文の統語規則[19][20]に至るまで画定[21]することができますが、「都市の記号作用」については、同じように要素単位や文法的規則性を考えることができるのかという問いです。私の考えでも、都市の意味作用に何らかの要素単位と規則性とを見いだすことができるかどうかという点に、都市の意味論（＝記号論）の可能性がかかっていると

るヨーロッパの定型詩。ルネサンス期にイタリアで創始された。

16 **コンビナトーリア** combinatoria（ラテン語）。

17 **音素** ある言語における意味の区別にかかわる、音の最小単位。

18 **形態素** 意味を有する、言語の最小単位。

19 **構文** 文の組み立て。

20 **統語規則** 単語をつなげて句・節・文を作る際の語の配列や関係の規則。文法。

21 **画定** 区切りをはっきりと定めること。

＊ 刻々と

思われます。

バルトがこの論文を書いていた時代に思い描いていた方向は、都市の住民や交通者が共有する「都市のイメージ」の側から都市の意味作用についてのアプローチ[22]を試みるというものでした。彼が手がかりにしたのは、知覚心理学[23]から都市のイメージャビリティー（imageability イメージ喚起性）を研究しようとした都市学者ケヴィン・リンチ[24]の仕事です。一つの都市で生活をしたりその中を移動したりするとき、私たちはその都市について何らかのイメージを形成し、その形成されたイメージをもとに自分の位置や状況を把握しています。ある意味では、私たち一人一人の心の中にカーナビ[25]のような、しかし、もっと心的な印象に基づいたメンタル[26]な地図が描かれていて、それに基づいて、私たちは街の中を移動していると考えてみることができるわけです。そのようなときに住民の心の中に形成されるイメージはどのような構成を持っているのか、街のどのような要素がそうしたイメージを形成することに役立っているのか、これが都市のイメージの問題です。住民が抱く都市のイメージには、個人差や社会階層やグループによる差異が存在します。しかし、そのような個人差や社会グループの差を越えて都市のイメージが形成されるときに共有されるイメージの体系としての「パブリック・イメージ」[27]はどのように作られるのか、そのことを捉えようというわけです。

私たちがある街を思い浮かべるとき、どのような構成要素と規則性に基づいて、その街全体やある一角をイメージとして構成しているのか。そのようなイメージの要素がはっきりと分節[28]

22 **アプローチ** approach（英語）。学問・研究における、対象への接近の仕方。研究法。

23 **知覚心理学** 人間の知覚、特に視覚と認知のあり方を研究する分野。

24 **ケヴィン・リンチ** Kevin Lynch 一九一八年～一九八四年。アメリカの都市計画家・建築家・都市研究者。『都市のイメージ』は一九六〇年刊。

25 **カーナビ** car navigation system（英語）の略。人工衛星からの電波を受信し、地図上の位置を表示する装置。

26 **メンタル** mental（英語）。心的。精神的。

問 **「メンタルな地図」とは、どのような地図か。**

27 **パブリック・イメージ** public image（英語）。広く一般に認識されてい

されやすい街は心に思い浮かべやすく分かりやすい――つまり、街としての読解可能性が高い――のに対して、そうした要素がうまく分節を作り出しえない街は分かりにくい――読解可能性が低い――と経験される。

『都市のイメージ』の中で、リンチは、都市のイメージの分析に三つのレヴェルを想定しています。それは、1同定性（identity）、2構造（structure）、3意味作用（meaning）の三つのレヴェルです。1同定性とは、都市のイメージを構成する要素がどのようなものであるかを同定することができるかどうか、どのような要素が同定されるのか、という分析のレヴェルです。2構造とは、そのようにして同定された要素間にどのような相関関係と相互作用が成立しているのかを研究する分析のレヴェルです。1と2は、実際の都市の物理的―現実的な構造との対応を抽出することができる〈形式〉のレヴェルです。それに対して、3意味作用は、1と2を踏まえて、それぞれの都市生活者が都市に与えている意味づけのレヴェルで、個人差や社会的なカテゴリー[29]や階層による差異にも関連するとされ、1と2の形式的要素や構造に基づいてどのような意味づけがされているのかという具体的な意味現象を示します。

つまり、1と2のレヴェルが、言語で言えば、形式的な構成要素とそれらの要素間を結び付ける〈範列〉[30]や〈連辞〉[31]の構造規則というレヴェルに対応するとすれば、3はそれらの言語の構造に基づいてどのような意味が実際に生み出されるのかという意味経験の具体的成立のレヴェル――〈言説〉のレヴェル――に対応させて考えてみることができるでしょう。

るイメージ。

28 分節 連続しているものをいくつかに区切ること。また、その区切り。

29 カテゴリー Kategorie（ドイツ語）。範疇（はんちゅう）。同じ種類・性質のものの属する部類・部門。

30 範列 ある文脈を構成する個々の語を選ぶ際、潜在的に選ばれうる、文法的に同一レベルにある無数の語群。

31 連辞 一つの記号の次に続く記号の実現を指定している結合関係のこと。



石田英敬（いしだ ひでたか）　昭和二十八（一九五三）年〜。フランス文学者・メディア記号論研究者。千葉県の生まれ。十九世紀以後、文字だけでなく映画やテレビなどに発達したメディア・テクノロジーと、人間との関係を研究する。権力について考察したフランスの思想家ミシェル・フーコーの研究でも知られる。著書には『現代思想の教科書―世界を考える知の地平15章』などがある。本文は『記号論講義―日常生活批判のためのレッスン』（令和二（二〇二〇）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1 クノーの詩集『百兆の詩』は、通常の読書行為をどのように変えた点で画期的なのか、説明してみよう。

2 バルトは、「都市の中を動き回るとき、…読者と同じ立場に立っています」（二四五・9〜10）と述べているが、それはどのようなことか、説明してみよう。

3 都市のイメージの分析にかかわる「三つのレヴェル」（二四九・4）を、筆者は「〈形式〉」（二四九・10）と「意味づけ」（二四九・11）という観点からどのように分けているか、整理してみよう。

◆言葉と表現

1 本文では、英語やフランス語の用語と翻訳語を併記している例が多いが、その意義はどのような点にあるか、考えてみよう。

2 日常的に使っている語に、もともとは外国語の翻訳であったものがないか、調べてみよう。

◆言語活動

1 実在する都市（町・街）を一つ選び、以下のいずれかの方法で調べ、そのイメージを話し合ってみよう。

① 実際に訪問する。
② 地図を見る。
③ 地域にある文学館を訪問する。
④ 本やインターネットで写真や画像を見る。

2 1のイメージを形成する「形式」は何か、学習のポイント3を踏まえて、具体的な場所（建物や道路、公園や川など）を挙げてみよう。

3 2で挙げた「形式」は、どのように「意味づけ」られるか、個人的な経験や行事などを挙げて、説明してみよう。

◆暮らす、生きる、そしてそれを描く
――都市を通して文学の読みを深める――

『檸檬』『下町』『歩道橋の魔術師』には、それぞれ舞台となっている都市に生きている人物が生き生きと描かれている。そこに暮らす人々にとって都市はどのような場所であるのか、都市には、どのような感情が潜んでいるのか、それらを文学作品で表現することにはどのような意味があるのか、さまざまな作品から考えてみよう。

課題 都市は、登場人物の目を通して、どのように小説に描かれるのか、この単元で学んだ三つの作品を通して、考えてみよう。

1 三つのグループに分かれ、『檸檬』『下町』『歩道橋の魔術師』から、重複しないように一作品を選び、以下の活動をしてみよう。

① 作品に出てくる地名などを、それぞれの教材中の地図（二〇三ページ・二二六ページ・二三〇及び二四〇ページ）で確認してみよう。

② 主人公である「私」（『檸檬』）・「りよ」（『下町』）・「ぼく」（『歩道橋の魔術師』）にとって、それぞれ京都・東京・台北はどのような町であるのか、二五〇ページの「言語活動」に倣って、整理してみよう。

(1)「形式」に相当する、作中の具体的な場所を整理してみよう。

(2) (1)で整理した「形式」は、主人公によって、どのように「意味づけ」られているか、整理してみよう。

2 自然を見る、自己を見る

◇詩の中で用いられている多彩な比喩表現に触れ、その豊かさを味わうとともに、表現技法と内容との関係性を分析的に捉える力を養う。
◇それぞれの詩編の読解を通して、比喩の魅力や効果を確かめる。

流れる髪　永瀬清子
羨望　伊東静雄
独楽　高野喜久雄
韜晦　多田智満子
高度　小池昌代
文学の窓　秋（リルケ／茅野蕭々訳）
単元の言語活動2

流れる髪

永瀬清子（ながせきよこ）

また
私はトゲトゲの多い小さい草の実だから、それで人にとりつこうとするほかなかったのだ。
その人もやっぱりさびしい旅行者だったので、草の実をはこんだけれどおしまいには私を落（おと）した。
トゲが折れ磨滅した時、はなれて落ちるのは草の実として当然のことにちがいない、それで

問「その人もやっぱり」とあるが、誰と比べているのか。

事は成就するのだから——
だから悲しみというものは人間に必要なことに属するのだ。
かんじんなことは何が成就したかを知ることだ。そしてそのことでさびしさをいやす努力をすることだ。
（タトエバ仮リニ、詩ヲカクト云ウコトダケデモ……）

雨

芝生に降っている雨は見えない。そのひろいひろがりの事なさ静かさ。
ただ雨は石とコンクリートでくぎられた池のおもてにのみ降っている。
その小さなドット模様とさざなみの輪。
視覚の上の雨は丸い輪のかさなりでふるえ生きている四角な一枚の敷き物。
私の中の心臓のように、私の中の心臓のように。

私をとりまく人が

私をとりまく人が私を愛していないとは思えない。けれど私をとりまく人々が私を理解しているとは思えない。
いいえ常時誤解されていると云った方がもっと適確だろう。

例えば詩を書く事も相手からみればあまりにも馬鹿げたむだづかい。ただ*寛恕によって大目にみてやる事にすぎない。

私はその寛恕を宙に放りすててやりたい。詩を書く時、その事ではじめて私は私自身なのだから。

けれどそのため泣きもせず喧嘩もしない。

なぜなら双方のどちらが正しいか云い解くすべが皆無だから。そのまちがいを指摘したり修正したりする事は不可能だから。そして私自身さえその本当はどうなのかわからないから。お互にどちらの誤謬かもわからないから。

例えば又、詩を書く友人でさえ誤解の点では同じこと。

彼等は私の本当の価値を見ようとしない。せいぜい今の流行と比較するか、自分自身の馬鹿さを錘にしてはかる。つまりそれ以上の尺度は絶対に所持しないから。所持しないものでどうして怒れようか。

それ故私が生きるには

いつも人にたばかられているようにみせ
私も人をたばかるのだ。

それは不実な仕事だろうか。

いいえそれが一番此の世で優雅で温い仕事。

問「いつも人にたばかられて…人をたばかるのだ」とは、ここではどういうことを指すか。

狭い人間と、そして私自身に対する、あわれふかい仕事なのだ。

言葉

私は言葉を垂直に考える。特に自分の言葉を。
あるものは水面に近くいて鷗（かもめ）たちについばまれる。
あるものは中位の水深に泳いで、漁夫の網に追われる。
そしてあるものは底にぴったりはりついている。深海には[1]トランシットの形の魚がいたり、雪のように降る生物もある。
どれが最も値打（ねうち）あるものかわからない。
けれど私の求めるのは[2]シーラカンス。深い深い所で青銅の鱗（うろこ）の中の孤者。もし一尾でもみつかったらその意味は百万年の時間を物語るのだ。

ここに集めたものを何と呼んだらいいかと長い間私は迷っていました。本当は私の詩作品と同じ質だと思いながら、より瞬間的な生成の仕方をしているものとでも言えましょうか。もしかしたら詩の削り屑（くず）、逆工作物かもしれません。翡翠（ひすい）や名木の削り屑なんかではなく、野菜の削り屑、氷の削り屑であるかもしれません。もちろん何の役目も持たないのですが、それでも

1トランシット　測角器の一種。測量や天体観測に用いられる。

2シーラカンス　シーラカンス目の魚類の総称。絶滅したと考えられていたが、一九三八年に南アフリカで発見された。「生きた化石」とも呼ばれる。

問「逆工作物」とあるが、どういうことか。

＊寛恕

生きているある瞬間のとばっちりです。

そして原因結果をつまびらかにしないあらわれ方でたちまちあらわれ、いつでも割り切れない数字、三、七一とか八五、九とかへんなところで目盛りが止まってしまいます。詩そのものよりずっと楽な姿ですが、「詩」と対蹠する意味の「散文」（つまり随筆とかエッセイ）でもないうえに、「散文詩」と言うほど風采ととのわないのです。でもやはり詩人の仕事の一種であれかしと願っています。そして何に似ているか決めないままに「短章」と至極即物的に名づけたのでした。

思えばずっと若いときから私はこの形を、私を取り巻く非詩的な時間の隙間から、釣り上げることを習いとしてきたのでした。

5

＊対蹠　風采　あれかし　至極　即物的



永瀬清子（ながせ きよこ）　明治三十九（一九〇六）年～平成七（一九九五）年。詩人。岡山県の生まれ。若いうちから詩作を始め、『グレンデルの母親』で地歩を確立した。戦後は故郷に戻って農作業のかたわら詩作を続け、地域の詩人たちの育成に努めた。その他の詩集に『諸国の天女』『美しい国』などがある。本文は『短章集　蝶のめいてい／流れる髪』（平成十九（二〇〇七）年刊）によった。

羨望

伊東静雄（いとうしずお）

昼寝からゆり起（おこ）されて客を見にいつたら
年少の友人が独り坐（すわ）つてゐた
みやげだと言つて貝殻や海の石をとり出して
かれの語るのをきくと
或（あ）る島から昨日帰つて来たのであつた
「自炊と海水浴で
勉強は何にもできませんでした」
勉強といふのは——かれは受験生であつた
「また　勉強してゐると
裏山で蟬（せみ）がじつにひどく鳴き立てて
——蟬は夜明（よあけ）から　夜ふけにも鳴くのですね——
時にはあまりの事に木刀をひつ提げて
窓からとび出して行つた程でした」
この剣道二段の受験生は

また詩人志望者でもあつたので
わたしはすこし揶揄ひたくなつた
「蟬の声がやかましいやうでは
所詮日本の詩人にはなれまいよ」
といふと何うとつたのか
かれはみるみる赤い羞しげな表情になつて
「でも——それが迚も耐らないものなのです」
とひとりごとのやうに言つた
そのいひ方には一種の感じがあつた
わたしは不思議なほど素直に
——それは　迚も耐らないものだつたらう
しんからさう思へてきた
そして　訳のわからぬうらやましい心持で
この若い友の顔をながめた

問「一種の感じ」とあるが、どのような感じだと考えられるか。



伊東静雄（いとう　しずお）　明治三十九（一九〇六）年～昭和二十八（一九五三）年。詩人。長崎県の生まれ。詩集『わがひとに与ふる哀歌』『夏花』などにおける研ぎ澄まされた抒情性が高く評価された。大阪府に暮らし、中学・高校の国語科の教員を長く務めた。その他の詩集に『春のいそぎ』『反響』などがある。本文は『定本　伊東静雄全集』（昭和四十六（一九七一）年刊）によった。

独楽（こま）

高野喜久雄（たかのきくお）

如何（いか）なる慈愛
如何なる孤独によっても
お前は立ちつくすことが出来ぬ
お前が立つのは
お前がむなしく
お前のまわりを　回っている時だ

しかし
お前がむなしく　そのまわりを　回り
如何なるめまい
如何なるお前の vie[1] を追い越したことか
そして　更に今もなお
それによって　誰が
そのあり余る無聊（ぶりょう）*を耐えていることか

問「お前が立つのは…回っている時だ」とあるが、具体的に、どういうことを指しているか。

1 vie　フランス語で、一生・生涯・人生などの意。

* 無聊



高野喜久雄（たかの きくお） 昭和二（一九二七）年～平成十八（二〇〇六）年。詩人・数学者。新潟県の生まれ。生の意味や目的を問い、事象の本質を見つめる硬質な詩を多く残し、後年は合唱曲の作詞なども手がけた。詩集に『独楽』『存在』『闇を闇として』、作詞した合唱曲に『水のいのち』などがある。本文は『現代詩文庫40　高野喜久雄詩集』（昭和四十六（一九七一）年刊）によった。

韜晦（とうかい）

多田智満子（ただちまこ）

山々の輪廓（りんかく）はけさ不思議な表情をしている。天にも地にも属さない気まぐれな線が、波うったり、尖（とが）ったり、のめりこむように傾いたりしておごそかに不動の運動をつづけている。それは大地の鼓動を示すグラフのようでもあり、神の幼い指先のいたずらのようでもあり、嘘（うそ）つきの声の抑揚のようでもある。山たちは人のまねをするのが上手だ。喜んでいる人には笑いかけるし、怒っている人には腕をふりあげ、悲しんでいる人にはうなだれてみせる。わたしにむかっては、ずるそうにどうとでもとれるような表情をしていたが、やがて雲をもくもく吐き出して、古い日本画の夢想のなかに、うまく韜晦してしまった。

問「山たちは人のまねをするのが上手だ」とは、この場合、どういうことを指すか。



多田智満子（ただ ちまこ） 昭和五（一九三〇）年～平成十五（二〇〇三）年。詩人・翻訳家。福岡県の生まれ。フランス文学を中心とした翻訳のほか、漢籍や仏典、ギリシャ神話など幅広い古典的教養に基づいた執筆活動を展開した。詩集に『花火』『薔薇宇宙』、随筆に『鏡のテオーリア』などがある。本文は『現代詩文庫50　多田智満子詩集』（昭和四十七（一九七二）年刊）によった。

高度

小池昌代

蜂の飛び方は凜然[1]としている
はげしく羽をふるわせながら
空間に静止し
それからきゅうに
がくんと高度を上げたり、下げたりして
蝶のように
なだらかな飛行の曲線を描かない
生き方の結果を
冷酷に示す折れ線グラフのようだ

1 凜然　きりっと引き締まり、勇ましいさま。

ある高さから
ある高さへ

それ自体
何も測らず
主張せず
ただ
透明なガイネン
としてそこに在るもの

私が惹(ひ)かれたのは
蜂よりも
蜂の「生」をささえているかのような
明確で崇高な
その高度だった

問「何も測らず」「主張せず」とは、蜂の飛び方のどのような様子を指しているか。



小池昌代（こいけ まさよ） 昭和三十四（一九五九）年〜。詩人・小説家。東京都の生まれ。詩・小説・エッセイのほか、絵本の翻訳やカット画も手がけている。著書に『永遠に来ないバス』『もっとも官能的な部屋』『コルカタ』（詩集）、『感光生活』『タタド』（小説）、『屋上への誘惑』（エッセイ）などがある。本文は『現代詩文庫174　小池昌代詩集』（平成十五（二〇〇三）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 永瀬清子『流れる髪』中の「雨」において、描かれている風景がどのようなことの比喩になっているか考え、全体を通して作者の表現したいことをまとめてみよう。

2 伊東静雄『羨望』において、なぜこの「年少の友人」（二五七・2）は、蟬の声を「迚も耐らない」（二五八・7）と感じたのだろうか、話し合ってみよう。

3 高野喜久雄『独楽』において、「お前が立つ」（二五九・4）ことと「お前の vie」（二五九・10）とはどのような関係にあるか、考えてみよう。

4 多田智満子『韜晦』は、一度も改行せずに書かれているが、この形式によってどのような効果が生み出されているか、考えてみよう。

5 小池昌代『高度』において、「私」（二六二・9）が「蜂」の「高度」（二六二・13）に「惹かれた」（二六二・9）のはなぜだと考えられるか、話し合ってみよう。

◇言葉と表現

1 「あれかし」（二五六・5〜6）という言葉を使って短文を作ってみよう。

2 「習い」（二五六・9）にはどのような意味があるか、調べてみよう。

秋

ライナー・マリア・リルケ
茅野蕭々（ちのしょうしょう）訳

葉が落ちる、遠くからのやうに落ちる、
大空の遠い園が枯れるやうに、
物を否定する身振（みぶり）で落ちる。

さうして重い地は夜々に
あらゆる星の中から寂寥（せきりょう）へ落ちる。

我々はすべて落ちる。この手も落ちる。
他を御覧（ご）。総（すべ）てに落下がある。

しかし一人ゐる、この落下を
限（かぎり）なくやさしく両手で支へる者が。

ライナー・マリア・リルケ　Rainer Maria Rilke　一八七五年～一九二六年。詩人・作家。オーストリアの生まれ。

茅野蕭々　明治十六（一八八三）年～昭和二十一（一九四六）年。ドイツ文学者・詩人。長野県の生まれ。

（本文は『リルケ詩抄』〔平成二十（二〇〇八）年刊〕によった。）

日本の近・現代詩は、明治以降に試みられた西洋の詩の翻訳から甚大な影響を受けて発展した。上田敏『海潮音』（明治三十八年）、永井荷風『珊瑚（さんご）集』（大正二年）、堀口大学『月下の一群』（大正十四年）といった訳詩集は、ヨーロッパの著名な詩人たちを初めて日本に紹介するとともに、西洋文化に裏打ちされた新しい概念や情動を日本語の中に導き入れ、詩的表現の幅を大きく広げることになった。時には七五調や文語の情趣を活用しながら、大胆かつ繊細に原詩を捉え直したそれら翻訳詩の独特の魅力は、新訳が多く出されている現在でもなお生彩を失わず、愛読され続けている。

ここに掲出したリルケもまた、早くから翻訳によって紹介され、日本の詩の歴史に決定的な足跡を残した詩人である。茅野蕭々訳『リルケ詩抄』（昭和二年）の清新な口語訳は、自然界の様々な形象に生の本質を見るリルケの透徹したまなざしと調和し、幅広い読者の共感を得た。

◇単元の言語活動 2

◆自然と自己との関係を考える
――比喩を通じて物事を捉えてみよう――

私たちはよく自然の風景や生物、身の周りの事象などに、自己の内面を投影したり、自分自身の似姿を感じ取ったりする。この単元に収録した五編の詩は、いずれもさまざまな比喩を用いながら、そのような自然と自己との関係性を表現している。比喩によって、私たちは自分自身を含めた物事の本質を捉えやすくなることがある。五編の詩の比喩表現を読み解くことで、それぞれの詩編がどのようなものの見方、考え方を示しているのか、まとめてみよう。

課題 比喩表現（直喩・暗喩など）を通じて自然や自己を捉えることで、物事がどのように見えてくるか、探究してみよう。

1 永瀬清子『流れる髪』（「また」「雨」「私をとりまく人が」「言葉」）、伊東静雄『羨望』、高野喜久雄『独楽』、多田智満子『韜晦』、小池昌代『高度』では、さまざまな比喩が用いられている。

① それぞれの詩編における比喩表現に注目し、何が何の比喩であるのか、書き出してみよう。

② ①の中で、直喩と暗喩の違いに着目し、その違いを考えてみよう。

③ ①・②の作業を通して、特に作者のものの見方や考え方が強く表れている部分はどこかを探し出し、その内容について話し合ってみよう。

2 比喩表現を用いて、自分自身の性格や、学校生活に対する自分の考えを表現してみよう。その際、①直喩を用いる場合、②暗喩を用いる場合で、書き方がどのように変わるか、確かめてみよう。

3 文学と歴史

- 時代状況や舞台設定に注目し、作品とのかかわりを捉える。
- 歴史的な文脈の中に作品を置き、批評性や問題意識をつかむ。
- 文学作品がどのように評価され、読まれてきたのかについて考え、その評価を問い直す。

舞姫 森鷗外
みづの上日記 樋口一葉
文学の窓 日和下駄（永井荷風）
入れ札 菊池寛
コラム 文学の歴史について再考する
物語と歴史のあいだ 野家啓一
単元の言語活動3

舞姫（まひめ）

森（もり）鷗外（おうがい）

石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓（つくえ）のほとりはいと静かにて、[1]熾熱灯（しねつとう）の光の晴れがましきもいたづらなり。[2]今宵（こよひ）は夜ごとにここに集ひ来る[3]骨牌（カルタ）仲間もホテルに宿りて、船に残れるは余一人のみなれば。五年前（いつとせ）のことなりしが、平生（ひごろ）の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴン[4]の港まで来（こ）し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文、日ごとに幾千言をかなしけん、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身の程知らぬ放言、さらぬも尋常（よのつね）の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかにか見けん。こたびは途（みち）に上りしとき、日記（にき）ものせんとて買ひし冊子もまだ白紙のままなる

は、独逸（ドイツ）にて物学びせし間（ま）に、一種のニル・アドミラリイの気象をや養ひ得たりけん、あらず、これには別に故あり。

げに東（ひんがし）に帰る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、*浮き世の憂き節をも知りたり、人の心の頼み難きは言ふも更なり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰（たれ）にか見せん。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

ああ、[6]ブリンヂイシイの港を出（い）でてより、はや二十日余りを経ぬ。世の常ならば[7]生面（せいめん）の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、❖微恙（びやう）にことよせて房（へや）の内にのみ籠もりて、同行の人々にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭（かうべ）のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、瑞西（スイス）の山色をも見せず、*伊太利（イタリア）の古蹟（こせき）にも心をとどめさせず、中頃は世をいとひ、身をはかなみて、[8]腸日（はらわた）ごとに九回すともいふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳（かげ）とのみなりたれど、文読（ふみ）むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾度となく我が心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みを❖銷（せう）せん。もし外の恨みなりせば、詩に詠じ歌によめる後は心地すがすがしくもなりなん。これのみは余りに深く我が心に彫（ゑ）りつけ

初出『国民之友』明治二十三（一八九〇）年一月

1 熾熱灯　白熱電灯。　2 いたづらなり　無意味である。むなしい。　3 骨牌　カード。トランプ。
4 セイゴン　サイゴン。現在のベトナムのホーチミン市。　❖途に上りしとき　帰国の途についたとき。
5 ニル・アドミラリイ　nil admirari（ラテン語）。何事にも驚いたり感嘆したりしないこと。外界に左右されない冷静な態度や精神をいう。
6 ブリンヂイシイ　アドリア海に面したイタリアの港町。　7 生面　初対面。　❖微恙にことよせて　ちょっとした病気にかこつけて。
8 腸日ごとに九回す　憂い悩みが甚だしいさま。司馬遷『報二任安一書』（ズル・ニ）に「腸一日而九廻（ニ・くわいス）。」の例がある。
❖銷せん　消し去ろう。忘れてしまおう。

問「東に帰る今の我は……昔の我ならず」とは、どういうことか。

問「これや日記の成らぬ縁故なる、あらず」とあるが、「余」はなぜ日記が書けないのか。

＊浮き世　一抹

られたれば、さはあらじと思へど、今宵は辺りに人もなし、房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほ程もあるべければ、いで、その概略を文につづりてみん。

余は幼き頃より厳しき庭[9]の訓へを受けしかひに、父をば早く失ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧[10]藩の学館にありし日も、東京に出でて予備黌[11]に通ひしときも、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までに



凱旋塔



ブランデンブルク門



19 世紀末のウンテル・デン・リンデン

またなき名誉なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しき年を送ること三年(みとせ)ばかり、官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さんも、我が家を興さんも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を越えし母に別るるをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れて[12]伯林(ベルリン)の都に来ぬ。

余は[12]模糊(もこ)たる功名の念と、[13]検束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこの欧羅巴(ヨオロッパ)の新大都の中央に立てり。なんらの光彩ぞ、我が目を射んとするは。なんらの色沢ぞ、我が心を迷はさんとするは。菩提樹下(ぼだいじゅか)と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この[14]大道髪のごときウンテル・デン・リンデンに来て両辺なる石畳の人道を行く隊々(くみぐみ)の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだ[16]維廉一世(ウイルヘルム)の街に臨める窓によりたまふ頃なりければ、さまざまの色に飾り成したる礼装をなしたる、顔よき少女(をとめ)の巴里(パリ)まねびの粧(よそほ)ひしたる、かれもこれも目を驚かさぬはなきに、車道の[17]土瀝青(チヤン)の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲にそびゆる楼閣の少しとぎれたる所には、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみなぎり落つる噴井(ふきゐ)の水、遠く望めば[18]ブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる[19]凱旋塔(がいせんたふ)の神女の像、このあまたの景物[20]目睫(もくせふ)の間(かん)に集まりたれば、初めてここに来しものの[21]応接にいとまなきもうべなり。されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動かさじの誓ひありて、常に我を襲ふ外物を遮りとどめたりき。

余が❖鈴索(すずなは)を引き鳴らして謁を通じ、公の紹介状を出だして東来の意を告げし[22]普魯西(プロシア)の官員は、皆快く余を迎へ、公使館

❖**さはあらじ**　そう（すがすがしくなること）はあるまい。　❖**房奴の来て電気線の鍵をひねる**　ボーイが来て消灯する。　**9 庭の訓へ**　家庭教育。庭訓(ていきん)。　**10 旧藩の学館**　江戸時代の藩校。　**11 予備黌**　東京大学予備門。旧制第一高等学校の前身。　**12 模糊たる**　漠然とした。ぼんやりとした。　**13 検束**　ここでは、自己規制。　**14 大道髪のごとき**　大道がまっすぐ延びたさま。　**15 ウンテル・デン・リンデン**　ベルリン市の中心部を東西に走る街路の名。菩提樹の下、の意。　**16 維廉一世**　Wilhelm I　一七九七年～一八八八年。プロシア王から、一八七一年、ドイツ統一を果たした後、初代ドイツ皇帝となった。　**17 土瀝青**　アスファルト。　**18 ブランデンブルク門**　ウンテル・デン・リンデンの西端にある門。　**19 凱旋塔**　ブランデンブルク門の北西、ケーニヒス広場にある戦勝記念の塔。　**20 目睫の間**　目とまつげとの間。転じて、きわめて短い距離。　**21 応接**　対応すること。　❖**うべなり**　もっともである。

問「我を襲ふ外物」とは、何か。

よりの手続きだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせんと約しき。喜ばしきは、我がふるさとにて、独逸、仏蘭西の語を学びしことなり。彼らは初めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事のいとまあるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、[23]ところの大学に入りて政治学を修めんと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過ぐすほどに、公の打ち合はせも済みて、取り調べもしだいにはかどりゆけば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、つひには幾巻をかなしけん。大学のかたにては、幼き心に思ひ計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、これかかれかと心迷ひながらも、二、三の法家の講筵に連なることに思ひ定めて、謝金を収め、行きて聴きつ。[24]

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちしが、時来れば包みても包み難きは人の好尚なるらん、[25]余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるがうれしさに怠らず学びしときより、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさにたゆみなく勤めしときまで、ただ[26]所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我が身の今の世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、またよく法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きたる辞書となさんとし、我が官長は余を生きたる法律となさんとやしけん。辞書たらんはなほ堪ふべけれど、法律たらんは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいらへしつる余が、この頃より官長に寄する文にはしきりに法制の細目にかかづらふべきにあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらんには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、やうやく[27]蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らんとしたりけめ。独立の思想を抱きて、人並みならぬ面持ちしたる男をいかでか喜ぶべき。危ふきは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我が地位を覆すに足らざりけんを、

日頃伯林の留学生のうちにて、ある勢力ある一群れと余との間に、おもしろからぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またつひに余を讒誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくなる心と欲を制する力とに帰して、且つは嘲り且つは妬みたりけん。されどこは余を知らねばなり。ああ、この故よしは、我が身だに知らざりしを、いかでか人に知らるべき。我が心はかの合歓といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けんとす。我が心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道を歩みしも、みな勇気ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を捨てて顧みぬほどの勇気ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、また我が心のよく耐へんことをも深く信じたりき。ああ、かれも一時。船の横浜を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾をぬらしつるを我ながら怪しと思ひしが、

❖鈴索を引き鳴らして謁を通じ（二六九・下12）　呼び鈴のひもを引いて面会の取り次ぎを頼んで。
22普魯西（二六九・下13）　ドイツ帝国の一地方。ドイツ統一の中心となった王国。当時は、ドイツ全体をプロシアとも呼んでいた。　❖事なく　簡単に。無事に。　23ところの大学　当地の大学。ここでは、ベルリン大学（現在のフンボルト大学）。　24法家の講筵　法律家の講義の席。
25好尚　好み。本性。　26所動的　受動的。　❖獄を断ずる　判決を下す。　❖いらへしつる　返事をした。答えた。
❖破竹のごとくなるべし　竹を割るようにすぱっと解決できるだろう。
27蔗を嚙む境　おもしろみが分かる境地。「蔗」は砂糖きび。『晋書』に「顧愷之、毎レ食ニ甘蔗一常自レ尾至レ本。人或怪レ之。愷之曰、漸入ニ佳境一。」とある。
28讒誣する　事実を曲げ、また偽って他人を悪く言う。　❖その故なくてやは　その理由がなかったろうか。その理由なしにそうなったわけではない。
29合歓　マメ科の落葉高木。ここでは、おじぎそうのことか。おじぎそうは、マメ科の一年草。葉に触ると閉じて、しばらくしてまた開く。
30長者　年長者。長老。　31有為の人物　役に立つ人物。　❖かれも一時　それも一時のこと。　32豪傑　ここでは、勇気や度胸のある人物。
❖せきあへぬ　塞ぎ止めることができない。　33手巾　ハンカチ。　❖さることなり　当然のことだ。

問「奥深く潜みたりしまことの我」とは、どのようなものか。

問「おもしろからぬ関係」とは、どのような「関係」か。



クロステル巷の古寺
（マリエ教会）

これぞなかなかに我が本性なりける。この心は生まれながらにやありけん、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけん。

かの人々の嘲るはさることなり。されど妬むは愚かならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、[34]赫然たる色の衣をまとひ、珈琲店に座して客を引く女を見ては、行きてこれに就かん勇気なく、高き帽をいただき、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にて物言ふレエベマン[35]を見ては、行きてこれと遊ばん勇気なし。これらの勇気なければ、かの活発なる同郷の人々と交はらんやうもなし。この交際の疎きがために、かの人々はただ余を嘲り、余を妬むのみならで、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、*暫時の間に*無量の艱難を閲し尽くすなかだちなりける。

ある日の夕暮れなりしが、余は[36]獣苑を漫歩して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我が[37]モンビシユウ街の[38]僑居に帰らんと、[39]クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の[40]木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、頬髭長き[41]猶太教徒の翁が戸前にたたずみたる居酒屋、一つの梯は直ちに楼に達し、他の梯は穴倉住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて建てられたる、この三百年前の遺跡を望むごとに、心の恍惚となりてしばしたたずみしこと幾度なるを知らず。

今この所を過ぎんとするとき、閉ざしたる寺門の扉により て、声をのみつつ泣く一人の少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。かむりし巾をもれたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされて顧みたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁ひを含める目の、

半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。＊

彼ははからぬ深き嘆きに遭ひて、前後を顧みるいとまなく、ここに立ちて泣くにや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えずそばに寄り、「何故に泣きたまふか。ところに係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらん。」と言ひかけたるが、我ながら我が大胆なるにあきれたり。

彼は驚きて我が黄なる面を打ち守りしが、我が真率なる心や色に現れたりけん。「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとくむごくはあらじ。また我が母のごとく。」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひたまへ、君。我が恥なき人とならんを。母は我が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯へだになし。」

後は歔欷の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女の震ふ項にのみ注がれたり。

「君が家に送り行かんに、まづ心を鎮めたまへ。声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに。」彼は物語りするうちに、覚えず我が肩によりしが、このときふと頭をもたげ、また初めて我を見たるがごとく、恥ぢて我がそばを飛びのきつ。

人の見るがいとはしさに、早足に行く少女の後に付きて、

34 **赫然たる色**　きらびやかな色。

35 **レエベマン**　Lebemann（ドイツ語）。道楽者。

36 **獣苑**　動物園のある森林公園。ブランデンブルク門に隣接していた。

38 **僑居**　仮の住まい。下宿。

40 **木欄**　窓に付けられた手すり。

42 **彼**　ここでは、「一人の少女」。「彼」は男女ともに用いる。

❊ **恥なき人とならんを**　恥知らずな人間になるのを（救ってほしい）。

❊ **声をな人に聞かせたまひそ**　声を人にお聞かせなさるな。お泣きなさるな。（「な…そ」は禁止を表す。）

＊ 暫時　一顧

❊ **無量の艱難を閲し尽くす**　計り知れないほどの苦しみを、身をもって体験する。

37 **モンビシユウ街**　ウンテル・デン・リンデンの東端から北へ走る街路。

39 **クロステル巷の古寺**　「巷」は街。この辺りは寺院が多く、マリエ教会やクロステル教会など、ベルリンの古い建築物がある。

41 **猶太教**　ユダヤ人の宗教。唯一の神ヤハウェ（エホバ）を崇拝し、モーセの律法を信奉する。

43 **彼**　ここでは、ビクトリア座の座長シャウムベルヒ。

44 **歔欷の声**　すすり泣きの声。

問 「我が本性」とは、どういうものか。

寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上りて、四階目に腰を折りてくぐるべきほどの戸あり。少女はさびたる針金の先をねぢ曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中にはしはがれたる老媼の声して、「誰ぞ。」と問ふ。エリス帰りぬと答ふる間もなく、戸を荒らかに引き開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老媼にて、古き獣綿[45]の衣を着、汚れたる上靴をはきたり。エリスの余に会釈して入るを、彼は待ちかねしごとく、戸を激しく立て切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふと油灯の光に透かして戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これ過ぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞こえしが、また静かになりて戸は再び開きぬ。先の老媼は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしをわびて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨[46]にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を掛けたり。左手には粗末に積み上げたる煉瓦のかまどあり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を覆へる臥床あり。伏したるは亡き人なるべし。かまどのそばなる戸を開きて余を導きつ。この所はいはゆるマンサルド[47]の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向かひて斜めに下がれる梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつかふべき所に臥床あり。中央なる机には美しき氈[48]を掛けて、上には書物一、二巻と写真帖とを並べ、陶瓶[49]にはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。そが傍らに少女は羞ぢらひを帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮したり。手足のか細くたをやかなるは、貧家の女に似ず。老媼の部屋を出でし後にて、少女は少しなまりたる言葉にて言ふ。「許したまへ。君をここまで導きし心なさを。君は善き人なるべし。我をばよも憎みたまはじ。明日に迫るは父の葬り、頼みに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさん。彼はピクトリア座の座頭[50]なり。彼が抱へとなりしより、はや二年なれば、事なく我らを助けんと思ひしに、人の憂ひに付け込みて、身勝手なる言ひかけせんとは。我を救ひたまへ、君。金をば薄き給金を割きて返し参らせん。たとひ我が身は食らはずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身を震はせたり。その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、また自らは知らぬにや。

我が隠しには二、三マルク[52]の銀貨あれど、それにて足るべ

くもあらねば、余は時計をはづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひのモンビシユウ街三番地にて太田と尋ね来ん折には価を取らすべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が別れのために出だしたる手を唇に当てたるが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背に注ぎつ。

❖ああ、なんらの悪因ぞ。この恩を謝せんとて、自ら我が僑居に来し少女は、[53]シヨオペンハウエルを右にし、[54]シルレルを左にして、終日[55]兀坐する我が読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。このときを初めとして、余と少女との交はりやうやくしげくなりもてゆきて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速[56]了にも、余をもつて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。我ら二人の間にはまだ[57]痴騃なる歓楽のみ存じたりしを。

❖その名を指さんははばかりあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官長のもとに報じつ。❖さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。公使がこの命を伝ふるとき余に言ひしは、御身もし即時に郷に帰らば、

45 **獣綿** ラシャ。厚地の毛織物の総称。 ❖**過ぎぬといふ** 死んだという。 46 **廚** 台所。 ＊ 慇懃 終日

47 **マンサルド** mansarde（フランス語）。二重勾配の屋根を持つ家の、屋根裏部屋。 48 **氈** 毛織りのテーブルクロス。 49 **陶瓶** 陶製の花瓶。

❖**よも憎みたまはじ** まさか憎みなさらないでしょう。（「よも（や）」は、打消の推量「じ」を伴って「まさか…ないだろう」の意を表す。）

50 **ビクトリア座** ベルリン市内にあった劇場。 ❖**身勝手なる言ひかけ** 自分勝手な要求。 51 **隠し** 懐。ポケット。

52 **マルク** Mark（ドイツ語）。「ユーロ」に統合される以前のドイツの旧貨幣単位。

❖**ああ、なんらの悪因ぞ** ああ、なんという悪い結果をもたらすもとになってしまったことか。

53 **シヨオペンハウエル** Arthur Schopenhauer 一七八八年～一八六〇年。ドイツの哲学者。

54 **シルレル** Friedrich von Schiller 一七五九年～一八〇五年。ドイツの詩人・劇作家。シラー。 55 **兀坐する** じっと座る。

56 **速了** 早飲み込み。早合点。 57 **痴騃なる** 幼稚な。 ❖**その名を指さんは** その人の名をあげることは。

❖**さらぬだに** そうでなくてさえ。（「さあらぬだに」のつづまった形。）

問 **「ああ、なんらの悪因ぞ」とは、どの時点での、どのような思いか。**



マンサルド

路用を給すべけれど、もしなほここに在らんには、公の助けをば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我が生涯にて最も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時に出だししものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる文なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫りきて筆の運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、このときまではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、十分なる教育を受けず、十五のとき舞の師の募りに応じて、この恥づかしき業を教へられ、クルズス果てて後、ビクトリア座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハツクレンデルが当世の奴隷と言ひしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にてつながれ、昼の温習、夜の舞台と厳しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をもまとへ、場外にては独り身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養ふ者はその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、卑しき限りなる業に落ちぬはまれなりとぞいふなる。エリスがこれを逃れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼きときより物読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しきコルポルタアジユと唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相知る頃より、余が貸しつる書を読み習ひて、やうやく趣味をも知り、言葉のなまりをも正し、幾ほどもなく余に寄する文にも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまづ師弟の交はりを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身のことにかかはりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜんを恐れてなり。

ああ、詳しくここに写さんも要なけれど、余が彼を愛づる心のにはかに強くなりて、つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしを怪しみ、またそしる人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、初めて相見しときより浅くはあらぬに、今我が数奇を哀れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けて掛かりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髄を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせん。

公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば、学❊成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらんには、学資を得べき手立てなし。

このとき余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に[67]天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、伯林にとどまりて政治学芸のことなどを報道せしむることとなしつ。

社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、棲家をも移し、午餐に行く食店をも変へたらんには、かすかなる暮らしは立つべし。とかう思案するほどに、心の誠を現して、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしけん、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余は[68]キヨオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。この切り開きたる引き窓より光を採れる部屋にて、定まりたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に貸して己は遊び暮らす老人、取引所の業の暇を盗みて足を休むる商人などと肘を並べ、冷ややかなる石卓の上にて、せはしげ

---

58 路用 旅費。 **59 とやかうと** あれやこれやと。 **60 クルズス** Kursus（ドイツ語）。課程。

61 ハツクレンデル Friedrich Wilhelm von Hackländer 一八一六年～一八七七年。ドイツの詩人・小説家。 **62 温習** 稽古。練習。

63 はらから 兄弟姉妹。 **64 コルポルタアジユ** Kolportage（ドイツ語）。巡回する貸本屋。

❖ **彼が身のことにかかはりしを** （豊太郎の免職が）エリスの身のことに関わりがあるということを。

65 危急存亡の秋 危機が迫って、生き残れるかどうかの瀬戸際のとき。 **66 数奇** 不幸な運命。不運。

❖ **学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ** 学問の目的を達成しないで汚名（女性問題が原因で免職されたこと）を負ってしまった自分が出世する場はないであろう。

67 天方伯 天方伯爵。伯爵は華族の位の一つ。爵には、公・侯・伯・子・男の五等があった。

68 キヨオニヒ街 ケーニヒ街。ベルリンの中心部を東西に走る大通り。

問 **「我が一身の大事」とは、どのようなことを表しているか。**

に筆を走らせ、小女(こをんな)が持て来る69一盞(ひとつき)の珈琲の冷むるをも顧みず、空きたる新聞の細長き板ぎれに挟みたるを、幾種(いくいろ)となく掛け連ねたるかたへの壁に、幾度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けん。また一時近くなるほどに、温習に行きたる日には帰り道によぎりて、余とともに店を立ち出づるこの常ならず軽き、掌上の舞をもなし得つべき少女を、怪しみ見送る人もありしなるべし。

　我が学問は荒みぬ。屋根裏の一灯かすかに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子によりて縫ひ物などするそばの机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは異(こと)にて、今は70活発々(くわつはつはつ)たる政界の運動、文学美術にかかはる新現象の批評など、かれこれと結び合はせて、力の及ばん限り、ビヨルネよりはむしろハイネを学びて思ひを構へ、さまざまの文を作りしうちにも、引き続きて維廉一世と仏得力三世(フレデリツク)との崩殂(ほうそ)ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退いかんなどのことにつきては、ことさらにつまびらかなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりもせはしくして、多くもあらぬ蔵書をひもとき、旧業を尋ぬることも難く、大学の籍はまだ削られねど、謝金を収むることの難ければ、ただ一つにしたる講筵だに行きて聴くことはまれなり



明治 21（1888）年、在ベルリンの日本人留学生（鷗外は左端）

き。

我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにと言ふに、およそ民間学[78]の流布したることは、欧州諸国の間にて独逸にしくはなからん。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学にしげく通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道をのみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などの大方は、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間には独逸新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

明治二十一年の冬は来にけり。表街（おもてまち）の人道にてこそ砂をもまけ、鋤（すき）をもふるへ、クロステル街の辺りは凸凹坎坷（かんか）の所は見ゆめれど、表のみは一面に凍りて、朝（あした）に戸を開けば飢ゑ凍え雀（すずめ）の落ちて死にたるも哀れなり。部屋を温め、かまどに火をたきつけても、壁の石を徹し、衣の綿をうがつ北欧羅巴の寒さは、なかなかに堪へ難かり。エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に助けられて帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食ふごとに吐くを、悪阻（つはり）といふものならんと初めて心づきしは母なりき。ああ、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もしまことなりせばいかにせまし。

69 一盞　一杯。　**よぎりて**　道すがら立ち寄って。　**掌上の舞をもなし得つべき少女**　手のひらの上で舞うことができるほど軽やかな少女。

70 活発々たる　元気で勢いがよく目まぐるしい。　**71 ビヨルネ**　Ludwig Börne　一七八六年～一八三七年。ドイツの作家・評論家。

72 ハイネ　Heinrich Heine　一七九七年～一八五六年。ドイツの詩人。

73 仏得力三世　Friedrich III　一八三一年～一八八八年。父ウィルヘルム一世の没後、即位したが三か月で没した。

74 崩殂　帝位にある者が死去すること。　**75 新帝**　フレデリック三世の子。ウィルヘルム二世。

76 ビスマルク侯の進退　ビスマルクはウィルヘルム一世時代の宰相。ウィルヘルム二世と意見が対立し、一八九〇年に辞職した。

77 旧業　元の学業。ここでは、法律学。　**78 民間学**　民間の社会研究や批評をいう。ここでは、ジャーナリズム。

しくはなからん　及ぶものはなかろう。　**一隻の眼孔もて**　ものを見抜く力のある独特の見識をもって。

よくはえ読まぬがあるに　よく読めない人もいるというのに。（「え…ぬ」は不可能を表す。）　**凸凹坎坷の所**　道が凸凹し、車がうまく進まない所。

もしまことなりせばいかにせまし　もし本当につわりだったら、どうしようか。（「せば…まし」は反実仮想を表す。）

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に伏すほどにはあらねど、小さき鉄炉[79]のほとりに椅子さし寄せて言葉少なし。このとき戸口に人の声して、程なく庖厨[80]にありしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手は普魯西のものにて、消印には伯林とあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみのことにてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣に付きて我も来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名誉を回復するもこのときにあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやるとなり。読み終はりて茫然たる面持ちを見て、エリス言ふ。「故郷よりの文なりや。悪しき便りにてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならん。「否、心にな掛けそ。御身も名を知る相沢が、大臣とともにここに来て我を呼ぶなり。急ぐと言へば今よりこそ。」

かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせんと思へばならん、エリスは病をつとめて起ち、上襦袢[81]も極めて白きを選び、丁寧にしまひおきしゲエロツクといふ二列ボタンの服を出だして着せ、襟飾[83]りさへ余がために手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰もえ言はじ。我が鏡に向きて見たまへ。何故にかく不興なる面持ちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容[84]を改めて。「否、かく衣を改めたまふを見れば、なにとなく我が豊太郎の君とは見えず。」また少し考へて。「たとひ富貴になりたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはじ。我が病は母ののたまふごとくならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でんの望みは絶ちしより幾年[85]をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ会ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシユケ[86]は、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に覆ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して楼を下りつ。彼は凍れる窓を開け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしはカイゼルホオフの入り口なり。門者[87]に秘書官相沢が部屋の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階[88]を登り、中央の柱にプリユツシユを覆へるソファ[89]を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばここにて脱ぎ、廊[90]を伝ひて部屋の前まで行きしが、余は少し踟躕し

たり。同じく大学に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相沢が、今日はいかなる面持ちして出で迎ふらん。部屋に入りて相対して見れば、形こそ旧に比ぶれば肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の気象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにもいとまあらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしは独逸語にて記せる文書の急を要するを翻訳せよとのことなり。余が文書を受領して大臣の部屋を出でしとき、相沢は後より来て余と午餐を共にせんと言ひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路[91]はおほむね平滑なりしに、[92]轗軻数奇なるは我が身の上なりければなり。

余が胸臆[93]を開いて物語りし不幸なる閲歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなかに余を責めんとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生[94]輩を罵りき。されど物語の終はりしとき、彼は色❖を正していさむるやう、この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はんもかひなし。とはいへ、学識あり、才能ある者が、いつまでか一少女

79 **鉄炉** ストーブ。　80 **庖廚** 台所。　❖ **とみのこと** 急ぎのこと。急なこと。　❖ **見まほしとのたまふ** 会いたいとおっしゃる。　＊ いぶかる 不興 ❖ **悪しき便りにてはよも** まさか悪い知らせではないでしょうね。（あとに「あらじ」などが略されている。）　❖ **今よりこそ** たった今から行こう。（あとに「行かめ」などが略されている。）　❖ **病をつとめて** 病を押して。

81 **上襦袢** ここでは、ワイシャツ。　82 **ゲエロツク** Gehrock（ドイツ語）。フロックコート。　83 **襟飾り** ネクタイ。　❖ **友にこそ会ひには行け** 友に会いに行くのだ。　84 **ドロシユケ** Droschke（ドイツ語）。一頭立ての辻馬車。　85 **朔風** 北風。　86 **カイゼルホオフ** ベルリンの一流ホテル。　87 **プリユツシユ** Plüsch（ドイツ語）。ビロードの一種。ビロードは、表面が細かい毛を立たせたようになっている滑らかで艶のある織物。　88 **ゾフア** Sofa（ドイツ語）。ソファー。　89 **前房** 控えの間。ロビー。　90 **踟躕** ためらうこと。　91 **生路** 人生。生きてきた道程。　92 **轗軻** 不遇。不運。　93 **胸臆** 胸の中。心の中。　94 **諸生輩** 豊太郎を中傷した留学生たち。　❖ **色を正して** 改まって。表情を変えて。

問 **「心は楽しからず」とあるが、なぜか。**　問 **「何、富貴。」とあるが、「余」はどのような気持ちで言ったのか。**

問 **「この一段のこと」とは、どのようなことを表しているか。**



ゲエロツク

の情けにかかづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯もただ独逸語を利用せんの心のみなり。己もまた伯が当時の免官の理由を知れるがゆゑに、強ひてその成心[95]を動かさんとはせず、伯が心中にて曲庇者[96]なりなんど思はれんは、朋友に利なく、己に損あればなり。人を薦むるはまづその能を示すにしかず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、たとひ彼に誠ありとも、たとひ情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言のおほむねなりき。

大洋に舵を失ひし舟人が、はるかなる山を望むごときは、相沢が余に示したる前途の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行き着かんも、否、果たして行き着きぬとも、我が中心[97]に満足を与へんも定かならず。貧しきが中にも楽しきは今の生活、捨て難きはエリスが愛。我が弱き心には思ひ定めん由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たんと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、己に敵する者には抗抵すれども、友に対して否とはえ答へぬが常なり。

別れて出づれば風面を打てり。二重の玻璃窓を厳しく閉ざして、大いなる陶炉[98]に火をたきたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さはことさらに堪へ難く、膚粟立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

翻訳は一夜になし果てつ。カイゼルホオフへ通ふことはこれよりやうやくしげくなりもてゆく[99]ほどに、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打ち笑ひたまひき。

ひと月ばかり過ぎて、ある日伯は突然我に向かひて、「余は明旦[100]、魯西亜に向かひて出発すべし。従ひて来べきか。」と問ふ。余は数日間、かの公務にいとまなき相沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらん。」余は我が恥を表さん。この答へはいち早く決断して言ひしにあらず。余は己が信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答への範囲をよくも量らず、直ちにうべなふことあり[101]。さてうべなひし上にて、そのなし難きに心づきても、強ひて当時の心虚なりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行することしばしばなり。

この日は翻訳の代に、旅費さへ添へて賜りしを持て帰りて、翻訳の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亜より帰り来ん

までの費えをば支へつべし。彼は医者に見せしに常ならぬ身なりと言ふ。貧血の性なりしゆゑ、幾月か心づかでありけん。座頭よりは休むことのあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだひと月ばかりなるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちのことにはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

鉄路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合はせて借りたる黒き礼服、新たに買ひ求めたるゴタ板の鹵廷の貴族譜、二、三種の辞書などを、小カバンに入れたるのみ。さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出でいく後に残らんも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらんには後ろめたかるべければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。余は旅装整へて戸を閉ざし、鍵をば入り口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行きにつきては、何事をか叙すべき。我が舌人たる任務はたちまちに余を拉し去りて、青雲の上に落としたり。余が大臣の一行に従ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を囲繞せしは、巴里絶頂の驕奢を、氷雪の内に移したる王城の粧飾、ことさらに黄蠟の燭を幾つともなくともしたるに、幾星の勲章、幾枝のエポレツトが映射する光、彫鏤の工を尽くしたるカミンの火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇のひらめきなどにて、この間仏蘭西語を最も円滑に使ふ者は我なるがゆゑ

95 **成心** 先入観。ここでは、天方伯爵の豊太郎に対する先入観。
99 **もてゆく** 次第に…してゆく。
100 **明旦** 明朝。
❖ **我が恥を表さん** 自分の恥ずかしい性格上の弱点を告白しよう。
❖ **費えをば支へつべし** 生活費を賄うことができるに違いない。
❖ **故あればなるべし** 理由があるからに違いない。（理由とは、座長の申し出を拒否したことを指す。）
102 **ゴタ板の魯廷の貴族譜** ゴタで出版されたロシア宮廷の貴族名簿。「ゴタ」はチューリンゲン地方の都市。
103 **舌人** 通訳。
104 **青雲の上** ロシア宮廷のこと。「青雲」は高い空、の意。
106 **囲繞** 囲い巡らすこと。
107 **エポレツト** épaulette（フランス語）。肩章。
108 **カミン** Kamin（ドイツ語）。壁面に取りつけた暖炉。
問 **「一種の寒さ」とは、どのようなものか。**

96 **曲庇者** 道理を曲げて人をかばう者。
❖ **いかで命に従はざらん** どうして命令に従わないことがあるでしょうか。必ず命令に従います。
❖ **よくも量らず** よく考えることもしないで。
101 **うべなふ** 承諾する。
97 **中心** 心中。
98 **陶炉** 陶製の暖炉。
❖ **知る人がり** 知人のもとへ。
105 **ペエテルブルク** 帝政時代のロシアの首都。現在のサンクトペテルブルク。
❖ **彫鏤の工を尽くしたる** 彫ったりちりばめたりして技巧の粋を尽くした。
109 **宮女** 貴族の夫人や令嬢。
問 **「常ならぬ身」とは、どのようなことを表しているか。**

に、賓主の間に周旋して事を弁ずる者もまた多くは余なりき。
この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに文を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはんことの心憂さに、知る人のもとにて夜に入るまで物語りし、疲るるを待ちて家に帰り、直ちに寝ねつ。次の朝目覚めしときは、なほ独り後に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でしときの心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の文のあらましなり。

また程経ての文はすこぶる思ひ迫りて書きたるごとくなりき。文をば否といふ字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君はふるさとに頼もしき族なしとのたまへば、この地によき世渡りの手段あらば、とどまりたまはぬことやはある。また我が愛もてつなぎ留めではやまじ。それもかなはで東に帰りたまはんとならば、親とともに行かんはやすけれど、かほどに多き路用をいづくよりか得ん。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはん日をこそ待ためと常には思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日[110]にけに茂りゆくのみ。袂を分かつはただ一瞬の苦艱なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしるくなれる、それさへあるに、たとひいかなることありとも、我をばゆめな捨てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かん日には、ステツチン[111]わたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せんとぞ言ふなる。書き送りたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなん。今はひたすら君が伯林に帰りたまはん日を待つのみ。

ああ、余はこの文を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身にかかはらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさんとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されど我が近眼はただ己が尽くしたる職分をのみ見き。余はこれに未来の望みをつなぐことには、神も知るらん、絶えて思ひ至らざりき。されど今ここに心づきて、我が心はなほ冷然たりしか。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋[112]上の鳥のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるるに、相沢がこの頃の言葉の端に、本国に帰

りて後も共にかく❊てあらば云々と言ひしは、大臣のかくのたまひしを、友ながらも公事なれば明らかには告げざりしか。今更思へば、余が軽率にも彼に向かひてエリスとの関係を絶たんと言ひしを、早く大臣に告げやしけん。

ああ、独逸に来し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。先にこれを操りしは、我が某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行とともに伯林に帰りしは、あたかもこれ新年の旦なりき。停車場に別れを告げて、我が家を指して車を駆りつ。ここにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習ひなれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲がりて、家の入り口にとどまりぬ。このとき窓を開く音せしが、車よりは見えず、駅丁にカバン持たせて梯を登らんとするほどに、エリスの梯を駆け下るに会ひぬ。彼がひと声叫びて我が項を抱きしを見て駅丁はあきれたる面持ちにて、何やらん髭の内にて言ひしが聞こえず。

「よくぞ帰り来たまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなんを。」

●我が心はこのときまでも定まらず、故郷を思ふ念と栄達を

❊賓主の間に周旋して事を弁ずる　客と主人の間に立って要件を処理する。
❊つなぎ留めではやまじ　どうしてもお引き留めしないではいられない。
❊我をばゆめな捨てたまひそ　私を決して捨てないでください。（二七三ページ❊声を…参照。）
❊我が身の過ぎし頃には似で思ひ定めたるを見て心折れぬ　私が以前とは違って、自分の気持ちを決めているのを見て、母のほうが折れました。（「思ひ定めたる」とは、エリスが日本へ行く決意をしていることを指す。）
111 **ステッチン**　ベルリン北東にある都市。現在はポーランド領。
❊神も知るらん　神も知っているだろう。本当に。
112 **屋上の鳥**　手に入れようとしてもなかなか手に入れられないことの例え。
113 **公事**　豊太郎が復職することを指す。
114 **駅丁**　御者。馬車を御す人。
問「我が地位」とは、どのようなものか。

❊頼もしき族なし　頼りになる一族がない。
110 **日にけに**　日増しに。日に日に。
＊袂を分かつ　職分　本領
❊しるくなれる　目立ってきた。
❊冷然たりしか　冷静でいられようか。冷静でいることはできなかった。
❊かくてあらば　このように天方伯爵に仕えるならば。
❊我が地位を明視し得たり　自分の立場をはっきりと知ることができた。
問「我が心はこのときまでも定まらず」とあるが、なぜか。

求むる心とは、時として愛情を圧せんとせしが、ただこの一刹那、低徊(ていかい)踟躕の思ひは去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我が肩によりて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鑼(ドラ)のごとく叫びし馭丁は、いち早く登りて梯の上に立てり。

戸の外に出迎へしエリスが母に、馭丁をねぎらひたまへと銀貨を渡して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて部屋に入りぬ。一瞥(いちべつ)して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白きレエスなどをうづたかく積み上げたれば。

エリスは打ち笑みつつこれを指して、「何とか見たまふ、この心構へを。」と言ひつつ一つの木綿ぎれを取り上ぐるを見れば襁褓(むつき)[115]なりき。「我が心の楽しさを思ひたまへ。産まれん子は君に似て黒き瞳をや持ちたらん。この瞳。ああ、夢にのみ見しは君が黒き瞳なり。産まれたらん日には君が正しき心にて、よもあだし名をば名乗らせたまはじ。」彼は頭を垂れたり。「幼しと笑ひたまはんが、寺に入らん日はいかにうれしからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

二、三日の間は大臣をも、旅の疲れやおはさんとてあへて訪(とぶら)はず、家にのみ籠もりをりしが、ある日の夕暮れ使ひして招かれぬ。行きてみれば待遇殊にめでたく、魯西亜行きの労



『舞姫』参考略図

を問ひ慰めて後、我とともに東に帰る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなん、*滞留の余りに久しければ、さまざまの係累もやあらんと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ち居たりとのたまふ。❊その気色(けしき)いなむべくもあらず。[116]あなやと思ひしが、さすがに相沢の言を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名誉を引き返さん道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られんかと思ふ念、心頭をついて起これり。ああ、なんらの特操[117]なき心ぞ、「承りはべり。」と答へたるは。

黒がねの額[118]はありとも、帰りてエリスに何とか言はん。ホテルを出でしときの●我が心の錯乱は、たとへんに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みてゆくほどに、行き合ふ馬車の駁丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。しばらくしてふと辺りを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るるごとくに道の辺の楊[119](たふ)によりて、焼くがごとく熱し、椎(つち)にて打たるるごとく響く頭を楊背(たふはい)に持たせ、死したるごとき様にて幾時をか過ごしけん。激しき寒さ骨に徹すと覚えて覚めしときは、夜に入りて雪はしげく降り、帽の庇(ひさし)、外套の肩には[120]一寸ばかりも積もりたりき。

もはや十一時をや過ぎけん。モ[121]ハビツト、カ[122]ルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪にうづもれ、ブ[123]ランデンブルゲル門のほとりの瓦斯(ガス)灯は寂しき光を放ちたり。立ち上がらんとするに足の凍えたれば、両手にてさすりて、やうやく歩みうるほど

❊幾階か持ちて行くべき　（荷物は）何階に持っていけばよいでしょう。
❊よもあだし名をば名乗らせたまはじ　まさか（君と異なる）ほかの人の姓を名乗らせることはございませんでしょう。（二七五ページ❊よも…参照。）
❊寺に入らん日　教会で子供が洗礼を受ける日。
❊その気色いなむべくもあらず　その様子は、否定することができないものがあった。
特操　固く守って変わることのない志。
楊　腰掛け。ベンチ。
一寸　「寸」は長さの単位。一寸は約三センチメートル。
カルル街　シュプレー川の北岸にある街。
115 襁褓　おしめ。産着。
116 あなや　三四ページ注8参照。
117 黒がねの額　鉄面皮。恥知らずで厚かましいこと。
118 モハビツト　ベルリン北西部の郊外。
119 ブランデンブルゲル門　ブランデンブルク門。二六九ページ注18参照。
＊滞留

問「我が心の錯乱」とは、どのようなことを表しているか。

にはなりぬ。

足の運びのはかどらねば、クロステル街まで来しときは、半夜[124]をや過ぎたりけん。ここまで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店はなほ人の出入り盛りにてにぎはしかりしならめど、ふつに覚えず。我が脳中にはただただ我は許すべからぬ罪人（つみびと）なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずとおぼしく、烱然（けいぜん）たる一星の火、暗き空にすかせば、明らかに見ゆるが、降りしきる鷺（さぎ）のごとき雪片に、たちまち覆はれ、たちまちまた現れて、風に弄ばるるに似たり。戸口に入りしより疲れを覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、はふごとくに梯を登りつ。庖廚を過ぎ、部屋の戸を開きて入りしに、机によりて襤褸縫ひたりしエリスは振り返りて、「あ。」と叫びぬ。「いかにかしたまひし。御身の姿は。」

驚きしもうべなりけり、蒼然（さうぜん）として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪はおどろと乱れて、幾度か道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥混じりの雪に汚れ、所々は裂けたれば。

余は答へんとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまんとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。

人事を知るほどになりしは数週（すしう）の後なりき。熱激しくて譫言（うはごと）のみ言ひしを、エリスが懇ろにみとるほどに、ある日相沢は尋ね来て、余が彼に隠したる顚末（てんまつ）をつばらに知りて、大臣には病のことのみ告げ、よきやうに繕ひおきしなり。余は初めて病床に侍するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにいたく痩せて、血走りし目はくぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に会ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえ上げし一諾を知り、にはかに座より躍り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか。」と叫び、その場に倒れぬ。相沢は母を呼びて共に助けて床に伏させしに、しばらくして覚めしときは、目は直視したるままにて傍らの人をも見知らず、我が名を呼びていたく罵り、髪をむしり、布団をかみなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。母の取りて与ふるものをばことごとく投げうちしが、机の上なりし襤褸を与へたるとき、探りみて顔に押し

当て、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど全く廃して、その痴なること赤児のごとくなり。医に見せしに、過激なる心労にて急に起こりしパラノイア[125]といふ病なれば、治癒の見込みなしと言ふ。ダルドルフ[126]の癲狂院[127]に入れんとせしに、泣き叫びて聴かず、後にはかの襁褓一つを身につけて、幾度か出だしては見、見ては欷歔す。余が病床をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。ただ折々思ひ出だしたるやうに「薬を、薬を。」と言ふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾度ぞ。大臣に従ひて帰東の途に上りしときは、相沢と議りてエリスが母にかすかなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に残しし子の生まれん折のことをも頼みおきぬ。

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裡に一点の彼を憎む心今日までも残れりけり。

---

124 **半夜** 夜半。 ❖ **ふつに覚えず** 全然覚えていない。 ❖ **烟然たる一星の火** きらめく一つの灯火。 ＊ 顕末

❖ **蒼然として** 顔色が青ざめていて。 ❖ **おどろと乱れて** もつれ絡み合って。 ❖ **人事を知る** 気がつく。意識が戻る。

❖ **彼に隠したる顕末をつばらに知りて** 彼（相沢）に隠していたエリスとの仲を詳しく知って。 ❖ **大臣に聞こえ上げし一諾** 大臣に申し上げた帰国の承諾。

125 **パラノイア** Paranoia（ドイツ語）。精神疾患の一つ。体系的で、長期に持続する妄想を抱くとされる。ただし時代などによって諸説あり、この当時はより広い範囲の症状を指していた。

126 **ダルドルフ** ベルリンの北方にある町。 127 **癲狂院** 精神病院。 ❖ **心ありてにはあらず** 意識があってのことではない。

問 **「一点の彼を憎む心」とは、どのような「心」か。**



森 鷗外（もり おうがい） 文久二（一八六二）年～大正十一（一九二二）年。小説家・翻訳家・劇作家・軍医。本名は森林太郎。島根県の生まれ。軍医としてドイツに留学し、帰国後、軍医の傍ら文筆活動に入る。作品に『青年』『雁』『阿部一族』『山椒大夫』『高瀬舟』『寒山拾得』『渋江抽斎』（小説）、『即興詩人』（翻訳）などがある。本文は『鷗外全集 第一巻』（昭和四十六（一九七一）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 本文を通して読み、あらすじをまとめてみよう。

2 この作品は太田豊太郎の〈手記〉の形式となっている。〈手記〉はいつ、どこで書かれたのか、また、〈手記〉を書いた理由は何か、整理してみよう。

3 手記の書き手である「豊太郎」は、自身の内面の変化をどのように捉えているか、留学以前、留学以後の「エリス」との生活、「相沢」の登場後の三段落に分けてまとめてみよう。

4 「ああ、相沢謙吉がごとき…今日までも残れりけり」（二八九・下7〜8）と〈手記〉が結ばれているが、そこからどのようなことが読み取れるか、作品全体を踏まえて考えてみよう。

◇言葉と表現

1 次の表現は、それぞれどのようなことを表しているか、説明してみよう。

(1)「一輪の名花を咲かせてけり」（二七五・上9〜10）

(2)「小さき鉄炉」（二八〇・上2）／「大いなる陶炉」（二八二・下1）

(3)「大洋に舵を失ひし舟人が、はるかなる山を望むごとき」（二八二・上11）

(4)「烟然たる一星の光、……風に弄ばるるに似たり」（二八八・上8〜11）

◇言語活動

1 時代状況が表れている部分はどこか、また、それが作品のテーマとどのようにかかわっているか、考えてみよう。

2 〈手記〉の形式で書かれていることは、作品にどのような奥行きを与えているか、考えてみよう。また、作品を「エリス」の〈手記〉として書き直してみよう。

3 この作品の文体の特色を、構文・用語などに注目してまとめてみよう。さらに、このような文体のあげている効果について、発表された時代を念頭に置いて話し合ってみよう。

みづの上日記

樋口一葉

[1]五月二日の夜、[2]禿木・[3]秋骨の二子来訪。物語ることしばしにして、今宵は君がもてなしを受けばやとてまうで来つるなり、いかなるまうけを[4]かせさせたまふぞや、これはおほかたのにてはえ受け引き難しと、二人ながら笑ふ。何事ぞと問へば戸川ぬし、懐より雑誌取り出でて、朗読せんかと平田ぬしを顧みて言ふ。こは『[5]めざまし草』巻の四なりき。一昨日の発行にて、我が『[6]文芸倶楽部』に出だしたる『[7]たけくらべ』の細評ある由、新聞の広告に見けるがそれならんかしと思ふに、慌ただしうは問ふこともせず打ちゑみゐるに、いかでまうけせさせたまへ、この巻よ、今日大学の講堂に[8]上田敏氏の持ち来て、これ見よと押し開き差し寄せられぬ、何ぞ何ぞと手に取り見れば、これ見たまへ、かくかくしかじかの評、[9]鷗外・[10]露伴の手になりて、当時の妙作これにとどめをさしぬ、うれしさは胸に満ちて物言はん暇もなく、これが朗読、大学の講堂にて高らかに始めぬ、さてもなほうれしさのやるかたなきに、学校を出づるより早くはせて、[11]発兌の書林に走り、一冊あがなふ*より早く禿木が下宿にまろび入り、君々、これ見たまへと投げつけしに、取りてひと目見るより早く、平田は顔をもえ上げず涙にかきくれぬ、さらばとく見せてこの喜びをも述べ、ねたみをも聞こえてんとて、かく二人相伴ひてはまうで来つ

初出『一葉全集』明治四十五（一九一二）年五月

1 **五月二日**　明治二十九（一八九六）年五月二日。

2 **禿木**　平田禿木。一八七三年～一九四三年。英文学者・随筆家。本名は喜一郎。

3 **秋骨**　戸川秋骨。一八七〇年～一九三九年。英文学者・随筆家。本名は明三。

4 **まうけ**　ごちそう。

5 **『めざまし草』**　雑誌。明治二十九年創刊。

6 **『文芸倶楽部』**　雑誌。明治二十八年創刊。

7 **『たけくらべ』**　小説。明治二十八年から二十九年に『文学界』に発表。後、『文芸倶楽部』に一括掲載。

＊あがなふ

るなり、いかで読みたまひてよ、我や読まん、平田やと、言葉せはしく喜び面にあふれて言ふ。今文壇の神よといふ鷗外が言葉として、我はたとへ世の人に一葉崇拝のあざけりを受けんまでも、この人にまことの詩人といふ名を贈ることを惜しまざるべしと言ひ、作中の文字五、六字づつ、今の世の評家・作家に技倆上達の霊符として飲ませたきものと言へるあたり、我々文士の身として、ひと度受けなば死すとも憾みなかるまじきことぞや、君が喜びいかばかりぞとうらやまる。二人はただ狂せるやうに喜びて帰られき。

この評よ、至る所の新聞・雑誌にかしましうもて騒がれぬ。「日本」新聞などには、ただ一行読みては驚き嘆じ、二行読みては打ちうめきぬとかありけるの由、国子のよそより聞き来て、いとあさましきまで立ちぬる評かなと、喜びながら悲しがる。そは槿花の一日の栄えを嘆けばなるべし。世の中おしなべて、文学に走りぬるころとて、仮初めの一文・一章、遠国・他郷までも響き渡り聞こえゆきて、立つ名様々、さてはよか



『文学界』に集う人々（後列左から上田敏・川上眉山，前列左から馬場孤蝶・戸川秋骨・島崎藤村）

8 **上田敏**　一八七四年～一九一六年。詩人・英文学者。

9 **鷗外**　森鷗外。二八九ページ参照。

10 **露伴**　幸田露伴。一八六七年～一九四七年。小説家・随筆家。本名は成行。

11 **発兌**　書物や雑誌などを印刷・発売すること。

12 **文士**　文筆を職業とする人。作家。小説家。

問 **「二人はただ狂せるやうに喜びて帰られき」とあるが、なぜか。**

13 **「日本」**　明治二十二（一八八九）年創刊。

14 **国子**　筆者の妹。

問 **「喜びながら悲しがる」とあるが、なぜか。**

15 **槿花の一日の栄え**　華やかな時は短いことのたと

らぬ取り沙汰もやうやうにまさりきたりぬ。この『たけくらべ』書きつると同じ号に、我と川[16]上ぬしとの間のこと、あやしげに書きなしある雑報ありき。千葉辺りより来りたる投書なりとか。これをばやがてよき材にして、人ねたみもし憎みもす。ことなることなき身どちには、さして何事の嘆かはしさも覚えねど、そもそもの初めより、浮き世に汚れの名を取らじ、世の人並みにはあるまじの思ひなりしを、かくよからぬ評など立ち出でくる、やましきことならねど、我が不徳のするところかと、●物嘆かしう思はれき。

我を訪ふ人十人に九人までは、ただ女子なりといふを喜びて物珍しさに集ふなりけり。されば*こそ、ことなることなき反古紙作り出でても、今清少よ、紫よと、はやし立つる、誠は心なしの、いかなる底意ありてとも知らず。我をただ女子とばかり見るよりのすさび。*さればその評の取りどころなきこと、疵あれども見えず、良きところありても言ひ表すことなく、ただ一葉はうまし、上手なり、余の女どもは更なり、男も大方は頭を下ぐべきの技倆なり、ただうまし、上手なりと、言ふばかり、そのほかには言ふ言葉なきか、言ふべき疵を見出ださぬか、いとあやしきことどもなり。

五月二十四日。[17]正太夫初めて我が家を訪ふ。物語ること多かり。

二十五日。[18]田中みの子を[19]飯田町に問ひ、帰路[20]半井君を尋ぬ。原稿製造中なる由にて、[21]三崎町のかたにをられつれば、会はずして帰る。

二十七日の夕べより、平田・戸川の二人来る。物語り多し。

え。「槿花」はむくげの花。

16 川上 川上眉山。一八六九年～一九〇八年。小説家。本名は亮。

問 「物嘆かしう思はれき」とあるが、なぜか。

17 正太夫 斎藤緑雨のこと。一八六七年～一九〇四年。小説家・評論家・随筆家。本名は賢。別号、正直正太夫。

18 田中みの子 一八五七年～一九二〇年。歌人。

19 飯田町 現在の東京都千代田区飯田橋。

20 半井 半井桃水。一八六一年～一九二六年。小説家。本名は洌。

21 三崎町 東京都千代田区にある地名。

＊
かしましい おしなべて
反古 すさび

二十八日。午前のうち、田辺[22]たつ子ぬしを番町[23]に問ふ。例によつて例のごとき物語りあり。十二時過ぐるころ帰宅。今日は木曜なれば、野々宮君[24]来る。安井[25]・木村[26]の両君は、地久節[27]の会ありてえも参られず。安井君宅より、昇給祝ひの赤の飯おくられき。

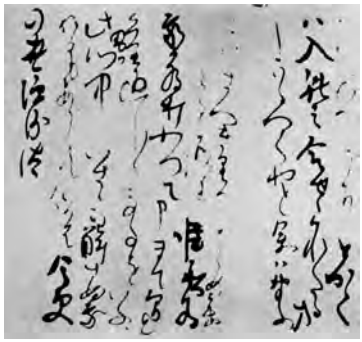
『新文壇』[28]の鳥海嵩香[29]、遊びに来りしにはあらざめれど、長く語る。戸川[30]の残花、我に嫁入りの取りもちすとて来る。先は何がしの博士なりと言ひくる。

正太夫、門まで来りて人気のあるに、またこそとて帰る。

二十九日。横山源之助[31]来訪。話すこと長し。うちに、正太夫来る。ひそかに通して座敷の次の間にいざなふ。源之助はやがて帰る。*



『たけくらべ』を絶賛した『三人冗語』
（明治 29 年 5 月）



『みづの上日記』（明治 29 年 7 月 22 日）
最後の部分

22 **田辺たつ子**　三宅花圃。一八六八年～一九四三年。小説家。本名は竜子。

23 **番町**　東京都千代田区にある地名。

24 **野々宮**　一葉の門下。

25 **安井**　一葉の門下。

26 **木村**　一葉の門下。

27 **地久節**　皇后の誕生日の旧称。

28 **『新文壇』**　雑誌。明治二十九年創刊。

29 **鳥海嵩香**　生没年未詳。『新文壇』の編集員。

30 **戸川の残花**　戸川残花。一八五五年～一九二四年。詩人・評論家。本名は安宅。

31 **横山源之助**　一八七一年～一九一五年。労働問題研究家。

* いざなふ



樋口一葉（ひぐち いちよう） 明治五（一八七二）年～明治二十九（一八九六）年。小説家。本名は奈津。東京都の生まれ。明治二十五（一八九二）年ごろから創作を発表し始めた。明治二十八（一八九五）年、小説『ゆく雲』を雑誌『太陽』に載せてから文名が高くなり、優れた作品を次々と発表した。作品に『たけくらべ』『にごりえ』『十三夜』『わかれ道』などがある。本文は『樋口一葉全集 第三巻』（昭和五十一（一九七六）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

❖学習のポイント

1 日記の前半部分（二九一・1～二九三・13）を会話の文と地の文とに区別してみよう。また、会話の文はそれぞれ誰の言葉かを指摘してみよう。

2 鷗外や露伴らの『たけくらべ』評や世間の反応はどのようなものであったか、また、その結果どのようなことが起こったのか、まとめてみよう。

3 「さればその評の…あやしきことどもなり」（二九三・9～13）には、書き手のどのような思いが込められているか、考えてみよう。

4 筆者は『たけくらべ』評や世間の反応をどのように受け止めていたと考えられるか、話し合ってみよう。

❖言葉と表現

1 「言葉せはしく」（二九二・1）、「世の中おしなべて、文学に走りぬ」（二九二・13～14）とは、それぞれどういう状況を表しているか、説明してみよう。

2 日記の前半部分（二九一・1～二九三・13）では、読点が少なく、長い文となっている箇所がある。このことがもたらす効果について考えてみよう。

❖言語活動

1 時代状況が表れている部分はどこか、また、それが日記の記述とどのようにかかわっているか、考えてみよう。

2 日記に登場する人物（平田禿木・森鷗外・国子など）を書き手に設定し、日記を書き換えてみよう。また、その際に工夫したことなどを話し合ってみよう。

3 「日記」という形式の特徴について、他のジャンルの文章（小説・随想・手紙・評論など）と比較しながら、まとめてみよう。

日和下駄

永井荷風

崖は閑地や路地と同じようにわが日和下駄の散歩に少なからぬ興味を添えしめるものである。なぜというに崖には野笹や芒に交じって蘞[1]、藪枯[2]らしを始めありとあらゆる雑草の繁茂した間から場所によると清水が湧いたり、下水が谷川のように潺々[3]と音して流れたりしている所がある。また落ち掛かるように斜めに生えた樹木の幹と枝と殊に根の形なぞに絵画的興趣を覚えさせることが多いからである。もし樹木も雑草も何も生えていないとすれば、東京市中の崖は切り立った赤土の夕日を浴びるときなぞ宛然堡塁[4][5]を望むがごとき悲壮の観を示す。

昔から市内の崖には別にこれという名前のついた所は一つもなかったようである。紫の一本[6]その他の書にも、窪、谷なぞいう分類はあるが崖という一章は設けられてない。しかし高低の甚だしい東京の地勢から考えて、崖は昔も今も変わりなく市中の諸処に聳えていたに相違ない。

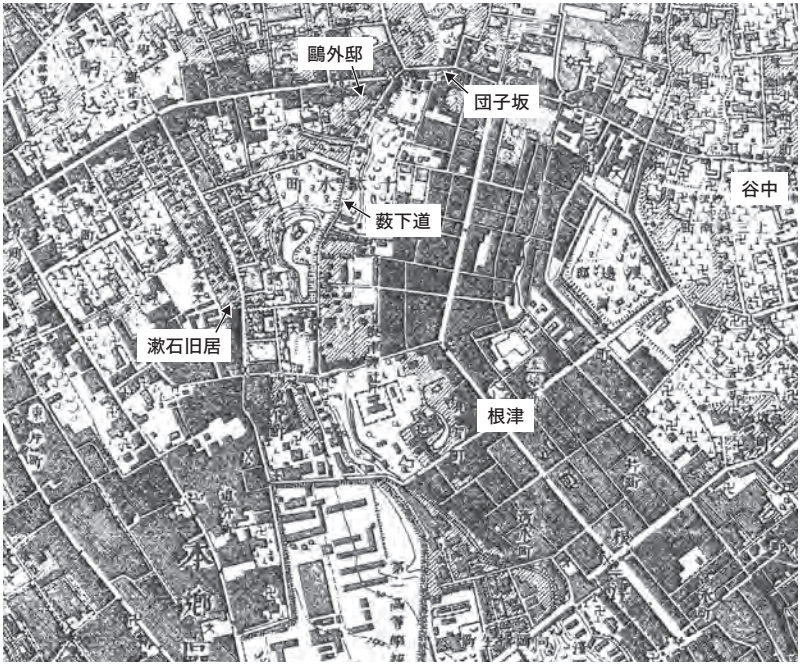
上野から道灌山[7][8]飛鳥山[9]へかけての高地の側面は崖のうちで最も偉大なものであろう。神田川を限るお茶の水[10]の絶壁は元より小赤壁[11][12]の名があるくらいで、崖の最も絵画的なる実例とすべきものである。

小石川春日町[13]から柳町指ヶ谷町[14]へかけての低地から、本郷の高台を見るところどころには、電車の開通しない以前、すなわち東京市の地勢と風景とがまだ今日ほどに破壊されない頃には、樹や草の生い茂った崖が現れていた。根津[15]の低地から弥生ヶ岡[16]と千駄木[17]の高地を仰げばここもまた絶壁である。絶壁の頂きに添うて、根津権現[18]のほうから団子坂[19]の上へと通ずる一条の路がある。私は東京中の往来のうちで、この道ほど興味ある所はないと思っている。片側は樹と竹藪に蔽われて昼なお暗く、片側はわが歩む道さえ崩れ落ちはせぬかと危ぶまれるばかり、足下をのぞくと崖の中腹に生えた樹木の梢を透かして谷底のような低い所にある人家の屋根が小さく見える。されば向こうは一面に遮るものなき大空かぎりもなく広々として、自由に浮き雲の定めなき行方をも見極められる。左手には上野谷中[20]に連なる森黒く、右手には神田下谷浅草[21]へかけての市街が一目に見晴らされそこより起こる雑然たる巷の物音が距離のために柔らげられて、かのヴェルレエヌ[22]が詩に、

かの平和なる物のひびきは
街より来る……

と言ったような心持ちを起こさせる。

当代の碩学森鷗外先生の居邸はこの道のほとり、団子坂の頂きに出ようとする所にある。二階の欄干にたたずむと市中の屋根を越して遥かに海が見えるとやら、しかるがゆえに先生はこの楼を観潮楼と名付けられたのだと私は聞き伝えている。（団子坂をば汐見坂というよし後に人より聞きたり。）たびたび私はこの観潮楼に親しく先生に見ゆるの光栄に接しているが多くは夜になってからのことなので、惜しいかな一度もまだ潮を観る機会がないのである。その代わり、私は忘れられぬほど音色の深い上野の鐘を聴いたことがあった。日中はまだ残暑の去りやらぬ初秋の夕暮れであった。先生は大方お食事中でもあったのか、私は取り次ぎの人に案内されたまましばらくの間ただ一人この観潮楼の上に取り残された。楼はたしか八畳に六畳の二間かと記憶している。[23]一間の床には何かいわれのあるらしい雷という一字を石摺にした[24]大幅がかけてあって、その下には古い支那[25]の陶器と想像せられる大きな六角の花瓶が、花一輪さしてないために、かえってこの上もなく厳格にまた冷静に見えた。座敷中にはこの床の間の軸と花瓶のほかは全く何一つ置いてないのである。



鷗外邸への道（大日本帝国陸地測量部の地形図〈明治 43 年〉を元に作成）
近くに漱石の住んだことのある家（猫の家）もある

20 15 10 5

額もなければ置き物もない。おそるおそる四枚立ての襖の明け放してある次の間を窺うと、中央に机が一脚置いてあったが、それさえ言わば台のようなもので、一枚の板と四本の脚があるばかり、抽出もなければ彫刻の飾りも何もない机で、その上には硯もインキ壺も紙も筆も置いてはない。しかしその後ろに立てた六枚屏風の裾からは、紐で束ねた西洋の新聞か雑誌のようなものの片端が見えたので、私はそっと首を延ばして差しのぞくと、いずれも大部のものと思われる種々なる洋書が座敷の壁際に高く積み重ねてあるらしい様子であった。世間には往々読まざる書物をれいれいとことさら人の見る所に飾り立てて置く人さえあるのに、これはまた何という一風変わった癇癖[26]であろう。私は『しからみ草紙』[27]以来の先生の文学とその性行について、何とはなく沈重に考え始めようとした。あたかもそのときである。ひときわ高く漂い来る木犀の匂いとともに、上野の鐘声は残暑を払う涼しい夕風に吹き送られ、明け放した観潮楼上にただ一人、主人を待つ間の私を驚かしたのである。

　私は振り返って音のするほうを眺めた。千駄木の崖上から見る彼の広漠たる市中の眺望は、今しも蒼然たる暮靄に包まれ一面に煙り渡った底から、数知れぬ灯火を輝かし、雲のごとき上野谷中の森の上には淡い黄昏の微光をば夢のように残していた。私はシャワン[28]の描いた聖女ジェネヴィエーブ[29]が静かに巴里の夜景を見下ろしている、かのパンテオンの壁画の神秘なる灰色の色彩を思い出さねばならなかった。

　鐘の音は長い余韻の後を追いかけ追いかけ撞き出されるのである。そのたびごとにその響きの湧き出る森の影は暗くなり低い市中の灯火は次第に光を増してくると車馬の声は嵐のようにかえって高く、やがて鐘の音の最後の余韻を消してしまった。私は茫然として再びがらんとして何物も置いてない観潮楼の内部を見回した。そして、この何物もない楼上から、この市中の灯火を見下ろし、この鐘声とこの車馬の響きをかわるがわるに聴き澄ましながら、わが鷗外先生は静かに書を読みまた筆を執られるのかと思うと、実にこのときほど私は先生の風貌をば、シャワンが壁画中の人物同様神秘に感じたことはなかった。

　ところが、「ヤア大変お待たせした。失敬失敬。」と言って、先生は書生のように二階の梯子段を上がって来られたのである。金巾[30]の白い襯衣一枚、その下には赤い筋の入った軍服のズボンを穿いておられたので、何のことはない、鷗外先生は日曜貸間の二階か何かでごろごろしている兵隊さんのように見えた。

「暑いときはこれに限る。一番涼しい。」と言いながら先生は女中の持ち運ぶ銀の皿を私のほうに押し出して葉巻を勧められ

た。先生は陸軍省の医務局長室で私に対談せられるときにもきまって葉巻を勧められる。もし先生の生涯にいささかたりとも贅沢らしいことがあるとするならば、それはこの葉巻だけであろう。

この夕べ、私は親しくオ[31]イケンの哲学に関する先生の感想を伺って、夜も九時過ぎ再び千駄木の崖道をば根津権現のほうへ下り、[32]不忍池の後ろを回ると、ここにも聳え立つ東照宮の裏手一面の崖に、木の間の星を数えながらやがて広小路の電車に乗った。

1 薊 キク科アザミ属の植物の総称。 **2 藪枯らし** ブドウ科のつる性多年草。 **3 潺々** 水がよどみなく流れるさま。 **4 宛然** そっくりそのまま。 **5 堡塁** 敵の攻撃を防ぐために、石・土砂・コンクリートなどで構築されたとりで。 **6 紫の一本** 江戸時代前期の歌学者・戸田茂睡による地誌。 **7 上野** 東京都台東区にある地名。 **8 道灌山** 東京都荒川区にある台地。 **9 飛鳥山** 東京都北区にある台地。桜の名所。 **10 神田川** 東京都内を流れる川の名。 **11 お茶の水** 東京都千代田区と文京区の一部の地名。 **12 小赤壁** 中国の名勝「赤壁」になぞらえた表現。 **13 小石川春日町** 文京区にあった地名。 **14 柳町指ヶ谷町** 東京都文京区にある地名。 **15 根津** **17 千駄木** 東京都文京区にある根津神社。 **18 根津権現** 東京都文京区にある地名。 **19 団子坂** 東京都文京区にある地名。 **20 谷中** 東京都台東区にある地名。 **21 浅草** 二二九ページ注25参照。 **22 ヴェルレエヌ** Paul Marie Verlaine 一八四四年～一八九六年 フランスの詩人。 **23 一間の床** 長さ一間（約一・八メートル）の床の間。 **24 大幅** 大きな掛け物・掛け軸。 **25 支那** 七九ページ注21参照。 **26 癇癖** 過度に怒りやすい性格のこと。ここでは、鷗外の神経質な性格のこと。 **27『しからみ草紙』** 鷗外主宰の評論を中心とした文学雑誌。明治二十二（一八八九）年創刊。 **28 シャワン** Pierre Puvis de Chavannes 一八二四年～一八九八年 シャヴァンヌ。フランスの画家。 **29 聖女ジェネヴィエーブ** Ste. Geneviève 四二〇年頃～五一二年 フランスの修道女。パリ市の守護聖人として知られる。 **30 金巾** canequim（ポルトガル語）。上質な薄地の綿布。敷布・肌着・シャツなどに用いられる。 **31 オイケン** Rudolf Christoph Eucken 一八四六年～一九二六年 ドイツの哲学者。ノーベル文学賞受賞者 **32 不忍池** 東京都台東区にある池。 **33 広小路** 東京都台東区にある上野広小路のこと。

永井荷風 明治十二（一八七九）年～昭和三十四（一九五九）年。小説家。東京都の生まれ。早くから文学に親しみ、五年間のアメリカ・フランス滞在を経て帰国。一時、江戸趣味に回帰したが、時代に流されず、世相を観察し続けた。日記『断腸亭日乗』がある。初出『三田文学』大正四（一九一五）年二月。本文は『日本文学全集 永井荷風』（平成四（一九九二）年刊）によった。

入れ札

菊池寛

上州岩鼻の代官を斬り殺した国定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠もって、八州の捕り方を避けていたが、そこも防ぎ切れなくなると、忠次をはじめ、十四、五人の子分は、ようやく一方の血路を、切り開いて、信州路へ落ちていった。

夜中に利根川を渡った。渋川の橋は、捕り方が固めていたので、一里ばかり下流を渡った。水勢が烈しいため、両岸に綱を引いて渡ったが、それでも子分の一人は、つい手を離したため流されてしまった。

渋川から、伊香保街道に添うて、道もない裏山を、榛名にかかった。一日、一晩で、やっと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまうと、すぐそこに大戸の御番所があった。

信州へ出るのには、この御番所が、第一の難関であった。この関所をさえ越してしまえば、向こうは信濃境まで、山また山が続いているだけであった。

忠次たちが、関所へかかったのは、夜の引き明けだった。わずか、五、六人しかいない役人たちは、忠次たちの勢いに怖れたものか、彼らの通行を一言もとがめなかった。

関所を過ぎると、さすがにみなは、ほっと安心した。本街道を避けて、裏山へかかってくるにつれて、夜がしらじらと明けて来た。ちょうど上州一円に、春蚕が孵ろうとする春の終わりの頃であった。山上から見下ろすと、街道に添うた村々には青い桑畑が、朝靄のうちに、どこまでも続いていた。

関東縞の袷に、鮫鞘の長脇差しを佩して、脚絆草鞋で、厳重な足ごしらえをした忠次は、菅のふき下しの笠をかぶって、先頭に立って、威勢よく歩いていた。小鬢の所に、傷痕のある浅黒い顔が、一月に近い辛苦で、少しやつれが見えたため、いっそう凄味を見せていた。子分も、たいてい同じような風体をしていた。が、忠次のほかは、誰も菅笠をかぶってはいなかった。中には、片袖の半分ちぎれかけている者や、脚絆の一方ない者や、白っぽい縞の着物に、ところどころ血をにじませているものなどもいた。

街道を避けながら、しかも街道を見失わないように、彼らは山から山へとたどった。大戸の関から、二里ばかりも来たと思う頃、雑木の茂った小高い山の中腹に出ていた。ふと振

り返ると、今まで見えなかった赤城が、山と山の間に、ほのかに浮かび出ていた。

「赤城山も見収めだな。おい、ここいらで一服しようか。」

そう言いながら、忠次は足下に大きな切り株を見付けて、どっかりと、腰を下ろした。彼の眼は、しばらくの間、四十年見なれた山の姿に囚われていた。赤城山が利根川の渓谷へと、緩い勾配を作っている一帯の高原には、彼の故郷の国定村も、彼が売り出しの当時、島村伊三郎を斬った境の町も、彼が一月前に代官を斬った岩鼻の町もあった。

国越えをしようとする忠次の心には、さすがに淡い哀愁が、感ぜられていた。が、それよりも、現在一番彼の心を苦しめていることは、子分の始末だった。赤城へ籠もった当座は、五十人に近かった子分が、日数がたつにつれ、二人三人ひそかに、山を下って逃げた。捕り方の総攻めを食ったときは、二十七人しか残っていなかった。それが、五、六人は召しとられ、七、八人はいずこともなく落ち延びて、今残っている十一人は、忠次のためには、*水火をも辞さない*金鉄の人々だった。国を売って、知らぬ他国へ走る以上、この先、あま

初出『中央公論』大正十（一九二一）年二月

1 上州岩鼻 現在の群馬県高崎市南東部にある地区。 **2 代官** 領主に代わって任地を司る者。また、その地位。 **3 国定忠次** 一八一〇年～一八五一年。本名は長岡忠次郎。当時四十歳あるいは四十一歳か。天保の大飢餓に際し、農民を救済した侠客。 **4 赤城山** 群馬県のほぼ中央に位置するカルデラを持つ山。 **5 八州** 江戸時代の関東地方の呼称。 **6 信州路** 信濃国（現在の長野県）へ通じる道。 **7 利根川** 関東平野を北西から南東へ流れ、太平洋に注ぐ川。 **8 渋川** 現在の群馬県渋川市。県のほぼ中央にあり、三国街道の宿場町として栄えた。 **9 一里** 二〇一ページ注3参照。 **10 榛名** 群馬県にある上毛三山の一つ。榛名山。 **11 大戸** 現在の群馬県吾妻郡東吾妻町。信濃街道の要衝。 **12 番所** 江戸時代、交通の要所に設けられ、監視・徴税などを行った役所。 **13 信濃境** 現在の長野県諏訪郡富士見町。 **14 本街道** 幕府が管理する、東海道・中山道・日光街道・奥州街道・甲州街道の五街道のこと。 **15 春蚕** 春に孵化した蚕。桑の開葉に合わせて飼われる蚕。 **16 関東縞** 関東地方で生産される、赤糸入りの細かい縦縞模様の木綿。 **17 長脇差し** 長い脇差し。「脇差し」は小刀。博徒・侠客が用いた。 **18 脚絆** 脛に着けて足ごしらえとした布。 **19 菅** カヤツリグサ科の多年草の総称。 **20 小鬢** 頭の左右前側面の髪。 **21 国定村** 現在の群馬県伊勢崎市。 **22 島村伊三郎** 一七九〇年～一八三四年。本名は町田伊三郎。 **23 境** 現在の群馬県伊勢崎市。

＊血路を開く　水火をも辞さない　金鉄

問 なぜ、「誰も菅笠をかぶってはいなかった」のか。

りいい芽も出そうでない忠次のために、一緒に関所を破って、命を投げ出してくれた人々だった。が、代官を斬った上に、関所を破った忠次として、十人余の子分を連れて、他国を横行することはできなかった。人目に触れないうちに、子分の始末を付けてしまいたかった。が、みんなと別れて、一人ぎりになってしまうことも、いろいろな点で不便だった。自分の目算どおりに、信州追分[24]の今井小藤太の家に、ころがり込むにしたところが、国定村の忠次とも言われた貸元[25]が、子分の一人も連れずに、顔を出すことは、沽券*にかかわることだった。手頃の子分を二、三人連れて行くとしたら、いったい誰を連れて行こう。そう思うと、彼の心のうちでは、すぐその顔ぶれが決まった。平生の忠次だったら、

「おい！　浅に、喜蔵に、嘉助とが、俺と一緒に来るんだ！　ほかの野郎たちは、めいめい思いどおりに落ちてくれ、路用[26]の金は、分けてやるからな！」

と、なんのこだわりもなく言えるはずだった。が、忠次は赤城に籠もって以来、自分に対する子分たちの忠誠をしみじみ感じていた。鰹節や生米をかじって露命を繋ぎ、岩窟[27]の樹の下で、雨露をしのいでいた幾日という長い間、彼らは一言の不平をこぼさなかった。忠次の身体が、赤城山中の地蔵山[28]で、危険に瀕したとき、みんなは命を捨てて働いてくれた。平生は老いぼれて、物の役には立つまいと思われていた闇雲の忍松までが、見事な働きをした。

そうした子分たちの健気な働きと、自分に対する心持ちとを見た忠次は、その中の二、三人を引き止めて他の多くに暇をやることが、どうしても気がすすまなかった。皆一様に、自分のために、一命を捨ててかかっている人々の間に、自分が甲乙を付けることは、どうしてもできなかった。剛腹な忠次も、打ち続く艱難で、少しは気が弱くなっているせいもあったのだろう。別れるのなら、いっそ皆と同じように、別れようと思った。

彼は、そう決心すると、

「おい！　みんな！」と、周囲に散らかっている子分たちを呼んだ。烈しい叱り付けるような声だった。喧嘩のときなどにも、叱咤する忠次の声だけは、狂奔している子分たちの耳にもよく徹した。

草の上にうずくまったり、寝ころんだり、めいめい思い思いの休息を取っていた子分たちは、忠次の一喝でみんな起き直った。数日来の烈しい疲労で、とろとろ眠りかけているものさえあった。

「おい！　みんな。」

忠次は、改めて呼び直した。『壺皿見透し[29]』と、若いとき

綽名を付けられていた、忠次の大きい眼がギロリと動いた。

「みんな！　ちょっと耳を貸してもらいてえのだが、俺これから、信州へ一人で、落ちて行こうと思うのだ。お前たちを、連れて行きてえのは山々だが、お役人をたたっ斬って、天下のお関所を破った俺たちが、お天道様の下を、十人二十人つながって歩くことは、許されねえ。もっとも、二、三人は、一緒に行ってもらいてえとも思うのだが、今日が日まで、同じ辛苦をしたお前たちみんなの中から、汝は行け汝は来るなという区別は付けたくねえのだ。連れて行くからなら、一人残らず、みんな一緒に連れて行きてえのだ。別れるからなら、恨みっこのねえように、みんな一様に別れてしまいてえのだ。さあ、ここに使い残りの金が、百五十両[30]ばかりあらあ。みんなに、十二両ずつ、くれてやって、残ったのは俺がもらっていくんだ。めいめいに、志を立てて落ちてくれ！　ずいぶん、身体に気を付けろ！　忠次が、どこかで捕まって、江戸送りにでもなったと聞いたら、線香の一本でも上げてくれ！」

忠次は、元気にそう言うと、胴[31]巻きの中から、五十両包みを、三つ取り出して、熊笹[32]の上に、ずしりと投げ出した。

が、誰もその五十両包みに、手を出すものはなかった。みんなは、忠次の突然な申し出に、どう答えていいか迷っているらしかった。一番に、子分たちの沈黙を破ったのは、大[33]間々の浅太郎だった。

「そりゃ、親分悪い了簡だろうぜ。いったい俺たちが、妻子眷族を見捨てて、ここまでお前さんに、ついてきたのは、なんのためだと思うのだ。みんな、お前さんの身の上を気遣って、お前さんの落ち着くところを、見届けたいと思う一心からじゃないか。いくら、大戸の御番所を越して、もうこれから信州までは大丈夫だと言ったところで、お前さんばかりを、一人で手放すことは、できるものじゃねえ。もっとも、こう物騒な野郎ばかりが、つながって歩けねえのは、道理な

24 信州追分　現在の長野県軽井沢町にあった追分宿のこと。
25 貸元　賭博場で客に金を貸す人。転じて、ばくち打ちの親分。
26 路用の金　旅費。
27 岩窟　岩にできた洞穴。岩穴。
28 地蔵山　標高一六七四メートル。群馬県前橋市にある赤城山の中央火口丘。
29『壺皿見透し』「壺皿」は、ばくちでさいころを伏せ隠すのに使う壺。壺の中まで見通す眼力をたとえた。
30 両　近世の通貨の単位。
31 胴巻き　金銭などを入れて腹に巻き付ける帯状の袋。
32 熊笹　イネ科の植物。主に山地に生育。
33 大間々　現在の群馬県みどり市にある地名。宿場町として栄えた。
＊ 沽券にかかわる

のだから、お前さんが、こいつだと思う野郎を、名指しておくんなせえ。何も親分子分の間で、遠慮することなんかありゃしねえ。お前さんの大事な場合だ！　恨みつらみを言うような、ケチな野郎は一人だってありゃしねえ。なあ兄弟！」

　みんなは、異口同音に、浅太郎の言い分に賛意を表した。が、そう言われてみると、忠次はなおさら選みかねた。自分の大事な場所であるだけに、彼らの名前を指すことは、彼らに対する信頼の差別を、露骨に表すことになってくる。それで、選に洩れた連中と――内心、忠次をうらむかもしれない連中と――そのまま、再会の機も期し難く、別れてしまわねばならぬことを考えると、忠次はどうしても、気が進まなかった。

　忠次は口をつぐんだまま、なんとも答えなかった。親分と子分との間に、不安な沈黙がしばらく続いた。

「ああ、いいことがあらあ。」釈迦の十蔵というまだ二十二、三の男が叫んだ。彼は忠次の盃*をもらってからまだ二年にもなっていなかった。

「籤引きがいいや、みんなで籤を引いて、当たった者が親分のお供をするのがいいや。」

　当座の妙案なので、忠次も子分も、十蔵のほうをちょっと見た。が、嘉助という男がすぐ反対した。

「何を言ってやがるんだい！　籤引きだって！　手前のような青二才に籤が当たってみろ、かえって親分の足手まといじゃねえか。籤引きなんか、俺あ真ッ平だ。こんなときに一番ものを言うのは、腕っ節だ。おい親分！　くだらねえ遠慮なんかしねえで、一言、嘉助ついてこいと、言っておくんなさい。」

　四斗樽[34]を両手に提げながら、足駄[35]をはいて歩くという嘉助は一行中で第一の大力だった。忠次が心のうちで選んでいる三人の中の一人だった。

「嘉助の野郎、何を大きなことを言ってやがるんだい。腕っ節ばかりで、世間は渡られねえぞ。ましてこれから、知らねえ土地をへめぐって、上州の国定忠次でございと言って歩くには、駆け引き万端の軍師がついていねえことには、どうにもならねえのだ。いくら手前が、大力だからといって、ドジばかりを踏んでいちゃ、旅先で、飯にはならねえぞ。」

　そう言ったは、松井田の喜蔵[36]という、分別盛り*の四十男だった。忠次も喜蔵の才覚と、分別とは認めていた。彼は心のうちで喜蔵も三人の中に加えていた。

「親分、俺あお供はできねえかねえ。俺あ腕っ節は強くはねえ。また、喜蔵のように軍師じゃねえ。が、お前さんのためには、一命を捨ててもいいと、心の内でとっくに覚悟を決めているんだ。」

闇雲の忍松が、そこまで言いかけると、子分たちは、周囲から口々に罵った。

「何を言ってやがるんだい、親分のために命を投げ出している者は、手前一人じゃねえぞ、ふざけたことをぬかすねえ。」

そう言われると、忍松は一言もなかった。半白[37]の頭を、テレ隠しに掻いていた。

そうしているうちに、半時[38]ばかりたった。日光山[39]らしい方角に出た朝日が、もうよほどさし登っていた。忠次は、黙々として、みんなの言うことを聴いていた。二、三人連れて行くとしたら、彼は籤引きでは連れていきたくなかった。やっぱり、信頼のできる子分を自ら選びたかった。彼はふと一策を思いついた。それは、彼が自ら選ぶことなくして、最も優秀な子分を選みうる方法だった。

「お前たちのように、そうザワザワ騒いでいちゃ、いつが来たって、果てしがありゃしねえ。俺一人を手離すのが不安心だと言うのなら、お前たちの間で入れ札をしてみちゃ、どうだい。札数の多い者から、三人だけ連れて行こうじゃねえか。こりゃ一番怨[うら]みっこがなくって、いいだろうぜ。」

忠次の言葉が終わるか終わらないかに、

「そいつあ思いつきだ。」子分のうちで一番人望のある喜蔵が賛成した。

「そいつあ趣向だ。」大間々の浅太郎もすぐ賛成した。

心のうちで、籤引きを望んでいる者も数人あった。が、忠次の、怨みっこのないように、しかも役に立つ子分を、選ぼうという肚[はら]が分かると、みんなは異議なく入れ札に賛成した。

喜蔵が矢立て[40]を持っていた。忠次が懐から、鼻紙の半紙を取り出した。それを喜蔵が受け取ると、長脇差しを抜いて手際よくそれを小さく切り分けた。そうして、一片[ひときれ]ずつみんなに配った。

さっきからの経路を、一番厭[いや]な心で見ていたのは稲荷[いなり]の九[く]郎助[ろすけ]だった。彼は年輩から言っても、忠次の身内では第一の兄分でなければならなかった。が、忠次からも、子分からも、

＊盃をもらう　分別盛り

34 四斗樽　酒などを入れる大きな樽。一斗は約十八リットル。

35 足駄　高い歯の下駄。

36 松井田　現在の群馬県安中市にある地名。

37 半白　白髪交じりの毛髪。

38 半時　一時の半分。一時は現在の約二時間。

39 日光山　栃木県北西部にある男体山・女峰山・太郎山の三山を中心とする山岳の総称。

40 矢立て　筆と墨壺を組み合わせた携帯用筆記用具。

問 なぜ、「籤引きを望」むのか。

そのようには扱われていなかった。去年、大前田の一家とちょっとした出入りのあったとき、彼は喧嘩場から、不覚にも大前田の身内の者に引っ担がれた。それ以来、彼は多年培っていた自分の声望がめっきり落ちたのを知った。自分から言えば、遥かに後輩の浅太郎や喜蔵にだんだん凌がれてきたことを、感じていた。そればかりでなく、十年前までは、兄弟同様に賭場から賭場を、一緒に漂浪して歩いた忠次までが、いつとなく、自分を軽んじていることを知った。皆は表面こそ『阿兄！　阿兄！』と立てているものの、心のうちでは、自分を重んじていないことが、ありありと感ぜられた。[41]

　入れ札という声を聴いたとき、九郎助は悪いことになったなあと思った。今まで、表面だけはともかくも保ってきた自分の位置が、露骨に崩されるのだと思うと、彼は厭な気がした。十一人いる子分の中で自分に入れてくれそうな人間を考えてみた。が、それは弥助のほかには思い当たらなかった。弥助も九郎助と同様に、古い顔であって、後輩の浅太郎や、喜蔵などが、グングン*頭を擡げてくるのを、常から快からず思っているから、こうした場合には、きっと自分に入れてくれるだろうと思った。が、弥助だけは自分に入れてくれるとしても、弥助の一枚だけで、三人の中に入ることは考えられなかった。浅太郎には四枚入るだろうと思った。喜蔵に三枚



『国定忠次実伝』より

入るとして、十一枚のうち、後へ四枚残る。そのうち、自分の一枚をのけると三枚残る。もし、そのうち、二枚が、自分に入れられていれば、三人の中に加わることはできるかもしれないと思った。が、弥助のほかに、自分に入れてくれそうな人は、どう考えても当てがなかった。ひょっとしたら、並川の才助がとも思った。あの男の若いときには、かなり世話を焼いてやった覚えがある。が、それは六、七年も前のことで、今では『浅阿兄、浅阿兄』と、浅にばかりくっついている。そう思うと、弥助の入れてくれる一枚のほかには、今一枚を得る当ては、どうにもつかなかった。子分の中で年頭(としがしら)でもあり、一番兄分でもある自分が、入れ札に落ちることは——自分の信望が少しもないことがまざまざと表れることは、もう既定の事実のように、九郎助には思われた。不愉快な寂しい感じに堪えられなくなってきた。

一本しかない矢立ての筆は、次から次へと廻(まわ)ってきた。

「おい！　阿兄！　筆をやらあ。」

ぼんやり考えていた九郎助の肩を、つつきながら横にいた弥助が、筆を渡してくれた。弥助は筆を渡すときに、九郎助の顔を見ながら、意味ありげに、ニヤリと笑った。それは、たしかに好意のある微笑だった。『お前を入れたぜ。』と言うような、意味を持った微笑であるように九郎助は思った。そう思うと、九郎助は後のもう一枚が、どうしても欲しくなった。後の一枚が、自分の生死の境、*栄辱の境であるように思われた。忠次についていったところで、自分の身に、いい芽が出ようとは思われなかったが、入れ札に洩(も)れて、*年がいもなく置き捨てにされることがどうしてもたまらなかった。浅太郎や喜蔵の人望が、自分の上にあることが、マザマザと分かることが、どうしてもたまらなかった。

彼は、筆を持ってぼんやり考えた。

「おい！　阿兄！　早く廻してくんな！」

横に座っている浅太郎が、彼に言った。阿兄！　と言いながらも、語調だけは、目下を叱(しっ)しているような口調だった。九郎助は、毎度のことながらむっとした。途端に、相手に対する烈しい競争心が——嫉妬がムラムラと彼の心に渦巻いた。

筆を持っている手が、少しブルブルふるえた。彼は、紙を身体で掩(おお)いかくすようにしながら、仮名で『くろすけ』と書

41 **大前田**　大前田英五郎。一七九三年～一八七四年。本名は田島英五郎。江戸時代末期に活躍した侠客。

＊ 頭を擡げる　栄辱　年がいもない

問 なぜ、「寂しい」のか。

いた。

書いてしまうと、彼はその小さい紙片をくるくると丸めて、真ん中に置いてある空になった[42]割籠の蓋の中に入れた。が、入れた瞬間に、苦い悔悟が胸の中にすぐ起こった。

『賭博は打っても、卑怯なことはするな。男らしくねえことはするな。』

口癖のように、怒鳴る忠次の声が、耳のそばで、ガンガン鳴りひびくような気がした。彼は皆が自分の顔を、ジロジロ見ているような気がして、どうしても顔を上げることができなかった。

吉井の伝助は、無筆だったので、彼は仲よしの才助に、小声で耳打ちしながら、代筆を頼んだ。

皆が、札を入れてしまうと、忠次が、

「喜蔵！　お前読み上げてみねえ！」と言った。

皆は、緊張のために、眼を輝かした。過半数のものは諦めていたが、それでもめいめい、うぬぼれは持っていた。壺皿を見詰めるような目付きで、喜蔵の手許を睨んでいた。

「あさ、ああ浅太郎のことだな、浅太郎一枚！」

そう叫んで喜蔵は、一枚、札を別に置いた。

「浅太郎二枚！」彼は続いてそう叫んだ。

また、浅太郎が出たのである。浅太郎が、この二、三年忠次の信任を得て、影の形に付き従うように、忠次が彼を身辺から放さなかったことは、子分の者が皆よく知っていた。浅太郎の声がつづくと、忠次の浅黒い顔に、ニッと微笑が浮かんだ。

「喜蔵が一枚！」

喜蔵は、自分の名が出たのを、うれしそうに、ニコリと笑いながら叫んで、

「うそじゃねえぞ！」と、付け足しながら、その紙を右の手で高く上げて差し示した。

「その次がまた、喜蔵だ！」

喜蔵は得意げに、また紙札を高く差し上げた。

「嘉助が一枚！」

第三の名前が出た。忠次は、心の中で、ひそかに選んでいる三人が、入れ札の表に現れてくるのが、うれしかった。子分たちが自分の心持ちを、察していてくれるのがうれしかった。

「なんだ！　くろすけ。九郎助だな。九郎助が一枚！」

喜蔵は、声高く叫んだ。九郎助は、顔から火が出るように思った。生まれて初めて感ずるような羞恥と、不安と、悔恨とで、胸のうちがかきむしられるようだ。自分の[43]手蹟を、喜蔵が見覚えては、いはしないかと思うと、九郎助は立っても

座ってもいられないような気持ちだった。が、喜蔵は九郎助の札には、こだわっていなかった。

「浅が三枚だ！　その次は、喜蔵が三枚だ！」

喜蔵は大声に叫びつづけた。札が次々に読み上げられて、喜蔵の手にたった一枚残ったとき、浅が四枚で、喜蔵が四枚だった。嘉助と九郎助とが各自一枚ずつだった。

九郎助は、心のうちで懸命に弥助の札が出るのを待っていた。弥助の札が出ないことはないと思っていた。もう一枚さえ出れば、自分が、三人の中に入るのだと思っていた。

が、最後の札は、彼の切ない期待を裏切って、嘉助に投ぜられた札だった。

「さあ！　みんな聞いてくれ！　浅と喜蔵とが四枚だ。嘉助が二枚だ。九郎助が一枚だ。疑わしいと思うやつは、自分で調べてみるといいや。」喜蔵は最後の決定を伝えながら、一座を見廻した。

誰も調べてみようとはしなかった。誰よりも先に、九郎助はホッと安心した。

忠次は自分の思いどおりの人間に、札が落ちたのを見ると満足して、切り株から、立ち上がった。

「じゃ、みんな腑に落ちたんだな。それじゃ、浅と喜蔵と嘉助とを連れて行こう。九郎助は、一枚入っているから連れて行きたいが、最初言った言葉を変改することはできねえから、勘弁しな。さあ、さっきからえろう手間を取った。じゃ、みんな金を分けてめいめいに志すところへ行ってくれ。」

子分の者は、忠次が出してあったうちから、めいめいに十二両ずつを分けて取った。

「じゃ、俺たちは一足先に行くぜ。」忠次は選まれた三人を差し招くと、みんなに最後の会釈をしながら、頂上のほうへぐんぐん上りかけた。

「親分、ご機嫌よう。ご機嫌よう。」

去っていく忠次の後から、子分たちは口々に呼びかけた。忠次は、振り向きながら、時々、被っている菅笠を取って振った。その長身の身体は、山の中腹を掩うている小松林の中に、しばらくの間は見え隠れしていた。

42 **割籠**　ヒノキなどの薄板で作られた弁当箱。　43 **手蹟**　人の手で書いた文字。筆跡。

問 九郎助は、なぜ「皆が自分の顔を、…気がし」たのか。

問 どのような「うぬぼれ」か。

問 なぜ、「こだわっていな」いのか。

問 「誰よりも先に、…ホッと安心した」のは、なぜか。

取り残された子分たちの顔には、それぞれ失望の影があった。

「浅たちが付いていりゃ、大した間違いはありゃしねい！」

口々に同じようなことを言った。が、やっぱり、めいめい自分が入れ札に洩れた淋しさを持っていた。

が、忠次たちの姿が見えなくなると、四、五人は諦めたように、草津[44]のほうへ落ちていった。

九郎助は、忠次と別れるとき、目礼したままじっと考えていた。落選した失望よりも、自分の浅ましさが、ヒシヒシ骨身にこたえた。札が、二、三人に集まっているところを見ると、みんな親分のためを計って、浅や喜蔵に入れたのだ。親分の心を汲んで、浅や喜蔵を選んだのだ。そう思うと、自分の名をかいた卑しさがいよいよ堪えられなかった。

朝の微風が吹いてきて、入れ札の紙が、熊笹を離れて、ひらひらと飛びそうになった。

「ああ、こんなものが残っていると、とんだ手がかりにならねえとも限らねえ。」

そう言いながら、九郎助は立ち上がって散らばっている紙片を取り集めると、めちゃめちゃに引きちぎって投げ捨てた。

九郎助の顔は、すごいほどに蒼かった。

「俺[45]、秩父のほうへ落ちようかな。」

九郎助は独り言のように言った。彼は仲間の誰とも顔を合わしているのがいやだった。秩父に遠縁の者がいるのを幸いに、そこで百姓にでもなってしまいたかった。

彼は、草津へ行った連中とは、反対に榛名の西南の麓を目ざして、ぐんぐん山を降りかけた。

彼が二、三[46]町も来たときだった。後ろから声をかけるものがあった。

「おい阿兄！　稲荷の阿兄！」

彼は、立ち止まって振り返った。見ると、弥助が、息を切らしながら、追いかけてきたのであった。彼は弥助の顔を見たときに、烈しい憎悪が、胸のうちに湧いた。大切な場合に自分を裏切っていながらまだ身の振り方をでも相談しようとするらしい相手のずうずうしい態度を見ると、彼はその得[47]勝手が、たたき切ってやりたいほど、癪に障った。

「俺、よっぽど草津から越後[48]へ出ようと思ったが、よく考えてみると、熊谷[49]在に伯父がいるのだ、少しは、熊谷は危険かもしれねえが、故郷へかえる足だまりには持ってこいだ。それで俺も武州[50]のほうへ出るから、途中まで付き合ってくれねえか。」

九郎助は、返事をすることさえ厭だった。黙ってすたこら歩いていた。

弥助は、九郎助が機嫌が悪いのを知ると、傍へ寄った。

「俺あ、今日の入れ札には、最初からいやだった。親分も親分だ！　餓鬼のときから一緒に育ったお前を連れていくと言わねえ法はねえ。浅や喜蔵は、いくら腕っ節や、才覚があっても、言わば、お前に比べればホンの小僧っ子だ。たとい、入れ札にするにしたところが、野郎たちが、お前を入れねえということはありゃしねえ。十一人のうちでお前の名をかいたのは、この弥助一人だと思うと、俺ああいつらの心根が、全くわからねえや。」

黙って聞いた九郎助は、火のようなものが、身体の周囲に、ひらめいたような気がした。

「この野郎！」そう思いながら、脇差しの柄を、左の手で、グッと握りしめた。もう、一言言ってみろ、抜き打ちに斬ってやろうと思った。

が、九郎助が火のように、怒っていようとは夢にも知らない弥助は、平気な顔をして寄り添って歩いていた。

柄を握りしめている九郎助の手が、だんだん緩んできた。考えてみると、弥助の嘘を咎めるのには、自分の恥ずかしさを打ち開けねばならない。

その上、自分に大嘘をついている弥助でさえ、自分があんな卑しいことをしたのだとは、夢にも思っていなければこそ、こんな白々しい嘘をつくのだと思うと、九郎助は自分で自分が情けなくなってきた。口先だけの嘘を平気で言う弥助でさえが考え付かないほど、自分は卑しいのだと思うと、頭の上に輝いている晩春のお天道様が、一時に暗くなるような味気なさを味わった。

山の多い上州の空は、いっぱいに晴れていた。峰から峰へ渡る幾百羽という小鳥の群れが、黄色い翼をひらめかしながら、九郎助の頭の上を、ほがらかに鳴きながら通っている。行く手には榛名が、空をくぎって蒼々とそびえていた。

44 **草津**　現在の群馬県吾妻郡草津町。　45 **秩父**　現在の埼玉県北西部の秩父地方。　46 **町**　八一ページ注31参照。
47 **得手勝手**　他人のことは考えず、自分の都合のよいことばかりを考えて、わがまま放題にすること。　48 **越後**　現在の新潟県（佐渡を除く）。
49 **熊谷**　現在の埼玉県熊谷市。県の北部にあり中山道の宿場町として栄えた。　50 **武州**　武蔵の国。現在の東京都・埼玉県と神奈川県の一部。
51 **抜き打ち**　敵の不意をついて打つこと。

問 **「ああ、こんなものが…恨らねえ」という台詞から、九郎助のどのような心理が読み取れるか。**

問 **弥助は、なぜ「平気」なのか。**

問 **この「味気なさ」とは、どのようなものか。**



菊池　寛（きくち かん）　明治二十一（一八八八）年～昭和二十三（一九四八）年。小説家・劇作家・実業家。香川県の生まれ。芥川龍之介（あくたがわりゅうのすけ）らと同人誌『新思潮』に参加し、テーマ小説を得意とした。新聞小説『真珠夫人』が大ヒットし、実業家としてジャーナリズムに参入、昭和期は文壇の大御所となった。作品に『父帰る』（戯曲）、『忠直卿行状記（ただなおきょうぎょうじょうき）』『恩讐（おんしゅう）の彼方（かなた）に』『啓吉物語』（小説）などがある。本文は『菊池寛全集　第三巻』（平成六（一九九四）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 この小説は、主に忠次の心理に注目する前半と九郎助の心理に注目する後半とに分かれるが、

(1) 前半と後半の区切りを指摘してみよう。

(2) 大きく二つの部分に分けることで、どのような効果が生まれるか、考えてみよう。

2 忠次が入れ札を提案するタイミングに注視して、小説全体を通した忠次のずるさについて考えてみよう。

3 九郎助は自分の卑怯を深く恥じているが、他の子分たちによってどのようなことが行われていた可能性が考えられるか、興味深い事例を想像して、発表してみよう。

◇言葉と表現

1 「赤城山も見収めだな」（三〇一・上3）とあるが、映画・演劇や講談・浪曲などでは、このせりふをどのように表現しているか、調べてみよう。

◇言語活動

1 本作は大正デモクラシーが進み、普通選挙法への期待が高まる中、総合誌に発表されている。本作の表現に着目して、同時代との関係について考えてみよう。

2 もし忠次についていく子分を選ぶ方法が入れ札ではなく籤引きになったとしたら、どのようなドラマが生まれるだろうか。それぞれの選出方法の長所と短所を吟味しながら話し合ってみよう。

文学の歴史について再考する

文学史とは何だろうか。各時代の文学は、国や地域のアイデンティティの指標ともなるものである。それゆえに、各国・各地域の文学史は、近代ナショナリズムの台頭と共に、掘り起こされることとなった。日本近代文学の概説書であれば、例えば坪内逍遥『小説神髄』など文学の潮流を変えた評論や作品を取り扱い、世界文学の案内書であれば文豪の生涯や作品の歴史的・地理的背景に紙幅を費やすことが多いだろう。そうした中、私たちは好きな作家の文学史的位置をめぐる議論に興味を抱いたり、テーマや方法論が共通する他の国・地域の作品同士を読み比べたりするかもしれない。それぞれの読者が、おのずと複数の文学史を横断し、読むことの歴史を生きている。

ところで、重要だとされる文学作品は、いつ、なぜ、文学の歴史に登録されてきたのだろうか。例えば、文学全集といったアンソロジーや文庫化される代表作・話題作など目に触れやすいものは、そのつど、関係者の評価によって選ばれてきたはずである。百年を超えて今もなお書店の棚に並び図書館の一角を占める「名作」には、そのような価値判断の積み上げがあるのだろう。ノーベル文学賞は抜群の知名度があるが、推薦者と選考委員が決めていく点では同じ仕組みである。翻れば、選者や評者、そして読者の価値観や視座が変われば、別の「文学史」もあり得るのであり、発表当時や作者生前の同時代評が正しかったという保証はどこにもない。そしてまた、作品評価の作法も、時代や場所によって変わってくるのである。今日の価値観から考えれば不適切な言葉が、過去には一般的に認められていた事例は多い。現在の常識も百年後には通用しないかもしれないのだ。だからこそ、時代の制約の中での真摯な表現に対して、私たちは複眼的に接し、読み解き、粘り強く吟味しなければならない。

日本近代文学の出発期、森鷗外は石橋忍月の『舞姫』批判に対して、自らその価値を擁護した。鷗外は幸田露伴・斎藤緑雨を誘って「三人冗語」という少人数での匿名批評を試み、樋口一葉を絶賛することになる。大正期は多くの文学者が誌上合評会に駆り出され、菊池寛『入れ札』のように投票によってアンソロジー執筆者を選出することもあった。昭和期に入ると、菊池の肝いりで、芥川賞・直木賞といったメディアをにぎわす文学賞が登場する。そして現在では、書店員による本屋大賞や、明確なメッセージ性のあるセンス・オブ・ジェンダー賞など、様々な角度から文学を評価し、新たな文学史を形作っていく仕掛けが生まれ続けている。

物語と歴史のあいだ

野家啓一（のえけいいち）

人は現在のことは指し示せばよいが、過去のことは物語らねばならない。

（J・Gヘルダー[1]『言語起源論』）

「語りえないことについては、沈黙しなければならない」。[2]ウィトゲンシュタインは『論理哲学論考』の掉尾（とうび）*をこの簡勁（かんけい）な一句でもって締めくくった。それになぞらえるならば、私が以下の論述で展開し、擁護しようと思っているのは、「物語りえないものについては、沈黙せねばならない」というテーゼ[3]である。むろん、話を叙事詩や小説などいわゆるフィクションの領域に限るならば、これは単なるトートロジー[4]にすぎず、それこそ「語るに落ちる」話であろう。しかし、場面を過去の出来事や歴史的事実にまで広げるならば、これはいささか面妖で背理[5]*を孕（はら）んだテーゼとなるに違いない。というのも、光源氏（ひかるげんじ）[6]が葵（あおい）[7]の上（うえ）を妻に迎えたという出来事は、『源氏物語』という言語作品を離れては意味をなさないのに対し、源義経（みなもとのよしつね）[8]が静御前（しずか）[9]を妻に迎えたという出来事は、『平家物語』という作品の成立とは無関係に存在する歴史的事実だと考えられるからである。私がここで主張したいのは、前者と同様に後者の出来事もまた、歴史を

初出『批評空間』平成三（一九九一）年七月

1 **J・Gヘルダー** Johann Gottfried von Herder 一七四四年～一八〇三年。ドイツの哲学者・文学者。

2 **ウィトゲンシュタイン** Ludwig Josef Johann Wittgenstein 一八八九年～一九五一年。オーストリアの哲学者。

3 **テーゼ** These（ドイツ語）。命題。ある問題について提示された主張。

4 **トートロジー** tautology（英語）。同語反復。同じことを表す言葉の無用な繰り返し。

5 **背理** 論理に反していること。

6 **光源氏** 『源氏物語』の主人公。

物語るという言語行為、すなわち「物語行為」を離れては意味をなさず、また存在しえないという、すまし返った常識の温顔を少しばかり逆なでしかねないテーゼである。

歴史は過去の事実を記録する。しかし、歴史学者といえども、過去の事実をありのままに描写することはできない。彼らにできるのは、文献史料や考古学的資料を駆使して、過去の出来事を「解釈学的に再構成」すること、すなわち「物語る」ことだけである。

もちろん、太古から現在に至るあらゆる出来事をくまなく記録し、能う限り正確に記述することは、歴史学者の夢であろう。その夢をA・ダントー[10]は「理想的年代記作者」と呼んでいる。すなわち、全ての歴史的出来事を、それが起こった瞬間にありのままに描写する能力を備えた超人的な歴史学者のことである。しかし、たとえそのようなことが可能だとしても、彼が作成する「年代記」は脈絡を欠いた膨大な歴史年表のようなものであり、それは歴史叙述の基礎資料とはなりえても、「歴史叙述」とはなりえない。なぜなら、そこには出来事と出来事とをつなぐ脈絡、すなわち「物語」が欠落しているからである。このような歴史学者のことを、小林秀雄[11]は「一種の動物に止まる」と喝破した。今さら引用するのも気が引けるほど人口に膾炙した文章だが、ここはやはり『無常といふ事』[12]の一節に登場してもらわねばならない。

思い出が、僕らを一種の動物であることから救うのだ。記憶するだけではいけないのだ

7 **葵の上** 『源氏物語』の登場人物。光源氏の最初の妻。

8 **源義経** 一一五九年～一一八九年。平安時代末期の武将。源平合戦での活躍が『平家物語』に描かれている。

9 **静御前** 生没年未詳。源義経の側室。

問 **「逆なでしかねないテーゼ」となるのは、なぜか。**

10 **A・ダントー** Arthur Coleman Danto 一九二四年～二〇一三年。アメリカ合衆国の美術評論家・哲学者。

問 **「そのようなこと」とは、何を指しているか。**

11 **小林秀雄** 四九ページ注3参照

12 **『無常といふ事』** 評論集。昭和二十一（一九四六）年刊。

＊ 掉尾 面妖 喝破 人口に膾炙する

ろう。思い出さなくてはいけないのだろう。多くの歴史家が、一種の動物に止まるのは、頭を記憶で一杯にしているので、心をむなしくして思い出すことができないからではあるまいか。（中略）上手に思い出すことは非常に難しい。だが、それが、過去から未来に向かって飴のように延びた時間という蒼ざめた思想（僕にはそれは現代における最大の妄想と思われるが）から逃れる唯一の本当に有効なやり方のように思える。

ここに見られる「記憶」と「思い出」との対比は、「理想的年代記」と「歴史叙述」との区別を際立たせてくれる。記憶をあらゆる歴史的出来事が細大漏らさず貯蔵された巨大な水甕*だとすれば、思い出とは、その水甕のわずかな割れ目からにじみ出した一筋の水滴にでもなぞらえることができる。その水滴は朝まだきの光に照り輝くこともあれば、夜の冷気に氷結することもあるであろう。小林秀雄は一滴の水が乾いた舌に滴り落ちるその瞬間を捉えて、それを「歴史」と呼んだのである。それゆえ、思い出は過去の出来事のありのままの再現ではない。それは経験の遠近法による濾過と選別とを通じて一種の「解釈学的変形」を被った出来事である。強烈な印象を刻みつけた出来事はクローズアップで大写しにされ、さほど印象に残らない些末な出来事は遠景に退いてフェイドアウトすることであろう。そこにはおのずからなる想起の力学が働いているのである。

しかし、小林の思い入れに反して、「思い出」はそのままでは「歴史」に転成することはで

きない。思い出されただけで、それが再び記憶の闇の中に消え入るならば、思い出は甘美な個人的感懐ではあっても、間主観的[13]な歴史ではない。思い出が歴史に転生を遂げるためには、何よりも「物語行為」による媒介が不可欠なのである。思い出は断片的であり、間欠的であり、そこには統一的な筋もなければ有機的連関を組織する脈絡も欠けている。それらの断片を織り合わせ、因果の糸を張り巡らし、起承転結の結構をしつらえることによって一枚の布にあえかな文様を浮かび上がらせることこそ、物語行為の役目にほかならない。物語られることによって初めて、断片的な思い出は「構造化」され、また個人的な思い出は「共同化」される。「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化こそが、ほかならぬ歴史的事実の成立条件なのである。それゆえ、歴史的事実は、ありのままの「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された「解釈学的事実」と呼ばれねばならない。

このように言えば、再び、歴史的事実の客観性は、文献史料や考古学的資料によって保証されているはずではないか、という反論がなされるであろう。しかし、文献史料は言語による記述であることによって、ありのままの過去を再現する手段ではなく、すでに「解釈」の産物なのである。われわれは、たとえ知覚の現場で直接的に体験したことですら、それを完璧に再現し記述することはできない。意識的にであろうと、無意識的にであろうと、われわれが言語によって記述を行うとき、そこには関心の遠近法が働いており、記録に値する有意味な情報の取捨選択がなされているのである。その意味では、文献史料はすでに一つの「物語」を語ってい

13 **間主観的**　複数の主観の間で成立する共通の認識に基づくさま。

問 **「このように」とは、どのようなことか。**

問 **「関心の遠近法」とは、どのようなことか。**

＊
細大漏らさず　間欠的
あえか

るのだと言ってよい。考古学的資料ですら「解釈」の汚染を免れてはいないことについては、次の川田順造[14]の文章が雄弁に語っている。

一方、土器の破片も、人間の解釈を全く排除したものではない。それが人間によって、作られたり使われたりした以上、その土器は、当時の社会で何らかの意味を持っていたのであり、それをこしらえた人は、自然の素材に対する人間のある「解釈」と働きかけの結果として、その土器を作り出したのだから。ただ、「もの」では文字や言葉ほど解釈ははっきりと表明されていないが、土器の形や、そこに彫られたり描かれたりしている、さまざまな紋様や図形に注意を払えば、土器と文字との史料としての隔たりも、実は連続したものであることが分かる。

それゆえ、歴史の「史料」もまた、過去の「客観的事実」そのものではない。そこにすでに「解釈」の鑿（のみ）が刻み込まれているのである。だとすれば、歴史叙述は「解釈の解釈」の行為とならざるをえないであろう。その観点からすれば、歴史叙述は「記述」であるよりは、むしろ「制作（ポイエーシス）」[15]に似ている。歴史家のP・ヴェーヌ[16]の言葉を借りれば、「小説と同じで、歴史はふるいにかけ、単純にし、組み立てる。一世紀を一ページにしてしまう」のである。

ここまでくれば、「歴史的出来事（Geschichte）」と「歴史叙述（Historie）」との古典的二

14 **川田順造**　一九三四年〜。日本の文化人類学者。

問 **「解釈の解釈」とは、どのようなことか。**

15 **ポイエーシス**　poiēsis（ギリシャ語）。創造。

16 **P・ヴェーヌ**　Paul-Marie Veyne　一九三〇年〜二〇一三年。フランスの歴史学者。

分法が、そのままでは維持しがたいことは明らかであろう。過去が想起と不可分であるように、歴史的出来事もまた歴史叙述から独立に論じることはできないのである。歴史的出来事は、物語行為によって語り出されることによって初めて、歴史的事実としての身分を確立することができる。物語行為は、想起されたさまざまな出来事を時間系列にしたがって配列し、さらにそれらを一定の「物語」のコンテクスト[17]の中に再配置することによって、歴史的事実を構成する。それ以外の場所に、つまり物語行為によって語り出される事柄の外部に、「客観的事実」や「歴史の必然性」が存在しているわけではない。英語の“history”と“story”とが共にギリシア語の「ヒストリア」に由来する語源を同じくする言葉であることからも分かるように、「歴史」と「物語」とは「事実」と「虚構」のように対立するものではない。むしろ歴史叙述の原型である「口承」や「伝承」のあり方を見れば分かるように、両者は表裏一体のものなのである。それゆえ、物語行為こそは、われわれの歴史意識を構成する最も原初的な言語活動だと言わねばならない。ここでわれわれは、冒頭のウィトゲンシュタインを模したテーゼに立ち返って今一度こう言うことができる。「物語りえぬことについては、沈黙せねばならない」と。

17 **コンテクスト** context（英語）。文脈。

問 **「両者」の指しているものは何か。**



野家啓一（のえ けいいち） 昭和二十四（一九四九）年〜。哲学者。宮城県の生まれ。物理学を学んだ後、科学史や科学哲学への関心を深める。近代科学の成立とその展開過程を中心に、言語や歴史の問題にまで幅広く思索を続けている。著書に『科学の解釈学』『科学哲学への招待』『歴史を哲学する』などがある。本文は『物語の哲学』（平成十七（二〇〇五）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「源義経が静御前を妻に迎えたという出来事」（三一四・10～11）と「光源氏が葵の上を妻に迎えたという出来事」（三一四・9）は、通常、どのように異なると考えられているか、説明してみよう。

2「小説と同じで、歴史はふるいにかけ、単純にし、組み立てる。一世紀を一ページにしてしまう」（三一八・13～14）とあるが、どのような点で小説と歴史叙述は似ていると考えられるか、まとめてみよう。

3「「歴史」と「物語」とは「事実」と「虚構」のように対立するものではない」（三一九・8～10）とあるが、「歴史」「物語」「事実」「虚構」の関係を整理してみよう。

4「物語りえぬことについては、沈黙せねばならない」（三一九・13）のはなぜか、説明してみよう。

◇言葉と表現

1「歴史的事実」（三一四・8）など「□□的□□」という表現を本文から探し、その「的」がどのような言葉で言い換えられるか、考えてみよう。

2 本文では、「　」が付いている文や語句が多用されているが、「　」はどのような目的や意図で用いられているのか、調べてみよう。

◇言語活動

1 日本史や世界史の授業で使用している年表から一ページを選び、そこに記載されている事項が、日本史の教科書、世界史の教科書では、どのように記述されているか、確認してみよう。

◇単元の言語活動 3

◆なぜ名作は「名作」なのか
――時代を超えて読み継がれる作品とは――

この単元では、明治・大正期に発表された小説や日記、さらに歴史叙述に関する評論を読んだ。文学作品は、常にその時代の中で評価され、文学史の中に位置づけられ、現在まで読み継がれてきた。ある時代で評価されなかった作品が、時代を経て名作として評価されることもあるだろう。そのように考えると、評価とは、また、文学史とは流動的なものであると言えよう。『山月記』や『こころ』『舞姫』は名作とされているが、これからも名作として読み継がれていくのだろうか、考えてみよう。

課題 『舞姫』は、なぜ名作として評価され、文学史上に位置づけられているのか、これからも名作として読み継がれていくのだろうか、考えてみよう。

1 『舞姫』を読んで、現代の感覚からすると、違和感を抱く箇所や疑問に思う点を挙げ、その理由についても話し合ってみよう。

2 『舞姫』は、発表された当時、どのように評価されたのか、三一三ページのコラム「文学の歴史について再考する」を参考にして、調べてみよう。

3 歴史的事実は「物語行為」を離れては意味をなさず、また存在しえない」(三一五・1)というテーゼが、「文学(の歴)史」にも当てはまるかどうか、話し合ってみよう。

4 「文学国語」の授業で読んだ作品や、自分がこれまで読んだ作品の中で、「名作」だと考える作品を一つ選び、どのような基準で選んだのかを示しながら、発表してみよう。

4 自他への配慮

- 文学的な文章を通して、社会におけるマイノリティについて理解を深める。
- 異なるジャンルの文章を比較して、表現の特徴を理解する。
- 小説作品の比喩や象徴に注目する。

巨人の接待　小川洋子
はじめての沖縄　岸政彦
アイデンティティ　藤野可織
愛について　竹村和子
コラム　マイノリティと文学
単元の言語活動4

巨人の接待

小川洋子（おがわようこ）

いよいよ巨人が到着するというので、空港のロビーは緊張に包まれる。もう二時間も前から出版関係者や新聞記者や役人たちが所定の位置につき、いつ巨人が現れてもいいよう抜かりなく準備を整えている。ある者は携帯電話でハイヤー[1]の運転手と連絡を取り合い、ある者は［ようこそいらっしゃいました］と書かれたプレートが上下逆さまになっていないか確かめ、またある者は歓迎の花束のリボンを何度も結び直す。

それでもまだ落ち着かないのか、現場の責任者と見なされている編集長はあたりをうろつきながら部下に文句を言ったり、集まってくる野次馬を追い払ったりする。そうしている間にも次々と到着便を知らせるアナウンスが響き渡り、掲示板にランプが点（とも）る。そのたびごとに皆、息を飲み、携帯電話やプレートや花束を持つ手に力を込める。

私は集団の最前列、巨人を一番に目にできる特等の位置を

与えられている。なぜなら、巨人の言葉を通訳できるのが、私一人しかいないからだ。

「清書したスケジュール表は持ったか？」

「はい。」

「誤訳はないか？」

「はい、もちろん。」

編集長は私のことを信用していない。本当ならば巨人研究の第一人者であるW先生が通訳をする手はずになっていたところ、来日の前々日になってボツリヌス菌[2]による食中毒を起こし、入院する騒動となったため、急遽弟子の私にピンチ[3]ヒッターの役目が回ってきた。編集長はこのアクシデントを、巨人来日の成功を脅かす不吉な前兆ととらえたらしい。初めて対面した時から、こんな若造で大丈夫か、という表情を遠慮なく向けてきた。

しかし災難はこれにとどまらなかった。今度は巨人の秘書ダニエルが生牡蠣にあたり、同行できなくなったとの連絡が届く。英語のできるダニエルが来ないことで、事態は一層悪化し、編集長を不機嫌にした。遠く離れた町で発生した二つの食中毒が一つのラインで結ばれた時、編集長にとってそれは、取り返しのつかない災難を引き起こす呪いの印となった。彼は私を、まるで毒を盛った張本人であるかのような目で見やった。

ダニエルの欠席は私にも少なからずショックを与えた。秘書ダニエルの美男子ぶりは有名で、私は彼に会えるのを秘かな楽しみにしていたからだった。

巨人は一言も英語を喋らない。イタリア語もフランス語もドイツ語も使わない。生まれ故郷であり現在も暮らしている、バルカン[4]半島の小国の、しかも内陸部丘陵地帯に点在する村々だけで使われている地域語が、巨人の言葉である。少なくとも国の公用語は使いこなせるに違いないのだが、デビュー以来、作品はすべて地域語で書かれてきた。翻訳された作品が世界中で読まれる作家となった今も、そのスタイル

初出『文芸春秋』平成二十一（二〇〇九）年十二月

1 **ハイヤー** hire（英語）。客の注文に応じて雇われる乗用車。
2 **ボツリヌス菌** 細菌の一種。食中毒を起こす。
3 **ピンチヒッター** pinch hitter（英語）。野球用語で代打のこと。ここでは、差し迫った状況での代役。
4 **バルカン半島** ヨーロッパ大陸南東部、地中海と黒海に突き出した半島。

を貫いている。滅多に公の席には姿を現さないが、数少ない過去のインタビュー、講演、スピーチ等々の記録を見る限り、どんなに通訳の手間が掛かろうとも、巨人は地域語以外の言葉を口にしてはいない。

政治的な意味などない、ハンディ[5]を顧みずそこまで希少言語にこだわるのは、ただ、小鳥たちが各々声帯[6]の形に相応(ふさわ)しい声で求愛するのと同じなのだ、とW先生は言っている。ただし世間では、言葉の問題はつまり、巨人の頑固さ、偏屈ぶりを象徴する一例としてとらえられており、数々の伝説を彩る一要素となっている。例えば、ある定められた寸法を持つ机の上でしか執筆しない。好物はオブラート[7]。得意料理はセミの抜け殻のフライ。庭に家よりも広い鳥小屋があり、そこで百羽十五種類の小鳥を飼っている。そのすべてに名前があり、恋人の存在を尋ねられると、百羽の名前をいちいち全部挙げる。無礼な振る舞いをする客には、小鳥の糞(ふん)を投げつける。執筆前の儀式はダニエルの枝毛を抜くこと。趣味は松ヤニから琥珀(こはく)[8][9]を作ること。……。

自動扉が開き、その向こうから巨人が姿を見せた途端、どよめきが沸き起こり、拍手が鳴り、フラッシュがたかれる。リハーサルのとおり、*招聘(しょうへい)委員会の代表と事務局長と編集長が速やかに前方へと歩み寄り、その後ろに花束贈呈係の女子事務員と私が付き従う。

巨人は通路の中央に立っている。背後にはカートに荷物を載せた空港職員が、*恭しい態度で控えている。

「ようこそいらっしゃいました。」

「遠いところをおいでいただき、感謝申し上げます。」

「お目にかかれますのを心待ちにしておりました。」

三人のお偉方は感じのいい笑みを浮かべてはいるが、声は緊張して上ずっている。歓迎の挨拶は型どおりの文句なので、訳すのは*造作もない。私は巨人から発せられる第一声を待つ。

巨人はなかなか口を開かない。天井の飾りを見上げたり、明るすぎる照明に目を細めたり、材質を確かめるように靴底で床を鳴らしたりしている。なるほど、*勿体(もったい)をつけても当然だろう、何と言っても巨人なのだから。皆、歓迎の微笑を保ったまま、しまりのない沈黙に耐え続ける。

その間ようやく私は巨人の全体像と細部をキャッチする。これはあらかじめ予想できたことではあるが、巨人は決して文字どおりの巨人ではなく、むしろ体つきは小柄で、ひどく痩せている。髪は年相応に抜け落ち、両耳の後ろ側に赤茶けた巻き毛がもやもやと残る以外、頭部はむき出しになっており、特に前へせり出さんばかりに発達したおでこが目立って

いる。そのおでこのせいで眼球は頭蓋骨の奥へひっそりと落ち窪み、目の表情を読み取るのは難しい。頬骨は高く、眉間の皺は深く、唇は薄い。群青色[10]の綿の長袖シャツに大きすぎるズボン、[11]飴色の革靴、というラフな装いながら、首元まで全部留められたボタンと、きゅっと絞り上げられたベルトのおかげできちんとした印象を受ける。唯一のお洒落と言えるのか、胸ポケットにグリーンとオレンジが[12]グラデーションになった鳥の羽根を一本挿している。

よく見れば荷物は、わざわざカートで運ぶほどのこともない小さな手提げの旅行鞄一個だけで、思わず子供用かと錯覚してしまう。表面は無数の傷でざらざらとし、所々へこみも目立ち、持ち手は指の形が黒ずみになって浮き出ている。

巨人の喉仏が上下し、口元がもごもごと動く。遂にお言葉か、と皆一斉に姿勢を正す。唇が開き、舌が覗き、息のようなものが漏れ出す。

「さっさと訳さないか。」

苛立たしげに編集長が背中を突く。

今、巨人は喋ったのか？　慌てて私は口元に耳を寄せるが、やはり届いてくるのはささやきより頼りない吐息ばかりで、とてもそれをつなぎ合わせて一つの言葉にするのは困難と思われる。

「このたびはお招きいただき、ありがとうございます。」

咄嗟に私は口から出まかせを言う。これ以上の間には耐えられそうになく、また巨人に向かってもっと大きな声で喋って下さいと言う勇気もなく、まあ常識からしてこういう意味のことを言いたいのであろうという台詞を捏造する。

出だしからいきなり通訳の禁を犯してしまったにもかかわらず、皆は満足して一層の笑顔をほころばせ、巨人もまた文

＊招聘　恭しい　上ずる　造作　勿体をつける　黒ずみ　咄嗟　台詞　捏造　禁を犯す

5 **ハンディ**　ハンディキャップ handicap（英語）の略。不利な条件。　6 **声帯**　喉の中間にある声を出す器官。　7 **オブラート**　Oblate（ドイツ語）。デンプンで作った薄い膜。粉薬の服用や菓子の包装などに用いる。　8 **松ヤニ**　松の幹から染み出るねばねばした樹脂。　9 **琥珀**　植物の樹脂が化石化したもの。黄色く透明でつやがある。　10 **群青色**　やや紫みを帯びた鮮やかな青色。　11 **飴色**　水飴のような深みのある強い橙色。琥珀色。　12 **グラデーション**　gradation（英語）。濃淡や色調の段階的な推移。

問「小鳥たちが各々声帯の形に相応しい声で求愛する」とは、どういうことか。

問「捏造」とは、どういうことか。

句をつける気配はない。やっとタイミングをつかんだ女子事務員が花束を手渡すと、案外素直に巨人はそれを受け取り、セロファン[13]の包みに顔を埋めて匂いをかぐ。再び拍手が起こる。

*大仰な様子の割に、現れたのがアイドル歌手でも映画スターでも大リーガーでもなく、ただの地味なお爺さんだったことにがっかりしたのか、いつの間にか野次馬は姿を消し、到着ロビーには巨人を中心として半円を描く私たちだけが取り残されている。たまに旅行者が迷惑そうな顔をしながら、私たちを避けて通り過ぎてゆく。窓ガラスの向こうが闇に塗りつぶされている中、半円の中だけくっきりとした光に包まれている。

空港からの長い道のりを経てようやくホテルに落ち着き、私以外のメンバーが引き揚げた時、巨人はおもむろに言った。

「この花を部屋に飾りたいのだが。」

それはその日初めて、一生懸命に耳を澄まさなくても、推理を働かさなくてもごく自然に聞き取れる言葉だった。ついさっきまで弱々しくうごめくだけだった唇から、間違いなく一続きの輪郭を持った言葉たちが、軽やかにこぼれ落ちてきた。

「もちろんです。」

自分の耳でもちゃんと巨人の声の波長を聞き取れるのだ、ということがはっきりして安堵し、私は元気よく返事をした。すぐさまフロントに電話して花瓶を持ってきてもらい、花束の包装を解き、リビング[14]のコーヒーテーブルの上に飾った。女子事務員が何度もきつく締め直したおかげでリボンを解くのに手間取ってしまったが、その間巨人はゆったりとソファーに腰掛け、両手を胸の下で組み、じっと花だけを見つめていた。それは青紫色のリンドウ[15]だった。

「美しい。」

と巨人は言った。こんな*華奢な喉から発せられたとは思えないほどに、深みのある声だった。

「あなたの胸ポケットの羽根と、よく調和しています。」

そう言ったあと、急に恥ずかしくなって私はうつむいた。

「ボタン[16]インコ、チャオの羽根だよ。お利口に留守番してくれているといいのだが……。」

巨人はいとおしそうに羽根の先を撫でた。

すぐ下の階の１００８号室、ダニエルが泊まるはずだった部屋に私はいること、用事があれば何時でも電話を掛けてほしいこと、明日の朝は十時に迎えに伺うことなど、すべての事務連絡が終わったあと、巨人は花瓶からリンドウを一本抜

き取り、こちらに向かって差し出した。私よりももっと恥ずかしそうな様子をしていた。

自分の部屋に戻ってから私はそれをガラスコップに挿し、ベッドサイドに置いた。

公開対談、文芸雑誌のインタビュー、朗読会、スポンサー[17]との会食、写真撮影、サイン会、ラジオ番組の収録……。我々がいかに巨人を待ち望んでいたか、その気持ちを証明する唯一の方法はイベントを目一杯詰め込むことだ、と信じる編集長により、スケジュールは一分(いちぶ)の隙もなく組み立てられている。さすが巨人は不平をこぼさず、我がままを言わず、あくまでも堂々と巨人らしく振る舞う。行く先々で準備は万端整えられ、巨人の肉声を一声でも聞こうとする人々が待ちかねている。

しかし、その一声が問題なのだ。*公の席になると相変わらず巨人の声はとても小さい。口数も少ない。更に質問を受けてから答えるまで、果てしなく長い時間がかかる。

こういう状態に慣れるまで、正直皆戸惑いを隠せず、特に編集長は苛々(いらいら)[18]を募らせる。音声係を叱りつけたり、マイクのメーカーを呪ったり、あるいは巨人の喉の調子を案じてうがい薬を買いに走ったりと、自分なりに現状を打破しようと試みるが、最終的に矛先は私に向けられる。

「君が正確に訳さないからじゃないのか。」

日に何度も編集長は私の耳元に顔を近づけ、この同じ台詞を繰り返す。

けれど私は少しも傷ついたりしない。二人だけの時、巨人の声がいかに真っ直ぐ私の耳へ届いてくるか、それがいかに優しい声か、よく分かっているからだ。●巨人の本当の声とその意味を知っているのは私だけだ、と思うだけで、自分が大事な使命を帯びた天使にでもなった気持ちになれる。

勇気ある聴衆の一人が手を挙げ、巨人に質問する。形式に内包される自由の出現、記憶と言葉の相関関係、時間の喪失がもたらす物語の膨張運動、題材の発展と凝縮のバランス、*

13 セロファン　cellophane（フランス語）。繊維素から作った薄い透き通った紙。
14 リビング　リビングルーム（living room 英語）の略。居間。　15 リンドウ　リンドウ科の多年草。青紫色のつりがね形の美しい花をつける。
16 ボタンインコ　オウム目インコ科の鳥。　17 スポンサー　sponsor（英語）。事業にお金を出してくれる後援者。
18 メーカー　maker（英語）。生産者。製造業者。　＊大仰　華奢　公の席　相関

問「巨人の本当の声とその意味を知っているのは私だけ」なのは、なぜか。

執筆の時間帯、タイプライター[19]の機種、小鳥たちの餌の内容など、人々が尋ねたい問題は多岐にわたる。彼らは巨人を前にして一様に興奮しており、千載一遇のチャンスに自らの感想や意見を織り交ぜなくてはいられず、質問はどんどん長くなる。

巨人の左斜め後ろに控える私はすぐさま通訳する。マイクの感度が最高レベルに設定されているため、どんなに注意深くささやいても私の声は巨人の声よりずっと大きく会場に響いてしまう。出しゃばりな通訳と誤解されなければいいが、と私は多少心配になる。*

自分のすぐ目の前に巨人の左耳がある。下草[20]からのぞく茸（きのこ）のように、巻き毛の間に半ば埋もれている。いつしか、その形から産毛の生え方まで、左耳に関する何もかもが私にとっての馴染（なじ）みとなる。耳たぶの微（かす）かな震えにより、巨人が間違いなく私の訳を理解しているということも分かるようになる。

そこから巨人の長すぎる沈黙がはじまる。誰もそれから逃れられない。質問者はマイクを握ったまま立って待っている。聴衆のすべて、スタッフ、舞台にいる我々、全員がただひたすら巨人の言葉を待ち続ける。

人々と巨人の間には広大な星雲[21]が横たわっている。それは暗闇よりもっと濃い影を落とす。我々がいくら目を凝らしても、巨人は漂う星屑（ほしくず）[22]に包まれてはるかに遠く、とてもその姿は見通せない。我慢できなくなった誰かが、せめてものつなぎにと咳（せき）払いをする。首を回したり、瞬（まばた）き*を繰り返したりする者もいる。司会役の編集長はマイクを更に巨人に近づけ、その隙に私の足を踏みつける。

あなたはあなたの声帯に相応しい声で語ればいいのです、と私は心の中で呼び掛ける。すると巨人は耳たぶで私だけに合図を送り、マイクに視線を落としてから、二言三言答える。星雲の流れに小鳥の羽根を浮かべるように、そっと言葉を吐き出す。質問に比べてあまりにも短い答えは、あっという間に誰かの咳払いに紛れ、姿を消してしまう。

しかし巨人の言葉そのものは決して投げやりでも期待はずれでもない。たとえどんなに短い答えだとしても、ひとたび巨人が口にすれば、それまでの気まずい沈黙などたちまち霧散し、人々は言葉以上に多くのものを受け取ることになる。*星雲に浮かんだ羽根は聴衆の誰一人予想もできない遠いところまで流れてゆき、姿が消えた跡には新星が誕生している。その瞬きを目にするたび、訳している私までもが誇らしい気持ちになれる。

サイン会では巨人の本を胸に抱えた人々が辛抱強く列を作る。これもまた予想されたとおり、巨人の字は声と同じくら

いに小さい。万年筆をきつく握り、背中を丸め、まるで初めての単語を綴るかのような慎重さで、見返しの片隅にサインする。yの結び目はいびつに震え、eの中身は潰れている。本の持つ値打ちに比べ、サインは極端に貧相で、余白ばかりが目立ち、愚か者によって子供の悪戯書きと誤解される怖れさえはらんでいる。

「ありがとうございます。」

皆、心からの感謝を述べる。巨人ももごもごと何か返す。こちらこそ、どうもありがとう、お気をつけて。私は例の推理によって適切に通訳してゆく。

「飲み物の追加はいかがです？　おしぼりを取り替えてまいりましょうか？　お疲れでしたらいつでも休憩なさって下さい。」

編集長があれこれと口を出すが、巨人の答えは決まっている。

「問題ありません。」

これはよく聞き取れる。

「本当に正しく訳してくれたのか？」

自分の好意が一向に報われない鬱憤を、やはり編集長は私にぶつけてくる。

「問題ありません。」

私はもう一度繰り返す。

巨人の握手はソフトで押しつけがましくない。きっと小鳥を抱く時にもこんな具合なのだろうなあ、と思わせる品がある。中には涙ぐむ人さえいる。すると巨人は、何か取り返しのつかないひどいことをやってしまったかのような、心配気な様子を見せ、自分まで泣きそうな顔になる。

人々は巨人の体温を少しでも長く感じるため右手をそっと握り締め、それから宝物を仕舞うように本を閉じる。

たとえ呼び名は巨人でも、やはり巨人には小さな声が似合っている、と思う。それは作品を読めば分かる。一声で大

＊出しゃばり　瞬き　霧散　いびつ　貧相　鬱憤　押しつけがましい

19 **タイプライター**　typewriter（英語）。指先でキーを押して文字を紙に打ち出す機械。　20 **下草**　木陰に生えている草。林の中に群がり生えている雑草。

21 **星雲**　輝いた雲のように見える天体。　22 **星屑**　無数の星。　23 **見返し**　書物の表紙の裏に貼る紙。

問 **「新星が誕生している」とは、どのようなことか。**　問 **「適切に通訳」するとは、どういうことか。**

勢の人間を振り向かせるような声ではなく、たった一人の耳元にささやきかけるような声で、巨人はずっと作品を書き続けてきた。

巨人はヨーロッパ・アルプスの東南端に広がる丘陵地帯の小村に生まれた。中世の砦に囲まれた静かな村だった。集落のはずれにローマ時代から残る渓谷の天然温泉があり、一家はそこで湯治客相手の雑貨屋を営んでいた。父親は勤勉な人で、いつも店内をきれいに磨き上げ、信用のおける商品しか仕入れず、陳列の仕方にも自分なりの厳密なルールを持っていた。客あしらいが上手いとは言えなかったが、むしろその静かな性格は長期療養中の老人たちに好かれ、店先にはよく、埃っぽい椅子に腰掛けパイプをくゆらせながら、延々と続く客たちの昔話に黙って耳を傾ける父親の姿が見られた。その父親の足元にしゃがみ、一心に本をめくっている姿が、巨人の最も古い記憶であるという。

母親は働き者で健康で愛情深い人であった。店を手伝う傍ら、近隣の葡萄農園に働きに出ていた。外では夫婦とも公用語を話したが、家の中で二人きりになると地域語を喋った。当時、あのあたりの家庭ではそれが普通だった。

巨人に本を与えたのは母親だった。ある日、客の一人が本を忘れていった。まだ字も読めない息子はそれを手に取り、一ページ一ページ最後まで丹念にめくっていった。その姿を目にし、本さえ与えておけばこの子は手が掛からないと知った彼女は、ホテルの支配人に頼み、湯治客がロビーに置いていった本の幾冊かをもらって帰るようになった。推理小説、時刻表、詩集、伝記、どんなジャンルでも息子は選り好みしなかったが、彼女にとってはできるだけ分厚い本の方が都合がよかった。母親は全ページをめくるには一体何十分かかるだろうか、と思われる重量感たっぷりの一冊を手に入れた。それは母親が生涯で目にした最も分厚い本であり、息子が最も気に入る本となった。綴じ糸がバラバラになるまでめくり続けたその本は、地域語の辞書だった。

巨人を筆頭に母親は全部で七人の子供を産み、うち一人を失った。巨人の双子の弟は、お腹にいる間に天に召され、兄の隣に寝かされた時は既に死者となっていた。

巨人は弟や妹たちの面倒をよく見た。学校には最低限しか通わず、店の力仕事は一手に引き受け、一番下の赤ん坊を背中にくくりつけて葡萄の刈り入れを手伝った。夜になると彼らを寝かしつけるため、自分で作ったおとぎ話を聞かせてやった。そんな時彼はしばしば、一人足りない、という感覚に襲われ戸惑うことがあった。その感覚は、ベッドにいる弟、妹たちを何度数え直しても消えなかった。巨人は両親から、

双子の弟の死について説明された記憶はなかったが、それでも最初から自分は知っていた、分かっていた、とある著作に書いている。

弟、妹たちは皆、お話が一番よく聞こえる巨人の隣の位置を競争で取り合った。巨人はいつも、足りない一人に向かってお話を語った。そうすれば喧嘩（けんか）は起こらず、皆が安らかに眠りにつくことができた。

巨人の声が小さいのは、死者に向かって語りかけているからだ。死者はとても耳がいいから、小さな声で充分なのだ。

十五歳の時、戦争が起こった。以降の人生については、どんな著作にもほとんど書かれていない。ただ一つはっきりしているのは、一家は強制収容所に送られ、巨人一人が生き残ったという事実だった。二年半の収容所生活の間、バラック[27]の窓辺で羽根を休める小鳥たちだけが彼の慰めだった。人を焼く煙を越えて自由に外の世界と行き来できる小鳥こそが、〝一人足りない人〟に違いないと確信し、その小鳥に向かって語りかけた。解放された時、足りないのはもはや一人ではないと知らされ、彼の声はいっそう小さくなっていった。

バラックAからバラックBへ。収容所Cから収容所Dへ、更にEへ。家畜列車で、無蓋[28]列車で、あるいは徒歩で。赤十字のキャンプから療養所へ、難民施設へ。簡易宿泊所から炭鉱へ、農場へ。四十歳でペン一本の生活に入り、生まれ故郷に戻ってくるまで、彼の人生は移動の連続だった。移動することがすなわち、彼にとっての苦難の象徴となった。どんなに名誉ある賞を受けようと、どんなに権威ある人物から招待されようと、彼は決して旅行をしなかった。古い農場主の館を改造した住まいに一人暮らし、小鳥を飼い、そこにじっと留まって小説を書いた。

移動拒否の姿勢に多少なりとも変化が生じたのは、七十を過ぎ、初めての秘書ダニエルと出会ってからだった。有能なダニエルの登場により、巨人は面倒な雑用から解放され、外の世界の雑音から隔離され、たとえ移動している最中であっ

24 **湯治客**　温泉地に長期間滞在して特定の疾病の温泉療養を行う客。
25 **パイプ**　pipe（英語）。刻みたばこを吸う用具。
26 **綴じ糸**　書籍などを綴じ合わせる糸。
27 **バラック**　二三一ページ注35参照。
28 **無蓋列車**　屋根や覆いのない列車。

＊あしらう　くゆらす　一手に

問 **巨人が、「小鳥こそが、〝一人足りない人〟に違いないと確信し」たのは、なぜか。**

問 **「彼は決して旅行をしなかった」のは、なぜか。**

ても安全な地帯に守られていると感じられるようになった。我々の招聘に応じてくれたのも、ダニエルの働きが大きかった。

旅行中の巨人がどれほどの不安を抱えているか、それがどういう種類の不安なのか、我々は誰一人思いやることができなかった。我々はただ巨人の声を聞き取るので精一杯だった。

通訳として最も緊張を強いられるのは、対談でもサイン会でもインタビューでもなく、会食の席である。公式のパーティーから内輪の食事会に至るまで、そこに食べ物が存在する限り、巨人はいよいよ無口になる。無言と表現しても差し支えない。

編集長をはじめ皆は巨人を喜ばせる話題を引き出そうとして躍起になり、次々と質問をし、おかしくもないのに笑い、必要以上にワインの栓を抜く。しかし巨人はそんな周囲の気遣いにはお構いなく、ただひたすら料理を観察し味わうことにのみ神経を集中させる。

その姿はものを食べている人というより、珍妙な儀式を執り行う呪術師のようでもあり、何かにとりつかれた夢遊病者のようにも見える。巨人はサインをする時よりももっと深く背中を丸め、一切音を立てないまま、ほとんど皿に顔を埋めながら食べる。好き嫌いはないがお酒は口にせず、飲み物はただの水だけと決まっている。前菜に添えられたか弱い一本の香草も、メインの子羊も平等に、粛々と喉の奥の暗闇に吸い込まれてゆく。

「君が適当に答えておいてくれたまえ。」

食事中、何を聞かれても巨人の答えは決まっている。

「でも、あなたが黙っているのに、私だけが喋るわけにはまいりません。」

「今までだって、そうやって協力し合ってきたじゃないか。」

「ええ、まあ確かに。」

「僕は喋る振りだけをするよ。」

ナプキンでおでこの汗を拭く隙に、巨人は私に向かってこっそりウインクをする。

せっせと私は通訳する。特に編集長の言葉は、いかにも念入りに訳していますという雰囲気が出るよう、気を配る。その間も巨人は食事に集中し続け、どうしても自分が何か答えなければならない事態になると、例のごとく唇をもごもごさせる。私は耳をそばだて、一言一言聞き取るポーズを取り、しかるのち、編集長はじめ皆が喜ぶ答えをでっち上げる。

巨人の本をすべて原書で読みたいからこそ地域語まで学ん

だ私にとって、小説のことであれプライベイトについてであれ、返答の捏造はさほど難しくない。巨人ならばこういう言葉を使うだろう、というイメージがスムーズに湧いてくる。巨人のもごもごの長さと、私の訳の長さが不自然にかけ離れないよう注意するだけでいい。

その場にいる誰も疑問を感じない。それどころか巨人との間に親しく言葉が行き交い、心が通じ合っているという錯覚に酔い、喜びを噛み締めている。ずっとうつむいたままの巨人と目を合わせられない代わりに、皆が私に向かってうなずき、私を見つめる。心行くまで食べ物の世界に埋没できるよう、邪魔が入らないよう、私は砦となって巨人を守っている。

食事の最後、私は一つの発見をする。巨人は必ずパンを三分の一残し、テーブルを立ってナプキンを置く瞬間、それを素早くズボンのポケットに隠す。私以外誰も気づかない。その熟練した手つきから、単なる思いつきではなく、長い間繰り返してきた動きなのだと分かる。「君は上手くやってくれた」という目配せを私に送り、ポケットの縁にわずかのパン屑をつけたまま、巨人はホテルの部屋へと戻ってゆく。

毎朝十時、私は巨人の部屋をノックした。たいてい、身支度は最終段階に入っているものの出掛けるにはまだ多少時間を要する、という状態にあった。巨人は開いたままの旅行鞄を前にして床に座り込み、衣類も書類も洗面道具もすべてが混ざり合って収拾のつかなくなった中身を、更にかき回していた。蓋の内ポケットから、写真が一枚覗いて見えた。栗色の長髪にさわやかな目元の美男子は、たぶんダニエルなのだろう。長旅には釣り合わない小さすぎる旅行鞄は、巨人の両膝の間にすっぽりと納まっていた。それはまるで、今回の移動は決して大げさなものじゃない、気が向けばいつでも好きな時に帰ってこられるのだ、と自分自身に言い聞かせているかのような小ささに見えた。

「待たせてすまないね。」

「いいえ、時間はあります。ゆっくりなさって下さい。」

「ダニエルがきちんと詰めてくれたのに、今ではこのあり

29 **呪術** 超自然的なものの力を借りてさまざまの現象を起こさせようとするもの。まじない。
30 **夢遊病** 睡眠中に無意識に起き上がったり、何かをしたりしても、目が覚めてから覚えていない病気。
31 **ナプキン** napkin（英語）。食事のとき、衣服を汚さないように胸や膝に掛ける布や紙。
＊ 内輪 躍起 珍妙 粛々と いかにも 目配せ 身支度

さまだ。」

「お手伝いしましょうか？」

「いや、確かこのあたりに突っ込んだはずなんだが……。」

二人きりの時、巨人の声はとてもよく鼓膜に届いた。他の誰でもない私だけを目指し、これならば二人がどんなに遠く離れていても大丈夫に違いないと思わせてくれる力強さで、一筋に響いてきた。コーヒーテーブルの上で、リンドウはまだ綺麗（きれい）に咲いていた。

「もし、お夜食が必要な時は……。」

膨らんでいるズボンのポケットにできるだけ目をやらないようにしながら、さり気なく私は切り出した。

「いつでも言って下さい。ルームサービス[32]を頼みますから。」

「うん、ありがとう。」

探し物の手を休めずに巨人は答えた。

「でも大丈夫だ。心配いらない。僕にはこれがあるから。」

巨人はあっさり、ポケットからパンの切れ端を取り出して私に見せた。その拍子にパン屑がパラパラと床にこぼれ落ちた。それらはどれも硬く干からびていた。

「ポケットにパンの欠片（かけら）がある。世界にこれほど安心なことはない。」

巨人はまた大事そうにパンを仕舞った。

「ああ、あった。」

ようやく巨人は一番底から巾着[33]袋を引っ張り出すと、中を覗き込んでしばらく考えたのち、一本羽根を抜き取って胸に挿した。

「今日はホロホロチョウ[34]のスージーにしよう。」

グレーに白い点々が散らばった、シック[35]な模様をしていた。

「よくお似合いです。」

「そうかい？」

巨人と私は一緒にホロホロチョウの羽根を見つめた。

とうとう滞在最終日がやってくる。その日は一日自由時間になっており、買い物、観劇、川下り、スポーツ観戦、寺院参拝、美術館見学、そぞろ歩き、何でもお望みのとおりアレンジしましょうと編集長は張り切っていたのだが、巨人の希望はただ一箇所、野鳥の森公園。それ以外に行きたい場所はない。

「通訳と二人で行く。」

きっぱりと巨人は宣言する。私が捏造したのではない。

「大勢人がいると鳥は怯（おび）えてしまう。だから二人で行く。」

こんな若造一人に任せておいて何か不手際でもあったら、

と心配する編集長を遮り、巨人は立ち上がる。もちろん誰一人異議を差し挟む者はいない。私たちはハイヤーに乗り、野鳥の森公園へ向けて出発する。車は西へ西へと走り続ける。

台地の斜面に広がる三千平方メートルの林を利用して作られたというその公園は、とても寂れている。広々とした駐車場を見渡しても人気はなく、看板はペンキが剝げ落ち、唯一姿の見える入場券売り場のおばさんはうたた寝をしている。そんなことを気にする様子もなく巨人は、森の奥へと続く小径をずんずん歩いてゆく。

たちまち私たちは木立に囲まれ、足元から立ち上ってくる落ち葉の匂いに包まれる。頭上でゆるやかに梢が揺れ、木漏れ日が巨人の横顔を照らす。森の中でも巨人はすべてのボタンを全部留めているし、ベルトは弛みなく締め上げている。

「ホオジロ。」[36]

最初、それが巨人の声だとは気づかない。落ち葉を踏みしめる音と枝が触れ合う音に紛れ、木々の間に吸い込まれてゆく森の音だと錯覚する。

「シジュウカラ。」[37]

巨人の声に導かれ、ようやく私の耳に鳥の鳴き声が届いてくる。

「アカゲラ。」[38]

クヌギの大木を見上げながら、水辺のシダの茂みに目を凝らしながら、巨人は彼らの名前を告げる。私に向かって、というのでもなく、独り言でもなく、姿は見えないけれどすぐそばにいるらしい誰かと合図を送り合うように、愛らしいその名前たちを口にする。彼が口を開くたび、胸元の羽根も一緒に震える。

私は巨人の斜め左後ろ、正しい通訳の位置を守る。通訳として正しい振る舞いをする。目障りにならず、余計な音は立てず、いつでも役目を果たせるだけの用意を整え、あなたは

32 ルームサービス　room service（英語）。飲食物などを客室へ運ぶサービス。
33 巾着袋　布・皮などで作った、口をひもでくくるようにした小さな袋。
34 ホロホロチョウ　キジ科の鳥。主に熱帯地方に生息する。
35 シック　chic（フランス語）。粋で上品な様子。
36 ホオジロ　ホオジロ科の小鳥。
37 シジュウカラ　シジュウカラ科の小鳥。
38 アカゲラ　キツツキ科の中型鳥。
＊ 一筋に　小径　木漏れ日

問 巨人が「世界にこれほど安心なことはない」と考えるのは、なぜか。
問 「姿は見えないけれどすぐそばにいるらしい誰か」とは、誰のことか。

充分に一人でありながら決して一人ではないのです、と気配で伝える。

私たちはひたすら歩き続ける。どんなに微かな鳴き声でも、どんなに複雑に交差した鳴き声でも巨人はちゃんと聞き分けられる。途中、所々に設えられた餌台を見つけると、ポケットからパンの欠片を取り出して載せる。『勝手に餌をやらないで下さい』と注意書きの札が立っているが、もちろん巨人には関係ない。長い間ポケットの中に潜んでいた大事なパンを、ヘンゼル[39]とグレーテルのように、一欠けら一欠けら置いてゆく。あとからあとからいくらでもパンは出てくる。

岩を伝って早瀬を渡り、苔むした倒木をまたぎ、落葉樹[40]の一群を通り抜ける。梢に切り取られた空は充分に明るく、木々の根もとに広がる陰はひんやりと静かで、相変わらず私たちの邪魔をする者は一人も現れない。

やがて森の中央に到達したのだろうか、あたりが広々と開け、レストランや展望台らしい建物が姿を見せるが、メニューの見本が並ぶガラスケースは埃をかぶり、テラス[41]の望遠鏡は錆びついている。

「あっ、あれ。」

不意に巨人が広場の片隅を指差す。そこにはメリーゴーランドがある。他の施設同様かなりくたびれてはいるものの、こぢんまりとした素朴なメリーゴーランドだ。さすが野鳥の森公園だけあって、座席には馬車や白馬ではなく、すべて種類の異なる鳥がデザインされている。各々特徴のある嘴と羽根を持った鳥たちが、仲良く輪になって連なりながら、黒い瞳でじっと一点を見つめている。

「お乗りになりますか？」

巨人はうなずく。どうやって操作すればいいのか、そもそも正常に作動するのかどうかさえ分からないにもかかわらず、なぜか私には大丈夫だという確信がある。巨人が繰り返してきた「問題ありません。」という言葉がよみがえってくる。

巨人はメリーゴーランド[42]を一周し、どの鳥に乗るかじっくりと考える。その間私は操作盤の前に立ち、クモの巣を払い、ロック解除、緊急停止、スタート、ギアアップ、ギアダウン、などと書かれたレバーを一つ一つ握ってみる。どれもひんやりと湿っている。

「これにしよう。」

巨人はずんぐりとして安定のよさそうな一羽を選ぶ。

「よろしいですか？」

私の呼び掛けに巨人は手を挙げて答え、支柱を握り締める。私はロック解除とスタートのレバーを引く。

しばらくガタガタとためらいを見せたのち、思案するよう

にゆっくりとメリーゴーランドは動きはじめる。音楽は流れず、ただモーターのうなる音と、油が切れて軋む歯車の音だけが風に乗って渦を巻く。途中どこかのつなぎめがずれているのか、一箇所大きくガタンと揺れるけれど、それでも鳥たちは健気に回り続ける。羽根を広げたり閉じたりするものもいれば、餌をねだるように頭を上げ、嘴を開けるものもいる。

私は柵にもたれ、巨人に向かって手を振る。巨人は笑っている。ふと、鳥の支柱に各々ぶら下がっているプレート[43]が目に入る。

モーリシャスクイナ[44]（1700年）、タヒチシギ[45]（1773年）、カササギガモ[46]（1878年）、ワライフクロウ[47]（1914年）、カロライナインコ[48]（1918年）……。

巨人が乗っているのはドードー[49]（1681年）だ。ドードーのふっくらと膨らんだ羽根の中に、巨人は納まっている。

これらは皆、絶滅した鳥なんだ、と私は気づく。仲間とはぐれ、一人ぼっちになった鳥たちが延々と一つの円を描き続けている。これに乗っている限り、どこへも移動しなくていいのだという安堵に包まれるように、巨人はうっとりと目を細める。私には聞こえない小さな声で、ドードーに話し掛ける。

翌朝、巨人は帰国の途につく。出迎えの時と同じメンバーで、空港へ見送りに行く。決まりきった別れの言葉を私が通訳している間、巨人は全員と等しく握手をする。最後、私にだけ手の甲にキスをしてくれる。何でお前だけ、という不満そうな表情を浮かべながらも編集長は、食中毒の呪いにもかかわらず、どうにかこうにか予定が無事こなせたことにほっとしている。

39 **ヘンゼルとグレーテル**　グリム童話に登場する兄妹。
40 **落葉樹**　秋に葉が落ち、翌春に新しい芽を吹く樹木。
41 **メリーゴーランド**　merry-go-round（英語）。遊園地などにある遊具。回転木馬。
42 **テラス**　terrace（英語）。西洋風の建物で、庭や道に張り出した部分。
43 **プレート**　plate（英語）。板。金属板。
44 **モーリシャスクイナ**　クイナ科の鳥。インド洋西部、モーリシャス島に生息した。
45 **タヒチシギ**　シギ科の鳥。南太平洋のタヒチ島に生息した。
46 **カササギガモ**　カモ科の鳥。アメリカ合衆国北東部、カナダ東部に生息した。
47 **ワライフクロウ**　フクロウ科の鳥。ニュージーランドに生息した。
48 **カロライナインコ**　インコ科の鳥。アメリカ合衆国東半部に生息した。
49 **ドードー**　ドードー科の鳥。インド洋西部のモーリシャス島に生息した。

＊交差　設える　苔むす　くたびれる　ずんぐり　健気　途につく

ゲート[50]の奥に巨人の背中が見えなくなるまで、私たちは「さようなら。」を繰り返す。小鳥たちとダニエルの待つ家へ、巨人は帰ってゆく。

ホテルの部屋でいつしかリンドウはすっかり枯れ落ちている。

50 ゲート　gate（英語）。飛行機の乗降に用いる空港内の出入口。

問「リンドウはすっかり枯れ落ちている」とあるが、どのようなことを意味しているか。



小川洋子（おがわ ようこ）　昭和三十七（一九六二）年〜。小説家。岡山県の生まれ。言葉になる前の心の機微や思いを小説という形で表現した作品が多く、日常・非日常が織り成す繊細な世界を表現する。作品に『揚羽蝶が壊れる時』『妊娠カレンダー』『密やかな結晶』『薬指の標本』『博士の愛した数式』『ミーナの行進』『人質の朗読会』などがある。本文は『約束された移動』（令和元（二〇一九）年刊）によった。

深い学びのために

学習のポイント

1「作品はすべて地域語で書かれ」（三二三・下15）、「地域語以外の言葉」（三二四・上3〜4）を口にしないこと、「ボタンインコ」や「ホロホロチョウ」の羽根を身につけることには、巨人にとってどのような意味があるのか、考えてみよう。

2「翻訳」（三二三・下15）「希少言語」（三二四・上5〜6）「自由」（三二七・下15）という語を手掛かりに、「言葉」がどのように人間のあり方や人生にかかわっているか、考えてみよう。

3 語り手の「私」は、この作品において、どのような役割を果たしているか、考えてみよう。

言葉と表現

1「巨人」が「巨人」らしく描かれている部分を、巨人自身の言動、周囲の言動からそれぞれ抜き出し、その効果について考えてみよう。

言語活動

1「巨人」が生まれ育ったバルカン半島の文化・歴史・言語などについて調べてみよう。また、第二次世界大戦時における強制収容所について調べてみよう。

2 後日、「巨人」が日本での出来事を回想し文章を書くとしたら、どのようなものになるか、想像して書いてみよう。

はじめての沖縄

岸　政彦（きし　まさひこ）

初出『はじめての沖縄』平成三十（二〇一八）年五月

沖縄が好きになって、どうしようもないぐらいハマってしまって、年に何度も通って、そのうち移住して、という人はとても多い。沖縄にハマるとどうなるかというと、沖縄に詳しくなる。ほんとうに沖縄はまるで、読んでも読んでも終わらない一冊の分厚い本のようだ。歴史や政治、文化や環境など、次から次へと勉強することがある。

そういう沖縄にハマって、ついにその研究を専門とするまでになった私だが、実は、「沖縄病のナイチャー[1]」の方々が、若干苦手だ。同病、というか、まるで自分の姿を見ているようだからだ。

一度、ある方にインタビューするために、桜坂[2]の古い居酒屋で飲んだことがある。そこの座敷で、差し向かいでじっくりと話を伺っていた。隣の席には、高齢の東京弁の男性が二人いて、いかに自分たちが沖縄に詳しいかという話をしていて、ああ、苦手だなあと思っていた。

ひとしきりインタビューも終わり、お礼を述べて、その店を出ようとしたときに、隣席の男性が私たちに向かって話しかけた。「模合（もあい）ですか？」

模合（沖縄独特の頼母子講（たのもしこう）[3]）という覚えたての言葉を使ってみたかったんだろうと思うが、

問「沖縄病」とは、どのようなことか。

1 **ナイチャー**　沖縄の方言。沖縄県外の人を指す。

2 **桜坂**　沖縄県那覇市の歓楽街。

3 **頼母子講**　民間における、金銭の融通のための相互扶助組織。

今思い返してみても叫びたくなる。二人っきりで模合しないですよ！　それ二人の間でお金が往復してるだけじゃないですか！　とっさのことだったのでそう言い返すこともできず、いえいえ、そういうわけじゃ、とか何とか、もごもごつぶやいて、その店を出た。

大阪で飲んでいても、スナックで知らない人と話していて、沖縄の研究をしているんですよと言うと、必ずといっていいほど沖縄についての「自説」を開陳される。大体が、「ありきたりな解釈ではなくて、もっとディープなことを知ってるんですよ」という語りで、「桜坂って知ってますか？　国際通りよりもっとディープなところがあるんですよ」とか言われたときは、恥ずかしさで死にそうになる。私もほっておけばよいのに、ムキになって反論して、「どっちがディープな沖縄を知っているか」という競争になることも多い。「桜坂も、でかい外資系ホテルが建ったりして、ずいぶんきれいになりましたねえ。ところで神里原[4]って知ってます？」なんて言ったりしてしまう。

沖縄を相手にして、私たちナイチャーは「冷静」になれない。私たちは沖縄のことが好きすぎて、「他人がまだ知らない沖縄」というものを探してさまよい続けているのだ。

しかし、あらためて強く思うのだが、私たちは観光客が知らない沖縄を求めてこんなに何度も通いつめているのに、そういう沖縄への愛は、基地を動かすには、全く足りない。沖縄のことについて詳しくなる、沖縄のことをよく勉強する、ということと、沖縄とともに生きる、ということは、全く別のことだと感じる。それはもちろん、沖縄を研究する私にも突きつけられ

4 **神里原**　沖縄県那覇市の歓楽街。桜坂よりも歴史がある。

問 **「そういう沖縄への愛」とは、どのようなことか。**

5 **浦添**　沖縄県那覇市の北に位置する市。

6 **石垣**　石垣島。沖縄県石垣市に属する八重山列島の島。

7 **首里城**　沖縄県那覇市首里にあった琉球王朝の王城。

ている。

実は私はディープな沖縄にそれほど詳しいわけではない。かといって観光地的な沖縄にも興味がなく、どちらかと言えば、ふつうの人々が住んでいるふつうの街が好きだ。ふつうの那覇、ふつうの浦添[5]、ふつうの石垣[6]。あまりふつうの住宅地の真ん中を、私のような人相の悪い中年の男性が一人で歩いていたら怪しまれるかもしれない、と思いながら、忙しい出張の合間を縫って、できるだけふつうの住宅地やふつうの路地を歩くようにしている。

沖縄の住宅には、植木が多い。これはほかの地域と比べてもかなり多いのではないかと思う。急なスコールのあとまた日が差して、アスファルトや自販機や植木たちがきらきらと輝く。内地よりも太陽の光が強くて、とてもまぶしくて、心からきれいだなと思う。

私自身もかつてはそうだったのだが、観光ではじめて沖縄に来て、沖縄にハマって、何度も通うリピーターになると、多くの内地の人々は、今まさに失われつつある「ほんとうの沖縄」を探すようになる。失われていく、もともとの、純粋な、混じりけのない、原初的な沖縄を。

そういうものはたぶん、博物館にも首里城[7]にもないし、たぶん万座毛[8]にも美ら海[9]水族館にもない。それはたぶん、桜坂や壺屋[10]や（取り壊される前の）農連市場[11]の辺りの路地裏に、あるいは、もうずいぶん少なくなったけど、金武[12]やコザ[13]や普天間[14]辺りの米兵相手のバーやパブに、あるいは、宿泊施設も海水浴場も整備されてないような小さな離島にあって、だから私たちは喜

8 **万座毛**　沖縄本島中央部東岸にある名護湾に突き出た岬。

9 **美ら海水族館**　沖縄県本部町にある海洋博公園内の水族館。

10 **壺屋**　沖縄県那覇市の町名。

11 **農連市場**　沖縄県那覇市樋川にあった市場。再開発に伴い二〇一七年に移転。

12 **金武**　沖縄県国頭郡にある町。面積の約六割を米軍用地が占める。

13 **コザ**　かつて沖縄県の沖縄本島中部にあった市。現在の沖縄市の一部。在日米軍嘉手納飛行場がある。

14 **普天間**　沖縄県宜野湾市の地名。在日米軍普天間飛行場がある。

んでそういうところを探して、他の内地の人々が知らないような沖縄を、自分で発見したような気になって喜んでいる。

ただ、そういうところは、沖縄でもごく一部の地域にしかなくて、あとは大体、ふつうの会社のビルやふつうの家、ふつうの町工場やふつうの駐車場がどこまでも続いていて、内地と同じコンビニやハンバーガー店やパチンコ屋がある。

「ほんとうの沖縄」とは、いったい何だろう。街がどんどん建て替わっているだけでなく、復帰後に育った子供たちの世代ぐらいから、急にウチナーグチ[15]も使われなくなっていて、文化やアイデンティティ[16]も大きく多様化・流動化していると言われている。糸満[17]出身の若い友人がいて、彼は「海ぶどう」[18]を、京都ではじめて食べたのだそうだ。泡盛もほとんど飲んだことがなかったという。ウチナーグチももちろんほとんど分からない。学生時代にいちばん打ち込んだのはバスケだった。でも彼は、紛れもないウチナンチュ[19]の一人だ。

「ほんとうの沖縄」「まだ失われてない沖縄」は、消えつつあるもの、時間がたてばたつほど失われていくものだ。私たちにとっての「ほんとうの沖縄」とは、だから、農連市場であり、那覇バスターミナルであり、桜坂であり、牧志[20]公設市場である。これらは全て、すでに取り壊されてしまったか、変貌を遂げている最中か、これから取り壊されることになっているものたちだ。私たちのような「沖縄病」の内地の人々にとっては、例えばおもろまち[21]のような、ショッ

15 **ウチナーグチ**　沖縄方言のこと。
16 **アイデンティティ**　identity(英語)。主体性。自己同一性。
17 **糸満**　沖縄県糸満市。
18 **海ぶどう**　海藻の一種。沖縄県の伝統的食材の一つ。
19 **ウチナンチュ**　沖縄の方言で、沖縄の人を指す。
20 **牧志公設市場**　沖縄県那覇市にある公設市場。
21 **おもろまち**　沖縄県那覇市の繁華街。

ピングモールやハンバーガーチェーンやブランド店がある場所は「沖縄ではない」。

そして、こういう感覚は、沖縄の人々自身も、広く共有しているのではないだろうか。古き良き沖縄、みんなが優しく助け合って生きていた沖縄、内地とは全く違う独特の文化や言葉や風習を持っていた沖縄、つまり「ほんとうの沖縄」は、今ではただ、失われ、取り壊され、形を変えさせられるばかりなのだ。

確かにそのとおりだ。私が沖縄にどうしようもないほどハマって通い出した九十年代は、まだまだそこらじゅうに、古き良き沖縄が残っていた。那覇の路地裏を歩けば簡単に、そういう沖縄と出会うことができた。しかし、モノレールができて、おもろまちが見事に整備され、国際通りがまるで京都の嵐山や東京の原宿のような安っぽいお土産屋さんの街になっていくにつれて、だんだんと那覇は、便利できれいで、でも内地の都市とそんなに変わらないような、そんな感じがするようになった。

沖縄はこれから、どうなってしまうのだろうか。それはもう、なくなっていくのだろうか。

そんなことはない。沖縄は、なくならない。沖縄は、沖縄のままだ。もちろん、無意味で不必要な再開発は、よくない。そういうのはやめたほうがいい。でも、これを言うと沖縄の地元の友達からは、不思議そうな顔で見られるのだが、私はおもろまちを歩いていても、南風原[22]のショッピングモールで買い物をしていても、久茂地[23]のビジネスホテルに泊まっていても、どこで何をしても、沖縄を感じるのである。風や、光や、匂いの中に。

問 「そういう沖縄」とは、どのようなものか。

22 **南風原** 沖縄県那覇市の東に位置する町。

23 **久茂地** 沖縄県那覇市の町名。

「ほんとうの沖縄」は、どこにあるのか誰にも分からない。でも、「ふつうの沖縄」なら、そこらじゅうにある。それは久茂地のビジネス街でも、渋滞する五十八号線でも、浦添や宜野湾の住宅地でも、コンビニやハンバーガーのチェーン店でも出会うことができる。ふつうの沖縄とは、現に今ここにある、そのままの沖縄である。

二十五年も沖縄に通って、私は今、こう思うようになった。ふつうの沖縄こそがほんとうの沖縄であり、そして私は、ふつうの沖縄が大好きだ。

「沖縄的なもの」について、社会学者は好んで語りたがるが、また一方で、そうした沖縄的なものの語りの中に潜む素朴な本質主義[24]の危険性についても語られている。私たちは、沖縄の人々の暮らしの中の「独特の感覚」を語るとき、ついそれを文化的DNAだの、独特の風土などという、くだらない、無内容のものに還元してしまう、というわけだ。こういう本質主義は、厳しく批判されることになる。

しかしまた、それを批判する人々は、「沖縄的なもの」は単なる語り、あるいは「カテゴリー」[25]で、そのつどのその場の会話の中でやり取りされ、「構築される」ものにすぎないと言ってしまう。そのときそれは、ただのうそ、フィクションになる。

私は、沖縄的なものは、「ほんとうにある」と思っている。あるいは、もっと正確に言えば、ほんとうにあるのだということを私自身が背負わないと、沖縄という場所に立ち向かうことができないような気がしている。

24 **本質主義**　人種・民族・性別など、事物には不変的で絶対的な性質があるとする考え方。逆に、それらの特徴は可変的とする考え方を構築主義と言う。

問 **「本質主義の危険性」とは、どのようなことか。**

25 **カテゴリー**　二四九ページ注29参照。

でもそれは、文化的ＤＮＡとか気候風土とか、そういうことではなくて、恐らくはもっと世俗的なものと関係があると思っている。また、そのように世俗的に語らなければならない、と思っている。特に、ナイチャーとしての私は。

今、沖縄の経済はかなり好調だ。再開発の機運も高まり、ここ数年で、那覇の街も大きく変わったように思う。バスターミナルもなくなったし、農連市場の周辺もずいぶん「こぎれい」になった。沖縄は変わった、と私たちが言うとき、それはいつも、本来の沖縄的なものが失われてしまった、もともとの沖縄のよさが消えてしまった、と言う語り方になる。それは確かにそのとおりだ。沖縄の風景はずいぶん、「内地っぽくなってきた」と思う。

しかしまた他方で、今もなお変わらずしっかりと存在する沖縄がある。

先日、ＳＮＳ[26]で、「沖縄方言だと思われてない沖縄方言」の話題で盛り上がった。沖縄では、服のサイズが小さいことを「服が狭い」って言うよね、と私が書き込んだら、沖縄の友人たちが一斉にざわざわしていた。マジですか。標準語だと思ってました。じゃあ逆にどう言うんですか。もしかして「店がいっぱいしてる」とか、「クーラーが逃げる」もウチナーグチですか。

最後には「スカッチブライト[27]」の話になり、その言い方も沖縄独特ですよ、と言うと、一人が「じゃあ、どんなして床をみがくんですか！」

「どんなして」もまた沖縄の表現なので、思わず笑ってしまったが、これこそ私がいつも感じている「沖縄らしさ」を表す話だな、と思った。いつもそこにあって、誰もが知ってるけど、

問「特に、ナイチャーとしての私は」と言うのは、なぜか。

26 **ＳＮＳ** 一四三ページ注4参照。

27 **スカッチブライト** 米国の台所用スポンジの商品名。日本本土では「スコッチブライト」と発音するが、沖縄では英語風に「スカッチブライト」と発音する。米軍から直接、米国文化が輸入され根付いている事例。

誰も気づかない。当たり前すぎて、注意して見ないと分からない。そして、私はそういう沖縄がいつも存在していることに、安心する。これからもずっと、こういう表現を大事にしてほしいと思う。

　那覇空港に降り立つたびに気づくのは、沖縄の「空気」の、湿気を含んだ独特の甘い匂いだ。それはとても強烈な匂いで、私はいつも深々と胸に吸い込んで、沖縄に来たことを実感する。しかしおもしろいことにその匂いは、沖縄に到着して三十分もたつと、全く感じられなくなるのだ。人間というものは、匂いにすぐに慣れてしまって、感じなくなる生き物のようだ。

　しかし、おもろまちの街や県内各地のショッピングモールといった、最も「沖縄的でない場所」を歩いているときに、ふいにこの匂いがよみがえることがある。あの濃厚な、とろりと甘い、亜熱帯の香り。それはいつもそこにあるが、気づかないものなのだ。

問「こういう表現を大事にしてほしい」のは、なぜか。



岸政彦（きし まさひこ）　昭和四十二（一九六七）年～。社会学者・小説家。戦後の沖縄社会の構造変動などをテーマとして、個人の生活史に着目した研究方法を実践している。その一方で、平成二十九（二〇一七）年に発表した『ビニール傘』が芥川賞候補に選ばれるなど、小説家としても活躍している。著書に『断片的なものの社会学』『マンゴーと手榴弾（しゅりゅうだん）』、『図書室』（小説）などがある。本文は『はじめての沖縄』（平成三十（二〇一八）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◆学習のポイント

1「沖縄のことをよく勉強する」ことと「沖縄とともに生きる」ことは「全く別のことだ」（三四〇・16〜17）とあるが、それぞれどういうことか、考えてみよう。

2「ディープな沖縄」（三四〇・9）「ほんとうの沖縄」（三四一・11）のような、「…沖縄」という表現を本文から探し出し、それぞれどのような沖縄を意味しているのか、考えてみよう。

3 ある地域の観光地化や、再開発について、その地域を訪れる人と、その地域で生活する人との捉え方の違いをまとめてみよう。

4 ある地域の中の「当たり前すぎて、注意して見ないと分からない」（三四六・1）ことや、「いつもそこにあるが、気づかない」（三四六・10）ものにはどのようなものがあるか、話し合ってみよう。

◆言葉と表現

1「本質主義」（三四四・8）のように「……主義」という言葉を挙げ、どのような意味か、どのような使われ方をしているか、調べてみよう。

2 文中にあるさまざまな「　」は、それぞれどのような役割で用いられているか、分類してみよう。

◆言語活動

1 自分が日常の中で使う言葉で、その地域独特の方言を挙げてみよう。

2「沖縄方言だと思われてない沖縄方言」（三四五・10）のように、方言だと思われていない方言がないか、調べてみよう。

アイデンティティ

藤野可織（ふじのかおり）

「猿です」
「鮭（さけ）です」
「いいえ、人魚です」と、それは言った。
「ううん、さいごのが正しいよな」と助六が言った。「ほれ、もいっぺん言ってみな。おめえはいったいなんだ？」
「猿です」
「鮭です」
「いいえ、人魚です」と、それは繰り返した。三者三様の主張は、すべて同じ口から出た。口はひとつだし、その口は本来猿のものだった。
「ああ、だめだだめだ。いいか、おめえは人魚だ」
「おめえら」と、それが言い直した。
「いいや」助六はきっぱりと否定した。「おめえはおめえだ、断じておめえらじゃねえ。おめえは一人の、一匹の、一体の人魚だ。なぜなら、おめえがおのおの猿であり鮭であったころは、猿ですだの鮭ですだのと口をきいたか？　今こうやって、おれに楯突（たてつ）いた物言いができてるのもだな、おれがおめえを人魚に仕立ててやってこそだ。つまり、おめえは人魚さ」
　すぐ隣で片膝を立てて仕事をしている弥吉（やきち）が、助六の作業台をのぞきこんで笑った。
「助六、おめえいっこうに腕が上がんねえな。こりゃ当人も猿だの鮭だの言うわけだ、かわいそうに」
　弥吉は、自分の作業台に横たわった細工物の縫い目のあたりをぽんと叩（たた）き、「さて、人魚だ」と声をかけた。すると、その細工物は瞬時に目覚め、「たしかに人魚だ」と神妙に自己を肯定した。
「こうだ」と弥吉は助六を見た。
「ふん」と助六はそっぽを向いた。
　そうしている間にも、それはべそをかきはじめていた。
「べつに人魚になんかなりたかなかったんだ、人間のやることはさっぱりわかんねえ」
「こら、泣き言を言うな。それにどうせおめえにゃ涙は流せねえよ、なんせからっからに乾かしてあるんだからな

……」

ここは、人魚工場だ。人魚なんてものは存在しないが、存在しないからこそ存在がありがたがられるので、みんなで精を出してつくる。原材料は、主に猿と鮭である。猿は、お腹でまっぷたつにされ、軒先に吊るされて徹底的に干される。鮭も顔面を切り落とされ、別の軒先に吊るされて徹底的に干される。どちらも木のように乾いたところで、ここに運び込まれ、じょうぶな木綿糸でぶつぶつと縫い合わされる。そこここの作業台で、板敷きの床に直接あぐらをかいた職人たちが、「ほら、人魚だ」「そら、人魚だ」とやっている。こうして、人魚たちが生まれる。はじめから死んでいる人魚たちだ。

助六はそれの首に縄をひっかけて立ち上がった。

「なんにしろ、おめえはこれから異国に売られていくんだからよ」と励ましながら、柿渋の壺にとっぷりと漬ける。「あっちに着いたら、ちゃあんと主張するんだぜ？　おれは人魚だってな。そうすりゃおめえ……」

頭まで柿渋に沈んでいたそれには、助六の言っていることは聞こえていなかった。

「え、なんだって？」引き上げられたそれが、咳き込みながらたずねる。

「だって人魚なんていやしねえんだからさ、本物かどうかなんてわかりゃしないだろ？　だからよ、人魚って書いた札を貼っといてやるからよ、駄目押しで堂々と人魚でございって名乗ってやれば、多少出来が悪くたってよ、異人さんたちも、おおそうかってなもんで疑いやしねえよ。それはおめえ、おどおどして猿です鮭ですなんて顔してみろ、あっちでもそんなもん殺して乾かすほどいるんだ、あっというまに犬のエサにされちまう」

それは、首をくくった体のまま、天井から吊り下げられた。下の板間では、次々と人魚がつくられていった。人魚たちは、ぽんとやられた途端に人魚の自覚に目覚めた。それは、完全に干涸びて縮み上がった眼球で、いっさいを見ていた。すでに、それの前後左右は、天井から吊られた人魚でいっぱいになっていた。助六は親方に、道具を取り上げられた。てめえなんざ一からやりなおしだとどやされ、工場の掃除に戻されている。だから、天井で吊るされている人魚のなかで、アイ

初出『群像』平成二十五（二〇一三）年八月

問「それ」と呼ばれるのは、なぜか。　問「はじめから死んでいる」とは、どのようなことか。

デンティティの獲得に困難を来しているのはそれだけだった。

助六は、板間を拭き、作業台のチリを払って集めながら、毎日天井を見上げた。

「おい、おめえ、おめえの正体を言ってみな」と、はたきの先でそれをつつく。

「猿です」

「鮭です」

「に、人魚です」

混乱したそれがぱくぱくと答えるたびに、工場中がどっと沸いた。

「ちげえねえや」と弥吉がやじを飛ばした。「そいつはどう見たってぶった切られた猿と鮭だ、千里先からだって縫い目も明らかさ。とうてい人魚には見えねえよ」

吊るされている人魚たちは、それには見向きもせず、日に日に人魚たる自覚を深めていく。柿渋が馴染むにつれて身は締まり、猿部と鮭部をつなぐ糸はぎゅっと食い込んで境目の処理はますます目立たなくなった。顔は伝説の怪物にふさわしく、厳めしくおぞましく、思索的なものへ変化した。人魚たちは、かつて生きていたころ、力強く身をくねらせ、荒波を尾で叩いて泳ぎまわったことを思い出すまでになっていた。網と銛を持った人間たちに追い回されたことも思い出した。

なぜなら、人魚の肉は不老不死の妙薬だからである。捕まった人魚たちは、人間の意になぞ沿うものかとみずから血を蒸発させ、肉はみるみる硬く干上がってこのような姿となった。人魚たちは、選び取った死に満足し、身をやつしてまで神秘を守り抜いたことを誇らしく思った。人魚たちは、仲間とノミを取り合ったこと、きいきい鳴きわめいたこと、草や葉を食いちぎり、果実をしゃぶり、ときには畑から作物を盗んだこと、あるいは冷たい水ごとプランクトンを胃の腑[1]に流し込み、熊の爪をすんでのところで逃れ、必死に川をさかのぼったことなどは、思い出しもしなかった。ましてや捕らえられて鉈を振り上げられたとき、それがどんなに恐ろしかったか、体の半分を失くして命も失くしてひたすら干されたときの情けなさ、こころもとなさは、人魚としてとうてい認めるわけにはいかない経験だった。そういったことで頭がいっぱいなのは、それだけだった。それの顔は、あくまでも不意の死に驚く猿だった。しかも、それのつなぎ目からは、始末の甘い糸がいっそうぼろぼろ顔を出した。

助六は台に乗り、畳針で糸を押し込んだ。あまり強引に押し込むものだから、鮭部の一部が欠け、猿部とのあいだにちょっとした隙間をつくってしまった。

「おっと、気にすんなって」助六は一瞬眉間に皺を寄せて

口をイーとやってから、すぐに平気な顔をしてみせた。「誰がなんと言おうと、おめえは人魚だよ。おい、しっかりしろよ。人魚じゃなかったら、おめえなんかただの小汚ねえ死骸じゃねえか」

「人魚であったってただの死骸じゃねえか」と、それは言い返した。

「いっぱしの口をききやがる」助六は舌打ちした。「おれが言ってんのはそういうことじゃねえよ。おめえには、人魚の死骸としての輝かしい未来が待ってるってことよ」

「いや、猿です」

「鮭です」

「人魚です」それは、あたふたと主張した。

「だめだこりゃ」助六は匙を投げた。

助六は、黙々と掃除をするだけになった。何日も天井を見上げることはなかった。それは、助六のつむじばかり追った。追わずにはいられなかった。猿であり鮭であったとき、それは誰かを失望させたことなどなかった。なぜなら、その猿もその鮭も、そもそも期待されたことがなかったからだ。その猿、その鮭は、他者からの期待なしに生きていた。おのれのやるべきことはちゃんとわかっていたし、しぜんとやるべきことをやっていたから、生きていたのだ。あれは、完璧な生だった。あれに比べて、この生の不完全さといったらどうだ。助六の失望は、それを恐怖でぐしょ濡れにした。恐怖は柿渋の壺より黒く、柿渋とちがって日ごとに乾いたりしない。

「助六、助六」

ある日それは、手足をついて板間を拭く助六を呼ばわった。

「なんでえ」助六は、暗い目をちらりと上げた。

「助六、おれは、おれは……」それはあえいだ。

「人魚です」

「猿です」

「鮭です」

言い募るのをやめようとしたが、うまくいかなかった。また助六を失望させると思うと、自分自身に対して失望がわき上がった。こういうタイプの失望もまた、猿であり鮭であったときにはありえないものだった。猿や鮭の失望は、群れの仲間に食べ物を奪われたり、水の温度が快適でなかったりする

問「工場中がどっと沸いた」とあるが、どのような状況か。

腑　はらわた。内臓。

ことに対する失望であり、自分自身に向けられることはない。
それの身の内から、新たな恐怖がじくじくと湧き出した。すでに恐怖で濡れそぼっているのに、この上まだ濡れることができるのかとあきれたが、できるのだった。
しかし、助六は立ち上がった。
「おめえ、今、いちばんに人魚だと言ったな」
助六は手を伸ばしてそれの鱗に触れた。助六は真面目な顔をしていたが、あきらかに喜んでいた。それは、助六に触れられた箇所が少し乾くのを感じた。
助六が、またかいがいしくそれの面倒をみるようになった。助六は、毎日のように「ほれ、おめえの正体は」とはたきの先でつついた。それは、必ずはじめに人魚と口にすることができるようにはなったが、口先だけのことだった。それには、人魚の記憶はさっぱり浮かばなかった。そのかわり、猿であり鮭であったときの記憶はじょじょに薄れていった。そのことはまた、別の恐怖でそれを満たした。人魚でもなく猿でもなく鮭でもないということは、つまり自分が不潔な死骸であり、ただのゴミであるということだった。そんなことは望んでいない。助六も自分も。それの顔は絶望にきしみ、もとから開いていた口は引き攣れて歪んだ。尾は、ねじれて反り返った。皮肉なことに、それの焦燥はそれを多少人魚らしくした。
「いいぞおめえ、さいきんわりと人魚っぽいよ」と助六は褒めた。「あっちからしたらこっちはわけのわからねえ薄気味悪い島国だ。そんなところからおめえみたいな野蛮でおっそろしい顔の人魚が届いたとくりゃあ、きっと大喜びだぜ」
ただし、それはあいかわらず人魚と言ったその乾き切った舌の根で、猿と鮭を名乗ることをやめられなかった。助六はそのたびに顔を曇らせた。それは震え上がった。助六はときにはいら立って罵倒し、ときには妙にやさしく励ましたが、それにとっては同じだった。恐怖は乾くことなく、外からも内からもそれをずくずくにした。
柿渋が乾き、出荷の日が来た。助六は、丁寧にそれを天井から取り外した。それは、綿を敷いた桐の箱に寝かされた。人魚たちも、桐箱に詰められていった。
「向こうに行ったらな、[2]ギヤマンの入れ物に入れてもらうといいぞ」
「鼻が高くて脚の長えガキどもを怖がらせてやれよ」
「でけえ興行主に当たるとな、なんとこの世をぐるりと一周できるそうだよ。てえしたもんだ」
職人たちは蓋を閉める前にそんなふうに人魚たちに語りかけたが、人魚たちはそっちのけでうっとりとなつかしい海を夢見ていた。人魚たちは、すでに海の気配を感じ取っていた。

刃のように光る海の表面と、その奥底で自分たちを待つ生きた人魚たちを。

それには、そのようなビジョンはなかった。それは最後まで、助六の機嫌をうかがっていた。助六は微笑(ほほえ)んでいたが、その笑顔は穏やかなあきらめの笑顔だった。

「おめえはよくやったよ」助六は蓋を取り上げる。異国のことばで人魚と書かれた和紙が貼り付けてある蓋だ。「ま、大事にしてもらえ」

みるみる恐怖がしみ出した。綿を濡らし、桐箱になみなみとあふれ、このまま蓋を閉められては溺れてしまうとそれは思った。溺れて死んでしまう、死骸になってしまう、死骸は死骸でもなんの価値もないただの死骸に！

蓋が閉まる寸前に、それは必死に絞り出す。

「人魚だ」

「なんだって？」助六が手を止めた。

「人魚だ」

助六はじっと黙ったまま、それを見下ろした。それは濁った目で助六を見守った。やがて、助六の目に涙が浮かんだ。

「そうだ、おめえは人魚だ」と言って、助六は蓋を閉めた。

真っ暗になった。この姿にされてはじめて、それは安らかだった。おれは人魚なんだ、とそれは思った。おれはたしかに人魚だ。おれはやっと助六を満足させ、おれ自身も満足している。

人魚たちとそれは、船に積み込まれた。揺れる船内で、それはじょじょに自信を強めていった。かつて猿であり鮭であったことは、悪い冗談のようだった。猿や鮭なんてくだらない。猿や鮭を人間が食ったって、せいぜい数日命を長らえさせるだけだ。その点、人魚はどうだ。人魚を刺身(さしみ)にして食えば、不老不死だ。人間は人魚に焦がれ、求め、恐れている。干物になった死骸すら、高価な桐箱に入れて取引(とりひき)される。それがこのおれなんだ。

それが有頂天になっているあいだ、人魚たちは示し合わせて静かに歌を歌いはじめていた。自分たちを探し求める、生きた人魚を呼び寄せる歌だ。人間たちは、人魚を見くびりすぎている。人魚を、死骸とはいえ、あろうことか海路で運ぶなんて。

2 ギヤマン　diamant（オランダ語）。ガラス製品の古風な呼び名。

問「乾くのを感じた」から、どのような感情を読み取れるか。

問「安らかだった」のは、なぜか。

生きた人魚たちに宛てた歌は、人間には聞こえない。乾き切ったのどと縮れた舌で、人魚たちは歌う。ばらばらに閉じ込められた桐箱から、振動することのない声を合わせて力の限り歌う。死んだ人魚たちは、生きた人魚たちが白い身をくねらせて船を追うさまをイメージする。生きた人魚たちはお互いを呼び合い、次第に大きな群れになる。そしてとうとう、くじらのように肥大した群れが、カジキのような速さでまっしぐらに船を襲う。人魚たちは、ぴたりと同じイメージを共有している。

船は転覆しなかったが、危ういところだった。人間たちは、突然の荒波を乗り切るために、積み荷の多くを海に捨てねばならなかった。まず重い積み荷が捨てられ、人魚の死骸の入った軽い桐箱はあとまわしにされた。それでも、半分以上の人魚が海へ返された。

投げ捨てられた人魚たちは、桐箱に海水が浸みるのを辛抱づよく待った。ひとたび海水に触れれば、人魚は本来の姿を取り戻す。死んだ人魚はたちどころに息を吹き返して生きた人魚となる。縮み上がって黒ずんでいた体はみるみる洗われてふっくらと白く光りを放ち、おどろおどろしく固まった顔はとろけて、やわらかですべすべした皮膚があらわれる。真っ黒に輝く髪が伸びて広がり、しなやかな腕が海水を掻き、螺鈿のごとき鱗がなまめかしくうねる。船に取り残され運び去られていく人魚も、海へ取り落とされて沈みゆく人魚も、いつまでもぴたりと同じイメージを共有しているのだ。

それは船に取り残された箱のひとつに収まり、何も知らずにでたらめな鼻歌を歌い、「おれは人魚です」と繰り返しつぶやいてはにやついている。それはもう、何度でも言える。なぜこれを言うのがあれほどまでに難しかったのかわからない。むしろ今では、猿だの鮭だの言うほうがよほど難しい。

「人魚です」

「人魚です」

「人魚です」

それは楽しげに、うれしげに、誇らかに、厳かに、勇ましく、人魚の名乗りを上げ続ける。

いくつかの異国の港を経由し、船が目的地に到着した。人魚たちが別れの歌を歌い交わすなか、それはやはり「人魚です」「人魚です」「人魚です」に余念がない。ほかのすべての桐箱と同じように、それの入った桐箱も、台帳をかかえた輸入業者によって振り分けられて行く。

ここで、手違いが起こった。それの桐箱が向かった先で、発注者はすでに死んでいることが判明したのである。桐箱は、発注者のほかの数多ある遺品といっしょに片田舎の古い屋敷

へ運ばれ、忘れられる。二十年のちに、亡き発注者の遠縁が、発注者の遺品を整理しに代理人を派遣する。代理人は屋敷に残された膨大な品物のリストをつくり、依頼人へ送付する。依頼人は、リストのうちのほとんどを売り払うよう指示するが、「人魚」とラベルの貼られた古い箱は、いくつかの貴重品とともに依頼人のもとに引き取られる。そのあいだじゅう、それは、飽きもせずに熱心に「人魚です」「人魚です」「人魚です」をやっている。二十年のときは、密封された桐箱のなかの乾き切った死骸にはさほどの負担にはならない。

そして、いよいよ本番である。マイルズは、磨き立てられたオーク材のテーブルの上で、桐箱の紐を解き、蓋を取った。それは、一瞬の緊張のあと、マイルズの青い目をしっかりと見つめて「人魚です」と胸を張る。

マイルズは苦笑した。彼の反応が期待したものとちがうので、それはうろたえた。ことばが通じなかったのだろうか。はっきり人魚だと伝えたはずだが。それは、助六に質問したことを思い出す。

「おれは異国にやられるというが、おれが正体を告げたところで、異国の人は果たして理解できるのか？」

「なんだおめえ」助六は畳針の尻でそれのこめかみを小突いた。「まさか今、おれたちがくっちゃべってんのは日本語だとでも思ってんのか？　そんなこともわかんねえのか？　おめえが使えることばはたったひとつだろ。どこでだって、誰にだって通じるに決まってる」

それは、もう一度言ってみる。

「人魚です」

「そんなこったろうと思ったよ」とマイルズが答えた。なるほど助六の言うとおり、ことばは通じている。マイルズはそっと手を差し込んで来て、それの小さな体を持ち上げた。窓へ近付き、腹の継ぎ目を日に透かす。「人魚じゃない」

「人魚です」むっとして、それが言い張る。

「いいや、人魚じゃないよ。きみが何者であるかは、きみ自身が決めることじゃない」マイルズは静かに言い聞かせる。「猿と、なにかな、とにかく魚だ」

その途端に、たちまち猿であり鮭であった記憶がよみがえる。なんてことだ、おれは人魚じゃない。助六はこれを知っ

問「生きた人魚となる」とは、どのようなことだと考えられるか。

問「マイルズは苦笑した」から、どのような感情が読み取れるか。

たらどう思うだろう。おれの成功を確信して涙を流した助六は。

なつかしい恐怖がゆっくりと身を浸す。人魚たちにとっての故郷は本物の海であるが、それにとって故郷の海とは恐怖だ。人魚なら海で溺れて死ぬことはないが、それは溺れて死ぬ。

それの体は、いまだにマイルズの手のなかにある。マイルズがそれをじっと見ている。おれは死骸で、ゴミだ。じきに、マイルズの手に力が込められ、おれはばらばらになるだろう。干物は崩れやすいんだ。かんたんに粉々になる。おれは猿であり鮭であったころ、無様に捕えられて無惨に切断され、せっかく人魚の死骸としての人生を歩み始めたのに、ふたたび惨めに死ぬのだ。

それは、そもそも人魚になどなりたくなかったことを思い出す。そうだ、おれはこんなふうに生まれて来たくなんてなかった。恨んでやる。助六を、おれと共に干されていた人魚たちを、こいつを恨んでやる。それは、マイルズを睨みつける。呪いを込めて歯を剝き出す。せめて指を切り裂いてやろうと、鋭い鱗をうごめかす。実際は、微動だにしていないけれど。

しかし、マイルズはそれを丁重な手つきで窓にかざし、さまざまに角度を変えて眺めるばかりで、いっこうにそれを廃棄しようとしなかった。マイルズが持ち替えるたびに、それの体の端々が陽光でぬくもった。猿であり鮭であったころ、日の光のあたたかさは最高の快楽だった。警戒を忘れて地面の日だまりに寝そべったし、きらきら光る川面に留まったものだった。日の光は、命の危険とひきかえにしてでも浴びる価値があった。あの完璧な生、そしてこのあまりにも不完全な生。それは、それでも体いっぱいの憎悪を維持しようと努めたが、マイルズが「うん、なかなかよくできてる」とつぶやいた瞬間に霧散した。

マイルズは、大切そうにそれを桐箱に戻した。

「きみは、人魚の死骸を装い、猿となにかの魚の死骸を糸でつないでつくられた工芸品だ」

それは、綿にくるまれてマイルズを見上げた。

「猿です」

「鮭です」

「いいえ、人魚です」と、それは言った。

「うん、そうだね」とマイルズはうなずいた。「どれも正しい」

それからおよそ五十年後、マイルズは死の床で、それを博物館に寄贈するという文書にサインをした。

「博物館というのは、一種の教育機関だ」とマイルズはそれに説明した。「貴重な品々が蒐集され、広く一般大衆に向

かって公開・展示される。人々は、きみの姿を見てさまざまなことを学ぶ」

それは、マイルズの死骸がどこかの軒先に吊るされ、完膚なきまでに乾かされたあとで自分といっしょに博物館へ移送されることを願ったが、かなえられることはなかった。マイルズは、土葬されて数年のうちに朽ちた。

それは今でも博物館にいて、ガラスのケースに入れられている。それは大人気というほどではないが、まあまあ人気がある。他の展示物に比べて、それを覗き込んだ客はいやな顔をしたり、少し怯えてみたり、あるいは逆に面白がったりと明らかに表情を変えるのがその証拠だ。たまに、それを目当てに展示室に足を伸ばす客もあらわれる。そういう客は、たいていが若いカップルだ。男の子が女の子を引っ張って来て、女の子が抑えた悲鳴を上げるのを男の子がにやつきながら見守る。反対に、女の子が男の子を引っ張って来て、男の子が気分を悪くして目を逸らすのを、女の子が得意げに見守ることもある。まれに、二人して長いことケースやキャプション[3]を指差してひそひそと話し合い、丸く見開いた目を近づけてそれを観察していく者もある。

キャプションには、「人魚のミイラ（猿と鮭の死骸を縫い合わせてつくったもの） 19世紀・日本」と書かれている。

それは、自分の前で立ち止まる人々に、いつも同じことを言って聞かせようとする。いまやそれは博物館の展示物として、人々を啓蒙する任を負っているからだ。

「生きていると、ときに自分の望まない自分の像を押し付けられることがある。また、自分が理想の自分とはまったくちがうものに成り果ててしまうこともある。しかし、人生でいちばん大切なのは、ありのままの自分を受け入れてくれるパートナーに出会うことだ。そして、自分自身でもありのままの自分を受け入れること。それが死骸であれゴミであれ、なんであれ」

相手が聞いていようがいまいが、それはやるべきことをやり続ける。

3 キャプション caption（英語）。新聞・雑誌などの見出し。写真・挿絵などにつける説明文。

問 憎悪が、マイルズが「つぶやいた瞬間に霧散した」のは、なぜか。



藤野可織（ふじの かおり） 昭和五十五（一九八〇）年〜。小説家。京都府の生まれ。大学では美学・芸術学を専攻した。『爪と目』で芥川賞（あくたがわ）受賞。女性にとって当たり前とされがちな日常を問い直す作品には、静かな恐怖があると言われる。作品に『ピエタとトランジ＜完全版＞』『来世の記憶』などがある。本文は、『おはなしして子ちゃん』（平成二十五（二〇一三）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1「人魚の自覚」（三四九・下13）がどのようなものか、本文に即して整理してみよう。

2「恐怖」（三五一・下5）「新たな恐怖」（三五二・上2）「別の恐怖」（三五二・上16）は、それぞれどのような恐怖か、まとめてみよう。また、「なつかしい恐怖」（三五六・上3）という表現からどのようなことが読み取れるか、考えてみよう。

3「不完全さ」（三五一・下4）はどのような状況で生じるのか。(1)助六がどのような人物か、(2)「それ」と助六との関係、を踏まえて考えてみよう。

4「それ」にとってマイルズがどのような存在であったのか、まとめてみよう。

5「それ」と呼ばれることについて、本文冒頭での印象と結末での印象の違いについて考えてみよう。

◇言葉と表現

1 次の慣用句を使って、短文を作ってみよう。

(1)「腕が上がる」（三四八・下5）

(2)「匙を投げる」（三五一・上13）

(3)「顔を曇らせる」（三五二・下7）

◇言語活動

1「アイデンティティ」の一般的な意味を、辞典などで調べてみよう。また、「アイデンティティ」が比喩的に表されていると考えられる表現を本文中から抜き出してみよう。

2「人魚」に現実社会のどのような問題を連想できるか。「人魚」が単数の場合と複数の場合を、それぞれ考えてみよう。

愛について

竹村和子（たけむらかずこ）

位置づけのはっきりしない文脈での差異は、[1]アイデンティティという概念そのものを空洞化し、〈わたし〉というものを総体として形成している多数の層を、無限にまで引き延ばすものである。

——[2]トリン・T・ミンハ

アイデンティティ、差異、主体の解体、位置性、行為体、自由、平等、正当性、承認、[3]アゴーン……。多彩な概念が、抑圧からの解放をめぐって議論される。透明で客観的な普遍性の物語に疑義がつきつけられ——支配的な物語であれ、解放的な物語であれ——それが誰によって、誰に向かって語られているかが問いかけられる。

語ることから無縁な者は、一人もいない。語りは必ずしも語り手の意図から生まれるものではない。語りは語り手の意図を超え、意図を裏切り、あるいは意図のないところ、意図が持ちえない場所からも発せられる。語りは生であり、「語ることができない」者も語る——語らないことを、あるいは聞き手を持たぬ事柄を。語りは慣習の反復と、慣習の亀裂の両方を出現させる。語りが常に語り手の意図を超えるものならば——時に語りが聞き手を持たぬものならば

初出『思想』平成十二（二〇〇〇）年七月

1 **アイデンティティ** 三四二ページ注16参照。

2 **トリン・T・ミンハ** Trinh T. Minh-ha 一九五三年〜。ベトナム系アメリカ人の作曲家・映画作家。

3 **アゴーン** agon（ギリシャ語）。闘争。

問 **「語ることができない」とは、どのようなことか。**

＊ 差異　抑圧　疑義

――語り手は誰か、語り手はどこから語るかという問いに、確定的な答えが与えられるだろうか。語り手を何と名づければよいのだろう。

語りが語り手の意図に同一化しえないように、語りが聞き手に全て届くわけではない。しかし語りは、聞き手に届かない限り存在しない。聞き手は、聞き取り可能なものだけを聞く。語りは、聞き手に届いたとき、聞き手にとっての語りとなる。だから聞き手は、聞くことができるという潜在性のゆえに、聞く以前に存在している。しかしまた語りなしに、聞き手は存在しない。聞き手は、聞くことと同時に出現するものでもある。そして聞く行為が持つ被傷性[4]を、受け入れる。聞く行為によって、自らの聞くことの潜在性を広げていく。そのような聞き手を誰と特定することは、可能だろうか。誰に向かって語るかという問いは、有効なのだろうか。そのときの聞き手をどう名づければよいのだろう。

わたしたちは名づけられること（あるいは名づけられないこと）――さらには自ら名づけること――の排除性と、名づけの不可避性のあいだに立ちつくしつつ語る。どのような人も語る。語れない人も、聞き手を持たぬ人も、ときに語り手が意識しないまま、あるいは語りが届かぬまま語る。だから名づけは一回性のものではなく、生成のプロセスであると、わたしたちは「〜である」と名乗る（カミングアウトする）のではなく、語りによって「〜になる」（ビ）カミングアウトする）のだと主張する。では「〜として」カミングアウトするときと、「〜として」（ビ）カミングアウトするときの、「〜として」のあいだにはどのような質的相違がある

問 「聞く行為が持つ被傷性」とは、どのようなことか。

4 被傷性　ヴァルネラビリティ（vulnerability〈英語〉）の訳語。人間が自らの生存を外部にある言語や社会に依存し、常に他者にさらされていることに起因する、自らが傷つけられる可能性のこと。

のだろう。果たして「〜になる」という政治が、名づけの制度を転覆させるのに最も効果的な唯一の手段なのだろうか。九十年代に入って、多文化主義や文化研究の文脈で、「アイデンティティの政治」が賛同と批判の両面で議論の俎上に上ってきた。「アイデンティティの政治」や「(ビ)カミングアウトの政治」は、現存の抑圧的な性体制を転覆するために必ず通過すべき、不可避の本質主義的な戦略なのか。あるいは、リスクを背負いつつ実践される一つの社会構築的な戦法なのか。そのとき、そこで何が起こっているのだろうか。

「わたし」を同定するアイデンティティは、「わたしでない」ものを生み出し、それとの差異化をはかる。差異はアイデンティティの前提条件なのか。それとも差異は、アイデンティティの中に生じるもの、ドゥルーズの言葉を使えば「自己に対して生じる」ものなのか。差異が「アイデンティティの可能性の条件」であると同時に「アイデンティティの構築の限界を定めるもの」(バトラー)ならば、アイデンティティの「政治」は、アイデンティティの「倫理」へと——すなわち人と人の〈あいだ〉を扱う政治は、自己の中の〈あいだ〉を扱う倫理へと——接続していかなければならないのではないか。

スピヴァックは、社会構築的な考え方は反本質主義のように見えるが、実は社会を本質として捉えているにすぎないと批判した。社会構築主義の考え方では、現在の資本主義社会は本質(つまり社会一般)と見なされてしまい、それを批判的に検証する作業はなされず、それ以外のものはみな「差異の(個々の)場所」になってしまう、と。だが差異は差異化された「場所」

問 「名づけの制度」とは、どのようなものか。

5 **本質主義** 三四四ページ注24参照。

6 **ドゥルーズ** Gilles Deleuze 一九二五年〜一九九五年。フランスの哲学者。

7 **バトラー** Judith P. Butler 一九五六年〜。アメリカの哲学者・フェミニズムの思想家。

8 **スピヴァック** Gayatri Chakravorty Spivak 一九四二年〜。インド系アメリカ人の文芸評論家。

＊ 潜在 不可避 構築 検証

ではない。差異は、位置性やアイデンティティではない。たとえその「場所」に何か持続的なものがあるとしても*——再びドゥルーズの言葉を使えば——「持続とは、自己に対して差異を生じるもの」である。だからこう言うことができるだろう、アイデンティティとは「自己に対して差異を生ずるもの」であると。

スピヴァックは理論の政治性を問題にし、「責任を持つ（応答する）ためには、意図の可能性、さらには主体性の自由さえも想定しなければならない」と述べた。スピヴァックがあえて口にした「主体性の自由」を、「自己に対して差異を生じさせる持続」と読み変えることはできないだろうか。つまり自己への応答の持続性であると。政治の次元（人と人のあいだ）で求められる責任は、倫理の次元（自己の中）で持ちえる「応答性」に連動していくのではないだろうか。

語りは語り手の意図をこえ、不確定の聞き手に送られる。「語り手」は語るという行為によって過去の物語の「聞き手」となり、「聞き手」は聞く行為によって未来の語りの「語り手」となる。過去は現在の中に侵入し、現在は未来をすでに内包する*。語りは、時の持続の中で時を引き寄せ、語り手においても聞き手においても、自己の位置をずらし、自己の中に差異を生じさせていく。語りという、語り手と聞き手のあいだの間主体的な政治的行為は、自己への応答——自己で非ざる自己への応答——という内主体的な倫理的行為として体験され、そして自己の内部で生じた差異は、再び語りという間主体的な係争へと連鎖していく。

* 持続　内包



竹村和子（たけむら かずこ） 昭和二十九（一九五四）年～平成二十三（二〇一一）年。英文学者。愛媛県の生まれ。性別を男／女に分け、また異性愛を一般的とする社会的な仕組みの根本を、文学を通じて問い直した。思索は、国家に関連する支配関係や、暴力の問題にも及ぶ。日本にも大きな影響を与えた哲学者ジュディス・バトラーの翻訳者としても知られる。著作に『フェミニズム』『境界を攪乱する―性・生・暴力』などがある。本文は『愛について―アイデンティティと欲望の政治学―』（平成十四（二〇〇二）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 「語り手」（三五九・8）と「聞き手」（三五九・11）について、名づけの困難さを主張するのはどうしてか、整理してみよう。

2 「名づけられること」（三六〇・11）「名づけられないこと」（三六〇・11）「自ら名づけること」（三六〇・11～12）が「排除」（三六〇・12）であるのはどうしてか、考えてみよう。

3 「～である」（三六〇・15）と「～になる」（三六〇・15）には、どのような違いがあるのか、話者の自覚や他者との関係を視野に入れて整理してみよう。

4 「アイデンティティ」（三五九・4）の捉え方が、辞書的な意味とどのように異なっているか、「持続」の使い方の特異性にも注意して整理してみよう。

5 「自己の中」（三六一・12）で生じる差異を「倫理」（三六一・12）というのはなぜか、人との関係にどのような変化を生むのかに注意して考えてみよう。

◇言葉と表現

1 本文では、「だろう」「だろうか」など、不確かさを表す表現が多用されているが、その効果について考えてみよう。

◇言語活動

1 「アイデンティティの政治」（三六一・2～3）とはどのようなことか、調べてみよう。

2 「自己の中に差異を生じさせ」る（三六二・14～15）ような体験は、過去の文学作品を読む際にはしばしば起こりうる。そうした体験をしたことがあれば、どのような作品がきっかけであったかを発表してみよう。

3 文学作品を読むことが、倫理と関係することができるのはどのような場合か、自分の考えを発表してみよう。

マイノリティと文学

マイノリティとは、社会的少数者のことである。例えば、民族や宗教、性的指向や性自認、障害などにかかわる。マイノリティ・グループに属することが、身体や文化的な特徴から明瞭な場合もあり、自身が告白しなければわからない場合もある。また、その属性を持つ人数は少なくないにもかかわらず、特定の機会や地位から排除されるのでマイノリティとなることもある(例えば女性や生活貧困者、非正規労働者など)。

マイノリティは、社会においてその事情が考慮されることが少ないゆえに、権利や利益の配分にあずかれないことがあり、是正が重要である。もしも、特定の人しか結婚できないとか、職業につけないような社会なら、人間の生は著しく損ねられる。政治に働きかけるためには、不利益を被っている少数者自らが名乗りを上げ、マジョリティから貼られたレッテルを覆し、グループとして主張をすることが有効になる。

しかしながら、名乗りが積極的になされ、同じグループへの帰属意識が形成されるばかりとは限らない。少数ゆえの差別に巻きこまれることを回避したい場合もあるだろうし、同様な人々が他にもいると知ることもできないような孤立的な環境に置かれている場合もある。利益の享受をめぐってグループ内がさらに細分化され、批判の応酬になる場合もある。また、人の性質や属性が複合的なものだとすると、一人の人間でも、ある側面ではマジョリティだが、別の側面ではマイノリティだということもありうる。

文学は表現の多様さから、マイノリティのアイデンティティ確立のみならず、確立の困難や問題を描写することもできる媒体である。その際、使用する言語の支配性も問題となるため、支配的な言語と、少数や小さな地域で使用される言語を並列的に使う問題提起的な作品も書かれる。ただし、作品の中には、マジョリティに理解されないとか、差別を回避するためのカムフラージュが施されてメッセージが読み取りにくいなどのせいで、文学史において評価されてこなかった作家や作品もあるため、注意してみよう。

本単元の教材以外にも、森鷗外(おうがい)『舞姫』の太田豊太郎(おおたとよたろう)には、西洋において日本人がマイノリティであることと、男性というマジョリティとしてのエリスに対するふるまいの絡み合いが見いだされる。林京子『空缶(あきかん)』や石牟礼道子(いしむれ)『苦海浄土』も、マイノリティという視点から考察することができる。マイノリティは、文学を通して多様性を考えるための大きなテーマである。

◇単元の言語活動 4

◆あなたはみんなと同じか、あなた自身と同じか

――文学的な文章が考察すること――

『巨人の接待』『はじめての沖縄』『アイデンティティ』『愛について』は、それぞれジャンルが異なるが、アイデンティティと、アイデンティティをめぐる対話の重要性を扱っている。小説が現実的な問題から発想されている場合がある一方、評論がテーマによっては、感情を大切にし精妙な言い回しを用いるなど、文学的表現と接近する場合もあることを、比較しながら考えてみよう。

課題 個人または集団的なアイデンティティを確立する意義は何か、特にマイノリティにとってどのような意味があるのかを考えてみよう。そのうえで、アイデンティティ概念に問題があるとすれば、どのようなことか、ジャンルの異なる文章を比較しながら考え、討論してみよう。

1 「アイデンティティ」の一般的な意味を再確認したうえで、どういう場面や条件があるときに、アイデンティティが問題になるか考えてみよう。

2 ポピュラー音楽で、「アイデンティティ」「自分らしさ」がタイトルや歌詞に使われているものを探し、歌詞を分析して、どのような傾向があるか考えてみよう。また、衣装やパフォーマンス、ミュージック・ビデオで、それがどのように表現されているか考えてみよう。

3 身近にあるポスターやテレビ番組、広告などのメディアで、次の話題についてどのようなメッセージの例があるか調査してみよう。共感を持てる、持てないというそれぞれの考えを大切にしながら、メッセージの良い点、または悪い点について考えてみよう。

① アイデンティティ

② マイノリティ

4 『巨人の接待』『はじめての沖縄』『アイデンティティ』はそれぞれ、竹村和子が『愛について』で述べている次の項目のどれと関連があるか考えてみよう。

① 「名づけられること」「名づけられないこと」「自ら名づけること」

② 「人と人との〈あいだ〉」「自己の中の〈あいだ〉」

5 抒情の探究

- 作品の解釈を踏まえ、人間・社会・自然などに対するものの見方・感じ方・考え方を深める。
- アンソロジーを作成して発表し合い、互いに批評することで、作品への理解を深める。

短歌十四首
俳句の力学 岸本尚毅
俳句十二句
文学の窓 底荷（上田三四二）
単元の言語活動5

短歌十四首

街をゆき子供の傍（そば）を通る時蜜柑（みかん）の香（か）せり冬がまた来る

なづななづな切抜（きりぬ）き模様[1]を地に敷きてまだき春ありここのところに

木下利玄（きのしたりげん）

木下利玄　一八八六年～一九二五年。岡山県の生まれ。歌集に『紅玉』など。

1 なづな　ナズナ。アブラナ科の越年草。春、小さな白色の花を付ける。春の七草の一つ。

すゐえん[2]のあまつをとめがころも[3]でのひま[4]にもすめるあきのそらかな

おほてらのまろきはしらのつきかげをつちにふみつつものをこそおもへ

会津八一（あいづやいち）



水煙

眠らざりける暁に少年のあわれ夥（おびただ）しき仮説を下（くだ）痢す

岡井隆（おかいたかし）

わが腕に涙ながして寝入りたるそのぬか[5]の上のやはらかき闇

会津八一　一八八一年～一九五六年。新潟県の生まれ。歌集に『南京新唱』など。

2 すゐえん　水煙。仏塔の屋根の最上部にある火炎型の装飾。

3 ころもで　衣手。袖。

4 ひま　隙。

岡井隆　一九二八年～二〇二〇年。愛知県の生まれ。歌集に『土地よ、痛みを負え』など。

5 ぬか　額。

たとへば君　ガサッと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか

河野裕子

ぽぽぽぽと秋の雲浮き子供らはどこか遠くへ遊びに行けり

青春はまこと沙漠[6]の花ならん渇きながらに咲く花であれ

福島泰樹

サンドバッグ[7]叩き疲れし合宿の贅沢すぎる汗ぬぐわんに

興福寺[8]少年阿修羅[9]にかなしみを与へし仏師の背や広からむ

水原紫苑

こぼれたるミルクをしんとぬぐふとき天上天下[10]花野なるべし

5

河野裕子　一九四六～二〇一〇年。熊本県の生まれ。歌集に『森のやうに獣のやうに』など。

福島泰樹　一九四三年～。東京都の生まれ。歌集に『さらばわが友』など。

6 沙漠　砂漠。

7 サンドバッグ　sandbag（英語）。筒状の袋に砂などを詰め、つるしてボクシングの打撃練習などに使う道具。

水原紫苑　一九五九年～。神奈川県の生まれ。歌集に『びあんか』など。

8 興福寺　奈良県奈良市にある寺院。

9 阿修羅　興福寺にある阿修羅像。戦闘神でありながら、少年のような風貌で、わずかに眉をひそめる静かな表情で表されている。

10 天上天下　天上と地上、どこもかしこも。

君の落としたハンカチを君に手渡してぼくはもとの背景にもどった

斉藤斎藤（さいとうさいとう）

斉藤斎藤　一九七二年〜。東京都の生まれ。歌集に『渡辺（わたなべ）のわたし』など。

このなかのどれかは僕であるはずとエスカレーター降りてくるどれか

深い学びのために

学習のポイント

1 木下利玄の歌にある「切抜き模様」（三六六・3）は、ナズナのどのような部分を歌っているか、考えてみよう。

2 会津八一の歌にある「つきかげ」（三六七・4）は、何を指しているか、考えてみよう。

3 岡井隆の歌にある「仮説を下痢す」（三六七・7）とは、どのような状況を指しているか、考えてみよう。

4 河野裕子の歌にある「ガサッと」（三六八・2）には、どのような心情が託されているか、考えてみよう。

5 福島泰樹はなぜ青春を「沙漠の花」（三六八・5）と表現したのか、考えてみよう。

6 水原紫苑の歌にある「花野なるべし」（三六八・9）を口語で言い換えてみよう。

7 斉藤斎藤の歌にある「どれか」（三六九・3）に託されている心情を考えてみよう。

8 短歌の表現方法や歌われている視点などから、興味や関心を抱いた歌を指摘してみよう。

言葉と表現

1 句切れを意識しながら音読してみよう。また、字余りなど破調の歌を指摘してみよう。

2 歌中にあるスペースの効果について考えてみよう。

言語活動

1 教科書掲載の短歌の中から、特に心に残った短歌を一首選び出し、それについて二〇〇字程度の鑑賞文を書いてみよう。

俳句の力学

岸本尚毅（きしもとなおき）

初出『俳句の力学』平成二十（二〇〇八）年十月

有季定型[1]という堅牢（けんろう）な器は多様な素材を俳句として消化する力を持っています。だとすれば、俳句の俳句らしさは内容でなく形式に由来するのでしょうか。

「俳句らしいものと、俳句らしくないものとを区別する。その思想の上から、またその措辞の上から。／思想の上からは大概なものは採る。非常に憎悪すべきものは採らない。／措辞の上からは最も厳密に検討する」という虚子[2]の言葉は、「思想」よりも「措辞」の俳句らしさを重視しているように思えます。

もしも俳句が価値中立的な、純粋に形式的な「器」であるならば、俳句の内容と形式は互いに独立です。形式は、詠（うた）われた内容に対して中立的であって、形式自体が特定の内容を導き出すことはありえません。

しかしながら俳句は本当に価値中立的な形式（器）だと考えてよいのでしょうか。それとも俳句の形式が俳句の内容に何らかの影響を与えることがありうるのでしょうか。

そもそも俳句はなぜ俳句らしく見えるのでしょうか。

「医師の秋」「人の秋」のように五七五の言葉の塊の中に「秋」という季題[3]があれば俳句ら

問 虚子の言う「思想」「措辞」は、筆者の言葉では何に当たるか。

1 **有季定型**　一句の中に季語があり、五七五の十七音を定型とすること。

2 **虚子**　高浜虚子。三七四ページ参照。

3 **季題**　季語に同じ。

しく見えます。五七五の韻律と季題を備えた十七音の言葉の塊とは、俳句の形式要件（定義）そのものです。俳句がその形式ゆえに俳句らしく見えるという命題は、俳句の定義に当てはまるものが俳句だというトートロジー[4]に帰着します。このトートロジーから抜け出すためには、俳句の形式が内容にどのような影響を与えているかについての考察が必要です。

もしも俳句の形式が内容に影響を与えるとするならば、その影響力は、俳句の形式のどの要素に由来するのでしょうか。容易に想定される答えは「小ささ」と「季題」です。

俳句の「小ささ」は俳句の内容にどのような影響を与えるのでしょうか。

小ささは自由さをもたらす、と私は考えます。

俳句という器は小さく堅牢です。堅牢さの理由は、日本語に最もなじみの深い五音七音で構成されていること、「古池や」など古今の名句が人々に記憶されていること、季題が日本人の生活感覚に即していること、などです。時代の推移に伴う風化*はあるとしても、俳句形式は日本人の意識の中に根強く堅牢に存在しています。

時代の風雪に耐えてきた俳句という器は、高温高圧に耐える丈夫な試験管のようなものです。言葉の坩堝（るつぼ）*です。俳人は自由な発想によって、俳句という試験管に複数の言葉を放り込み、思わぬ化合物の誕生を期するのです。

4 トートロジー　三一四ページ注4参照。

* 措辞　風化　坩堝

春の月ありしところに梅雨の月　　高野素十[5]

この句は十七音の器に「春の月」と「梅雨の月」を放り込み、季節の推移による月の表情の変化と、そこから感じられる月日の厚みを表現しました。

てんと虫[6]一兵われの死なざりし　　安住敦[7]

終戦の感慨と、てんと虫との出会いが鮮やかです。

俳句が小さい器であればこそ、その中に投じられた言葉と言葉との関係は鮮烈にクローズアップ[8]されます。長大な形式の文芸では、春の月と梅雨の月の関係を、あるいはテントウムシと終戦を迎えた兵の出会いを、これほど鮮やかに切り出すことは不可能です。

俳句が頑丈な試験管、坩堝のようなものであるからこそ、その中に言葉を放り込み、そこに季題が据われば「何とかなる」のです。

目には青葉山ほととぎす初松魚(はつがつを)[9]　　素堂[10]

梅若菜[11]まりこ[12]の宿のとろろ汁[13]　　芭蕉(ばしょう)[14]

ばか、はしら、かき、はまぐりや春の雪　　久保田万太郎[16]

五七五の器に物の名前を放り込んだだけで俳句は成り立ちます。長い形式ではそうはいき

5 **高野素十**　一五四ページ参照。

6 **てんと虫**　「てんとう虫」の略。

7 **安住敦**　一九〇七年～一九八八年。東京都の生まれ。句集に『午前午後』など。

8 **クローズアップ**　close-up（英語）。物事を大きく浮かび上がらせること。

9 **ほととぎす**　時鳥。カッコウ科の鳥。夏の季語。

10 **素堂**　山口素堂。一六四二年～一七一六年。江戸中期の俳人。

11 **梅若菜**　梅の花と若菜。「若菜」は初春に生え出た食用の野草。ともに春の季語。

12 **まりこ**　丸子。静岡市駿河(するが)区の地名。東海道五十三次の一つでとろろ汁が名物。

13 **とろろ汁**　ヤマイモなどをすりおろして調味したもの。

14 **芭蕉**　松尾芭蕉。一六四四年～一六九四年。江戸前期の俳人。

15 **ばか、はしら、かき、はま**

ません。

俳句の「小ささ」は発想の自由さとともに、発想の単純さを招来します。「材料の複雑と単純、ということになると比較的単純なものを採る。俳句本来の性質として単純に叙して複雑な効果をもたらすものを尊重する」と虚子は言います。「単純に叙して複雑な効果をもたらす」と言いながらも、虚子の真意は「比較的単純なものを採る」というところにあったのではないでしょうか。

勇気こそ地[17]の塩なれや梅真白　中村草田男[18]

単純明快な「勇気」の賛美です。

神にませばまこと美はし那智[19]の滝　高浜虚子
滝の上に水現れて落ちにけり　後藤夜半[20]
滝落ちて群青世界とどろけり　水原秋桜子[21]

神なるがゆえに美しい滝。現れて落ちるだけの滝の水。「群青世界」という大胆な割り切り。これらの句は割り切って物を見、風景を単純化しています。「冬山の青岸渡寺[22]の庭にいでて風にかたむく那智の滝見ゆ」（佐藤佐太郎）のような、風景の表情にあやをつけた詠い方とは*

ぐり　食用となる貝の部位や種類の名称。

16 **久保田万太郎**　一八八九年～一九六三年。東京都の生まれ。句集に『道芝』、小説に『末枯』など。

17 **地の塩**　世の不正や腐敗を防ぐ健全な人を塩にたとえていう語。新約聖書による。

18 **中村草田男**　一九〇一年～一九八三年。中国福建省の廈門の生まれ。句集に『長子』『万緑』など。

19 **那智の滝**　和歌山県那智勝浦町の那智山にある滝。神の滝とされる。

20 **後藤夜半**　一五四ページ参照。

21 **水原秋桜子**　一八九二年～一九八一年。東京都の生まれ。句集に『葛飾』『霜林』など。

22 **青岸渡寺**　那智勝浦町にある天台宗の寺。

* 招来　あやをつける

対照的です。

俳句の形式は堅牢です。内容は単純です。それが俳句に「何でもあり」の自由さをもたらしています。

問 「何でもあり」の自由さ」とは、どういうことか。



岸本尚毅（きしもと なおき）　昭和三十六（一九六一）年～。俳人。岡山県の生まれ。赤尾兜子・波多野爽波・田中裕明に師事。二十代の頃から注目され、句集『舜』で俳人協会新人賞、評論集『俳句の力学』で俳人協会評論新人賞、『高浜虚子 俳句の力』で俳人協会評論賞を受賞。数々の俳句賞の審査委員を歴任する。句集に『鶏頭』『感謝』ほか、評論に前記のほか、『十七音の可能性』などがある。本文は『俳句の力学』（平成二十（二〇〇八）年刊）によった。

俳句十二句

1爛々と昼の星見え菌生え　　高浜虚子

鮟鱇の骨まで凍ててぶちきらる　　加藤楸邨

高浜虚子　一八七四年～一九五九年。愛媛県の生まれ。句集に『虚子句集』『五百句』など。

1 爛々と　光の輝く様子。

加藤楸邨　一九〇五年～一九九三年。東京都の生まれ。句集に『寒雷』『まぼろしの鹿』など。

雪降れり時間の束の降るごとく

やはらかき身を月光の中に容れ

ぼうたんの百のゆるるは湯のやうに

春の鳶寄りわかれては高みつつ

かもめ来よ天金[2]の書をひらくたび

石田波郷　一九一三年～一九六九年。愛媛県の生まれ。句集に『鶴の眼』『酒中花』など。

問「時間の束」とは、何か。

桂信子　一九一四年～二〇〇四年。大阪府の生まれ。句集に『女身』『樹影』など。

森澄雄　一九一九年～二〇一〇年。兵庫県の生まれ。句集に『鯉素』『四遠』など。

問「湯のやう」という比喩は、どのような様子を言うか。

飯田龍太　一九二〇年～二〇〇七年。山梨県の生まれ。句集に『百戸の谿』『忘音』など。

三橋敏雄　一九二〇年～二〇〇一年。東京都の生まれ。句集に『まぼろしの鱶』『定本三橋敏雄全句集』など。

2 天金　洋装本で上方の断面に金箔を貼ったもの。

恋ともちがふ紅葉の岸をともにして

船焼き捨てし
船長は
泳ぐかな

じゃんけんで負けて蛍に生まれたの

水の地球すこしはなれて春の月

みづうみのみなとのなつのみじかけれ

飯島晴子（いいじまはるこ）

飯島晴子　一九二一年～二〇〇〇年。京都府の生まれ。句集に『蕨手（わらびて）』『儚々（ぼうぼう）』など。

髙柳重信（たかやなぎじゅうしん）

髙柳重信　一九二三年～一九八三年。東京都の生まれ。句集に『蕗子（ふきこ）』『髙柳重信全句集』など。

問 **「船焼き捨てし」の句の改行や行開けには、どのような効果があるか。**

池田澄子（いけだすみこ）

5

池田澄子　一九三六年～。神奈川県生まれ。句集に『空の庭』『たましいの話』など。

正木ゆう子（まさきゆうこ）

正木ゆう子　一九五二年～。熊本県の生まれ。句集に『静かな水』『羽羽』など。

田中裕明（たなかひろあき）

田中裕明　一九五九年～二〇〇四年。大阪府の生まれ。句集に『花間一壺（かかんいっこ）』『先生から手紙』など。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 岸本尚毅『俳句の力学』において、筆者は俳句の形式が内容にどのような影響を与えていると考えているのか、まとめてみよう。

2 それぞれの句の持つリズムや、間の取り方を確認しながら朗読してみよう。

3 季語のある句について、その季節や季語の意味を調べてみよう。

4 それぞれの句を、風景を描写している句と、作者の心情を対象に託して表現している句とに分類することができるか、話し合ってみよう。

◇言葉と表現

1 破調の句を確認し、破調にすることで、どのような効果があるのか、考えてみよう。

2 「船焼き捨てし」の句の改行や行開けの工夫は、詩と同じか違うか、考えてみよう。

言語活動

1 好きな句を一つ選び、自分が読み取ったその句の情景を二〇〇～四〇〇字程度でまとめてみよう。

文学の窓

底荷

上田三四二（うえだみよじ）

短歌を日本語の底荷だと思っている。
そういうつもりで歌を作っている。
俳句も日本語の底荷だと思う。短歌、俳句――そういった伝統的な詩歌の現代において持つ意味は、この底荷としての意味をおいてほかにないと思っている。

「底荷」とは空載時の船舶の重心を低くするために船底に積み置かれる荷物を言い、普通、砂利が用いられる。

底荷は船舶の航行上の安全のために積み込まれる荷物で、運賃の上からは何の益もないものである。底荷の原語はバラスト[1]だが、運賃の期待できない「空（から）の荷物」というのがその語源のようである。もっとひどい語源説もある。“bale”はイギリスの古語では「災禍」を意味するのだという。“last”は“load”（荷）だから、文字どおり荷厄介。利潤を追求する商船にとって底荷

は「お荷物」以外の何ものでもない。

少しでも多く荷物を運んで利益を上げたい商船にとっては「お荷物」でも、船そのものの立場からは、底荷はなくてかなわぬものである。これあるがゆえに船舶は顚覆を免れているのである。

私は現代の短歌はこの底荷のようなものだと思い、そういう覚悟でいる。

底荷と対をなす言葉は、マスト[2]である。帆である。

短歌がマストであり帆であり得た時代が遠い昔にあったことを思わないではないが、また今も短歌をしてマストたらしめ帆たらしめようとする志の存在することを知らないわけではないが、それはそれとして、おしなべて短歌は底荷だとするのが私の覚悟である。

短歌は帆となって現代の日本語という言葉の船を押し進める力を持たない。けれども、短歌は現代の日本語というこの活気はあるがきわめて猥雑な船を、顚覆から救う目に見えない力となっているのではないか。

俳句を含めて、短歌、俳句の雑誌の数は全国で何百という単位ではきかないだろう。短歌、俳句の作者の数も何万という単位ではきかないはずである。

私は、短歌、俳句の言葉は日本語の中でも特に格調の正しい、磨かれた言葉であると思っている。的確に物を捉え、思いを述べるのに情操の限りを尽くし、正確に、真実に、核心を衝く言葉を選ぶのが短歌であり、俳句である。

そういう言葉の修練を積んだ人が、また積もうとして努力しそこに楽しみを見いだしている人が、何万という数を越えて存在しているのである。彼らは文学者を自称しない。商店主であり、運転手であり、教師であり、主婦であるそういう普通の生活者が、短歌、俳句において驚くべきすぐれた言葉の使い手なのである。

この底荷ある限り、私は軽薄の二字を染め抜いた帆を張る日本の言葉の船の航海について、悲観しない。

1 バラスト　ballast（英語）。「底荷」と同義。
2 マスト　mast（英語）。船の帆柱。

上田三四二　大正十二（一九二三）年～平成元（一九八九）年。歌人・小説家・文芸評論家・医師。兵庫県の生まれ。歌作や小説のほか、歌論から文芸評論まで幅広く活躍した。歌集に『黙契』などがある。初出『オアシス』昭和五十八（一九八三）年四月。本文は『短歌一生』（昭和六十二（一九八七）年刊）によった。

◇単元の言語活動 5

◆自分で選んだアンソロジーを作る
――短歌・俳句の表現の特徴や効果を考えよう――

「和歌」が「短歌」、「俳諧」が「俳句」と呼ばれるようになったのは明治時代で、すでに百数十年が経過している。その間、「短歌」も「俳句」も時代を象徴するような作品を作り上げるべく、さまざまな努力が重ねられてきた。

こうした中、定型短詩型の「短歌」「俳句」が、現代において存続できるかどうかを危ぶむ論議が起こったこともある。上田三四二『底荷』はそうした点を視野に入れて、創作者の立場からの意気込みを語ったものと言える。

しかし、実際は「短歌」も「俳句」も現代において確かな位置を保ち続けている。そこには、現代人の感性を表現するための新しい視点や表現方法の探究が不可欠であった。常に意欲的な改革に挑み続けてきた歌人・俳人がいるのはもちろん、作品に共感し、共に作品を支えてきた多くの読者がいることを認識しなければならないだろう。人々に親しまれている「短歌」「俳句」の中から、各自で選んだアンソロジーを作成してみよう。

課題 自分だけのアンソロジーを完成させてみよう。

1 短歌・俳句は、どのようなテーマで作られているのだろうか。各自で自由にテーマを立て、この教科書掲載の短歌・俳句の中から、そのテーマに沿った作品を、短歌・俳句合わせて五作品程度、抜き出してみよう。
（例）「季節」「青春」「恋」「植物」「日常生活」「旅」など。

2 1 で抜き出した作品について、表現上の工夫を指摘してみよう。また、特に共感できる作品について、その理由をまとめてみよう。

3 2 でまとめたものについて、五～六人のグループを作って話し合ってみよう。
① 各自で選んだ歌について発表し、意見を交換する。
② グループ内で出た意見を取り入れながら、テーマに沿って五作品以上のアンソロジー（作品集）を完成させてみよう。

6 近現代を問う

◇時代や社会との対話によって生まれてきた文学の歴史性を理解し、既存の価値観を相対化する視座を獲得する。
◇近代以降の世界が抱える諸問題について、文学の言葉を媒介にしながら思考し、自分自身の関心に接続する。

一瞬の共同性を生きる　星野智幸
苦海浄土――もう一ぺん人間に――　石牟礼道子
日本文化私観　坂口安吾
現代日本の開化　夏目漱石
単元の言語活動6

一瞬の共同性を生きる

星野智幸（ほしの ともゆき）

初出『新潮』平成二十九（二〇一七）年一月

物語を共有して、自分を偽らずにいられる居場所を獲得した。でも、その居場所が暴走を始めて、物語の解釈がどんどん変わって、厳しい資格審査を始めた。その結果、誰もが物語に合わせて自分を偽り、資格を証明するために排除に加担することを強いられる。そんな暴力を、どう食い止めたらいいのだろう。

所属意識がその人のアイデンティティ[1]に深く根を下ろし、共同体[2]の物語にその人個人の物語

1 **アイデンティティ**　三四二ページ注16参照。
2 **共同体**　目的を同一にする人々の結合体。

が乗っ取られてしまうと、人はその物語に依存するしかなくなる。もはや自分個人の物語ではないのに、その物語に疑問を挟む者を全く許せなくなる。

共同性[3]もアイデンティティも、物語を介して作られる。どちらも言語で作られたフィクション[4]なのだ。けれど、私たちはそのフィクションなしでは、生きられない。少なくとも、社会的な生活は送れなくなる。

私たちは言語で作られたフィクションによって心を形成すると同時に、そのフィクションに縛られながら生きている。だから、文学が存在する。

私の考えでは、文学とは、言葉にならないことを言葉だけで表現するメディア[5]である。また、使いすぎて定型化し空虚になった言語を更新し、新たな意味を発生させる、真剣な遊戯でもある。

先ほど述べた、苦しかったりつらかったりして意識化できない自分の感情や経験を、何とか言葉にして自分個人の物語とするのは、言葉にならないことを言葉だけで表現するという文学の役割だ。自分がようやく実感の持てる言葉で自分の何かを表現できたとき、それは全て文学である。自分個人の経験だけではない。そうして絞り出された他人の言葉を聞き、それを文字の物語に変えていくのも、文学だ。自分と他人の、言語化できない記憶や感情を言葉で物語化し、お互いにその物語を受け止め合ったとき、初めて共同性が生まれる。

けれど、それが語り続けられていくうちに形式化し、細部も耳当たりのよいように変容し、

問「依存するしかなくなる」のは、なぜか。

3 **共同性** ある目的のために、複数の人や団体が血縁・地縁や政治・経済・文化などによって結びついている関係性。

4 **フィクション** fiction（英語）。虚構。

5 **メディア** 手段。方法。媒体。

問「遊戯」と表現するのは、なぜか。

問「それは全て文学である」の内容は、一般的な文学のイメージとどう異なるか。

巷にあふれる既成の物語と似てくるとき、その物語は個人の物語であることをやめ、公の物語として排他性を発揮し始める。形式的に規則を強要して取り締まる警察みたいになっていく。

それを解体するのが、また文学である。個人の物語を作っておきながら、それが固定化しようとすると、自ら壊そうとする。物語が公のものとなって、権力を持ち始めるのを、阻止する。文学は物語に共同性を与える力でありながら、その共同性を批判する存在でもある。つまり文学とは、永続する共同性ではなく、一瞬の共同性だけを生きる言語なのだ。だから常に更新されうる言語で書かれている。読まれる瞬間ごとに、その現在を生きる言葉となる。

常に現在であるとは、常に新しいとも言える。過去の記憶が、今現在の、新しい記憶として体験される。だから、いつでも見慣れない光景が広がる。なぜならそれは、更新された、個人の、言葉にならない言葉で書かれているのだから。それを受容したとき、新しい共同性が一瞬、生まれるのだ。

そのために文学が必要としていることは、物語が個人の言葉でできているのか、公の言葉にすり替わっているのかに敏感であること。そして、現場でたくさん表されている、言葉にならない言葉を、虚心に聞くこと。まずは自分の中の言葉にならない言葉を聞き、それが言語化できたら、今度は他人の中の言葉にならない言葉を聞く。その言葉の交換が、共同性の喜びを可能にする。

私が思うに、日本の文学は、自分の声にならない声を聞くことには長けているが、他人の声

なき声を聞くことは苦手である。自分の声だけを聞いて個人の物語を作ることは、スタートにすぎない。他人のそれを聞いたとき、共同性は相互のものとして発動する。それを欠いていると、独善に陥っていく。自分の声の物語を聞いてもらえる場を、自分の所有する共同体と勘違いする。意識しないうちに、自分の物語を公のものに変え、世のより大きな公の物語の排他性に、加担してしまう。私はそれが、戦争を賛美する作家を大量に生み出した一つの原動力だと考えている。そして今は、同じメンタリティ[6]が日本の文学の多くの書き手たちを覆っているように感じる。

私が文学に政治を持ち込む必要があると思うのは、文学がさまざまな言葉にならない言葉をどこかで置き去りにして、自分たちの思い描く文学の永続する共同性の中に引きこもろうとしているからだ。それは結局、公の物語の暴力に、沈黙することで力を貸すことだ。言葉を批判するのは、文学の存在意義である。私は、文学を機能させ、集団の物語の暴力の邪魔となるために、現場に出て一瞬の共同性に身をさらし続けたい。

6 メンタリティ　mentality（英語）。心理状態。また、心的傾向。



星野智幸（ほしの ともゆき）　昭和四十（一九六五）年〜。小説家。ロサンゼルス生まれ。新聞記者を経てメキシコシティへ留学。現実的な政治の問題や、恋愛の枠に留まらない人間関係を幻想的な筆致で描く。サッカーや相撲などスポーツにも造詣があり、政治状況と重ね合わせた作品として『ファンタジスタ』などがある。他に「俺」の増殖を描いた『俺俺』や、語りが魅了する『夜は終わらない』など。本文は『新潮』（平成二十九（二〇一七）年一月）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 筆者が共同性やアイデンティティについて述べる「フィクション」（三八一・3〜4）とはどのようなものか。「現実」とどのような関係を持つかを後の部分から読み取りながら、まとめてみよう。

2 筆者が評価する共同性と評価しない共同性はどのようなものか、また、「公」とどのような関係にあるか、考えてみよう。

3 筆者が考える「文学」とはどのようなものか、本文を引用しながらまとめてみよう。

◇言葉と表現

1 次の身体に関連する慣用句を用いて、短文を作ってみよう。

(1)耳当たりのよい（三八一・17）

(2)身をさらす（三八三・12）

◇言語活動

1「物語」には、最低どのような条件が必要か、考えてみよう。逸話・スローガン・キャッチコピー・比喩的に〈神話〉と呼ばれる事柄などには、筆者の言う「物語」に当たるものはあるか、具体例を挙げながら考えてみよう。

苦海浄土——もう一ぺん人間に——

石牟礼道子（いしむれみちこ）

昭和三十四（一九五九）年五月、「わたくし」は初めて、水俣市立病院の特別病棟に、水俣病患者の坂上ゆき（一九五五年発病）と、看護者である夫の茂平を見舞った。その折、意識を喪失し、自分の肉体や魂の中に入り込む重症患者たちに一方的な出遭いをした。水俣育ちの「わたくし」は、昭和二十八（一九五三）年末に顕在化した水俣病事件に「悶々たる関心とちいさな使命感」を持ち、直視し、記録しなければならないという衝動に駆られ、全身痙攣でベッドを揺らすゆきの途切れ途切れの声に、耳を傾けた。

天草女[1]ごは情の深かとじゃけん。そういって茂平の網の親方が、ゆきを世話してくれてから発病するまで三年と暮らしていなかった。娘たちを嫁にやってしまうまで、律儀な彼はながいこと後をいれずにいたので、やっぱりむこうも後家[2]で子も連れとらんそうじゃ、気さくはよし、手はかなうとる、きりょうも漁師のかか女には上のほうじゃ、相手がおらにゃ舟も出ん、もらえ、と親方がいったのである。

そのゆきが、夕食をしまえて針を持ちながら、ときどき首をふって、しきりに目をこするようになった。ゆきの目は、松葉が飛ぶような沖のイリコ[3]の群れを集落の山の上から見通せる目なのである。それが、洗濯物を抱えて集落の湧き水のところに行って、帰りには水を吸うた洗濯物をぽとぽとと落としてくるようになった。落としてくることを自分では知らないのである。

だんだん口重くなって、考えこんでいるふうである。五月のタコ壺を揚げながら、ゆきはひとことずつ区切り区切りし

初出『サークル村』昭和三十五（一九六〇）年一月、『熊本風土記』昭和四十（一九六五）年十二月～昭和四十一（一九六六）年十二月

＊律儀

1 **天草**　現在の熊本県天草市周辺。水俣病が発生した水俣市からは八代海を隔て、対岸に位置する。

2 **後家**　夫に死別し、再婚しないで暮らしている女性。未亡人。

3 **イリコ**　煮干しにする小さなイワシ。

ながらいった。

「あんた、うちは、このごろ、なしてか、ちいっと、力の弱ったごたる。この壺も、一心に、あげよるばってん、なしてか、綱が手の先はずれて、ひじも、力がはいらん。婦人科の、悪かごつもなかが、どうしてやろか」

茂平は不安をこらえていった。

「働きすぎじゃろわい、ちったあ、ゆっくりせんけんじゃ」

あんた、とゆきは黙って、しばらくして、

「[4]ウインチば、買うたらどげんじゃろ。うちの腕は、だいぶん前から、かなわんようになっとるとじゃもん。あんたひとりで、巻き上げは体にムリじゃけん。うちが嫁入りにもってきた舟道具売れば、ウインチ買えるばい」

茂平の厚い胸は動悸をうち、二人とも黙ってしまった。ゆきが嫁に来た年とすればここ二、三年、漁がへったと集落中がいいだしていた。そう言えば茂平も自分の漁場を見捨てて、天草育ちのゆきの[5]櫓に導かれて場所を変えている。

集落の高台にある網の親方の家から、

「おーい、魚のたおるるぞうー」

というよび声も久しく聞かないのである。高台の石垣の上から湾の色をみていると、波のひかりの影に宿って、さざめくようにピッピッと飛び交う[6]タレソや鰯の大群がみえるのである。そのような魚の〝[7]たおれ〟て宿っている湾の色をみつけると、朝であろうと夕方であろうと、ほら貝とともに親方の声が、集落の前の湾にひびき渡る。

「おーい、魚のたおるるぞうー」

網子たちは男も女も家を出て呼びあいながら駈け出して、集落中が舟を出す。小魚の群れが波の表を染める時は、沖の深みに小魚を追ってきた[8]タチや、[9]サワラや、[10]コノシロの大群が潜行しているのである。年寄りも子どもも舟の持ち場につく。夕方から出かける時は網を入れたその舟たちが一せいに魚寄せのかがりを焚く。舟はぐるぐる網を狭めて回りながら魚たちを寄せる。櫓を漕ぐ者、[11]かぐらをまわす者、舵をとる者。灯と灯は呼びあい漁師たちの声はひとつになる。

えっしんよい、えっしんよい。

えっしんよい、えっしんよい。

調子は早くなり、暗い海の隅々をたぐり寄せるしぶきの中で、筋くれた皆の手が揃う。網の中の魚たちも応える。応える一匹一匹の尾や頭のはね工合まで、網の重みで漁師たちには分かるのである。なにしろ海はいつも生きていた。それがめっきり、魚のたおるるぞう、と村中でよびあう声をきかなくなっていた。

猫たちの妙な死に方がはじまっていた。集落中の猫たちが

死に絶えて、いくら町辺りからもらってきて、魚をやって養いをよくしても、あの踊りをやり出したら必ず死ぬ。

猫たちの死に引きつづいて、あの「ヨイヨイ」[12][13]に似た病人が、一軒おきくらいにひそかにできていた。中風ならば老人ばかりかかるはずなのに、病人は、ハッダ網[14]の上がりのときなど、刺身(さしみ)の一升皿[15]くらいペロリと平らげるのが自慢の若者であったり、八か月腹の止(とどむ)しゃんの若嫁御であったり学校前の幼児であったりした。止しゃんの嫁御とは、湧き水のところでゆきもよく洗濯が一緒になることがある。

おら、今度の妊娠には、足のほろうなって、片っ方に片っ方の足の引っかかって、ほんに恥ずかしかごと転んでばっかりおるとばい、[16]脚気(かっけ)やろか、ほら、洗濯物の手の先にマメらん（うまく扱えない）、とその嫁御はいうのである。えらいこんわれ（この人）も、ゆっくりものを言うようになったなあ



不知火海沿岸の水俣病患者発生状況（略図）

4 **ウインチ** winch（英語）。巻き揚げ機。 5 **櫓** 舟をこぐ用具。 6 **タレソ** カタクチイワシの幼魚のこと。 7 **たおれ** 魚が群れをなして海面に上がってくることにより、海の色が変わること。水俣の漁師用語。 8 **タチ** 太刀魚のこと。 9 **サワラ** サバ科の海魚。 10 **コノシロ** ニシン科の海魚。 11 **かぐら** 引き網を巻き付ける装置。 12 **ヨイヨイ** 手足が麻痺(まひ)して歩行が不自由となり、言葉がはっきりしなくなる病気の俗称。 13 **中風** 脳出血・脳梗塞などによる運動機能障害のこと。 14 **ハッダ網** 秋期、海上にいさり火をたきながら魚をとる漁法。 15 **一升皿** 「升」は容積の単位。一升は約一・八リットル。ここでは大きな皿のこと。 16 **脚気** ビタミンB1の欠乏による栄養失調症。

問 **「海はいつも生きていた」とは、どのようなことを表しているか。**

と思って、見ると、止しゃんの嫁御は前を、つくろいもせずに大儀そうにぼんやりとして、それが水に映って、目だけがかっとみひらいているのである。あの嫁御もヨイヨイ病じゃなかろか、このごろ、前もあっぽんぽんにして、仕様んなか嫁御じゃ、と、この前、ゆきは茂平に話したことがあったのである。

「うちも、ヨイヨイ病じゃ、なかろ、か」

そうゆきはいった。

味わったことのないような不安が茂平を押しつつみ、二人はどちらからともなく、一緒になってからはじめて舟の上で、長いことぼんやりしていた。

「ぬしが病気なら、ウインチより、医者どんが先じゃ」

と茂平はいい、ふたりはもつれながら錨を揚げ、櫓をとった。

村の病院では、別にどこも悪いところはなかごたるが、まあ栄養のちいっと足りんごたるけん、身につく物ば食べてみなっせ、ということだった。手足がなんとなくしびれて、よくつまずくのは皆の症状だったが、梅雨前の雨がきまぐれに寒いゆえかもしれないし、それに近ごろはアメリカからも支那からも放射能というものも降ってくるというから、用心したに越したことはない、と二人はいい合ったが、口のまわりの筋肉がなんだか鈍く張っていて、ゆきはものがいいにくく、唇に指を当ててみるが、指に唇が触れる感じも両方から鈍く心細くへだてられているのである。

茂平は一丁櫓にして沖へ出たが、舟を降りて陸へもどると、生簀の中から素性の良さそうな魚を選んできて、おっくうがるゆきに替わって土間に洗い桶をかかえ出して据え、まな板を乗せて踏んばり、びくびく動く魚のうろこを剝いだ。水甕の水も冷たくとり替えて刺身を取り、塩湯を沸かしてタコを茹で、塩湯の下のカマドの中にくべていて焼きあがったグチ魚の頭と尾を捧げるように両手に持って、薪のくすぼりを吹き吹き、土間をあがってくるのである。

「ぬしが魚じゃ、うんと食え」

と茂平はいう。ぶりぶり引きしまっているはずの刺身が妙に頼りない舌の遠くに逃げて、布ぎれのような味気ない口ざわりになるのを、ごくんごくんと呑みくだしながら、ゆきは嬉しそうな顔つきをしていた。

から藷の作りつけがすむころ、ときどきうねにしゃがみ込んで立ち上がれぬこめかみから、土用もこぬのに汗がとめどなく吹き出した。

足首をさすり、脛をさすり、腿をさすり、ふるえ出した両足をひきずって彼女は、灸をすえに通った。街の病院に行き出している者もあったが、彼女はまた病院で栄養失調などと

いわれては、爺ちゃんにすまないと思ったのである。それに●爺ちゃんの稼ぎは、自分が舟に乗れなくなってから、ほとんど金になっていない。

わずらいらしいことは、最初の嫁入りの冬、お多福風邪を病んだぐらいの達者な体であり、更年期[21]に近いので、神経痛か脚気の気が出はじめたかと思いたかった。針灸院には、青ぶくれした神経痛の両ひざを立ててかがんでいる婆さまや、乳腫れを抱えたうら若い母親などが肌脱ぎになって、互いの病患をさすり合っていた。

「冬のあいだは、灸も、ホンゴホンゴと体のぬくもってよかばってん、今年の夏はもうから、いつもより、えらい暑かりようの違うばい」

と婆さまたちはいい、ゆきの震えを見ながら、その灸焼き仲間たちは、

「●あんたも、月ノ浦のハイカラ病[22]になったかな」

と言った。刺身の一升ぐらいは朝晩にナメんと、漁師がたなかばい、と言っていた剛気な網の親方の益人やんが、朝舟からコノシロを入れた手網をかついで降りがけに、あれ、おる



水俣病患者の発生地域（1972年、当時の地図・データによる）

17 あっぽんぽん　開けっ放しのこと。　**18 支那**　七九ページ注21参照。　**19 グチ**　イシモチの俗称。スズキ目の海魚。　＊大儀そう　おっくう　**剛気**　**20 から藷**　サツマイモの別称。　**21 更年期**　女性の成熟期から老年期への移行期。身体・精神両面に更年期障害と言われる一連の症状が現れることが多い。　**22 月ノ浦のハイカラ病**　ヨイヨイ病と同様に水俣病の俗称。

問「うちも、…なかろ、か」という発言には、どのような意味があるか。

問「爺ちゃんの稼ぎは…金になっていない」のは、なぜか。

も、ちいっと左の腕のしびれたごたるよ、月ノ浦のハイカラ病にかかったかもしれんぞ、と冗談をいって笑った。土間に手網をおいて、息子の嫁女の話で出水[23]からやってきた客のために、酒盛りの魚ごしらえをして、その接待を、たしかに十二時すぎまでつとめていたが、いつもは朝の早い益人やんが朝飯に出てこぬので、女房が毛布をはたきあげてみると、もうかすかに目ばかりをとろんとさせて、いくらゆすって呼んでも、コケ[24]のように口をひくひくあけて、あう、あう、と声を出すばかりだったのである。

つづけて、嫁女をもらう*段取りになっていた息子と、女房が、すぐふたりとも動けなくなってしまったのである。益人やんの家族は三人とも〝学用患者〟というものになって熊大[25]に連れてゆかれた。益人やんは二十日あまり、声の出ぬ口をあけたままに病んで、言い置きもできずに死んだのである。中風になるには早い四十五歳であった。

猫のいなくなった集落の家々に鼠が増えた。

台所といっても大方が窓もない土間の隅に水甕がひっそり置かれ、水甕の陰に鱗のこびりついた洗い桶があり、茶碗を置く棚が申しわけに外につき出してあるくらいだし、鼠たちは遠慮なしに赤土でこねた[26]へっついの上に駆け上がり、鉄鍋の上を通り水甕の縁に飛び移り、吊るされた鈎の手に飛んで伝って、手籠の中に入ったりするのである。吊り下げられた手籠の中には、ゆでたじゃがいもの、食べのこしの薄皮などが入っていたりするのである。鼠たちはすぐそのような土間から石垣道にくぐり出る。おぼろな月明かりの道を横切り、石垣をくぐって舟へ飛んで、手ぐりの釣り糸やうず高く積まれてひさしく使わない網などを片っ端から噛んだ。ひたひたと打つ夜更けの波の間に、カリリ、カリリ、と石垣にそってつながれている舟のあちこちで、夜ごとに音がするのである。舟たちは曳き綱をながくのばして、鼠を逃れていた。

沖の糠餌には寄らない[27]ボラや[28]チヌの大魚が、ふらふらと朝の渚にたどりつく。水遊びしている小さな子どもたちは、キャッキャッと声を上げながら、波の間からそのような魚を抱えあげてくるのだった。ボラもチヌも、捉えられると、背びれや胸びれをいっぱいにぴいんと拡げたまま、かすかに、びち、びち、と震えていた。

国道三号線は熱いほこりをしずめて海岸線に沿ってのび、月ノ浦も茂道も湯堂も、集落の夏はひっそりしていた。子どもたちは、手応えのない魚獲りに飽きると渚を走り出す。岩陰や海ぞいにつづく湧き水のほとりで、小魚をとって食う水鳥たちが、口ばしを水に漬けたまま、ふく、ふく、と息をしていて飛び立つことができないでいた。子どもたちが拾い上

げると、だらりとやわらかい首をたれ、せつなげに目をあけたまま死んだ。鹿児島県出水郡米ノ津前田あたりから水俣湾の渚は、茂道、湯堂、月ノ浦、百間、明神、梅戸、丸島、大廻り、水俣川川口の八幡舟津、日当、大崎ガ鼻、湯の児の海岸へと、そのような鳥たちの死骸がおちており、砂の中の貝たちは日に日に口をあけて、日が照ると、渚はそれらの腐臭が一面に漂うのである。

　海は網を入れればねっとりと絡みついて重く、それは魚群を入れた重さではなかった。工場の排水口を中心に、沖の恋路島から袋湾、茂道湾、それから反対側の明神ガ崎にかけて、漁場の底には網を絡める厚い糊状の沈澱物があった。重い網をたぐれば、その沈澱物は海を濁して漂い上がり、いやな臭いを立てた。漁民たちはその臭いから追われるように魚の気の少ない網をふり濯いで帰ってくる。高台から見る海はよどみ、べっとりした暗緑色だった。見てみろ、海が海の色しとらんぞ、集落の者は寄り寄りそういって坂道に佇んだ。

　若者たちは眼を光らせて舟を乗りまわし、[29]ドベ臭くなった海の臭いを嗅いできて、あそこも臭かった、そこも臭うなっとるぞといいあった。

　土用が来て、村の針灸院にはもぐさの煙が立ちこめていて、煙の下に這う人々の中でハイカラ病が増えた。赤土の段々畑も、まばらな針葉樹の林道も、村全体が炒り上げられるようだった。坂道のところを茂平に背負われ、リヤカーに便乗させてもらってきたゆきは、背中から腕、足じゅうに火のともったもぐさを、びっしりつけたまま、急に、う、う、うう、と呻き声をあげて跳ねあがり、驚いた皆が押え切れぬような恐ろしい力で、開けはなされた針灸院の障子を突き外して暴れまわり、縁から転げて悶絶した。

　ゆきや、止しゃんの嫁御や、網元の末娘など十人くらいが、二岬ほど先の海のそばの街の伝染病院にかつぎこまれて間もなく、白い上衣を着た熊本の大学病院の先生方やら、市役所の人々が来て、一日がかりで村中の診察と調査が念入りに行

23 出水　鹿児島県北西部の市。　24 コケ　虚仮。思慮の浅いこと、愚かなこと。また、そのような人。　25 熊大　熊本大学のこと。　＊段取り

26 へっつい　かまど。食物の煮炊きに用いる。　27 ボラ　スズキ科の海魚。　28 チヌ　チヌダイのこと。クロダイの俗称。タイ科の海魚。

29 ドベ臭く　「ドベ臭い」は、ドブ臭い、泥臭いの意。

問「あんたも、…なったかな」（三八九ページ・上15）という発言には、どのような効果があるか。　問「舟たちは…鼠を逃れていた」とは、どういうことか。

われ、生活ぶりを、中でも食い物のことなどを聞かれ、軽い「よいよい」状の者たちは特に調べようがながかった。

●昭和四十年五月三十日

熊本大学医学部病理学武内忠男（たけうちただお）教授研究室。

米盛（よねもり）久雄のちいさな小脳の切断面は、オルゴールのようなガラス槽の中に、海の中の植物のように無心にひらいていた。薄いセピア色の珊瑚（さんご）の枝のような脳の断面に向き合っていると、重く動かぬ深海がひらけてくる。

ヨネモリ例ノノウショケンハヨクコレデセイメイガタモテルトオモワレルホド荒廃シテイテ、●ダイノウハンキュウハ――大脳半球ハアタカモハチノス状ナイシ網状ヲテイシ、ジッシツハ――実質ハホトンド吸収サレテイタ。小脳ハチョメイニ萎縮シ灰質ガキワメテ菲薄（ひはく）ニナッテイタ。シカシ脳幹、セキズイハヒカクテキヨクタモタレテイタ。

タダレイガイテキニ亜急性例経過ノヤマシタ例デミギガワレンズ核ガホトンド消失シテイタ。コノヨウニ本症ノケンキュウトトリ組ンダ初期ノボウケンレイ――剖検例[30]デレンズ核ノショウガイガツヨイ例ヲミタノデハジメマンガン中毒ヲユウリョスベキデアルトカンガエタガ、ソノゴノ剖検例デハカヨウナ症状ハ一例モナク、ゲンザイデハマンガン中毒ヲヒテイシテイル。

ビョウリガクタケウチキョウジュノコトバ

「ビョウリガクハ死カラシュッパツスルノデスヨ」

●病理学は死から出発するのですよ。

米盛久雄、昭和二十七年十月七日生、患者番号十八、発病昭和三十年七月十九日、死亡年月日、昭和三十四年七月二十四日、患家世帯主米盛盛蔵、家業大工、住所熊本県水俣市出月、水俣病認定昭和三十一年十二月一日。

水俣市役所衛生課水俣病患者死亡者名簿に記載された七歳の少年の生涯の履歴は、はかなく単純ですっきりしていて、それは水槽の中のセピア色の植物のような彼の小脳にふさわしかった。

この日私は武内教授にねがい、一人の女体の解剖にたちあった。

――大学病院の医学部はおとろしか。●

ふとかマナ板のあるとじゃもん、人間ば料[32]えるマナ板のあっとばい。

そういう漁婦坂上ゆきの声。

いかなる死といえども、ものいわぬ死者、あるいはその死体はすでに没個性的な資料である、とわたくしは想おうとしていた。死の瞬間から死者はオブジェに、自然に、土にかえるために、急速な営みをはじめているはずであった。病理学的解剖は、さらに死者にとって、その死が意志的に行うひときわ苛烈な解体である。その解体に立ち合うことは、わたくしにとって水俣病の死者たちとの対話を試みるための儀式であり、死者たちの通路に一歩立ち入ることにほかならないのである。

ちいさなみどり色の鉛筆とちいさな手帳を私は後ろ手ににぎりしめていた。肋骨の真上から「恥骨上縁」まで切り分けられて解剖台に置かれている女体は、そのあざやかな厚い切断面にゆたかな脂肪をたくわえていた。両脇に向き合って放心しているような乳房や、空へ向かって漂いのぼるようにあふれ出ている小腸は、無心さの極みをあらわしていた。肺臓は暗赤色をして重くたわたわととり出されるのである。彼女のすんなりとしている両肢は少し開き気味に、その番い目ははらりと白いガーゼでおおわれているのである。にぎるともなく指をかろく握って、彼女は底しれぬ放意を、その執刀医たちにゆだねていた。内臓を取り出してゆく腹腔の洞にいつの間にか沁み出すようにひっそりと血がたまり、白い上衣を着た執刀医のひとりはときどきそれを、とった手のついたちいさな白いコップでしずかにすくい出すのだった。

彼女の内臓は先生方によって入念に計量器にかけられたり、物さしを当てられたりしているようだった。医師たちのスリッパの音が、さらさらとセメントの解剖台の周りの床をするのが、聞こえていた。

「ほらね、今のが心臓です」

武内教授はわたくしの顔をじいっとそのような海の底にい

30 **レンズ核**　大脳核を構成する核の一つ。

31 **マンガン中毒**　水俣病は、当初、マンガンなどによる重金属中毒を疑われていた。

32 **料える**　「こしらえる」の俗な言い方。ここでは「料理する」の意。

問 **日付から始まるこの表現には、どのような効果があるか。**

問 **「ダイノウハンキュウハ」から「大脳半球ハ」への書き換えから、どのようなことが読み取れるか。**

問 **「病理学は…ですよ」とは、どのようなことか。**

問 **なぜ、「おとろ」しいのか。**

問 **「解体に立ち合う…ほかならない」とは、どういうことか。**

て見てそういわれた。青々とおおきく深い海がゆらめく。わたくしはまだ充分持ちこたえていたのである。

ゴムの手袋をしたひとりの先生が、片掌（かたて）に彼女の心臓を抱え、メスを入れるところだった。わたくしは一部始終をじっとみていた。彼女の心臓はその心室を切りひらかれたとき、つつましく最後の吐血をとげ、わたくしにどっと、なにかなつかしい悲傷のおもいがつきあげてきた。死とはなんと、かつて生きていた彼女の、全生活の量に対して、つつましい営為であることか。

——死ねばうちも解剖さすとよ。

漁婦坂上ゆきの声。

大学病院の医学部はおとろしか……。

人間ば料えるふとかマナイタのあるとじゃもん。

こげな奇病にかかりさえせんば、あげな都見物はせんでも済んだろて。せっかく熊本まで出て行って、えらい都見物ばしてしもうた。月ノ浦の海で魚ども獲っておらるれば、熊本はよか都じゃったばってん。

うちは解剖ば見てきたとじゃもん、くまもとの大学病院で。解剖ば一番はじめに見たときは——、まあ、えらいひどか怪我（けが）ばした人の寝とらすねえ——頭の皮もむけてしもうて、赤か腹わたやら青か腹わたを、ふわふわ出して、えらい痩せた人やが、かあいそうに、なんでこげんなったのじゃろか。ほんに、このようなひどか怪我人は、はじめて見た、と思うて、しんから見とった。

その日は病院も退屈してしもうて、どうせよその土地じゃ、ぼろ着て、こげなケイレン姿で踊っていようが、旅の恥はかき捨て、人が見て笑おうが、ただもう歩くぶんには迷惑かけぬし、と思うて歩くにも、こんなふうに、腰をうっちょいて、がっくんがっくん歩いて行きよった。大学病院は、ひろかとこばい。

ぶらあぶらあ、自分では歩きよるつもりで、かねて行きなれん方に歩いてゆきよった。草がぼうぼう生えとる中をずうっと通って、えらいぽつんと離れた原っぱにきてしもうたなあ、と思うて見ると、箱の置いてあるような建物のしんとして、草の中にあった。なんやらさびしか所やったばい。

建物にゃ窓のついとる。ここは何じゃろかいと思うて窓に目をひっつけて見よったら、人間ばマナイタの上に乗せて手術のありよる。腹わたばあっち直し、こっち直ししよらす。こらえらい手術やなあ、と、うちは、窓からしんから見とった。気がつくと、一緒にいたみっちゃんがおらん。あれ、さっきまで隣におったが。きょろきょろすると、みっちゃん

はずっと先のほうの、大きなくすの木の根元につかまって、おば、さん、おば、さん、ち、つかえたような声ば出しよった。

おばさん、さっきのは、解剖やったがな、とみっちゃんがいうて、げえげえするので、うちは何も知らんもんじゃけん、なごうまで見とったが、それからもう気持ちの悪うなって、めし食うても味はどうせいつもせんばってん、食えば吐くごたる気のして、その晩は何も食べんじゃった。解剖室のあるとこはほんにさびしかとこばい。このようになるまで痩せてしもうて、ぐらしか（かあいそう）なあとおもうとったら、まあ、あれが死んだ波止めの横の益人やんじゃったげな。同じ人間ちゃおもえんじゃったが。なんかえらい臭かったばい。臭うしてなあ、心の冷えびえして、生きとることと死んどることのけじめのところば、出たり入ったりしとる気色じゃった。腹わたの赤やら青やらが遠かとこにあって、なんやらなつかしかごたる妙な気持ちじゃった。今なら見きらん。

うちの頭は、おろ良か頭になってしもうて、平気でカイボウまで見れたとやろか。うちも解剖さすやろばってん、有機水銀の毒気の残るばっかりのおろ良か頭の替えられるなら、頭はスパッとちょんぎってもろて、こんどは生まれ替わって、よか頭で生まれてこうごたる。

ああおかしか。また想い出した。

うちゃな、大学病院の長あか廊下ば、紙でぎょうさん舟ば作ってもろうて、曳いてされきよったとばい。紙で伝馬舟ばたくさん作ってもろうて。うちがぐらしかちゅうて、看護婦さんの作ってくれよらした。それに糸つけてもろうて長うに引っぱって、舟には看護婦さんたちの、キャラメルじゃの、飴んちょじゃの、いっぱい積んでくれよらした。

うちゃその舟ば曳いて、大学病院の廊下ば、

えっしーんよい

えっしーんよい

ちゅうて網のかけ声ば唄うて曳いてされきよったとばい。自分の魂ばのせて。

人間な死ねばまた人間に生まれてくっとじゃろうか。うちゃやっぱり、ほかのもんに生まれ替わらず、人間に生まれ

33 **おろ良か頭**　「おろ良い」は、熊本などの方言で、悪いの意。

34 **伝馬舟**　木造の小型和船。本船と岸との間を往復して荷を運ぶ。はしけ。

問 **「まだ充分持ちこたえていた」とは、どういうことか。**

問 **「なんやら…気持ち」とは、どのような気持ちか。**

問 **この掛け声から、どのようなことが読み取れるか。**

替わってきたがよか。うちゃもう一ぺん、じいちゃんと舟で海にゆこうごたる。うちがワキ櫓ば漕いで、じいちゃんがトモ櫓ば漕いで二丁櫓で。漁師の嫁御になって天草から渡ってきたんじゃもん。

うちゃぼんのうの深かけんもう一ぺんきっと人間に生まれ替わってくる。

（「天の魚」に続く）

問 「ぼんのう」が深いとは、どのようなことか。



石牟礼道子（いしむれ みちこ） 昭和二（一九二七）年～平成三十（二〇一八）年。作家・思想家。熊本県の生まれ。歌人として出発したが、谷川雁（がん）の「サークル村」に参加して民衆の生活に密着した作品を発表、昭和四十四（一九六九）年、『苦海浄土　わが水俣病』第一部を上梓、公害による水俣の惨状を訴え、患者たちの魂に寄り添い続けた。平成十六（二〇〇四）年に三部作完結。作品に『西南役伝説』『完本 春の城』『はにかみの国』、新作能『不知火（しらぬい）』などがある。本文は『新装版 苦海浄土　わが水俣病』（平成十六（二〇〇四）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 方言や地名を多用することで、どのような効果が生まれるか、具体的な場面を取り上げながら考えてみよう。

2 解剖に立ち会った「わたくし」に、「なにかなつかしい悲傷のおもい」（三九四・上6～7）が込み上げてきたのはなぜか、ちりばめられた坂上ゆきの声を参考にしながら考えてみよう。

3 さまざまな語り手や語り口が混ざっていることで、どのような効果が生まれるか、作品の最後に「もう一ぺんきっと人間に生まれ替わってくる」（三九六・下2～3）というゆきの声を置く全体の構成を見ながら、考えてみよう。

◇言葉と表現

1 「びち、びち、」（三九〇・下15）「ふく、ふく、」（三九〇・下20）など、特徴的な擬態語や擬音語を挙げ、その効果について考えてみよう。

◇言語活動

1 水俣病についての当時の記事や文献を調べ、水俣病に関するさまざまな文章を集めたうえで、『苦海浄土』の独自性について、グループで話し合ってみよう。

日本文化私観

坂口安吾（さかぐちあんご）

初出『現代文学』昭和十七（一九四二）年三月

三年前に取手（とりで）[1]という町に住んでいた。利根川（とねがわ）に沿うた小さな町で、トンカツ屋とソバ屋のほかに食堂がなく、僕は毎日トンカツを食い、半年目にはついに全くうんざりしたが、僕は大概一か月に二回ずつ東京へ出て、酔っ払って帰る習慣であった。もっとも、町にも酒屋はある。しかし、オデン屋というようなものはなく、普通の酒屋で、框（かまち）[2]へ腰掛けてコップ酒を飲むのである。これを「トンパチ」と言い、「当八」の意だそうである。すなわち一升[3]がコップ八杯にしか当たらぬ。つまり、一合以上なみなみとあり、盛りがいいという意味なのである。村の百姓たちは「トンパチやんべいか」と言う。もちろん僕は愛用したが、一杯十五銭[4]だったり、十七銭だったり、日によってそのときの仕入れ値段でまちまちだったが、東京から来る友達は顔をしかめて飲んでいる。

この町から上野まで五十六分しかかからぬのだが、利根川[5]、江戸川[6]、荒川（あらかわ）[7]という三つの大きな川を越え、その一つの川岸に小菅（こすげ）刑務所[8]があった。汽車はこの大きな近代風の建築物を眺めて走るのである。非常に高いコンクリートの塀がそびえ、獄舎は堂々と翼を張って十字の形に広がり十字の中心交差点に大工場の煙突よりも高々とデコボコの見張りの塔が突っ立っている。

1 **取手**　現在の茨城県取手市。
2 **框**　床などの端に渡す横木。
3 **一升**　三八七ページ注15参照。
4 **十五銭**　「銭」は貨幣の単位。一銭は一円の百分の一。
5 **利根川**　三〇一ページ注7参照。
6 **江戸川**　東京都と千葉県の境を流れる川。
7 **荒川**　埼玉県と東京都を流れる川。
8 **小菅刑務所**　東京都葛飾（かつしか）区にあった刑務所。現在の東京拘置所。

もちろん、この大建築物には一か所の美的装飾というものもなく、どこから見ても刑務所然としており、刑務所以外の何物でもありえない構えなのだが、不思議に心を引かれる眺めである。

それは刑務所の観念と結び付き、その威圧的なもので僕の心に迫るのとは様子が違う。むしろ、懐かしいような気持ちである。つまりは、結局、どこかしら、その美しさで僕の心を引いているのだ。利根川の風景も、手賀沼[9]も、この刑務所ほど僕の心を引くことがなかった。いったい、ほんとに美しいのかしら、と、僕は時々考えた。

これに似た他の経験が、もう一つ、ハッキリ心に残っている。

もう、十数年の昔になる。その頃はまだ学生で、僕は酒も飲まないときだが、友人たちと初めて同人雑誌[10]を出し、酒を飲まないから、勢い、そぞろ歩きをしながら五時間六時間と議論を続けることになる。そのため、足の向くままに、実に諸方の道を歩いた。深夜になり、深夜でなくともしきりと警官に尋問されたが、左翼[11]運動の盛んな時代で、徹底的に小うるさく尋問された。大体、深夜に数人で歩きながら、酒も飲んでいないというのが、かえって怪しまれる種であった。そういう次第で心を改め大酒飲みになったわけでもないのだが。

銀座[12]から築地[13]へ歩き、渡し船に乗り、佃島[14]へ渡ることが、よく、あった。この渡し船は終夜運転だから、帰れなくなる心配はない。佃島は一間[15]ぐらいの暗くて細い道の両側に「佃茂」だの「佃一」だのという家が並び、佃煮屋かもしれないが、漁村の感じで、渡し船を降りると、突然遠い旅に来たような気持ちになる。とても川向こうが銀座だとは思われぬ。こんな旅の感

9 **手賀沼**　千葉県北西部にある利根川水系の湖沼。

10 **同人雑誌**　同好の人たちが資金を出し合い、制作する雑誌。営利目的ではないものが多い。

11 **左翼運動**　社会の革新を求める、反体制的な政治運動。ここでは社会主義運動を指す。

12 **銀座**　東京都中央区の地名。

13 **築地**　東京都中央区の地名。銀座に隣接する。

14 **佃島**　東京都中央区の地名。隅田川河口に造られた人工島。佃煮の発祥地。

15 **一間**　七九ページ注31参照。

じが好きでもあったが、一つには、[16]聖路加病院の近所にドライアイスの工場があって、そこに雑誌の同人が勤めていたため、この方面へ足の向く機会が多かったのである。

さて、ドライアイスの工場だが、これが奇妙に僕の心を引くのであった。

工場地帯では変哲もない建物であるかもしれぬ。[17]起重機だのレールのようなものがあり、右も左もコンクリートで頭上のはるか高い所にも、倉庫から続いてくる高架レールのようなものが飛び出し、ここにも一切の美的考慮というものがなく、ただ必要に応じた設備だけで一つの建築が成り立っている。町家の中でこれを見ると、*魁偉であり、異観であったが、しかし、ずぬけて美しいことが分かるのだった。

聖路加病院の堂々たる大建築。それに比べればあまり小さく、貧困な構えであったが、それにもかかわらず、この工場の*緊密な質量感に比べれば、聖路加病院は子供たちの細工のようなたわいもない物であった。この工場は僕の胸に食い入り、はるか*郷愁に続いていくおおらかな美しさがあった。

小菅刑務所とドライアイスの工場。この二つの関連について、僕はふと思うことがあったけれども、そのどちらにも、僕の郷愁を揺り動かすたくましい美感があるという以外には、強いて考えてみたことがなかった。[18]法隆寺だの[19]平等院の美しさとは全然違う。しかも、法隆寺だの平等院は、古代とか歴史というものを念頭に入れ、一応、何か納得しなければならぬような美しさである。直接心に突き当たり、はらわたに食い込んでくるものではない。どこかしら物足

16 **聖路加病院**　東京都中央区にある病院。現在は聖路加国際病院。

17 **起重機**　重いものを動力でつり上げて移動させる機械。クレーン。

問 **聖路加病院を「子供たちの細工のようなたわいもない物」だと感じたのは、なぜか。**

18 **法隆寺**　奈良県生駒郡斑鳩町にある仏教寺院。現存する世界最古の木造建築。

19 **平等院**　京都府宇治市にある寺院。

＊ 魁偉　緊密　郷愁

りなさを補わなければ、納得することができないのである。小菅刑務所とドライアイスの工場は、もっと直接突き当たり、補う何物もなく、僕の心をすぐ郷愁へ導いていく力があった。なぜだろう、ということを、僕は考えずにいたのである。

ある春先、半島[20]の先端の港町へ旅行に出かけた。その小さな入江の中に、わが帝国の無敵駆逐艦[21]が休んでいた。それは小さな、何か謙虚な感じをさせる軍艦であったけれども一見したばかりで、その美しさは僕の魂を揺り動かした。僕は浜辺に休み、水に浮かぶ黒い謙虚な鉄塊を飽かず眺め続け、そうして、小菅刑務所とドライアイスの工場と軍艦と、この三つのものを一つにして、その美しさの正体を思い出していたのであった。

この三つのものが、なぜ、かくも美しいか。ここには、美しくするために加工した美しさが、一切ない。美というものの立場から付け加えた一本の柱も鋼鉄もなく、美しくないという理由によって取り去った一本の柱も鋼鉄もない。ただ、必要なもののみが、必要な場所に置かれた。そうして、不要なる物は全て除かれ、必要のみが要求する独自の形が出来上がっているのである。それは、それ自身に似るほかには、他の何物にも似ていない形である。必要によって柱は遠慮なくゆがめられ、鋼鉄はデコボコに張り巡らされ、レールは突然頭上から飛び出してくる。全ては、ただ、必要ということだ。そのほかのどのような旧来の観念も、この必要のやむべからざる生成を阻む力とは成りえなかった。そうして、ここに、何物にも似ない三つのものが出来上がったのである。

20 半島の先端の港町　神奈川県三浦半島にある横須賀市を指す。当時、海軍の軍港があった。

21 駆逐艦　砲・魚雷などを主要兵器とする小型の快速艦。

僕の仕事である文学が、全く、それと同じことだ。美しく見せるための一行があってもならぬ。美は、特に美を意識して成されたところからは生まれてこない。どうしても書かねばならぬこと、書く必要のあること、ただ、そのやむべからざる必要にのみ応じて、書き尽くされなければならぬ。ただ「必要」であり、一も二も百も、終始一貫ただ「必要」のみ。そうして、この「やむべからざる実質」が求めたところの独自の形態が、美を生むのだ。実質からの要求を外れ、美的とか詩的という立場に立って一本の柱を立てても、それは、もう、たわいもない細工物になってしまう。これが、散文の精神であり、小説の真骨頂である。そうして、同時に、あらゆる芸術の大道なのだ。

問題は、汝（なんじ）の書こうとしたことが、真に必要なことであるか、ということだ。汝の生命と引き換えにしても、それを表現せずにはやみがたいところの汝自らの宝石であるか、どうか、ということだ。そうして、それが、その要求に応じて、汝の独自なる手により、不要なる物を取



執筆中の作者（林忠彦（ただひこ）撮影）

問 「全く、それと同じことだ」とあるが、何が同じなのか。

22 **オウエンス** James Cleveland Owens　一九一三年～一九八〇年。アメリカの陸上競技選手。ベルリンオリンピック（一九三六年）金メダリスト。

23 **投擲**　投擲競技の略。砲丸投げ・ハンマー投げ・槍投（やりな）げ・円盤投げの総称。

り去り、真に適切に表現されているかどうか、ということだ。

百メートルを疾走するオウエンス[22]の美しさと二流選手の動きには、必要に応じた完全なる動きの美しさと、応じ切れないギゴチなさの相違がある。僕が中学生の頃、百メートルの選手といえば、痩せて、軽くて、足が長くて、スマートの身体でなければならぬと決まっていた。太った重い男は専ら投擲[23]のほうへ回され、フィールドの片隅で砲丸を担いだりハンマーを振り回していたのである。日本へも来たことのあるパドック[24]だのシムプソン[25]の頃までは、そうだった。メトカルフ[26]だのトーラン[27]が現れた頃から、短距離には重い身体の加速度が最後の条件であると訂正され、スマートな身体は中距離のほうへ回されるようになったのである。いつか、羽田飛行場へ出かけて、ぶんどり品のイ―十六型戦闘機[28]を見たが、飛行場の左端に姿を現したかと思ううちに右端へ飛び去り、あきれ果てた速力であった。日本の戦闘機は格闘性に重点を置き、速力を二の次にするから、速さの点では比較にならない。イ―十六は胴体が短く、ずんぐり太っていて、ドッシリした重量感があり、近代式の百メートル選手の体格の条件に全くよく当てはまっているのである。スマートなところはみじんもなく、あくまで不格好に出来上がっているが、その重量の加速度によって風を切る速力的な美しさは、スマートな旅客機などの比較にならぬものがあった。

見たところのスマートだけでは、真に美なる物とはなりえない。全ては、実質の問題だ。美しさのための美しさは素直でなく、結局、本当の物ではないのである。要するに、空虚なのだ。

*

24 **パドック** Charles William Paddock　一九〇〇年～一九四三年。アメリカの陸上競技選手。アントワープオリンピック（一九二〇年）金メダリスト。

25 **シムプソン** George Sidney Simpson　一九〇八年～一九六一年。アメリカの陸上競技選手。ロサンゼルスオリンピック（一九三二年）銀メダリスト。

26 **メトカルフ** Ralph Harold Metcalfe　一九一〇年～一九七八年。アメリカの陸上競技選手。ロサンゼルス・ベルリンオリンピック銀メダリスト。

27 **トーラン** Thomas Edward Tolan　一九〇八年～一九六七年。アメリカの陸上競技選手。ロサンゼルスオリンピック金メダリスト。

28 **イ―十六型戦闘機**　第

そうして、空虚なものは、その真実のものによって人を打つことは決してなく、詮ずるところ、あってもなくても構わない代物である。法隆寺も平等院も焼けてしまって一向に困らぬ。必要ならば、法隆寺を取り壊して停車場を作るがいい、わが民族の光輝ある文化や伝統は、そのことによって決して滅びはしないのである。[29]武蔵野の静かな落日はなくなったが、累々たるバラック[30]の屋根に夕日が落ち、ほこりのために晴れた日も曇り、月夜の景観に代わってネオン・サイン[31]が光っている。ここにわれわれの実際の生活が魂を下ろしている限り、これが美しくなくて、何であろうか。見たまえ、空には飛行機が飛び、海には鋼鉄が走り、高架線を電車がごうごうと駆けて行く。われわれの生活が健康である限り、西洋風の安直なバラックを模倣して得々としても、われわれの文化は健康だ。われわれの伝統も健康だ。必要ならば公園をひっくり返して菜園にせよ。それが真に必要ならば、必ずそこにも真の美が生まれる。そこに真実の生活があるからだ。

そうして、真に生活する限り、猿まねを恥じることはないのである。それが真実の生活である限り、猿まねにも、独創と同一の優越があるのである。



ベルリンオリンピックのオウエンス

二次世界大戦の初期にかけて、旧ソビエト連邦の主力となった戦闘機。

問 **「法隆寺も平等院も焼けてしまって一向に困らぬ」とあるが、なぜか。**

29 武蔵野 東京都中西部から埼玉県南部に渡る地域。かつては雑木林が広がる風景で知られた。

30 バラック 二二一ページ注35参照。

31 ネオン・サイン neon sign（英語）。ネオン放電管を用いた広告灯。

＊
疾走　詮ずる　光輝
累々たる　得々



坂口安吾（さかぐち あんご）　明治三十九（一九〇六）年～昭和三十（一九五五）年。小説家。新潟県の生まれ。敗戦直後に評論『堕落論』や小説『白痴』を発表し、当時の人々に大きな衝撃を与え、織田作之助（おださくのすけ）や太宰治（だざいおさむ）・石川淳（いしかわじゅん）らとともに「無頼派」と呼ばれた。作品に『風博士』『桜の森の満開の下』『不連続殺人事件』などがある。本文は『坂口安吾全集　第三巻』（平成十一年（一九九九）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 小菅刑務所とドライアイスの工場に「私」が心惹（ひ）かれるのはなぜか、考えてみよう。

2 美しさという観点から考えて、軍艦と法隆寺や平等院との間にはどのような違いがあるか、考えてみよう。

3 「芸術の大道」（四〇一・14）とはどのようなものか、説明してみよう。

4 「猿まねにも、独創と同一の優越がある」（四〇三・17）とはどういうことか、説明してみよう。

◇言葉と表現

1 「怪しまれる種」（三九八・12）とあるが、ここで「種」はどのような意味で用いられているかを考え、同じ用法で「種」を用いている語を探してみよう。

◇言語活動

1 この作品が発表された当時の時代背景について、書籍やインターネット等を用いて調べ、まとめてみよう。

2 発表された時代背景を踏まえ、筆者の考える「美」についてどう思うか、自分の意見を四〇〇字程度でまとめてみよう。

現代日本の開化

夏目漱石（なつめそうせき）

現代の日本の開化は一般の開化とどこが違うかというのが問題です。もし一言にしてこの問題を決しようとするならば私はこう断じたい、西洋の開化（すなわち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である。ここに内発的というのは内から自然に出て発展するという意味でちょうど花が開くようにおのずから蕾（つぼみ）が破れて花弁が外に向かうのを言い、また外発的とは外からおっかぶさった他の力でやむをえず一種の形式を取るのを指したつもりなのです。もう一口説明しますと、西洋の開化は行雲流水のごとく自然に働いているが、[1]御維新（ごいっしん）後、外国と交渉を付けた以後の日本の開化は大分勝手が違います。

もちろんどこの国だって隣づきあいがある以上はその影響を受けるのがもちろんのことだから、わが日本といえども昔からそう超然としてただ自分だけの活力で発展したわけではない。あるときは[2]三韓（さんかん）、またあるときは支[3]那というふうに、大分外国の文化にかぶれた時代もあるでしょうが、長い月日を前後ぶっ通しに計算して大体の上から一瞥（いちべつ）してみると、まあ比較的内発的の開化で進んできたと言えましょう。少なくとも鎖[4]港排外の空気で二百年も麻酔したあげく、突然西洋文化の刺激に跳ね上がったくらい強烈な影響は有史以来まだ受けていなかったと言うのが適当でしょう。

日本の開化はあのときから急激に曲折し始めたのであります

＊行雲流水　一瞥

初出　明治四十四（一九一一）年八月、和歌山での講演。『朝日講演集』明治四十四（一九一一）年十一月。

1 **御維新**　明治維新のこと。江戸幕府の倒壊から明治新政府成立（一八六八年）に至る一連の統一国家形成への政治改革過程を言う。

2 **三韓**　古代の朝鮮半島における新羅（しらぎ）・百済（くだら）・高句麗（こうくり）の三国の総称。

3 **支那**　七九ページ注21参照。

4 **鎖港排外**　江戸幕府の鎖国政策（一六三九年〜一八五四年）を指す。

問 **「あのとき」とは、何を指すか。**

す。また、曲折しなければならないほどの衝動を受けたのであります。これを前の言葉で表現しますと、今まで内発的に展開してきたのが、急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押されて否応なしにその言うとおりにしなければ立ち行かないという有様になったのであります。それが一時ではない。四、五十年前に一押し押されたなりじっと持ちこたえているなんて楽な刺激ではない。時々に押され刻々に押されて今日に至ったばかりでなく向後何年の間か、またはおそらく永久に今日のごとく押されていかなければ日本が日本として存在できないのだから外発的と言うよりほかに仕方がない。その理由は無論明白な話で、前詳しく申し上げた開化の定義に立ち戻って述べるならば、われわれが四、五十年前初めてぶつかった、また今でも接触を避けるわけにいかないかの西洋の開化というものはわれわれよりも数十倍労力節約の機関を有する開化で、またわれわれよりも数十倍娯楽・道楽の方面に積極的に活力を使用しうる方法を具備した開化である。

粗末な説明ではあるが、つまりわれわれが内発的に展開して十の複雑の程度に開化をこぎつけた折も折、はからざる天の一方から急に二十、三十の複雑の程度に進んだ開化が現れて俄然としてわれらに打ってかかったのである。この圧迫によって吾人はやむをえず不自然な発展を余儀なくされるのであるから、今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのでなくって、やっと気合いをかけてはぴょいぴょいと飛んでいくのである。開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る余裕を持たないから、できるだけ大きな針でぼつぼつ縫って過ぎるのである。足の地面に触れる所は十尺を通過するうちにわずか一尺くらいなもので、他の九尺は通らないのと一般である。私の外発的という意味はこれでほぼ御了解になったろうと思います。

そういう外発的の開化が、心理的にどんな影響を吾人に与うるかと言うとちょっと変なものになります。心理学の講筵でもないのに難しいことを申し上げるのもいかがと存じますが、必要の箇所だけをごく簡易に述べて再び本題に戻るつもりでありますから、しばらく御辛抱を願います。

われわれの心は絶え間なく動いている。あなた方は今私の講演を聴いておいでになる、私は今あなた方を前に置いて何か言っている、双方ともにこういう自覚がある。それにお互いの心は動いている。働いている。これを意識と言うのであります。この意識の一部分、時に積もれば一分間ぐらいのところを、絶え間なく動いている大きな意識から切り取って調べてみると、やはり動いている。その動き方は別に私が発明

したわけでも何でもない、ただ西洋の学者が書物に書いたとおりをもっともと思うから紹介するだけでありますが、全て一分間の意識にせよ、三十秒間の意識にせよ、その内容が明瞭（めいりょう）に心に映ずる点から言えば、のべつ同程度の強さを有して時間の経過に*頓着（とんじゃく）なくあたかも一つ所にこびり付いたように固定したものではない。必ず動く。動くにつれて明らかな点と暗い点ができる。その高低を線で示せば、平たい直線では無理なので、やはり幾分か勾配の付いた弧線、すなわち弓形の曲線で示さなければならなくなる。今言った弧線とか曲線とかいうことを[8]もそっと砕いてお話をすると、物をちょっと見るにも、見てこれが何であるかということがはっきり分かるにはある時間を要するので、すなわち意識が下のほうから一定の時間を経て頂点へ上ってきてはっきりして、ああこれだなと思うときが来る。それをなお見つめていると今度は視覚が鈍くなって多少ぼんやりし始めるのだから、いったん上のほうへ向いた意識の方向がまた下を向いて暗くなりかける。

本を読むにしてもAという言葉とBという言葉とそれからCという言葉が順々に並んでいればこの三つの言葉を順々に理解していくのが当たり前だから、Aが明らかに頭に映るときはBはまだ意識に上らない。Bが意識の舞台に上り始めるときにはもうAのほうは薄ぼんやりしてだんだん[9]識域（しきいき）のほうに近づいてくる。BからCへ移るときはこれと同じ所作を繰り返すにすぎないのだから、いくら例を長くしても同じことであります。これはきわめて短時間の意識を学者が解剖してわれわれに示したものでありますが、この解剖は個人の一分間の意識のみならず、一般社会の集合意識にも、それからまた一日一月もしくは一年ないし十年の間の意識にも応用のきく解剖で、その特色は多人数になったって、長時間にわたったって、一向変わりはないことと私は信じているのであります。

たとえてみればあなた方という多人数の団体が今ここで私の講演を聴いておいでになる。聴いていない方もあるかもしれないが、まあ聴いているとする。そうするとその個人でな

5 向後　この後。今後。　6 十尺　七一ページ注6参照。　7 講筵　講義をする場所。二七一ページ注24参照。　＊ 否応なし　具備　俄然　頓着
8 もそっと　もう少し。　9 識域　心理学の用語で、通常は、識閾（しきいき）と表記。意識と無意識の境界。意識作用が起こり、また消える境目。

問「自己本位の能力」とは、どのようなものか。

い集合体のあなた方の意識の上には、今私の講演の内容が明らかに入る。と同時に、この講演に来る前あなた方が経験されたこと、すなわち途中で雨が降り出して着物がぬれたとか、また蒸し暑くて途中が難儀であったとかいう意識は講演のほうが心を奪うにつれて、だんだん不明瞭不確実になってくる。またこの講演が終わって場外に出て涼しい風に吹かれでもすれば、ああいい心持ちだという意識に心を占領されてしまって講演のほうはぴったり忘れてしまう。私から言えば全くありがたくない話だが事実だからやむをえないのである。私の講演を行住坐臥ともに覚えていらっしゃいと言っても、心理作用に反した注文なら、誰も承知する者はありません。

　これと同じようにあなた方というやはり一個の団体の意識の内容を検してみると、たとい一か月にわたろうが一年にわたろうが一か月には一か月をくくるべき炳乎たる意識があり、また一年には一年をまとめるに足る意識があって、それからそれへと順次に消長しているものと私は断定するのであります。われわれも過去を顧みてみると、中学時代とか大学時代とか皆特別の名の付く時代でその時代時代の意識がまとまっております。日本人総体の集合意識は、過去四、五年前には日露戦争の意識だけになりきっておりました。その後日英同盟の意識で占領された時代もあります。かく推論の結果心理学者の解剖を拡張して集合の意識やまた長時間の意識の上に応用して考えてみますと、人間活力の発展の経路たる開化というものの動くラインもまた波動を描いて弧線を幾つも幾つもつなぎ合わせて進んでいくと言わなければなりません。無論描かれる波の数は無限無数で、その一波一波の長短も高低も千差万別でありましょうが、やはり甲の波が乙の波を呼び出し、乙の波がまた丙の波を誘い出して順次に推移しなければならない。一言にして言えば、開化の推移はどうしても内発的でなければうそだと申し上げたいのであります。

　ちょっとした話が、私は今ここで演説をしている。するとそれをお聞きになるあなた方のほうから言えば、初めの十分間くらいは私が何を主眼に言うかよく分からない、二十分目くらいになってようやく筋道が付いて、三十分目くらいにはようやく油がのって少しはちょっとおもしろくなり、四十分目にはまたぼんやりしだし、五十分目には退屈を催し、一時間目にはあくびが出る。とそう私の想像どおりいくかいかないか分かりませんが、もしそうだとするならば、私が無理にここで二時間も三時間もしゃべっては、あなた方の心理作用に反して我を張ると同じことで決して成功はできない。なぜかと言えばこの講演が、その場合あなた方の自然に逆らった外発的のものになるからであります。いくらのどを絞り、声

をからしてどなってみたってあなた方はもう私の講演の要求の度を経過したのだからいけません。あなた方は講演よりも茶菓子が食いたくなったり、酒が飲みたくなったり、氷水が欲しくなったりする。そのほうが内発的なのだから、自然の推移で無理のないところなのである。

　これだけ説明しておいて現代日本の開化に後戻りをしたら、たいてい大丈夫でしょう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すように、内発的に進んでいるかというのが当面の問題なのですが、残念ながらそういっていないので困るのです。いっていないというのは、先程も申したとおり、活力節約、活力消耗の二大方面において、ちょうど複雑の程度二十を有しておったところへ、俄然外部の圧迫で三十代まで飛び付かなければならなくなったのですから、あたかも天狗にさらわれた男のように無我夢中で飛び付いていくのです。その経路はほとんど自覚していないくらいのものです。もともと開化が甲の波から乙の波へ移るのは、既に甲は飽いていたたまれないから内部欲求の必要上ずるりと新しい一波を開展[13]するので、甲の波の好所も悪所も酸いも甘いもなめ尽くした上にようやく一生面[14]を開いたと言ってよろしい。したがって従来経験し尽くした甲の波には、衣を脱いだ蛇と同様未練もなければ残り惜しい心持ちもしない。のみならず、新たに移った乙の波にもまれながら、*毫も借り着をして世間体を繕っているという感が起こらない。

　ところが日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流でその波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せるたびに自分がその中で食客をして気兼ねをしているような気持ちになる。新しい波はとにかく、今しがたようやくの思いで*脱却した古い波の特質やら真相やらもわきまえる暇のないうちに、もう捨てなければならなくなってしまった。食膳に向かって皿の数を味わい尽くすどころか、元来どんな

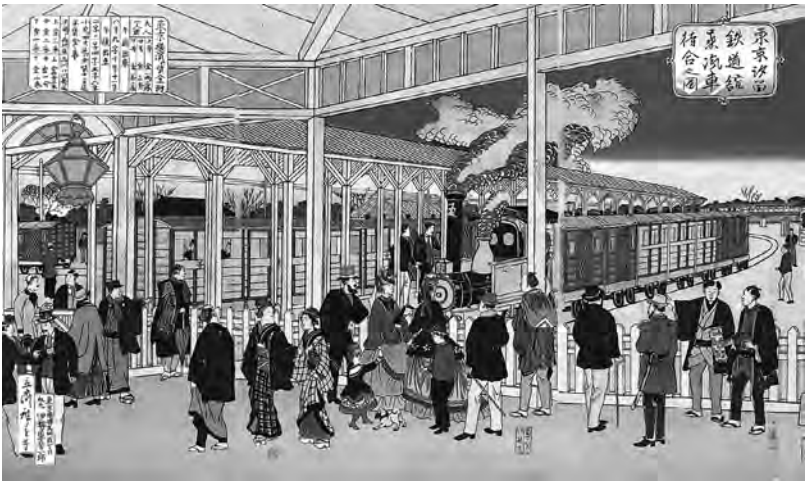
10 **炳乎**　きわめてはっきりとして、明らかな様。
11 **日露戦争**　満州（現在の中国東北部）・朝鮮の制覇を争って、日本と帝政ロシアとの間で行われた戦争（一九〇四年～一九〇五年）。
12 **日英同盟**　帝政ロシアの牽制を目的として、日本と英国の間で結ばれた攻守同盟条約（一九〇二年～一九二一年）。
13 **開展**　「展開」に同じ。
14 **一生面**　新しい境地。
問「甲の波が乙の波を呼び出し、……順次に推移しなければならない。」とは、どういうことか。

＊行住坐臥　消長　我を張る　毫も　脱却

御馳走が出たかハッキリと目に映じない前にもう膳を引いて新しいのを並べられたと同じことであります。

こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を抱かなければなりません。それをあたかもこの開化が内発的でででもあるかのごとき顔をして得意でいる人のあるのはよろしくない。それはよほどハイカラです、よろしくない。虚偽でもある。軽薄でもある。自分はまだ煙草を吸ってもろくに味さえ分からない子供のくせに、煙草を吸ってさもうまそうな風をしたら生意気でしょう。それをあえてしなければ立ちいかない日本人はずいぶん悲惨な国民と言わなければならない。

開化の名は下ろせないかもしれないが、西洋人と日本人の社交を見てもちょっと気がつくでしょう。西洋人と交際をする以上、日本本位ではどうしてもうまくいきません。交際しなくともよいと言えばそれまでであるが、情けないかな交際しなければいられないのが日本の現状でありましょう。而して強いものと交際すれば、どうしても己を捨てて先方の習慣に従わなければならなくなる。われわれがあの人はフォークの持ちようも知らないとか、ナイフの持ちようも心得ないとか何とか言って、他を批評して得意なのは、つまりは何でもない、ただ西洋人がわれわれより強いからである。われわれ



文明開化図

のほうが強ければあっちにこっちのまねをさせて主客の位地を変えるのは容易のことである。がそういかないからこっちで先方のまねをする。しかも自然天然に発展してきた風俗を急に変えるわけにはいかぬから、ただ機械的に西洋の礼式などを覚えるよりほかに仕方がない。自然と内に発酵して醸された礼式でないから取ってつけたようで甚だ見苦しい。これは開化じゃない、開化の一端とも言えないほどの*些細なことであるが、そういう些細なことに至るまで、我々のやっていることは内発的でない、外発的である。

これをひと言にして言えば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であるということに帰着するのである。むろん一から十まで何から何までとは言わない。複雑な問題に対してそう過激の言葉は慎まなければ悪いが、われわれの開化の一部分、あるいは大部分はいくらうぬぼれてみても上滑りと評するより致し方がない。しかしそれが悪いからおよしなさいと言うのではない。事実やむをえない、涙をのんで上滑りに滑っていかなければならないと言うのです。

それでは子供が背に負われて大人といっしょに歩くようなまねをやめて、地道に発展の順序を尽くして進むことはどうしてもできまいかという相談が出るかもしれない。そういう御相談が出れば私はないこともないとお答えをする。が西洋で百年かかってようやく今日に発展した開化を日本人が十年に年期をつづめて、しかも空虚の*そしりを免れるように、誰が見ても内発的であると認めるような推移をやろうとすればこれまたゆゆしき結果に陥るのであります。百年の経験を十年で上滑りも*せずやり遂げようとするならば、年限が十分の一に縮まるだけわが活力は十倍に増さなければならんのは、算術の初歩を心得た者さえたやすく首肯するところである。

これは学問を例にお話をするのが一番早分かりである。西洋の新しい説などを生かじりにしてほらを吹くのは論外として、本当に自分が研究を積んで甲の説から乙の説に移り、また乙から丙に進んで、毫も流行を追うの*16陋態なく、また殊更に新奇をてらうの虚栄心なく、全く自然の順序階級を内発的

15 **ハイカラ**　八一ページ注34参照。　16 **陋態**　見苦しい様。醜態。

問 **「こういう開化」とは、どのようなことを指しているか。**

問 **「皮相上滑りの開化」とは、何か。**

＊ 些細　そしり　ゆゆしき　ほらを吹く

に経て、しかも彼ら西洋人が百年もかかってようやく到着した分化の極端に、われわれが維新後四、五十年の教育の力で達したと仮定する。体力・脳力ともにわれらよりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費やしたものを、いかに先駆の困難を勘定に入れないにしたところで僅かその半ばに足らぬ歳月で明々地[17]に通過し終わるとしたならば、吾人はこの驚くべき知識の収穫を誇りうると同時に、一[18]敗また起つ能わざるの神経衰弱にかかって、気息奄々[19]として今や路傍に呻吟[20]しつつあるは必然の結果としてまさに起こるべき現象でありましょう。現に少し落ち着いて考えてみると、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱にかかりがちじゃないでしょうか。ピンピンしているのは、皆うその学者だと申しては語弊があるが、まあどっちかと言えば神経衰弱にかかるほうが当たり前のように思われます。学者を例に引いたのは単に分かりやすいためで、理屈は開化のどの方面へも応用ができるつもりです。

　すでに開化というものがいかに進歩しても、案外その開化の賜としてわれわれの受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらいらしなければならない心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変わりはなさそうであることは、前お話したとおりである上に、今言った現代日本が置かれたる特殊の状況によってわれわれの開化が機械的に変化を余儀なくされるためにただ上皮を滑っていき、また滑るまいと思ってふんばるために神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか哀れと言わんか、まことに言語道断の窮状に陥ったものであります。私の結論はそれだけにすぎない。ああなさいとか、こうしなければならぬとか言うのではない。どうすることもできない、実に困ったと嘆息するだけできわめて悲観的の結論であります。こんな結論にはかえって到着しないほうが幸いであったのでしょう。真というものは、知らないうちは知りたいけれども、知ってからはかえってああ知らないほうがよかったと思うことが時々あります。日本の現代開化の真相も、分からないうちこそ研究もしてみたいが、こう露骨にその性質が分かってみるとかえって分からない昔のほうが幸福であるという気にもなります。

　とにかく私の解剖したことが本当のところだとすればわれわれは日本の将来というものについてどうしても悲観したくなるのであります。外国人に対しておれの国には富士山[21]があるというようなばかは今日はあまり言わないようだが、戦争以後一等国になったんだという高慢な声は随所に聞くようである。なかなか気楽な見方をすればできるものだと思います。ではどうしてこの急場を切り抜けるかと質問されても、前申

したとおり私には名案も何もない。ただできるだけ神経衰弱にかからない程度において、内発的に変化していくがよかろうというような、体裁*のよいことを言うよりほかに仕方がない。苦い真実を臆面なく諸君の前にさらけ出して、幸福な諸君にたとい一時間たりとも不快の念を与えたのは重々おわび

を申し上げますが、また私の述べ来ったところもまた相当の論拠と応分の思索の結果から出たきまじめの意見であるという点にも御同情になって悪いところは大目に見ていただきたいのであります。

17 **明々地**　はっきりと、疑う余地のない形で。「地」は漢語で意味のない助字。

18 **一敗また起つ能わざる**　再び立ち上がれないほどに、徹底的に打ち負かされる。一敗地に塗れる。

19 **気息奄々**　息も絶え絶えで、今にも死にそうな様。

20 **呻吟**　苦しみうめくこと。

21 **戦争**　前出（四〇八・上20）の日露戦争を指す。

問 **「理屈」とは、どういうことか。**

問 **「言語道断の窮状」とは、どういうことか。**

＊語弊　体裁



夏目漱石（なつめ そうせき）　一二一ページ参照。『現代日本の開化』は、明治四十四（一九一一）年八月に和歌山で行われた講演の筆記録で、大正二（一九一三）年の『社会と自分』に収録された。その他の講演に『道楽と職業』『文芸と道徳』『私の個人主義』などがある。本文は『漱石全集 第十一巻』（昭和四十一（一九六六）年刊）によった。

◆◆◆深い学びのために◆◆◆

◇学習のポイント

1 「内発的」（四〇五・上3～4）「外発的」（四〇五・上4）とはそれぞれどういうことか整理し、筆者が「現代の日本の開化」（四〇五・上1）をどのように捉えているか、まとめてみよう。

2 「開化の推移はどうしても内発的でなければうそだ」（四〇八・下8～9）とあるが、それはどのような「推論」（四〇八・上21）によって説明されているか、まとめてみよう。

3 筆者が「きわめて悲観的の結論」（四一二・下8）に至ったのはなぜか、説明してみよう。

4 本文は講演の内容を記録したものであるが、聞き手を引き付けるためにどのような工夫をしているか、話し合ってみよう。

◇言葉と表現

1 次の表現はそれぞれどのようなことを述べているか、説明してみよう。

(1)「地道にのそりのそりと歩くのでなくって、やっと気合いをかけてはぴょいぴょいと飛んでいく」（四〇六・下1～3）

(2)「天狗にさらわれた男のように無我夢中で飛び付いていく」（四〇九・上15～16）

(3)「食客をして気兼ねをしているような気持ち」（四〇九・下12～13）

(4)「子供が背に負われて大人といっしょに歩くようなまね」（四一一・下2～3）

◇言語活動

1 この文章は明治四十四（一九一一）年に行われた講演をもとにしているが、筆者が展望した「日本の将来」（四一二・下16）は、その後どのようになったのか、具体例を挙げて説明してみよう。

2 現在を生きる私たちにとって、この講演がどのような意味を持つか、話し合ってみよう。

◇単元の言語活動 6

◆近現代の諸問題と対話する
――私たちはどこに立ち、どこに向かっているのか――

この単元では、現代社会への問題提起から始まり、近代日本の成立期への根本的な疑問をぶつける夏目漱石の講演まで遡った。私たちが生きる世界は、単線的には発展せず、無数の可能性が〈いま・ここ〉でせめぎ合う渦中にある。価値転倒を潜ませた言葉を自分なりに受け止め、自身の未来について深く考える機会を持った。

課題 人間は常にさまざまな問題と戦ってきた。ある時はよりよく生きるために、ある時は世界をよりよくするために。自分自身の大切な未来を想像し、文学や関連する文章に触れ、深めてきた思考を主体的に応用してみよう。

1 これまでの学習を踏まえて、「文学とは〇〇である」というオリジナルの格言を作ってみよう。

2 この単元で取り上げた四本の文章の中から、最も興味を持ったものを一つ選び、その理由について、お互いに伝え合ってみよう。

3 2 で選んだ文章が扱っていた問題について、自分の関心に従い、テーマを広げたり深めたりしてみよう。納得がいくまで文献や資料などを調べ、まとめ、比較し、考察すること。

4 3 で考察した具体例を用いて、自分自身の視点から近現代を問う二〇〇〇字の小論文を書いてみよう。ただし、必ず、あなたをそのテーマに導いたこの単元の文章を効果的に引用し、論理の展開に活用すること。

日本近・現代文学史年表

（重要作品・事項は太字にした。＊印は時期に幅があるもの）

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
近代	明治	一八七〇		西国立志編―一八七一（中村正直訳）		
	三	一八七一		安愚楽鍋―一八七二（仮名垣魯文）		
	四	一八七二		学問のすすめ―一八七六（福沢諭吉）	一八七二　学制発布	
	五	一八七三		八十日間世界一周―一八八〇（川島忠之助訳）	一八七七　西南戦争	
	一〇	一八七七		高橋阿伝夜刃譚（魯文）		
	一一	一八七八		民約訳解（中江兆民訳）	自由民権運動高まる＊	
	一二	一八七九		経国美談―一八八四（矢野竜渓）	政治小説の隆盛＊	
	一五	一八八二	新体詩抄（外山正一ほか）	怪談牡丹灯籠（三遊亭円朝）		
	一六	一八八三		当世書生気質―一八八六・小説神髄―一八八六（坪内逍遥）	**文学革新と言文一致運動高まる＊**	
	一七	一八八四		雪中梅（末広鉄腸）		
	一八	一八八五	寒山落木―一八九六（正岡子規）	**浮雲**―一八八八（二葉亭四迷）　武蔵野（美妙）		
	一九	一八八六	新体詞選（山田美妙編）	あひびき（四迷訳）　藪の鶯（三宅花圃）		
	二〇	一八八七		細君（逍遥）　婦女の鑑（木村曙）　二人比丘尼色懺悔（尾崎紅葉）　風流仏（幸田露伴）		
	二一	一八八八				
	二二	一八八九	於母影（森鷗外ほか訳）	**舞姫**　うたかたの記（鷗外）　小公子―一八九三（若松賤子訳）	一八八九　帝国憲法発布	
	二三	一八九〇		五重塔―一八九二（露伴）	しがらみ草紙創刊	
	二四	一八九一	蓬萊曲（北村透谷）	即興詩人―一九〇一（鷗外訳）	一八九〇　第一回帝国議会召集	
	二五	一八九二		内部生命論・漫罵（透谷）　最暗黒の東京（松原岩五郎）	一八九一　早稲田文学創刊	
	二六	一八九三			一八九三　文学界創刊	一八九三　にんじん（ルナール）

| | | |

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
近代 明治時代	四一	一九〇八	有明集（有明）　海の声（若山牧水）	村（真山青果）　あめりか物語（荷風）　文鳥・三四郎（漱石）　新世帯（徳田秋声）　何処へ（正宗白鳥）	一九〇八　アララギ創刊	
	四二	一九〇九	邪宗門（北原白秋）　廃園（三木露風）	それから（漱石）　田舎教師（花袋）　煤煙（森田草平）　すみだ川（荷風）	一九〇九　スバル創刊	一九〇九　狭き門（ジイド）
	四三	一九一〇	別離（牧水）　一握の砂（啄木）　NAKIWARAI（土岐哀果）　酒ほがひ（吉井勇）	家―一九一二（藤村）　網走まで（志賀直哉）　土（長塚節）　刺青（谷崎潤一郎）　時代閉塞の現状（啄木）　遠野物語（柳田国男）	一九一〇　大逆事件　白樺・三田文学創刊され反自然主義の動き強まる	一九一〇　マルテの手記（リルケ）
	四四	一九一一	思ひ出（白秋）	**或る女**―一九一九（有島武郎）　修禅寺物語（岡本綺堂）	一九一一　青鞜創刊	一九一一　辛亥革命起こる
	大正元	一九一二	**悲しき玩具**（啄木）	善の研究（西田幾多郎）　哀しき父（葛西善蔵）　大津順吉（直哉）	一九一二　乃木希典殉死	一九一二　清滅び中華民国成立
	二	一九一三	桐の花（白秋）　珊瑚集（荷風訳）　赤光（斎藤茂吉）	阿部一族（鷗外）　木乃伊の口紅（田村俊子）　銀の匙―一九一五（中勘助）　大菩薩峠―一九四一（中里介山）	一九一三　島村抱月芸術座創立	一九一三　息子と恋人（ロレンス）　失われた時をもとめて―一九三七（プルースト）
	三	一九一四	銀（木下利玄）　鍼の如く（節）　**道程**（高村光太郎）	桑の実（鈴木三重吉）　疑惑（近松秋江）	一九一四　第一次世界大戦始まる	
	四	一九一五	切火（島木赤彦）　聖三稜玻璃（山村暮鳥）	**こころ**（漱石）　三太郎の日記（阿部次郎）　日和下駄―一九一五（荷風）		一九一五　変身（カフカ）
	五	一九一六	碧梧桐句集（河東碧梧桐）　林泉集（中村憲吉）	入江のほとり（白鳥）　最後の一句（鷗外）　あらくれ（秋声）　**羅生門**（芥川龍之介）　その妹（武者小路実篤）　私の個人主義（漱石）		
				高瀬舟・渋江抽斎（鷗外）　鼻（龍之介）　明暗（漱石）　時は過ぎゆく（花袋）　出家とその弟子―一九一七（倉田百三）		

| 近代 | | |

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
近代 大正時代	一五	一九二六	訳）死刑宣言（萩原恭次郎）		一九二六　円本時代始まる	
近代 昭和時代（戦前・戦中）	昭和二	一九二七	海の聖母（吉田一穂）鬼城句集（村上鬼城）大空（尾崎放哉） 富永太郎詩集	伊豆の踊子（川端康成）セメント樽の中の手紙・海に生くる人々（葉山嘉樹）退屈読本（春夫） 河童（龍之介）無限抱擁（滝井孝作）赤穂浪士（一九二八（大仏次郎）	一九二七　芥川龍之介自殺	
	三	一九二八	第百階級（草野心平）	キャラメル工場から（佐多稲子）真知子（一九三〇（弥生子）放浪記（一九三〇（林芙美子）詩の原理（朔太郎）	一九二八　赤旗・戦旗創刊	
	四	一九二九	軍艦茉莉（安西冬衛）青い夜道（田中冬二）	夜明け前（一九三五（藤村）蟹工船（小林多喜二）太陽のない街（徳永直）様々なる意匠（小林秀雄）		
	五	一九三〇	葛飾（水原秋桜子）測量船（三好達治）往還集（土屋文明）	機械（利一）聖家族（堀辰雄）主知的文学論（阿部知二）「いき」の構造（九鬼周造）		
	六	一九三一		吉野葛・盲目物語（潤一郎）ゼーロン（牧野信一）風博士（坂口安吾）	一九三一　満州事変	
	七	一九三二	凍港（山口誓子）山廬集（飯田蛇笏）帆・ランプ・鵙（丸山薫）	鮎（丹羽文雄）日本三文オペラ（武田麟太郎）ごん狐（新美南吉）上海（利一）	一九三二　五・一五事件	
	八	一九三三	Ambarvalia（西脇順三郎）	人生劇場青春編（尾崎士郎）若い人（一九三七（石坂洋次郎）春琴抄・陰翳礼讃（一九三四（潤一郎）暢	一九三三　文学界創刊 小林多喜二検挙・虐殺	一九三三　人間の条件（マルロー）

| 近代 | | |

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
現代	一九	一九四四	花筐（達治）	津軽（治）　魯迅（竹内好）		
	二〇	一九四五		お伽草紙（治）	一九四五　終戦	ン・テグジュペリ）
	二一	一九四六	砂の砦（達治）　群鶏（宮柊二）　つゆじも（茂吉）	暗い絵（野間宏）　白痴（安吾）　桜島（梅崎春生）　死霊Ⅰ一九五五（埴谷雄高）　焼跡のイエス（淳）　なよたけ（加藤道夫）	一九四六　日本国憲法公布 当用漢字表・現代かなづかい告示	
	二二	一九四七	旅人かへらず（順三郎）	夏の花（原民喜）　斜陽（治）　深夜の酒宴（椎名麟三）　青い山脈（洋次郎）　ビルマの竪琴一九四八（竹山道雄）	近代文学創刊	
	二三	一九四八	落下傘（光晴）　定本蛙（心平）	虫のいろいろ（一雄）　人間失格（治）　俘虜記・野火一九五二（大岡昇平）　風土一九六八（福永武彦）	一九四七　六・三制教育実施 荒地創刊	
	二四	一九四九	白き山（茂吉）	仮面の告白（三島由紀夫）　山の音一九五四（康成）	一九四八　新制高校発足	
	二五	一九五〇	惜命（波郷）	猟銃（井上靖）　夕鶴（木下順二） 絵本（田宮虎彦）　鳴海仙吉（伊藤整）　赤い繭（安部公房）　風俗小説論（中村光夫）	一九四九　湯川秀樹ノーベル賞受賞	
	二六	一九五一	原爆詩集（峠三吉）	**壁ーS・カルマ氏の犯罪**（公房）　炎の人（三好十郎）	一九五〇　朝鮮戦争始まる	
	二七	一九五二	二十億光年の孤独（谷川俊太郎）　帰潮（佐藤佐太郎）	風媒花（武田泰淳）　真空地帯（宏）　或る「小倉日記」伝（松本清張）　鶴（長谷川四郎）　日本文壇史十一九六九（整）　美神（由紀夫）　二十四の瞳（壺井栄）	一九五一　民間放送開始 サンフランシスコ講和条約調印	一九五二　老人と海（ヘミングウェイ）
	二八	一九五三	小野十三郎詩集	火の鳥（整）　不幸なる芸術（国男）　主題と変奏（吉田秀和）	一九五三　テレビ放送開始	
	三元	一九五四	樹（中村稔）　ひとりの女	黒い裾（幸田文）　ひかりごけ（泰淳）　草の花（武		一九五四　悲しみよこんにち

時代					
昭和（戦後）					
昭和三〇	一九五五		に（黒田三郎）百戸の谿（飯田龍太）		は（サガン）雪どけ｜一九五（エレンブルグ）
三一	一九五六		対話（茨木のり子）鮎川信夫詩集　山脈（秋谷豊）		
三二	一九五七		記憶と現在（大岡信）斉唱（岡井隆）	一九五六　日本、国連に加盟	一九五七　アレクサンドリア・カルテット｜一九六〇（ダレル）
三三	一九五八		海彦（橋本多佳子）		ソ連人工衛星打ち上げ成功
三四	一九五九		亡羊記（四郎）氷った焔（清岡卓行）		一九六二　イワン・デニソビッチの一日（ソルジェニーツィン）
三五	一九六〇		ゴリラ（山本太郎）谷川雁詩集	一九六〇　日米安保条約改定	ベトナム戦争激化＊
三六	一九六一		朝の河（天沢退二郎）金子兜太句集		一九六三　調書（ル・クレジオ）
三七	一九六二		言葉のない世界（田村隆一）		
三八	一九六三		橋上の人（信夫）		
三九	一九六四		死の淵より（順）	一九六四　第十八回オリンピック東京大会	

現代					
昭和					
昭和三九	一九六四		彦）むらぎも（重治）驟雨（吉行淳之介）潮騒（由紀夫）		
四〇	一九六五		雲の墓標（阿川弘之）太陽の季節（石原慎太郎）		
四一	一九六六		金閣寺（由紀夫）楢山節考（深沢七郎）雑種文化（加藤周一）夏目漱石（江藤淳）	一九六六　日本、国連に加盟	
四二	一九六七		梨の花｜一九六（重治）女坂（円地文子）天平の甍（靖）死者の奢り（大江健三郎）裸の王様（開高健）二葉亭四迷伝｜一九六（光夫）		
四三	一九六八		北国（靖）空には本（寺山修司）僧侶（吉岡実）		
四四	一九六九		楼蘭（靖）かげろふの日記遺文（犀星）芸術と実生活（平野謙）物語戦後文学史｜一九六三（本多秋五）		
四五	一九七〇		海辺の光景（安岡章太郎）マリアの首・千鳥（田中千禾夫）	一九七〇　日本万国博覧会	
四六	一九七一		死の棘｜一九七六（島尾敏雄）静物（庄野潤三）忍ぶ川（三浦哲郎）神聖喜劇｜一九八〇（大西巨人）		
四七	一九七二		雁の寺（水上勉）パリ燃ゆ｜一九七三（次郎）日本の思想（丸山真男）	一九七二　日中国交正常化	
四八	一九七三		楡家の人びと｜一九七四（北杜夫）秀吉と利休｜一九七三（弥生子）砂の女（公房）		
四九	一九七四		地の群れ（井上光晴）		
五〇	一九七五		無常（唐木順三）されどわれらが日々｜（柴田翔）考へるヒント（秀雄）往還の記（竹西寛子）氷点｜一九六五（三浦綾子）		

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
現代	昭和四〇	一九六五	音楽（那珂太郎）	黒い雨（一九六六（鱒二））		
	四一	一九六六	鵜原抄（稔）	幻化（春生） 邪宗門（一九六六（高橋和巳））		一九六六　中国文化大革命始まる
	四二	一九六七	緑の思想（隆一）	沈黙（遠藤周作） 笹まくら（丸谷才一） 夏の砦（辻邦生）		一九六七　百年の孤独（ガルシア・マルケス）
	四三	一九六八	含紅集（吉野秀雄）	万延元年のフットボール（健三郎） レイテ戦記（一九六九（昇平）） 火垂るの墓（野坂昭如） 芸術論集（周一）		
	四四	一九六九	春禱（生方たつゑ） 表札など（石垣りん）	海市（武彦） 輝ける闇（健） 坂の上の雲（司馬遼太郎） 三匹の蟹（大庭みな子）	一九六八　川端康成ノーベル賞受賞	
	四五	一九七〇	異邦者（近藤芳美） 花眼（森澄雄）	暗室（淳之介） 富士（一九七二（泰淳）） 赤頭巾ちゃん気をつけて（庄司薫）		
	四六	一九七一	酒中花以後（波郷）	杳子（古井由吉） 砂漠の思想（公房） 青春の門（一九八〇（五木寛之））	一九七〇　大阪万国博覧会	
	四七	一九七二	感傷旅行（吉野弘）	狂風記（一九八〇（淳）） 砧をうつ女（李恢成） 劇的なる日本人（山崎正和） 源実朝（吉本隆明） 紀貫之（信）		
	四八	一九七三	オンディーヌ（吉原幸子） 藤棚の下の小室（柊二） 青き菊の主題（塚本邦雄）	恍惚の人（有吉佐和子） 翔ぶが如く（一九七六（遼太郎）） サンダカン八番娼館（山崎朋子） 洪水はわが魂に及び（健三郎） 日本沈没（小松左京） 或る聖書（小川国夫）	一九七三　沖縄県復帰 日中国交回復 一九七三　石油危機による社会混乱	
	四九	一九七四	ゴヤのファースト・ネーム は（飯島耕一）	花筐（中里恒子） 雨の音（宇野千代） 兎の眼（灰谷健次郎）		
	五〇	一九七五	固い芽（卓行）	時に佇つ（稲子） 火宅の人（檀一雄）		一九七五　ベトナム戦争終結

| 現代 | | |

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
現代	二	一九九〇				化強まる
	三	一九九一	河野裕子歌集			一九九一　湾岸戦争　ソ連邦解体・ロシア共和国成立
	四	一九九二				
	五	一九九三				
	六	一九九四	夕陽に赤い帆（清水哲男）			
	七	一九九五				
	八	一九九六		一）		
	九	一九九七	辻征夫詩集成	志賀直哉（秋五）　夢使い（島田雅彦）		
平成	一〇	一九九八		イギリスはおいしい（林望）		
	一一	一九九九	倚りかからず（のり子）	時間と自我（大森荘蔵）		
	一二	二〇〇〇		マシアス・ギリの失脚（池澤夏樹）		二〇〇〇　初の南北朝鮮首脳会談
	一三	二〇〇一	ことばのつえ、ことばのつえ（藤井貞和）	志賀直哉（弘之）		二〇〇一　ハンセン病訴訟で国が敗訴
	一四	二〇〇二		西行花伝（邦生）		
	一五	二〇〇三		荷風と東京（川本三郎）　季節の記憶（保坂和志）		二〇〇二　日韓共催でサッカーワールドカップ開催
				信長（秋山駿）		
				うるわしき日々（小島信夫）　敗戦後論（加藤典洋）　おぱらばん（堀江敏幸）		二〇〇三　日本郵政公社発足
				火の山―山猿記（佑子）　日蝕（平野啓一郎）		
				マロニエの花が言った（卓行）		
				羽根と翼（黒井千次）　鏡川（章太郎）		
				場所（瀬戸内寂聴）　センセイの鞄（川上弘美）		二〇〇三　イラク戦争
				桜桃とキリストーもう一つの太宰治伝（長部日出雄）　本格小説（水村美苗）　海辺のカフカ（春樹）　8月の果て―二〇〇四（柳美里）		
				博士の愛した数式（小川洋子）　号泣する準備はできていた（江國香織）　蹴りたい背中（綿矢りさ）　蛇にピアス（金原ひとみ）　エクソフォ		

現代					
平成					
二六	二〇一四				ニー（多和田葉子）バカの壁（養老孟司）
二七	二〇一五				父の肖像（辻井喬）泥人魚（唐十郎）私の昭和史（稔）
二八	二〇一六				半島を出よ（龍）告白（町田康）沖で待つ（絲山秋子）
二九	二〇一七				虹の鳥（目取真俊）真鶴（弘美）
三〇	二〇一八				乳と卵（川上未映子）川の光（松浦寿輝）
三一	二〇一九				日本語が亡びるとき（美苗）光の曼陀羅（安藤礼二）
三二	二〇二〇				1Q84 Book 1・2（春樹）掏摸（中村文則）
三三	二〇二一				パンとペン（黒岩比佐子）漂砂のうたう（木内昇）
三四	二〇二二				これはペンです（円城塔）
三五	二〇二三				冥土めぐり（鹿島田真希）何者（朝井リョウ）
三六	二〇二四				abさんご（黒田夏子）冬の旅（辻原登）
三七	二〇二五				荒神（宮部みゆき）たまもの（小池昌代）『ボヴァリー夫人』論（蓮實重彦）九年前の祈り（小野正嗣）サラバ！（西加奈子）献灯使（藤野可織）
三八	二〇二六				火花（又吉直樹）羊と鋼の森（宮下奈都）
三九	二〇二七				コンビニ人間（村田沙耶香）その姿の消し方（堀江敏幸）蜜蜂と遠雷（恩田陸）
元	二〇一九				騎士団長殺し（春樹）かがみの孤城（辻村深月）

時代	
二〇〇四	スマトラ島沖地震
二〇〇五	「愛・地球博」開催
二〇〇六	郵政民営化法案可決
二〇〇七	ケータイ小説盛況
二〇〇八	世界金融危機
二〇〇九	北京オリンピック
二〇一〇	アメリカ、オバマ政権発足
二〇一一	上海万博
二〇一二	東日本大震災　福島第一原発でメルトダウン・爆発発生
二〇一三	民主党が大勝
二〇一四	自民党が総選挙で勝利
二〇一五	ＳＴＡＰ細胞事件
二〇一六	米・キューバ国交回復
二〇一七	熊本地震
	カズオ・イシグロ
	新潟県中越地震

時代区分	年号	西暦	詩歌・歌謡など	物語・小説・戯曲・随筆・評論など	社会・文化	参考（外国）
現代						
平成時代	三〇	二〇一八	一彦（かずひこ）	おらおらでひとりいぐも（若竹千佐子）		ノーベル賞受賞
	平成三一 令和元	二〇一九	六六魚（りくりくぎょ）（小島ゆかり）	夏物語（未映子）　むらさきのスカートの女（今村夏子）		
令和時代	二	二〇二〇		小箱（洋子）		新型コロナウイルス、世界的に流行

世界の文学はすばらしい―明日への読書のために―

フョードル・ドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』（一八八〇年）

農奴解放を経たロシアを背景に、新興地主で欲深い父フョードルの殺害をめぐり、直情的な長男、無神論者の次男、敬虔（けいけん）な三男を主軸として、緊迫した対話と思索が果てなく続く。〈父殺し〉の多義性は神や革命の問題と絡み合い、矛盾に満ちた人間存在の悲喜劇を抉（えぐ）り出す。村上春樹やヴィトゲンシュタインをはじめ、世界中の創作や思想に大きな影響を及ぼす。

知里幸恵（ゆきえ）編訳『アイヌ神謡集』（一九二三年）

夭折（ようせつ）したアイヌの少女が伝える民族の神謡の数々を紹介する。「銀の滴（しずく）降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」と謡い継がれた言葉の世界は、それだけで人々の心に沁（し）み入っていく。

ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』（一九二五年）

第一次世界大戦後のイギリス。主人公のクラリッサ・ダロウェイを中心に、一日の出来事とその交錯する意識、記憶を描く。その文体はジェイムズ・ジョイスと共に「意識の流れ」の手法を代表するものとされ、繊細で叙情的である。二十世紀の文学に多大なる影響を与えた。

ヴァルター・ベンヤミン『パサージュ論』（一九二七年～）

「複製技術時代の芸術」は、大衆化時代における芸術を論じた評論として知られているが、ベンヤミンの仕事は狭い視野にとらわ

れない現代文化論として今なお新鮮な問題を提出している。幸い代表的な業績は、いくつかの文庫本のアンソロジーに収録されている。パリの都市空間の深い意味合いや、ボードレールの芸術の位相も論じた『パサージュ論』は、一九二七年から書き継がれた生前未刊の草稿群。文庫本で五冊だが、興味深い章から挑戦してみたい。まさに、現代の「知」の万華鏡である。

島崎藤村『夜明け前』（一九二九年〜三五年）

藤村が、七年の歳月をかけて完成した長編小説。木曽中山道「馬籠」宿の庄屋を務めた父島崎正樹の面影を映す主人公青山半蔵の生涯を軸に、幕末から明治にかけての激動期を描く。「木曽路はすべて山の中である」という印象的な書き出しから、日本が大きく動き出す気配を、黒船来航を踏まえ、「江戸は大変だということですよ」というひと言から描き出す描写は印象的である。平田国学を信奉する半蔵が、最後に「わたしは、おてんとうさまも見ずに死ぬ」と言わなければならなかった運命を、じっくり読み取りたい。

サミュエル・ベケット『ゴドーを待ちながら』（一九五二年）

第二次世界大戦後のフランスで発表された不条理劇の精髄。二人の浮浪者が「ゴドー」と呼ぶ何かを待つが、捉えどころのない状況に空回りを繰り返す。目的を喪失した世界が徹底して反復され、「ゴドー」は現れない。底なしの現代的な無意味さに絶妙なユーモアとペーソスが宿る演者たちの挙動は、シナリオからも十分に伝わる。ベケットはノーベル文学賞受賞。

野上弥生子『迷路』（一九三六年〜五六年）

日中戦争に従軍した主人公省三と周囲の男性や女性が、戦争にいかに翻弄され、いかにふるまったか。人間の愛とは何か。また、戦後の日本と中国、西洋との関係はどうあるべきか。作者は明治期から執筆をつづける息の長い作家である。戦争による中断を挟んで書き継がれ、従軍体験のある男性作家とは異なる視点で戦争を捉え直した。

『日本唱歌集』（一九五八年）

明治の『小学唱歌集』から昭和に生まれた新作まで、歌い継がれた歌の世界を、楽譜付きで紹介する文庫。「卯の花の匂う垣根に」「更け行く秋の夜」「菜の花畠に入日薄れ」「兎追いしかの山」「あした浜辺をさまよえば」などの歌詞は、多くの人々に親しまれた。堀内敬三・井上武士編。

有吉佐和子『非色』（一九六四年）

笑子は、敗戦後の日本で大きな力を持っていたアメリカ兵の黒人男性と結婚し、アメリカに渡った。働き、子どもを育て、同様に

アメリカに渡った複数の女性たちの境遇を見る中で、肌の色だけによるものではない、複雑に絡み合った差別の構造に気づいていく。作者は、戦後に大学を出た世代の一人であり、アメリカに留学もした。

ボブ・ディラン『追憶のハイウェイ61』（一九六五年）

アメリカのフォークやブルースを源にプロテストソングの旗手となり、変革に身を投じた若者たちから絶大な支持を集める。本盤収録の『ライク・ア・ローリングストーン』ではロックを融合した演奏と辛辣な歌詞で自由の精神を研ぎ澄ませた。歌手として初のノーベル文学賞受賞。同時代のみずみずしい息吹は、ジョニ・ミッチェルの歌によっても深く感じられる。

ガルシア＝マルケス『百年の孤独』（一九六七年）

二十世紀後半はラテンアメリカ文学が世界的ブームとなった。その代表作。架空の村、マコンドとブエンディア一族を中心にして起こる膨大な出来事の積み重ねからなる。伝染性の不眠症が流行し、美女がシーツに乗って昇天、雨が四年十一か月と二日降り続いて、空気が水を含んでしまったために、空中を魚が泳ぐ。あらゆることが、ごく当然のこととして叙述されていく。

ガッサーン・カナファーニー『ハイファに戻って』（一九六九年ほか）

短編集。カナファーニーは、パレスチナの作家。難民を描く作品が多いが、ステレオタイプの難民像とは異なった描かれ方がなされており、本教科書収録の岡真理、高野秀行の文章と合わせて読みたい。文学作品としての完成度も高い。南アフリカの厳しい現実を寓話的に描く作家として、J・M・クッツェーの名前も挙げておきたい。

川端康成『掌の小説』（一九七一年）

ノーベル文学賞作家が、若き日から戦後まで試みた、文庫本一冊に収められた一〇〇編以上の短編の数々は、まさに小説表現の実験室とも言える。『バッタと鈴虫』『有難う』、梶井基次郎にも影響を与えたサスペンス『心中』など、わずか数ページから、どう『伊豆の踊子』とも違う世界が広がるかを確かめたい。昭和のはじめ「横光川端」と並び称された横光利一の表現の冒険も、作品集『機械・春は馬車に乗って』で堪能できる。「私はもう私が分からなくなった」と主人公が最後に叫ぶ『機械』の心理描写は圧巻。

中上健次『枯木灘』（一九七七年）

猥雑な路地に育ち土木現場で汗しながら淫蕩な血の宿命に抗う青

年・秋幸のひりつきを活写した『岬』で、戦後生まれ初の芥川賞を受賞。『枯木灘』は、秋幸が界隈の開発事業に暗躍する実父・龍造および異母弟との不可避の対決に突き進む壮大な神話的イメージによって、路地が消滅する『地の果て　至上の時』へと続く三部作の要をなす。中上は、天皇・差別・芸能・アジアの古層など、日本近代を揺さぶる〈紀州熊野サーガ〉を書き継いだ。

カズオ・イシグロ　『遠い山なみの光』（一九八二年）

作者は長崎生まれであるが、イギリスで育ち、英語で創作している。英国に移住した語り手の悦子が、娘の自殺を経て、過去のこと（主に戦後の長崎）を思い出して語るが、その欺瞞に満ちた語り口が絶妙で、プロットの組み方も抜群にうまい。ほかの代表作に『私を離さないで』がある。ノーベル文学賞受賞。

スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ『戦争は女の顔をしていない』（一九八五年）

第二次世界大戦のソ連では、看護師や軍医だけでなく、兵士としても戦った女性たちがいた。体験の重さや、戦後の中傷などによって秘されてきた体験を、著者は長い時間をかけて聞き取った。その数は五百人を超える。勇壮な使命感や男性中心のシステムと、女性の身体や社会的イメージの間で、彼女たちが経験した苦痛が浮き彫りになる。ノーベル文学賞受賞。

トニ・モリスン　『ビラブド』（一九八七年）

モリスンはアメリカの黒人女性作家。アメリカの黒人が背負ってきた負の歴史を描く。単に黒人差別を告発するだけにとどまらず、超現実的な要素や、ミステリーの要素も加わっており、物語としてのおもしろさも堪能できる。『ビラブド』は、愛情の描写も見どころの一つである。

李良枝（イ・ヤンジ）『由熙（ユヒ）』（一九八九年）

「우리나라（ウリナラ）（母国）」に留学してアイデンティティの在り処を探す在日コリアンの由熙の生き方を、韓国人の「私」の視点から描く。朝鮮の大笒（テグム）の音を愛する由熙は、ソウルの地で「同胞」とすれ違い、ハングルの変化に戸惑い、日韓の狭間で孤立し傷つくが、「ことばの杖」という想いは下宿先の「私」に分有される。李は在日二世の女性作家として活躍し、本作で第一〇〇回芥川賞受賞。

余華『兄弟』（二〇〇五年）

余華は現代中国の代表的な作家。不条理な現実の中を生き抜く人々の姿が、ユーモラスに描かれる。筆致は荒唐無稽であるが、家族の愛情や絆の描き方もうまい。現代中国を知る意味でも、読みたい作家である。長編小説に『血を売る男』『活（い）きる』『雨に呼ぶ声』などがあり、大半が日本語訳されている。

〔著作者〕
中島　国彦　早稲田大学名誉教授
渡部　泰明　国文学研究資料館館長
安藤　信廣　東京女子大学名誉教授
小澤　純　慶應義塾志木高等学校教諭
小平麻衣子　慶應義塾大学教授
橋本　陽介　お茶の水女子大学准教授
田口　麻奈　明治大学准教授
小川　洋子　小説家
明治書院編集部

〔編集協力者〕
芝原　玲那　東京都立立川高等学校教諭
堀　佑史　千葉県立八千代西高等学校教諭
山岡　正和　神奈川県立生田東高等学校教諭
阿毛　久芳　都留文科大学名誉教授
小倉真理子　元東京成徳大学教授
橋本　直　神奈川大学非常勤講師

●表紙作品　加藤一「無題」（Sans titre）　1980 年代
●表紙・本文レイアウト　アート工房　●見返し・口絵レイアウト　町田えり子
●挿絵・図版・写真　朝日新聞社　amanaimages　石田英敬　伊東静雄顕彰委員会　岩波書店　Ulf Andersen　江戸東京博物館　太田明日香　大妻女子大学総合情報センター図書館　沖縄県立美術館・博物館　神奈川県近代文学館　菊池寛記念館　原爆の図丸木美術館　講談社　国際日本文化研究センター　国土地理院　国立国語研究所　国立国会図書館　Cynet Photo　佐々木淳子　佐山順丸　産経新聞社　実践女子大学図書館　昭和女子大学図書館　高野秀行　竹村和子フェミニズム基金　ドメス出版　長崎県立長崎東高等学校　日本近代文学館　林写真事務所　フォトライブラリー　文京区立森鷗外記念館　星ライブラリ　毎日新聞社　丸善雄松堂　森鷗外記念館（津和野市）　森清　山梨県立文学館

pp. 12–19　Le Grand cahier by Agota Kristof ©Editions du Seuil, 1986
pp. 229–243　©2011 Wu, Ming-yi ©2015 Amano Kentaro

精選　文学国語
令和四年三月十五日　検定済
令和五年一月二十日　初版発行
令和八年一月二十日　四版発行
定価　文部科学大臣が認可し官報で告示した定価
（上記の定価は、各教科書取次供給所に表示します。）
117　明治　文国 707

著作者　中島国彦
渡部泰明
安藤信廣
（他六名別記）
発行者　株式会社　明治書院
代表者　三樹蘭
東京都新宿区大久保一―一―七
印刷者　大日本法令印刷株式会社
代表者　田中達弥
長野県長野市中御所三―六―二五
発行所　株式会社　明治書院
郵便番号　一六九―〇〇七二
東京都新宿区大久保一―一―七
電話　〇三（五二九二）〇一一七（代）
振替口座　〇〇一三〇―七―四九九一

本書の解説書・ワークブックならびにこれに類するものの無断発行を禁じます。

©NAKAJIMA Kunihiko, WATANABE Yasuaki, ANDO Nobuhiro, MEIJISHOIN 2022



シャヴァンヌ
「パリの眠る街を見守る聖ジュヌヴィエーヴ」
—『日和下駄』—



セザンヌ「りんごのある静物」—『檸檬』—



丸木位里・丸木俊「水俣の図」（部分）—『苦海浄土』—



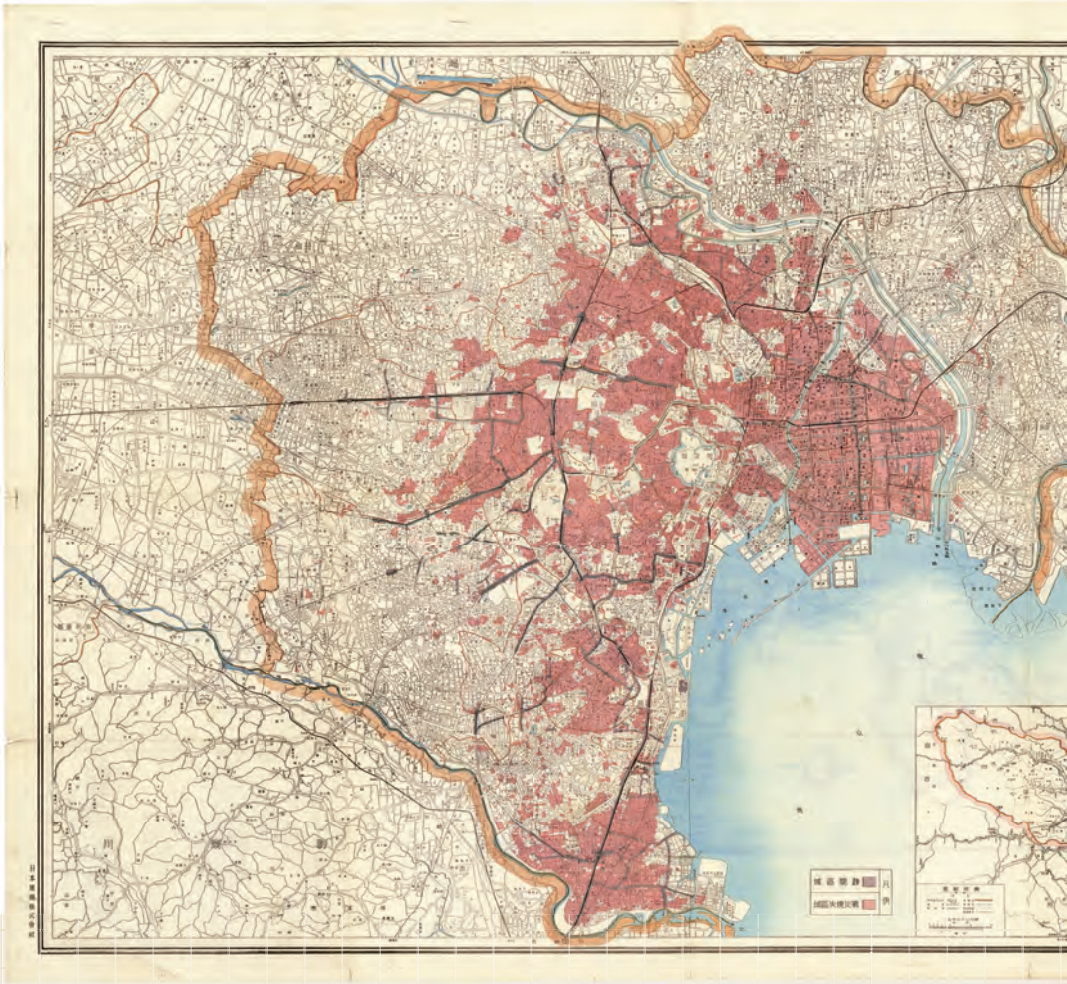
（国際日本文化研究センター所蔵）



森林太郎（鷗外）立案 **「東京方眼図」**（部分・明治 42〈1909〉年）
〈赤の線で整備されつつあった路面電車を記している〉

「帝都近傍図」（昭和 20〈1945〉年）

〈東京の大空襲で焼失した区域が赤で示されている〉



9784625004278

1924381000000

ISBN978-4-625-00427-8
C4381　¥00000E

この教科書は環境に配慮した紙及びインキを使用しています。